

京都府遺跡調査概報

第 8 冊

1. 狐 谷 横 穴 群
2. 木 津 川 河 床 遺 跡
3. 深 草 遺 跡
4. 法 成 寺 跡
5. 伏 見 城 跡
6. 祝 園 地 区 所 在 遺 跡
7. 長 岡 京 跡 (立会調査)
8. 長 岡 宮 跡 第 123 次
9. 長 岡 宮 跡 第 125 次
10. 長 岡 京 跡 右 京 第 105 次
11. 長 岡 京 跡 右 京 第 107 次
12. 長 岡 京 跡 右 京 第 110 次
13. 長 岡 京 跡 左 京 第 98 次
14. 宮 ノ 平 遺 跡

1 9 8 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に当調査研究センターが発足し、本年度は2年目の事業を実施しました。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にすることを普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、昭和57年度は27件の調査を受託しました。これらの発掘調査は、いずれも道路建設、学校建設、宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり、調査によって発見された遺跡の多くは、調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。しかし、発掘調査したすべての遺跡が開発事業により破壊されていはいはずはありません。一つでも多くの遺跡が開発事業との調和を見いだして、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

昭和57年度は関係者の理解を得て広隆寺跡出土の梵鐘鑄造遺構の模型を作成し展示することになりました。また、福知山市大道寺の経塚から出土したお経の巻物をときほぐして表装することもできました。当調査研究センターでは、このように遺跡や遺物の保存のためあらゆる努力をするとともに、たとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用に努める所存であります。この「京都府遺跡調査概報」は年度ごとに調査結果を報告するために刊行するものであります。既に刊行している「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸いです。

この調査概報をまとめるまでの現地調査では、開発事業関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、各市町教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに、炎天下、厳寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方々があります。この報告を刊行するにあたって、これらの多くの関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 狐谷横穴群 2. 木津川河床遺跡 3. 深草遺跡 4. 法成寺跡 5. 伏見城跡
 6. 祝園地区所在遺跡 7. 長岡京跡（立会調査） 8. 長岡宮跡第123次
 9. 長岡宮跡第125次 10. 長岡京跡右京第105次 11. 長岡京跡右京第107次
 12. 長岡京跡右京第110次 13. 長岡京跡左京第98次 14. 宮ノ平遺跡

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 狐谷横穴群	八幡市美濃山字狐谷	昭57. 1. 25 昭57. 4. 28 昭57. 5. 15 昭57. 7. 15	京都府教育委員会	久保田健士
2. 木津川河床遺跡	八幡市八幡字源野・焼木	昭57. 9. 2 昭57. 10. 4	京都府流域下水道建設事務所	長谷川 達
3. 深草遺跡	京都市伏見区	昭57. 10. 5 昭57. 10. 30	京都府警察本部	竹井 治雄 黒坪 一樹
4. 法成寺跡	京都市上京区	昭57. 3. 2 昭57. 3. 31 昭57. 11. 5 昭57. 12. 9 昭58. 3. 10 昭58. 3. 19	京都府立医科大学	長谷川 達 小池 寛 神林 豊 坂本 守
5. 伏見城跡	京都市伏見区	昭58. 1. 13 昭58. 2. 28	京都府教育委員会	長谷川 達
6. 祝園地区所在遺跡	相楽郡精華町東畑，他	昭57. 10. 4 昭58. 3. 31	住宅・都市整備公団	石尾 政信
7. 長岡京跡 （立会調査）	長岡京市今里他	昭57. 4. 13 昭57. 7. 17	日本電信電話公社	山口 博
8. 長岡宮跡 第123次	向日市寺戸東野辺	昭57. 7. 10 昭57. 9. 15	向日市	竹井 治雄

9. 長岡宮跡 第125次	向日市森本町前田	昭57. 7. 29 } 昭57. 9. 21	向日市	久保田健士
10. 長岡京跡 右京第105次	長岡京市今里	昭57. 7. 12 } 昭58. 1. 26	長岡京市	山口博
11. 長岡京跡 右京第107次	長岡京市井ノ内西ノ口	昭57. 7. 20 } 昭57. 10. 2	乙訓福祉施設事業 組合	山下正
12. 長岡京跡 右京第110次	長岡京市今里三丁目	昭57. 8. 4 } 昭57. 9. 20	京都府乙訓土木工 営所	黒坪一樹
13. 長岡京跡 左京第98次	向日市上植野町西大田	昭57. 12. 23 } 昭58. 3. 14	京都府教育委員会	山下正
14. 宮ノ平遺跡	城陽市寺田宮ノ平・大河 原	昭57. 1. 31 } 昭57. 3. 31	京都府住宅供給公 社	長谷川達

3. 本冊の編集には、調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. 狐谷横穴群発掘調査概要	1
2. 木津川河床遺跡発掘調査概要	66
3. 深草遺跡発掘調査概要	77
4. 法成寺跡発掘調査概要	81
5. 伏見城跡発掘調査概要	96
6. 祝園地区所在遺跡昭和57年度発掘調査概要	110
7. 長岡京跡立会調査概要	119
8. 長岡宮跡第123次発掘調査概要	127
9. 長岡宮跡第125次発掘調査概要	139
10. 長岡京跡右京第105次発掘調査概要	155
11. 長岡京跡右京第107次発掘調査概要	169
12. 長岡京跡右京第110次発掘調査概要	181
13. 長岡京跡左京第98次発掘調査概要	191
14. 宮ノ平遺跡発掘調査概要	203

插图・附表目次

狐谷横穴群

第 1 图	調査地位置图	1
第 2 图	調査地遺構配置图	2
第 3 图	現地説明会風景	4
第 4 图	土層柱状断面图(1)	7
第 5 图	土層柱状断面图(2)	8
第 6 图	土層柱状断面图(3)	9
第 7 图	土層柱状断面图(4)	10
第 8 图	土質分布模式图	10
第 9 图	旧地形推定图	11
第 10 图	横穴配置图	12
第 11 图	2号横穴実测图	13
第 12 图	3号横穴実测图	14
第 13 图	4号横穴実测图	16
第 14 图	5号横穴実测图	17
第 15 图	6号横穴実测图	19
第 16 图	7号横穴実测图	20
第 17 图	8号横穴実测图	21
第 18 图	9号横穴実测图	22
第 19 图	小横穴実测图	23
第 20 图	炭充填土塚実测图	24
第 21 图	横穴玄室比較图	25
第 22 图	2号横穴出土土器実测图	28
第 23 图	3号横穴出土土器実测图	31
第 24 图	4号横穴出土土器実测图(1)	33
第 25 图	4号横穴出土土器実测图(2)	34
第 26 图	5号横穴出土土器実测图	36
第 27 图	6号横穴出土土器実测图	38

第 28 図	7号横穴出土土器実測図	39
第 29 図	8号横穴出土土器実測図	41
第 30 図	4号横穴墓道埋土出土土器	42
第 31 図	5号横穴墓道埋土出土土器	43
第 32 図	6号横穴墓道埋土出土土器	43
第 33 図	7号横穴墓道埋土出土土器	44
第 34 図	炭土塚・方形周溝出土土器	44
第 35 図	自然流路跡出土石器・土器	45
第 36 図	横穴出土鉄器・金環	46
第 37 図	SK 02 出土土器	46
第 38 図	横穴群変遷図	49
第 39 図	方形周溝遺構実測図	51
第 40 図	SD 01 出土土器	52
第 41 図	SD 02 出土円筒埴輪	52
第 42 図	SD 02 出土土器	53
第 43 図	SD 02 実測図	53
第 44 図	SD 03 出土土器	54
第 45 図	SD 04 出土土器	55
第 46 図	SD 05 実測図	56
第 47 図	SD 05 出土土器	56
第 48 図	SD 06 実測図	57
第 49 図	SD 06 出土土器	57
第 50 図	SK 03 実測図	58
第 51 図	SK 03 出土土器	58
第 52 図	SK 04 実測図	59
第 53 図	SK 05 出土土器	59
第 54 図	SK 06 実測図	60
第 55 図	SK 06 出土土器	60
第 56 図	C区出土円筒埴輪	61
木津川河床遺跡		
第 57 図	調査地位置図(1)および周辺の弥生遺跡・主要古墳	67

第 58 図	調査地位置図(2).....	68
第 59 図	各トレンチ断面図.....	69
第 60 図	出土遺物実測図(1).....	71
第 61 図	出土遺物実測図(2).....	73
第 62 図	出土遺物実測図(3).....	75
第 63 図	出土遺物実測図(4).....	76

深 草 遺 跡

第 64 図	調査地位置図.....	77
第 65 図	調査地内トレンチ配置図.....	78
第 66 図	検出土層断面図.....	79

法 成 寺 跡

第 67 図	調査地位置図.....	81
第 68 図	墓壇群平面図.....	82
第 69 図	F トレンチ遺構配置図.....	84
第 70 図	F トレンチ拡張区西壁断面図.....	85
第 71 図	F トレンチ SE3 実測図.....	85
第 72 図	G トレンチ第 2 遺構面遺構配置図.....	86
第 73 図	G トレンチ西壁断面図.....	86
第 74 図	H トレンチ遺構配置図.....	87
第 75 図	H トレンチ SE4 実測図.....	87
第 76 図	H トレンチ SE5 実測図.....	88
第 77 図	I トレンチ遺構配置図.....	88
第 78 図	I トレンチ西壁断面図.....	89
第 79 図	出土遺物実測図(1).....	90
第 80 図	出土遺物実測図(2).....	91
第 81 図	出土遺物実測図(3).....	92
第 82 図	K トレンチ溝の実測図.....	94
第 83 図	法成寺跡トレンチ配置図.....	95

伏 見 城 跡

第 84 図	調査地位置図.....	96
--------	-------------	----

第 85 図	トレンチ配置図	97
第 86 図	A地点平面図および断面図	99
第 87 図	B地点北東部分 (B-1) 遺構平面図	100
第 88 図	SK 13 土層断面図	100
第 89 図	B-2 地点遺構平面図・SK 08 土層断面図	101
第 90 図	C地点平面図および西壁土層断面図	102
第 91 図	出土遺物実測図(1)	104
第 92 図	出土遺物実測図(2)	106
第 93 図	出土遺物実測図(3)	107
第 94 図	出土遺物実測図(4)	108

祝園地区所在遺跡

第 95 図	調査地位置図	110
付表 1	祝園地区所在遺跡昭和57年度発掘調査地一覧表	111
第 96 図	No. 1 地点平面図	112
第 97 図	No. 3 地点平面図	113
第 98 図	No. 9 地点Bトレンチ平面図	114

昭和57年度長岡京跡の発掘調査

第 99 図	長岡京跡関係調査地位置図	116
付表 2	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和57年度長岡京跡調査地一覧表	117

長岡京跡 (立会調査)

第 100 図	調査地位置図	119
第 101 図	新海印寺線地区土層柱状図	120
第 102 図	八条ヶ池線八条ヶ丘地区土層柱状図	121
第 103 図	八条ヶ池線舞塚地区 4 地点西壁土層図	122
第 104 図	八条ヶ池線舞塚地区平面図	123
第 105 図	向日町長岡線地区調査地位置図	124
第 106 図	向日町長岡線地区 2 地点土層柱状図	125
第 107 図	出土遺物実測図	125

長岡宮跡第123次

第108図	調査地位置図	127
第109図	トレンチ北壁断面実測図	128
第110図	調査全体図	129
第111図	掘立柱建物跡 SB 01・雨落溝 SD 02 平面実測図	131
第112図	掘立柱建物跡 SB 01北桁行柱列断面実測図	132
第113図	朝堂院北方官衙遺構配置図	133
第114図	出土遺物実測図	134

長岡宮跡第125次

第115図	調査地位置図	139
第116図	調査地地形図	140
第117図	遺構配置図	141
第118図	西トレンチ遺構実測図	142
第119図	西トレンチ出土土器密集図	143
第120図	東トレンチ遺構実測図	144
第121図	西トレンチ瓦出土密集図	145
第122図	銅銭出土分布図	145
第123図	SD 12501 断ち割り断面図	146
第124図	SD 12501 出土土器実測図	147
第125図	SD 12502 出土土器実測図	148
第126図	SD 12503 出土土器実測図	149
第127図	杯 B 底部	150
第128図	墨書土器・土馬実測図	151
第129図	出土銭貨拓影	152
付表 3	7AN3B 地区出土銭貨計測表	152
第130図	木簡実測図	153
第131図	7AN3B 地区出土の櫛	153
第132図	出土瓦	153

長岡京跡右京第105次

第133図	調査地位置図	155
-------	--------	-----

第134図	D・Eトレンチ平面図	157
第135図	IMK地区(F～Iトレンチ)調査図	159
第136図	SB 10547 実測図	161
第137図	SB 10548 実測図	162
第138図	SD 10550 実測図	163
第139図	SD 10565(舞塚古墳周濠)平面図	164
第140図	人物埴輪頭部実測図	165
第141図	出土遺物実測図	166

長岡京跡右京第107次

第142図	調査地位置図	169
第143図	調査地平面図	170
第144図	調査地土層図	172
第145図	土塚墓 SK 10728 実測図	173
第146図	土塚墓 SK 10729 実測図	173
第147図	土塚墓 SK 10738 実測図	174
第148図	出土遺物実測図(1)	175
第149図	出土遺物実測図(2)	177

長岡京跡右京第110次

第150図	調査地位置図	181
第151図	発掘区周辺位置図	182
第152図	発掘区東壁・北壁土層断面図	183
第153図	溝 SD 11001 実測図	184
第154図	流路 SD 11002 実測図	185
第155図	石器実測図	186
第156図	包含層中および SD 11001 内出土遺物実測図	187
第157図	溝 SD 11001 内出土遺物実測図	188

長岡京跡左京第98次

第158図	調査地位置図	191
第159図	土層図	192
第160図	遺構平面図	193

第 161 図	遺構実測図 (SB 9801)	194
第 162 図	遺構実測図 (SX 9804)	195
第 163 図	遺構実測図 (SB 9802)	195
第 164 図	遺構実測図 (SX 9805)	196
第 165 図	遺構実測図 (SA 9803)	196
第 166 図	遺構実測図 (SD 9806)	197
第 167 図	出土遺物実測図(1).....	198
第 168 図	出土遺物実測図(2).....	199
第 169 図	調査地関連図.....	200

宮ノ平遺跡

第 170 図	調査地周辺古墳分布図.....	204
第 171 図	調査地周辺地形図.....	206
第 172 図	宮ノ平 1～3 号墳地形図.....	206
第 173 図	A 地区平面図・断面図.....	207
第 174 図	竪穴式住居跡 1 (SH 06) 平面図・断面図.....	208
第 175 図	竪穴式住居跡 2 (SH 07) 平面図・断面図.....	209
第 176 図	B 地区平面図.....	210
第 177 図	埴輪棺 (SX 10) 出土状態実測図.....	211
第 178 図	木棺墓 (SX 11) 平面図・断面図.....	212
第 179 図	土坑墓 (SX 12) 平面図・断面図.....	212
第 180 図	出土遺物実測図(1).....	213
第 181 図	出土遺物実測図(2).....	215
第 182 図	出土遺物実測図(3).....	216
第 183 図	出土遺物実測図(4).....	217
付 表 4	昭和55年度試掘調査検出遺構一覧表.....	219
付 表 5	宮ノ平 4・5 号墳周溝内出土須恵器観察表.....	220

図 版 目 次

狐 谷 横 穴 群

- 図版第1 (1)狐谷横穴群全景(航空写真)
(2)横穴群全景(南から) および横穴垂直分布図
- 図版第2 (1)調査地遠景(南東から) (2)調査地遠景(東から)
- 図版第3 (1)狐谷1号横穴(南から) (2)狐谷11号横穴(南から)
- 図版第4 (1)調査前風景(南から) (2)調査前風景(南から)
- 図版第5 (1)横穴群検出状況(南から) (2)7号~9号横穴検出状況(南から)
- 図版第6 (1)2号・3号横穴(南東から) (2)4号・5号・6号横穴(南東から)
- 図版第7 (1)7号・8号・9号横穴(南から) (2)横穴群調査後風景(西から)
- 図版第8 (1)2号横穴近景(南東から) (2)2号横穴玄室(南東から)
- 図版第9 (1)4号横穴全景(南東から) (2)4号横穴玄室内部(南東から)
- 図版第10 (1)4号横穴遺物出土状況(南から)
(2)4号横穴玄室遺物出土状況(南東から)
- 図版第11 (1)4号横穴墓道埋土中出土須恵器甕(南西から)
(2)4号横穴玄門埋土堆積状況(南西から)
- 図版第12 (1)5号横穴全景(南東から) (2)5号横穴玄室(南東から)
- 図版第13 (1)6号横穴玄室(南東から) (2)6号横穴玄室内部(南東から)
- 図版第14 (1)7号横穴玄室(南東から) (2)7号横穴玄室埋土堆積状況(南東から)
- 図版第15 (1)8号横穴近景(南から) (2)8号横穴遺物出土状況(南から)
- 図版第16 (1)9号横穴近景(南から) (2)9号横穴玄室内部(南東から)
- 図版第17 (1)小横穴全景(南東から) (2)横穴群発掘作業風景(南西から)
- 図版第18 (1)横穴群保存作業風景 (2)横穴群保存作業風景
- 図版第19 (1)横穴群保存作業風景 (2)横穴群保存作業風景
- 図版第20 (1)炭充填土坑完掘状況(南から) (2)炭充填土坑遺物出土状況(東から)
- 図版第21 (1)方形周溝遺構全景(東から) (2)方形周溝遺構全景(北西から)
- 図版第22 (1)A地区全景(北西から) (2)B・C・D地区全景(北西から)
- 図版第23 (1)SK 01 全景(南東から) (2)SK 02 全景(南東から)
- 図版第24 (1)B地区全景(南東から) (2)SD 02 全景(南から)

- 図版第25 (1) SD 02 円筒埴輪出土状況 (東から) (2) SD 03 全景 (北から)
- 図版第26 (1) SD 04 全景 (北から) (2) SK 03 完掘状況 (北東から)
- 図版第27 (1) SK 04 遺物出土状況 (西から) (2) SK 05 全景 (北から)
- 図版第28 (1)建物2 全景 (北から) (2) SD 06 全景 (東から)
- 図版第29 出土土器 (1)
- 図版第30 出土土器 (2)
- 図版第31 出土土器 (3)
- 図版第32 出土土器 (4)
- 図版第33 出土土器 (5)
- 図版第34 出土土器 (6)
- 図版第35 出土土器 (7)
- 図版第36 出土土器 (8)
- 図版第37 出土土器 (9)
- 図版第38 出土土器 (10)
- 図版第39 出土土器 (11)
- 図版第40 出土土器 (12)
- 図版第41 出土土器 (13)
- 図版第42 出土土器 (14)
- 図版第43 出土土器 (15)
- 図版第44 出土土器 (16)
- 図版第45 出土土器篋記号
- 図版第46 (1)C区出土円筒埴輪 (2)C区出土円筒埴輪

木津川河床遺跡

- 図版第47 (1)調査地遠景 (南西から) (2)調査地近景 (東から)
- 図版第48 (1)Aトレンチ (2)Cトレンチ (3)Dトレンチ (4)Eトレンチ
- 図版第49 (1)Aトレンチ東壁断面 (2)Eトレンチ南壁断面
(3)Eトレンチ西壁断面 (4)遺物出土状況 (Fトレンチ)
- 図版第50 出土遺物 (1)
- 図版第51 出土遺物 (2)

深草遺跡

- 図版第52 (1)調査地周辺 (南西から) (2)調査地近景 (西から)

- 図版第53 (1)トレンチ掘削後全景 (2)Aトレンチ掘削状況(南から)
- 図版第54 (1)B1 トレンチ掘削状況(北から) (2)B1 トレンチ東壁土層断面
- 図版第55 (1)B2 トレンチ掘り込み(池)掘削状況(東から)
- (2)B2 トレンチ南壁(掘り込み内)土層断面

法成寺跡

- 図版第56 (1)第1トレンチ全景 (2)第2～第5トレンチ遠景
- 図版第57 (1)墓壇内石材投棄状況 (2)墓壇検出状況
- 図版第58 (1)Gトレンチ全景(東から) (2)Fトレンチ全景(北から)
- 図版第59 (1)Hトレンチ全景(北から) (2)Iトレンチ全景(東から)
- 図版第60 (1)Hトレンチ SE5(北から) (2)Fトレンチ SE3(北から)
- (3)Iトレンチ SK4 遺物出土状況 (4)Iトレンチ SE6(北から)
- 図版第61 出土遺物

伏見城跡

- 図版第62 (1)A地点全景(調査前 北西から) (2)B地点全景(調査前 南から)
- 図版第63 (1)A地点全景(北から) (2)A地点 溝内瓦出土状況
- 図版第64 (1)B地点全景(南から) (2)B地点 土壇検出状況
- 図版第65 (1)井戸(SE10)検出状況 (2)土壇(SK13)土層断面
- 図版第66 (1)土壇(SK08)内遺物出土状況 (2)同上(部分拡大)
- 図版第67 出土遺物(1) (土師器・陶器・瓦類)
- 図版第68 出土遺物(2) (瓦類)
- 図版第69 出土遺物(3) (瓦類)

祝園地区関係遺跡

- 図版第70 (1)No.1地点 調査前(北から) (2)No.1地点 トレンチ全景(北から)
- 図版第71 (1)No.2地点 調査地全景(南から) (2)No.2地点 トレンチ全景(西から)
- 図版第72 (1)No.3地点 調査地全景(西から) (2)No.3地点 西トレンチ全景(西から)
- 図版第73 (1)No.4地点 調査前(西から) (2)No.4地点 西トレンチ全景(西から)

長岡京跡(立会調査)

- 図版第74 (1)新海印寺線円明寺団地付近調査地(西から)
- (2)同 上 土層断面(南から)

- 図版第75 (1)八条ヶ池線調査地(北東から)
(2)同 上 土層断面(南から)
- 図版第76 (1)八条ヶ池線舞塚地区5地点近景(南西から)
(2)同 上 溝状遺構検出状況(南から)
- 図版第77 (1)八条ヶ池線舞塚地区炭混り土壇検出状況(南東から)
(2)八条ヶ池線舞塚地区遺物出土状況(南から)
- 図版第78 (1)八条ヶ池線舞塚地区4地点西壁土層断面(北東から)
(2)八条ヶ池線舞塚地区3地点東壁土層断面(南西から)
- 図版第79 (1)今里地区土層断面 (2)出土遺物

長岡宮跡第123次

- 図版第80 (1)調査前風景(南から) (2)トレンチ全景(南から)
- 図版第81 (1)掘立柱建物跡SB 01(東から) (2)掘立柱建物跡東部分(南から)
- 図版第82 (1)SB 01 と雨落溝(西から) (2)SB 01 と雨落溝(西から)
- 図版第83 (1)掘立柱建物跡SB 01 P-1(南から)
(2)掘立柱建物跡SB 01 P-5(南から)
- 図版第84 (1)南北溝部分(南から) (2)土壇SX 04 と掘立柱建物跡A(東から)
- 図版第85 (1)土壇SK 05(北から) (2)土壇SK 06(南から)
- 図版第86 出土遺物(1)
- 図版第87 (1)出土遺物(2) (2)出土遺物(3)

長岡宮跡第125次

- 図版第88 (1)調査地遠景(西から) (2)調査地全景(東から)
- 図版第89 (1)西トレンチ全景(東から) (2)SD 12501 検出状況(南から)
- 図版第90 (1)SD 12501 調査後(北から) (2)SD 12502 検出状況(南西から)
- 図版第91 (1)SD 12502 出土獣骨片 (2)SD 12501・SD 12502 完掘後(東から)
- 図版第92 (1)東トレンチ調査中(西から) (2)東トレンチ調査後(西から)
- 図版第93 (1)SD 12503(南から) (2)東トレンチ全景(東から)
- 図版第94 (1)杭6・7(東から) (2)杭3(北から)
- 図版第95 (1)杭5検出状況(北から) (2)出土杭
- 図版第96 出土遺物(1)
- 図版第97 出土遺物(2)

図版第98 (1)出土木簡(上:表,下:裏) (2)出土木簡(拡大)

図版第99 (1)出土銅銭 (2)櫛

長岡京跡右京第105次

図版第100 (1)Aトレンチ全景(北から) (2)Bトレンチ全景(北から)

図版第101 (1)Dトレンチ全景(北から) (2)Eトレンチ全景(南から)

図版第102 (1)Eトレンチ SB 10547(南から) (2)Eトレンチ SB 10548(南から)

図版第103 (1)Eトレンチ SD 10550(東から) (2)SB 10548 柱穴軒丸瓦出土状況
(3)SD 10550 遺物出土状況

図版第104 (1)Fトレンチ全景(南から)

(2)Fトレンチ拡張部 SD 10565(舞塚古墳周濠)(西から)

図版第105 (1)Fトレンチ舞塚古墳後円部土橋(北から)

(2)Fトレンチ SD 10565(舞塚古墳周濠)埴輪出土状況(西から)

図版第106 (1)Gトレンチ全景(南から) (2)拡張後Gトレンチ舞塚古墳前方部(南から)

図版第107 (1)Gトレンチ SD 10565 人物埴輪出土状況(南東から)

(2)Hトレンチ全景(西から)

図版第108 (1)Iトレンチ全景(南から) (2)Iトレンチ全景(北から)

図版第109 出土遺物

長岡京跡右京第107次

図版第110 (1)調査地遠景 (2)調査前風景(西から)

図版第111 (1)第1トレンチ全景(北から) (2)SK 10725(東から)

図版第112 (1)石溜り SX 10737(北から) (2)第2トレンチ全景(西から)

図版第113 (1)土壇墓 SK 10728(北から) (2)土壇墓 SK 10728(南から)

図版第114 出土遺物(1)

図版第115 出土遺物(2)

図版第116 出土遺物(3)

図版第117 出土遺物(4)

長岡京跡右京第110次

図版第118 (1)調査前全景(南から) (2)溝 SD 11002 検出状況(南から)

図版第119 (1)溝 SD 11002 土層断面(東部分) (2)溝 SD 11002 土層断面(西部分)

図版第120 (1)溝 SD 11001 検出状況(東から) (2)溝 SD 11001 遺物出土状況(1)

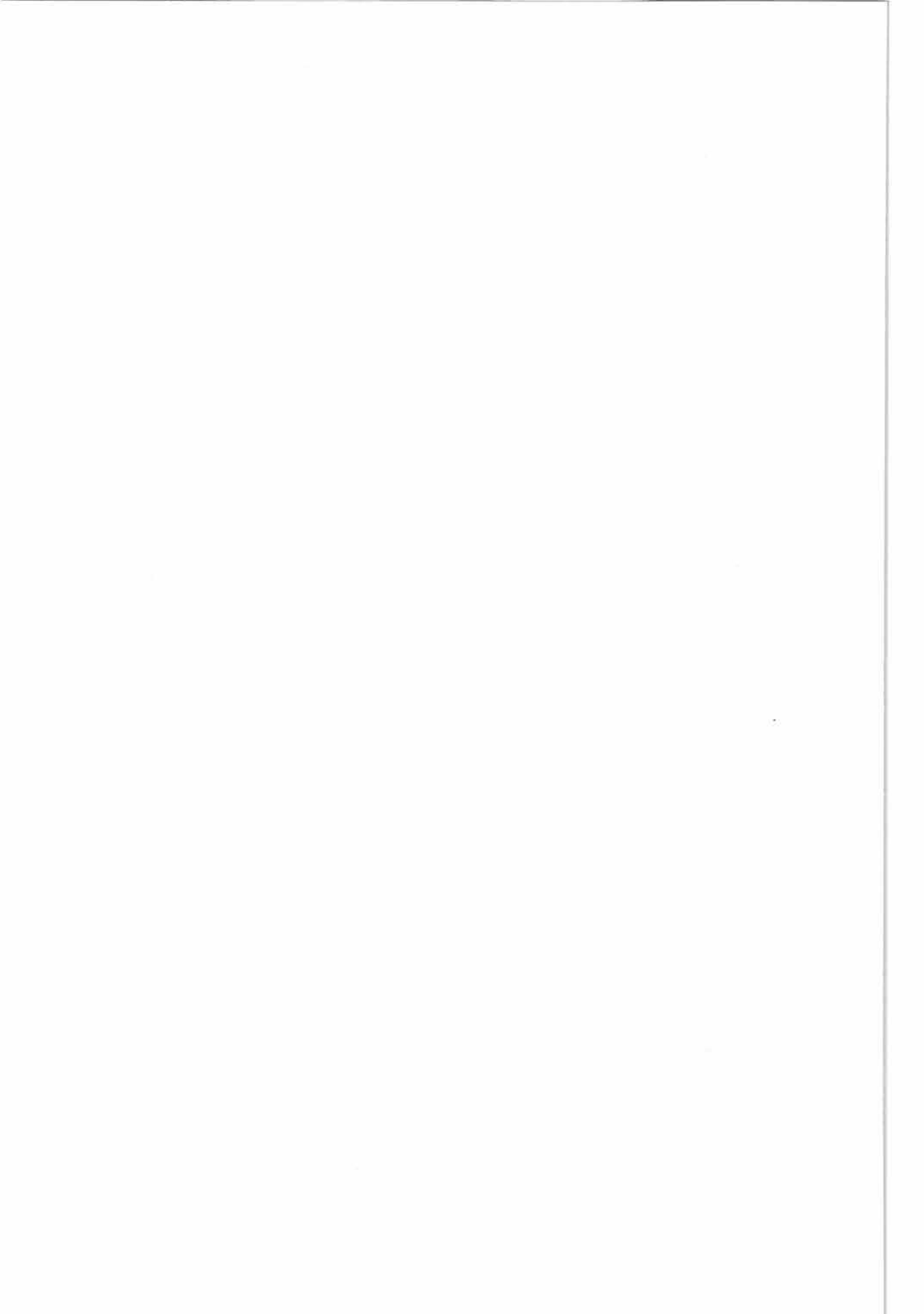
- 図版第121 (1)溝 SD 11001 遺物出土状況(2) (2)溝 SD 11001 (東壁)土層断面図
 図版第122 (1)溝 SD 11001 遺物出土状況(3) (2)溝 SD 11001 軒平瓦出土状況
 図版第123 (1)溝 SD 11001 全景(東から) (2)調査後トレンチ全景
 図版第124 出土遺物

長岡京跡左京第98次

- 図版第125 (1)調査前風景(南西から) (2)調査地全景(南西から)
 図版第126 (1)建物跡 SB 9801(南から) (2)建物跡 SB 9801(北から)
 図版第127 (1)建物跡 SB 9802(北から) (2)SD 9806(西から)
 図版第128 (1)SX 9804(西から) (2)SX 9805(東から)
 図版第129 (1)SB 9802 P-30検出状況 (2)SB 9802 P-34礎板出土状況
 図版第130 (1)墨書土器出土状況(P-8) (2)墨書土器出土状況
 図版第131 出土遺物(1)
 図版第132 出土遺物(2)
 図版第133 出土遺物(3)
 図版第134 出土遺物(4)

宮ノ平遺跡

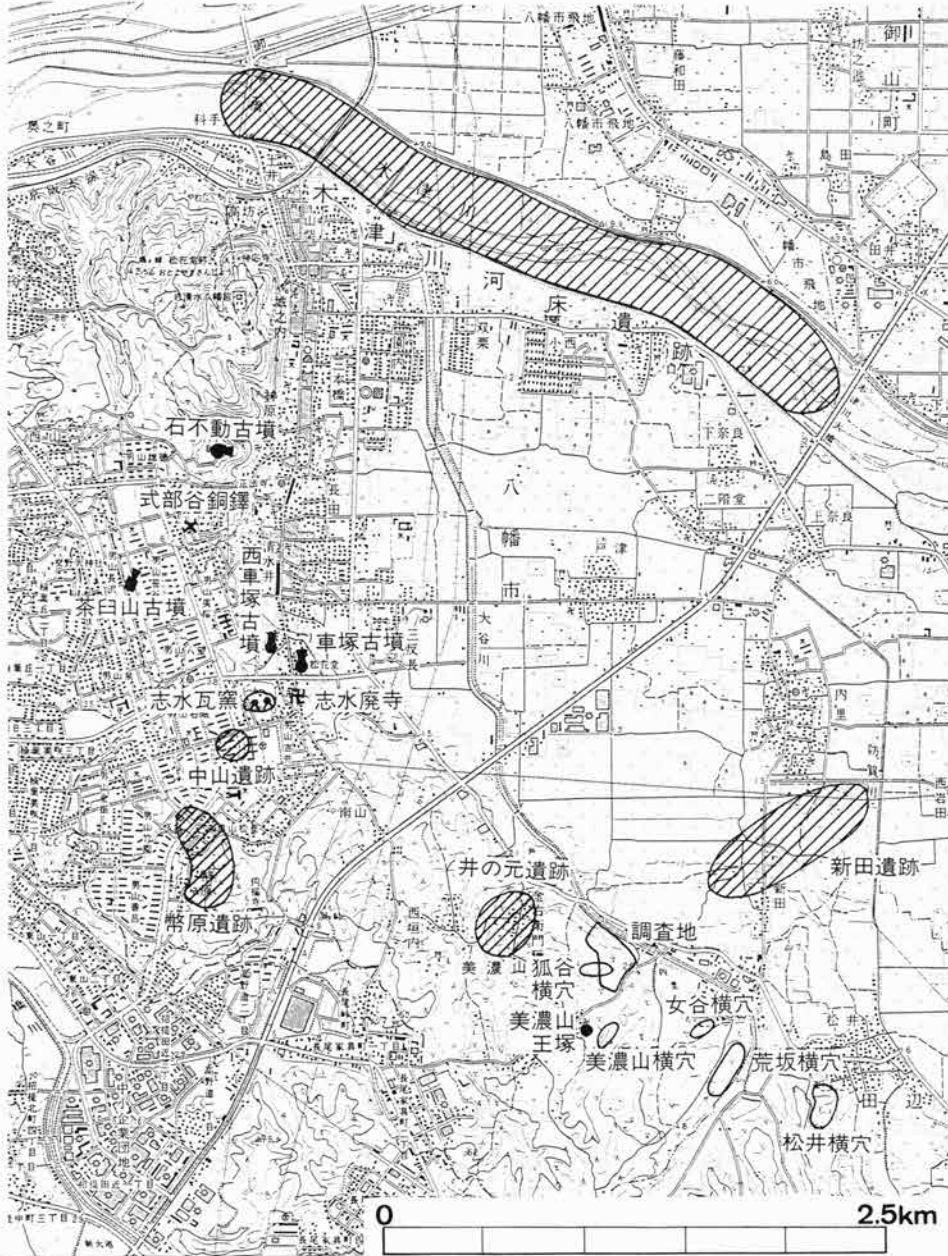
- 図版第135 (1)A地点調査前近景 (2)B地点調査前近景
 図版第136 A地点全景
 図版第137 (1)宮ノ平4号墳(SX06)検出状況(南東から)
 (2)宮ノ平4号墳検出状況(西から)
 図版第138 (1)宮ノ平5号墳(SX09)全景 (2)宮ノ平5号墳検出状況
 図版第139 (1)宮ノ平5号墳周溝内遺物出土状況 (2)宮ノ平5号墳周溝内出土遺物
 図版第140 (1)竪穴式住居跡1検出状況 (2)竪穴式住居跡1 竈及び遺物検出状況
 図版第141 (1)竪穴式住居跡2検出状況 (2)竪穴式住居跡2 竈及び遺物検出状況
 図版第142 (1)宮ノ平4号墳周濠(東辺) (2)井戸跡検出状況
 図版第143 B地区全景
 図版第144 (1)B地区遺構検出状況(南東から) (2)埴輪棺検出状況
 図版第145 (1)埴輪棺検出状況 (2)埴輪棺土坑
 図版第146 (1)SX11検出状況 (2)SX12検出状況
 図版第147 出土遺物(1)
 図版第148 出土遺物(2)



1. 狐谷横穴群発掘調査概要

1. はじめに

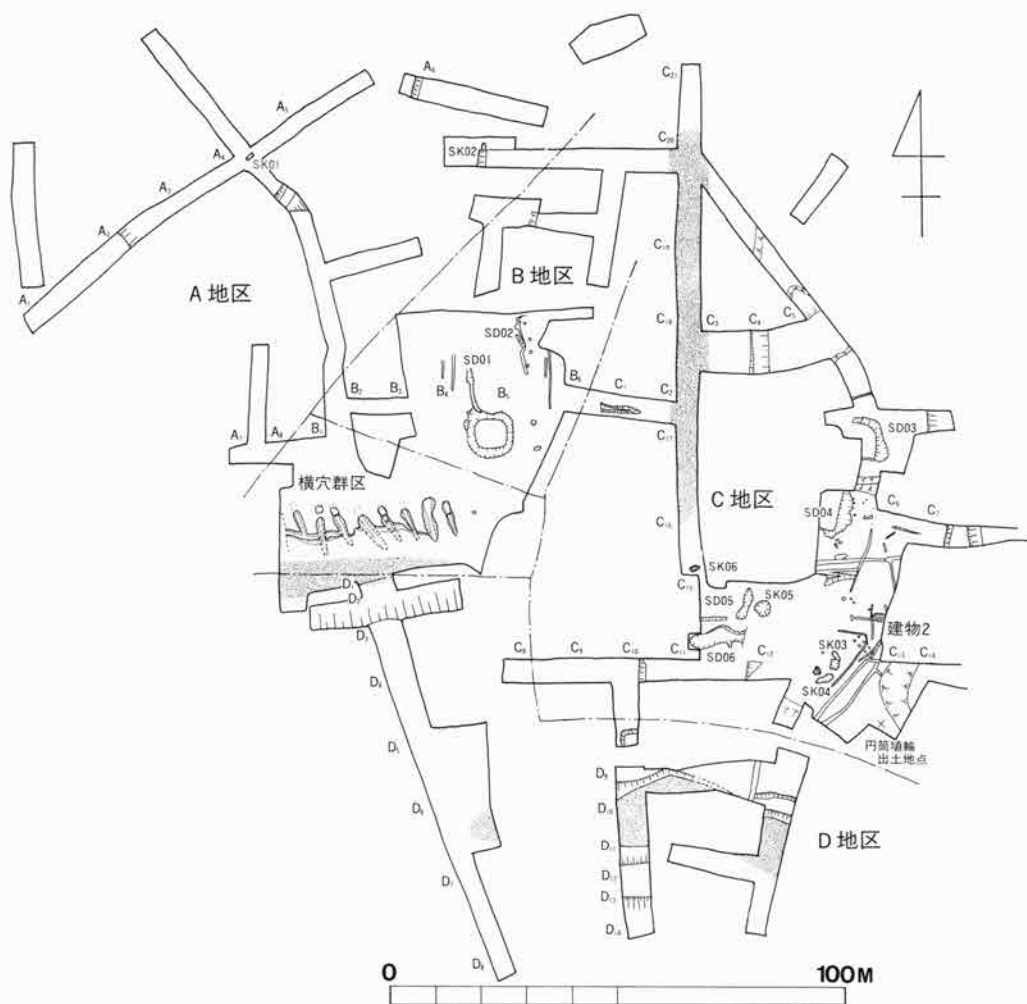
京都府教育委員会は、八幡市美濃山字狐谷一帯の丘陵に新設高校建設を計画したが、同



第1図 調査地位置図

校建設予定地付近は、古くから横穴群や弥生土器・石器の散布地として知られているため、昭和57年1月から7月まで造成工事に先だって発掘調査を実施した。1月から4月までの前半期の調査（第1次調査）では、8基の横穴と方形炭土壇・方形周溝遺構を検出した。5月から7月までの後半期の調査（第2次調査）は、横穴群を中心とした周辺地区を対象として、溝・土壇・柱穴等の遺構を検出した。なお、第1次調査で確認された横穴群については、埋めもどされて現状保存^(注1)となった。また、第2次調査については、基本的には遺構確認のためのトレンチを入れ、その一部について拡張するという調査方法をとった。

本概要では、先に報告した横穴の遺構を含む第1次調査分とも若干重複するが、その遺物整理の概略と第2次調査の概略を報告する。なお、今回の調査・整理にあたっては、多くの



第2図 調査地遺構配置図

^(注3)
方々の御協力、また専門的な御指導・御助言を得た。心から謝意を表したい。

現地調査は、下記の者が担当した。なお、本概要の執筆・編集は、久保田が担当した。また横穴出土の土器の写真は、元文部技官高橋猪之介氏にお願いした。

第1次調査（昭和57年1月25日～4月28日）

主任調査員 長谷川 達

調査員 久保田健士

第2次調査（昭和57年5月15日～7月15日）

主任調査員 長谷川 達

調査員 久保田健士・黒坪 一樹

2. 調査経過

今回の調査地は、丘陵斜面の海拔30m前後の所にあつて、現在は竹林になっている。調査は、遺構および遺物包含層等の埋蔵状況を確認するため、建設予定地内に幅3～4mのトレンチを設定することからはじめた。そして、機械力を導入し、竹林の置土（深さ0.5m～2m前後）を除去し、その後人力によって精査および掘り下げを順次行った。

第1次調査では調査前の踏査の際から須恵器片等が採集され、また調査地西方に開口した^(注4)横穴が存在することなどから、今回は旧地形の把握と横穴の存在の確認が当面の目標となった。トレンチの掘削により、第1次調査地内の南部分で西から東へのびる丘陵と南へ下る斜面を確認し、その後、旧谷地形の復元につとめた。その結果、9基におよぶ横穴群がその丘陵支脈の南斜面に存在することを確認した。各横穴の発掘により、多数の人骨とともに須恵器・土師器・鉄刀・金環および人骨等の遺物が出土した。また、2号横穴の東4mの地点において炭で充填された長方形土壇を確認し、須恵器の杯身・蓋のセット等を検出した。その北側で四方向を溝で囲まれた方形の遺構を検出し、若干の須恵器片が出土した。

第2次調査では、第1次調査を受けて周辺地区の旧地形の把握および横穴その他の遺構の検出に努めた。3～5m幅のトレンチを適宜設定し掘削した。その結果、ほぼ旧地形を知る手がかりを得、また、いくつかの遺構を検出した。

周辺地区については、北からA区・B区・C区・D区の4区に分けて調査を進めた。その結果、A区で2つの土壇、B区で方形周溝遺構を含めて溝2本とピット、C区で溝3本と土壇5、そして建物跡2か所、D区で自然流路跡をそれぞれ検出した。これらの遺構は、出土

遺物等から古墳時代後期～平安時代に至るものであることが判明したが、各遺構の性格やその関連については充分には知り得なかった。

<日誌抄>

第1次調査

- 1月25日 現場事務所設置。器材搬入。
- 1月26日 トレンチ設定。機械力による表土（竹林置土）の掘削・除去開始。人力による精査も併行して始める。
- 1月29日 南部分のトレンチで南へ下る地山（褐色砂礫・砂質土層）の傾斜を確認。
- 2月2日 2本のトレンチで、地山層斜面に暗茶褐色砂質土の広がりを各1か所確認。
- 2月3日 確認された南向斜面について、全面的に旧地形を復元するためトレンチを拡張。平瓶出土。
- 2月15日 南斜面を全面的に検出。7か所の暗茶褐色砂質土の帯状の広がりが並ぶのを確認。横穴の可能性が出てくる。古墳時代後期と思われる須恵器片が斜面裾より出土。また、谷底は砂礫層の厚い堆積等から自然流路跡と推定される。
- 2月22日 南斜面を東へ拡張し、さらに2基の横穴を確認。計9基の横穴を確認。南斜面を平板測量。
- 2月23日 横穴埋土を全面精査。写真撮影。
- 2月27日 2号横穴の墓道部より掘削開始。
- 3月3日 横穴群の北西部にて、溝遺構を検出。



第3図 現地説明会風景

- 3月8日 横穴群の墓道部分をほぼ掘削。2号横穴から東約4mの地点で小形の炭充填土坑を検出。
9号横穴の玄室が遺存状態の良好なことを確認。
- 3月9日 9号横穴より玄室埋土の除去を始める。人骨片一部出土。
- 3月17日 横穴群の玄室部分の埋土除去ほぼ終了。平面実測を開始。一部では人骨・土器等遺物のとり上げを始める。
- 3月22日 溝状遺構は、方形にめぐる可能性が強まる。平面実測。
- 3月23日 横穴群の航空写真撮影。
- 3月28日 各横穴の平面・断面実測完了。出土遺物のとりあげ。完掘状況を写真撮影。
- 3月31日 平板測量を終了。
- 4月12日～20日 横穴群の図面作製補足。玄室一部断ち割り。
- 4月28日 現地説明会。約70名参加(第3図)。

第2次調査

- 5月15日 調査再開。横穴群の南側の斜面を検出するため表土除去(D区)。
- 5月17日 横穴群の南側斜面(北向斜面)では、遺構検出できず。南向斜面裾で認められた暗褐色砂質土(礫混じり)の堆積は、北向斜面でほとんど認められず。^(注5)調査地(D区)西端で南北のトレンチを延長する。
- 5月18日 南北のトレンチ(T₅)では、遺構検出できず。(D区)。
- 5月20日 方形周溝遺構の北側を拡張(B区)。トレンチ(T₅)の平板測量を始める(D区)。
- 5月24日 方形周溝遺構の北東部で、溝(SD 02)を検出。
- 5月27日 SD 02にて、埴輪片等出土。平面実測(B区)。北部調査地(A区)でトレンチを延長する。
- 5月31日 調査地東部(C区)にトレンチを延長する。
- 6月7日 C区にて、溝(SD 03・SD 04)等を確認。
- 6月10日 C区トレンチを拡張し、土坑(SK 03・SK 04)を検出、また須恵質の円筒埴輪片が表土中から出土。
- 6月14日 C区中央に南北の長いトレンチを延長し、横穴裾の自然流路跡の下流を検出。(C区)。
- 6月21日 C区の一部遺構を平面実測。
- 6月28日 C区東端の水田にトレンチを入れ、遺構・遺物ともないことを確認。

- 7月2日 A・B区の平板測量，B区の遺構平面実測とも終了。
7月7日 C区の平板測量・平面実測終了。
7月12日 D区の平板測量終了。東西に流れる自然流路跡を確認。
7月15日 調査終了。器材搬出。

3. 歴史的環境

調査地周辺の地形は、南から北へ流れる木津川により形成された沖積平野と、生駒山脈から男山までのびている丘陵部からなっている。丘陵は比較的低く、標高30～50m前後であり、調査地は、その丘陵の東側斜面に位置する。この地域は古代にあっては、河内・摂津・山城・大和と連なる重要な位置を占めていたと思われる。

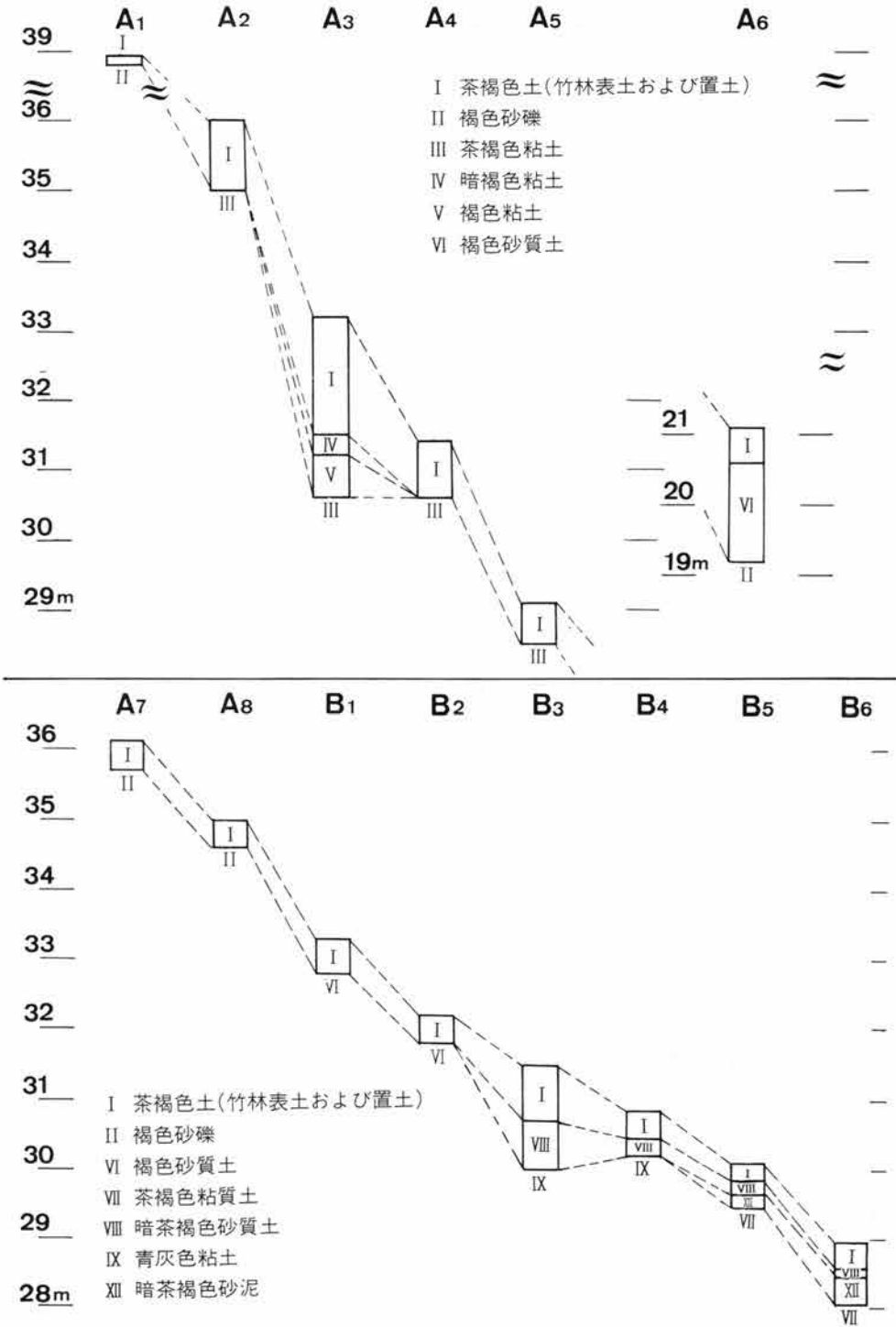
この地域の歴史的環境について、確実な縄文時代以前の遺跡は知られていないが、弥生時代以降についてはいくつかの遺跡・古墳等が確認されている。

弥生時代の遺跡として知られるのは、金右衛門垣内遺跡^(注6)・幣原遺跡^(注7)・中ノ山遺跡^(注8)・新田遺跡^(注9)・木津川河床遺跡^(注10)などがある。金右衛門垣内遺跡は井の元遺跡とも呼ばれ、弥生中期から後期にわたる土器・石器が出土している。幣原遺跡は、弥生中期から古墳時代にわたる遺物が散布し、竪穴式住居跡等が検出されている。中ノ山遺跡は、弥生中期後半から古墳時代に至る散布地である。木津川河床遺跡は、弥生時代から平安時代にわたる遺跡で、最近の調査で河内から搬入されたと考えられる庄内式土器が出土している。その他の遺跡としては、突線鈕式の銅鐸が発見された式部谷^(注11)（清水谷^(注12)）遺跡、小形甕棺が出土した美濃山遺跡^(注13)がある。

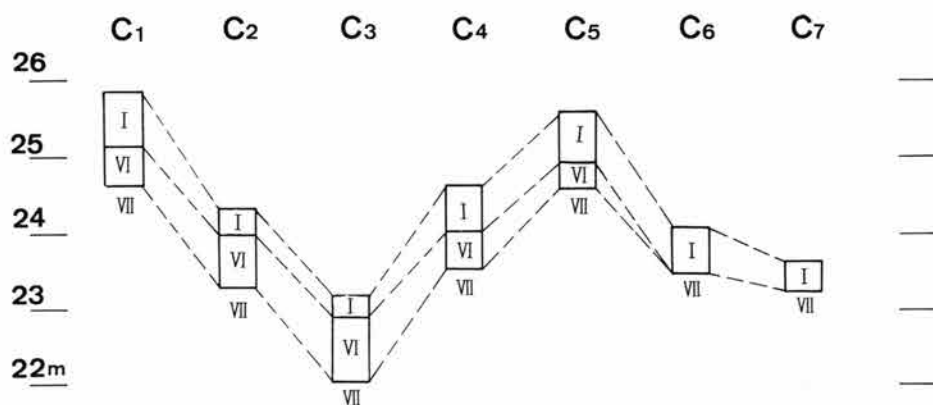
古墳時代では、男山丘陵に散在するいくつかの古墳や横穴がある。茶臼山古墳^(注14)・石不動古墳^(注15)・西車塚古墳^(注16)・東車塚古墳^(注17)・美濃山王塚古墳^(注18)、そして美濃山横穴^(注19)・荒坂横穴^(注20)・女谷横穴^(注21)などの横穴群、丘陵の南を隔てた田辺町にも松井横穴群^(注22)が存在する。上記の古墳は、その出土遺物・副葬品からいわゆる前期に含まれるが、美濃山王塚については中期に比定される。また、後期に入ると、一般的に横穴式石室を持つ古墳群の出現が多いが、この丘陵地では横穴群のみが存在していることがひとつの特色であろう。

古墳時代以降に関しては、まだ十分に調査がおこなわれていないことから資料は乏しい。現在のところ、足立寺跡^(注23)（西山廃寺）・美濃山廃寺^(注24)・志水廃寺^(注25)・志水瓦窯跡^(注26)などが知られている。

ともかく、調査地（狐谷横穴群）^(注27)の存在する地域は、弥生時代から歴史時代にわたり、周辺地域を結ぶ重要な位置を占めていたと考えられる。



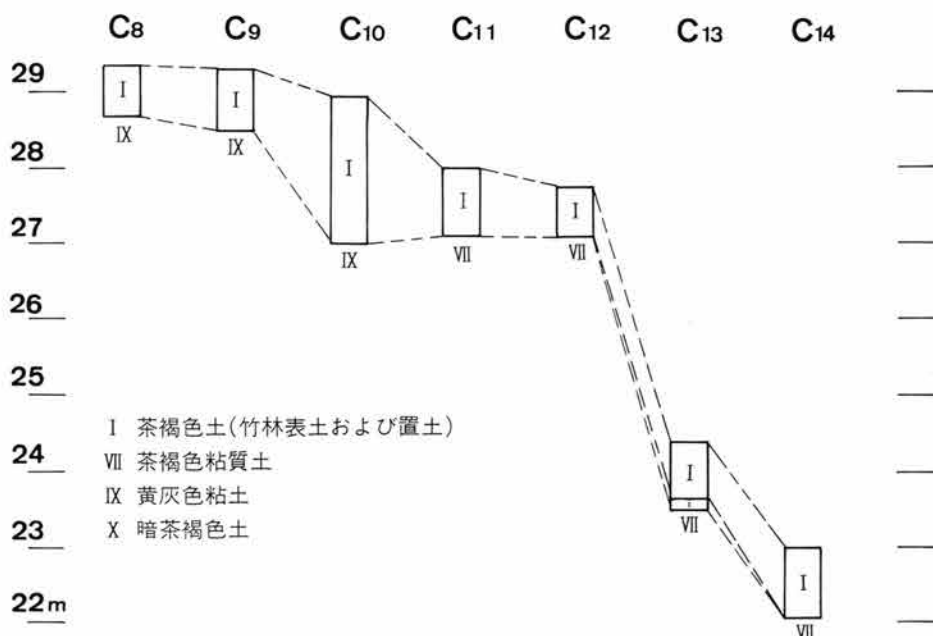
第4図 土層柱状断面図(1)



I 茶褐色土(竹林表土および置土)

VI 褐色砂質土

VII 茶褐色粘質土



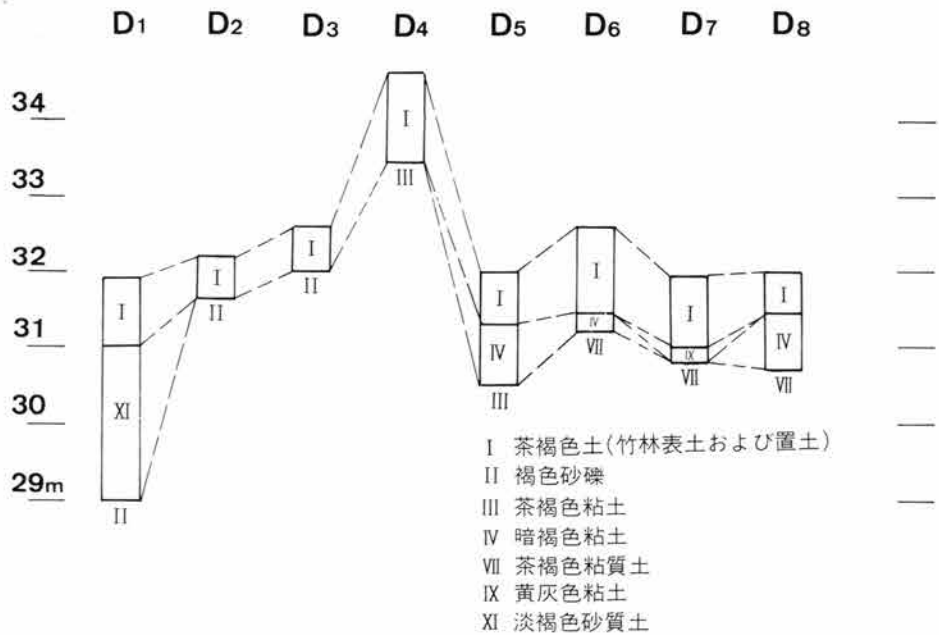
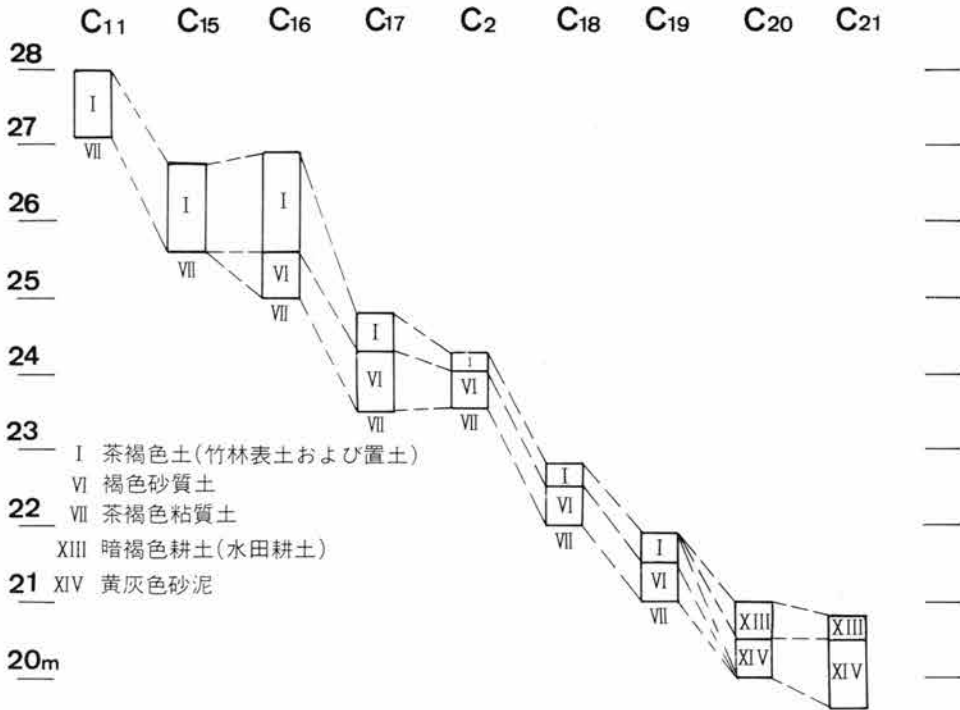
I 茶褐色土(竹林表土および置土)

VII 茶褐色粘質土

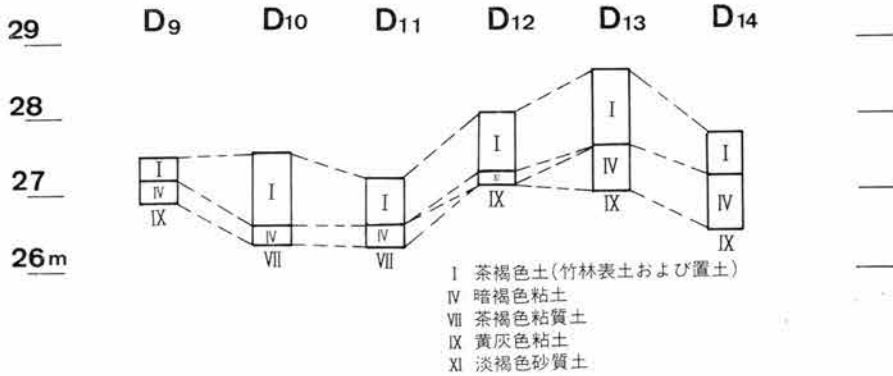
IX 黄灰色粘土

X 暗茶褐色土

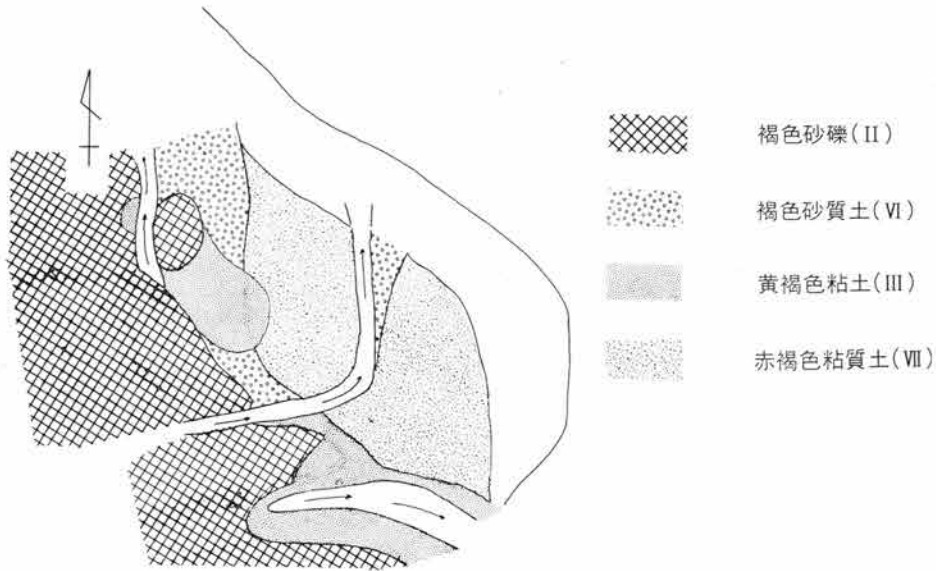
第5図 土層柱状断面図(2)



第6図 土層柱状断面図(3)



第7図 土層柱状断面図(4)



第8図 土質分布模式図

4. 基本的な層序と旧地形の復元

今回の第1次・第2次の調査対象地は広く、そのうち約10,000 m²を掘削したが、標高の差あるいは地区により、その土層は容易には把握しがたいものであった。だが、基本的には、以下のような層序をなすと考えられる。

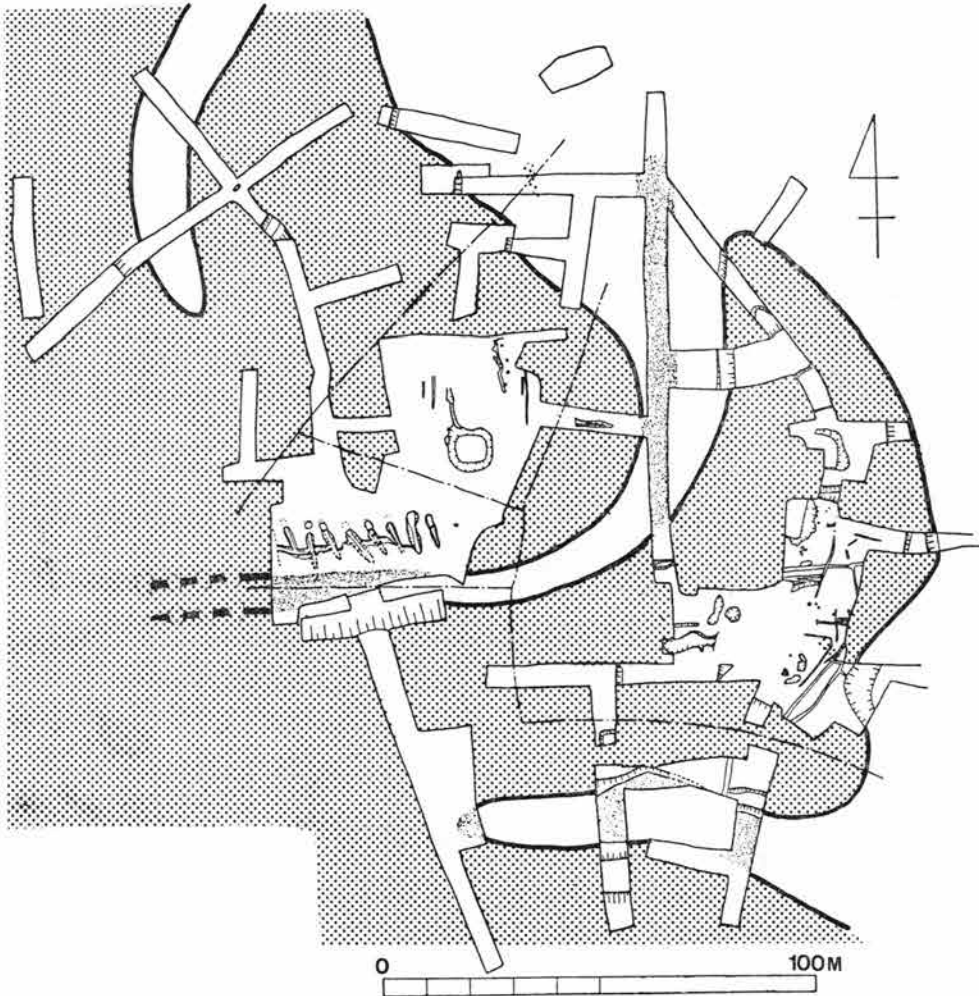
標高の高い部分すなわち丘陵部では、①表土、②茶褐色土(竹林置土)、③褐色砂礫、④砂質土(地山層)である。横穴群はその地山層をベースに造られている。地区では、横穴区をはじめA区、B区の一部、D区がそうした層序になる。ただ、同一区であっても標高の相対的に低い部分では、褐色の砂質土をベースとし、その上に若干の堆積土を表土との間にも

つものもある。

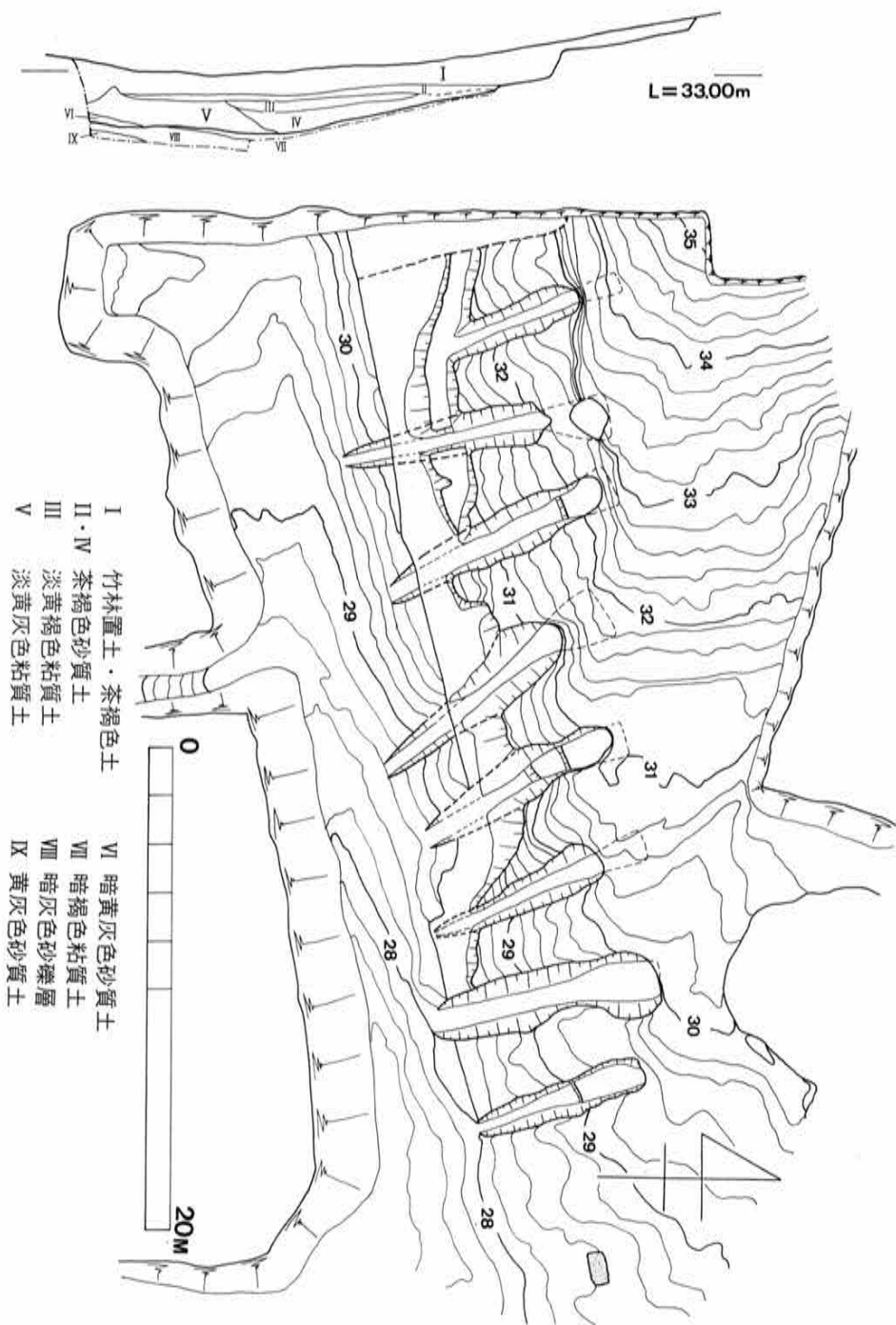
次に標高の低い部分すなわち丘陵裾部では、①表土、②茶褐色土(竹林置土)、③茶褐色粘質土、④褐色粘土(地山層)あるいは赤褐色粘質土(地山層)の順である。方形周溝遺構・SD 02 (B区)、そしてSD 03・SD 04・SK 03・SK 04等(C区)の遺構は、いずれも赤褐色粘質土(地山層)をベースにしている。地区では、B区・C区がほぼそうした層序になる。

なお、谷部については、約2~3mの厚い置土(茶褐色土・褐色砂層)が堆積し、その下に暗褐色砂質土(礫混じり)の層(自然流路埋土)がある。また、水田部分(調査地北・東端部)では、暗褐色粘質土(耕土)、淡青灰色砂土の層序である。

調査対象地は、水田を除けば竹林であるので、土層は、大阪層群^(注28)と呼ばれる砂礫・砂質土



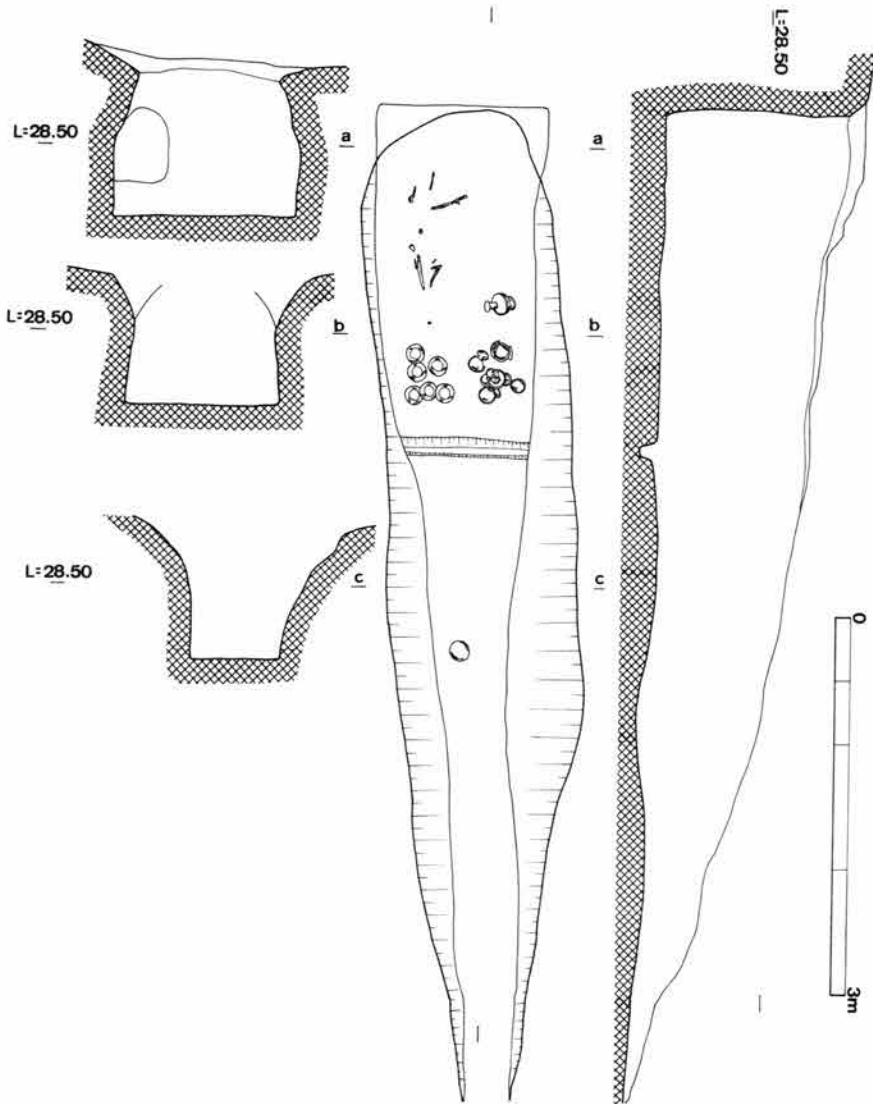
第9図 旧地形推定図



第10図 横 穴 配 置 図

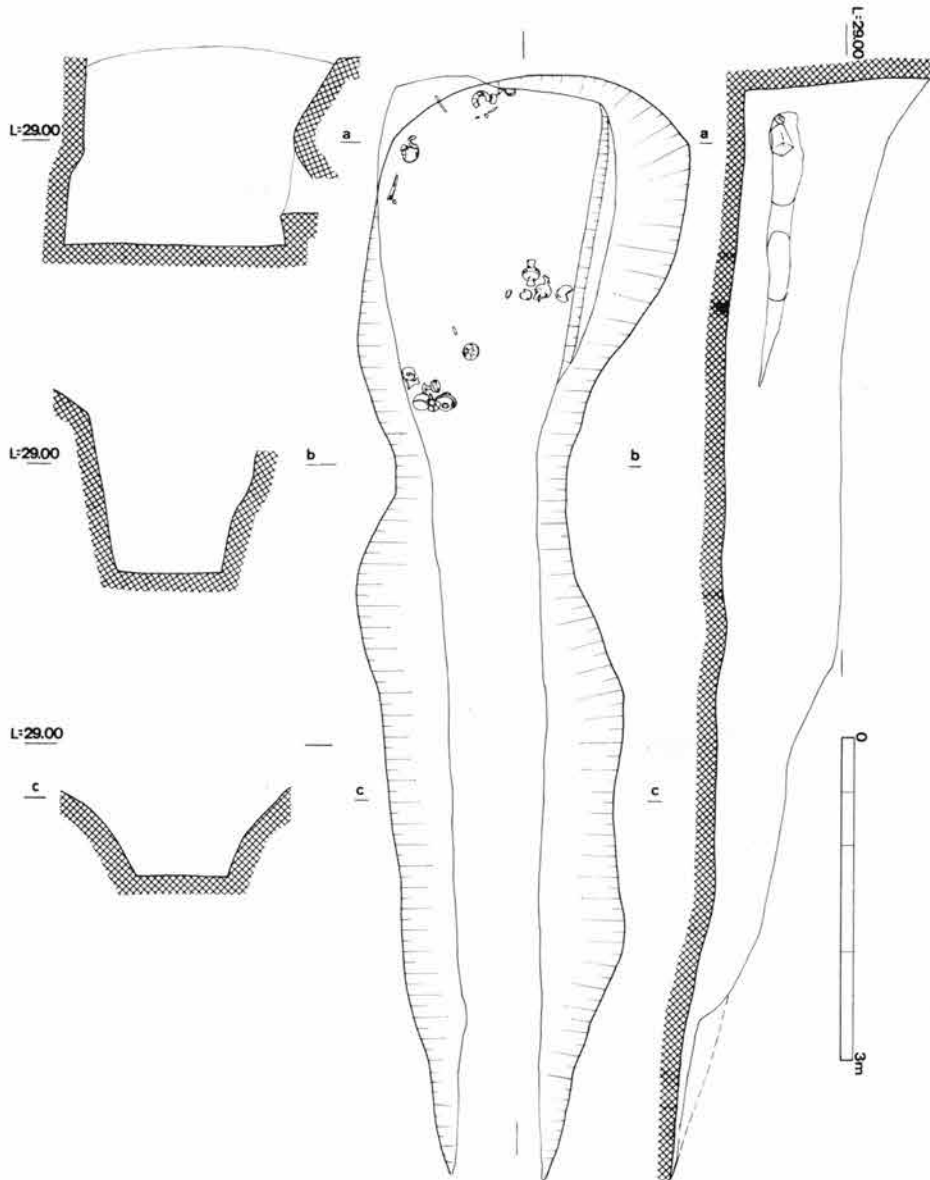
・粘土といった洪積層をベースに、その上に竹林置土が堆積するということが基本的に言えよう。

さて、調査地の旧地形については、土採り・土入れがたびたびおこなわれた竹林であるため当初分かりにくいものであった。しかし、調査の結果、おおよその旧地形について推定復元できるようになり、第8図に示されるような丘陵と谷が入り込んだ地形であったと思われる。A・B区・横穴区そしてC区の西端部からなる丘陵、すなわち横穴群・方形周溝遺構・



第11図 2号横穴実測図

SD 02 等の遺構をかかえる丘陵があること。次に、D区の北部・C区からなる「L」字状にのびる丘陵、すなわちSD 03・SD 04・SK 03・SK 04等の遺構をかかえる丘陵があること。そして、その2つの丘陵支脈の谷部を、西から東、南から北へと「L」字状に流れる自然流路があったこと。さらに、後者の「L」字状にのびる丘陵の南に、西から東へ流れる自然流路があったこと。以上が調査によって判明した。



第12図 3号横穴実測図

以上の旧地形の推定復元から、横穴は比較的奥まった谷部の南斜面に立地していること、弥生～古墳期の土坑等は比較的平坦な丘陵支脈の裾部・稜線部に位置することなどが理解できた。

5. 横穴の調査

今回、発掘調査を実施した横穴は8基である。玄室の天井部・側壁の崩落などで完存状態でなかった5基をのぞけば、3基（4号横穴・6号横穴・9号横穴）はほぼ完存状態であったと言える。この章では、以下各横穴の部分の構造について概説し、あわせて若干の考察を試みる。

なお、この章で主として使用した横穴各部の呼称は、埋葬の中心である部分を玄室、閉塞部にあたる部分を玄門、玄門部の前方の狭長な通路にあたる部分を墓道とそれぞれ呼称する。また、横穴の各部分の実測値は、水平位での値（高さについては垂直値である）をそのまま使用した。右側・左側は、墓道裾から奥に向っていう。

(1) 各横穴

① 2号横穴

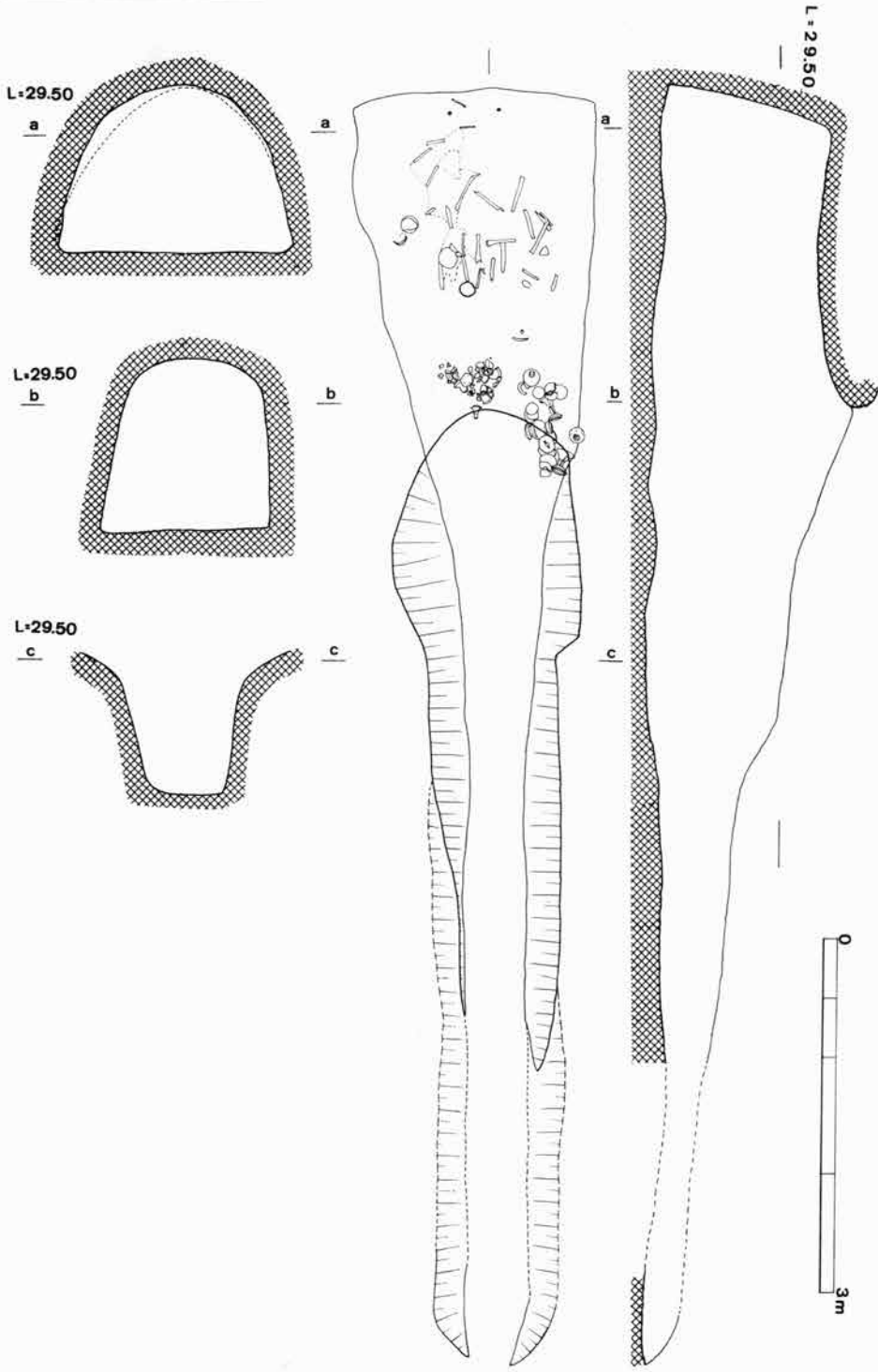
（位置と遺存度） 2号横穴は、当横穴群の東端に位置し、丘陵裾の平坦部に寄ったところにあたる。玄室床面で標高約27.5m、横穴主軸の方向はN-20°-Wである。横穴は、褐色の砂質土をベースに構築されている。横穴の墓道は完存しているが、玄門・玄室の天井部は陥没状態であった。全長7.90m・玄室長3.27m・玄室幅（奥壁部での実測値、以下同じ）1.10mである。

（各部の構造） 墓道は、幅約1m弱で狭長な通路としてあり、地山（褐色砂質土）を逆台形に掘り込んで造られている。玄門は、天井の形状が不明であるが、玄室埋葬面と墓道面との間に、段と小溝を設けている。玄室は、他に比べて小形であり、平面形は奥壁に向ってやや広がる長台形を呈している。奥壁には小穴が開いているが、その性格については不明である。奥壁の痕跡から、玄室の横断面はアーチ形天井の形であったと推測される。

② 3号横穴

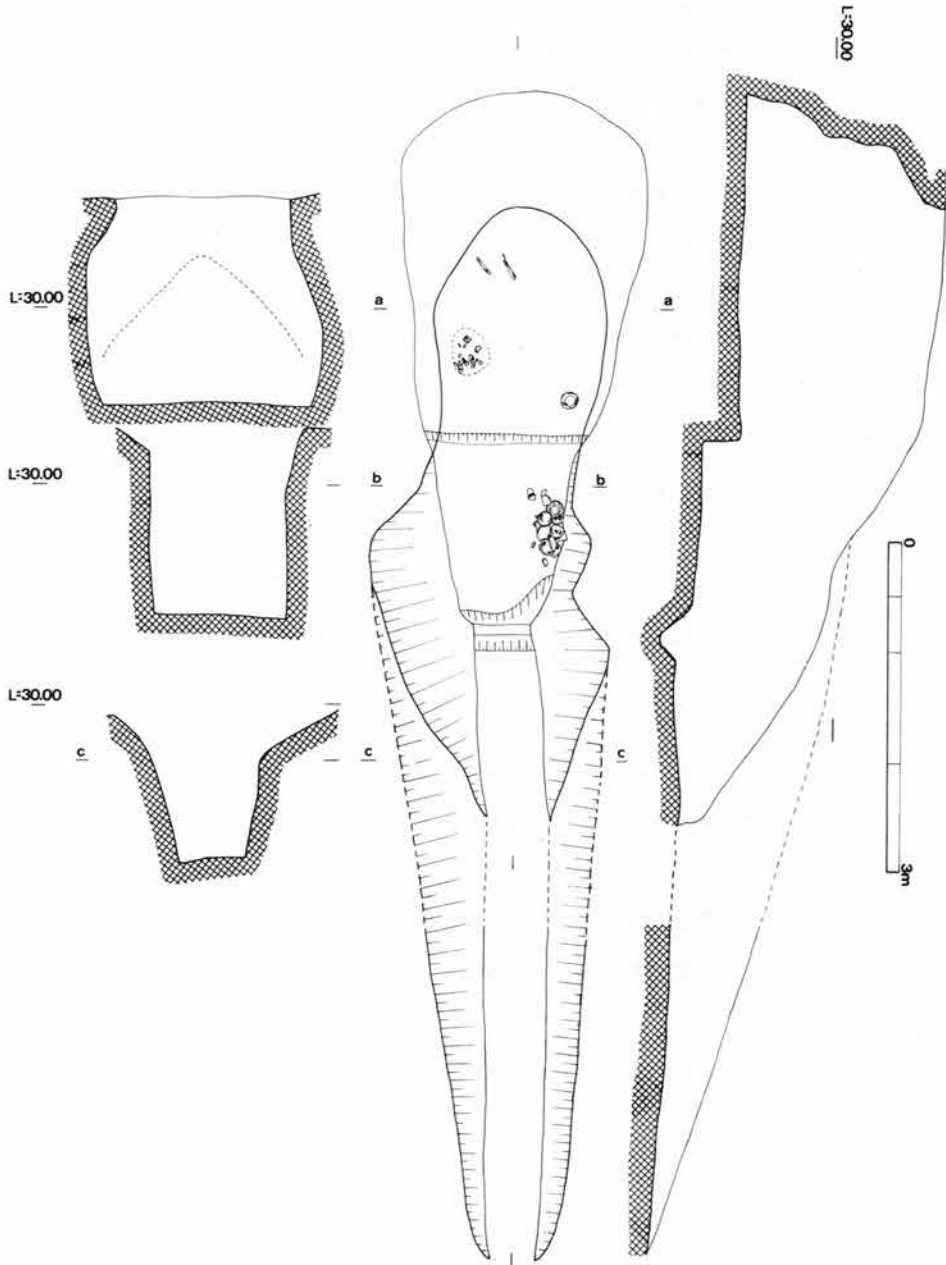
（位置と遺存度） 2号横穴の西側にあたり、比較的ゆるやかな斜面に位置する。玄室床面で標高約28.0m、横穴主軸の方向はN-12°-Wである。横穴は、褐色の砂礫層および砂質土をベースに構築されている。横穴は、墓道が完存しているが、玄門・玄室の天井部は陥没状態であった。全長10.10m・玄室長3.54m・玄室幅1.93mである。

（各部の構造） 墓道は、幅約1mで、やはり狭長な通路としてあり、地山（褐色砂礫層）



第13图 4号横穴実測图

を逆台形に掘り込んで造られている。玄門は、2号横穴のような段等の施設をもたず、玄室床面と墓道面は平面的につながっている。玄室は、やや広く、平面形では2号横穴と同じく奥壁に向って広がる長台形をしている。なお、玄室の右側壁には小穴が認められ、人頭大ほ



第14図 5号横穴実測図

どの石を2点検出した。また、玄室の横断面については、やはり奥壁の痕跡から考えて、アーチ形天井をしていたものと思われる。

③ 4号横穴

(位置と遺存度) 4号横穴は、3号横穴の西側にあたり、谷斜面がやや急になる部分に位置する。玄室床面で標高約28.5m、横穴の主軸方向はN-25°-Wである。横穴は、地山(褐色砂礫層)をベースに構築されている。横穴の遺存は、墓道・玄門・玄室とも比較的良好である。全長9.45m・玄室長3.86m・玄室幅2.06m・奥壁高約1.5mである。

(各部の構造) 墓道は、幅約1mで地山を逆台形に掘り込んだ通路としてある。玄門は、天井が奥壁に比べてやや低く、横断面がかまぼこ状であるが、本来はアーチ形をしていたものと思われる。玄門の床は、3号横穴同様に段をもたない。玄室の平面形は、他と同じく長台形をしており、天井はアーチ形で、玄門に向って低くなる傾向がある。また、奥壁は、やや内傾して立ちあがっている。

④ 5号横穴

(位置と遺存度) 8基の横穴群中のほぼ中央で、谷部でもやや急斜面にあたる場所にある。玄室床面で標高約29.0m、横穴主軸の方向はN-29°-Wである。横穴は、地山(褐色砂礫層)をベースに構築されている。横穴の遺存は、あまり良好とは言えず、玄門・玄室の天井・側壁の崩落は著しい。全長は9.90m・玄室長5.14m・玄室幅2.14mで、奥壁高約1.6mである。

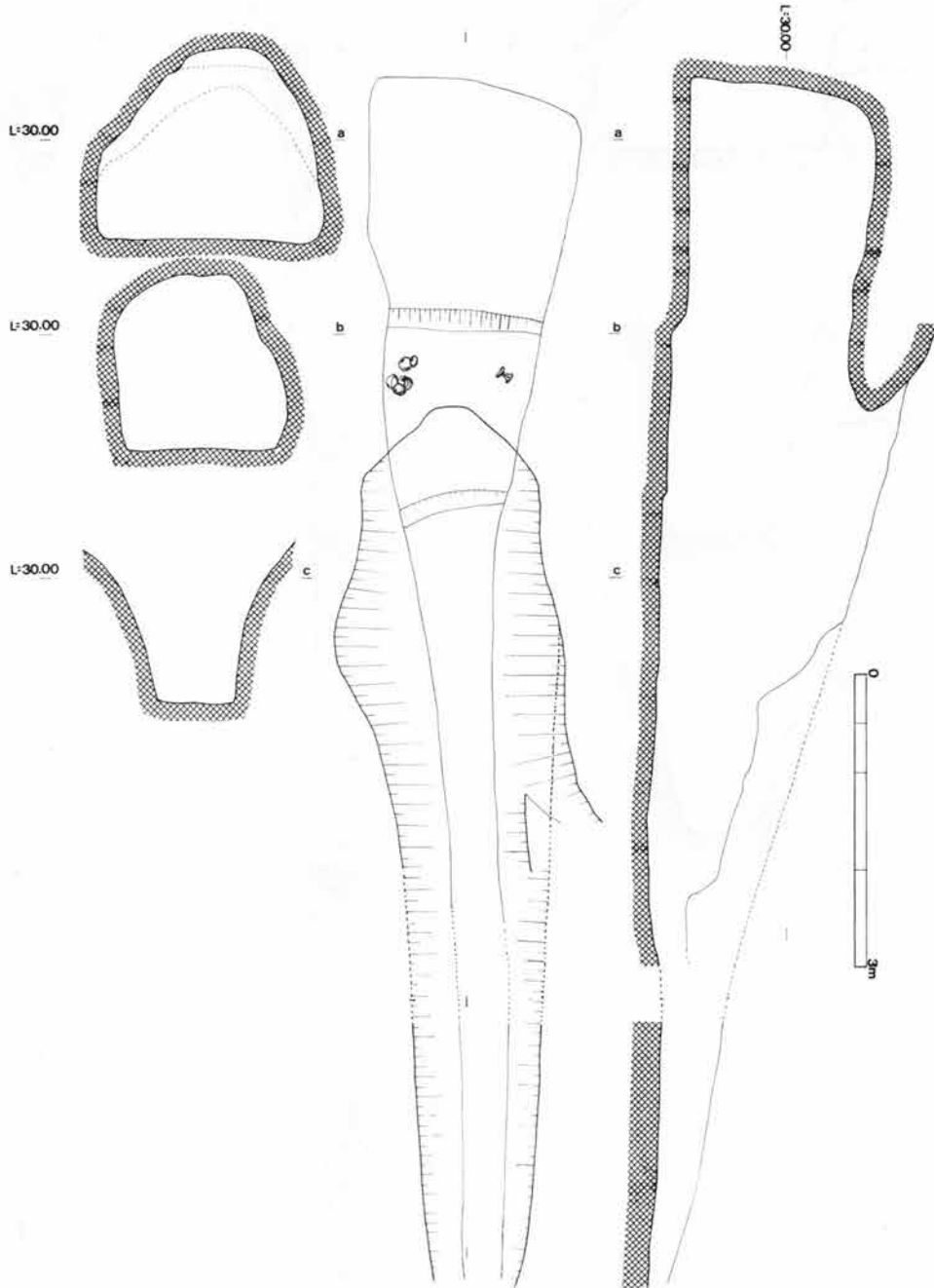
(各部の構造) 墓道は、断面が逆台形で、他と比較してやや短めである。墓道幅は、約1mである。玄門部は、幅約40cm程度の小溝をもち、また、墓道面と玄室との間は段をなしている。玄室は、前方部分と後方部分(奥壁側)とに分かれ、約30cm程の段を境に後方部分が高くなっている。後方部分が埋葬面として使用されたことは、骨片の出土からうかがえる。玄室の平面形は、他よりもやや長めの長台形で、奥壁はゆるやかな弧を描いており、他の横穴と若干異なる。玄室の横断面は、奥壁の痕跡からアーチ形をしていたと思われる。

⑤ 6号横穴

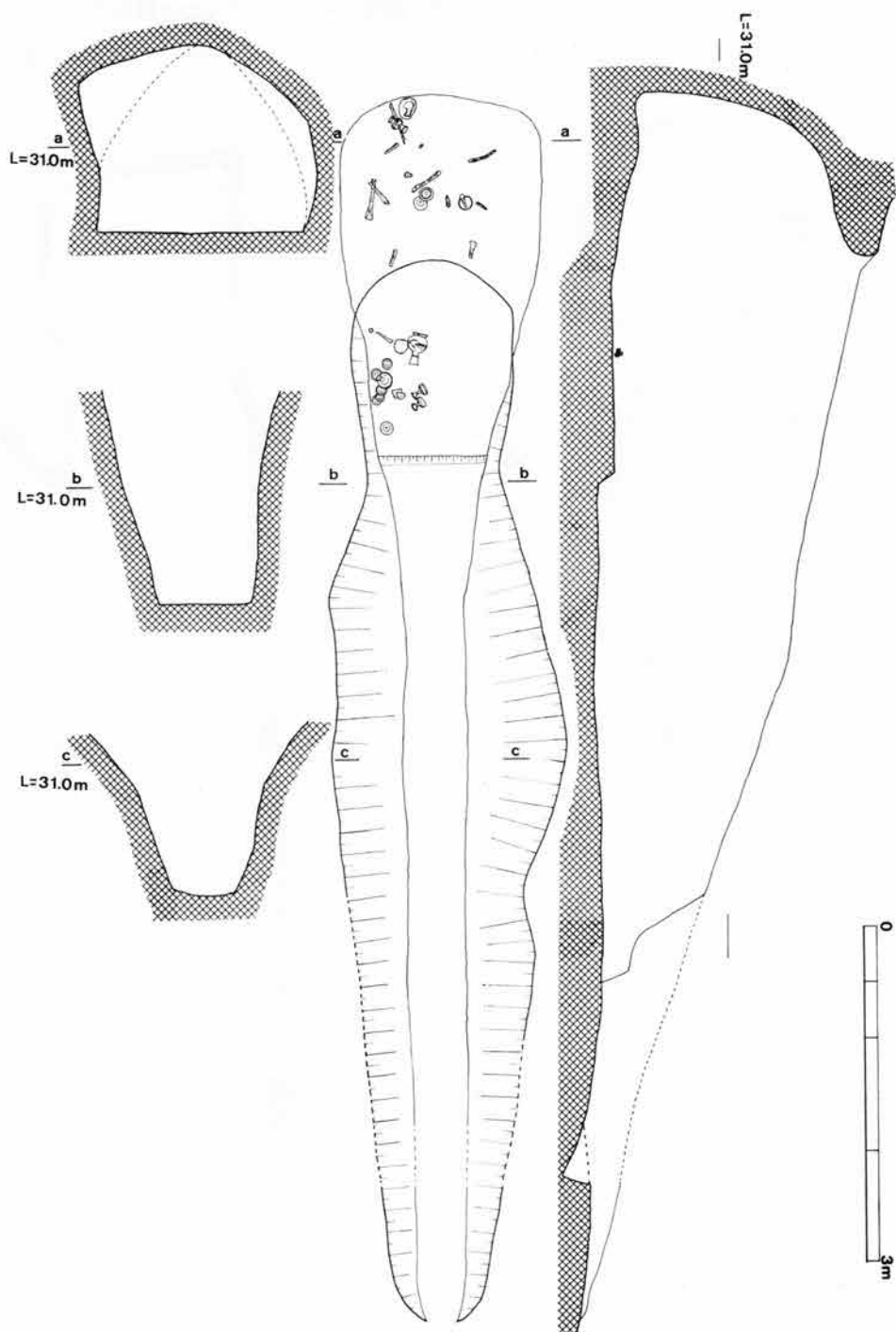
(位置と遺存度) 6号横穴は、5号横穴同様に横穴群のほぼ中央に位置している。玄室床面で標高約29.0m、横穴主軸の方向はN-39°-Wである。横穴は、地山(褐色砂礫層)をベースに掘り込まれている。遺存状態は、比較的良好で、玄門・玄室の天井部剥落が認められるにもかかわらず、旧状を充分知ることができる。全長12.00m・玄室長5.15m、玄室幅は2.16mで、奥壁高は約2mである。

(各部の構造) 墓道は、地山を断面逆台形に掘り込んでおり、幅約1mで他に比べてやや

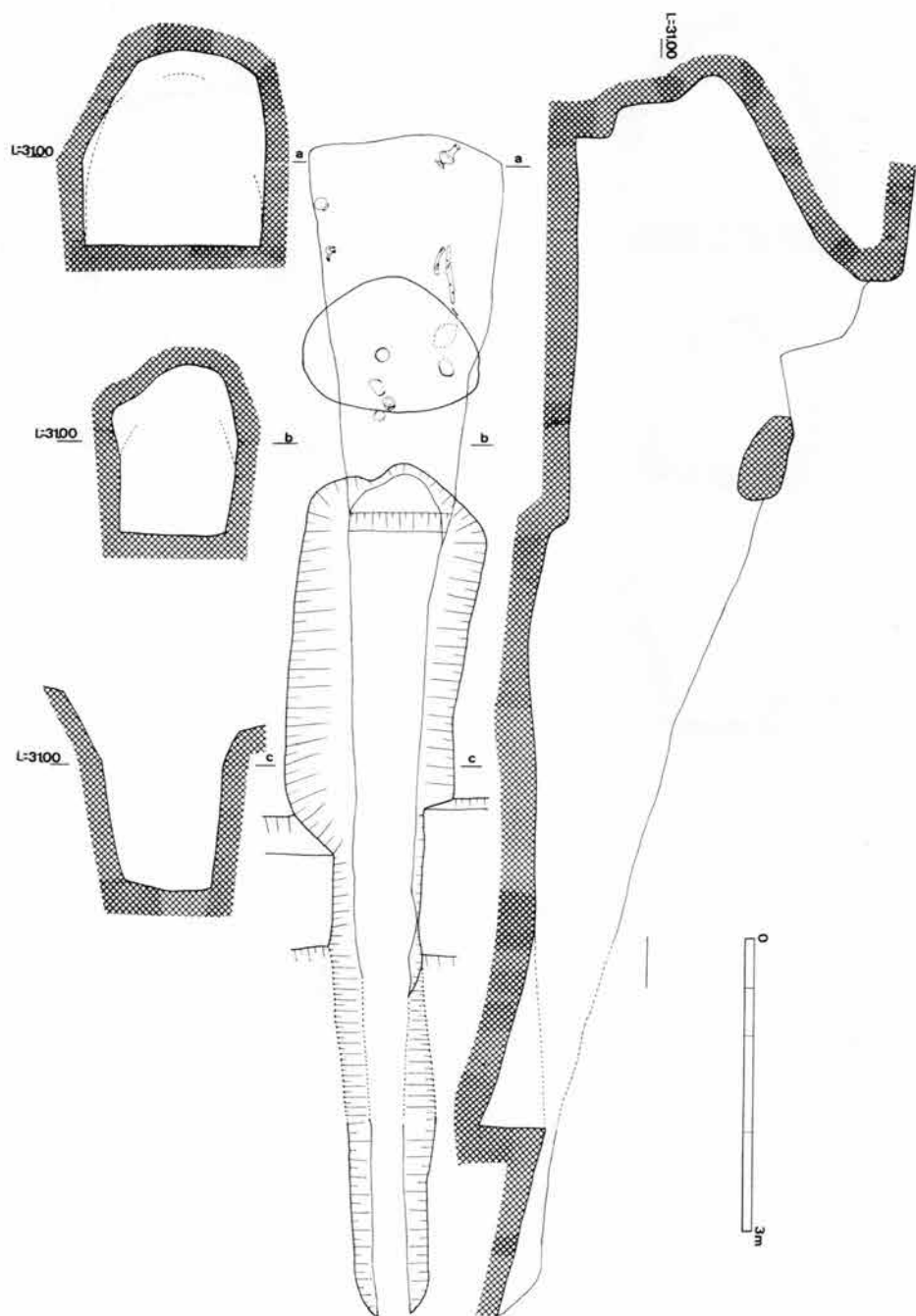
長い。玄門は、天井が一部剥落しているものの、断面アーチ形であったと推定される。玄門前方にやや低い段状のものが認められたが、構築時のものかどうか判断しがたい。玄室は、^(注34)



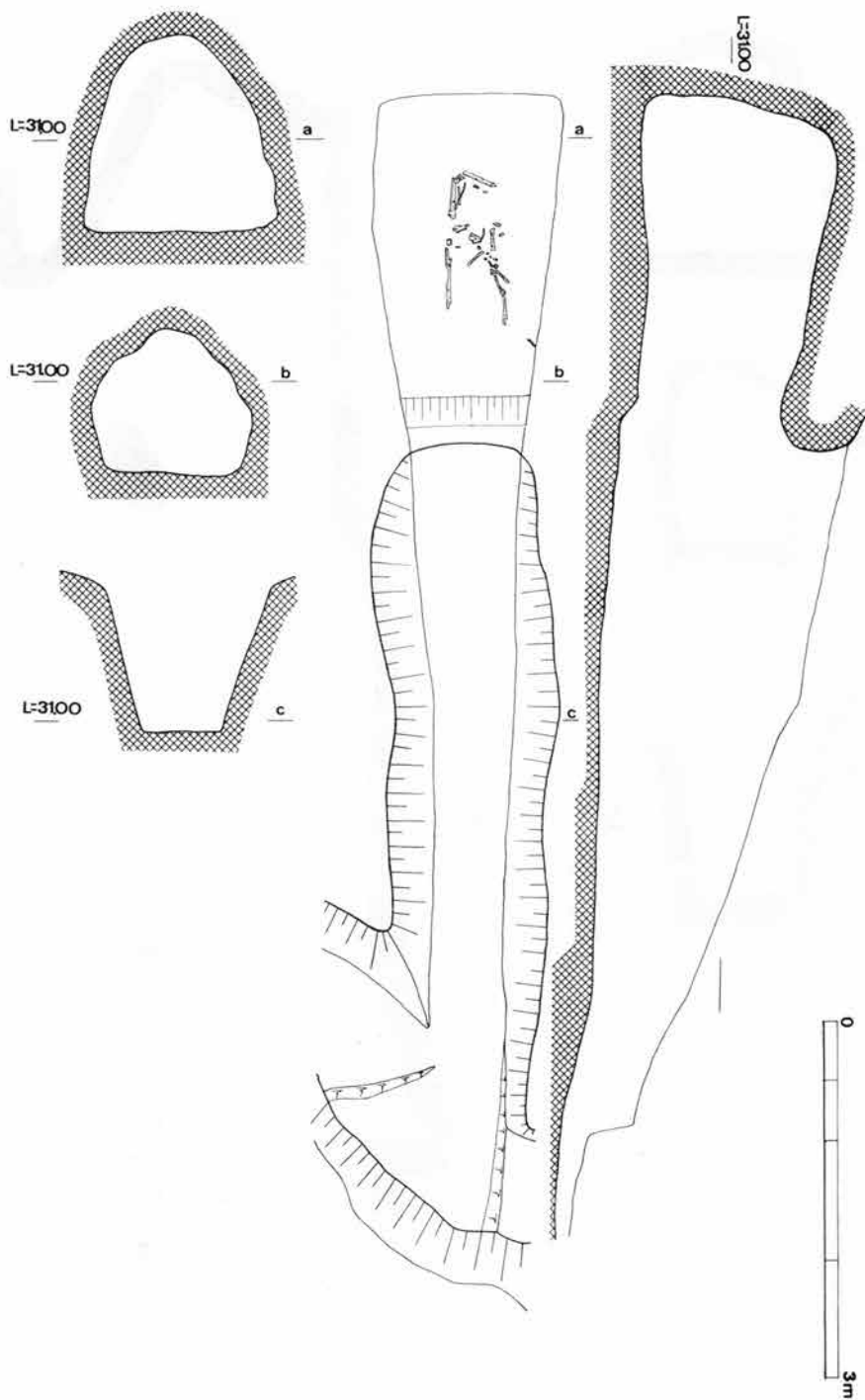
第15図 6号横穴実測図



第16図 7号横穴実測図



第17图 8号横穴实测图



第18图 9号横穴実測图

平面時が他と同様な長台形をしており、比較的広い。玄室の横断面はアーチ形をし、天井は玄門に向って低くなっている。また、奥壁はやや内傾気味に立ちあがっている。玄門からやや奥で、段をもつことが特徴としてあげられる。

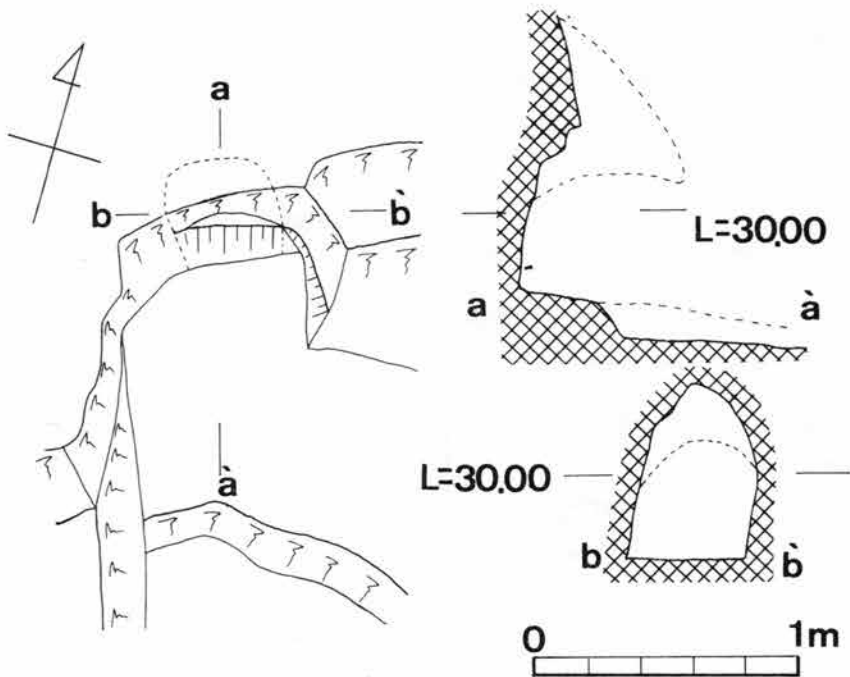
⑥7号横穴

(位置と遺存度) 7号横穴は、6号横穴と若干の間隔をおいて西に位置している。玄室床面で標高約30m、横穴主軸の方向はN-27°-Wである。横穴の遺存状況は、墓道をのぞき玄門・玄室の天井の崩落が著しい。玄室奥壁については、一部残存している。横穴は、地山(褐色砂礫層)をベースに掘り込まれている。全長約10.0m・玄室長3.65m・玄室幅1.69m・奥壁高約1.5mである。

(各部の構造) 墓道は、幅1m弱で地山を断面逆台形に掘り込んでおり、狭長な通路である。玄門は、天井が崩落しており、墓道面と玄室床面の間に段をもつ。玄室は、平面が長台形で、奥壁部がやや高くなっている。玄室横断面は、側壁の剥落がみられるものの、奥壁の痕跡等からアーチ形をしていたことがうかがえる。奥壁は、やや内傾気味に立ちあがる。

⑦8号横穴

(位置と遺存度) 7号横穴の西に位置し、斜面上部に段をもつところに構築されている。



第19図 小横穴実測図

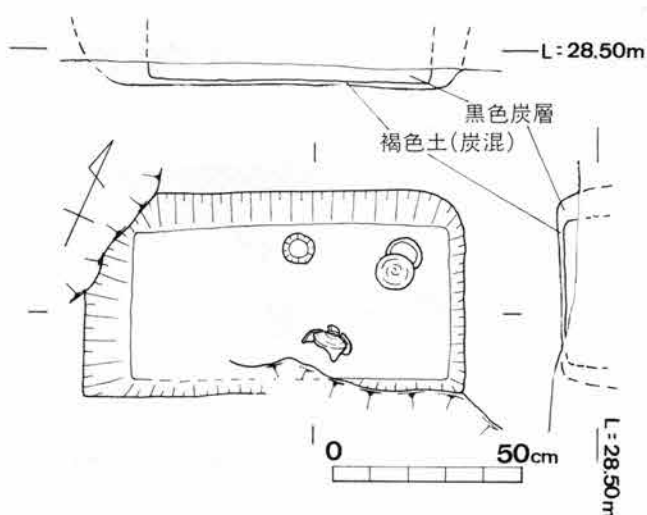
玄室床面で標高約30m、横穴の主軸方向は、N-12°-Wである。横穴は、地山（褐色砂礫層）をベースに造られている。横穴の遺存状況は、玄室中央の天井が陥落しているなど、良好とは言いがたい。全長11.8m・玄室長3.42m・玄室幅約2mである。

（各部の構造）墓道は、幅約1mで地山を断面逆台形に掘り込んでいる。墓道は、やや長めである。玄門は、天井が一部残存しており、アーチ形をしていたことがうかがえる。玄門では、墓道面と玄室埋葬面との間に段をもつ。玄室平面は、他と同じく長台形である。横断面は、奥壁部の残存しているところからアーチ形であったと思われ、天井は玄門に向かって低くなっていたと推測される。奥壁部は一部崩落していたところがあって、そこから骨片が出土したことから、自然な崩落だけではないと判断される。

⑧9号横穴

（位置と遺存度）9号横穴は、8号横穴の西に位置し、上部に段をもつ斜面のところに造られている。玄室床面で標高約30m、横穴主軸の方向は N-23°-W である。横穴は、地山（褐色砂礫層）をベースに構築されている。横穴の遺存状況は、今回調査された横穴中最も良好で、玄門・玄室とも構築時の状態を充分知ることができる。全長8.35m・玄室長3.12m・玄室幅1.52m・奥壁高1.5mである。

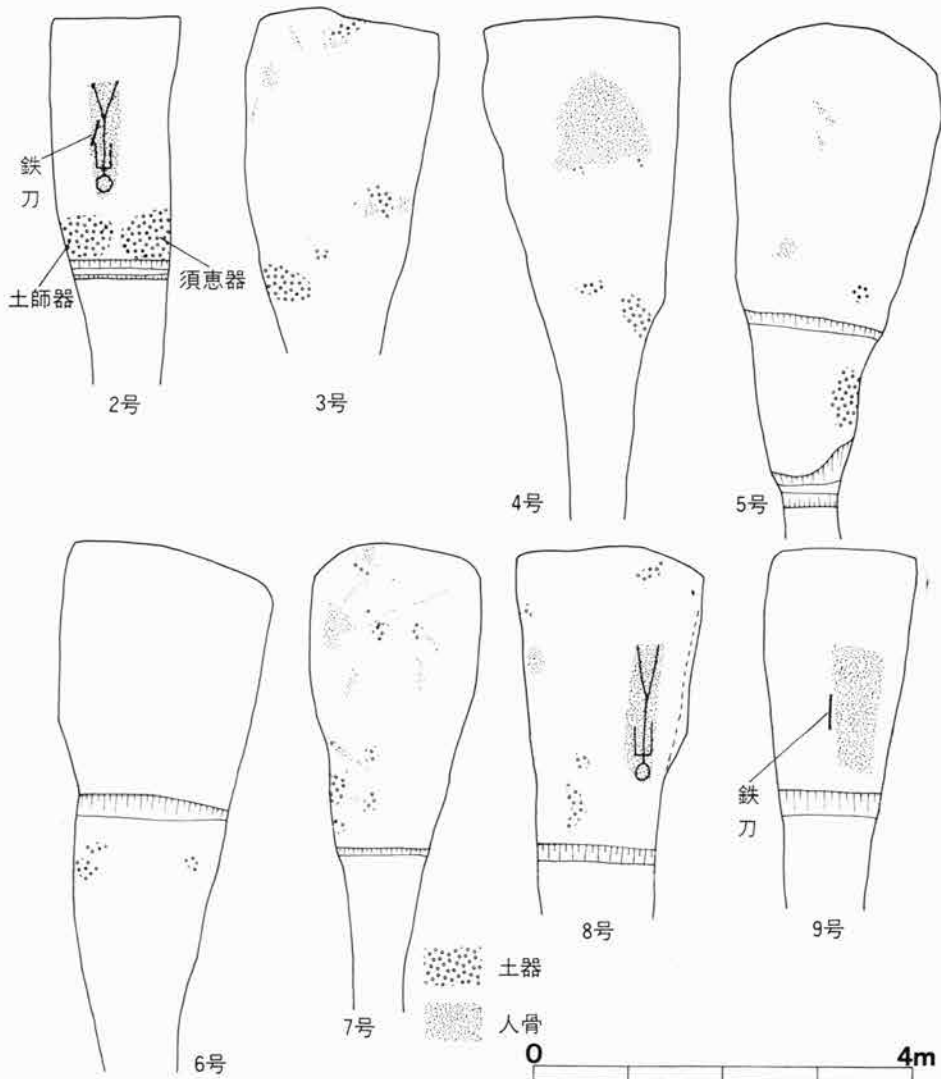
（各部の構造）墓道は、幅1m弱で地山を逆台形に掘り込んで、狭長な通路としている。玄門は、横断面がアーチ形で、墓道面との間に段をもつ。玄室の平面形は、長台形であるが、2号横穴同様、やや長方形に近い形状である。玄室の横断面は、アーチ形をしており、天井は玄門に向かって低くなっている。奥壁面は、やや内傾して立ちあがっている。



第20図 炭充墳土坑実測図

⑨小横穴

（位置と遺存度）6号横穴と7号横穴の間に位置している。床面の標高は約29.6m、小横穴の主軸方向はN-28°-Wである。横穴は地山（褐色砂礫層）をベースに掘り込まれている。遺存状態は悪く、かろうじて奥壁付近が残存しているにすぎない。残存長は0.4m、残存幅は0.5mを測る。



	全長	玄室長	奥壁巾	玄門巾	奥壁高	玄門高	平面形	備考
2号横穴	7.90	3.27	1.10	0.84	—	—	長台形	段小溝
3号横穴	10.10	3.54	1.93	1.00	—	—	長台形	
4号横穴	9.45	3.86	2.06	0.79	1.47	1.39	長台形	
5号横穴	9.90	5.14	2.14	0.55	—	—	長台形	段小溝
6号横穴	12.00	5.15	2.16	0.88	1.47	(1.59)	長台形	段
7号横穴	10.05	3.65	1.69	0.75	(1.85)	—	長台形	段
8号横穴	11.80	3.42	(1.98)	1.23	(2.00)	(1.74)	長台形	段
9号横穴	8.35	3.12	1.52	0.92	1.64	1.20	長台形	段

(單位：m)

第21図 横穴玄室比較図

各部の構造については、遺存状態が不良のため不明な点が多いが、他の横穴を小形にした形態に近いものと推測してさしつかえないかもしれない。横断面もアーチ形に近いと思われる。

⑩炭充填土坑

(位置と遺存度) 2号横穴の東約4mの地点で、丘陵裾の平坦面に位置する。土坑は、短軸の方向 N-24°-W にとる。土坑は、褐色砂質土を掘り込んでおり、深さ5cmほど遺存している。北西部分と南東部分については、すでに削平を受けていた。短軸50cm・長軸1mを測る。

(構造) 長軸がほぼ東西方向の長方形のプランをしている。削平のため上部の状態はわからないが、土坑の輪郭にそって幅5~10cmの炭層がとりまいていた。床面にも若干の炭層が敷かれており、その上層に炭混じりの褐色土が埋土としてあった。床面の中央北部分に、径約10cmの小穴が認められた。

(2) 小 結

以上のように、9基の横穴と炭充填土坑の構造について概説をしたが、以下それらをまとめ、若干の考察を試みる。

①横穴の位置についてであるが、比較的ゆるやかな(20~30°)斜面に、いずれも南南東~南東に開口して構築されている。同一の谷部の北向斜面についても、第2次調査の際確認したが、南向斜面に比べて急斜面で地山(褐色砂礫層)に地割れ等が認められ、もろい地盤であった。このことから、南向き斜面が横穴構築の立地として適当であったと考えられる。

②遺存度については、後世の埋没の際(竹林の置土)に厚く土層が堆積した横穴や、褐色砂質土という軟弱な地盤に掘り込んだ横穴(2号横穴・3号横穴)にとっては遺存状態はよくなかったと考えられる。それに、大阪層群と呼ばれる砂・礫等の互層になった地盤自体が上からの土圧に弱く、玄室天井の陥没・崩落の原因となったと考えられる。

③横穴の大きさについては、相対的に3つのグループに大別できる。まず全長では、短いもの(8m前後)として2号横穴・9号横穴、中程度のもの(10m前後)として3号横穴・4号横穴・5号横穴・7号横穴、長いもの(12m前後)として6号横穴・8号横穴の3グループである。次に玄室の大きさでは、小さいものとして2号横穴・9号横穴、中程度のものとして3号横穴・4号横穴・7号横穴・8号横穴、大きいものとして5号横穴・6号横穴の3グループである。以上、大きさの点から類似したものをあげれば、2号横穴と9号横穴、3号横穴と4号横穴^(注35)などがあり、形態的にも近似していると言える。また、6号横穴については、他より大形であると言える。

④横穴の主軸方向については、相対的に4つのグループに分けられよう。第1に2号横穴・9号横穴、第2に3号横穴・8号横穴、第3に4号横穴・5号横穴・7号横穴、第4に6号横穴の4グループである。ここでも、2号横穴と9号横穴の近似した傾向と、6号横穴が他と差をもつことが指摘できる。

⑤形態については、8基の横穴はいずれも概して類似した簡素なものである。^(注37)しかし、若干の差異を指摘することができる。それは、玄門部付近での段と小溝の有無についてで、3つに大別できる。^(注38)^(注39)第1に、段・小溝とももたないものとして3号横穴・4号横穴、第2に、段のみもつものとして6号横穴・7号横穴・8号横穴・9号横穴、第3に、段・小溝とももつものとして2号横穴・5号横穴の3グループがあげられる。なお、以上のような若干の差異にもかかわらず、狭長な墓道とアーチ形の横断面をもつ玄室からなるこれら8基の横穴は、美濃山一帯に群在する他の横穴とも合わせて、その共通性は充分確められたと言えよう。また、玄室の平面での長台形というプランは、横穴式石室における無袖式にあたる簡略な形態であることも指摘できる。

⑥横穴は基本的に褐色砂礫層・砂質土層をベースに構築されているが、墓道の裾1/3前後の部分は暗褐色砂質土^(注40)(礫混じり)を掘り込んでいる。また、その墓道の長さは、斜面の傾斜角に規制されていると考えられる。

6. 横穴の出土遺物

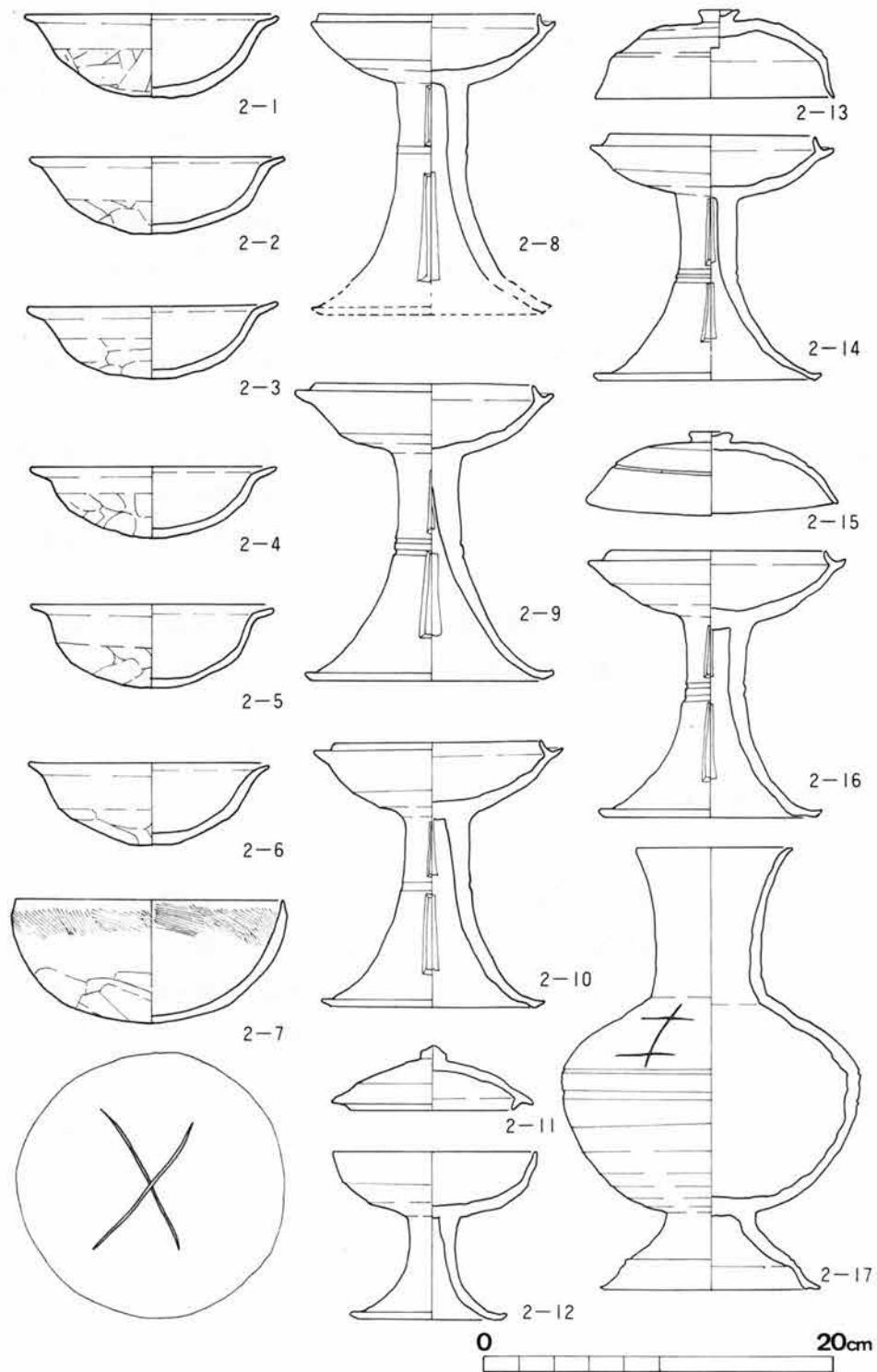
今回の横穴群の調査では、土器類を中心に多くの遺物が出土した。その概略は、土器については、完形や器形を識別しうる破片も含めると、総数100点余り(土師器28点、須恵器86点)出土した。その器種構成は、土師器の杯・椀・皿・壺・高杯・甕であり、須恵器の杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・台付長頸壺・長頸壺・台付短頸壺・平瓶・蓋(つまみ付)・甕・杯(高台付)である。これら土器類以外では、鉄刀2点、鉄小刀1点、金環4点、人骨片15体分ほどである。

以下の各節で、まず、出土状況についてまとめ、各遺物の説明をした後、土器類の編年等を試みる。

(1) 遺物の出土状況

遺物の大半は、玄室床面で検出したが、一部については墓道面あるいは墓道埋土中から出土したものがある。ここでは、主として玄室内での出土状況について述べることにする。

玄室内では、第21図に示したように、玄門付近に土器類が集中して検出された例が多い。ただ7号横穴・8号横穴については、一部が奥壁付近で検出され、また、2号横穴の場合の



第22図 2号横穴出土土器実測図

ように、土師器と須恵器がそれぞれ右・左に分かれた状態で検出された特殊な例もある。その2号横穴の場合は、玄室内の埋没状況から、それらの土器類の一括性^(注41)が考えられる。他に^(注42)については、いずれも散乱した状態かあるいはかたづけられた状態であり、土器類の一括性には疑問点が多い。

次に、鉄刀・鉄小刀・金環であるが、いずれも骨片付近かそれにまぎれこんだ状態で出土した。2号横穴と9号横穴の場合、鉄刀は、人骨片の左側に沿って、刀先を奥に向けた状態で出土した。また、2号横穴の金環は、頭蓋付近で検出した。

人骨については、2号横穴・8号横穴・9号横穴を除いて、他はいずれも玄室の奥壁側に散乱していた。先の3つの横穴については、人骨が頭蓋を南向きにして伸展された状態^(注43)で検出されたのが注意される。ただ、8号横穴の場合、埋土上層（玄室）で4～5体分の頭蓋がほぼ同一レベルで検出されており、やや特異である。

(2) 出土土器

① 2号横穴

2号横穴からは、玄室床面上で土師器の杯6点、墓道面上で土師器の椀1点^(注44)、玄室床面上で須恵器の有蓋高杯5点・無蓋高杯1点・蓋3点・台付長頸壺1点が出土した。また、墓道埋土中より土師器の皿片1点が出土した。

土師器

杯B（2-1～6） 丸底に内湾気味に立ちあがる体部、外反する口縁部をもつ。底部は篋削りされており、口縁部はなで調整で、比較的焼成もよく、明るい褐色を呈する。口縁部付近に黒斑をもつものもある。体部に粘土のつなぎ痕が認められる。

椀（2-7） 丸底に内湾してのびる体部、やや内傾気味の口縁部をもつ。底部は篋削りされており、口縁内外面は刷毛目で調整し、口縁端部はなで仕上げている。焼成は良好で、明褐色を呈する。体部に粘土ひものつなぎ痕が認められる。また、底部に「X」の篋記号がある。

須恵器

有蓋高杯 A₃（2-8～10・14・16） いずれも杯部が半扁球状で、短く内傾してのびる立ちあがりをもち、脚部がいわゆる「長脚二段透孔」と呼ばれるタイプである。杯部下半は、1/3程度粗く篋削りされており、口縁受部は凹状をしている。脚の透孔は1対（2方向）であり、二段の透孔の間に1条ないし2条の凹線がある。脚端部は断面三角形で、外傾した面をもつ。焼成は良好で、青灰色を呈する。

無蓋高杯 C₁（2-12） 杯蓋を反転させたような杯部に、低い脚部がつく。杯部下半は、

1/2程度篔削りされており、篔による「八〸〸」状の刻線が認められる。焼成良好で、青灰色を呈する。

蓋 B₁ (2-11) 天井頂部に乳頭状のつまみをもつ蓋で、短くやや内下方にのびるかえりがある。天井部は1/2程篔削りされており、体部がやや屈曲している。焼成良好で、青灰色を呈する。

蓋 C₁ (2-13・15) 天井頂部に中央の凹んだ扁平なつまみをもつ蓋で、体部が屈曲しており、口縁は下方にのびる。屈曲部に1条の凹線をもつ。焼成良好で、青灰色を呈する。天井部は、1/3ほど篔削りされている。出土状況等から、それぞれ14・15の有蓋高杯とのセットが考えられる。^(註45)

台付長頸壺 B₁ (2-17) やや外反気味にのびる口頸部、比較的丸い体部に、方形透孔がなく弱い稜をもつ脚台がつく。体部下半は1/2ほど篔削りされており、肩部に「キ」の篔記号がある。焼成良好で、青灰色を呈する。

②3号横穴

3号横穴からは、玄室床面上で土師器の壺1点・杯1点・皿1点、黒色土器2点、須恵器の有蓋高杯3点・無蓋高杯1点・杯身1点・台杯長頸壺3点出土した。また、玄室埋土中から須恵器の杯身・蓋の破片が各1点出土した。

土師器

壺(3-1) 球形の体部に「く」字形に外反する口縁部がつく。口縁端部は丸い。内面下半は篔削り、口縁内・外面下半は刷毛目調整が施されている。また、外面上半・内面上半には指押さえ・指などで痕が認められる。焼成は良好で、褐色を呈する。

杯D(3-2) 平底で、ゆるやかに立ちあがる体部をもち、口縁は丸くおさめている。内面には、放射状の暗文がある。底部に、指押さえ痕がある。焼成良好で、淡赤褐色を呈する。

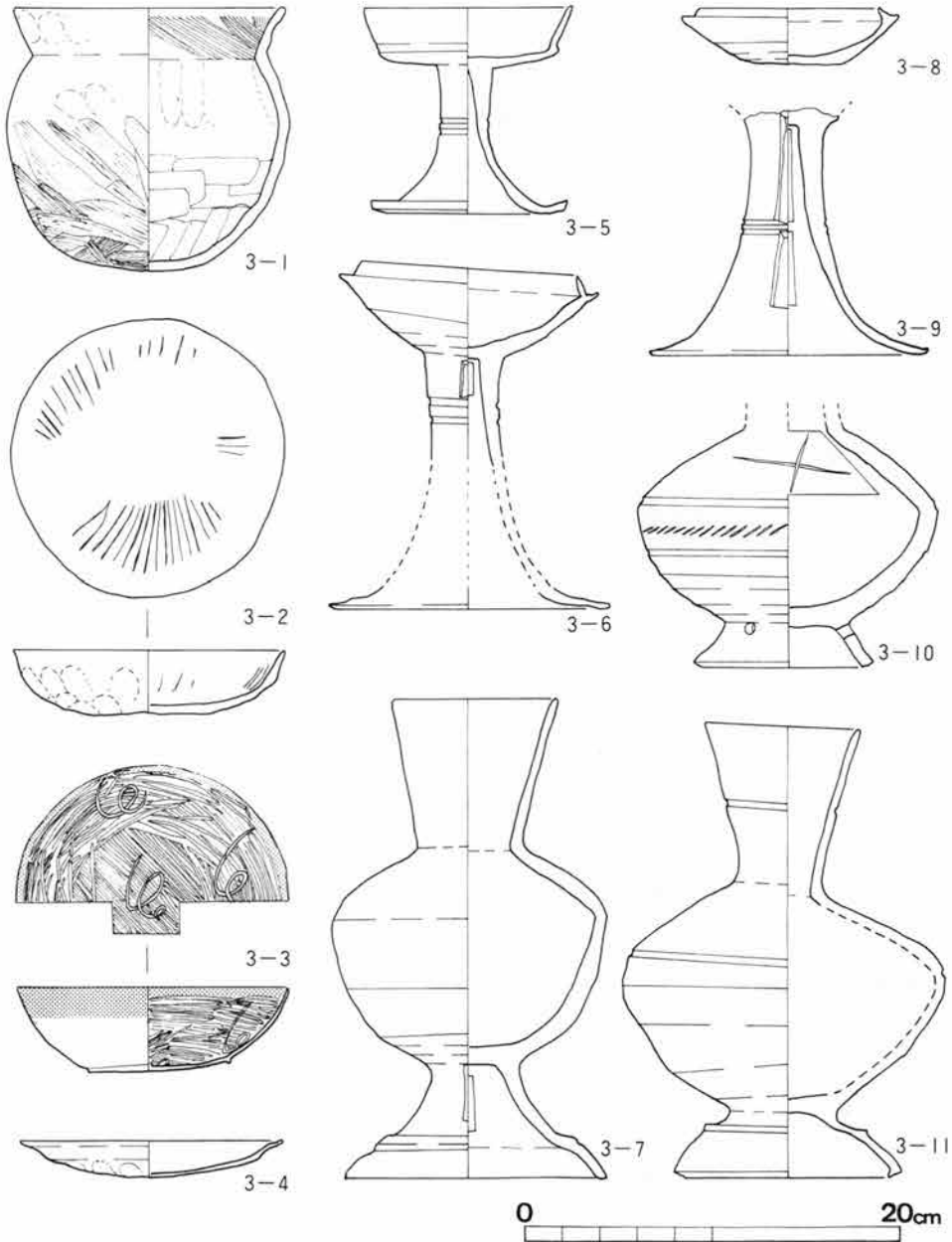
皿(3-4) 平底・薄手の皿で、口縁は横なでによる屈曲がみられる。^(註46)底面は、指押さえのみである。焼成は軟で、淡褐色を呈する。

黒色土器(3-3・12) いわゆる黒色土器A類で、内面および口縁外面に炭素を吸着させたタイプである。内面の篔磨きは比較的密で、見込み部分等に螺旋状の暗文がみられる。底部には、断面三角形の高台がつく。

須恵器

無蓋高杯B(3-5) 平底で、やや外傾気味にたちあがる杯部に、低い脚部がつく。杯部口縁は丸く、体部に弱い稜をもつ。脚中央に2条の凹線をもち、脚端は下方にややのび面をなす。焼成良好で、青灰色を呈する。

有蓋高杯 A₁ (3-6・9・13) 6はやや尖り気味の底に、やや短く内傾するたちあがりをもつ杯部に、方形の透孔⁽²³⁴⁷⁾をもつ脚部がつく。脚部の一部を欠損しているが、「長脚二段透孔」の高杯で、2方向に透孔をもつと思われる。杯部下半は、1/2ほど粗く篋削りされている。



第23図 3号横穴出土土器実測図

焼成良好で、青灰色を呈する。9は、脚部のみの破片である。

杯身 A₃ (3-8) 小さい平底から外上方にのびる体部と、短い立ちあがりに水平な面をなす受部の口縁をもつ。底部は、篋切り未調整である。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

台付長頸壺 A₂ (3-7) 外上方に直線的にのびる口頸部、比較的丸い体部に一段の方形透孔(2方向)と稜をもつ脚台がつく。体部下半は、粗く篋削りされている。焼成は不良で、灰白色を呈する。

台付長頸壺 B₂ (3-11) 外上方に直線的にのびる口頸部、そろばん玉状の体部に、無透孔で稜をもつ脚台がつく。脚端は、内下方に断面三角状に突出している。体部下半は粗く篋削りされている。また、体部中央に1条の凹線をもつ。焼成良好で、青灰色を呈する。

台付長頸壺 B₁ (3-10) 口頸部は欠損しており、そろばん玉状の体部に、円形透孔(3方向)をもち、外下方にひろがる脚台がつく。肩部には、「×」の篋記号をもち、また、体部中央の2条の凹線間には篋描きによる斜線文が施されている。体部下半は、粗く篋削りされている。焼成良好で、青灰色を呈する。

③4号横穴

4号横穴からは、玄室床面で土師器の杯6点、須恵器の杯身2点・杯蓋3点・無蓋高杯2点・有蓋高杯5点・台付長頸壺1点・台付短頸壺1点・平瓶1点が出土した。また、墓道埋土中から、須恵器の大甕が1点、土師器の皿片1点が出土した。

土師器

杯A (4-1~3) 丸底で直口気味に立ちあがる口縁部がつく。底部は、粗く篋削りされており、口縁および内面はなで調整である。口縁端部は丸い。焼成は良好で、褐色を呈する。

杯C (4-4~6) 丸底で内湾気味に立ちあがる体部に、外反気味の口縁がつく。6は、やや平底に近い。底部は指押さえのままで、口縁および内面はなで調整である。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

須恵器

蓋杯 A₁ (4-9) 比較的平らな天井部に、短く外下方にのびる口縁がつく。天井部は、1/3程度粗く篋削りされている。

杯蓋 A₂ (4-7・8) 平らな天井部に内湾気味にのびる体部、口縁端部は丸い。天井は、篋切り未調整である。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

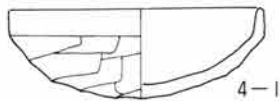
杯身 A₂ (4-10) 丸底で半扁球状の体部に、短く内傾してのびる立ちあがりをもつ口縁がつく。底部は、粗く篋削りされている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

杯身 A₃ (4-11) やや平底で外上方にのびる体部に、短い立ちあがりをもつ口縁がつく。底部は、篋切り未調整のままである。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

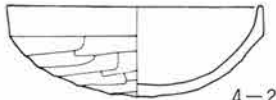
無蓋高杯 B (4-12・13) 12は、基部の細い脚の破片である。脚中央に1条の凹線があり、脚端に垂直な面をなす。焼成良好で青灰色を呈する。12の杯部は欠損しているが、13と同様と思われる。13は、平底で、外上方にややひろく体部、丸い口縁端部がつく杯部と、12と同様な脚部からなる。杯体部に稜をもち、脚中央に3条の凹線をもつ。焼成良好で、青灰色を呈する。

有蓋高杯 A₂ (4-15~18) いずれも半扁球状の杯部に、いわゆる長脚二段透孔の脚部がつく。口縁の立ちあがりは、短く内傾している。脚中央・脚裾に1~2条の凹線をもち、杯底部は、1/2程度粗く篋削りされている。脚端には垂直な面をもつ。焼成良好で、青灰色を呈する。

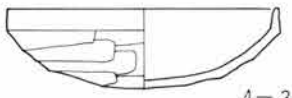
有蓋高杯 A₃ (4-14) 半扁球状の杯部に、いわゆる長脚二段透孔(3方向)の脚部がつく。脚中央に2条の凹線をもつ。杯下半は粗く篋削りされている。脚端には外傾した面をもつ。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。



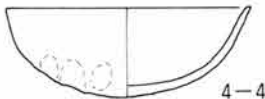
4-1



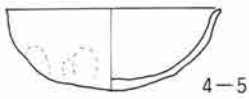
4-2



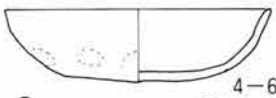
4-3



4-4



4-5



4-6



第24図 4号横穴出土土器
実測図(1)

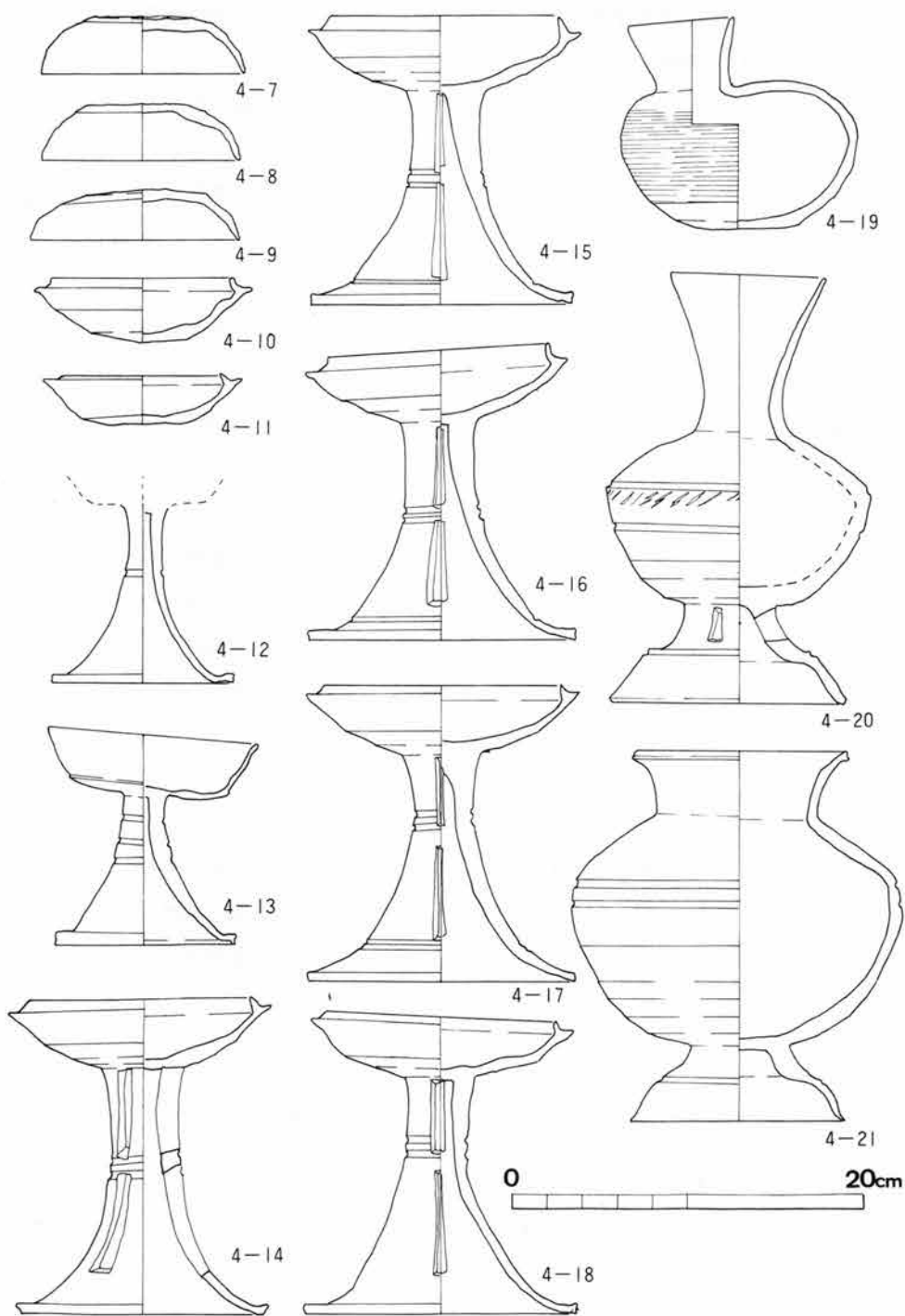
平瓶A (4-19) 小さな平底に丸い体部、やや外反気味の口縁が一方に偏してつく。底部は篋削り、体部には掻き目調整が施されている。焼成は良く、青紫色を呈する。

台付長頸壺 A₂ (4-20) やや外反気味の口頸部に、やや肩のはる体部、稜と1段の方形の透孔(3方向)をもつ脚台がつく。体部中央に2条の凹線があり、その間に篋による斜線文が施されている。体部下半は、粗く篋削りされている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

台付短頸壺 (4-21) 短く外反する口頸部に、やや胴張りのある体部、稜をもつ脚台がつく。体部中央に2条の凹線がある。体部中央は掻き目調整、下半は篋削りされている。焼成良好で、青灰色を呈する。

④ 5号横穴

5号横穴からは、玄室前方で土師器の碗1点・杯1点・高杯1点、須恵器の有蓋高杯2点・無蓋高杯4点・杯身2点、玄室後方で土師器の杯1点がそれぞれ出土した。また、墓道埋土中から、須恵器の杯蓋(つまみ付)2点・



第25図 4号横穴出土土器実測図(2)

杯（高台付）1点・平瓶1点が出土した。

土師器

椀（5-1） 丸底に内湾したのびる体部，内傾気味の口縁がつく。底部は，粗く篋削りされている。体部には，指押さえ痕や粘土ひものつなぎ痕が認められる。焼成は良好で，褐色を呈する。

杯D（5-2） 平底で内湾気味に立ちあがる体部に，内側に凹線をもつ口縁がつく。底部には指押さえのみで，口縁部・内面はなで調整である。内面には，放射状の暗文がある。焼成良好で，淡赤褐色を呈する。

杯E（5-4） 平底で，内湾気味に立ちあがる体部に，丸くおさめた口縁部がつく。底部は篋削りされ，口縁部・内面は，なで調整を施したのち，篋磨きされている。内面には，見込み部分が螺旋状，その外側に2段の放射状暗文（逆方向）が施されている。焼成は良好で，淡赤褐色を呈する。

高杯（5-3） 平らな底部から外上方にのびる体部をもつ杯部に，「川」字状にひろく脚部がつく。杯口縁端部・脚端部とも，丸くおさめている。杯部の内外面は回転なで，脚上半には縦なでが施されている。焼成は良好で，淡赤褐色を呈する。脚内面には，しぼり痕が認められる。

須恵器

無蓋高杯 C₂（5-6～8・10） 杯蓋を反転させて杯部として，低い脚部をつけたものである。杯部の底は，比較的平らなもの（5-6～8）とやや丸底のもの（5-10）があるが，いずれも底部は粗く篋削りされている。口縁端部は丸く，脚中央に1～2条の凹線がある。また脚端部は，やや外反し，面をもつものがある。焼成は良好で，青灰色を呈する。

有蓋高杯 B（5-11） 平底で，外上方へのびる体部に極めて短い立ちあがりの口縁部がつく杯部に，やや低い脚部からなる。杯底部は篋切り未調整のままである。脚中央に2条の凹線があり，脚端は，下方にやや突出し垂直な面をなす。焼成は良好で，淡青灰色を呈する。

有蓋高杯 A₂（5-12） 半扁球状の体部に短い立ちあがりをもつ杯部に，いわゆる長脚二段透孔の脚部がつく。杯底部は，1/3ほど粗く篋削りされている。脚中央に2条の凹線があり，脚端は垂直な面をもつ。焼成は良く，青灰色を呈する。

杯身 B₁（5-9） 平底に外反気味に立ちあがる体部がつく。口縁端部は丸い。底部は篋切りのままである。焼成は良く，灰白色を呈する。

杯身 A₃（5-13） やや尖底気味で，短い立ちあがりをもつ小形の杯身である。底部は，篋切り未調整のままである。焼成良好で，青灰色を呈する。

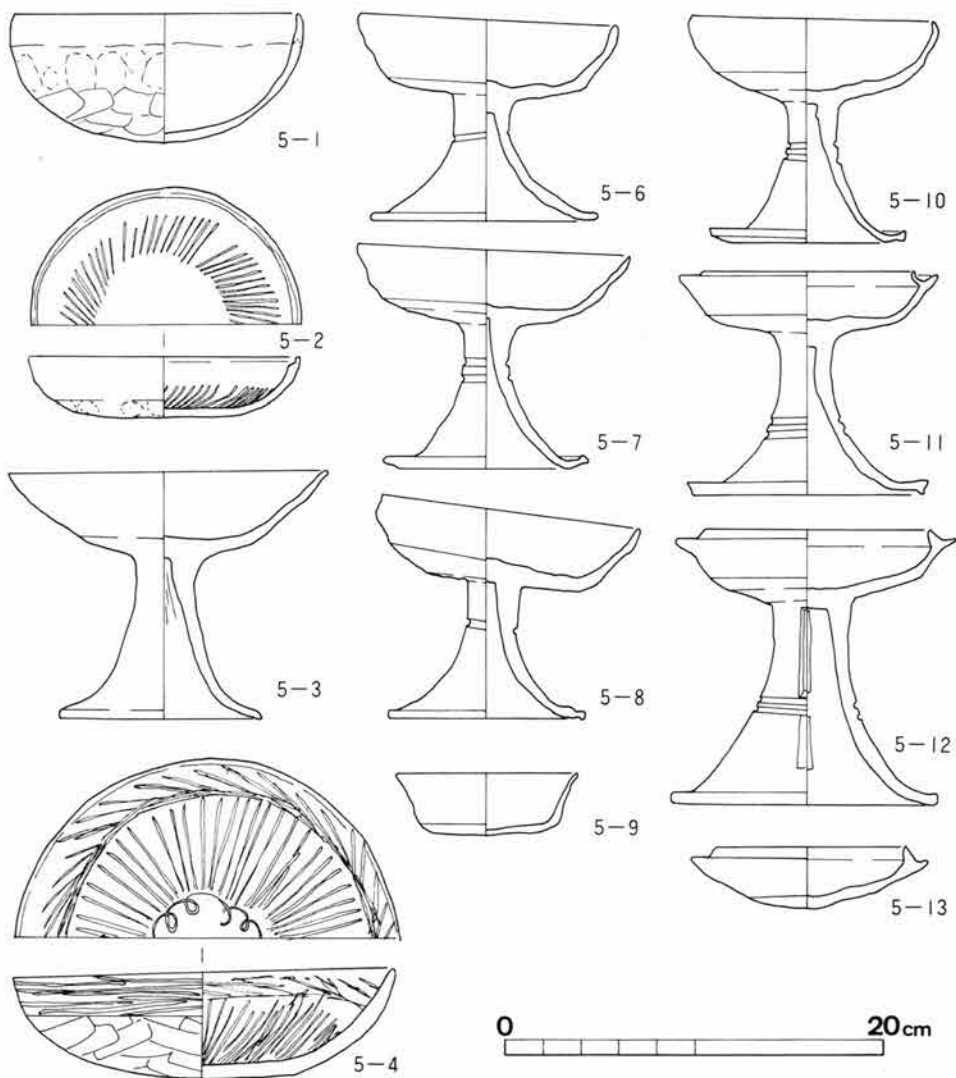
⑤ 6号横穴

6号横穴からは、須恵器の杯蓋1点、杯身4点、蓋（つまみ付）1点、無蓋高杯2点、長頸壺1点が出土した。

須恵器

杯蓋 A₁ (6-1) 半扁球状の天井に、外下方にのびる口縁がつく。口縁端部は丸い。天井の1/3ほどを粗く篋削りしている。焼成は良く、青灰色を呈する。

杯身 A₂ (6-2~4) 半扁球状の体部に、短く内傾する立ちあがりをもつ口縁がつく。



第26図 5号横穴出土土器実測図

底部は、1/3ほどを粗く篋削りしている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

杯身 A₃ (6-5) やや平底で、外上方へのびる体部に短い立ちあがりをもつ口縁がつく。底部は、篋切り未調整のままである。焼成は良く、青灰色を呈する。

蓋 C₂ (6-7) 頂部に小さく、やや扁平なつまみのある蓋で、体部に不明瞭な稜をもつ。口縁端部は、比較的丸い。つまみの中央はやや凹んでいる。天井は、1/3ほど粗く篋削りされている。焼成は不良で、灰白色を呈する。

無蓋高杯 A (6-6・8) 平底で、直口気味に立ちあがる体部にやや外反気味の口縁をもつ杯部に、長脚二段透孔の脚部がつく。杯部に稜をもち、また、1条の凹線をもつ。脚中央に1~2条の凹線、脚裾にも1条の凹線をもつ(6)。脚端には、垂直な面をもつ。焼成は良好で、青灰色を呈する。

長頸壺 C (6-9) やや外反気味にのびる口頸部に、肩の張る体部がつく。底部は平らで、体部下半を粗く篋削りしている。また口頸部に、2条の凹線がある。焼成は良好で、青灰色を呈する。

⑥7号横穴

7号横穴からは、須恵器の杯蓋1点・杯身3点・蓋(つまみ付)5点・無蓋高杯2点・台付長頸壺3点が出土している。また、墓道埋土中から、土師器の皿1点、須恵器の蓋(つまみ付)1点・壺片が出土した。

須恵器

杯蓋 A₃ (7-8) 狭い平らな天井部で、外下方にのびる体部に、丸くおさめた口縁がつく。天井は、粗く篋切りし未調整のままである。焼成は良く、淡青灰色を呈する。

杯身 A₃ (7-9) 平底で、外上方にのびる体部に短い立ちあがりの口縁をもつ。口縁受部は水平な面をなす。底部は篋切りのままである。焼成は良く、淡青灰色を呈する。

杯身 A₄ (7-10・11) やや平底で、外上方にのびる体部に極めて短い立ちあがりをもつ口縁がつく。底部は、篋切り未調整のままである。焼成は良好で、青灰色を呈する。

蓋 B₂ (7-1~5) いずれも頂部に小さな宝珠状のつまみをもち、下方に短くのびるかえりのある蓋である。天井部は、1/3ほど粗く篋削りされている。口縁端部内側は、水平な面をなす。また、体部には回転などによる弱い屈曲をもつ。焼成は良好で、青灰色を呈する。

無蓋高杯 B (7-6・7) 平底で、やや外傾してひろく杯部に、低い脚部がつく。杯部には稜があり、脚中央にて2条の凹線がある。脚部は下方にやや突出し、垂直な面をもつ。焼成は良好で、青灰色を呈する。

台付長頸壺 B₁ (7-13) 小形の壺で、やや外反気味にのびる口頸部に、肩のはる体部

を持ち、透孔がなく稜のある脚部がつく。体部中央に2条の凹線があり、その間に篋による斜線文が施されている。体部下半は、粗く篋削りされている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

台付長頸壺 B₂ (7-12・14) いずれも稜をもたず、外下方に直線的にひろく脚台をもつ壺で、12には円形透孔(3方向)がある。12は、やや外反気味にのびる口頸部に、弱く肩のはる体部と先述の脚台がつく。体部中央と口頸部には2条の凹線が施されており、体部の凹線間には篋による斜線文がつく。14は、外反気味の口頸部に、肩のはる体部、外下方に大きくひろく脚台がつく。脚端は、内側にやや突出している。体部に1条の凹線がある。12・14とも、体部下半は篋削りされている。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

⑦ 8号横穴

8号横穴からは、土師器の壺1点、須恵器の杯身1点・杯(台付)1点・杯1点・杯(高台付)1点・無蓋高杯1点・台付長頸壺1点が出土した。

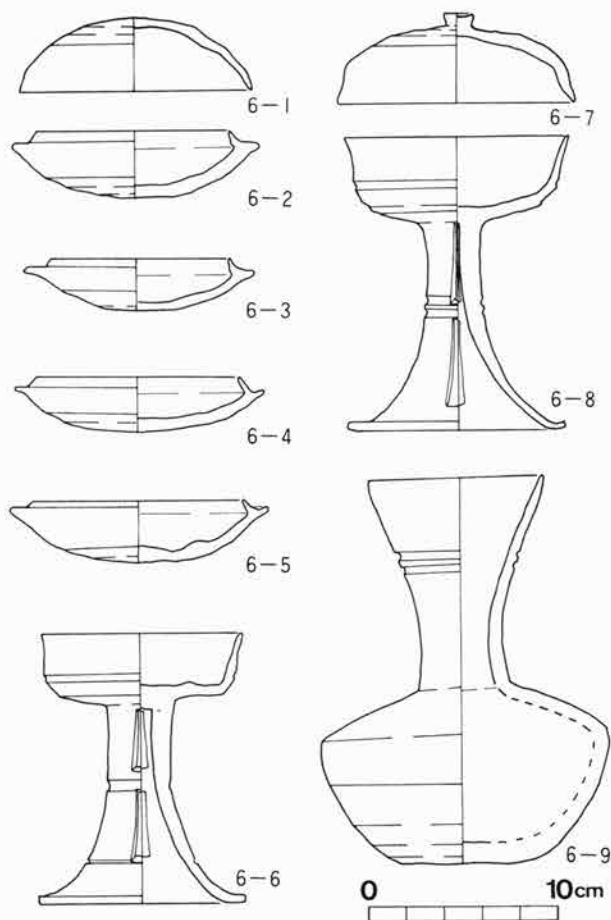
土師器

壺(8-7) 球形の体部に、「く」字形に外反する口縁がつく。体部上半・内面下半は刷毛目調整、体部下半は粗く篋削りされている。内面上半に指押さえ痕、底部に黒斑がみられる。焼成は良好で、褐色を呈する。

須恵器

杯身 A_i (8-1) 丸底で、半球状をした体部に、やや短く内傾する立ちあがりをもつ口縁がつく。底部は、1/3ほど粗く篋削りされている。焼成は良好で、淡青灰色を呈する。

杯 C_i (8-2) 平底で直口



第27図 6号横穴出土土器実測図

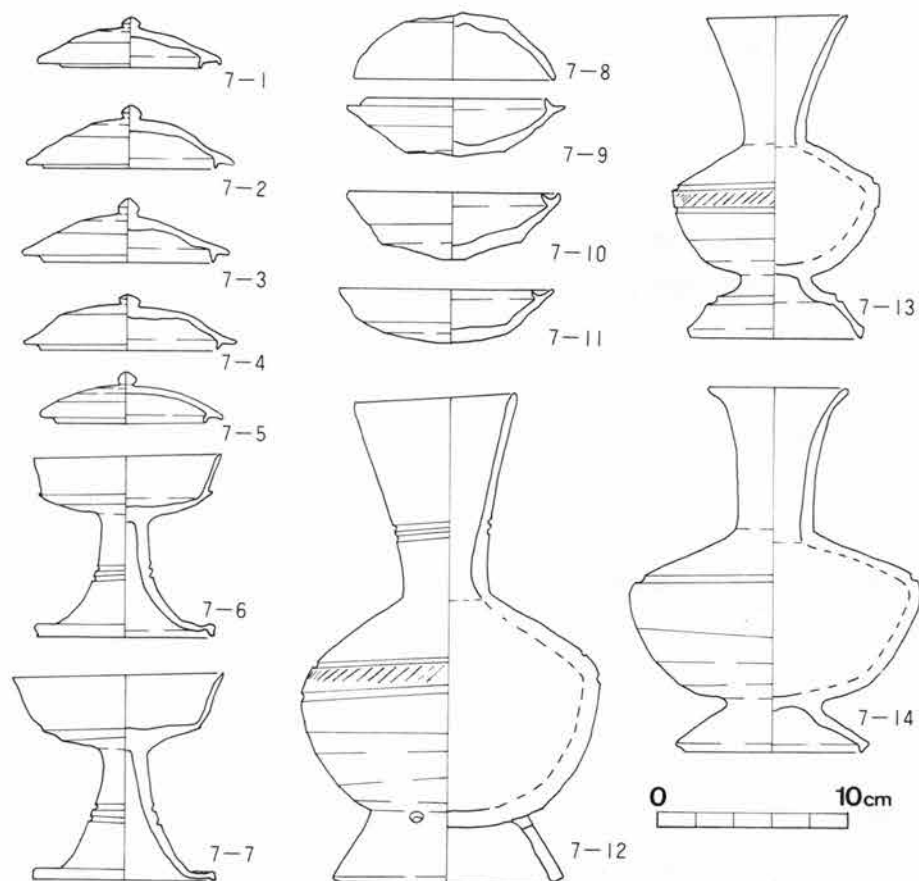
気味に立ちあがる体部に、外下方に開く台がつく。体部には、1条の凹線が施されている。底部は、篋削りされている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

杯 B₂ (8-3) 平底で、外上方にのびる体部がつく。底部は、篋切りしたままである。焼成は良く、淡青灰色を呈する。

杯 C₂ (8-5) 高台のつく杯で、平底で、外上方に開く体部をもつ。高台は、ややふんばり気味である。焼成は良好で、青灰色を呈する。

蓋 B₄ (8-4) 頂部に扁平な宝珠状のつまみをもつ蓋で、口縁端が下方に短くのびる。天井部は篋削りされている。焼成は良好で、青灰色を呈する。出土状況から、5の杯とセット関係にあると考えられる。

無蓋高杯A (8-6) 平底で、直口気味に立ちあがる杯部に、いわゆる長脚二段透孔の脚部がつく。杯部には、明瞭な稜をもち、篋による斜線文が施されている。脚中央に2条、



第28図 7号横穴出土土器実測図

脚裾に1条の凹線があり、脚端は垂直な面をなす。焼成は良好で、青灰色を呈する。

台付長頸壺 A₁ (8-9) 丸い体部に外上方にのびる口頸部と、やや高く方形の二段透孔(3方向)をもつ脚台がつく。口頸部・体部中央にそれぞれ2条の凹線があり、その凹線間に列点文が施されている。また、脚台にも2条の凹線がある。体部下半は、粗く篋削りさされている。焼成は良好で、青紫色を呈する。

⑧横穴の埋土中出土の土器

横穴からは玄室や墓道の床面出土の土器のほかに、墓道の埋土中から出土したものがある。

2号横穴からは、土師器の皿(2-18)が墓道埋土中位から出土している。平底で、ゆるやかに立ちあがる体部に内側へやや肥厚する口縁部がつく。底部は篋削りで、口縁・内面はなで調整である。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

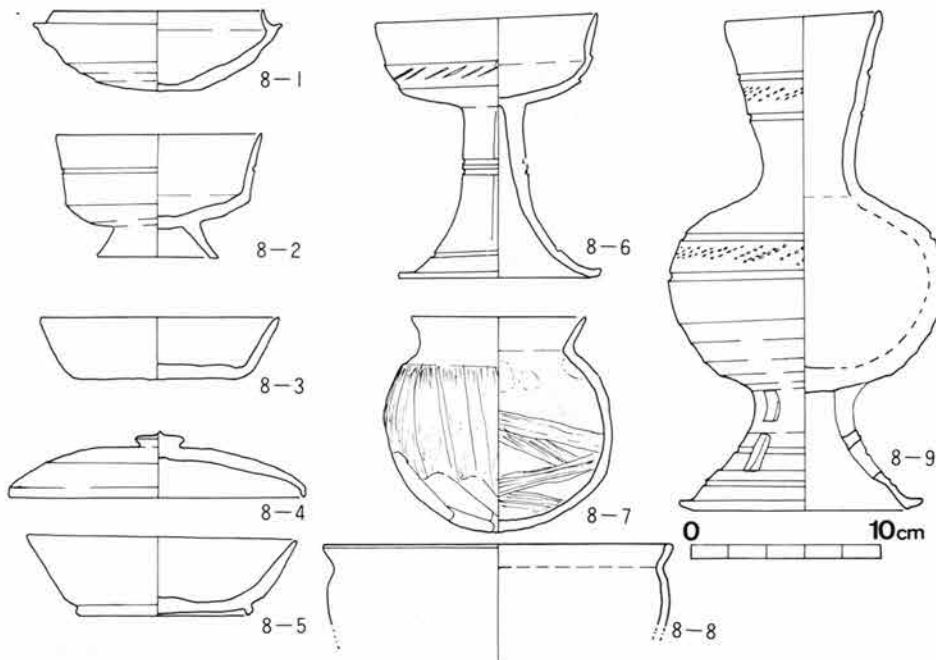
3号横穴からは、須恵器の杯身(3-14)・杯蓋(3-15)が破片で出土している。杯身は、狭い平底で、やや内湾気味に立ちあがる体部に短く内傾し立ちあがる口縁がつく。底部は、粗い篋削り調整が施されたままである。杯蓋も、狭い平らな天井から内湾気味にのびる体部・口縁がつく。天井は、粗く篋削りされ未調整のままである。杯身・杯蓋とも焼成は良好で、灰褐色を呈する。

4号横穴からは、土師器の皿(4-22)と須恵器の大甕(4-23)が出土した。甕は、墓道の中位から、1個体分が破砕された状態で出土した。^(注48)土師器の皿は、平底で、ゆるやかに立ちあがる体部に内側へ肥厚する口縁がつく。底部は、篋削りされ、口縁部・内面はなで調整である。形態も調整もともに2-18の土師器の皿に類似する。焼成は良好で、褐色を呈する。甕は、口径23.5cm・器高51.5cmの大きさで、最大径が体部の上半にある。体部は比較的丸く、外反する口頸部がつく。口縁部直下に突線が1条あり、口縁端面は内傾している。内面には同心円叩き目、外面には平行叩き目がそれぞれ施されている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

5号横穴では、須恵器の擬宝珠つまみ付の蓋2点(5-14・17)と高台付杯(5-15)と平瓶(5-16)が出土した。蓋(5-17)は、扁平な擬宝珠つまみを頂部に付し、やや笠状の形態である。口縁部は、やや垂直な面をなす。蓋(5-14)は、扁平な擬宝珠つまみをもち、形態は扁平で、口縁端が下方にやや突出する。いずれも焼成は良く、淡青灰色を呈する。杯(5-15)は、平底で高台がつき、外上方へ直線的にのびる体部がつく。やや深い杯である。焼成は良好で、青灰色を呈する。平瓶(5-16)は、墓道埋土上位で出土し、平底に高台がつき、稜をもつ体部に断面方形の把手をつけ、体部径1/2ほどの口径をもつ口縁部がついている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

6号横穴では、土師器の皿と甕の破片が墓道埋土中から出土した。土師器の皿（6-10）は、平底で、ゆるやかに立ちあがる体部にやや外傾した面をもつ口縁がつく。焼成は良く、淡赤褐色を呈する。甕（6-11）は、墓道埋土中位から炭と共に出土した。口頸部の破片で、ゆるやかに外反する。内外面は刷毛目調整で、口縁端部は内側に肥厚する。焼成は良好で、褐色を呈する。

7号横穴では、墓道裾埋土中から須恵器の壺片（7-15）、墓道埋土中位から須恵器の杯2点（7-16・17）・蓋（7-18）、土師器の皿（7-19）がそれぞれ出土した。^(注49) 壺（7-15）は、口頸部から肩部にかけての破片で、口縁直下に2条の凹線があり、肩に把手の痕跡がつく。内面には、いわゆる車輪文^(注50)が施されている。杯身（7-16）は、平底で、外方へ開く体部がつく。底部と体部の境に1条の凹線をもつ。底部は、篋切り未調整のままである。杯身（7-17）は、平底で直口気味に体部が立ちあがる。口縁端部は丸くおさめている。底部は、篋切り未調整のままである。蓋（7-18）は、平らな天井の中央に扁平なつまみがつき、極めて短いかえりがつく口縁をもつ。蓋も、先の杯身2点も焼成は良好で、青灰色を呈する。土師皿（7-19）は、平底で、やや外反気味にのびる体部に内傾気味の口縁端がつく。口縁内面に弱い凹線があり、内面に放射状の暗文がつく。底部は、篋削りされ、体部等はな



第29図 8号横穴出土土器実測図

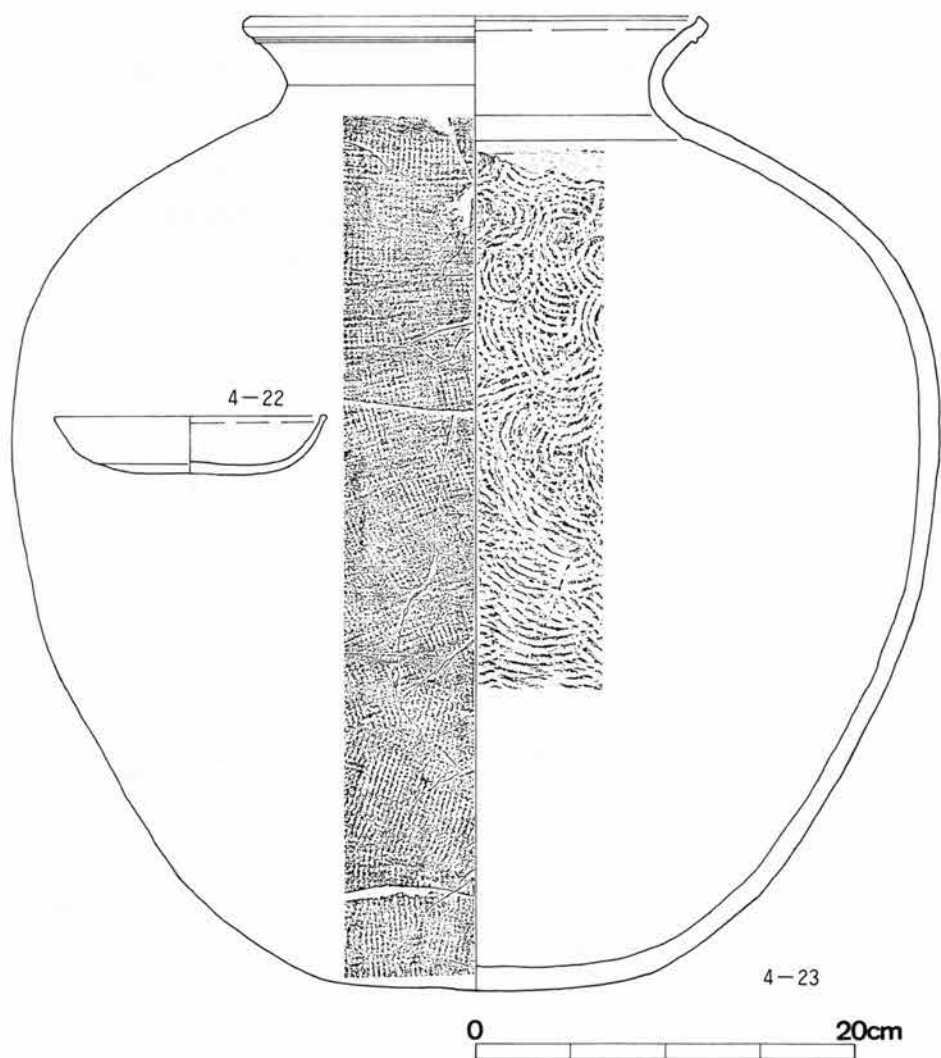
で調整である。焼成は良好で、淡赤褐色を呈する。

8号横穴では、杯（8-3）と鉢（8-8）が墓道埋土中から出土した。鉢（8-8）は、焼成は不良で、灰褐色を呈する。（第29図参照）

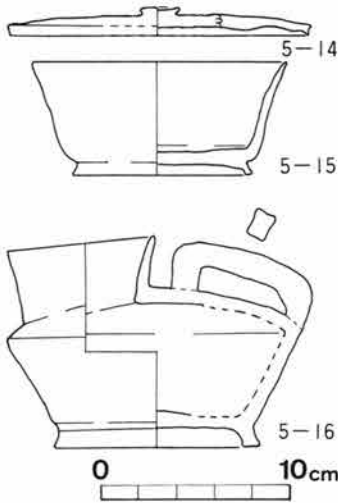
9号横穴からは、土器は全く出土しなかった。

⑨炭充填土坑・方形周溝遺構の出土土器

炭充填土坑では、須恵器の杯蓋（S-1）、杯身（S-2・S-3）が出土した。杯蓋（S-1）は、丸い天井に内湾する口縁がつく。焼成は良好で、灰褐色を呈する。杯身（S-2）は、やや平底で、外上方にのびる体部に、極めて短い立ちあがりをもつ口縁がつく。底



第30図 4号横穴墓道埋土出土土器



第31図 5号横穴墓道埋土出土土器

部は、篋切り未調整である。焼成は良く、灰褐色を呈する。^(注51) S-1・S-2はセット関係であると思われる。杯身(S-3)は、平底で、直口で端部を丸くおさめている。体部には、1条の凹線がある。底部は、篋切り未調整のままである。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

方形周溝遺構では、その周溝埋土から杯蓋(H-1)、杯身(H-2・H-3)が出土した。杯蓋(H-1)は、半扁球状の形態で端部を丸くおさめている。焼成は良好で、青灰色を呈する。杯身(H-2)は、短い立ちあがりをもつ口縁片で、底部は篋削りで調整したと思われる。焼成は良好で、青灰色を呈する。杯身(H-

3)は、半扁球状の体部に、内傾してのびる立ちあがりをもつ口縁がつく。底部には篋削りが施されている。焼成は良好で、青灰色を呈する。

⑩自然流路跡からの出土土器・石器

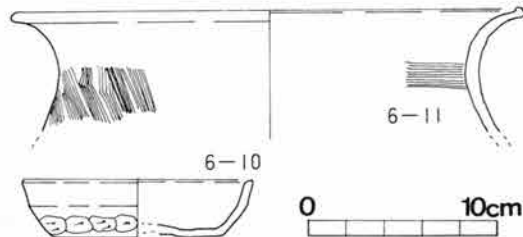
石器(1)は、磨製の石包丁片で、5mm前後の刃部がつく。石包丁片には、両面穿孔と思われる穴の痕が2か所ある。弥生土器(2)は、壺の口縁片で、茶褐色を呈する。口縁端面には、凹線が6条あり、竹管文の施された円形の浮文がつく。その胎土等から、「河内系の土器」^(注52)であろうと思われる。

⑪鉄刀・鉄小刀・金環・鉄鏃

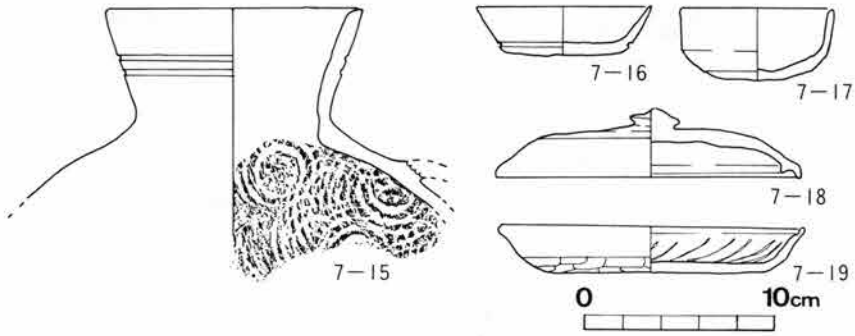
鉄刀は、2号横穴と9号横穴から出土している。2号横穴の鉄刀は、残存長29cm・刀幅2.5cmで、かなり銹蝕が進行している。鞘尻金具も伴って出土しており、その内部には木質の痕跡が認められる。9号横穴の鉄刀は、一部分、刀が欠損しているが、残存長52cm・刀幅3.8cmを測る。銅製の責め金具がついており、また、つり金具・鞘尻金具が鉄刀に接して出土した。

鞘尻金具は、幅3.6cm・長さ4.6cmで内部に木質の痕跡が認められる。

鉄小刀は、2号横穴出土のもので、長さ8.3cm・刀幅0.8~1.2cmで、刀の部分に木質が付着している。把部の長さは、2.8cmである。



第32図 6号横穴墓道埋土出土土器



第33図 7号横穴墓道埋土出土土器

金環は、2号横穴で1点、4号横穴で2点、9号横穴で1点出土している。銅製の環に金を付着させているが、いずれも金が剥離して、錆びた銅環部がみられる。大きさは、2号のものが径 2.3 cm、4号のものは2点とも径 3.0 cm、9号のものは径 2.6 cm である。

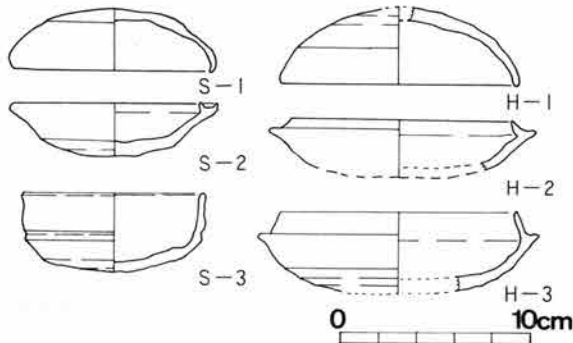
鉄鏃は、2点が4号横穴から出土している。いずれも著しく錆びていて、観察が困難である。

(3) 横穴出土土器の検討

出土遺物のほとんどは、土師器・須恵器などの土器である。横穴の築造時期や存続期間等の決定に関連して、各横穴および炭充填土塚からの出土土器について、須恵器を中心に検討を加えたい。

①形態の分類^(注53)

すでに出土土器の説明の項で、器種ごとの形態の分類を示したが、この項でそれらをまとめて概説することにする。分類は、大きくA・B・C……などアルファベットを用い、細別



第34図 炭土塚・方形周溝出土土器

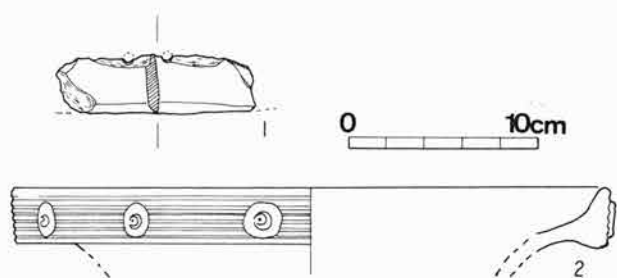
する際に小文字の数字を A₁・A₂…等と使う。以下、須恵器からはじめる。

須恵器

杯身・杯 大きく3類に分けられる。

A類 低い立ちあがりを口縁にもつ杯身。

A₁—底部の1/2ほどを粗く篋削



第35図 自然流路跡出土石器・土器

りし、やや深いタイプで半扁球状のもの。

A₂—底部の1/2~1/3ほどを粗く篋削りし、やや浅いタイプで半扁球状のもの。

A₃—底部を篋切りし、浅いタイプで平底のもの。

A₄—極めて短い立ちあがりをもち、底部を篋切りしたタイプで平底のもの。

B類 立ちあがりがなく、平底の杯。

B₁—小形でやや深く、外反気味の口縁をもつタイプ。

B₂—やや浅く、外上方にやや直線的に開くタイプ。

C類 高台をもつ杯。

C₁—比較的高い高台をもつタイプで、直口気味のもの。

C₂—低い高台をもつタイプで、高台がやや外方にふんばった状態のもの。

C₃—低い高台をもつタイプで、高台の断面が台形をなすもの。

杯蓋・蓋（つまみ付） 大きく3類に分けられる。

A類 つまみをもたず、杯身Aに対応する蓋。

A₁—天井部の1/3ほどを粗く篋削りし、半扁球状のタイプ。

A₂—天井部を篋切りし、やや平らな天井部をもつタイプ。

A₃—A₂と同様の形態としてもよいが、口縁端がやや内傾するタイプ。

B類 宝珠状のつまみをもつ蓋。

B₁—乳頭状のつまみをもち、内下方にのびるかえりをもつタイプ。

B₂—いわゆる宝珠つまみをもち、下方に短くのびるかえりをもつタイプ。

B₃—扁平な擬宝珠状のつまみをもち、極めて短いかえりをもつタイプ。

B₄—扁平な擬宝珠状のつまみをもち、かえりをもたないタイプ。

C類 扁平で中央の凹んだつまみをもつ蓋。

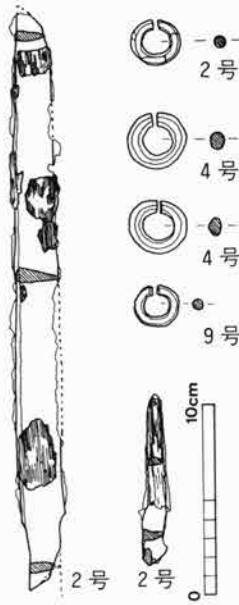
C₁—稜が明瞭で、凹線をもつタイプ。

C₂—稜が不明瞭で、凹線をもたないタイプ。

有蓋高杯 大きく2類に分けられる。

A類 いわゆる「長脚二段透孔」の脚部をもち、短く内傾する立ちあがりをもつ高杯。

A₁—杯下半1/2ほどを粗く篋削りし、脚端を丸くおさめたタイプ。



第36図 横穴出土鉄器・金環



第37図 SK 02 出土土器

A₂—杯下半1/2~1/3ほどを粗く篋削りし、脚裾に凹線をもち、脚端に垂直な面をもつタイプ。

A₃—杯下半1/3ほどを粗く篋削りし、脚端に外傾する面をもつタイプ。

B類 低脚で透孔をもたず、極めて短い立ちあがりをもつ高杯。脚端は、やや下方に突出し、面をもつタイプ。

無蓋高杯

A類 いわゆる「長脚二段透孔」の脚部をもち、杯部に明瞭な稜・凹線をもつタイプで、脚裾に凹線、脚端に垂直な面を持つもの。

B類 低脚で透孔をもたず、杯部に稜をもつタイプで、脚端がやや下方に突出し面をなすもの。

C類 低脚で透孔をもたず、杯蓋を反転させて杯部としたもの。

C₁—杯下半を篋削りし、脚端が丸いタイプ。

C₂—杯底部を篋削りし、脚端がやや下方に突出し面をなすタイプ。

長頸壺 (台付・無台) 大きく3類に分けられる。

A類 方形の透孔をもつ脚台のつくもの。

A₁—2段の方形透孔(3方向)をもち、体部の丸いタイプ。

A₂—1段の方形透孔をもち、比較的丸い体部のタイプで、稜をもつもの。

B類 方形の透孔をもたない脚台のつくもの。

B₁—稜をもち、やや肩のはる体部をもつタイプ。

B₂—稜のない脚台がつき、肩のはる体部をもつタイプ。

C類 脚台をもたず、肩のはる体部をもつもの。

平瓶 大きく2類に分けられる。

A類 体部が丸く、高台をもたないもの。

B類 体部に稜があり、高台・把手をつけるもの。

土師器

杯 大きく5類に分けられる。

A類 丸底で、直口のタイプで、底部を篋削りするもの。

B類 丸底で、外反する口縁をもつタイプで、底部を篋削りするもの。

C類 丸底でやや外反する口縁をもつタイプで、底部に指押さえ痕の残るもの。

D類 平底で、底部に指押さえ痕の残るタイプ。

E類 平底で、底部を篋削りするタイプ。

以上のように、須恵器をはじめとして土師器の一部について形態分類した。分類からのぞいたものとして、土師器の壺・皿・椀・高杯・甕、須恵器の台付短頸壺・甕があるが、この後の編年の項で少しふれたい。

②出土土器の編年

本項では、先項で形態分類した出土土器の編年を試みるが、編年にあたっては、田辺昭三氏、中村 浩氏の須恵器の研究を基本に、須恵器による時期区分を行いたい。それにあたっては、須恵器の器形のうち出土点数の多かった杯類・高杯・長頸壺を参考とした。

I期 田辺編年の TK 43, 中村編年のⅡ型式第4段階にあたる時期。

須恵器——有蓋高杯 A₁, 長頸壺 A₁

II期 田辺編年の TK 209, 中村編年のⅡ型式第5段階にあたる時期。新古の2段階に分かれそうである。

<古段階>

須恵器——有蓋高杯 A₂, 無蓋高杯 A, 杯身 A₁, 長頸壺 A₂

<新段階>

須恵器——有蓋高杯 A₃, 無蓋高杯 C₁, 杯身 A₂, 長頸壺 B₁, 台付短頸壺, 杯蓋 A₁・B₁・C₁

III期 田辺編年の TK 217, 中村編年のⅡ型式第6段階～Ⅲ型式第1段階にあたる時期。新古の2段階に分かれそうである。

<古段階>

須恵器——杯身 A₃, 長頸壺 B₂, 杯蓋 A₂・B₂・C₂, 平瓶 A

<新段階>

須恵器——有蓋高杯 B, 無蓋高杯 B・C₂, 杯身 A₄・B₁・C₁

IV期 田辺編年の TK 46～48, 中村編年のⅢ型式第2段階～Ⅳ型式第1段階にあたる時期。新古の2段階に分けられる。

<古段階>

須恵器——杯 B₂・C₂, 蓋 A₃・B₃, 長頸壺 C

<新段階>

須恵器——杯 C₃, 平瓶 B, 蓋 B₄

以上のように、須恵器で大きくⅠ～Ⅳ期、細かく7段階に分けられると考える。その実年代については、断定しがたいが、一応の目安としては田辺昭三氏の編年研究^(註55)によるとする。それによれば、以下のとおりである。

- Ⅰ期 6世紀後葉
- Ⅱ期 7世紀前葉
- Ⅲ期 7世紀中葉前半
- Ⅳ期 7世紀中葉から8世紀前葉

7. 横穴群の検討

(1) 横穴の編年

前章における遺物、とりわけ須恵器の検討とその編年をもとにして、各横穴の編年を試みると以下のようにになると考えられる。

Ⅰ期（6世紀後葉） 3号横穴・8号横穴

Ⅱ期（7世紀前葉）

<古段階> 3号横穴（追葬）・4号横穴・5号横穴・6号横穴・8号横穴（追葬）

<新段階> 2号横穴・3号横穴（追葬）・4号横穴（追葬）・6号横穴（追葬）・7号横穴・8号横穴（追葬）・9号横穴

Ⅲ期（7世紀中葉）

<古段階> 3号横穴（追葬）・4号横穴（追葬）・5号横穴（追葬）・6号横穴（追葬）・7号横穴（追葬）

<新段階> 3号横穴（追葬）・4号横穴（追葬）・7号横穴（追葬）

Ⅳ期（7世紀後葉から8世紀前葉）

<古段階> 6号横穴（追葬）・7号横穴・8号横穴

<新段階> 5号横穴・8号横穴

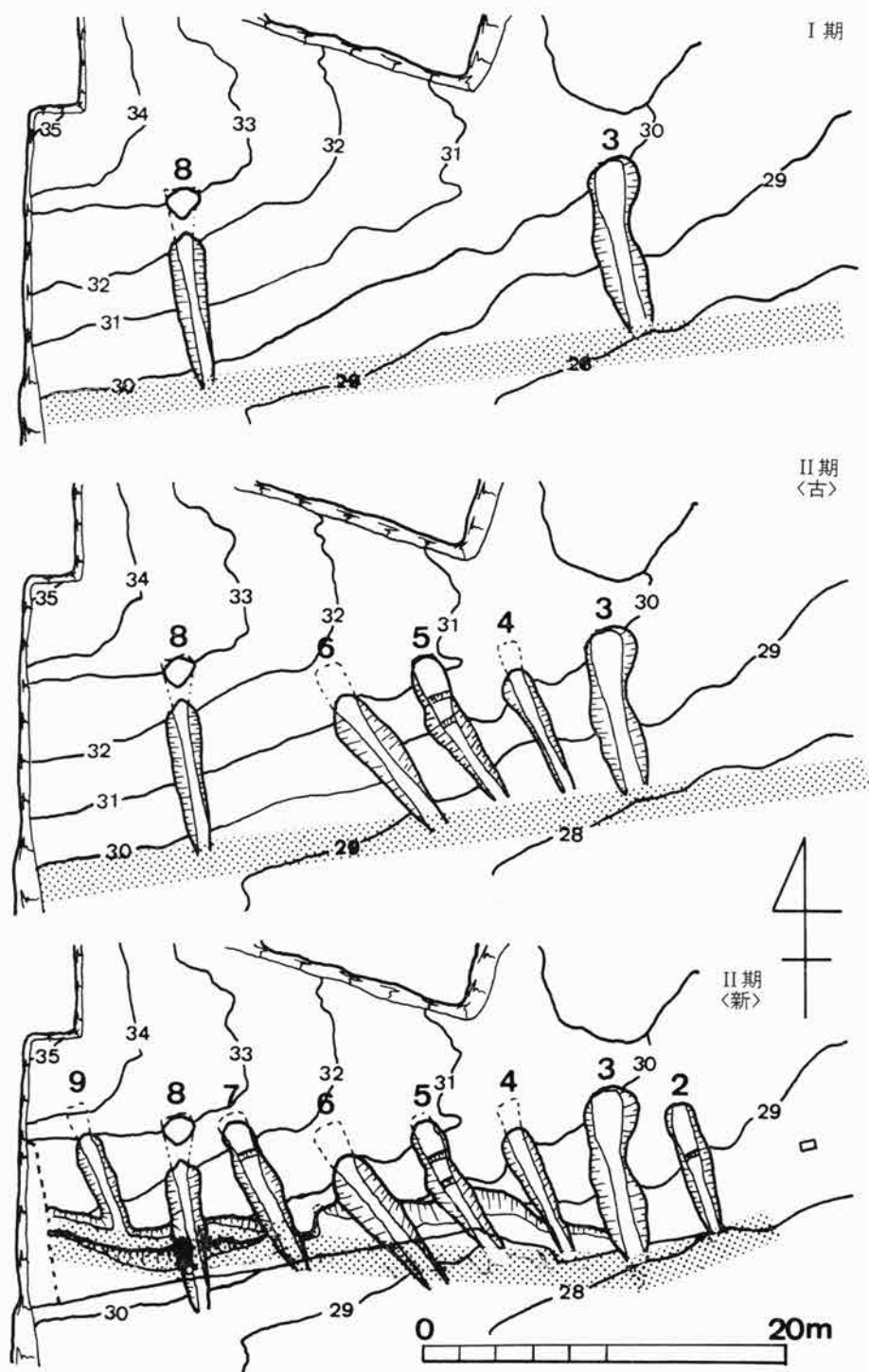
Ⅴ期（11世紀前半） 3号横穴（再利用）

以上のように、横穴の編年を考えることができるが、いくつかの点を指摘できる。

① 8基の横穴群の形成は、Ⅰ期（6世紀後葉）に始まり、Ⅱ期<新段階>（7世紀前葉）に終了していること。3段階にわたって形成されたこと。

② 追葬は、Ⅱ期<古段階>（7世紀前葉）からおこなわれ、Ⅲ期（7世紀中葉）からⅣ期<古段階>（7世紀後葉）まで継続された可能性があること。

③ 3号横穴と8号横穴は、比較的古い時期に築造され、また長い間にわたり使用されてい



第38图 横穴群变迁图

ること。さらに3号横穴の場合、V期（11世紀前半）においていわゆる再利用がおこなわれていること。

④2号横穴と9号横穴の場合、一回限りの埋葬で追葬がなされなかったこと。

以上のようなことが言える。

(2) 横穴群の構成

横穴群の編年により、おおまかではあるが、その構築のあり方が判明した。比較的等間隔に並ぶ横穴も、構築順序は比較的雑然としたものであると思われる。

横穴群をいくつかの群に分けるとすれば、3号横穴と2号横穴・4号横穴、6号横穴と5号横穴、8号横穴と7号横穴・9号横穴の3群に分けられると思われる。それらは、横穴の形態や編年から考えられるが、3群の中では3号横穴を中心とする群、8号横穴を中心とする群が長い間利用されてきたことがわかる。

8. 周辺地区の調査

横穴群の周辺地区は、第2次調査として実施した。調査対象地が広大なため、適宜トレンチを設定して調査し、遺構の確認された地区については拡張する方法をとった。その結果、若干の遺構と調査地の旧地形を確認することができた。以下、その概略を報告することにする。(第2図参照)

(1) 各地区の調査

①A地区の調査

A地区は、調査地の北部にあたり、横穴群の位置する丘陵支脈の北西の丘陵斜面である。南西から北東にむかって下る斜面で、褐色砂礫層がベースとなっている。遺構としては、SK 01・SK 02 がある。

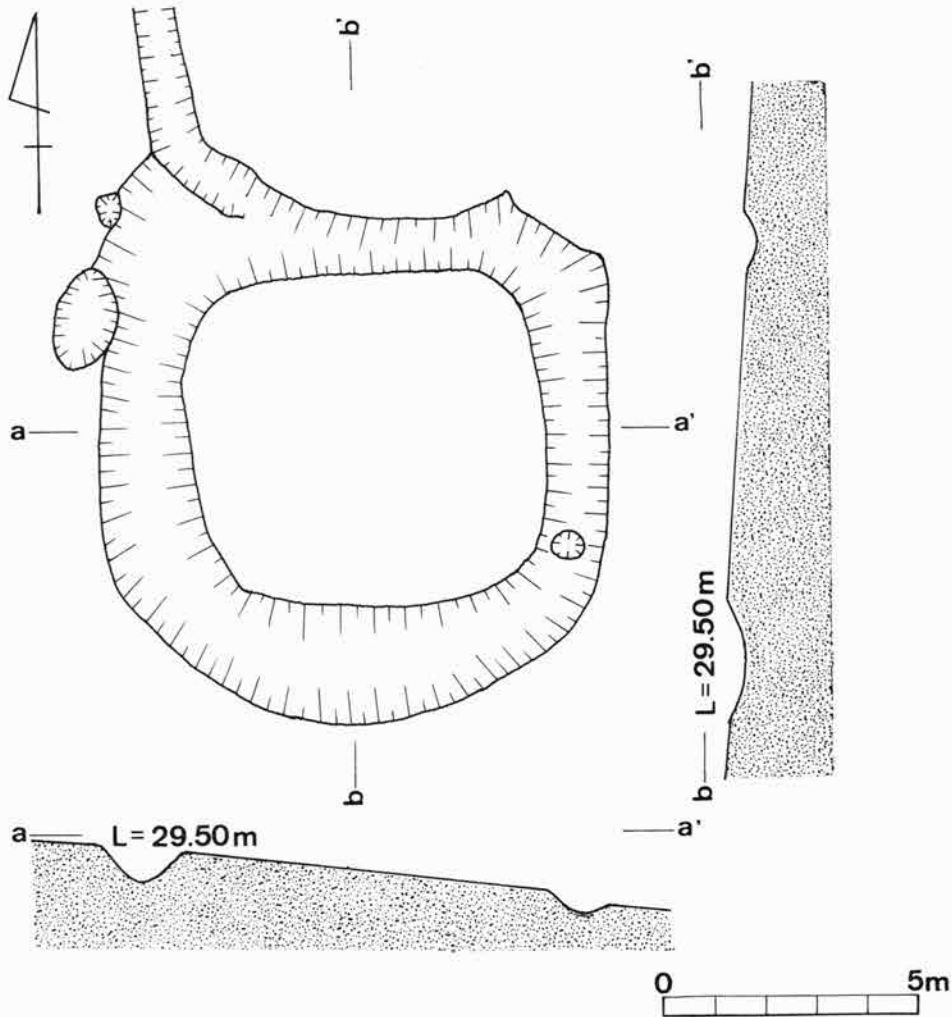
SK 01

長方形の土塚で、長辺1.8m・短辺0.8m・深さ0.3m前後を測る。褐色砂礫層を掘り込んでおり、埋土として赤褐色土があった。遺物はなく、時期・性格とも判然としなかった。

SK 02

楕円形の土塚で、長軸2m×短軸1mを測り、深さ20cm前後である。いわゆる舟底状の土塚で、赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として暗茶褐色土があった。遺物は、杯身1点(第37図)が出土した。それによれば、この土塚は、古墳時代後期の土塚墓である可能性が高いと考えられる。

出土遺物の杯身は、平底で外上方にのびる体部に短い立ちあがりをもつ口縁がつく。底部



第39図 方形周溝遺構実測図

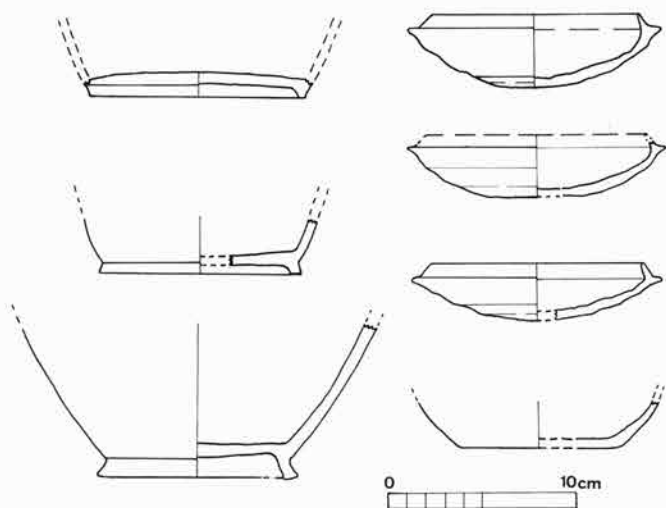
は、粗く篋切りされたままである。焼成は良好で、青灰色を呈する。

②B地区の調査

B地区は、調査地の北東部にあたり、横穴群の位置する丘陵支脈の北東斜面である。南西から北東にむかって下る斜面で、主として赤褐色粘質土をベースとしている。遺構としては、方形周溝遺構（第1次調査）・SD 01・SD 02 がある。

方形周溝遺構（第39図）

横穴群の北東方向の丘陵裾平坦面上の、東西南北を幅約1m前後の浅い溝によって区画された遺構である。赤褐色粘質土(部分的に茶褐色粘質土)を掘り込んでおり、埋土として暗褐



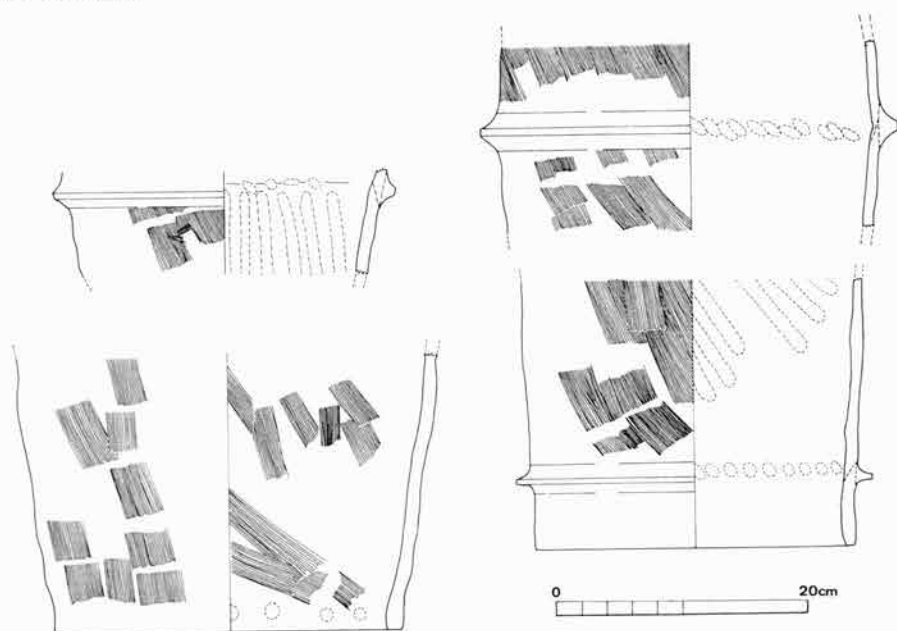
第40図 SD 01 出土土器

色土・暗茶褐色土が堆積している。西側の溝に沿って2つの楕円形の土坑が接しているが、遺物はなかった。また、北側の溝は、SD 01と切り合っており、その切り合い関係から方形周溝遺構→SD 01の先後関係が確認できる。出土遺物については、先述のとおりである。なお、遺構の性格については、方形周溝墓の可能性も

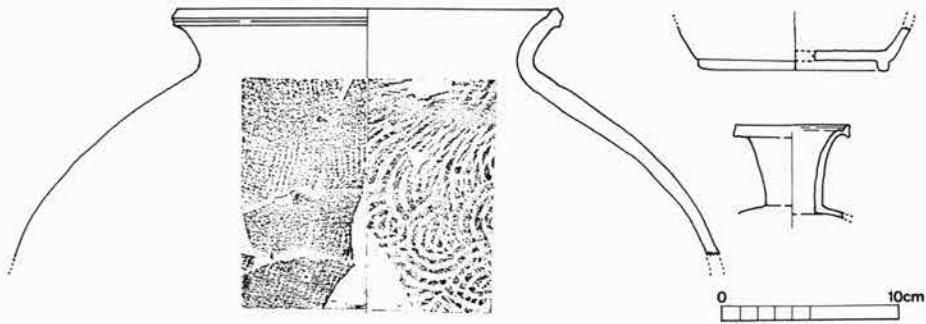
高いが、出土土器から推定される時期との間で若干の問題点もあるように思う。

SD 01

方形周溝遺構と切り合う溝で、ほぼ北方向にのびる。幅約0.6mの浅い溝である。赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として暗褐色土が堆積していた。埋土中から、須恵器片が出土した(第40図)。



第41図 SD 02 出土円筒埴輪

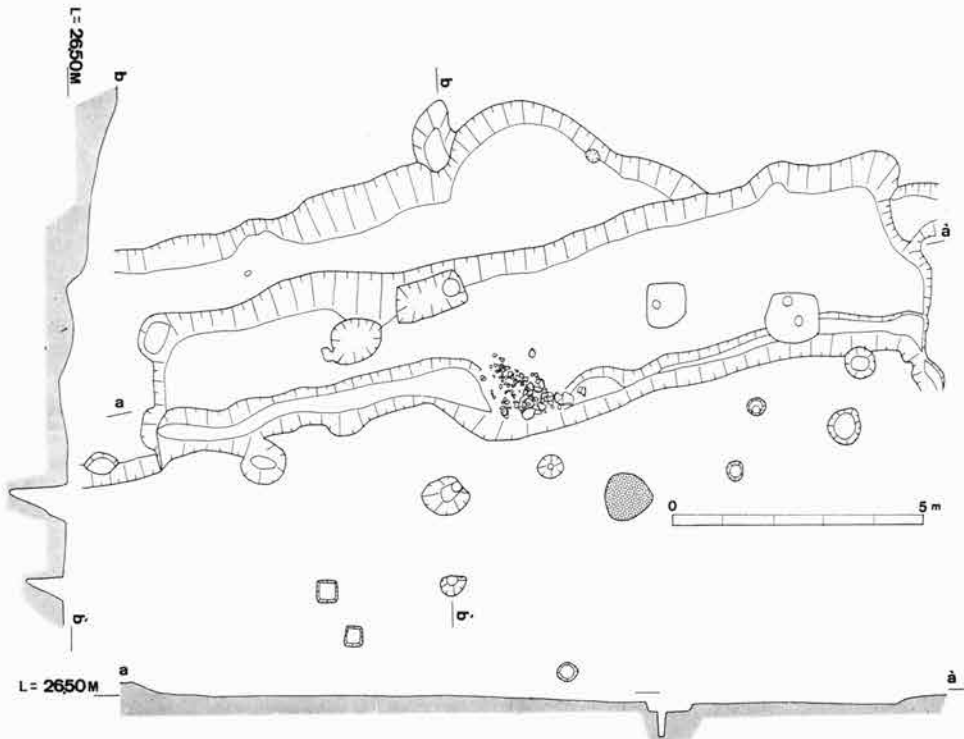


第42図 SD 02 出土土器

出土須恵器は、古墳時代後期の杯身片と、8世紀の杯（高台付）・壺底部等の破片である。

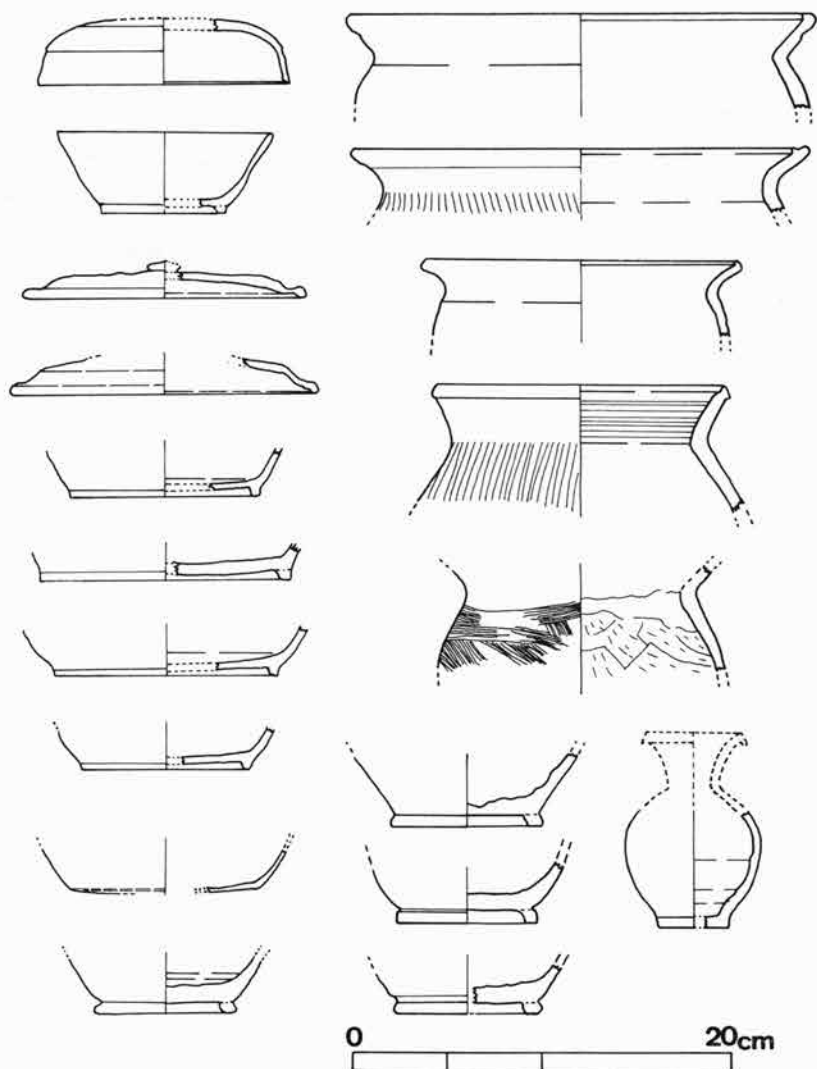
SD 02 (第43図)

方形周溝遺構の北東方向の平坦面上の、幅約6m・長さ(残存長)約15mほどの浅い溝である。赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として暗茶褐色土が堆積していた。溝底部や溝周囲からは、隅丸方形・円形の掘形をもつ柱穴が検出できたが、建物を推定しえなかった。溝中からは、須恵器片の他に、円筒埴輪片が出土した(第41・42図)。



第43図 SD 02 実測図

出土遺物である須恵器には、甕・杯（高台付）・壺等がある。甕は、やや胴張りの体部に「く」字形の頸部をもち、口縁端部は丸く肥厚している。外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目が施されている。壺は、球形の体部に外反気味にのびる口頸部がつく。口縁端は上下に拡張している。須恵器片は、大半が8世紀にはいるものである。円筒埴輪は、SD 02 の中央東岸付近で焼土とともにかたまって検出され、一部の破片にはススが附着していた。円筒埴輪は、そのタガの形から2種に分けることができる。1～3は、断面台形で突出度のやや低いもので、外面に縦刷毛および内面に縦刷毛・指押さえが認められる。4は、タガの断面



第44図 SD 03 出土土器

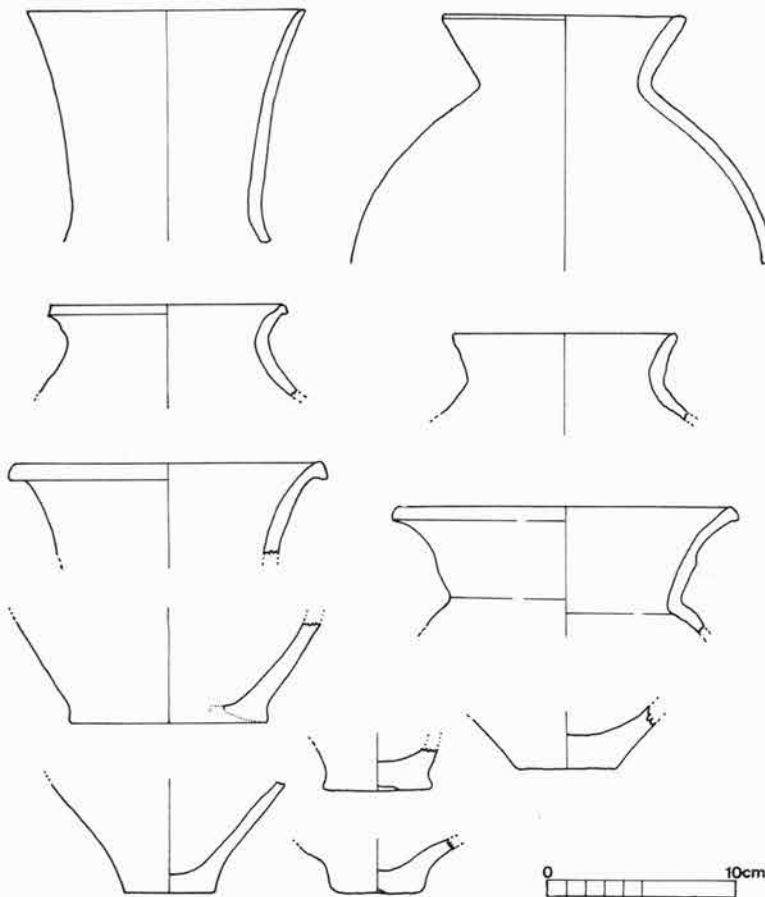
が長方形に近く突出度の高いもので、外面に縦刷毛および内面に指押さえが認められる。いずれも焼成は良好で、褐色を呈する。

③C地区の調査

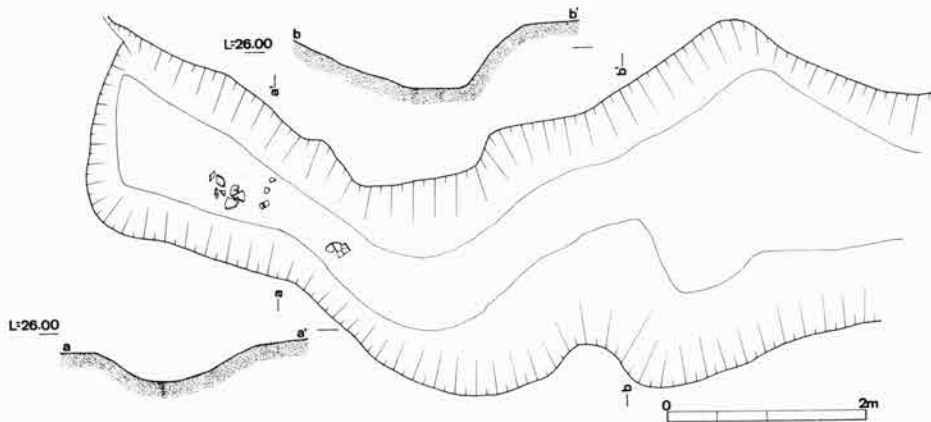
C地区は、調査地の東部にあたり、「L」字状にのびる丘陵支脈の稜線平坦面にあたる。その平坦面は、赤褐色粘質土をベースとしており、いくつかの遺構を検出した。溝 SD 03・SD 04・SD 05・SD 06、土壇 SK 03・SK 04・SK 05・SK 06 である。そして、遺構ではないが、SK 03・SK 04 の南約 10m の付近では、表土中から須恵質の円筒埴輪片が出土した。

SD 03

「L」字状にまがる浅い溝である。赤褐色粘質土を切り込んでおり、暗茶褐色土が埋土としてあった。埋土中からは、古墳時代の須恵器・土師器から奈良時代（8世紀後半）の須恵



第45図 SD 04 出土土器



第46図 SD 05 実 測 図

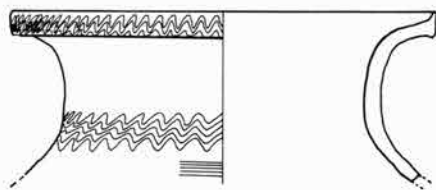
器・土師器の破片が出土した（第44図）。

SD 04

SD 03 の南にあり、「L」字状にまがる浅い溝である。溝の幅は一定しておらず、不整形である。赤褐色粘質土を切り込んでおり、暗茶褐色土が埋土としてあった。その埋土中からは、弥生土器片が出土した。土器はいずれも表面が痛んで剥落しており、文様・調整等は観察できなかったが、形態などから弥生後期の土器片と考えられる（第45図）。

SD 05（第46図）

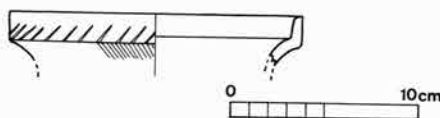
SK 05 の西側にあり、幅約2m・深さ0.6mを測る溝である。溝は、赤褐色粘質土を切り込んでおり、埋土は暗褐色粘質土である。その溝底部からは、弥生土器片が出土した。弥生土器は、壺の口縁の破片と甕の口縁片である。壺は、ゆるやかに外反する口頸部に垂直な面をもつ口縁端からなり、口縁端面と頸部に櫛描きの波状文が施されている。焼成は良好で、



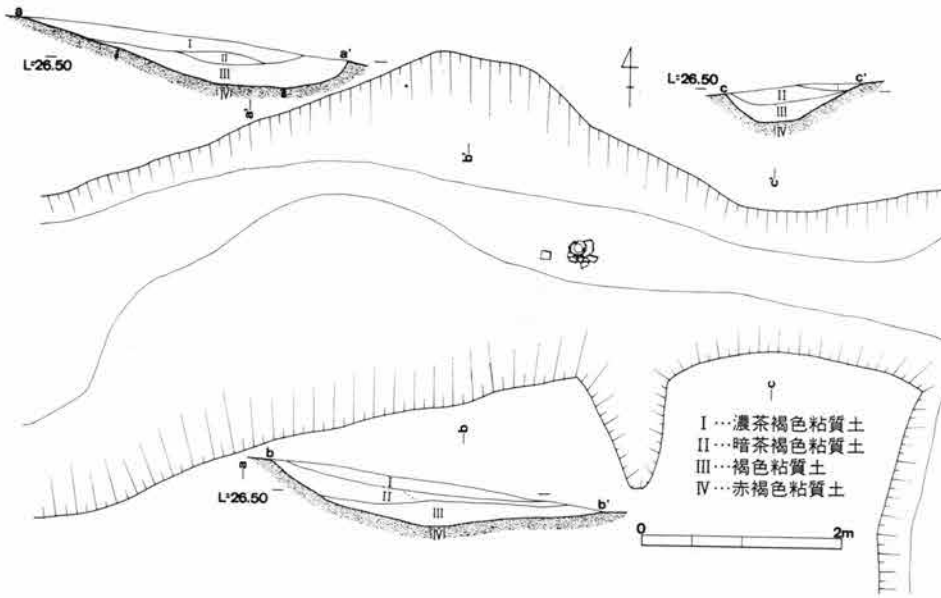
茶褐色を呈する。甕口縁片は、受け口状をしており、口縁端面に櫛様のもので刺突した斜線文が見られる。弥生中期。

SD 06（第48図）

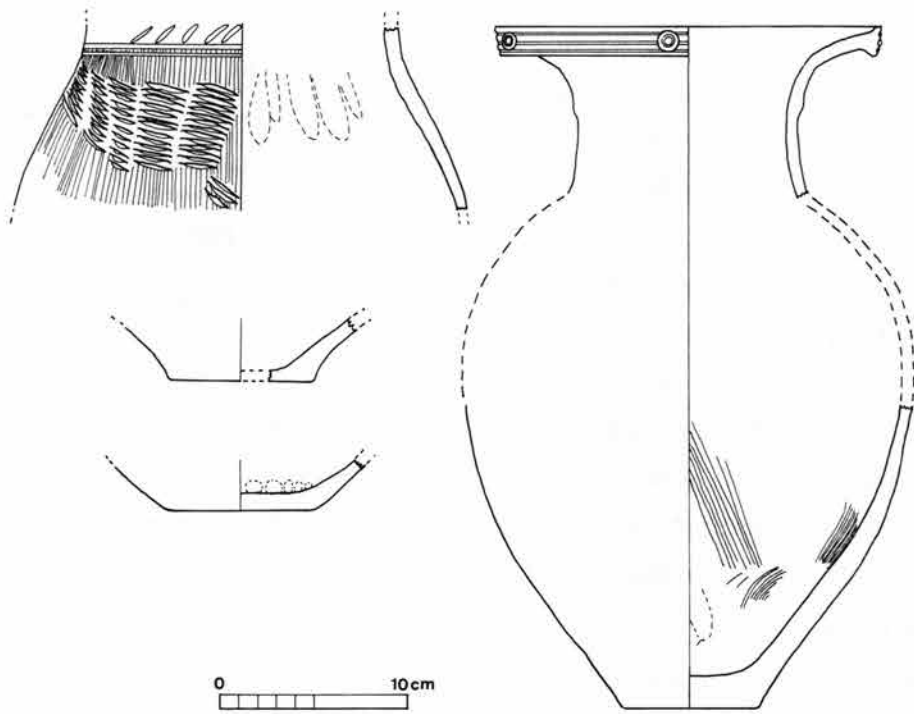
ほぼ東西に流れる溝で、幅約3.5m・深さ約0.4mを測る。溝は、赤褐色粘質土を切り込んでおり、埋土は3層からなり、土器はその下層（褐色粘質土）中と溝底部から出土した。土器は、弥生後期のもので



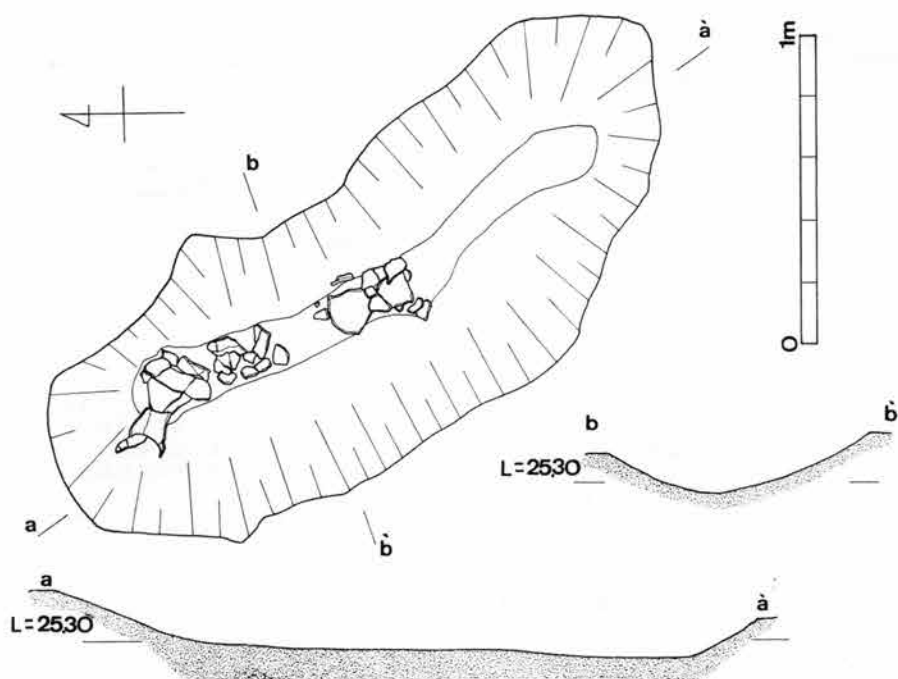
第47図 SD 05 出 土 土 器



第48図 SD 06 実 測 図



第49図 SD 06 出 土 土 器

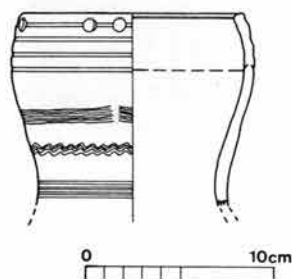


第50図 SK 03 実 測 図

と底部の破片である。壺は、平底で卵形の体部にゆるやかに外反する口頸部がつく。口縁端部は若干上下に拡張しており、端面に3条の凹線と竹管文を施した円形浮文がつく。焼成は不良で、茶褐色を呈する。この壺のほかには、叩き目をもつ土器片も出土した。弥生後期のものである（第49図）。

SK 03（第50図）

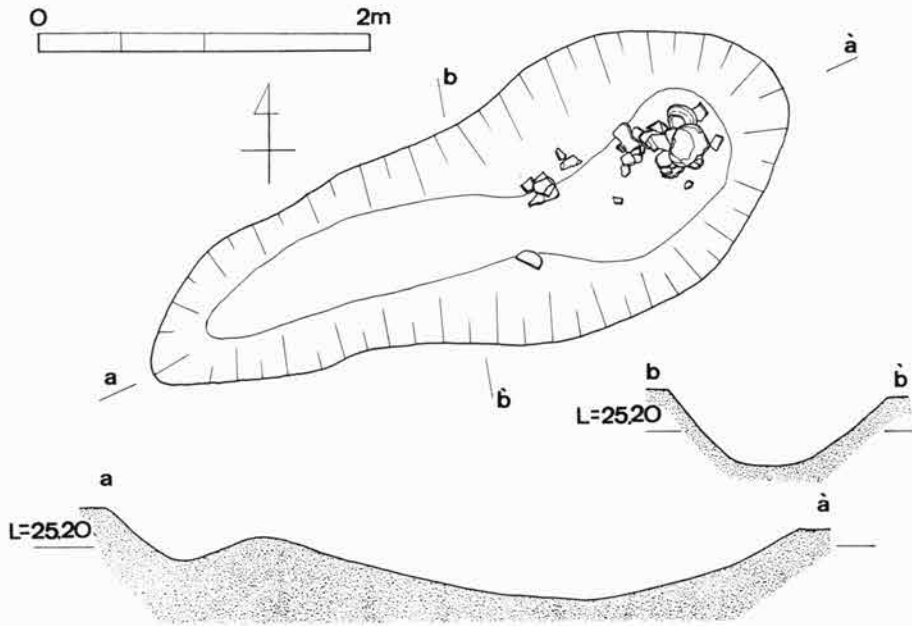
楕円形に近い土坑で、長軸 2.4m・短軸約 0.9mを測り、舟底状をしている。赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として茶褐色土が堆積していた。底部で、細頸壺が出土した。細頸壺は、卵状の体部にゆるやかに外反したのち内湾する口頸部がつく。頸部から肩部にかけて櫛描きの直線文と波状文が交互に施され、口縁直下には4条の凹線文と円形浮文がある。焼成は良好で、淡褐色を呈する。弥生中期のものである（第51図）。



第51図 SK 03 出土土器

SK 04（第52図）

SK 03 の南に隣接し、長軸 4.2m・短軸 1.2m 前後の細長い土坑で、舟底状をしている。赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として茶褐色土と暗茶褐色土が堆積していた。底の東部で壺片が出土した。壺は、卵状の体部にゆるやかに外反する頸部・受け口状の口縁がつく。



第52図 SK 04 実 測 図

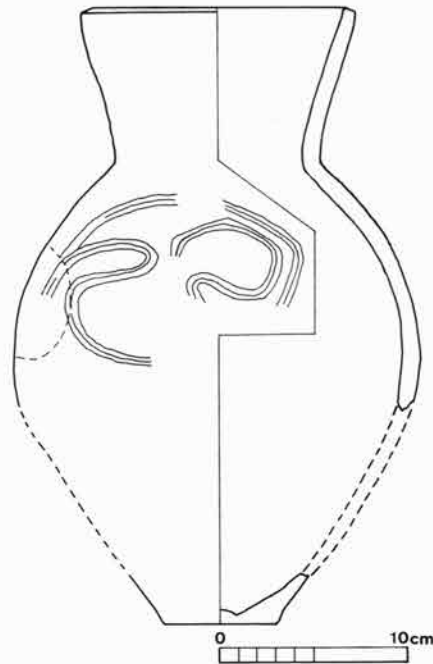
焼成は良好で、淡褐色を呈する。弥生中期のものである。

SK 05

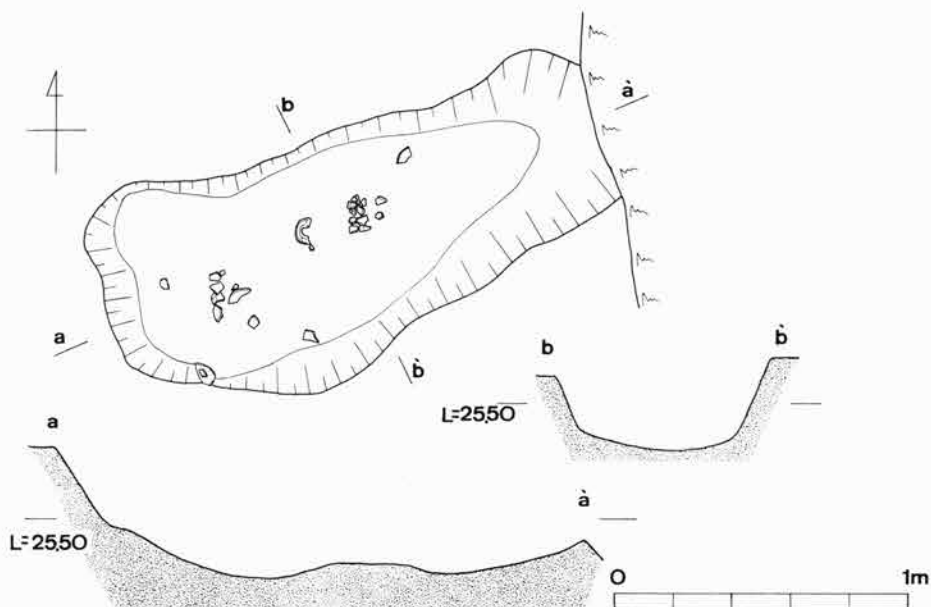
SD 05 の東に隣接する円形の土塚で、径約 4m である。赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として暗褐色砂質土・暗黄褐色粘質土・黄褐色粘質土が堆積していた。その中層から出土した土器は、壺で、卵状の体部にやや外傾してひらく口頸部をもつ。肩部には篋描きによる記号的な文様がみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。弥生中期のものである（第53図）。

SK 06（第54図）

SD 05 の北西に位置する土塚で、長軸約 1.8 m・短軸 0.7m 前後を測る。赤褐色粘質土を掘り込んでおり、埋土として暗茶褐色土があった。底部から壺片が出土した。壺は、やや肩の張る体部に、「く」字状に外反する口頸部をも



第53図 SK 05 出 土 土 器

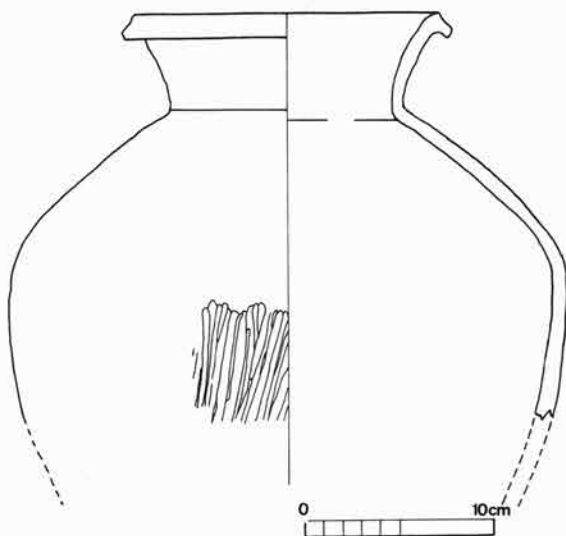


第54図 SK 06 実測図

つ。口縁部は外下方に拡張しており、面をもつ。焼成は良好で茶褐色を呈する。弥生中期のものである（第55図）。

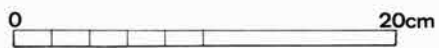
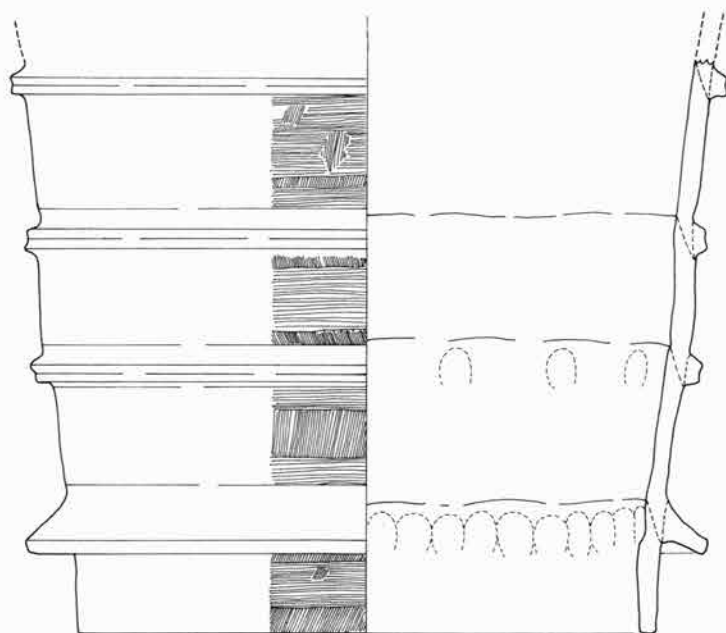
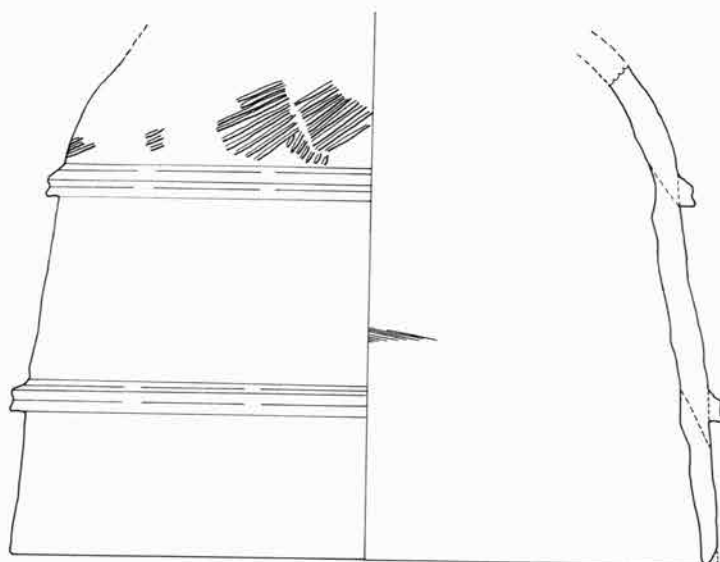
C区出土円筒埴輪（第56図）

SK 03・SK 04 の南東方向を拡張した際、竹林の表土中から散乱して出土したものである。形態から2種に分けられる。1は、やや開き気味の筒部からドーム状に内湾する形態をとる。タガは突出度の低い断面台形をしており、タガの端面が凹んで



第55図 SK 06 出土土器

いる。外面の調整は、一部観察できなかったが、内湾した部分に「平行叩き目」が認められる。内面は、刷毛目を施したことが一部に観察できる。焼成は良好で、暗灰色を呈する。2は、一般的な円筒埴輪の形態に近いが、最下段に廂状に外下方へ突出するタガをもつ点が特異である。タガは、1の場合と同様で、突出度の低い断面台形をしており、タガの端面が凹



第56图 C区出土円筒埴輪

んでいる。外面の調整は、縦刷毛ののちC種横刷毛^(注56)を施している。内面の調整は、縦なでののち横なでしている。タガの接合部分には、指押さえ痕が認められる。焼成は良好で、暗灰色を呈する。1・2とも、いわゆる土師質の埴輪とは異なり、瓦質とも言える印象を受けるものである。また、この2種の埴輪はセットになり、1が2の廂状のタガと合わされ、円筒棺として使用されたことが推測される。

④D地区の調査

D地区は、調査地の南部にあたり、「L」字状にのびる丘陵支脈の南側である。西から東にむかって下る斜面で褐色砂礫層・砂質土層がベースになっている。遺構は検出できなかったが、西から東へ流れる自然流路を検出した。

(2) 小 結

第2次調査は、全体としてまとまった遺構を検出するに至らなかった。弥生時代中期から後期にかけての土壇・溝、古墳時代の土壇、その他の溝の検出や円筒埴輪の出土などがあり、相互の関連を見出すことは困難である。ただ、次のようなことは言えるかもしれない。第1に、丘陵地は弥生中期にさかのぼって利用されたが、居住地の明らかな痕跡は検出されなかったことである。第2に、古墳時代後期の土壇墓と思われるSK02を横穴群の位置する丘陵支脈の北部で検出したことである。第3に、自然流路跡を確認し、谷地形が入りこんでいたことが推定されることである。

9. む す び

今回の調査では、8基の横穴とその周辺のいくつかの遺構を検出した。横穴群の調査では多数の須恵器をはじめとする遺物が出土した。過去に調査された堀切横穴6号のような石棺は出土しなかったが、横穴群のあり方がわかったと言える。その周辺の調査で判明した調査地の旧地形の把握は、遺構はともかく、ひとつの成果と言えよう。

今後、同じ南山城地域での調査が進むにつれ、横穴群を構築した人々の集落跡や他の横穴群のあり方についても多くの成果が期待されると思われる。今回調査した8基の横穴群については、多くの人々の援助もあり、保存措置がとられた。多くの遺跡が開発とともに破壊されていく中で、守られた横穴が地域の文化遺産として生かされていくことを期待する。

(久保田 健士)

注1 保存処理にあたっては、京都府教育委員会の久保哲正技師に全面的に指導して頂いた。処理方法は、横穴のベースである砂礫層に樹脂を注入して強化し、その後、玄室・墓道部分に土のうをつめて、横穴の並ぶ斜面に一定の厚さの土を敷き保護するという方法であった。

- 注2 久保田健士「狐谷横穴群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注3 調査協力では、下記の方々や機関にお世話になった(敬称略)。
 奈良大学助教授 水野正好
 大阪大学助教授 都出比呂志
 京都大学教授 池田次郎
 京都大学埋蔵文化財研究センター助手 清水芳裕
 京都大学大学院院生 新納 泉
 京都大学大学院院生 花谷 浩
 京都府文化財保護指導委員 前川永一
 同 藤林金嗣
 京都府教育委員会技師 平良泰久
 同 奥村清一郎
 京都府立山城郷土資料館館長 釋 龍雄
 同 資料課長 高橋美久二
 京都府教育委員会文化財保護課・同管理課・八幡市教育委員会
 <調査補助員>
 山口文吾・栗本浩彰・椋本正利・向井智司・岩本秀夫・奥村 慎・北野 尚・和田譲二・不破 隆・丸山ひで子・余 晴子・安達佳明・西岸秀文・有井広幸・小出賢一・福田桂三・東宏志・立花正寛・八木橋康宏・里田和宏・寺本雅宣・吉田 徹・中西繁則・山田芳史
 <整理員>
 長谷川陶子・寺升初代・中島美代子・北川ともえ・団村 香・大辻外茂子・森規志子・新村行代・高原伸子・中村康子・田村昌子・小倉美奈子・木戸裕美・高井七重・小山みのり・江田美恵子・伴 圭子・小川志津香
 なお、現地調査等にあたり、当調査研究センターの理事各位や調査課の多くの調査員にもお世話になった。
- 注4 平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」(『京都考古』22) 1976
- 注5 北向斜面は、南向斜面(横穴斜面)に比べて急傾斜であり、それは、暗褐色砂質土(礫混じり)の堆積の有無によると考えられる。
- 注6 『枚方市史』第1巻 1967
 樋口隆康『京都考古学散歩』学生社 1976
- 注7 堤圭三郎・高橋美久二「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会) 1969
- 注8 注2と同じ
- 注9 杉原和雄・山下 正「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1982)』京都府教育委員会) 1982
- 注10 山田良三・石部正志「山城八軒屋土師遺跡調査報告」(『古代学研究』34) 1962
 吉村正親「木津川川底遺跡発見の土器」(『京都考古』22) 1976
- 注11 長谷川 達「木津川河床遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号) 1982
- 注12 宇佐晋一「京都府八幡町出土の銅鐸」(『古代文化』9—3) 1951
 樋口隆康 前掲書注1
- 注13 栗野 謨「京都府八幡町美濃山出土の甕棺」(『古代学研究』39) 1964

- 注14 梅原末治「綴喜郡八幡町茶臼山古墳」(『京都府史跡勝地調査会報告』第4冊 京都府) 1923
注2と同じ
- 注15 梅原末治「八幡石不動古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会) 1955
- 注16 梅原末治「八幡町車塚」(『京都府史跡勝地調査会報告』第1冊 京都府教育委員会) 1919
- 注17 梅原末治「山城国八幡町の東車塚古墳」(『久津川古墳研究』) 1910
- 注18 梅原末治「美濃山ノ古墳」(『京都府史跡勝地調査会報告』第2冊 京都府) 1920
- 注19 佐藤虎雄「美濃山の横穴」(『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第10冊 京都府) 1929
- 注20 注13と同じ
- 注21 高橋美久二「女谷横穴について」(『京都考古』2) 1974
- 注22 奥村清一郎「南山城の横穴」(『京都考古』27) 1982
- 注23 注2と同じ
- 注24 江谷 寛『美濃山廃寺跡発掘調査報告』(八幡町文化財調査報告 第1集) 八幡町教育委員会 1977
- 注25 梅原末治「八幡町志水瓦窯趾」(『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第17冊 京都府) 1937
- 注26 注20と同じ
- 注27 平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」(『京都考古』14) 1975
- 注28 『京都五億年の旅』1976
- 注29 実測にあたっては、原形について注意をはらったが、側壁等が崩落しているため、ある程度は概数とせざるを得ない点もある。
- 注30 2号横穴の場合、長台形としても、長方形に近いと考えられる。
- 注31 美濃山横穴の中にも、このような小穴が認められるものもあるが、人為的なものとも考えられず、水の浸食等による空洞と思われる。
- 注32 横穴の玄室・墓道の一部は、褐色の砂礫層をベースに掘り込まれているが、墓道の前方部は暗褐色砂質土(礫混じり)を掘り込んでいる。それは、他の横穴でも同様である。
- 注33 この段は、玄室の中央に近い部分にあたりと考えられ、小溝の部分が閉塞部位と考えられる。
- 注34 5号横穴の前方(玄門)の小溝に伴う段と同様なものとも考えられるが、6号の場合は段が不明瞭なため判断しがたい。
- 注35 7号横穴も、3号横穴・4号横穴と同規模であるが、形態的には段を持ち、若干異なっている。
- 注36 3号横穴と8号横穴の主軸方向は同じであり、時期的なものを示唆するのかもしれない。
- 注37 通例では、岩盤に方形プランで家形の立体をなす構造をもつものもあるが(玉手山横穴群等)、それらに比べて美濃山一帯の横穴は簡素な形態を示している。
- 注38 段は、地山層を削り出して造られている。
- 注39 閉塞のための板をこの小溝に若干埋めていたものと推測される。
- 注40 この暗褐色砂質土(礫混じり)については、横穴の立地する斜面側だけに厚く堆積することが、谷部の断割り断面によって観察された。その土層には、地山層に含まれる礫が多く、横穴の玄室等を掘削した排土であるかもしれない。横穴式石室の構築にあたっては、石室前庭部を排土で造成する例もある。
- 注41 2号横穴の遺物の出土状況は、玄室部でいずれも地山褐色砂質土が床面直上に20cm前後一様に堆積しており、その土層下より遺物が出土した。このことから、横穴の天井部が陥落した際に、土器・人骨・鉄刀・鉄小刀は同時に埋没し、現位置にとどまったものと判断される。従って、遺物の一括性についての可能性は高いと考えられる。
- 注42 4号横穴・5号横穴・7号横穴などの場合、土器は玄門側壁に寄って比較的雑に重ねられている

- たり、玄室床面に破片として散乱した状態で出土した。
- 注43 堀切6号横穴の石棺(組立式)内の人骨も、玄門方向に頭蓋を置き、伸展された状態である。ただ方位は、東方向である。
高橋美久二「堀切横穴群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要(1969)』京都府教育委員会)1969
- 注44 玄門の段の所から前方1.7mの地点で、すわった状態で出土した。墓道の埋土堆積状況から、やはり玄室出土の土器と一括のものと考えられる。
- 注45 蓋が、高杯の杯部に重なった状態で出土した。
- 注46 平安中期によく見られるe手法と呼ばれるもの。「て」字状口縁。(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北段北辺の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981)
- 注47 他の「長脚二段透孔」の方形の透孔に比し、ややしっかりした透孔である。
- 注48 横穴式石室の前庭部(墓道)で須恵器の甕が破砕された状態で出土することは、よく知られている。
- 注49 須恵器の蓋が反転し、その上に土師器の皿がのった状態で出土した。
- 注50 一般的には、甕の内面で認められる。
横山浩一「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」(『九州文化史研究所紀要』26)1981
- 注51 杯身(S-2)の上に杯蓋(S-1)が寄っかかった状態で出土した。
- 注52 同じ南山城の同一丘陵上の興戸古墳5号墳出土の土器にも、「河内系」の搬入品とされるものがある。奥村清一郎「興戸古墳群発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第2集 田辺町教育委員会)1981
- 注53 形態にあわせて、調整手法も考慮にいった。
- 注54 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966
田辺昭三『須恵器大成』1981
中村 浩『陶邑』Ⅲ 大阪文化財センター 1978
- 注55 田辺昭三『須恵器大成』1981
- 注56 C種横刷毛は本来須恵器の技法とみなされている。
川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」(『大阪文化誌』2-4)1977

2. 木津川河床遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は京都府八幡市八幡小字源野・焼木および、その周辺に計画されている木津川流域下水道浄化センターの建設に先立ち、京都府流域下水道建設事務所の依頼を受けて実施したものである。浄化センター建設計画は長期にわたるものであるが、昭和57年度は、その第1期工事となる浄化槽部分を調査対象とした。

この遺跡は木津川・宇治川・桂川の合流点付近から国道1号線の木津川大橋にかけての木津川河床において、数多くの遺物が出土することから名付けられたものであるが、その範囲は木津川河床面に留まらず、その周辺にも広がるものと考えられていた。採集遺物には、弥生時代以降、延々と近世に至るまで各時代のものが含まれ、極めて長期にわたる集落の存在が予想され、流路内の一部では井戸・遺物包含層の存在も知られていた。^(注)

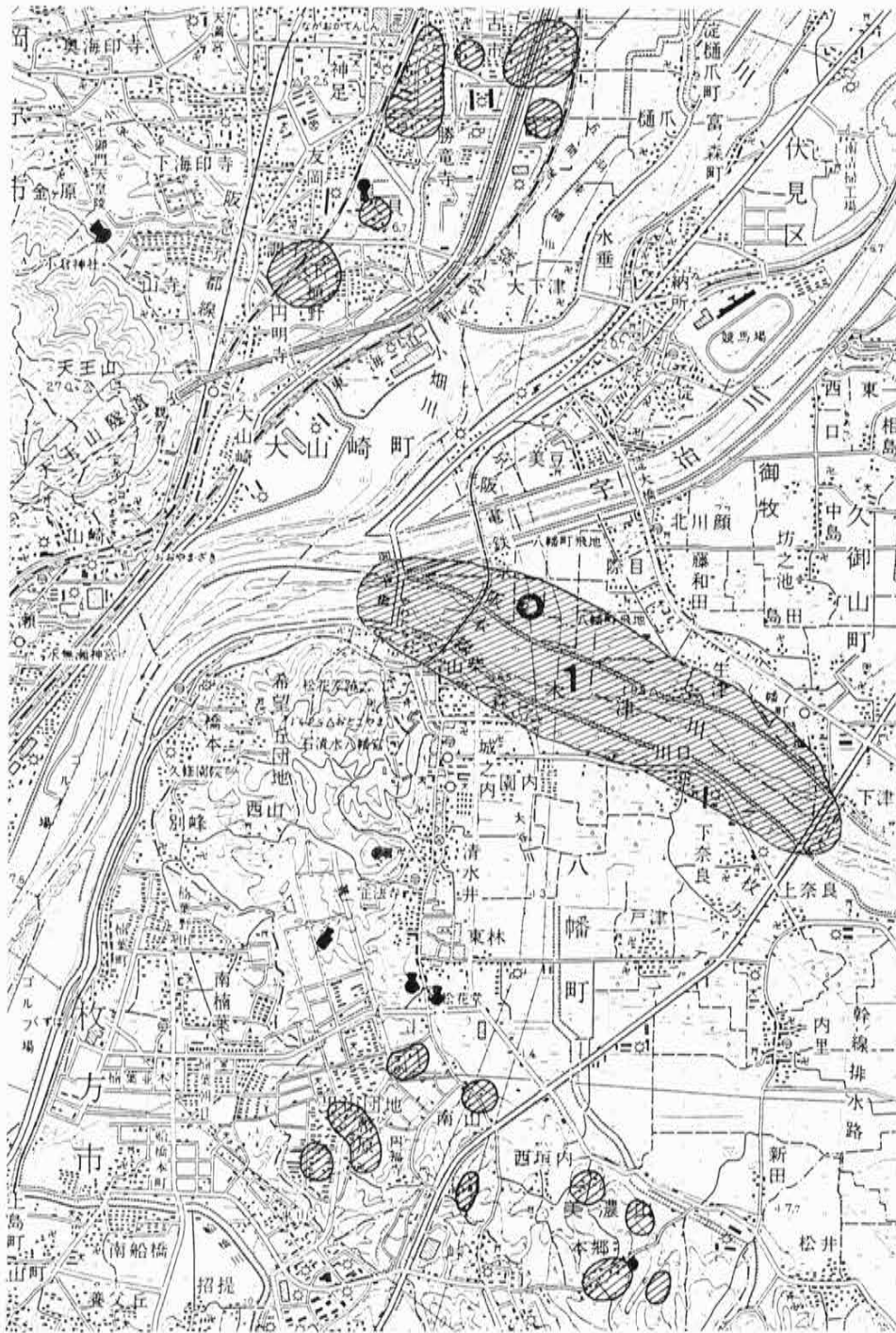
今回の調査地は、推定木津川河床遺跡内でも下流部分にあたり、石清水八幡宮の所在する男山丘陵先端部の北東に位置し、北を宇治川に、南を木津川に挟まれ、標高約10mを測る。現在の木津川の流路は当調査地の南にあるが、これは江戸時代末から明治時代の大規模な河川改修によるものである。それまでは、八幡市川口付近から北流し、淀で宇治川や桂川と合流しており、それは、現在の地図上でもその痕跡を認めることができる。しかし、この流路も、木津川河床遺跡が形成され続けた間、決して安定したものではなく、近年まで存在した巨椋池の消長、宇治川・桂川の流路ともども相当不安定なものであったと考えられる。

調査は昭和57年9月2日より掘削を開始し、10月4日に現地での作業を終了した。現地調査・遺物整理等の期間を通じ、調査に従事していただいた方々、また御協力いただいた方々並びに関係諸機関へは心より御礼申し上げます。

2. 調査概要

調査地は、この建設計画が起るまで水田として利用され、大正年間に行われた圃場整備によって整然と区画されていた。一見、全体に平坦であるが、東側へと微かに高くなっていく。

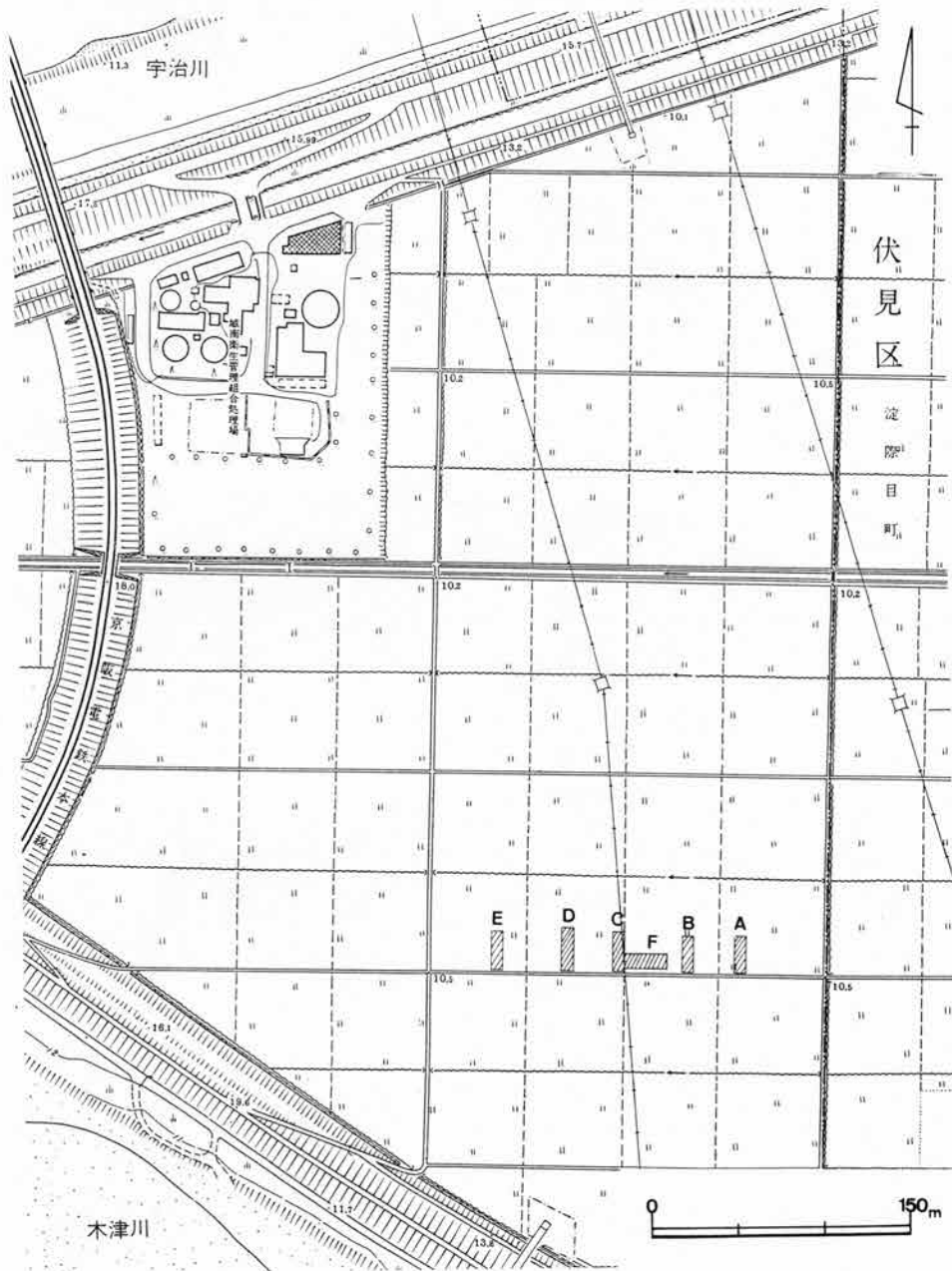
調査地付近では今までに遺物が採取された等の情報はなく、遺跡の性格も不明な点が多いため、調査対象地に5本のトレンチ(A～E)を入れ、その後、比較的遺物が集中して出土



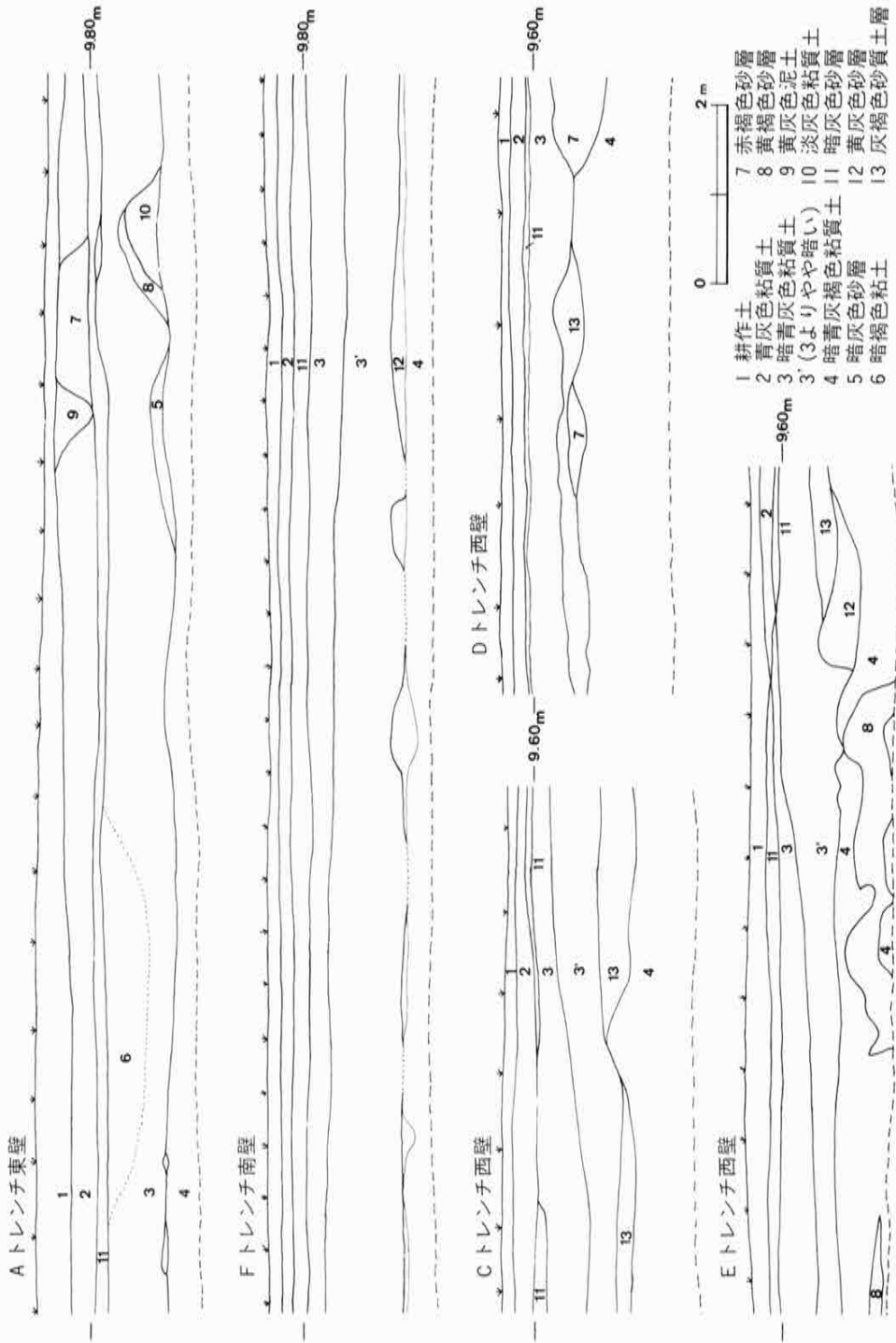
第57図 調査地位位置図(1)および周辺の弥生遺跡・主要古墳(1:木津川河床遺跡)

した部分を拡張(F)した。A～Eは南北20m・東西5mを基本に設定したが、トレンチ各壁の崩壊を防ぐため、傾斜をつけて掘削したため、平面形は、基本形を越えるものとなった。

各トレンチにおいて、遺物は弥生時代末から古墳時代前期にかけての時期、および鎌倉時



第58図 調査地位置図(2)



第59図 各トレンチ断面図

代以降の二時期のものを中心に検出したが、それらにともなう遺構は確認できなかった。第59図Aトレンチ東壁断面図に見られるように、一部ではかつての水田に伴う畦畔や杭と考えられるものが認められるが、時期的には近世以降のものである。

各トレンチで観察した土層（第59図）は、耕作土層下に暗青灰色系の粘質土（3・3'・4）が堆積し、4層下部から徐々に砂質分を増し、地表下2~3m以下で淡黄白色系の粗砂層となる。この粗砂層は花崗岩の風化したものであり、工所用ボーリングによる土質調査によると以下3~4m、この状態が続いている。また耕作土直下と、3層と4層の間には黄褐色の細砂層が入り、上下で類似した土層に分けている。この3~4層には草の茎・木片等の形を留めるものから、さらに細かいものまで有機物が多く混入しており、掘削時とその後では色調の変化が起こる。調査地西側では、これら暗青灰色粘質土内に黄褐色・赤褐色等の色調を持つ砂層が不規則に貫入し、調査地東側に比べて乱れた土層の堆積が見られる。

このように、地表下約2mまで堆積する各層は粘質土・細砂層が主体で、礫・粗砂等はほとんど認められない。また、有機物の混入も多いことから、淡黄白色粘質層以下は、比較的ゆるやかな水の動きによって約2mの土層が形成されたものと考えられる。

掘削が1.8~2mを越えると湧水が始まり、下層の粗砂層では激しさを加え、掘削坑が瞬時にして水で埋まるという状態である。降雨後は4層からも水が吹き出し、トレンチ各壁も時間を置くくと下層に沈み込む形で崩壊するという状態であった。

出土する遺物を平面的に見るとBトレンチ南半からF・Cトレンチに集中した。特に集中したのはFトレンチ西半からCトレンチ南半にかけてであり、一部、帯状に検出したが、落ち込み等は確認できなかった。

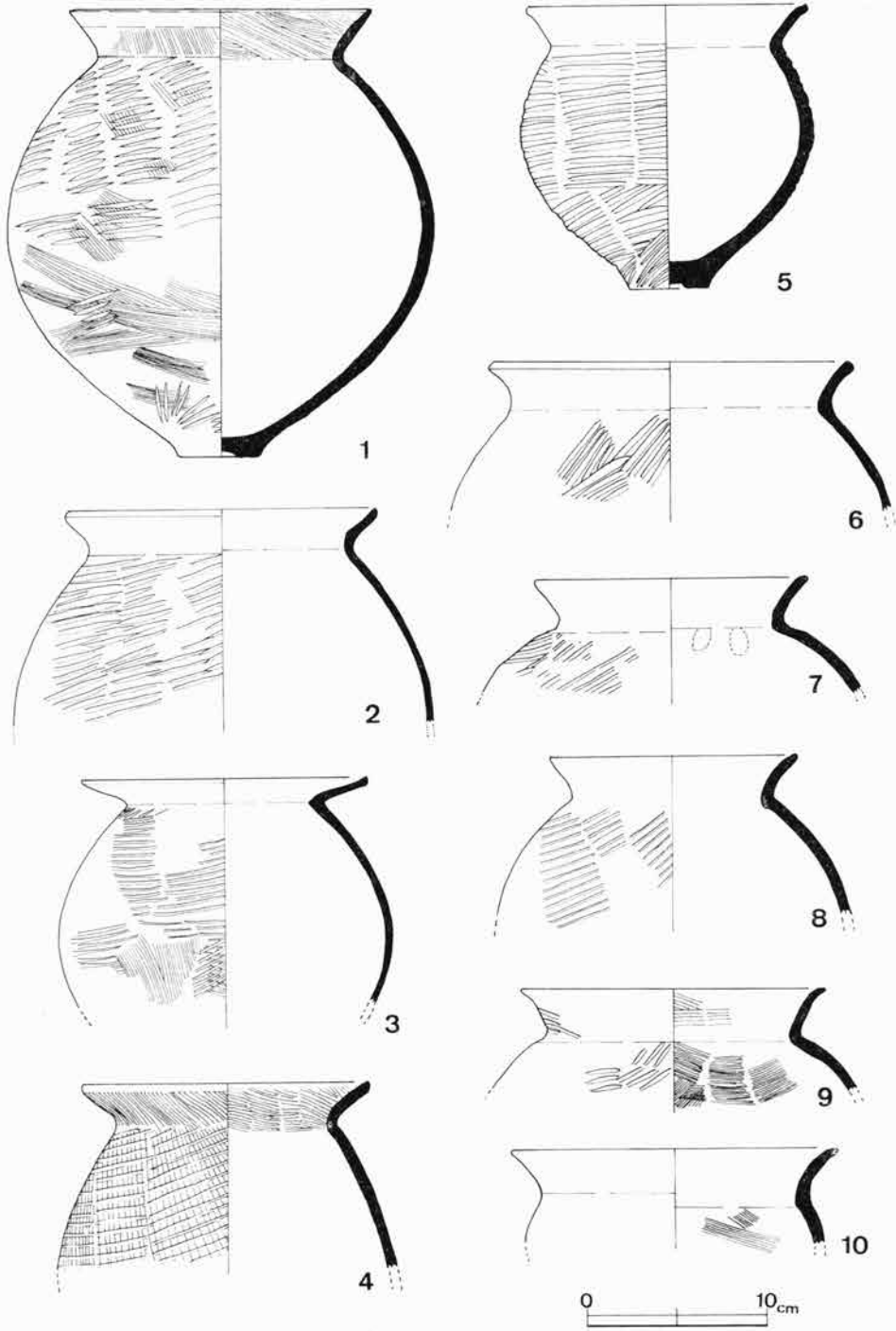
各層における遺物の出土状況は、3'層までは摩滅の激しい細片が散発的に出土し、近世磁器等も含む。4層以下は中世およびそれ以前のものに限られるが、各時代ごとの層序に一線を引くことはできなかった。レベルも、古墳時代前期の遺物が同一であったり、中世遺物の方が低位で出土するというような状態も見られた。

3. 出土遺物

出土遺物は弥生時代末から古墳時代前期にかけての一群と中世のものが主体となるが、量的に前者が、その大半を占めている。その他の時代では奈良・平安時代、あるいは近世のものが少量含まれるが、まとめて出土したものはない。

(1) 弥生時代末・古墳時代の遺物

壺・甕・鉢・高杯・器台・小型有孔鉢・蓋が出土している。



第60図 出土遺物実測図(1)

壺 (第61図19~22)

口縁がやや外方に開きつつ直立するものと大きく外反するもの、他に小破片で二重口縁になるものが出土している。

19は、かすかに外反する口縁を持つもので、口頸部には内外面ともに刷毛目を残し、体部外面には篋磨きが施されている。体部内面には刷毛の痕跡を残すが、全体になでて仕上げられている。21は、19より小型であり、口頸部は内外面とも縦方向、体部外面は横方向の篋磨きで仕上げられている。また、体部内面は細い刷毛で調整されている。20は、大きく外反する口縁を持つ壺で、球形に近い体部を持つ。頸部には凸帯をめぐらし、刻み目を施す。体部上部には波状文と直線文が交互に櫛描きされている。外面は縦方向の篋磨き、内面は横方向の刷毛調整が行われている。22は、直線的に外方へ開く口頸部を持つ小型壺であるが、胎土が細砂質のため、表面の剝離が著しい。

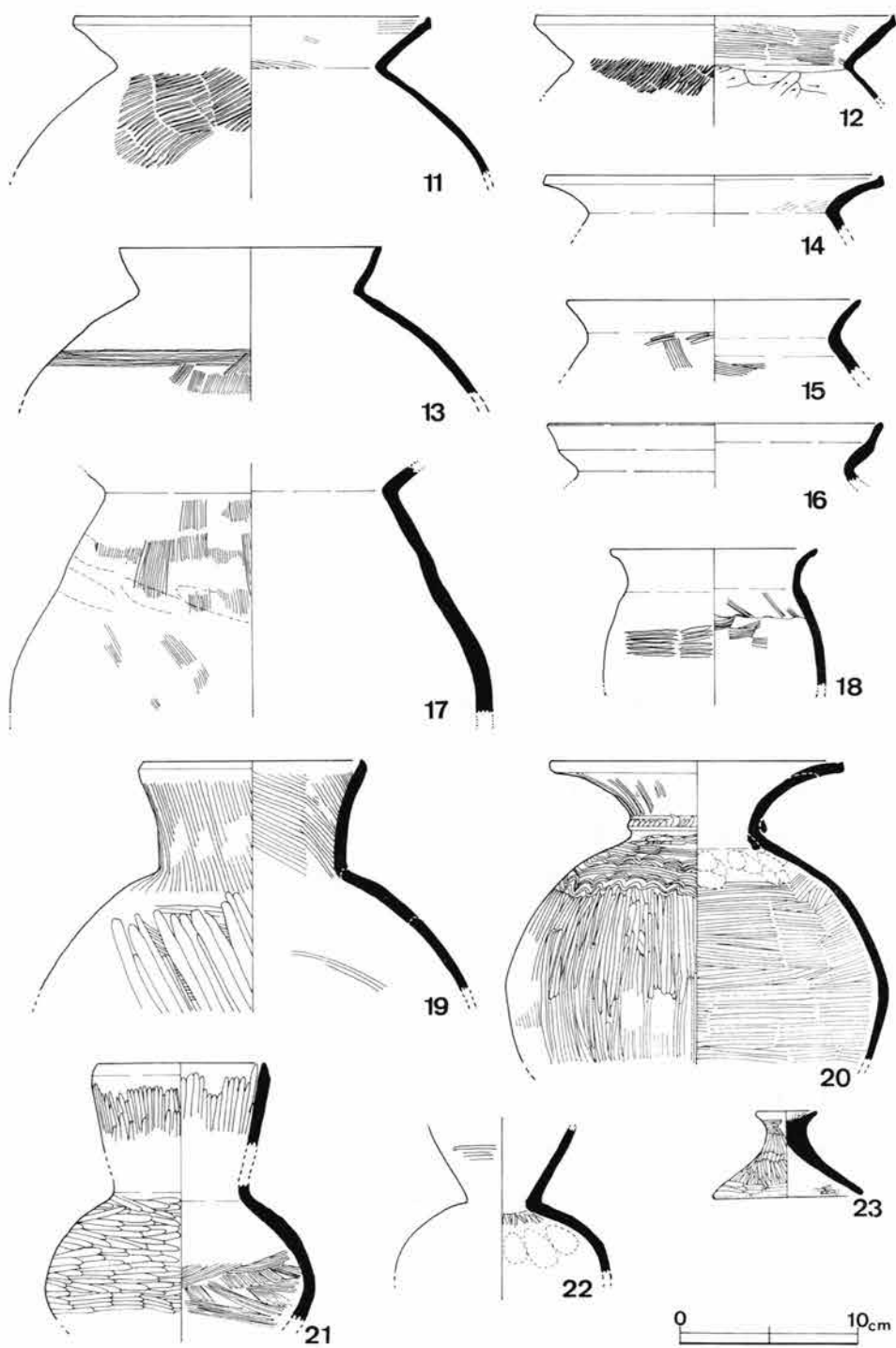
甕 (第60図・第61図11~18)

甕は、口縁をかすかに外反させて「く」の字状に屈折させ、外面に叩き目を残すものが多いが、一部には刷毛により調整をしたもの、あるいはそれらを併用したものがある。

1は口径17cm・器高24.7cm・胴部最大径24.2cmを測る。体部外面には粗い叩きが施され、一部には刷毛による調整が行われている。口頸部は、内外面とも刷毛調整されているが、口端部外面はなでによって消されている。底部は小さく、中央部が凹んでいる。2は、口径15.8cm・器高15.6cmの小型品で体部下半と上半部では明確に叩き目の方向が変化する。底部は、1と同様に小さく、中央部が凹んでいる。11・12は共に暗茶褐色を呈し、頸部が鋭い稜を持って屈曲する。口端部は、上方につまみ上げられ、外面は極めて細かい叩きによって調整されている。内面は、頸部以下に篋削りが行われ、器壁は他と比べるとはるかに薄く仕上げられている。生駒山地西麓で生産されたものと考えられる。13は、細砂質の胎土を持ち、外面刷毛・内面篋削りで仕上げられ、器壁も薄い。口頸部がかすかに内湾するもので、他の一群よりやや新しい時期のものと考えられる。17は、外面に刷毛目が断続的に残るもので、体部はなめらかな曲線を描かず、頸部から、胴部最大径部分まで直線的である。胎土は砂質で粗く、器壁も他に比べると一段と厚く、全体に稚拙ともいえる造作である。他に16のように口頸部に稜を持つものも少量出土している。

鉢型土器 (第62図24~28)

出土したものはすべて小型品であり、口径8.5~12.5cmを測る。24・25・28は口縁部がゆるく屈曲し、外反する。調整は外面を刷毛調整するもの(24)、篋磨きするもの(25)があるが、表面の風化により不明瞭なものが多い。26は中央の凹んだ底部を持っている。



第61図 出土遺物実測図(2)

高杯 (第62図30~32)

器形全体を確認できるものは出土しなかった。30は、明瞭な稜を持って外に開く杯部の破片であるが焼成は良好で、全面にいいいな筥磨きが施されている。31は、椀状の杯部を持つと考えられ、裾部に孔が穿たれている。32も脚部破片であるが裾部が大きく開き、筥磨きが施され、三孔を穿っている。

器台 (第62図33~36)

33は脚柱部と裾部が明確に屈折し、その部分に孔が穿たれる。裾部には段を有している。34は、ラッパ状に開く脚部を持つもので、孔は穿たれていない。内外面ともに調整は不明瞭である。

ほかのこの時代の遺物としては、一点ずつではあるが蓋(23)と小型有孔鉢(29)がある。蓋は径 8.5 cm・器高 4.8 cm でつまみ部分は凹んでいる。外面は全体に筥磨きが施され、それは内面縁辺部にまで及ぶ。

有孔鉢は、狭い底部部分に一孔が穿たれたもので、外面は比較的いいいになで仕上げられている。

(2)その他の遺物 (第63図)

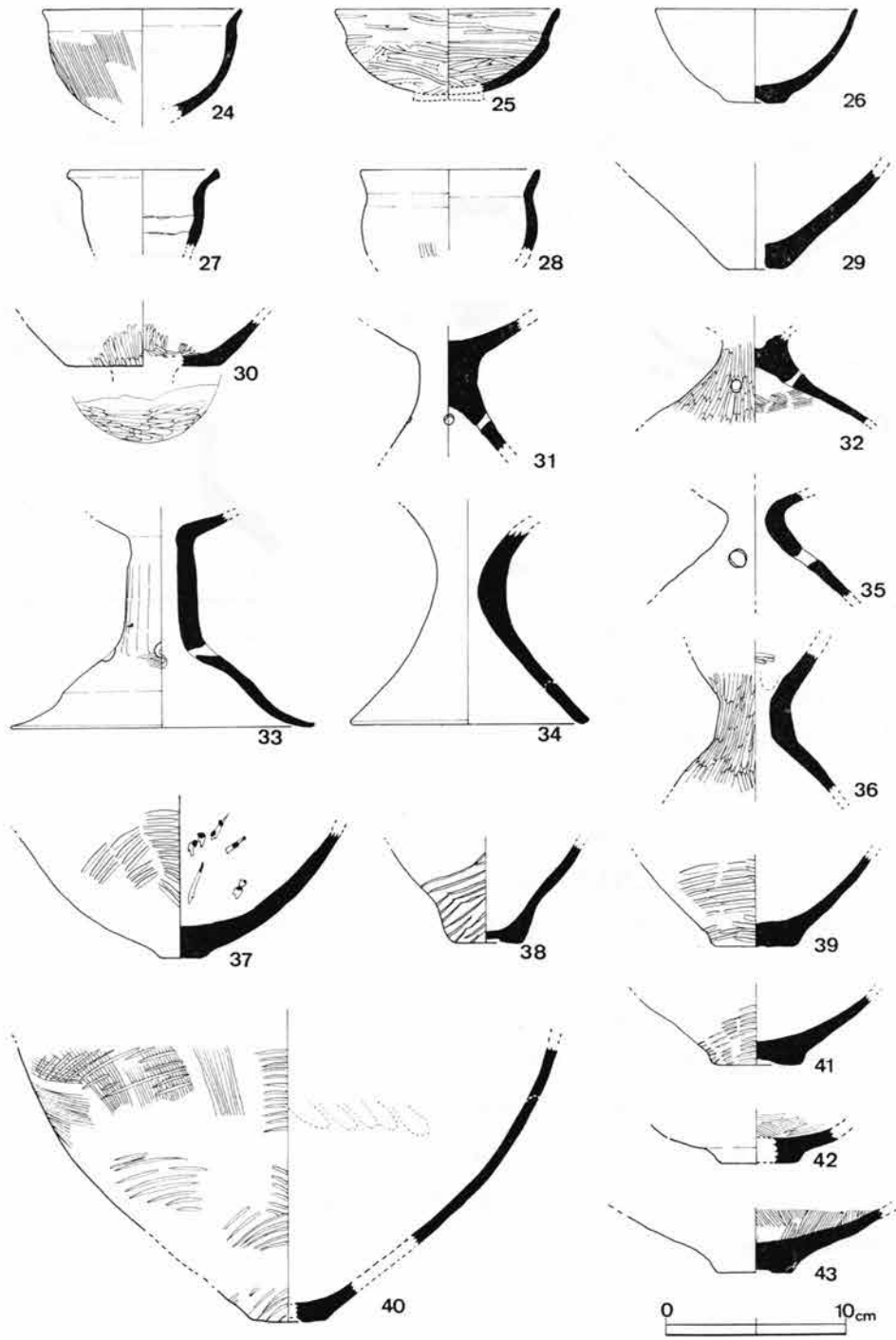
47は、輪高台をもつ灰釉椀である。48も高台を持つ椀で内面に黒色釉が施釉されており、いわゆる天目椀と考えられる。50~54は土師皿であるが、50だけが調査によって近世層から出土したもので、他は、木津川・御幸橋付近で表面採集されたものである。46は、青磁皿で口径 10.1 cm・器高 2.1 cm を測る。内面には櫛によるジグザグ文が施され、底部はややあげ底である。底部と体部の境に段があり、底部外面には施釉されていない。49は、挿鉢で大きく立ち上がる口縁を持つ。橙褐色を呈し、間隔の広い櫛描き沈線が入っている。44・45は、銭貨で、44は「洪武通寶」、45は「寛永通寶」であり、共に近世層から出土したものである。

他に小破片ではあるが、須恵器甕・瓦質土器・瓦器・埴輪・近世陶磁器類が出土している。

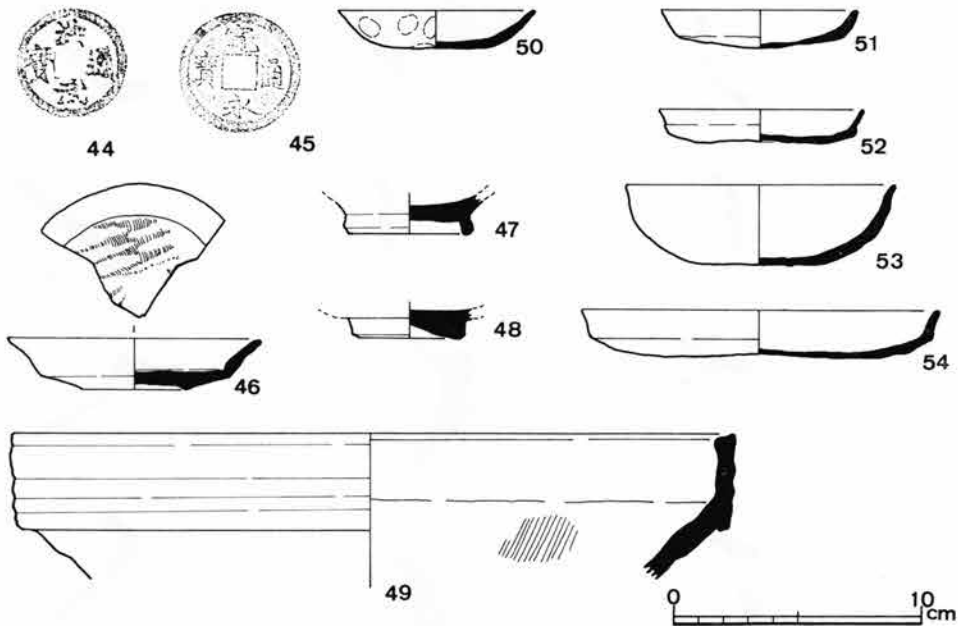
4. おわりに

この地域は京都盆地における三大河川の合流点であり、それら河川の動きにより、到底人々の安定した生活の場となることは困難であろうと思われたが、調査の結果、遺跡が木津川の現河床面付近に留まらず、その周辺にも広がっていることが判明した。広大な遺跡の中の点にも等しい調査であったが、湿地ともいえる土地柄、遺物の遺存状態も割合に良好であり、今後、この近辺における集落確認への手がかりの一つとなるものと考えられる。

現在、八幡市域になっている男山丘陵及び、その北麓には、茶臼山古墳、石不動古墳、東・



第62図 出土遺物実測図(3)



第63図 出土遺物実測図 (4)

西車塚古墳など、古くから知られる大型古墳が点在しているが、それらに対応する集落の確認された例は皆無であった。

集落跡は、弥生時代のものが幣原・南山・金右衛門垣内（井之元）・美濃山廃寺跡などから発見されていたが、すべて丘陵上であり、沖積地では未確認である。また、それに続く古墳時代に至ってはまとまった資料が得られていなかった。そうした状況の中で、今回出土した資料は集落の空白部分を埋めるための一資料になるものである。

巨椋池が干拓され、大規模な河川改修が進められた結果、付近の景観は一変したが、近年に至るまで、氾濫・洪水を繰り返したこの土地が古代から安定した場所というには程遠く、数々の水による変転を余さなくされたと思われる。しかし、弥生時代以降、この土地が自然堤防上などで綿々と生活の場として利用され続けたことは、ここが巨椋池の南辺で、水田耕作に適した沼沢地が広がっていたことに加え、河川交通の要所であったという側面も重要な立地条件であったことを示している。今後、諸要因を考慮しつつ、当遺跡全域にわたる、より綿密な調査が行われることが望まれる。

(長谷川 達)

注 熊野正也ほか「木津川底遺跡出土の土器」(『土師式土器集成』本編1 東京堂出版) 1971
吉村正親「木津川川底発見の土器」(『京都考古』22) 1976

3. 深草遺跡発掘調査概要

1. はじめに

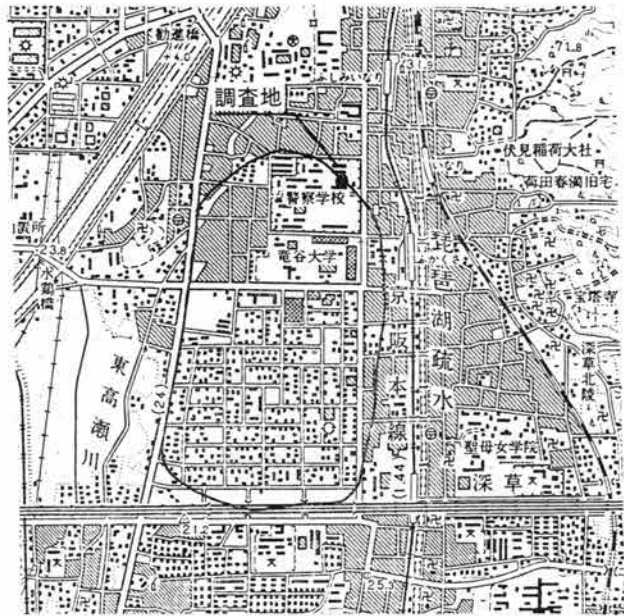
この報告は、京都市伏見区稲荷鳥居前町に所在する京都府警察学校内において、昭和57年10月5日より昭和57年10月30日まで実施した発掘調査に関するものである。調査は、京都府警察本部の依頼を受けて実施した。調査地は、通称師団街道に面した京都府警察学校内の東側にあつて、水難救護訓練施設（プール）の建設予定地にあたる。現地調査は、当調査研究センター調査員の竹井治雄・黒坪一樹が担当したが、調査にあたっては学生諸氏をはじめ、^(注1)多くの方々に御協力を頂いた。

2. 位置と環境

調査地は「深草遺跡」の北限にあつて^(注2)おり、その確認を目標に調査を実施した。

深草遺跡は、東方の稲荷山丘陵が緩やかに傾斜しつつ、京都盆地南部の平坦地に遷り変わる沖積地に位置している。標高は約20mである。深草には、弥生時代から中・近世に至る多くの遺跡および旧跡が存在す

る。とりわけ、弥生時代中期に属す当遺跡は著名である。昭和30年代初め以来、今回の調査地から南の西浦町一帯で実施された発掘調査や表面採集等の分布調査で多量の遺物が見つかっている。古墳時代では、すでに全壊してしまったが、周濠をもつ前方後円墳である番神山古墳が、調査地から南東へ約700mの、一段高い山麓近くに存在した。平安時代の末期には、この番神山古墳の西隣に極楽寺が造られ、



第64図 調査地位置図(1/25,000)
(範囲は『京都市遺跡地図』による深草遺跡を示す)

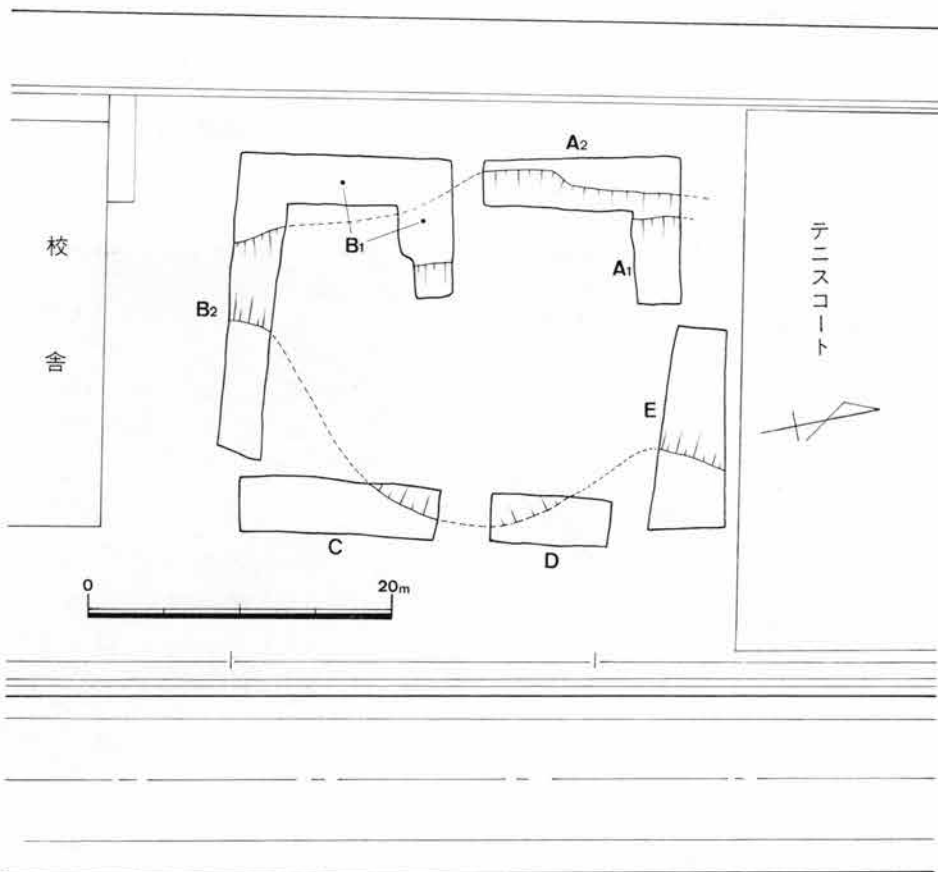
さらにこの南方約600mの所には、深草寺跡と推定されている深草中学廃寺(中期)も造営され、緑釉土器・須恵器・瓦類等の遺物が出土している。

3. 調査経過と発掘区

今回の調査対象面積は、約 800 m² で、排土置き場の都合上、全面の掘削は困難なため、任意に幅約6mのトレンチを5本設けて掘削した。トレンチは、ひとつづきのものに1名称を与え、便宜的に A₁ からEまでの記号で表示した。掘削深度は、平均約2mである。

掘削はEトレンチから開始し、続いて A₁ トレンチからアルファベット順に、重機により進めた。事前に、調査区中央を東西に走るガス管が、地表下約1.5mの深さで埋め込まれていることがわかっていたので、この箇所での掘削は避けて、周辺部を重点的に行った。

EトレンチとAトレンチを掘り終えた時点で、調査地の全容がほぼ理解できた。調査地全体が広大な掘り込みによって攪乱されているようであり、遺物は皆無である。また、A₂トレ



第65図 調査地内トレンチ配置図

ンチで深度約1.5mの所に砂粒混じりのしまった黄褐色粘土が広がり、遺構の存在が期待された。しかし、その残存状態は極めて局地的であり、掘り込まれたような池の肩が狭いトレンチの中央を一部縦断している等の理由によって、遺構の確認もかなわなかった。

遺構・遺物の検出ができないまま、各トレンチの断面観察を行ってから、掘り込みの埋土をB₂トレンチで除去する作業に入った。結局、近現代の廃材を泥中より採集しただけで、土器等の遺物は確認できなかった。

4. 層 位

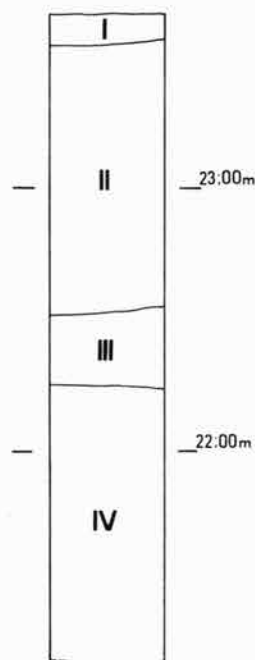
各トレンチにて検出した層位は、近現代の掘り込み（攪乱）が存在する部分のみ、やや他と異なる。しかし、全体の層位はA₂トレンチ北東隅を例にとり、次のように四つに分けて説明することができる。Ⅰ表土層、Ⅱ褐色粘土層（盛土）、Ⅲ暗茶褐色粘質土層、Ⅳ黄褐色粘土層となる。Ⅱ層は、廃材（セメント・タイル等）を含む有機質土層である。Ⅲ層は、植物遺存体（葦）を含み部分的に焼土・炭化物等も認められる。Ⅳ層は、堅くしまった砂混じりの粘土層である。攪乱の少ない非常に安定した層であることから、この面で遺構が検出されるものと考えた。

5. 遺 構

今回の調査では、明確な遺構は検出されなかった。発掘区を覆うように、掘り込みの落ち際がすべてのトレンチで確認された。調査地を含め、この付近は広範囲に湿地帯が広がっており、その内で整地のための池が掘り込まれたようである。掘り込み内から検出された廃棄物から、恐らく近現代に掘り込みが行われたと思われる。落ち際部分には、葦が繁茂していた様子が窺える（図版54—(2)）。湿地帯であったことの証左であろう。

6. ま と め

深草遺跡は、今回の調査地より南部の西浦町一帯を中心に広がっている。昭和9年に初めて辻井喜一郎氏によって紹介されて以来、杉原荘介氏を中心とする明治大学考古学研究室の調査、宇佐晋一氏らの調査を経て、弥生時代中期の良好な



- Ⅰ 表土層
- Ⅱ 褐色粘土層(盛土)
- Ⅲ 暗茶褐色粘質土層
- Ⅳ 黄褐色粘土層

第66図 検出土層断面図
(Aトレンチ北西隅)

資料が蓄積されてきた。また、網干善教氏は、昭和40年の調査で検出した着柄木製鍬^(注6)を報告し、その着柄方法を巡る議論が盛んになった。^(注7)京都府教育委員会もこの西浦町一帯での発掘調査で、幅広い溝状遺構を検出し、第2様式の壺・甕・高杯（中に第5様式のものもある。）や、石鍬・石包丁・石斧さらに木製の鋤・鍬・ひしゃく等^(注8)が出土したことを報告している。

今回の調査では、遺構・遺物は検出できなかったが、当調査地は広い湿地帯の存在していた地域であり、このことは当地を遺構・遺物の良好な包蔵地として捉え得る余地を残すものと言える。

（竹井 治雄・黒坪 一樹）

- 注1 以下に氏名を記す方々には、調査期間中、御協力を賜わった。心から感謝の意を表したい。神林 豊・坂下雅朗・坂本 守・田村泰造・西岸秀文・八木橋康宏（以上敬称略）。また、京都府警察学校と総務会計課の勢伊志忠雄氏からは、格別の御高配を頂戴した。
- 注2 京都市遺跡地図8に記された深草遺跡の範囲によると、今回調査地はその北端部に当る。
- 注3 辻井喜一郎「京都南郊深草低地に於ける弥生式遺跡の発見と遺物」(『史跡と美術』244) 1954
- 注4 杉原荘介・大塚初重「京都府深草遺跡」(『日本農耕文化の生成』所収) 1964
- 注5 宇佐晋一・小川敏夫・星野猷二「深草遺跡」(『古代学研究』39) 1969
- 注6 網干善教「深草遺跡出土木製鍬の一例について」(『龍谷史壇』55) 1965
- 注7 木下 忠「農耕技術の展開」(『歴史公論3—農耕文化と古代社会』)1978.3に議論の内容が詳述されている。
- 注8 堤 圭三郎「深草遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1966)』京都府教育委員会) 1966 及び林 和広「深草遺跡出土の弥生式土器」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』京都府教育委員会) 1974 に詳しい。

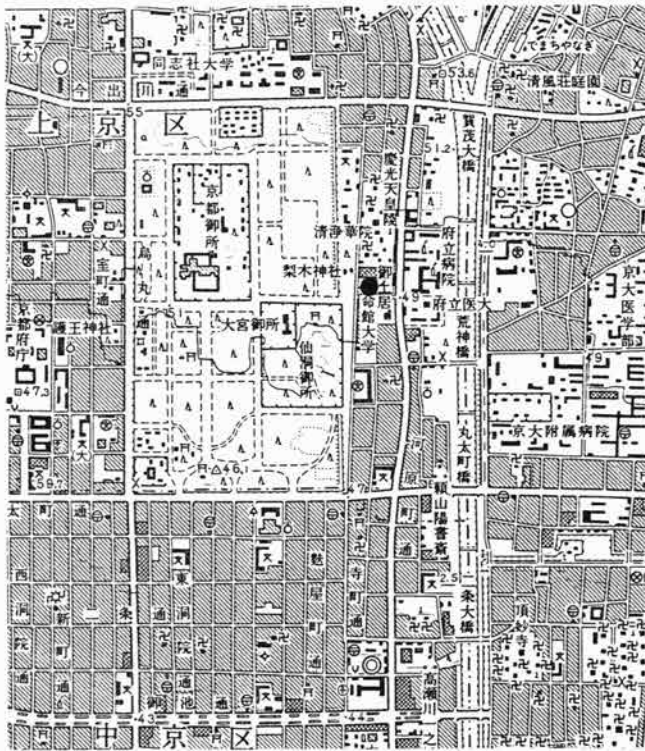
4. 法成寺跡発掘調査概要

はじめに

この調査は、京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町の元立命館大学広小路学舎跡において、京都府立医科大学の学舎等の建設が計画されたため、事前に行った発掘調査である。調査は順次行われる元立命館大学建物の解体を追って行い、第1次調査は、昭和57年3月から5月まで、第2・3次調査は同年11月から翌58年3月まで断続的に行った。調査地付近は、平安京跡東京極大路に接するとともに、平安時代、藤原道長によって建立された法成寺跡の推定地にも近いため、それらの関連遺構の検出を主目的として調査を行った。

(1) 第1次調査

調査概要



第67図 調査地位位置図 (1/25,000)

昭和56年度調査は、大学敷地内中央部、旧随心館東側および南側を東西に横切り、断続的に6本のトレンチを入れた。旧学校建物・地下道等によって多くの部分は攪乱を受け、文化面が顕著に残存する部分は少なかったが、東端において各種の墓塚を検出したため、一部拡張を行った。層位としては、近・現代の堆積層を経て、現地表下、約80cmで墓塚群を検出し、それ以下は極めて脆い砂礫層が一樣に続き、約3.2m下層で黄色粘土の混入する礫層と



第68図 墓 塚 群 平 面 図

なった。墓塚には、大別して土葬墓と火葬墓がある。土葬墓には、木棺を用いたと考えられる座棺・寝棺があり、また甕棺等があり、火葬墓では、その容器に陶器・木製容器などを用いていた。ほかには、溝の一部を石で囲み墓としたもの、土塚に直接埋葬したと考えられるものなどがある。4等は、土塚内に板石で石槨を造り、その中に銅板を貼った木棺を安置し、さらにその上を板石で蓋をするという極めて鄭重な埋葬施設も認められた。また、一例ではあるが、鎧を着装したまま葬られたもの（図版第57-②）もある。この墓地は、立命館大学

の建設に伴って移転された寺の墓地であり、大半の墓は改葬され、人骨・墓碑等はほとんど残存していなかった。

1基検出した石組井戸は、検出面から深さ2.3mを測るが、湧水は見られず、投棄されたものから墓地移転前後まで開口していたことがわかる。

出土した遺物には、土師皿・陶磁器・釘・銭貨・鉄・瓦類等がある。そのほとんどが、江戸後期以降のものであり、それ以前に属するものは極めて少なく、土器・瓦類を合計しても、小破片が数点に過ぎない。ただ、現代の攪乱中から、平安京に関連する軒丸瓦が1点出土した。今回の調査からは、当調査地付近に存在したと考えられる古代・中世の生活面が、鴨川の流れてによって流失したのか、あるいは、近世まで氾濫原であったのか、明確ではない。

(長谷川 達)

(2) 第 2 次 調 査

1. は じ め に

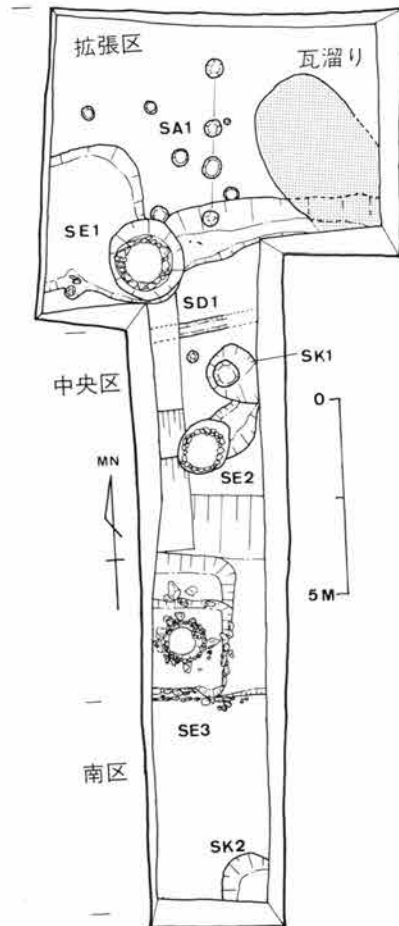
法成寺跡第2次調査は、計4か所にトレンチを設定し、井戸・柵列・流路等を検出した。本調査地は旧立命館大学校舎建設時にかなりの攪乱を受けており、予想以上に遺構の残存状態は悪く、遺物も資料化するに種々の問題がある状況であった。以下は、各トレンチの概略である。

2. 検 出 遺 構

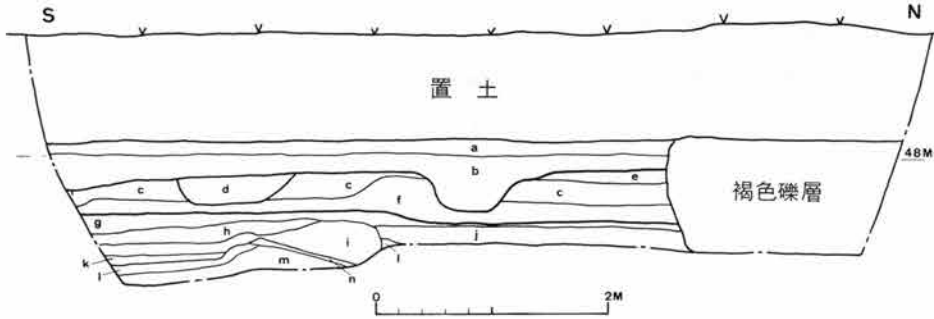
F トレンチ

調査面積は約120m²で、検出遺構は、井戸3基・土壇1基・柵列1棟である。堆積状況は、南区では2層からなる単純層であるが、中央・拡張区は複雑な堆積をしている。中央・拡張区では基本的には置土層下に3層確認でき、各々分層が可能である。特に、最下層には粘砂層と砂層がセット関係を成し、しかも、鉄分の沈着が見られ、鴨川の氾濫後の穏やかな流水を想定する事ができる。また、上部を削平された井戸を除けば、中間層からの遺構・遺物の検出が最も多い。

検出遺構の中で、拡張区の柵列は柱間距離が約1.5m、3間分確認でき、ほぼ真北に沿う。埋土は褐色砂利で、深さは約20cmと浅く、上部は削平を受けている。時期は、出土遺物から江戸時代末期と考えられる。なお、柱穴内より馬歯が出土したが、その意味は明らかではない。一方、中央区では全検出遺構中、最も精緻、かつ、機能的な径0.6m・深さ1.5mの規模を持つSE3を検出した。構造は、最上段から70cmまでは石組みで、

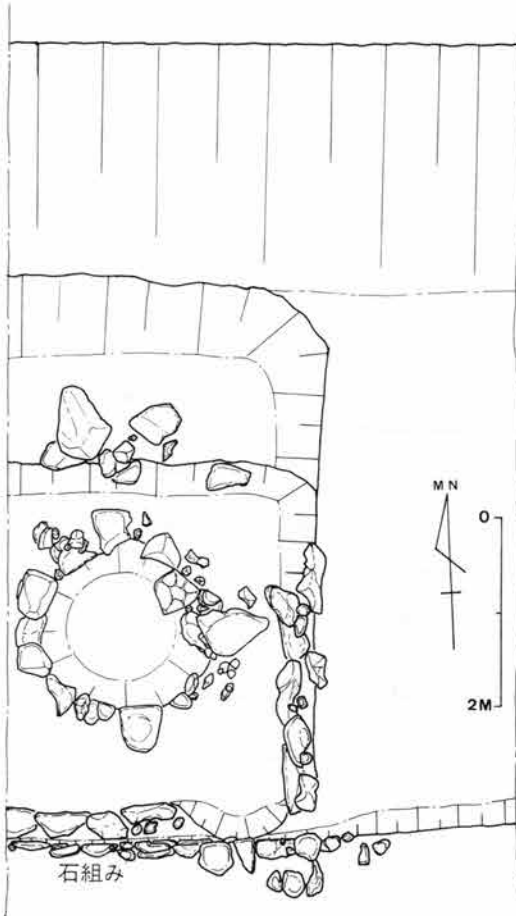


第69図 F トレンチ遺構配置図



第70図 Fトレンチ拡張区西壁断面図

- | | | |
|-------------------|-------------------|-----------|
| a. 暗茶褐色砂利層 | b. 暗茶褐色砂礫層 | c. 暗灰褐色砂層 |
| d. 暗灰褐色砂礫層 | e. 暗茶褐色土層 | f. 濁灰色粘砂層 |
| g. 暗赤褐色砂層 (Fe 沈着) | h. 暗褐色砂利層 | k. 明灰褐色砂層 |
| i. 褐色礫層 | j. 暗茶褐色礫層 | l. 灰褐色粘砂層 |
| m. 暗茶褐色礫層 | n. 灰褐色粘質土 (Fe 沈着) | |



第71図 Fトレンチ SE3 実測図

以下、杉板材で正円形に造られている。裏込めには、拳大の礫、瓦片、砂利が煩雑に投棄され、湧水に有効な状態を呈する。また、井戸周辺には一辺1m方形の石組みがめぐっており、さらに南辺には一段高くなった石垣がある。東壁断面の観察から井戸造営時期に構築された事は明らかであるが、用途等の点については、今後検討する余地を残している。井戸内の出土遺物は、「寛永通寶」・伏見人形・瓦・土師皿・挿鉢等である。(小池 寛)

Gトレンチ

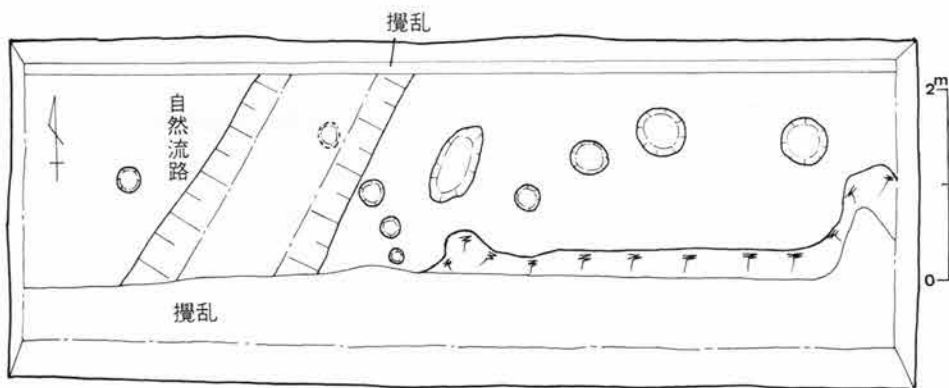
調査面積は40m²で、柱穴以外の遺構は確認できなかった。南北壁は校舎付随施設の基礎工事によって攪乱されており、西壁断面を実測するに止まった。基本的にはFトレンチ同様3層の確認ができ、各々、分層することができる。便宜的に中間層を第1遺構面、

最下層を第2遺構面とする。第1遺構面で検出した長方形の柱穴列は、周辺の地割に合うもので、柵列か建物跡の可能性はあるが、南北攪乱のため詳細は不明である。第2遺構面は柱穴群のほか、自然流路を検出した。流路は、Fトレンチ最下層とほぼ同じ状態で鉄分の沈着面が認められる。柱穴内からの出土遺物がまったくないため、比定できる時期は推測の域を出ないが、遺構検出面直上の遺物から江戸時代末期を若干、上下すると考えられる。

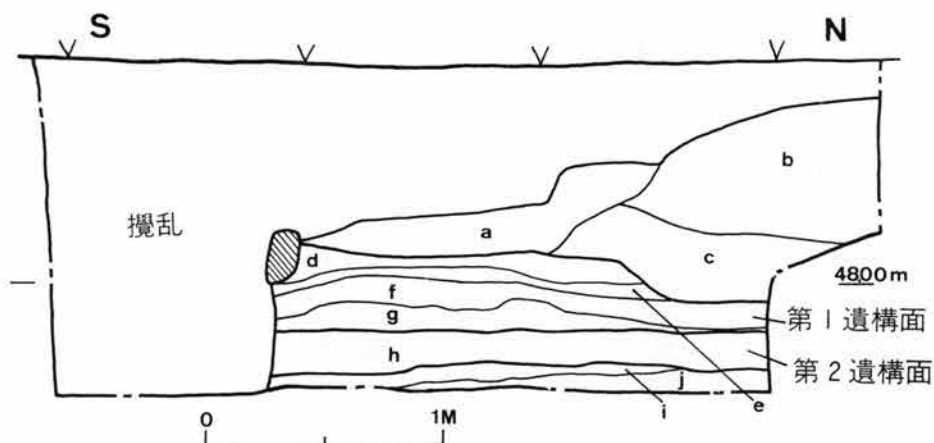
(神林 豊)

H トレンチ

調査面積は約 100 m² で、検出遺構は井戸2基・土塚3基である。堆積層は暗褐色粘質土層を境として上下2層で、下層上面では土塚を検出したり、多量の遺物を包含したりしてい



第72図 Gトレンチ第2遺構面遺構配置図



第73図 Gトレンチ西壁断面図

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| a. 暗灰褐色粘質土層 | b. 褐色砂利層 | c. 褐色礫層 |
| d. 灰褐色土層 | e. 暗灰褐色粘土層 | f. 灰褐色砂質土層 |
| g. 褐色土層 | h. 暗灰褐色砂質土層 | i. 暗灰褐色砂層 |
| j. 灰褐色砂層 | | |

る。トレンチの約1/3は、地下道付設による攪乱であり、極めて悪い状況であった。南壁に接して検出したSE4は、方形プランを持ち、掘形の周囲に明褐色砂質土がめぐっている。これは、隅丸方形の井戸を構築する工法と考えられ、類例調査を必要とするものの、構築技術を考える上で重要な資料となり得よう。SE5は一般に見られる普遍的な円形石組み井戸で、径1.4m・深さ2.7mを測る。構築技術上の正確さは欠くが螺旋状に積み上げている可能性がある。SK3は、一角をなす石組みのみが残存し、規模等は知り得ないが、坑内には多量の炭が堆積しており、竈であった可能性が強い。なお、その他の土坑は出土遺物が皆無で、用途は不明である。

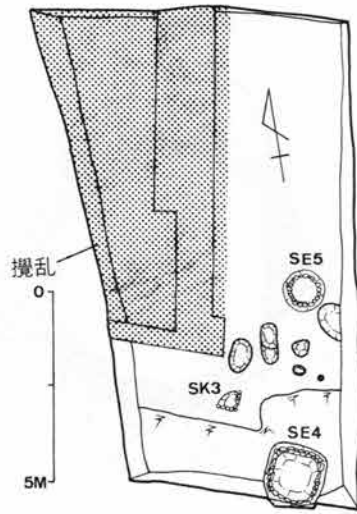
(小池 寛)

I トレンチ

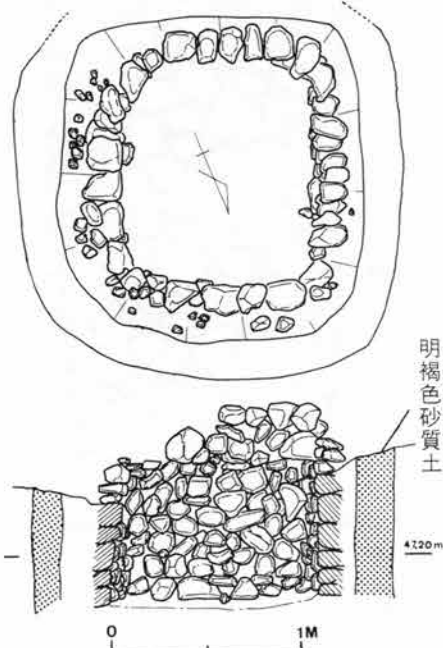
調査面積は約120m²で、柱穴列・井戸・土坑を検出した。堆積状況は極めて複雑である。西壁断面で観察する限り、少なくとも3層の氾濫による堆積が見られ、山状に拳大の礫層が断続的に存在するが、トレンチ内では茶褐色粘質土層下に堆積しており、西壁からトレンチ西部分に至るまで凹地状を呈すると考えられる。一方、出土遺物の最も多い茶褐色粘質土遺構検出面は、トレンチ南方に厚く堆積しており、また、氾濫による堆積層は、礫層、砂利層、砂層にそれぞれ分層できる。

さらに、トレンチ内より高野川上流で見られるチャートが観察できること等は、周辺環境復元の際、有効な資料となる。

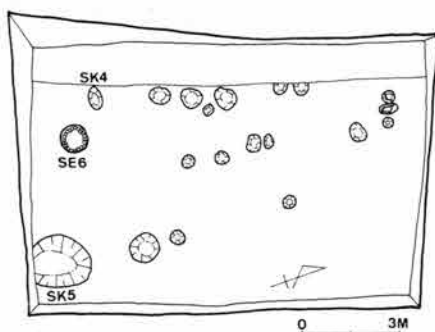
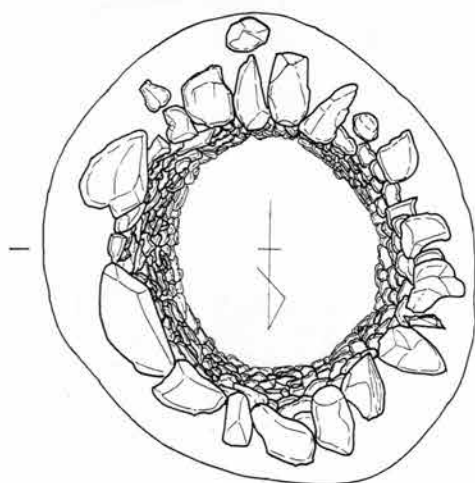
数多い柱穴の中で径70cmの柱穴列は、地割に沿っているので柵列の可能性が強いが、柱



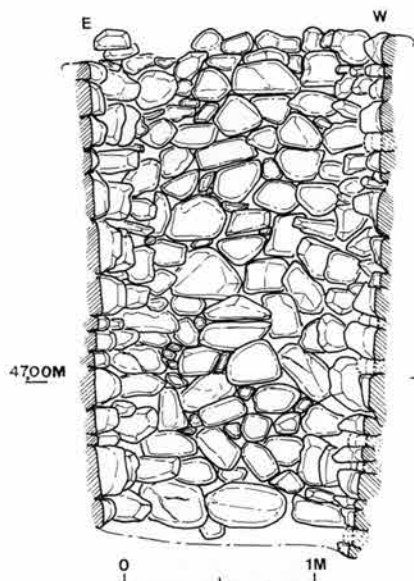
第74図 Hトレンチ遺構配置図



第75図 Hトレンチ SE4 実測図



第77図 I トレンチ遺構配置図



第76図 H トレンチ SE5 実測図

間距離が短いため、必ずしも断定し難い。なお、柱穴内から「寛永通寶」(新)が出土している。SK4は、不定形な土塚で、深さは平均20cmと浅い。瓦、瓦質の炭入れが出土している。時期は、江戸時代末と考えられる。

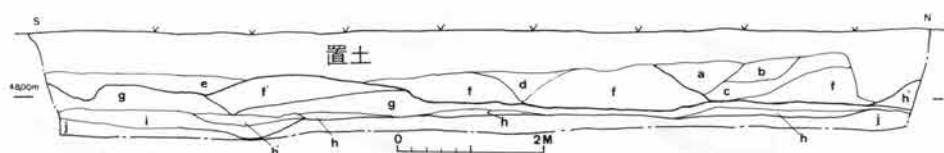
(坂本 守)

3. 出土遺物

各トレンチから出土した遺物は、総計、整理箱7箱である。しかし、前述したような状況であり、ほとんどが遺構・包含層から遊離した状態で出土したため資料価値は低いと言わざるを得ない。また、一括遺物においても氾濫による混入等、必ずしも遺構の年代を決定する上で絶対的価値を持つ物とは限らず、遺構の性格を考慮し、なおかつ、ある程度の

時間的幅を考える必要があることは言うまでもない。以下、上述の認識に立ち、出土遺物の概略を記述する。

土師皿(第79図1~6・10・11)は、出土遺物の中で30%を占める。細片のため、復元可能なものはわずかであるが、径10cm以下の小型、径11~12cmの中型、径14cm前後の大型に大別できる。また、ほとんどが底部外面に指頭圧痕を残し、内面に沈線を持つ(中型に多い)。陶器燈明皿(第79図8・9)は、体部内面に突帯をめぐらし、燈明芯用に突帯の一部を「V」



第78図 I トレンチ西壁断面図

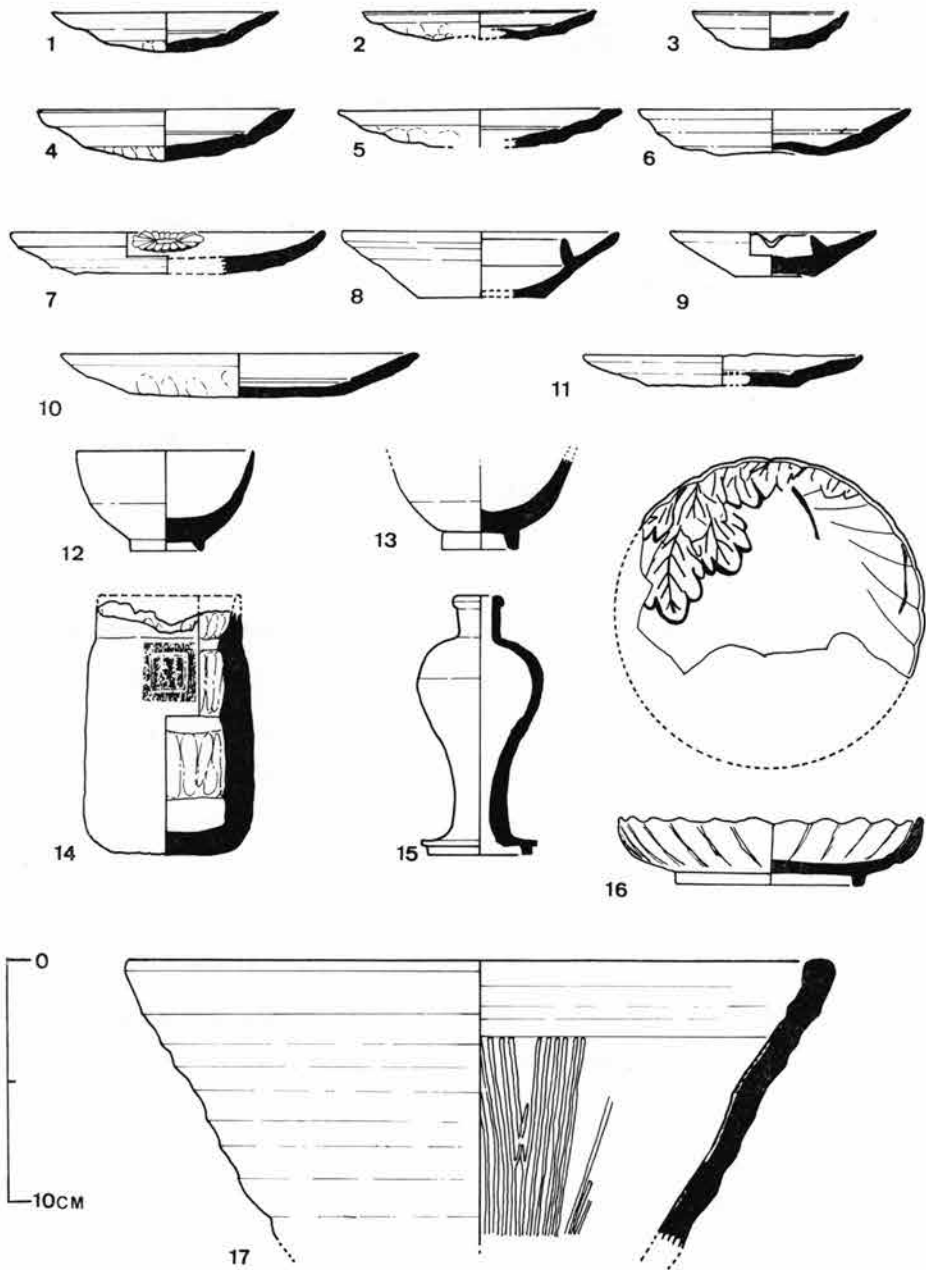
- | | | |
|------------|--------------------|------------------|
| a. 灰褐色土 | b. 灰褐色砂礫層 | c. 灰褐色砂利層 |
| d. 褐色砂 | e. 灰褐色砂層 | f. 褐色礫層 (f' 砂多い) |
| g. 茶褐色粘質土 | h. 暗茶褐色砂層 (h' 砂利層) | |
| i. 暗茶褐色砂礫層 | j. 暗灰色砂層 | |

字形に削り取る。磁器碗（第79図12・13）は底部が厚く、いわゆる伊万里焼であろう。平安京内で普遍的に見られる塩壺（第79図14）は、器壁が厚く、内面は凹凸が著しい。また、外面には生産地を記した刻印があるが、磨耗が激しく判読できない。鉢（第80図2）は、外部全体に光沢のある茶褐色釉が基調をなし、鉄釉を垂らしている。三足の脚外面から直線的に上がる体部と、外方へ折り曲がる口縁を持ち、口唇部に面を持つ、いわゆる美濃焼であろう。徳利（第80図3）は、口縁部を欠くが、体部は完存している。全面には暗茶褐色釉を施し、「小川与三郎」・「中徳」なる文字を白色釉で書く。挿鉢（第79図17・第80図4～8）は、ほとんどが17世紀末から18世紀前半に比定できる資料で、4～6条の挿目が密に施されているものと、単位間に間隔を有するものがある。また、口縁部の形態は、直線的に立ち上がる体部に、口縁外端に面取りしたもの、体部は同様であるが、上下に拡張された口縁部外面に沈線を施すもの等があり、詳細に検討を要するが、挿目と口縁部形態は、一定の時期幅を持って同一の変化があると考えられる。瓦質の炭壺（第81図2・3）は、把手を持つ蓋と、四脚の身からなる。蓋内面には段を有し、「十二」と篋描きがあり、丁寧ななでで成形している。一方、身の底部内面には「十一」と篋描きがあり、内面には非常に顕著な成形のなでが残る。なお、本資料は江戸時代全般の風俗絵図によって、一層明確に用途を知ることができると考えられる。

以上、出土遺物の形態を中心とした概略を記した。ほかに鍋・瓦・古銭（寛永通寶）・伏見人形・蔵骨用器・銅製品等が出土しており、紙面の都合上、言及できなかったが、時期的に17世紀中頃から18世紀全般に比定できる資料である。（小池 寛）

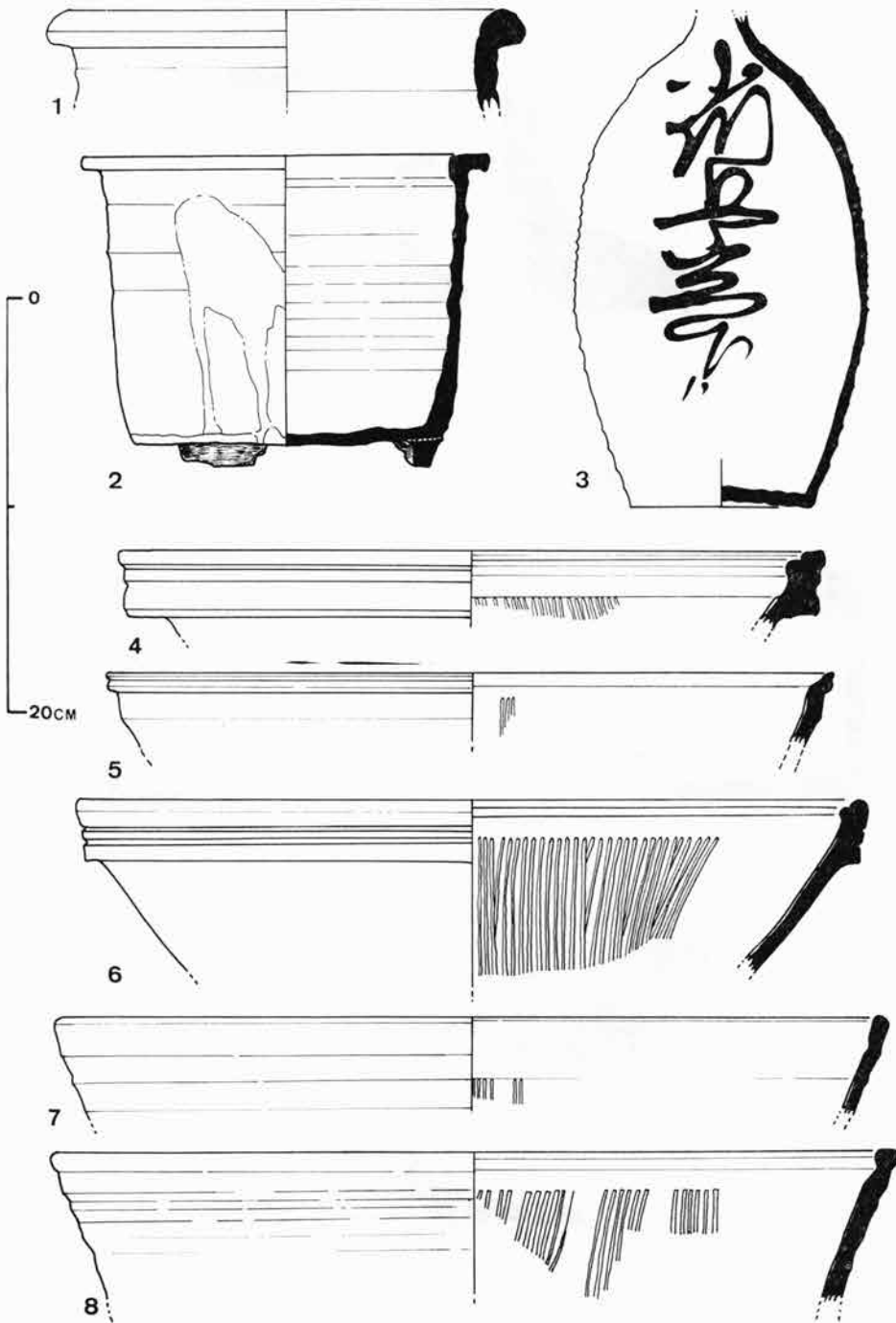
4. 小 結

近世に関連する遺構・遺物は、その性格上、古代・中世とは文献史料の精密さ等から、その資料の取扱い方に差異が生じてくる。例えば、土器の相対的な年代比定は、古代（弥生・



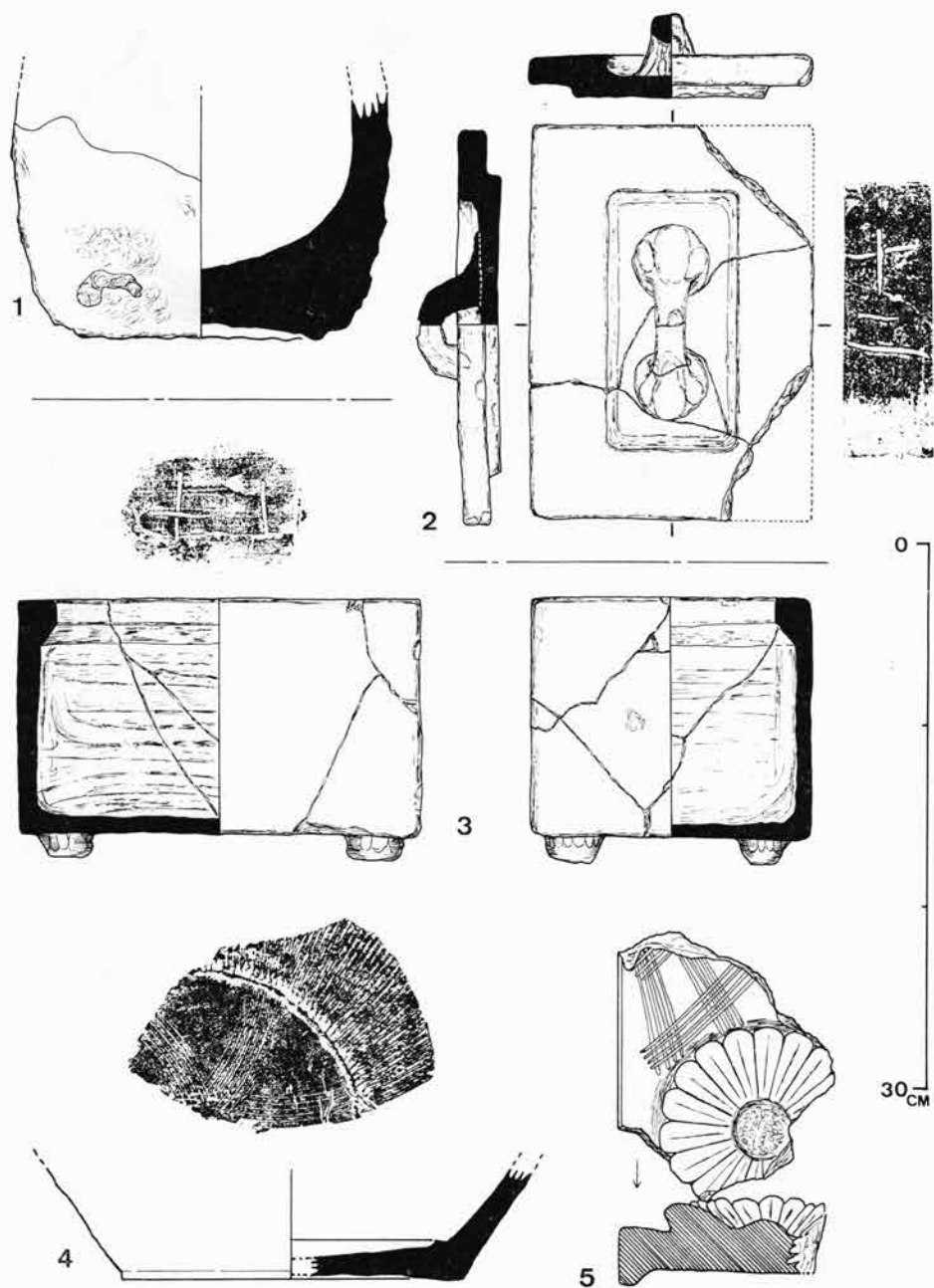
第79図 出土遺物実測図(1)

Fトレンチ SE3 (1・15・16), Fトレンチ拡張区f層(2・3・4・12・13・17),
Hトレンチ SE4 (5・6・8・10・11), Iトレンチ SE6 (7・9・14)



第80図 出土遺物実測図(2)

Fトレンチ拡張区9層(1・8), Gトレンチ第1遺構面(2), Hトレンチ
SE4(6), Iトレンチ9層(3・4・5・7) ※1は灰釉陶器



第81図 出土遺物実測図(3)

Fトレンチ SK1 (1), Fトレンチ SE3 (5), Iトレンチ SK4 (2・3),
Iトレンチ 9層 (4) ※2と3はセット

古墳・奈良時代等)では層位学的方法・型式学的方法が主流を占め、何れに傾倒するかにより、編年観が変わり論議を呼ぶが、近世資料(特に、土器)においては、当然、二者が主流を成すが、他方、文献史料も重要な根拠となり得る。この件に関しては、同志社大学鈴木重治氏により詳細に論述されている。以下、簡単ではあるがこの点について述べておく。

京都の災害を記載した文献に『日本災異史』^(注1)があるが、この様な火災・水害の跡を示す焼土層・礫、砂利層を本調査でも確認することができた。焼土層はトレンチ全面では検出できなかったが、一定レベルで確認でき、文献との対比で包含されている土器の年代を与うる可能性がある。また、水害(氾濫・洪水)についても、同様の見解が得られるであろう。

(氾濫・洪水前の生活面の流失、土器の遊離等、好条件とは言えないが、層位的に年代を与えられる。)一方、考古学的方法を用い、特に、土師皿と播鉢を中心にし、共伴した陶磁器類の年代を与えることも可能である。最近、亀岡市下矢田町医王谷焼窯跡では、江戸時代末から明治時代初頭にかけての遺物が確認されているが、この様な生産地(窯)の激増によって、需要地での編年作業は極めて複雑な様相を呈している。今後、近世遺物の時期的な問題に関しては、生産地での分類・編年が重要な根拠になり得るのは必至で、その成果に期待する部分が大いことは言うまでもないであろう。今後、本調査で確認した事実も、一層明確になると考える。

最後に、法成寺に関係する遺構については、何ら検出できなかったことから考えて、本地以南に存在した可能性が高いと言えるかもしれない。(小池 寛)

注1 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会 1978

『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』同上 1981

注2 小鹿島 果編『日本災異志』思文閣 1973(復刻)

注3 当調査研究センター調査員 引原茂治氏に説明を受けた。

参考資料

平良泰久ほか「平安京跡(二条大路)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』

京都府教育委員会) 1980

『相国寺旧寺域内の発掘調査』成安女子短期大学校地学術調査委員会 1977

『京都市護王神社境内遺跡の発掘調査概報』(『花信風』創刊号 花園大学考古学研究会) 1976

『京都市史』京都市役所 1947

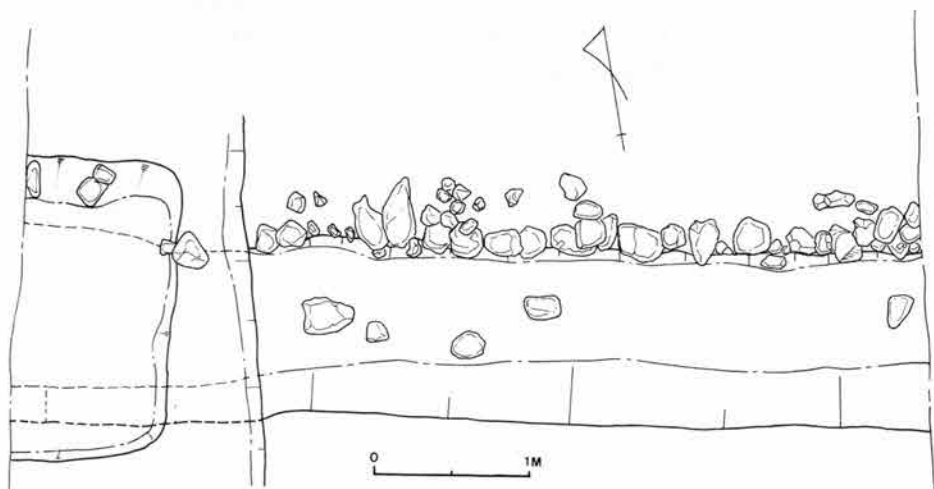
(3) 第 3 次 調 査

第2次調査に続き、2本のトレンチ（J・Kと称す）を設定した。Jトレンチは、置土・茶褐色粘質土層・暗褐色砂層の堆積が認められるが、顕著な遺構はなく遺物も皆無に近い。Kトレンチは、基礎工事が70%に及び、わずかに遺物包含層が残存する。土層は置土・黒褐色土・茶褐色土の3層で、おもに黒褐色土層に遺物が集中している。また、黒褐色土層上面で幅1m・深さ0.3m、北側に石列を有する溝1条を検出した。出土遺物は、第1・2次調査で出土している大・中・小型の土師皿で、これらも同時期である。全体的に見て出土遺物にはバラエティーがなく、土師皿が80%を占め、ほかに磁器碗・瓦片・鉄製品等がある。一方、包含層から塩壺が出土しているが、これは第2次調査の物とは異なったタイプである。類例としては護王神社境内遺跡等、数多くあり「泉州麻生」なる刻印も普遍的に見られる。第3次調査は、前述のように極めて悪条件であったが、第1～3次の発掘調査で言えることは、(1)遺物包含層は御所に近づくに従い厚く堆積する。(2)墓地と居住空間は何らかの施設で区画されている。(3)第3次調査で検出した溝同様、ほとんどの遺構は地割に沿う。等が指摘できよう。

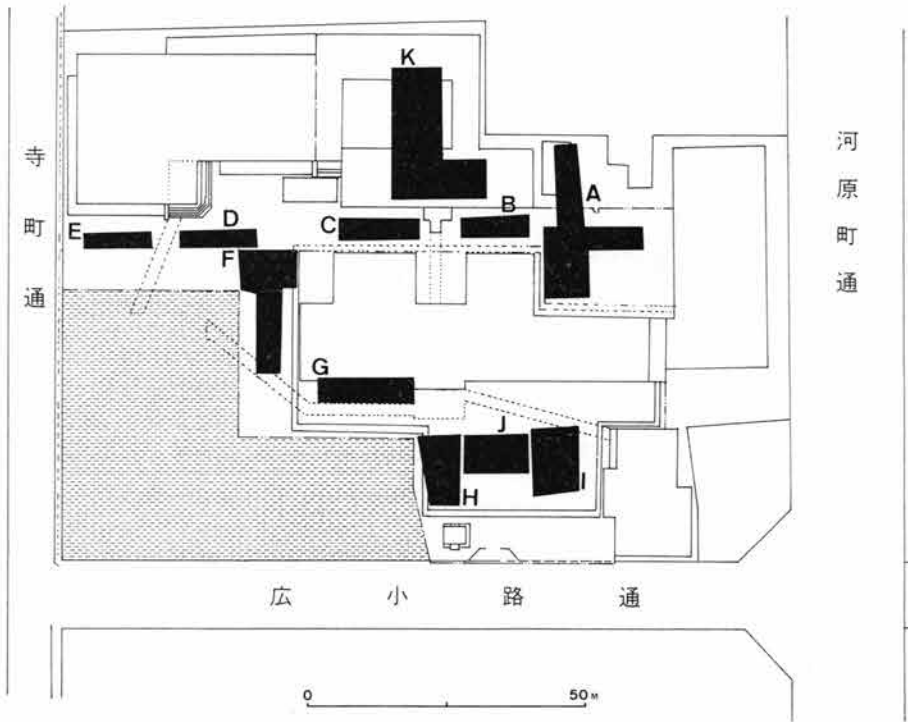
(小池 寛)

注

- (1) 部分的に赤褐色土や炭が混じっており、焼土層としてとらえられる。
- (2) 『花信風』創刊号 花園大学考古学研究会 1976 (第2次調査参考文献に同じ)
- (3) 現府立医科大学附属病院建設時の調査では包含層は認められていない。



第82図 K トレンチ溝の実測図



第83図 法成寺跡トレンチ配置図

5. 伏見城跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、京都市伏見区桃山毛利長門東町8に所在する京都府立桃山高等学校の校舎増改築工事に先だち行った発掘調査である。当高校敷地は伏見城の一画にあたり、以前から瓦類の出土が伝えられるとともに、昭和55年度の体育館建設に際して行われた発掘調査^(注1)でも、土壇・瓦溜めが検出された。

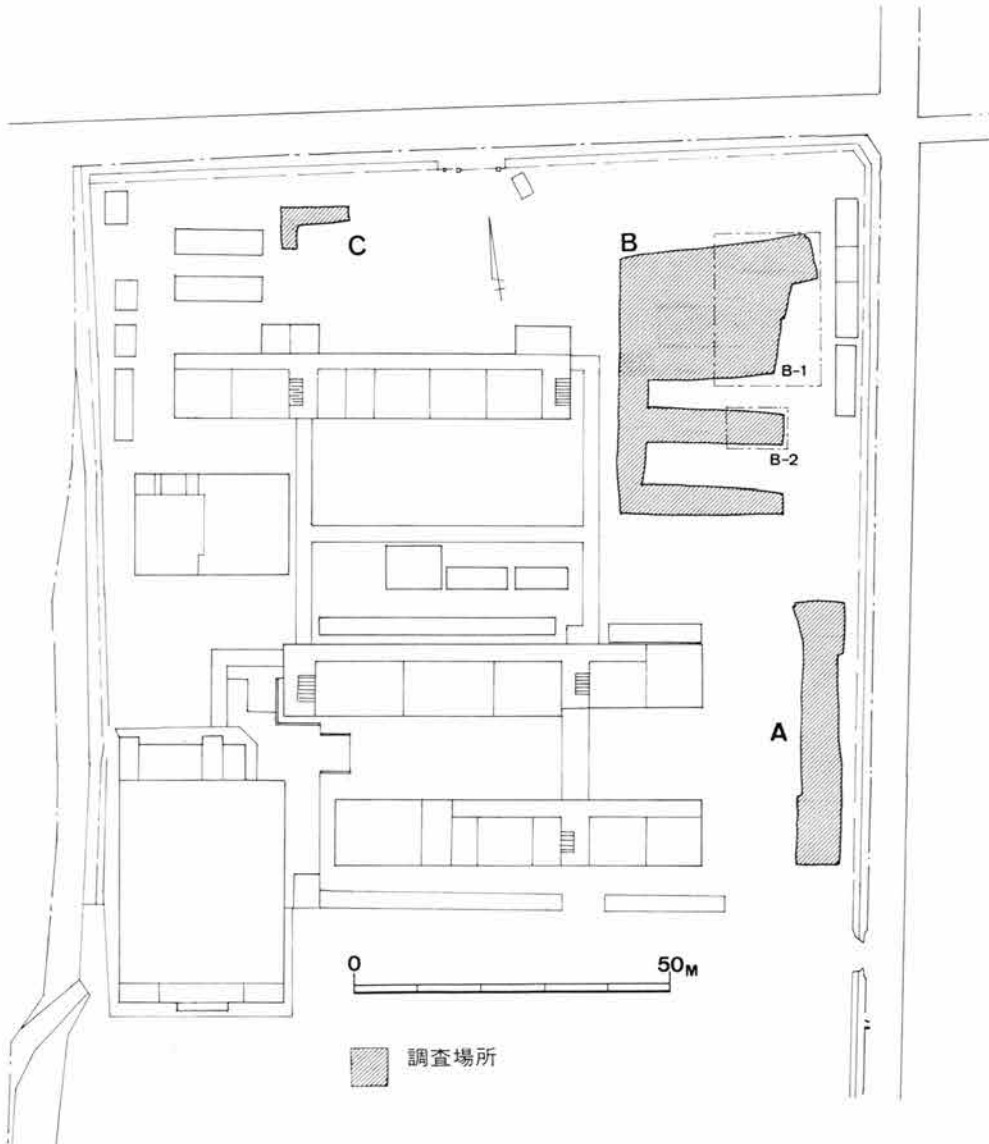
今回は、一部の校舎の取り壊し後、新たに建設されることとなった格技場・教室棟・昇降口部分を対象に、それぞれ、A・B・C地点として調査を行った。調査は、昭和57年12月から現地における準備を開始し、翌58年1月13日から掘削をはじめ、同年2月28日に現地調査を終了した。



第84図 調査地位置図(1/50,000)

調査にあたって数々の御協力・御指導をいただいた関係諸機関の方々には、心より御礼を申し上げます。

伏見城は、京都盆地の東を画する東山丘陵の最南端で、京都の玄関口ともいふべき位置に、文禄元（1592）年、豊臣秀吉によって築城された。当初、秀吉の隠居所的な意味を持つものであったが、後に拡大・整備され、大名屋敷・町屋を含め、大規模な城郭へと発展する。し



第85図 トレンチ配置図

かし、地震・関ヶ原の戦等の事件によって倒壊・焼亡を繰り返し、その都度再建される。やがて、徳川氏に政権が移り、その存在意義も歴史の動きとともに変化する中で、三代将軍家光の代になり廃城となる。その間、約30年、数々の歴史的な舞台ともなり、華々しく喧伝される城ではあるが、極めて短命のものであったといえる。

調査地は、京都市南部、近鉄京都線丹波橋駅の南東方約400mの位置にあり、標高57～59mを測る丘陵上である。高校敷地の西側は段丘崖となり、約10mの高低差がある。この段丘崖は南北にのび、伏見城の内城と外城を分ける線を構成している^(注2)。城の主要部分^(注2)は、調査地東方の丘陵頂部とその周辺に推定され、現在は、明治天皇・皇后、あるいは桓武天皇陵の墓域として管理されている。調査地付近は大名屋敷跡と考えられ、範囲は確定していないが、地名等から毛利家の可能性が高いと推定されている。周囲には徳川家・福島家に関連する地名が残っている。また、伏見城跡は以前から金箔瓦の出土する所としても知られ、採集活動・発掘調査等^(注3)によって数多くが出土している。その結果、金箔瓦の分布は城の主郭部分に留まらず、大名屋敷も含めた広範囲に及ぶことが知られている。

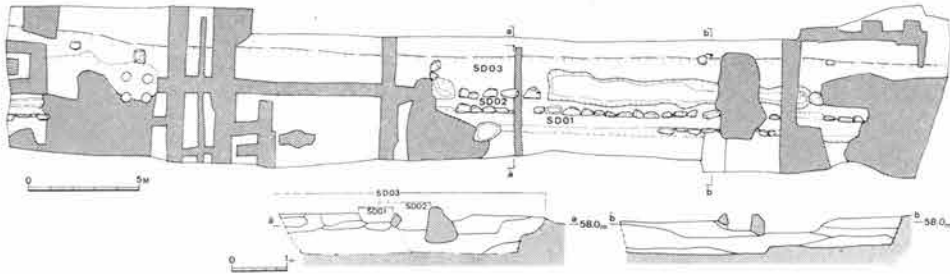
2. 調査概要

調査は、A・B地点より開始した。重機によって近・現代の盛土である表土層を除去するとすぐに地山という状況であり、各種遺構はそれを切り込んで形成されていた。A地点は、東西5～7m・南北42m、B地点は、E字状に約1,100m²を掘削した。全体に新旧建物の基礎とそれに伴う攪乱が多く、検出した遺構に影響を与えていた。当初、調査地東方は、標高が多少とも高いため、耕作あるいは学校建築時の整地等による削平を受けていることを予想したが、現状は、それとは逆に調査地東縁に沿って遺構を検出した。遺構検出面となった地山の状態は、B地点北側では砂層であり、南および西では赤褐色粘質土であった。それぞれ、大阪層群の範疇に入るものと考えられる。

検出した遺構には、A地点では3条の溝、溝内を埋める形の瓦溜り、建物礎石3か所があり、B地点では井戸と大小の土坑群を検出した。

(1) A 地点

SD 01 石組溝で内幅約50cm・深さ約30cmを測り、溝内側は比較的面が揃えられている。断続的ながら、調査地北側で約18m、南端で2mを検出したが、調査地南半の約18mの間は検出されていない。石は、抜き取られている部分も多いが、長さ50～90cmのものが使用されている。溝底部には砂質土が薄く堆積していたが、特に人工的な施設は認められなかった。溝内からは金箔瓦を含む多数の瓦類が出土した。



第86図 A地点平面図および断面図

SD 02 SD 01 と同様な石組溝である。遺存状態は極めて悪く、その西側石列の一部をトレンチ中央部で約 4.5m 検出したに留まり、幅は不明であるが SD 01 より大型の石が用いられている。SD 01 が構築される時、もしくはそれ以前に破壊された部分が多く、その東側石列は、SD 01 の位置と重複すると考えられる。なお、この石列は、トレンチ中央部で西側へほぼ直角に石 3 個分（約 1.5m）折れ曲り、終っている。この折れ曲った部分は、南に面を揃えているが、相対する石列はなく、この部分では溝とはならない。この南側では石組溝は存在しなかったが、約 12.5m 離れた所に、折れ曲った石列の先端部分に対応すると考えられる石が一個、面を北側に向けて原位置を保っていた。

SD 03 地山を掘り込んで構築された素掘りの溝と考えられるが、その東側は、調査地外となるため確認できなかった。検出面から、深さ約 60 cm・幅約 5m 以上を測る。一部に小礫・瓦が集中して堆積するとともに、他の堆積土の状態からも意図的に埋められたものと考えられる。この溝は、上部の削平も考えられるが、深さに比べて幅が広く、他の 2 条とは大きく様相が異なる。

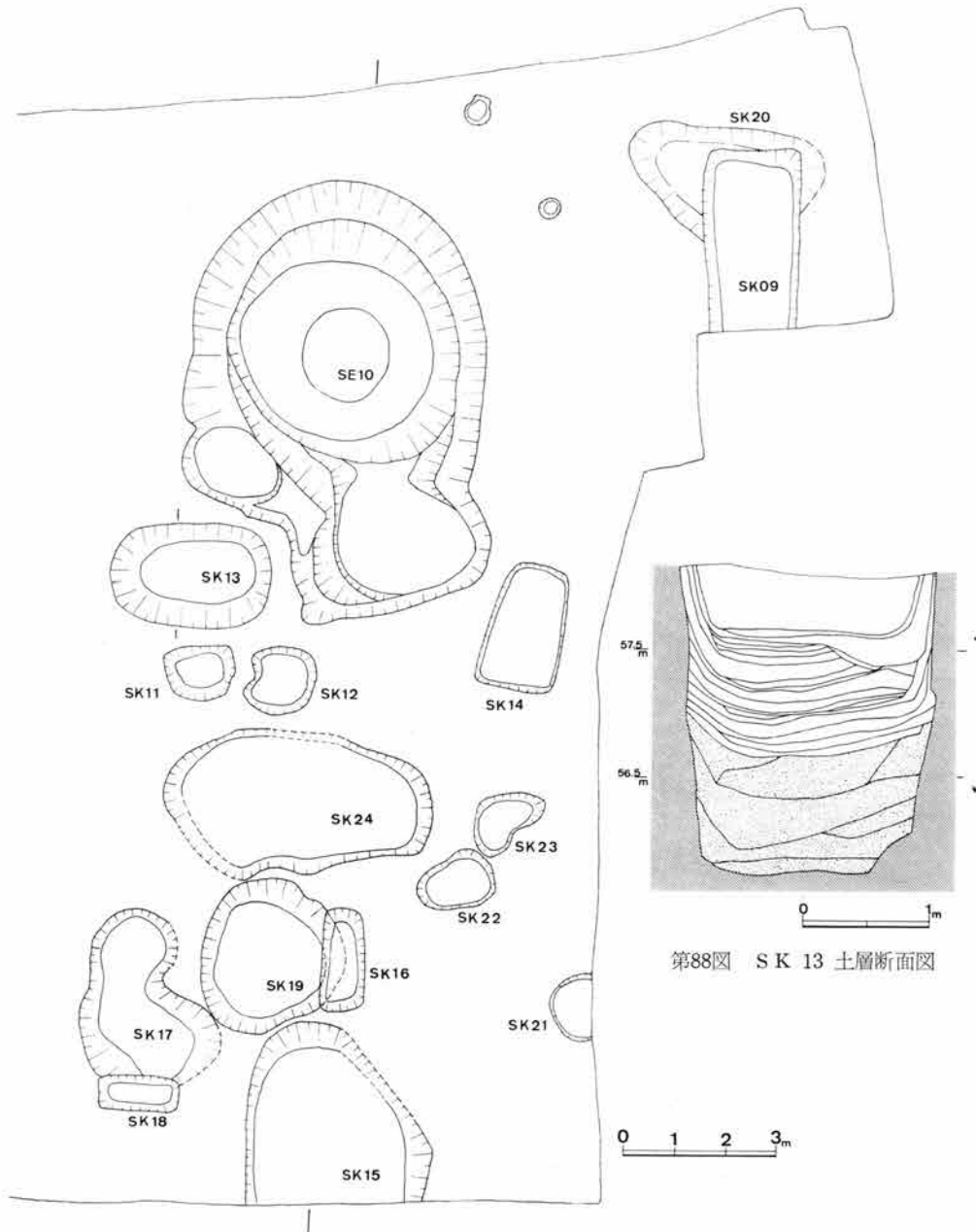
また、A 地点では、扁平な河原石を用いた礎石が 3 か所で検出できた。トレンチの西側、SD 03 の西側の肩の線に沿って、ほぼ、南北一直線上にならぶが、40m の間に 3 個という状況から、この礎石に伴う構築物を明確に想定することはできない。ほかにトレンチ南部で正方形にならぶ 4 個の柱穴状ピットを検出したが、攪乱坑の底で確認したものであり、極めて浅くしか残らず、時期も不明である。

A 地点で出土した遺物は、瓦類が大部分を占め、各溝中から検出した。

(2) B 地点

B 地点では、調査地東側で不定形な土塚 20 と井戸 1 基を検出した。学校建設以降の盛土である表土層下 20~40 cm で地山が現われ、遺構はその面で確認できた。地山は、北東部分が

砂層であり，南に行くに従って徐々に細砂層となり，南半では赤褐色粘質土になる。旧耕作土等は存在せず，近・現代の整地の際，ある程度削平を受けているものと考えられる。



第87図 B地点北東部分(B-1)遺構平面図

第88図 SK13土層断面図

SK 07 長径 1.1m・短径 0.8m・深さ 0.35m を測る隅丸方形の土坑である。第93図11の菊花文軒丸瓦の類が内部を埋めていた。この種類の瓦は、ほかから一切出土していないため、他の土坑との間に時間的な差があるものと考えられる。

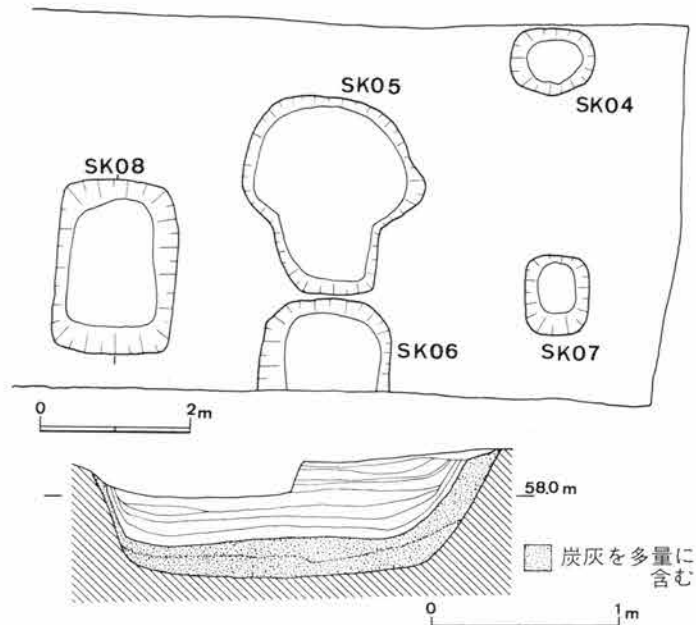
SK 08 (第89図 図版第66) 南北 2.1m・東西 1.6m・深さ 0.68m の隅丸方形を呈する土坑である。坑内側面および底面に貼り付くように大量の土師皿と若干の瓦・陶器類が炭・灰とともに投棄された状態で検出された。しかし、上部埋土にはほとんど遺物を含まず、褐色系の砂質土等が薄く数層にわたって重なるという状態であった。遺物・灰等の堆積は、底面で厚く、側面では上部になるほど薄い。それらの投棄後、この土坑は再度付近が整地される段階で意図的に埋められた可能性が高い。

このように、上部に薄層が重なり、底面に炭・灰混じりで遺物が出土する土坑は、ほかに平面形は異なるが、SK 06・SK 15・SK 17・SK 19 および SK 13 がある。

SK 09 南部は検出できなかったが、東西 1.9m・南北 3.5m 以上を測る長方形の土坑である。埋土には多量の炭を含むが、SK 08 等とは違い、底・側面に限らず埋土全体に含まれている。遺物は、土師器・瓦類が多い。

SE 10 直径約 5.7m の円形部分に楕円形部分 2 か所が付属した平面形を持つ。輪郭検出面より約 2m 下がった所で一度平坦面を形成し、そこからさらに中央部に直径 1.9m の円形に掘り下げられてい

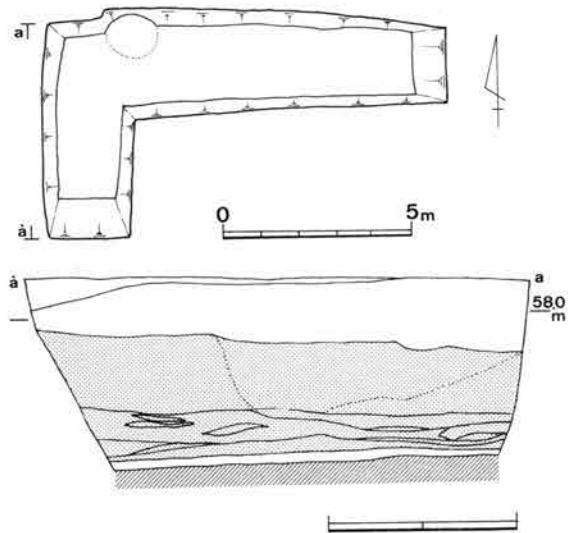
る。深さ 4.1m まで掘り下げたが、底面までは至っていない。瓦・土師器片が点々と出土したが、まとまっては出土しなかった。土層断面で観察すると、下部の掘り込みの径に沿って上部にまで垂直に土層変化があり、桶状のものを積み上げ、埋め込んでいたものと考えられる。丘陵上であり、湧水層まで掘削し



第89図 B-2 地点遺構平面図・SK 08 土層断面図

得たかどうかは不明であるが、井戸として利用されていたものと考えられる。

SK 13 東西3.1m・南北1.95mの楕円形を呈する土塚で、深さ2.4mを測る。埋土の状態はSK 08等と共通し、上部では薄い層が幾重にも重ねられ、下部に遺物・炭等を多量に含むという状態であった。下部は、上層によって水の浸透が妨げられ、ある程度乾燥状態となり、箸・



第90図 C地点平面図および西壁土層断面図

下駄・板等の木器類が遺存していた。また、金箔の残存状態の良い瓦も出土している。この土塚は、埋土の状態等、他と共通する要素もあるが、他に比べ著しく深く、湧水層までは達していないが、井戸的な用途で設けられた可能性が高い。

SK 21 直径1.3m・のほぼ円形の土塚である。埋土に灰等は含まず、淡褐色の砂質土が一様に入っていた。底面には円形の木板が敷かれていた痕跡が残ることから、桶状のものがはめ込まれていたらしい。深さは50cmである。

SK 24 東西5.2m・南北2.8mを測る不定形な土塚である。深さ38cmと浅く、瓦がやや集中している所を掘り下げた結果、輪郭を確認したもので、出土瓦数は必ずしも多くないが瓦溜りであると考えられる。

(3) C 地点

学校敷地北端に近い所で、昇降口建設予定地である。L字状に36m²を掘削したが、遺構は認められなかった。土層断面を観察すると、現地表下約2mで赤褐色粘質土の地山となるが、その上に約12cmの厚さで旧地表の表土があり、その上にさらに1.1~1.3m、人工的に土を盛って、整地されている。その整地層も下部では異種類の土が重ねられているが、上部では同質に近い土が一気に盛られ、大きく2層に分けることができる。その相異が単に土の採取地によるものか、時期的なものかは明確ではない。遺物は、整地層上面付近で瓦類が出土した。

3. 出土遺物

A・B・C地点から出土した遺物には土師器・陶器・瓦・木器・鉄器・銭貨・鉄鏝等がある。A・C地点の遺物の大半は瓦類であり、比較的各種のものが出土したのはB地点の土坑内である。

(1) 土師器 大小の皿が主体を占め、他の器種は数点である。SK 08 の遺物で見ると口径 10.5 cm 前後、13 cm 弱のものが多く、一部、口径 16~20 cm のものがある。底部内面にやや不明確な圏線をめぐらし、径 10.5 cm のものではその終りがはねあげられているものが多い。口縁部は肥厚するもの、上方で薄くなるものなどがあり必ずしも一様ではない。全体になでて仕上げているが、「指おさえ」の痕跡を残すものも多い。

土師器では他に箸置き 1 点と、壺等の小破片が少量出土している。

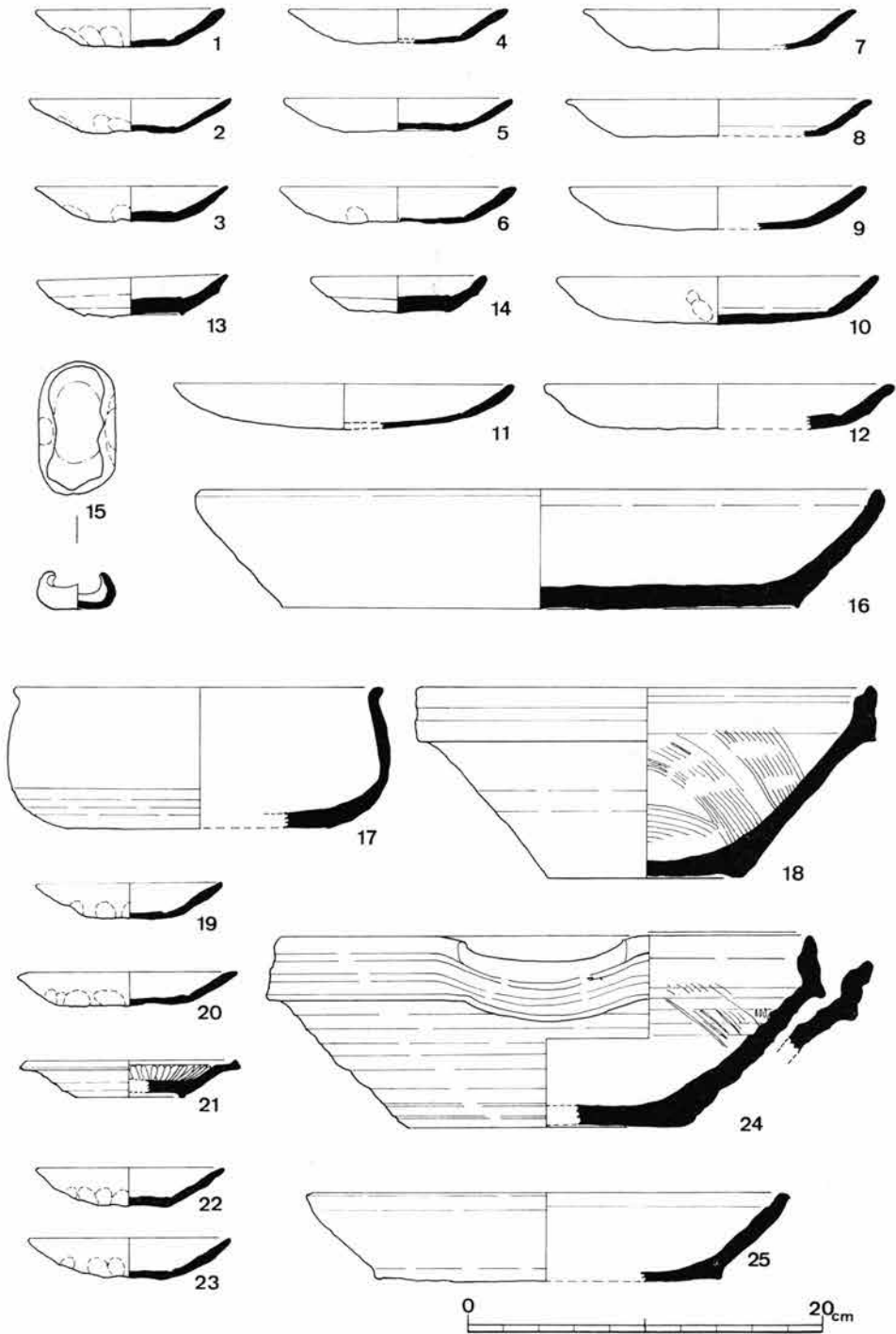
(2) 陶器 播鉢・灰釉鉢・皿・盤がある。播鉢(第91図18・24)は、暗茶褐色を呈し、図示したものではそれぞれ口径 30.2 cm、24.8 cm を測る。口縁が大きく立ち上がり、その外面に数条の凹線がめぐり、内面には不定方向ともいえる櫛描条線が施され、一部では交差している。胴部外面には轆轤による成形時についたと考えられる凹凸がめぐり、24は、片口兼用となっている。備前にて生産されたものと考えられる。^(注4)

(3) 灰釉陶器(第91図13・14・17・21) 皿・鉢がある。13・14は、ほぼ同様な形態を持つもので、台部以外には緑色の灰釉が内外面ともに施されている。肉厚な造りで外面下部が削られ、内面底部には重ね焼きの痕跡が浅る。21は、同様に施釉された皿であるが、内面には菊花状の掘り込みがあり、いわゆる菊皿と呼称されるものである。17は、口径 20.8 cm を測る鉢で内外面ともに施釉されている。口端部は外に折り曲げられ、丸くおさめ、外面下半部には削り痕を残す。

(4) 瓦類(第92・93・94図 図版第67・68・69) 軒丸・軒平瓦、丸瓦、平瓦、方形・円形装飾瓦、鬘斗瓦、面戸瓦、鯨瓦がある。

軒丸瓦は、大部分が三巴文であり、珠文の数・周縁部の大小・巴文の形状等によって数種類が存在する。直径 13~15.8 cm、珠文数11~14個、周縁幅 1.6~3.2 cm を測る。金箔は、周縁部と内区内の文様部分にだけ施される。

他の軒丸瓦は、それぞれ少量ではあるが、輪宝文・日の丸扇文・菊文が出土している。菊文は、周縁部を持たず、砂粒の多い胎土で灰褐色を呈し、10弁の肉薄な菊が施されている。調査地全体を通して、SK 07 だけで出土している。日の丸扇文は、軒丸・軒平瓦各 1 点の出土であるが、セット関係になる。この瓦は、高校敷地から道路を隔てた東側で調査が行われた際、比較的多く出土したと伝えられる。



第91図 出土遺物実測図(1)

軒平瓦は、退化した均正唐草文が主体となるが、ほかに上記の扇文・雲文がある。雲文と考えられるもの(第93図8・9)は、軒丸瓦の重なる部分が削除され、その下部も丸い3つの山形になるという特異な形態を持つ。また、瓦当面对し、平瓦部分の接合幅が狭く、各種の力にどの程度耐えられるかとの疑問点も残る。軒平瓦の場合、金箔は軒丸瓦と同様に周縁部と文様部分に施されるが、瓦当面両端の軒丸瓦に重なる部分には施されていない。

方形装飾瓦(第94図)には菱文(1)、木瓜文(2・4)、梅鉢文(10)と釘抜文がある。1・2は、長辺30cmを越える大型品であり、3・6・7は長辺約17cm、8は約24cmを測る。種類では釘抜文が最も多く、その中には、図示できなかったが、線刻によって文様を表わしたものもある。

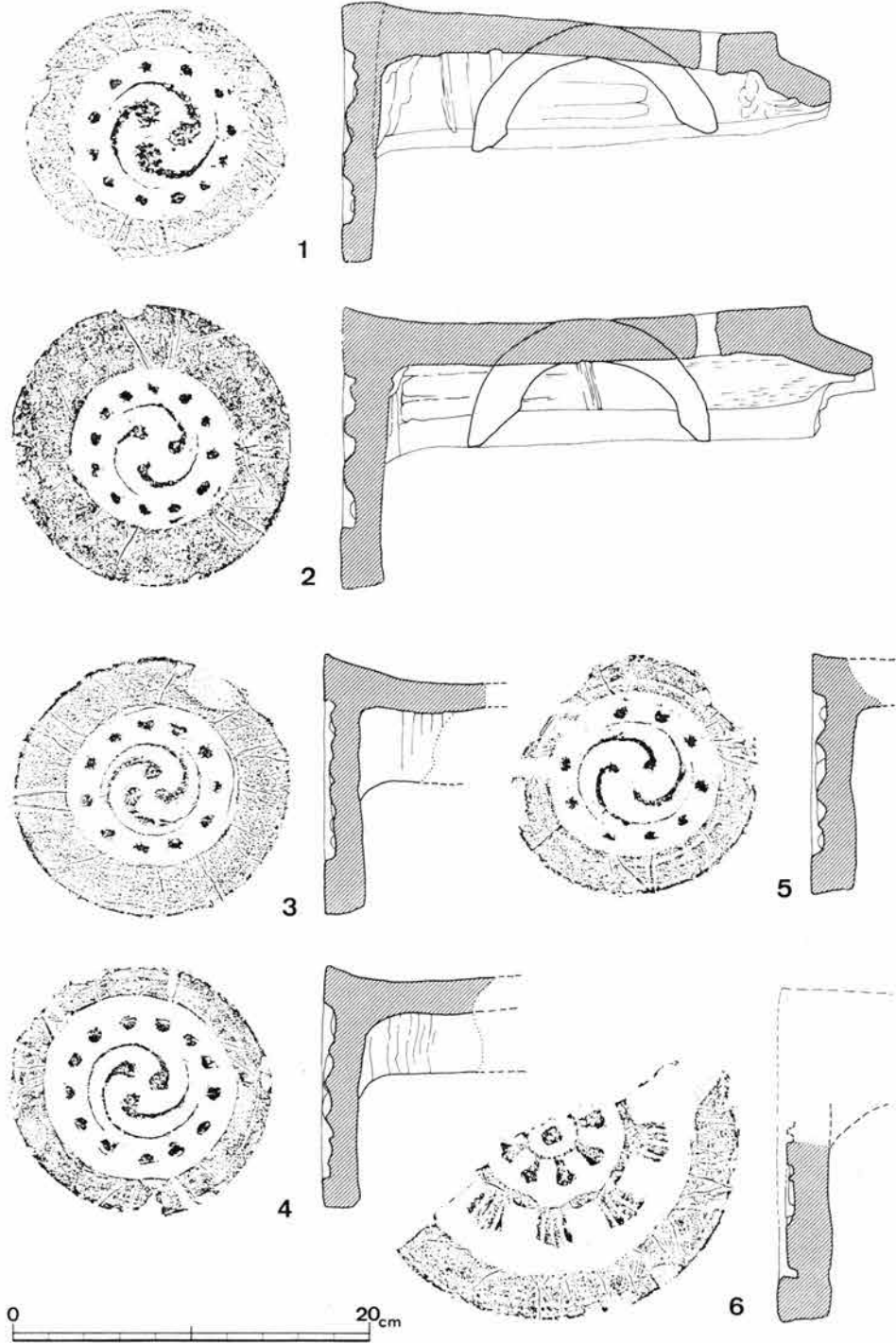
ほかに、瓦類では、菊花文の円型棟先瓦(第93図12)や鯨瓦の鱗部分の破片がある。

4. おわりに

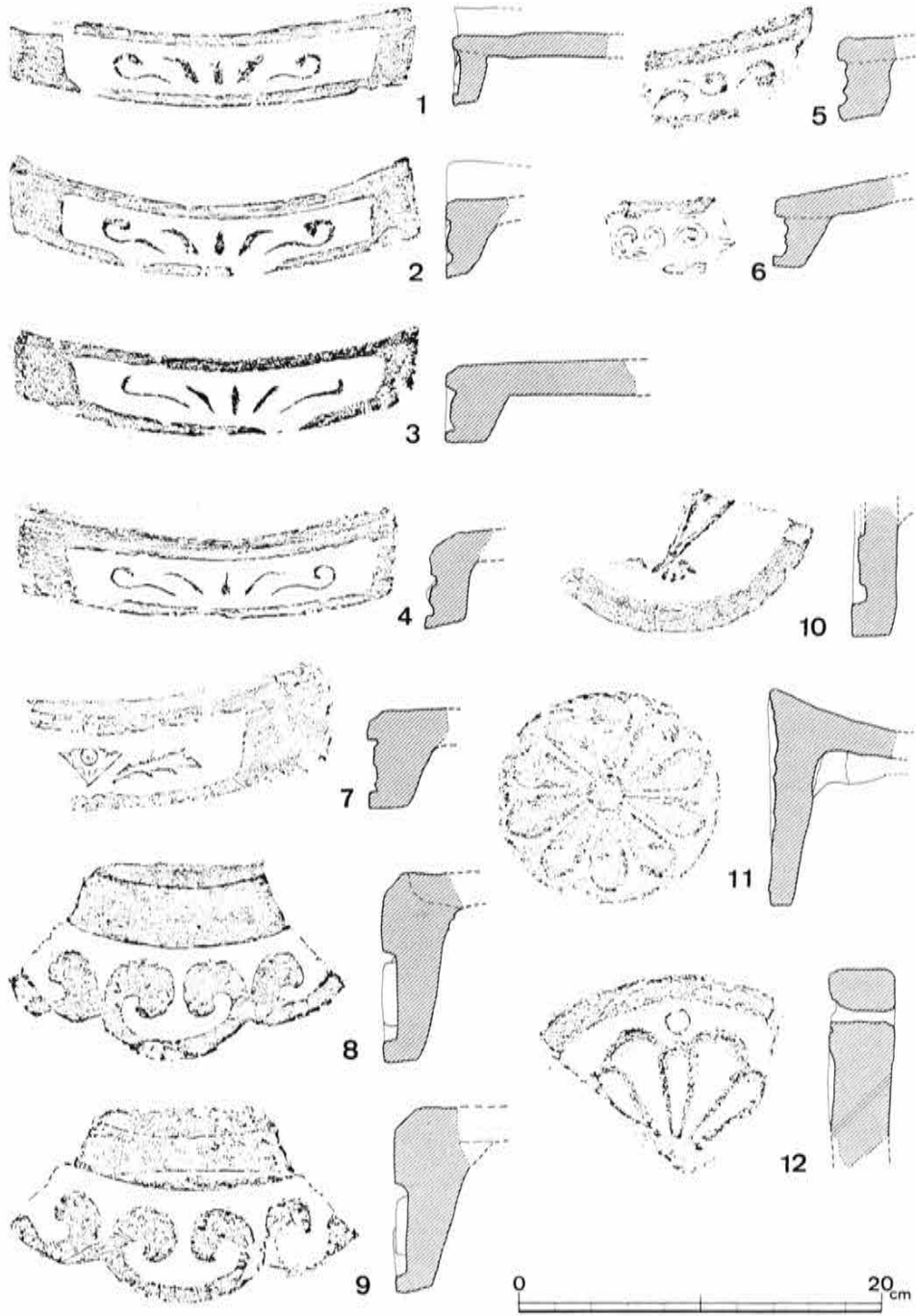
伏見城は、安土・桃山時代、豊臣秀吉の築城に始まり、徳川家三代将軍家光の代に至るまで、この時代の政治の動きの中で幾度か中心的な舞台となった城である。しかし、近年、種々の開発が進行する中で、面的な調査の事例は数少なく、また、城の主要部分が明治天皇等の陵墓城となり立入禁止となったため、遺構等が温存されている反面、主要建物の位置も充分には確定されていないのが現状である。その周辺についても、現在に伝わる伏見城の絵図や町割・地名等による復元にも限界があり、その全容は不明確な部分が極めて多い。

このような状況の中で、今回の調査も広大な城跡内の一点に過ぎないが、A地点で検出できた溝跡は、大名屋敷を区画した一つの線を示唆するものである。この溝が重複していることから、この南北の線が当時ある程度固定したものであったことが窺える。それは当調査地の東側を南北に走る通称「伊達街道」と呼称される道路が伏見城築城当時、この位置に計画的に施設されたと考えることを補強する側面も有している。

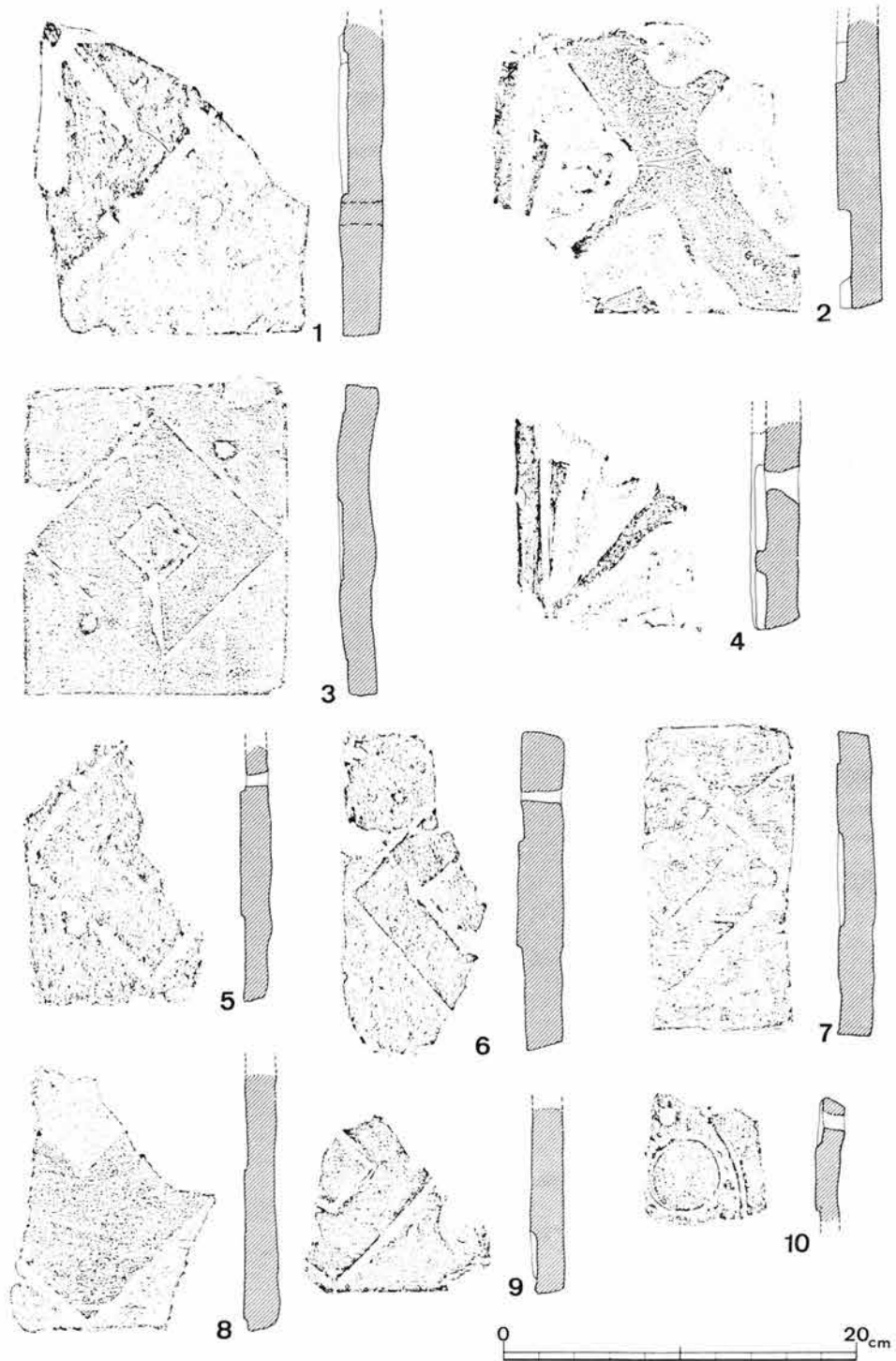
検出した各遺構の形成された時期は、A地点の溝で3段階あり、B地点の土壇群でもその埋土の状態から数段階あるものと考えられるが、出土遺物からの判別は明確ではない。記録に残る伏見城に関する記事では、1592年の指月城築城、1596年の地震による倒壊以後の築城、1600年の関ヶ原の合戦による落城の後の修復、1604年以後の徳川家康の指示による修復等が見られる。このように、伏見城に関して幾度かの建設・修復の記事がみられるが、このほかにも記事の有無にかかわらず、火災等、種々の要因による建物の消長があったと考えられる。それに加え、伏見城の主要部分を中心としたこれらの記事と、大名屋敷跡と推定される調査地付近では、各事実の発生に差が生じていることも考えられ、各遺構をそれぞれ、どの時点



第92図 出土遺物実測図(2)



第93図 出土遺物実測図(3)



第94図 出土遺物実測図(4)

に對比できるかは、具体的な根拠に乏しい。逆に伏見城の初期（指月城の頃）、地震による倒壊までに、この付近の大名屋敷も含めて、城の整備がどの程度行われていたか、金箔瓦が大名屋敷にどの範囲で、いつの時点まで使用されたか、関ヶ原の合戦によって大名屋敷がどのように処隔されたか、伏見城の主要部分が解体される過程で大名屋敷はどのように終息したかなど、必ずしも明確にし得ない面も多い。

また、土坑群にも埋土の差があり、ある程度の前後関係を想起させるが、確定ができない。土坑群とA地点の溝との関係も現時点では把握できないが、埋土上部に整理層を持つもの、大量の土師皿・灰等が短時間に投棄された状況を示すものなど、特徴的な土坑も検出できた。そして、B地点では全体的に炭・灰を含んだ遺構の多いことが観察できる。

これらの遺構・遺物を約30年間の伏見城の歴史の中で特定することはできないが、それぞれ、極めて限られた時間幅の中で把握できるものであり、この時期の資料に関する一指標になるものと考えられる。

（長谷川 達）

- 注1 村尾政人「伏見城跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-1）』京都府教育委員会）1980
- 注2 鈴木久男「伏見城立会調査」（『京都市内遺跡・立会調査報告』京都市文化観光局文化財保護課）1980
- 注3 鈴木重治・星野猷二ほか『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会 1975
吉村正親・三木善則ほか『伏見城跡発掘調査概報（水野左近東町）』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 注4 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1977

6. 祝園地区所在遺跡昭和57年度発掘調査概要

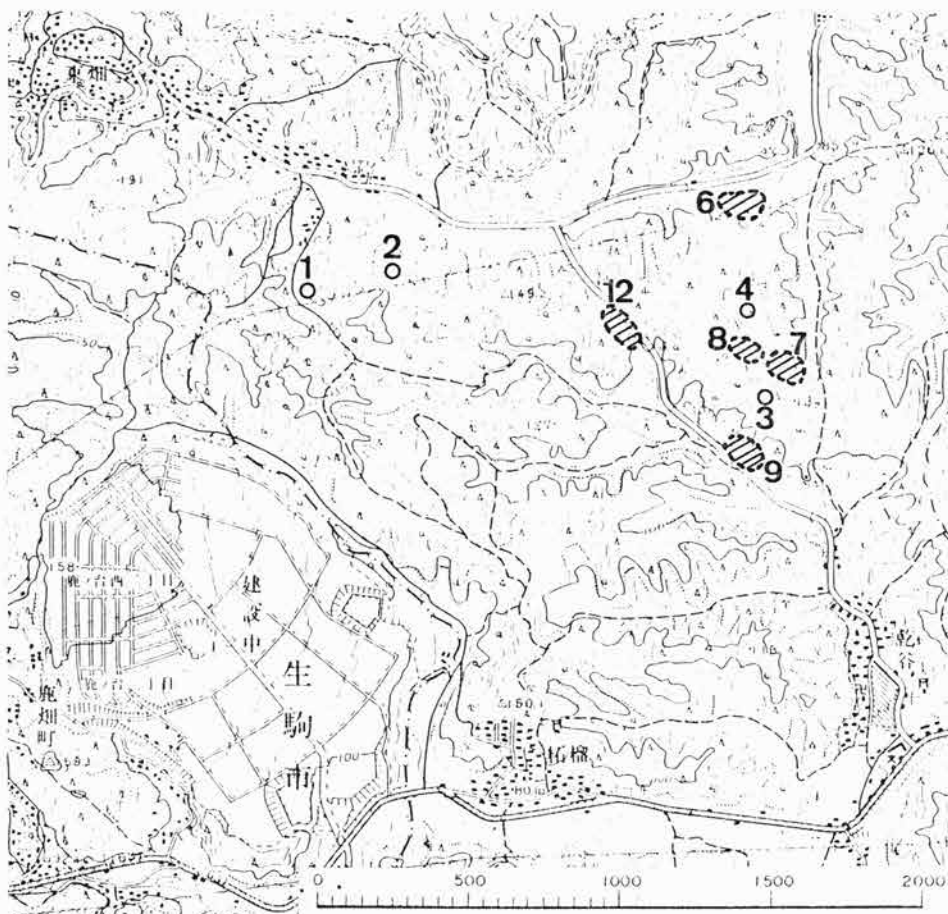
1. はじめに

この調査は、住宅・都市整備公団の祝園地区^{ほうその}の宅地開発に伴うものである。

調査の対象地は、京都府相楽郡精華町大字南稲八妻・東畑^{みなみのなやづま}・乾谷^{ひがしはた}・柘榴^{いぬいだに}に所在し、西は生駒市に接し、北は煤谷川、南は山田川で画された地域である。

この地域の埋蔵文化財の分布調査が、昭和56年4月に京都府教育委員会によって実施され、4基の古墳と10か所の遺物散布地が確認されている。

今回は、この分布調査に基づいて試掘調査を実施し、遺構の有無・範囲をつかみ、遺跡の



第95図 調査地位置図

付表1 祝園地区所在遺跡昭和57年度発掘調査地一覧表

番号	名称	種類	所在地	調査期間	調査概要	
1	馬原1号墳	古墳か	精華町 東畑馬原	57.10.5 ～ 57.10.22	幅1mのトレンチをT字形に設定。墳丘は粘土層、砂・砂礫層からなる丘陵の頂点であった。	遺物なし
2	馬原2号墳	古墳か	精華町 東畑馬原	57.10.7 ～ 57.10.28	幅1mのトレンチを十字形に設定。墳丘は丘陵の尾根の分岐点で粘土層、砂・砂礫層からなる、いわゆる大阪層群の一部。	遺物なし
3	大谷1号墳	古墳か	精華町 南稲八妻 大谷	57.11.18 ～ 57.12.6	幅1mのトレンチを十字形に設定。墳丘頂はわずかに盛土がみられるが、他は粘土層、砂・砂礫層。丘陵の頂上。	盛土中から土師器
4	大谷2号墳	古墳か	精華町 南稲八妻 大谷	57.10.27 ～ 57.11.18	幅1mのトレンチを十字形に設定。墳丘の西側にわずかに傾斜する平坦面(幅5m前後)がある。墳丘は粘土層・砂礫層。	遺物なし
6	大崩遺跡	散布地	精華町 南稲八妻 大崩	58.2.3 ～ 58.2.18	幅3mのトレンチ、グリッドを11か所設定。丘陵斜面(南側)は粘土層、砂・砂礫層からなる。北側は、煤谷川の氾濫による砂礫の堆積層と粘土層からなる。現在水田及び休耕田。遺構なし。	陶磁器、土師器(カワラケ)小皿などが出土
7	大谷A遺跡	散布地	精華町 南稲八妻 大谷	57.12.7 ～ 58.1.11	幅3mのトレンチ・グリッドを計7か所設定。丘陵斜面と谷筋を水田としている。耕作土の下は粘土層・砂礫層・粘質土からなる。遺構なし。	陶磁器、土師器(カワラケ)、瓦などが出土
8	大谷B遺跡	散布地	精華町 南稲八妻 大谷	58.1.11 ～ 58.1.31	幅3mのトレンチを計6か所設定。No.7同様丘陵斜面と谷筋を水田としている。耕作土の下は粘質土・粘土層・砂礫層からなる。遺構なし。	須恵器、土師器皿(カワラケ)、陶磁器、寛永通宝などが出土
9	金前遺跡	散布地	精華町 乾谷 金前	58.3.7 ～ 58.3.31	幅2及び3mのトレンチを計9か所設定。丘陵端が乾谷川の氾濫で段丘状になった部分を水田としている。耕作土の下は粘土層、砂・砂礫層からなる。Bトレンチで幅2m・深さ30～40cmの東方から西方に傾斜する溝SD01と落ち込みを検出した。	SD01から土師器皿、落ち込み及びその周辺から平瓦、土師器(カワラケ)、瓦器他に陶磁器が出土した。
12	三平谷遺跡	散布地	精華町 乾谷 三平谷	58.2.19 ～ 58.3.5	幅3mのトレンチを計7か所設定。乾谷川の上流の谷筋を埋めて水田としている。耕作土の下は粘質土・砂質土・砂礫層からなる。遺構なし。	陶磁器、土師器(カワラケ)などが出土

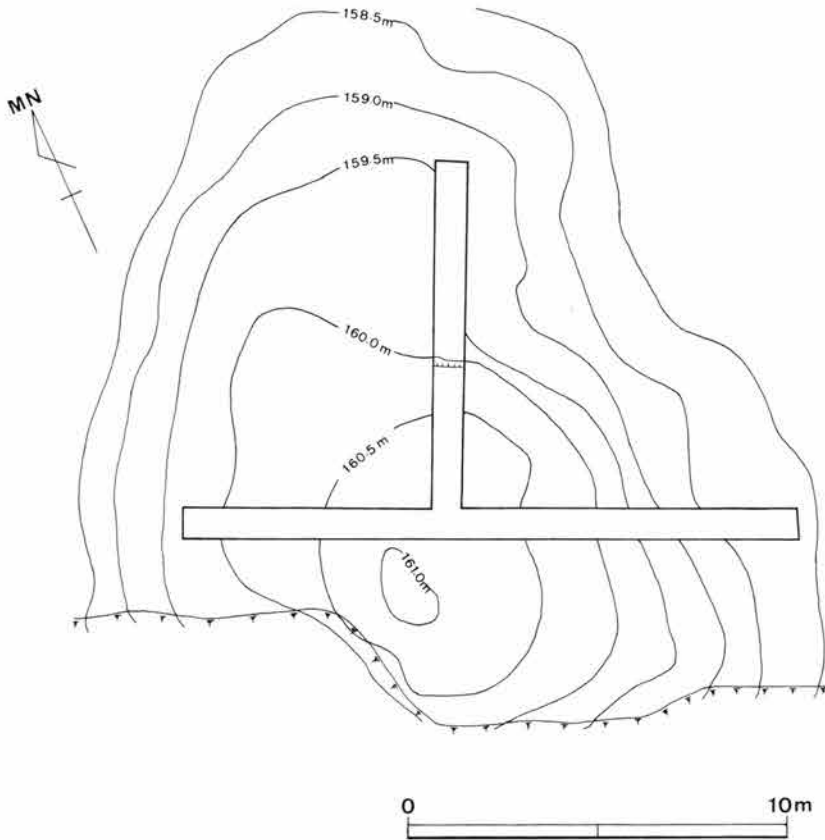
保存及び本調査の資料を作成することを目的とした。現地調査は、昭和57年10月4日に開始し、昭和58年3月末日に終了した。なお、調査にあたって、地元東畑地区をはじめとする有志の皆さん^(注1)、学生諸氏^(注2)、及び調査の進行に多大な御助力をいただいた精華町役場企画管理室・精華町教育委員会の方々^(注2)に心より御礼申し上げます。

2. 調査概要

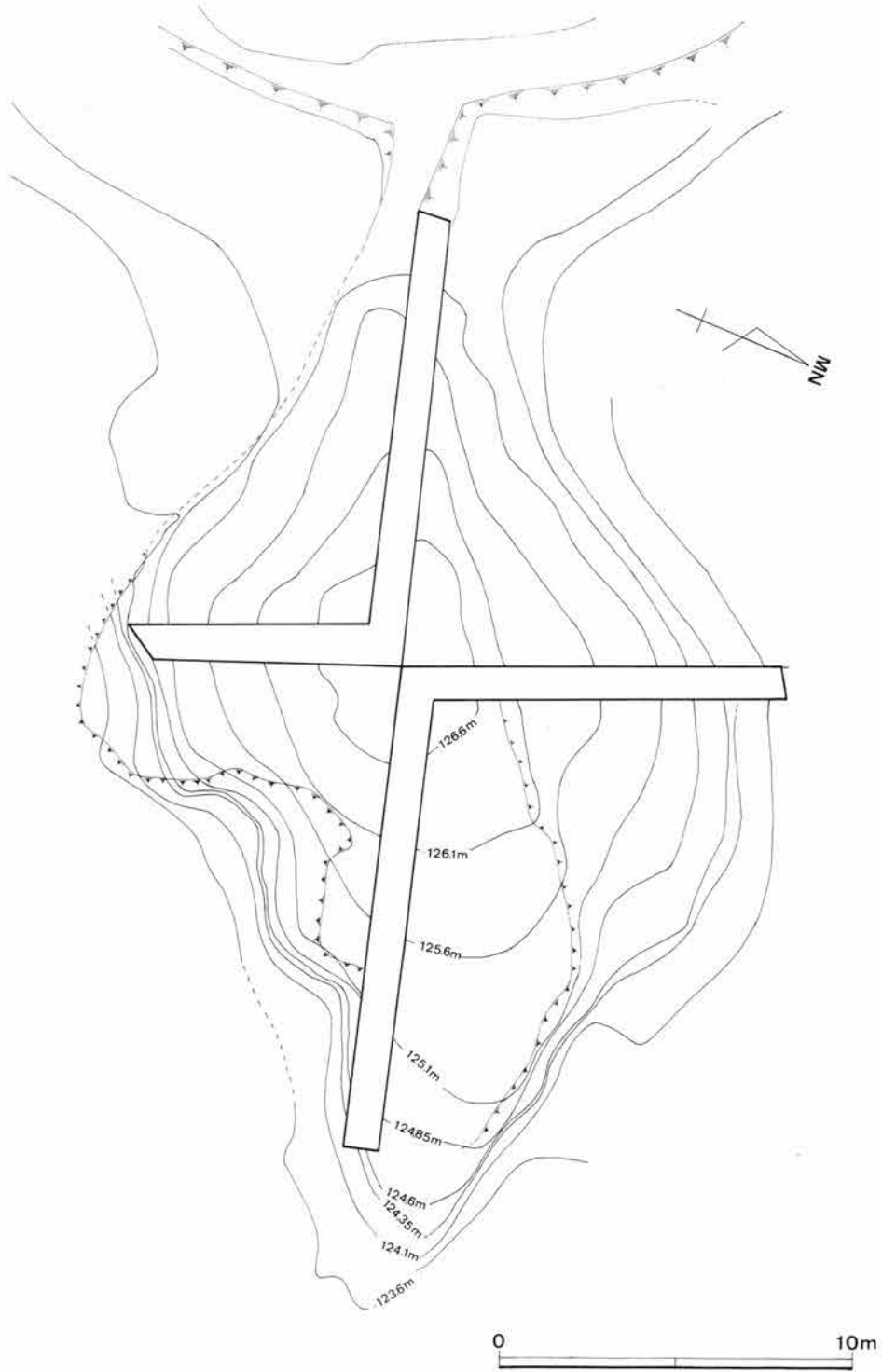
調査地は、精華町の南西部分で約 203 ha の面積を有する。いわゆる京阪奈丘陵の東端部分にあたり、標高 60~170m で丘陵部と煤谷川・山田川・乾谷川の支谷部が錯綜している。丘陵部は、粘土・砂・礫を主体とする大阪層群からなり、崩落し易い地盤である。そして、丘陵斜面と谷筋を利用した水田・畑が点在する。現在は、休耕田や雑木等の繁茂した場所が多く見られる。古墳と推定されているものは、丘陵尾根筋に点在し、丘陵斜面を利用した田畑及びその周辺に散布している。

今回の調査は、古墳 4 か所、散布地 5 か所の試掘調査を実施した。古墳と推定されるものに幅 1m のトレンチを、散布地に幅 3m のトレンチを設定し、地山である大阪層群まで掘り下げた。調査結果は、図のとおりである。

挿図の方位 MN は磁北を示している。

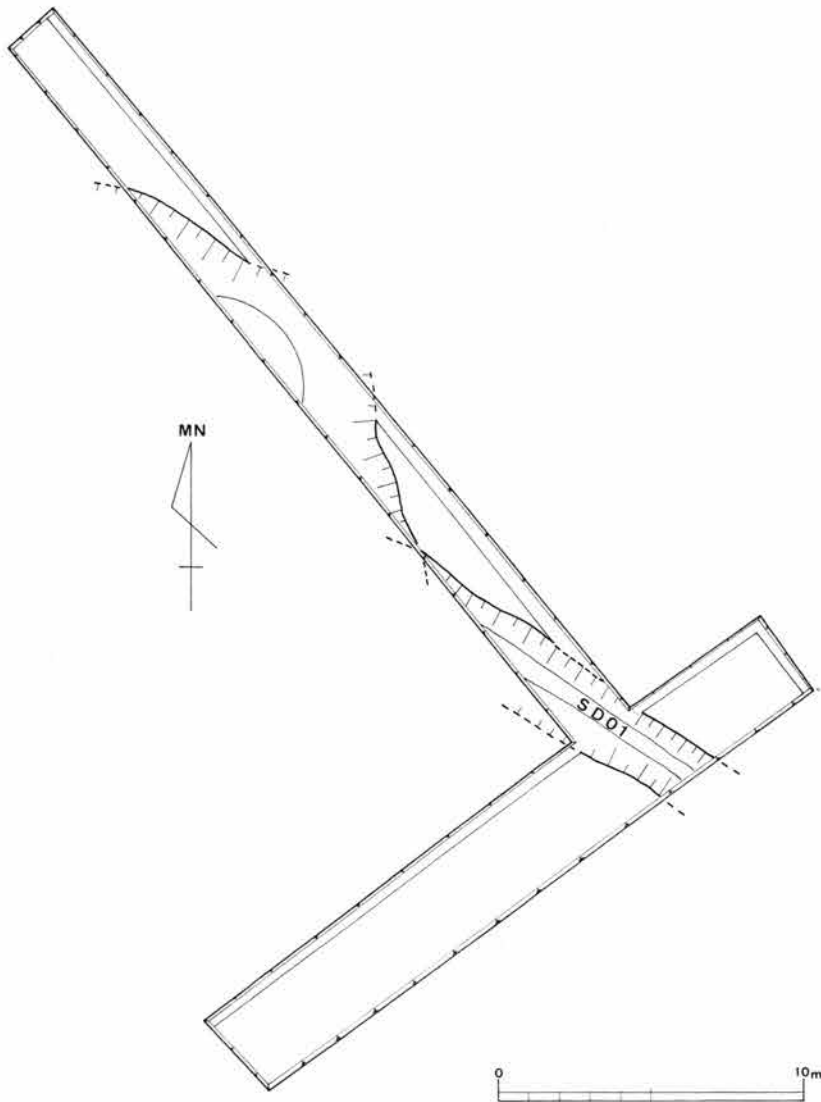


第96図 No. 1 地点平面図 (No. 1=付表1の番号)



第97图 No. 3 地点平面图

試掘調査では、No.9 地点Bトレンチで幅約2m・深さ30~40cmの東方から西方に傾斜する素掘り溝SD01と落ち込みを検出した。溝SD01には土師器小皿などが落ち込んでおり、その周辺からは平瓦・瓦器・土師器などが発見された。これらが発見された場所は、丘陵先端部が乾谷川と直交する地点で、下流からは乾谷川による狭い段丘状に見えるところである。ここで出土した平瓦は摩滅も少なく、まとまって出土していることから、近接地から運ばれたものと推定される。また、砂礫層と共に良好な粘土層が認められるので、この付近



第98図 No.9 地点Bトレンチ平面図

に瓦窯が存在する可能性がある。溝 SD 01 はその何らかの施設の区画溝と考えられる。このため、この周辺の調査が必要であろう。

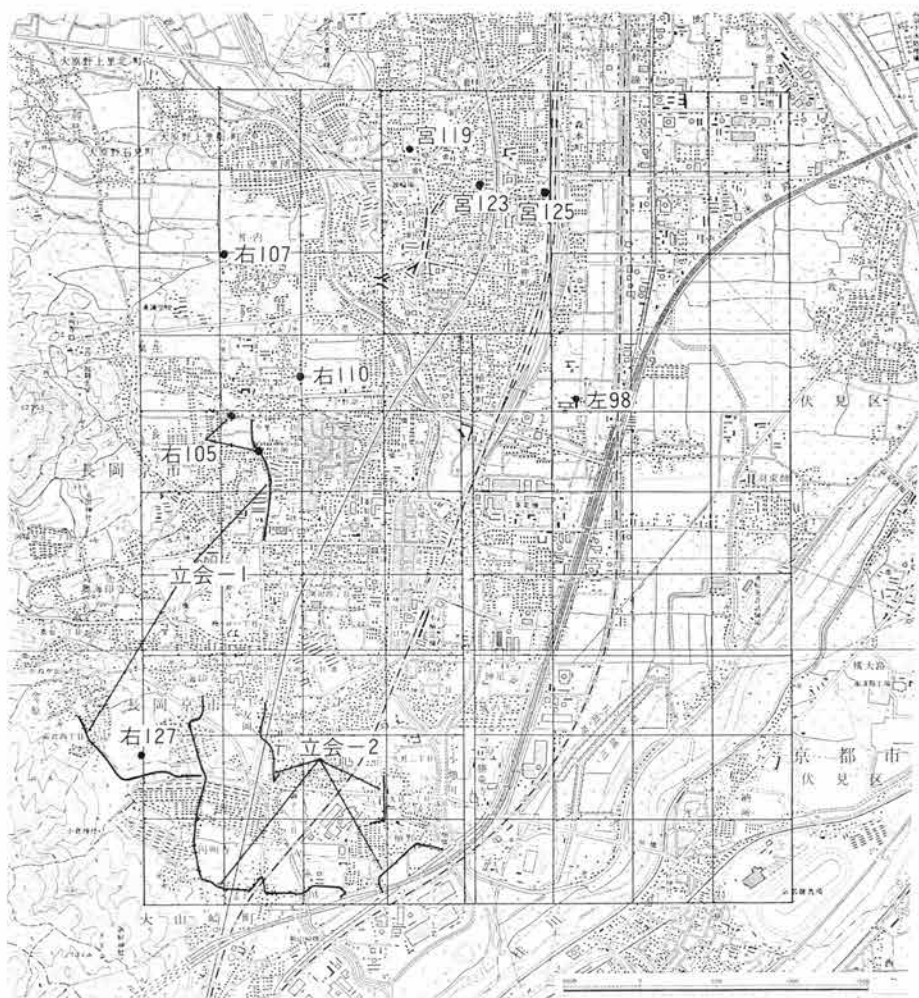
昭和58年度に、残り6か所の試掘調査終了後、まとめて報告する予定である。

(石尾 政信)

- 注1 田中秀雄・永井熊雄・永井マサ子・浦井柳栄・浦井光子・浦井茂子・前坂絹枝・前田千代子・辻本キミ江・田中詩子（以上東畑地区）、杉本太一（乾谷地区）、瀬戸ワイ・正田まさえ（田辺町打田地区）
- 注2 小住寛二・東松義郎・川本 英・林田善仁・中西繁則・寺本雅宣・吉田 徹・大久保真邦・堀居正則（以上仏教大学）、岩前良幸・田中康夫・海野哲弘（以上大谷大学）、岩前宏誉（大阪芸術大学）、藤本正之（京都産業大学）、植西洋嗣（大阪商業大学）

昭和57年度長岡京跡の発掘調査

延暦3(784)年から延暦13(794)年までの、わずか10年の短命の都であった長岡京も、近年の調査でさまざまなことが判明してきた。今年度も、(財)京都市埋蔵文化財研究所・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会、そして当調査研究センターが、それぞれ調査主体となって実施した発掘調査は、宮内で13件・右京域で34件・左京域で13件の60件を数えている^(注)。今年度の調査では、長岡宮朝堂院の西



第99図 長岡京跡関係調査地位置図

付表2 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 昭和57年度長岡京跡調査地一覧表

	調査次数	地区名	推定地	調査地	調査面積	調査要因	調査期間
1	宮内第119次	7AN16C	北辺官衙	向日市寺戸町南垣内	m ² 700	資料館建設	57. 3. 4 ～ 5. 20
2	宮内第123次	〃 7F	朝堂院 北方官衙	向日市寺戸町東野辺	600	保健センター建設	57. 7. 10 ～ 9. 15
3	宮内第125次	〃 3B	東方官衙	向日市森本町前田	160	森本公民館建設	57. 7. 29 ～ 9. 21
4	右京第105次	〃 INC-2 IMK	右京三条三坊 四条三坊	長岡京市今里西ノ口 今里舞塚	1,420	都市計画 街路建設	57. 7. 12 } 58. 1. 26
5	右京第107次	〃 GNC	右京一条三坊	長岡京市井ノ内西ノ 口	470	授産施設 建設	57. 7. 20 ～ 10. 2
6	右京第110次	〃 IST-4	右京三条三坊	長岡京市今里三丁目	120	都市計画 街路建設	57. 8. 4 ～ 9. 20
7	右京第127次	〃 OSG STE-4	右京八条四坊	長岡京市下海印寺西 明寺 大山崎町円明寺鳥居 前	3,500 (予定)	新設高校 建設	58. 3. 17 }
8	左京第98次	〃 FNT-3	左京三条二坊	向日市上植野町西大 田	510	武道館建 設	57. 12. 23 } 58. 3. 14
9	立会(82-1)			長岡京市今里他		電話管理 設	57. 4. 14 ～ 7. 17
10	〃 (82-2)			大山崎町円明寺他		〃	58. 2. 1 }

第四堂が桁行で10間以上あることが判明したことや、五条大路や東二坊大路の両側溝が検出されたほか、「春宮」と記された墨書土器の出土と、その地が長岡京期に再度大規模な整地が行われている事実など、様々な成果が上がっている。

さて、こうした調査の中で当調査研究センターが行った発掘調査は、付表2にあるとおり、宮内3件・右京域4件・左京域1件の計8件である。また、上記の発掘調査のほかに電々公社の電話管理設工事に伴う立会調査を2件実施した。これら計10件の発掘・立会調査でも、数々の事実が判明した。

宮内第119次調査(1)では、北西から南東に延びる長岡京期の溝や中世の柱穴群を検出した。宮内第123次調査(2)地は、朝堂院北方官衙域に位置し、2間×5間の東西棟の掘立柱建物跡を検出した。この建物跡は、柱の掘形が約0.8m×約1.1mという大きなもので、柱間間隔は桁行・梁行ともに約2.7mを測る。宮内第125次調査(3)では、北西から南東へ流れる幅約4mの溝を検出し、溝中より木簡や銅銭・墨書土器などが出土した。また、この溝のさらに東で、宮の東限を画す溝の可能性の強い南北溝を確認した。右京第105次調査(4)は、前年度の右京第

83次調査に引き続く都市計画街路建設に伴う調査で、中世の遺構や、長岡京期の建物跡、奈良時代の溝などのほか、舞塚古墳の周濠を確認した。右京第107次調査(5)では、中世の溝、柱穴群などのほか、古墳時代の土坑墓も検出した。右京第110次調査(6)は、都市計画街路(外環状線)建設に伴う調査の一環で、比較的小面積ではあったが、長岡京の三条条間小路の北側溝を確認した。右京第127次調査(7)は、乙訓地区新設高校建設に伴う調査で、3月から調査に着手し、57年度から58年度にわたる調査である。現段階では、トレンチを数本入れたのみで、遺構等ははまだみつかっていない。左京第98次調査(8)は、向陽高校の敷地内で行った調査で、長岡京期の掘立柱建物跡等を検出し、また、「□□□人」や、「大□」・「吉」・「長」等の文字を記した墨書土器が出土した。立会調査2件のうち、(9)では、溝状遺構や落ち込みを観察し、奈良時代末頃の遺物や古墳時代などの遺物を採取した。

今年度、当調査研究センターが実施した調査の成果は、以上のようなものであるが、これらのうち、宮内第119次調査は、昭和56年度から実施したもので、概要報告は、当調査研究センターの『京都府遺跡調査概報』第5冊に所収してある。また、右京第127次調査(7)及び立会調査(9)は、昭和57年度から昭和58年度にわたるものであり、58年度に報告する予定である。以上、これら3件を除いた7件の発掘調査及び立会調査について、今回の概報で報告する。

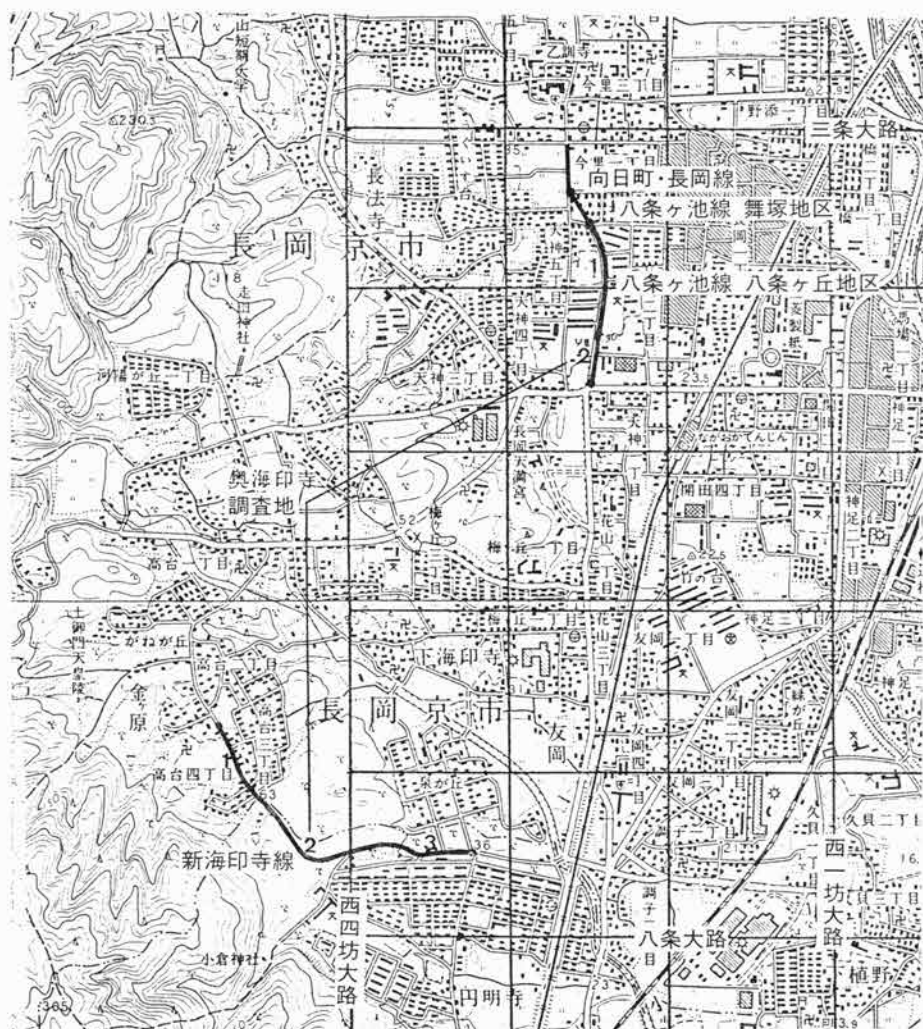
(山口 博)

注 昭和57年度の長岡京跡における発掘調査の一覧表及び位置図は、『京都府埋蔵文化財情報』第7号所収の「長岡京跡発掘だより」に掲載してあるので、参照されたい。

7. 長岡京跡立会調査概要

1. はじめに

今回の立会調査は、日本電信電話公社の西山局内の電話管埋設工事に伴い実施したものである。調査地は、長岡京市今里1丁目から長岡2丁目にかけてと長岡京市下海印寺から大山崎町円明寺にかけての2地区に分かれる。前者は、長岡京跡の右京四条三坊・五条三坊に相当し、奈良時代や古墳時代の遺構・遺物を検出した右京第83次調査地の近辺や、舞塚古墳の



第100図 調査地位置図 (1/25,000)

存在が予想される^(注2)地点を通る。なお、舞塚古墳の存在が想定される地区は、長岡京市の計画している都市計画街路石見・淀線の建設予定地でもあり、この立会調査後、右京第105次調査として発掘調査を実施した。^(注3)後者は、一部が長岡京跡の右京八条四坊に当り、近辺には鳥居前古墳や石蔵古墳等の古墳が存在している。

調査は、昭和57年4月13日から始め、7月17日に終了した。調査の担当は、当調査研究センター主任調査員 長谷川 達、調査員 山口 博・山下 正が当り、同調査員石尾政信・竹井治雄の助力を得た。調査の期間中、調査補助員として、坂本 守・田村泰造・高島利洋の諸氏、整理員・事務補助員として、小塩礼子・木村美智代・臼井千映子・赤司 紫・山本みどり・竹原京子・戸波みどり・神山久子の方々の参加を得た。また、調査を実施するに際して、当該工事の請負業者である協和電設株式会社の協力をいただいた。記して謝意を表したい。

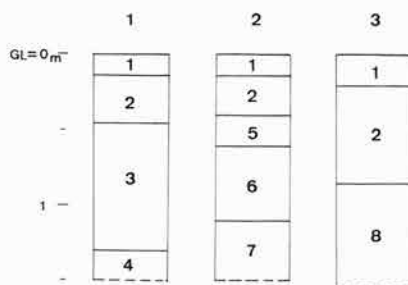
今回の調査では、調査地を日本電信電話公社の工程による呼称に基づき、前述した2地区のうち後者を新海印寺線地区、前者を向日町長岡線地区と八条ヶ池線地区と呼称した。なお、八条ヶ池線地区は、すでに道路敷となっている部分と、今年度都市計画街路石見・淀線建設工事に伴う発掘調査予定地になっている部分とを、調査の都合上さらに分け、前者を八条ヶ池線八条ヶ丘地区とし、後者を八条ヶ池線舞塚地区とした。それぞれの調査地とその名称は、第100図のとおりである。以下、この呼称に基づいて調査の概略を述べる。

2. 調査概要

(1) 新海印寺線地区

この調査地は、府道納所・奥海印寺線の、円明寺団地の北側から高台団地に至る部分である。調査地は、長岡京跡の西南部に相当する丘陵地であり、府道納所・奥海印寺線の大部分が丘陵を切り通した形になっており、削平を受けている可能性が強い。

調査の結果、この調査地はやはり削平を受けており、道路の路盤であるアスファルト・パラスの下は、黄白色粘土層や赤褐色粘土層の地山となっており、断面にも落ち込み等の遺構の存在は窺われなかった。ここでは3地点を選び、土層柱状図を示した。3地点の位置は第100図に示した1～3の地点である。道路のアスファ



第101図 新海印寺線地区土層柱状図

- | | |
|---------------|--------------|
| 1. アスファルト | 5. 黄褐色粘土層 |
| 2. パラス | 6. 黄色粘土層 |
| 3. 礫混じり黄褐色粘土層 | 7. 赤褐色粘土層 |
| 4. 黄白色粘土層 | 8. 礫混じり褐色粘土層 |
- (3～8 地山)

ルト・バラス層が平均約 50 cm、深い場所で約 85 cm あり、以下は地山となる。ただ、地山の土は様でなく、1 地点では、礫混じり黄褐色粘土層・黄色粘土層を、2 地点では、黄褐色粘土層・黄色粘土層・赤褐色粘土層を、3 地点では、礫混じり褐色粘土層を観察した。また、路盤改良に伴う現代層からではあるが、2 地点付近でチャートの剥片を採集した。川を挟んだ対岸ではあるが、近くに下海印寺遺跡が存在することは興味深い。

(2) 八条ヶ池線八条ヶ丘地区

この調査地は、八条ヶ丘団地の前を通る道路部分で、道路や団地になる以前は、種苗会社の農場であった。

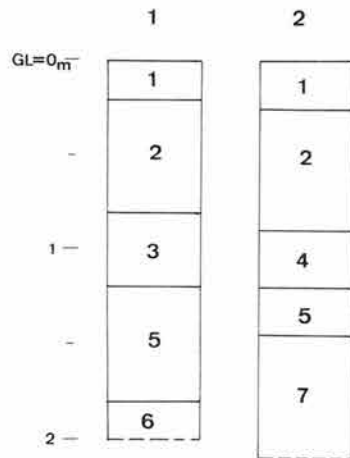
調査の結果は、全線道路の路盤や現代層の下は地山で、遺構・遺物は検出されなかった。道路工事等ですでに削平を受けてしまっている。ここでは、2 地点を選んで柱状断面図を示した。位置は第100図に示した。道路の路盤のアスファルト・バラス層が約 80~90 cm あり、その下は地山で、1 地点ではまず淡黄褐色粘土層が約 40 cm、次に礫混じり褐色粘土層が約 60 cm、そして褐色礫層となり、2 地点では黄白色粘質土層が約 30 cm あり、ついで礫混じり褐色粘土層となる。

(3) 八条ヶ池線舞塚地区

この調査地は、都市計画街路石見・淀線建設予定地で、発掘調査を予定している場所である。工期の関係等から発掘調査に先立って埋設管工事が行われ、立会調査を実施した。この地は、道路工事に伴う削平は受けておらず、今回の調査地の中では遺構・遺物の検出される可能性が最も高い地区であった。

この地区では、基本的に約 50~90cm の盛土の下に、約 20~30 cm の耕作土と約 30~40cm の床土（灰色粘質土層）があり、その下で地山の黄色粘土層が認められる。そして、この黄色粘土層を切り込んでいる暗褐色粘質土の落ち込みを数か所で検出した。また、一部では、床土の灰色粘質土層との間に 5~10 cm の褐色粘質土の包含層も認められる。

まず、1 地点では、約 90cm 盛土があり、その下に約 20cm の耕作土と約 30cm の灰色粘質土（床土）が存在する。この灰色粘質土（床土）



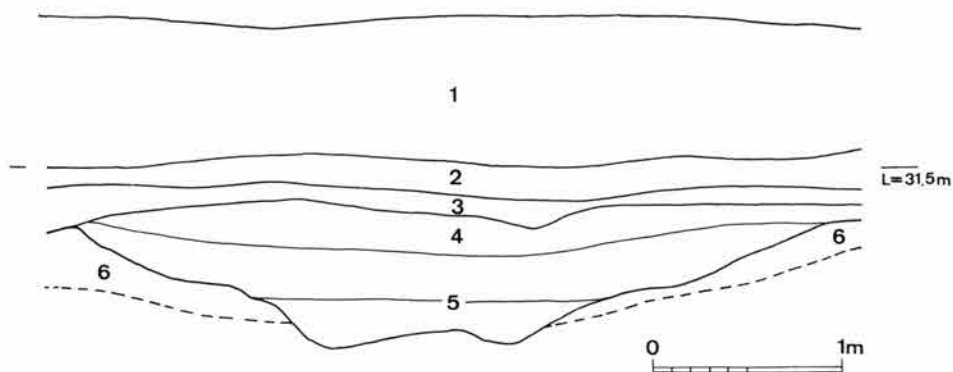
第102図 八条ヶ池線八条ヶ丘地区土層柱状図

- | | |
|------------|--------------|
| 1. アスファルト | 5. 礫混じり褐色粘土層 |
| 2. バラス | 6. 褐色礫層 |
| 3. 淡黄褐色粘土層 | 7. 黄褐色粘土層 |
| 4. 黄白色粘質土層 | (3~7 地山) |

の直下で黄色粘土層となり、この黄色粘土層を切り込んで、西壁で幅約50cm・深さ約25cm、東壁で幅60cm・深さ約30cmの落ち込みを断面で観察した。両面に同様の落ち込みが認められるところから溝状の遺構と考えられ、後の右京第105次調査で、SD 10568として確認^(注3)した。

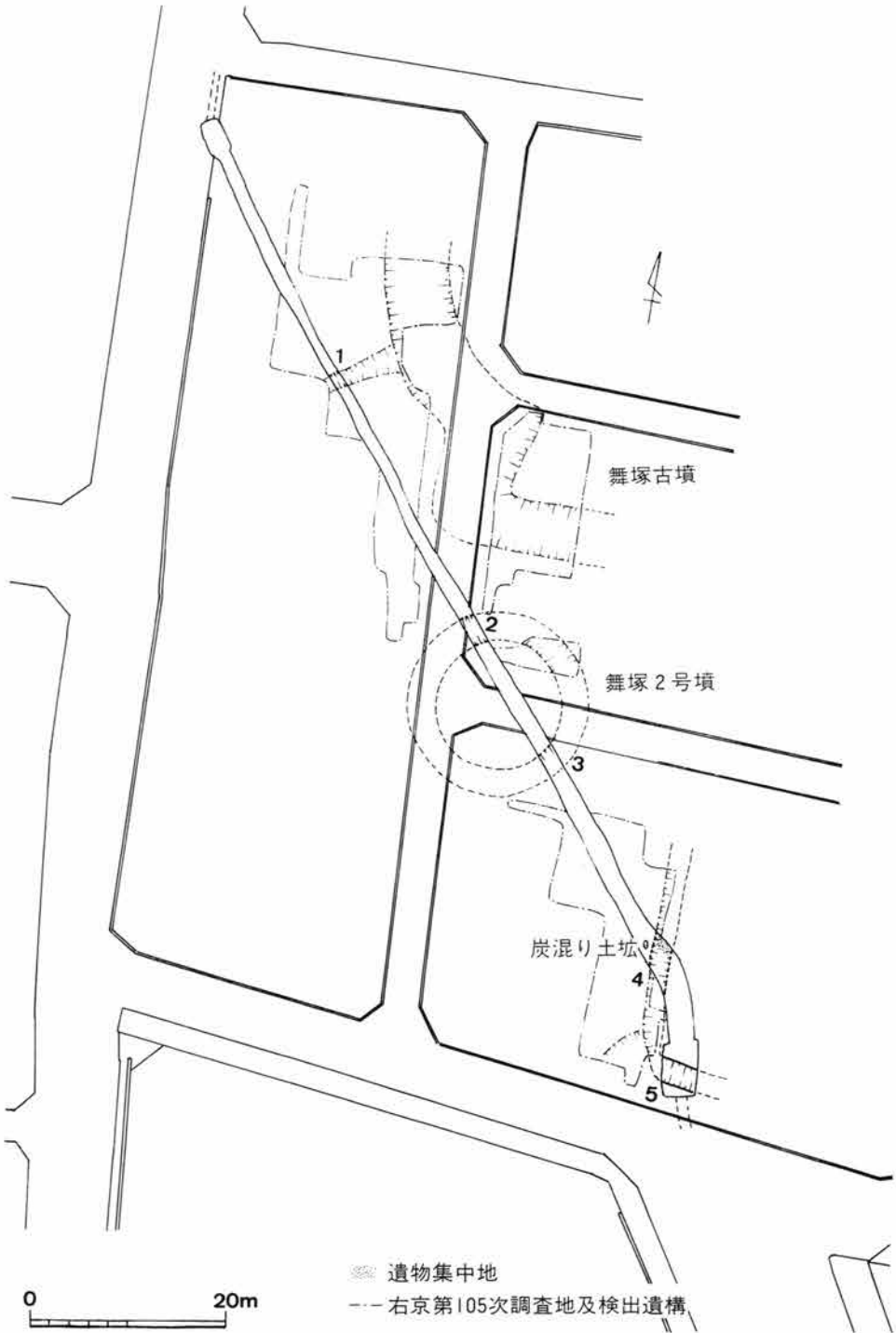
2地点では、黄色粘土層の上には、盛土・耕作土・灰色粘質土がそれぞれ厚さ約60cm・20cm・30cm堆積し、その下に黄色粘土層が存在し、その黄色粘土層を切り込んでいる幅約300cm・深さ約40cmを測る落ち込みを東西両壁面で確認した。この落ち込みからは、土師器片・須恵器片が出土し、土層状況は、後の右京第105次調査で検出したSD 10575^(注4)に酷似している。また、3地点でも同様の落ち込みを両壁面で確認した。ただ3地点では南側の肩が攪乱等をうけていたため、確認できなかった。これらの落ち込みは、その土層状況や幅等からして、SD 10575の延長であると考えられ、右京第105次調査の結果から、古墳の周濠の可能性が強く、復元すれば直径約15mを測る円墳(舞塚2号墳)となる。

4地点では、西壁で、地山の礫混じり黄色粘土層を切り込んでいる幅250cmの落ち込みを検出した。東壁では、厚さ約30cmの褐色粘質土層の堆積は認められるが、かなり長く存在し、立会調査の時点では、西壁と同様の落ち込みは明確には検出できなかった。しかし、長岡京期頃の遺物が集中的に分布している場所があり、後の右京第105次調査の結果と合わせ、これが南北に延びる溝の一部であることが判明した^(注5)。この溝(SD 10570)は、西三坊坊間小路の側溝である可能性が高い。また、その溝状遺構の西側では、長さ約100cm・幅約40cm・深さ約15cmの炭混じりの土壇を検出した。5地点では、幅約280cmを測る東西方向に延びる溝状遺構を検出した。この溝は、四条条間小路の北側溝かと思われる。



第103図 八条ヶ池線舞塚地区4地点西壁土層図

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 盛土 | 4. 褐色粘質土層 |
| 2. 耕作土 | 5. 暗褐色粘質土層 |
| 3. 灰色粘質土層(床土) | 6. 黄褐色粘土層 |



第104図 八条ヶ池線舞塚地区平面図

この地区の立会調査では、以上のような遺構を検出したほか、弥生土器なども採取し、このほかに弥生時代の遺構が存在する可能性をいだかせた。

(4) 向日町長岡線地区

この調査地は、市道向日町・長岡線の一部で、既設管等のために攪乱が著しく、両壁面の大部分が現代層で、土層観察できる場所は少なかった。しかし、部分的にはあるが、包含層や落ち込みを確認することができた。

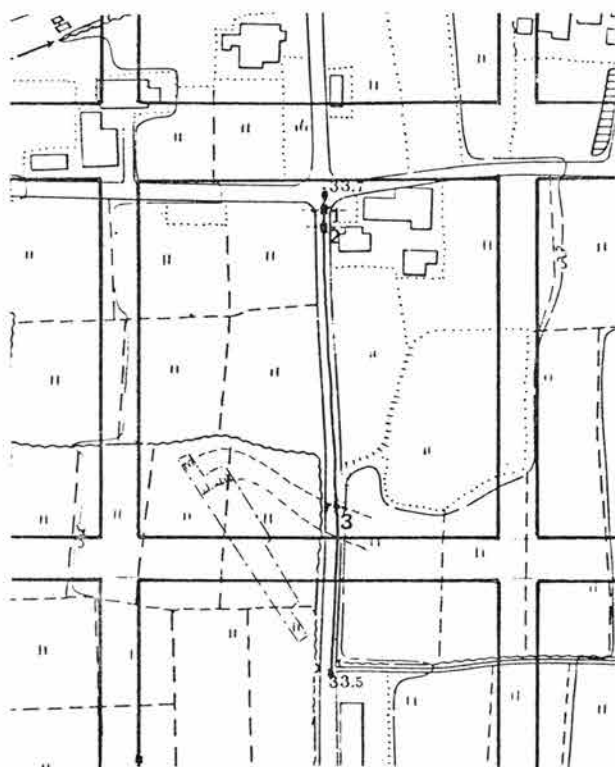
北方の1・2地点付近では、厚さ約30 cmのアスファルトとバラス層の直下で厚さ約20 cmの褐色粘質土層が検出され、この層中からは須恵器片・土師器片が出土した。この層の下は、黄色粘土層の地山となる。この層を切り込んで、1地点では、幅約230 cm・深さ約30 cmの、2地点では幅約100 cm・深さ20 cmの落ち込みをそれぞれ検出した。この辺りは三条大路の推定地であり、また、右京第105次調査では、Eトレンチで奈良時代の東西に延びる溝^(注7)を検出しており、これらの遺構の一部である可能性が高い。

南方では、厚さ約60~70 cmのアスファルトとバラス、そして置土層があり、約20~30 cmの厚さの耕作土層となる。

その下は灰色粘質土が約30 cmあり、地山の黄色粘土層となる。3地点では、黄色粘土を切り込んだ落ち込みの北の肩を確認した。この落ち込みは、暗灰褐色粘質土の上層と緑灰色砂礫層の2層に分かれ、右京第83次調査のKトレンチで検出した河川状の遺構^(注8)の延長と思われる。この付近からは、古墳時代の甕等が出土した。

3. 出土遺物

今回の立会調査では、八条ヶ池線舞塚地区や向日町長岡線地区で土師器・須恵器・弥生土器・土馬等が出土した。しかし、

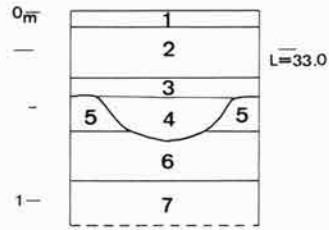


第105図 向日町長岡線地区調査地位置図 (1/2,500)
(一点鎖線は右京第83次調査地)

大多数は破片で、図示できるものは少なく、10点のみである。

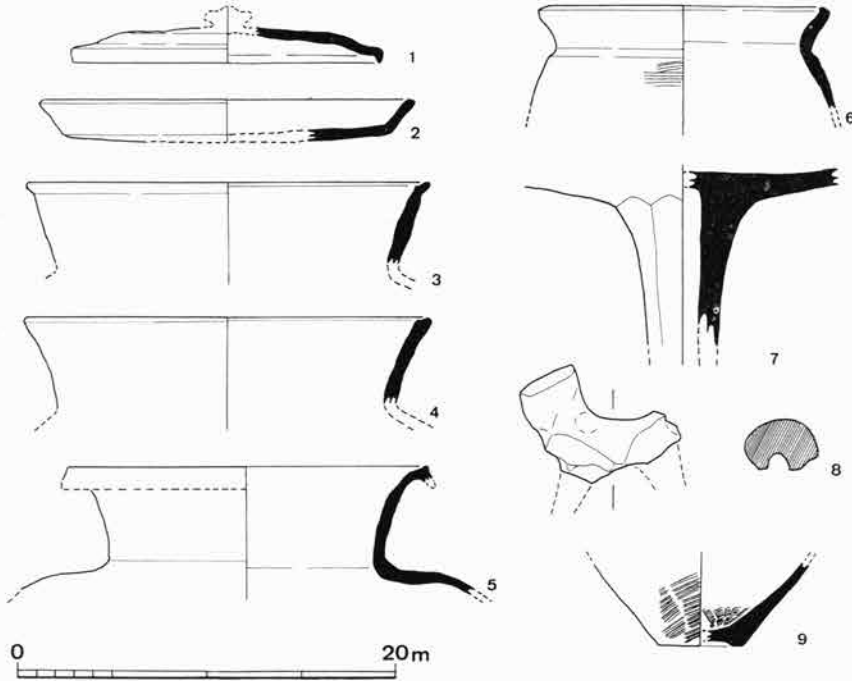
須恵器は、杯蓋(1)・皿(2)・甕(3~5)などが出土している。1は扁平な天井部から下方に屈曲する口縁部を有し、口径16cmを測る。2は、口径19.2cm・高さ2.2cmで、体部は外上方に直線的に延び、口縁端部はやや外傾する端面を有している。3は口径21.2cmで、口縁端部を外上方にやや屈曲させている。4は、口径21.2cmを測り、口縁端部はやや肥厚し、凹気味の端面を有する。5は、口径21.2cmで、口縁端部は外下方に屈曲させる。

土師器は、甕(6)・高杯(7)等が出土している。6は、口径14.4cmで、口頸部は「く」の字状に外反し、端部は内面を肥厚させ、外傾する端面を有する。体部には、横方向の刷毛目が施されている。7は、杯部と脚部の接合部分で、杯部の口縁部分と脚部の裾部分とを欠失しており、脚部には面取りを施している。8は土馬で、顔と足と尾部が欠失している。残



第106図 向日町長岡線地区2地点土層柱状図

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. アスファルト | 5. 黄褐色粘土層 |
| 2. パラス | 6. 砂礫層 |
| 3. 褐色粘質土 | 7. 暗褐色粘土層 |
| 4. 褐色粘質土 | |



第107図 出土遺物実測図
1~5: 須恵器 6・7: 土師器 8: 土馬 9: 弥生土器

存長は、8.7 cm を測る。9 は、弥生土器の甕で、底部径 4.4 cm を測り、上げ底状を呈する。外面には右上がりの叩きを施し、内面には横方向の刷毛目を施している。

以上の遺物のうち、1～3・5・6・8・9 は、八条ヶ池線地区の 4 地点及びその近辺で出土し、4・7 は、向日町長岡線地区の 1 地点近辺で出土した。

4. お わ り に

今回の調査では、以上のように八条ヶ池線舞塚地区で、溝状の遺構を検出し、また、向日町長岡線地区で、落ち込みや右京第83次調査で検出した河川状遺構の延長の一部を確認した。特に、八条ヶ池線舞塚地区での調査結果は、条坊の側溝や舞塚2号墳の規模の復元の資料ともなるものである。また、この地区では、住宅建設時や取り壊しの際の攪乱もかなり認められたが、その攪乱や前述の遺構の確認は、後の右京第105次調査を行うにあたって参考資料になったことを最後に記しておく。

(山口 博)

注1 山口 博「長岡京跡右京第83次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注2 高橋美久二「長岡京跡京都流域下水道今里西幹線立会調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979

注3 山口 博「長岡京跡右京第105次発掘調査概要」(本冊所収)

注4 注3と同じ

注5 //

注6 //

注7 //

注8 //

8. 長岡宮跡第 123 次発掘調査概要

(7AN 7F 地区)

1. はじめに

本概要は、京都府向日市寺戸東野辺における向陽保健センター新築工事に伴う事前調査の成果報告である。調査期間は、昭和57年7月10日から同年9月15日までの約50日間を費した。調査は向日市の依頼を受け、当調査研究センターが実施した。現地調査については、調査員の竹井治雄が担当した。

本調査地は、長岡宮大極殿跡の北方約400m、中心軸より約100m東方に位置する。周辺では以前から数回の調査が行われ、Y地区^(注1)では長岡京期の溝や掘立柱建物跡が発見されている。それにより現在、宮域内の北方の官衙の様相が明らかに確認されつつある。ここは、『大内裏図考証』では「縫殿寮」に比定されるので、今回は、これらに関連する遺構・遺物の具体的資料を得ることを主目的とした。

調査の成果については、弥生時代から近世にいたる遺構・遺物を検出し、多くの資料を得た。その中でも特に、長岡京期の建物跡 SB 01 に伴う雨落溝 SD 02 の検出によって、建物の軒廻りが推定できたことを記しておきたい。

調査期間中、京都府教育委員会・向日市教育委員会・長岡宮跡発掘調査研究所等の御協力を得、学生諸氏ならびに作業員方々の参加協力^(注2)によって、無事調査を終了することができた。調査終了後の遺物整理・図面整理は、当調査研究センター長岡宮跡整理事務所の方々の御協力を得て、本概報の執筆に至った。記して感謝の意を表したい。

2. 調査経過

7AN7F の調査地域は、向日丘陵の南端部東斜面にあたり、標高 19.5m の平坦地である。調査区の北・南・西方の三方の地形は高くなっており、とりわけ西方は、宅地化が顕著であるにもかかわらず、旧地形を留めている。現地形の観察から、遺構の有無は予想しにくいのが、旧診療所の解体時



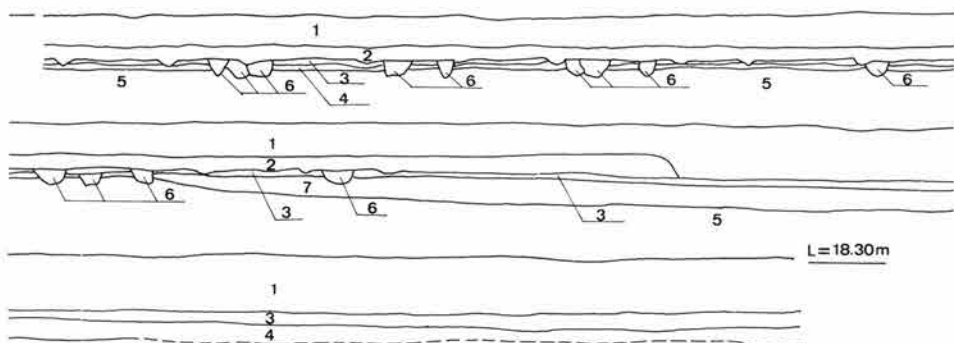
第 108 図 調査地位置図 (1/50,000)

に廃材を棄てるための大きな穴が穿たれたと報告されているので、当調査地の遺構残存状況はそれほどよくはないと思われた。^(注3)

調査地内の掘削（トレンチ）範囲については、事前に関係者と打ち合わせ、現地での立会いのもとに設定し新築建物の基礎部分を超えないようにした。その結果、トレンチを逆L字状に設定し、面積は約 500 m² となった。その後、建物 SB 01 の規模を確認するために、トレンチを東へ 80 m² 拡張したため、終了時点では、合計 580 m² となった。

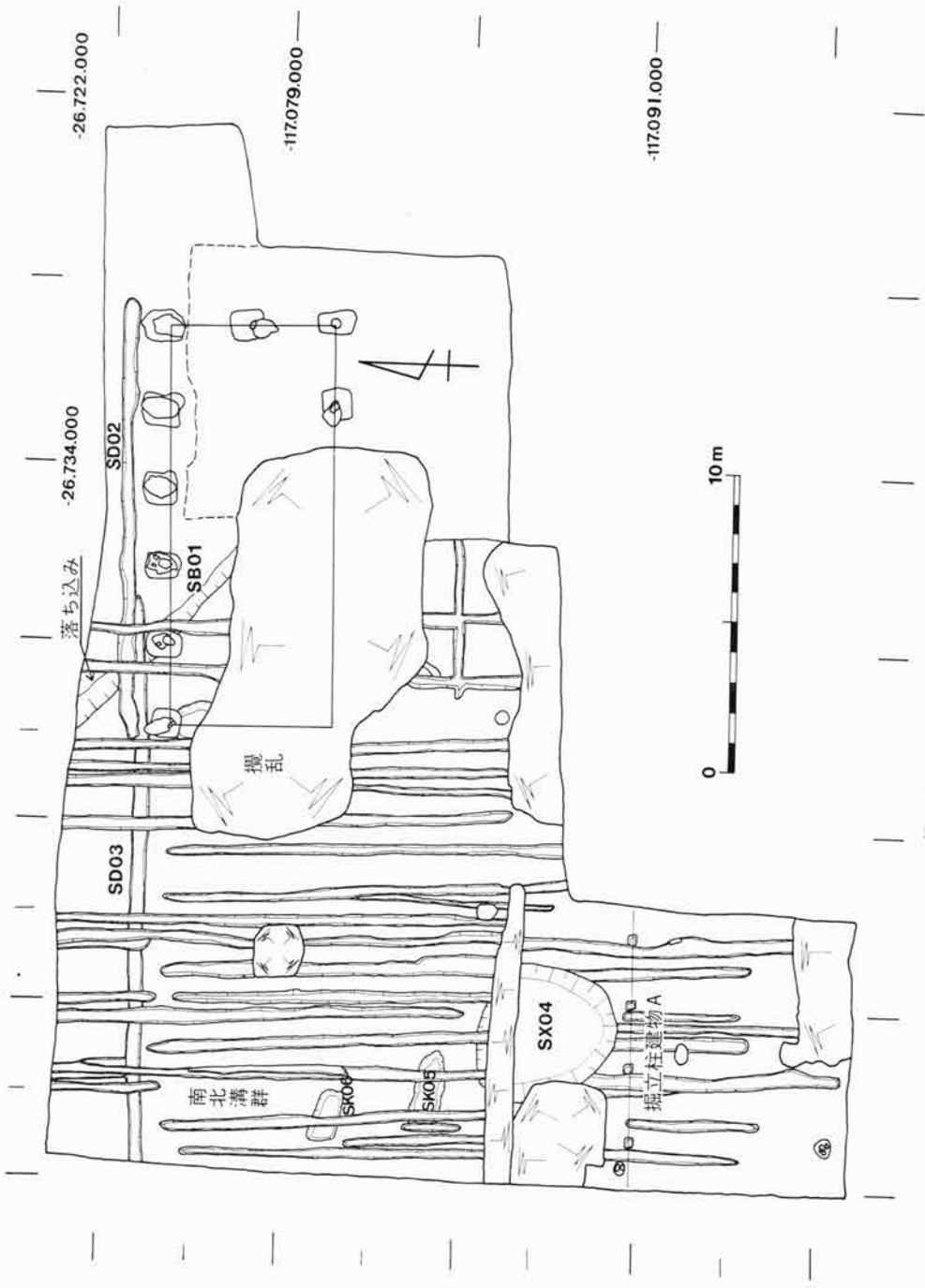
調査における掘削方法は、地表下約 0.4m まで現代の盛土、つづいて旧耕作土・床土が 0.3 m ほど堆積しているため、それらを重機によって排除した。それより下層の茶褐色粘質土や遺構内の堆積土などの掘削は、すべて人力にて行った。

基本層序は、盛土・旧耕作土・床土（淡灰褐色粘質土）・茶褐色粘質土・暗褐色粘質土・黄褐色粘質土・黄褐色砂礫である。盛土は「昭和30年以後にとり壊された保健所の隔離病棟の基礎と思われるコンクリート片を多く含む」整地層である。また、解体時に廃材・医療品等が棄てられた大きな攪乱坑は、トレンチ東半の中央部を占めていた。旧耕作土および床土（淡灰褐色粘質土）は、トレンチの西に隣接する水田と同一のものである。茶褐色粘質土は、5~10 cm の厚さで水平に堆積し、トレンチ全域に広がりをもつ。遺物は、小片の土師器・須恵器など少量の土器類である。遺構の埋土である暗褐色粘質土の分布は、トレンチ東半の北部や南西部に集中する。この土層には、細片の土師器が含まれる。黄褐色粘質土は、上位では若干の小礫が混入し、下位では砂質の縞状が幾層もみられ、漸移層であると考えられる。黄褐色砂礫は、表面の風化が著しい小礫の集まりで、この間隙に褐色泥土が混入し、環元状態の淡灰色を呈するところもある。



第109図 トレンチ北壁断面実測図 (1/100)

- | | | |
|---------------------|-----------|-----------|
| 1. 表土 | 4. 黄灰色粘質土 | 7. 暗褐色粘質土 |
| 2. 旧耕作土・床土（淡灰褐色粘質土） | 5. 黄褐色粘質土 | |
| 3. 茶褐色粘質土 | 6. 灰褐色粘質土 | |



第110図 調査全体図

遺構として後述するが、十数条の南北溝は茶褐色粘質土の上面を、さらに SX 04・05 は黄褐色粘質土を主な検出面としている。

3. 検出遺構

今回の調査において検出した遺構には、南北溝・東西溝・土壇・掘立柱建物跡・雨落溝などがあり、弥生時代から近世に至るまでの連綿とした人間の営為の痕跡を示す貴重な資料である。

南北溝

トレンチ全域で溝幅 0.2~0.4m・深さ 0.2~0.3m の細長い南北溝を20数本検出した。これらは、茶褐色粘質土を切り込む。溝の断面形態は、「U」字形がほとんどで逆台形状のものもある。堆積土は、単一の淡茶灰色粘質土で占められている。遺物は数本の溝から土師質・須恵質の椀・杯の破片が出土している。以上の共通点とは違って、各溝の方位のわずかな相違や溝の長短によって、大きく3群に分かつことができる。

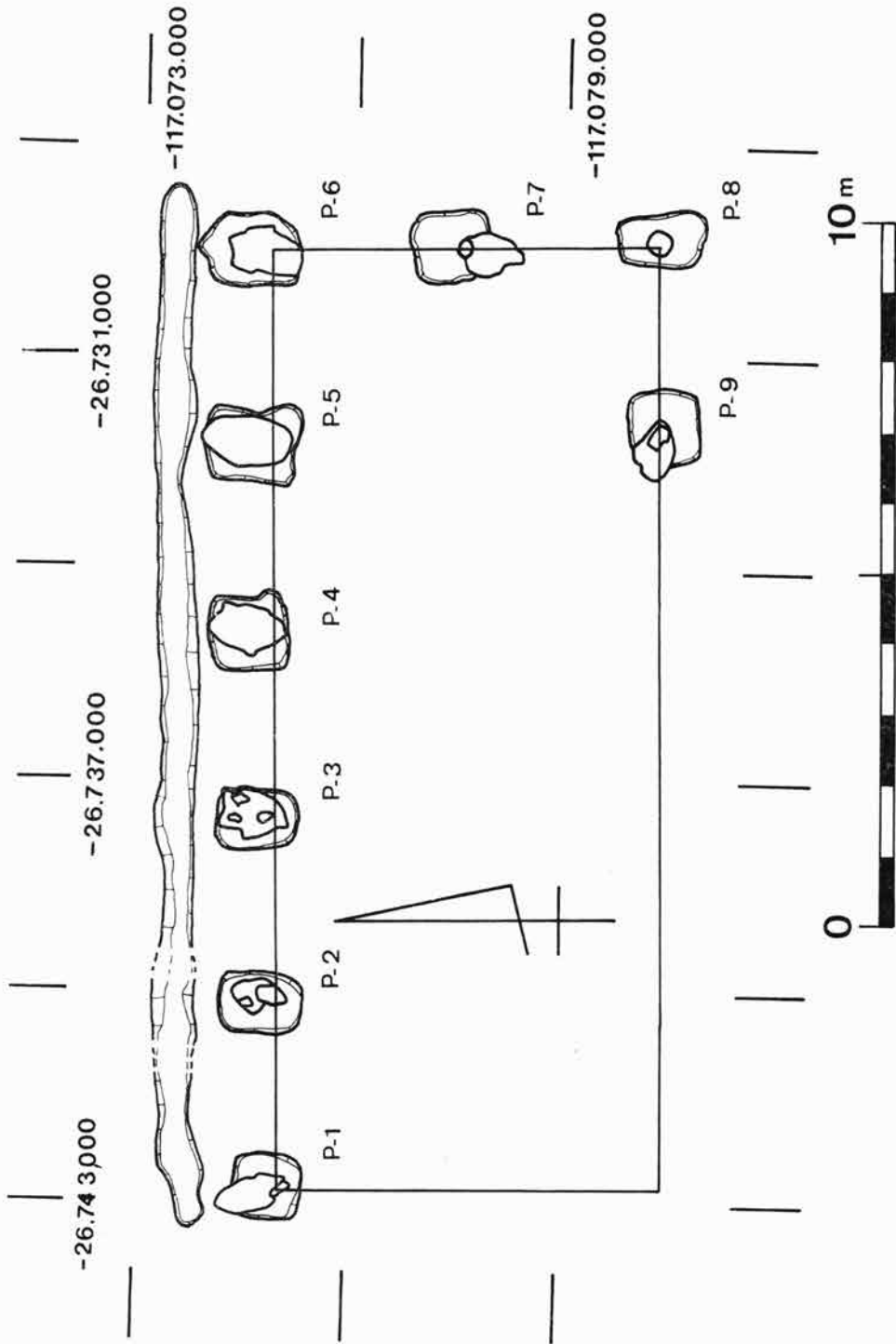
A群は、Cラインより北、ホラインより西の地区の3本の溝である。それぞれの溝の間隔は3m・1.7mである。Cライン上で溝の南端となる。溝の方位はN1°15'Wであり、ほぼ真南北方向を示す。

B群の溝は、ホライン以西で7本検出された。溝の長さは、18~20m 測り、CラインとIライン間を占める。各溝の間隔は、1.1~2.2m とばらつきが目立つが、溝幅・深さ・堆積土とも相似する。方位は真北より1°21' 西へ振り、3群の中では最も振れている。

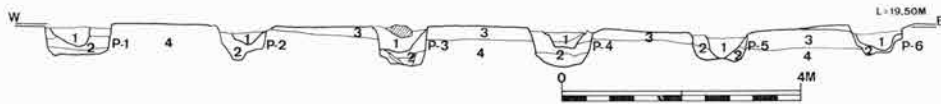
C群はトレンチ東半部の6本の溝である。南・北の両端はトレンチ外へ伸びるため、長さは不明である。方位は、N1°15'W である。各溝の間隔は1.9m を測る。

掘立柱建物跡 SB 01

トレンチ東北部にある5間(13.35m)×2間(5.35m)の東西棟の掘立柱建物跡である。^(注4)これは、先述の南北溝に切られるが、SD 03 の上層で検出した。方位はN0°56'W とはほぼ真東西方向を示す。柱間寸法は、梁行・桁行とも2.67m(9尺)等間である。柱の掘形は南北に長軸をもつ隅丸方形(0.8m×1.1m)がほとんどで、なかには正方形(1辺0.9m)のもの(P-1・9)もある。柱穴の断面形態は、基底部では割り合い水平であり、壁面は垂直に立ちあがる。基底部の標高は、18.82m・18.89m・19.08m など不揃いである。立柱の原位置と推定される場所は、2~3cm の窪みが認められた(P-2・6)。柱の掘形の堆積状況(埋土)は、暗褐色粘質土と黄褐色粘質土との混合層で、全般に固くしまった暗褐色を呈している。^(注6)抜き取り痕はP-8を除いてすべての柱穴で検出された。抜き取り痕の平面形態は、



第111図 掘立柱建物跡SB01・雨落溝SD02平面実測図



第112図 掘立柱建物跡SB01北桁行柱列断面実測図

- | | |
|--------------------|-----------|
| 1. 明黄褐色粘質土 (抜き取り穴) | 3. 暗褐色粘質土 |
| 2. 暗褐色粘質土 | 4. 黄褐色粘質土 |

北側桁行の柱列では、南北方向に長い、いずれも乱れた楕円形である。P-9では東西方向に長い。抜き取り穴の断面は基底部（立柱の原位置）に近づくとつれ小くなる。堆積土は、明黄褐色粘質土の単一層で、調査区内の黄褐色粘質土とは明らかに異なる。^(注7) P-1・3・9には人頭大・拳大の石が投げ込まれている。P-8では抜き取り穴は認められず、灰色を呈する直径30cmの柱痕が柱穴のほぼ中央で検出された。^(注8) 遺物は柱掘形の埋土P-3より細片の土師器が出土し、P-6の抜き取り穴から石斧の刃部が発見された。

雨落溝 SD 02

掘立柱建物跡SB01に平行して北桁行柱心より1.8m北方で検出した東西方向の溝である。南北溝に切られるが、SD03を切っている。平面形態は、ほぼまっすぐに走るが、溝幅は0.4~0.5mと一定しない。細部を見ると鋸歯状を呈している。両端は、建物のコーナー付近で途切れる。長さは14.10mを測る。断面では5cm以下の凹凸が数多く見られた。^(注9) 堆積土は、ほとんど黄褐色粘質土で、抜き取り穴の埋土と酷似する。出土遺物は、細片の土師器が少量である。

溝 SD 03

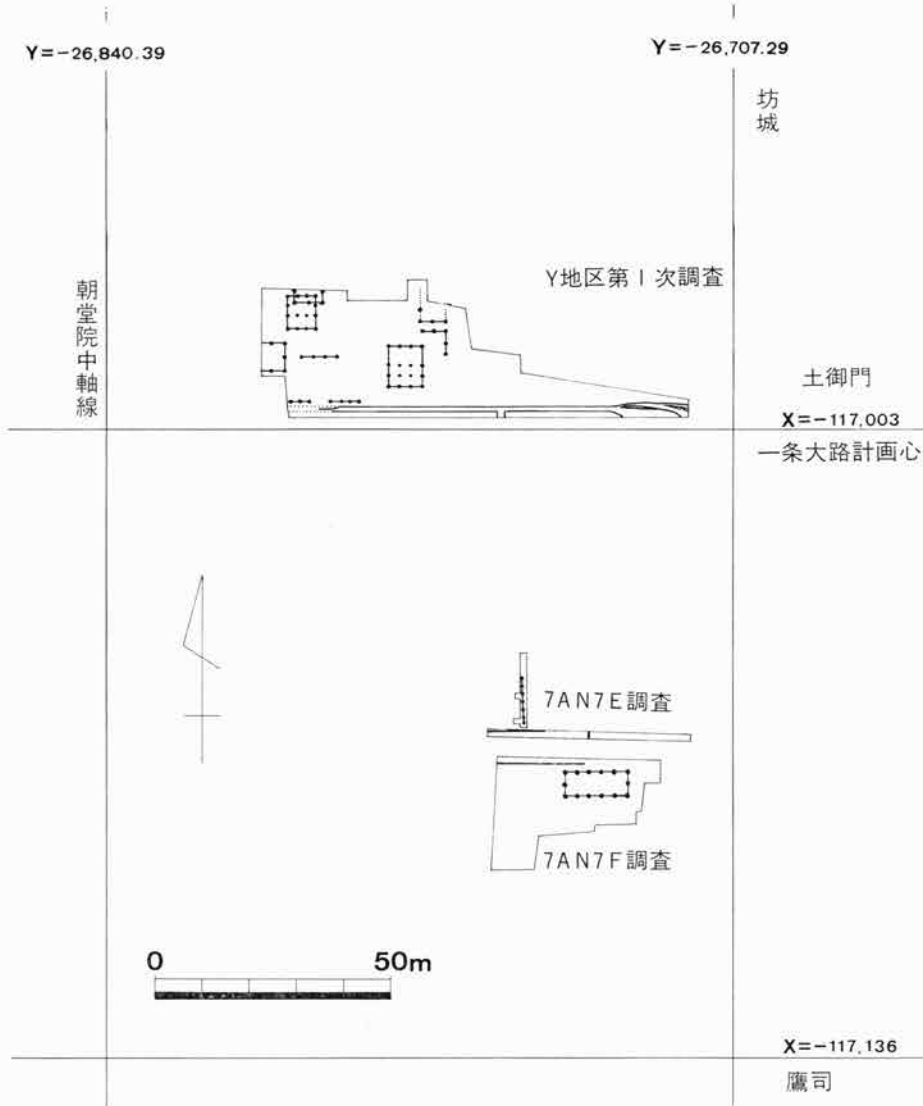
トレンチ北西部のSD02下層で検出した東西溝である。長さは19.3mを測り、東端はD-2とD-3の中間点で立ち上がる。方位は $1^{\circ}20'W$ で、ほぼ真東西である。溝心の国土座標は、 $X=-117.074.150$ で、溝幅は0.55~0.6m、深さ0.2~0.3mある。埋土は暗褐色粘質土で、土師器甕が出土した。

土坑 SX 04

トレンチの南西部で南北溝の下層から検出した円形の土坑状遺構である。径4.8m・深さ0.4m。断面形態は皿状を呈し、ゆるやかに内湾しながら立ちあがる。堆積土は、暗褐色粘質土で粘土化の著しく進行した単一層である。遺物は刃部の欠損した石斧が底面から出土した。

土坑 SK 05

SX04の北西、約1.5mで南北溝の下層から検出した不整形な長方形の土坑である。長軸2.7m・短軸1m・深さ0.1m。断面は皿状を呈し、底面からの立ちあがりは垂直に近い。SX04の土質と酷似する。



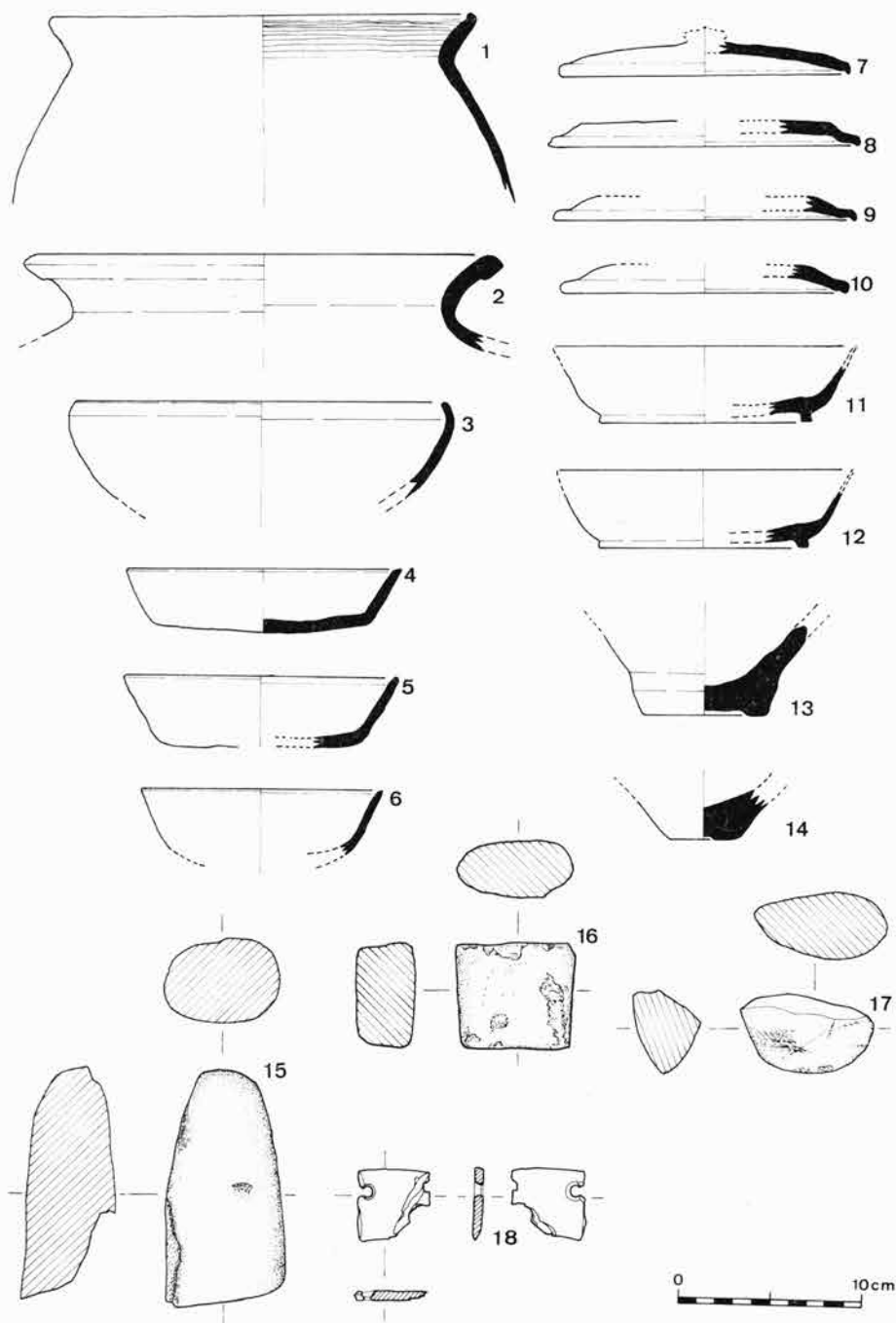
第113図 朝堂院北方官衙遺構配置図

土坑 SK 06

SK 05 の北方約 25 m で南北溝の下層から検出した長方形の土坑である。長軸 1.9 m・短軸 0.9 m・深さ 0.1 m で、断面は逆台形状を呈し、底面は平坦である。堆積土は暗褐色粘質土に砂質が混入している。

掘立柱建物跡 A

SX 04 の南側で、南北溝に切られた形で検出した東西方向の柱列である(柵列か?)。柱間



第114図 出土遺物実測図

SD 03 : 土師器 (1)・須恵器 (2・3)

南北溝 : 須恵器 (5・6・7・9)

P-6 抜き取り穴 : 須恵器 (8)・石斧 (17)

SX 04 : 石斧 (15・16)

茶褐色粘質土 : 須恵器 (4・10・11・12)

暗褐色粘質土 : 弥生土器 (13・14)・石包丁 (18)

寸法は、2.5 m・2.2 m と不揃いだが、方位は N0°12'00"W で真東西である。柱の掘形は0.3~0.35 m の方形で、深さ0.2 m、埋土は暗灰褐色を呈する粘質土である。柱痕は灰色の6 cm の円形で、土師器皿の細片が出土した。

4. 出土遺物

7AN7F 地区の調査で出土した遺物は、須恵器・土師器・弥生土器などの土器類のほかに石器類がある。調査面積の割に少なく、コンテナバット3箱ほどである。遺構に伴う遺物の中で実測可能なものも少ない。

SD 03 出土遺物（第114図1~3）

土師器甕(1)は、口径23.2 cm。口縁部を強く「く」の字形に外反させ、口縁端部を内側へ折りまげ丸くおさめる。口縁の内面は、横方向の刷毛目調整を残す。外面は体部で縦方向の粗い刷毛目を施し、口縁部までのびるがなでによって消される。色調は外面が赤褐色で、体部内面は黒灰色である。長石・石英を含み、胎土は割り合い密である。（図版第86-9）

須恵器甕(2)は、口径26.0 cm。口径部は大きく外傾し、口縁端部外面を台形状に肥厚させている。口縁部の外面は、縦方向の叩きを残すが、口頸部付近ではなでによって、一部消えている。色調は灰色を呈し、口縁・口頸部には自然釉がみられる。（図版第86-8）

須恵器鉄鉢型土器(3)は、体部、内湾ぎみに斜め上方へのび、口縁部は大きく内傾し、端部は丸くおさめる。体部外面は削りの後、なでを施し、その他すべて回転なであった。器表は砂粒のため粗いが、粘土は良質である。淡灰色を呈し、焼成は良好である。（図版第86-5）

南北溝出土遺物（第114図5・6・7・9）

須恵器杯A(5)は、口径15 cm・器高3.8 cm。体部から口縁部まで直線的に斜め上方へのび、端部は丸くおさめている。内・外面ともていねいななでを施す。底部は平底で未調整である。(6)は、口径13.0 cm。体部がやや内湾ぎみで、口縁で少し外反し、端部はやや尖りぎみにおさめられている。（図版第86-4）

須恵器杯蓋(7・9)は、口径15.8 cm・16.4 cm、天井部は削りの後に不規則ななでを施す。口縁部は、一段下って水平へのび、端部は下方へ屈曲し、丸くおさめる。(7)は、明らかに天井部に宝珠つまみがつく。（第86-2・3）

P-6 の柱抜き取り穴出土遺物（第114図8・17）

須恵器杯蓋(8)は、口径16.8 cm。天井部が欠損のため不明である。口縁部はていねいななでを施す。端部は下方へ屈曲し、丸くおさめる。（図版第86-1）

磨製石斧(17)は、刃部のみ残っており、鋭角の刃先をもつ。使用痕らしい極細線が両面で十数条みられる。材質は、淡白灰色を呈する硬質砂岩である。これらは、柱抜き取り穴の埋土、明黄褐色土中から出土した。(図版第87-3)

SX 04 出土遺物 (第114図15・16)

磨製石斧(15)は、刃部を欠損しており、基部・中間部の磨滅が著しい。残存長 13 cm・最大幅 6.4 cm・厚さ 2.8 cm 以上で、暗灰色を呈する安山岩である。(16)は、中間部のみ残る。断面は長楕円形。表面は剝離部分が多く、風化によるものかもしれない。材質は、淡緑灰色の安山岩である。(図版第87-2)

茶褐色粘質土出土遺物 (第114図4・10・11・12)

須恵器杯(4)は、口径 14.8 cm・器高 3.6 cm で、底部は平坦である。体部から口縁部まで直線に立ち上がり、端部は外側と鋭角をなす。端部内面は平坦面を有する。内・外面ともなで調整をしている。

須恵器杯蓋(10)は、口径 15.6 cm。器壁は比較的厚い。杯B(11・12)は、欠損部分が多く、台形状の貼り付け高台をもつ。内・外面ともなでを施し、底部外面のみ、高台付近を除いて未調整である。

暗褐色粘質土出土遺物 (13・14・18)

弥生土器(13)は、大きな平底の底部をもち、大きく凹む。底部から急激に立ち上がり、体部下位では、斜め上方にのびる。内・外面とも、調整は不明である。色調は淡黄褐色で、胎土に長石・石英・クサリ礫を含む。(14)は、小さな平底の底部中央に凹みをもつ。底部から斜め上方に立ちあがる。外面は赤褐色で、内面は灰褐色を呈し、長石・石英を多量に含む。(図版第86-6・7)

石包丁(18)は、残存長 4 cm・幅 3.8 cm・厚さ 0.4 cm、粘板岩製である。表面はよく研磨されており、極細の使用痕が観察できる。穿孔は、両面から穿たれている。(図版第87-4)

以上の出土遺物は、奈良時代後半(1~12・17)と弥生時代(13~16・18)とに大別できる。前者は、SD 03・SB 01・南北溝からそれぞれ出土した。遺構の新旧は、重複関係からとらえられるが、遺物から明確な時期差を見い出すことはできない。後者は、性格の不明な土壇と旧地形に即した暗褐色粘質土から出土したが、森本遺跡に近接していることなどから、この地域までその範囲が広がるとも考えられる。

5. ま と め

今回の調査で検出した弥生時代・長岡京期・中世の各遺構・遺物については、上記のとおり

り個別的に述べた。そのなかで、長岡京期の掘立柱建物跡 SB 01 は、北方官衙の構造を解明する手がかりとなるため、その性格と今後の課題を記してまとめにかえたい。

掘立柱建物跡 SB 01 は、宮跡の調査例のなかでは比較的大きな柱掘形や柱痕をもち、堅固な構築物であると推定されるが、庇を有しないため、平面は割り合い小規模である。上部構造については、雨落溝^(註10) SD 02 の位置から軒の出が 1.8m (6尺) で、屋根の形態が「切り妻造り」であることが推定される。これらのことから、建物配置における主屋・脇屋・雑舎のいずれか決め難く、将来の周辺での調査が待たれる。

東西溝 SD 03 は、調査地内で唯一東西方向に走り、南北溝群より時期が遡ることなどから、水田や畑地とは違った性格のものであると推察される。

上記の二遺構と南北溝群の時期について述べたい。これら三遺構は、重複関係から南北溝群、SD 02・SB 01、SD 03 の順に古くなる。後二者は方位やわずかな出土遺物から、厳密さを欠くものの、大きな年代差は認められず、長岡京期に属するものと考えた。南北溝群は、SB 01 の廃絶後に堆積した茶褐色粘質土に伴い、灰褐色粘質土の下層で検出しているため、長岡京以後のものと考えた。

以上、長岡京期に関連する遺構が3時期に区分されることを確認した。これとY地区での「長岡京直前の溝」、「長岡京の溝・掘立柱建物」、「長岡京直後の溝」との関連を追求・検討することは、北辺官衙を明らかにするための一視点となるであろう。

(竹井 治雄)

注1 中山修一ほか「長岡宮跡昭和44年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』京都府教育委員会) 1970

注2 調査補助員

西岸秀文・木ノ下治男・中西則行・篠原俊一・福富 仁・水野春樹・吉沢素子・小浦千歳・林 優子・広橋 慶(敬称略)

作業員

村上隆一・西村沢太郎氏をはじめ、向日市・長岡京市在住の方がた12名。

整理員

小塩礼子・渡辺美智代氏をはじめ、当調査研究センター長岡京跡整理事務所の方がた。

注3 長谷川浩一「長岡宮跡第112次(7AN7E地区)～朝堂院北方官衙～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 向日市教育委員会) 1982

注4 建物の中心の国土座標 X=-117.07745 km Y=-26.73610 km

注5 立柱そのものの原位置が確定しないため、±0°05'の増減がある。

注6 「突き固め」・「叩きしめ」等の構法は観察できなかった。

注7 柱を再利用するため計画的に抜き取られている。抜き取り穴は明黄褐色土で埋め戻されていることから、建物の跡地もすぐに利用されたと推察される。

注8 柱痕の径は、柱の径と一致するとは限らない。Y地区で径25cmの柱根が出土しているが、当

建物の柱穴の柱掘形の規模と同程度である。

注9 素掘りの溝。

注10 溝の形態・堆積土(SB01の柱抜き取り穴の埋土と酷似)・位置等から、SB01の雨落溝である
と考えるに至った。なお、建物の南側の雨落溝が検出されなかったことは、今後の課題として
残る。

9. 長岡宮跡第 125 次発掘調査概要

(7A N 3B 地区)

1. はじめに

今回の調査は、向日市立森本町公民館の建設工事に伴う事前調査として実施した。調査地の所在地は、向日市森本町前田6-2である。同地周辺での発掘調査成果もふまえて、昭和57年7月29日から同年9月21日まで当調査研究センターが主体となって調査を実施した。

調査地は、向日丘陵の段丘の東端裾部にあたり、西側は桂川氾濫原になるが、現状では宅地化が進行しており、旧状を把握することは難しい。同地は、長岡宮の東端部にあたり、平安宮大内裏の配置によれば、左近衛府と推定されるところである。

今回の調査にあたっては、地元住民のみなさんや多くの方々の協力を得た。また現地調査の際には、向日市教委の山中章氏にいろいろと御助言して頂いた。記して謝意を表したい。

2. 調査経過

調査は、対象地の西側に7m×15mのトレンチ（西トレンチ）を設定し、機械力により盛土（褐色土 地表下約1m）・旧耕土（暗灰褐色土 地表下約1～1.2m）を除去することから始めた。旧耕土の床土を除去

した時点で、北西から南東に流れる溝跡2本（SD 12501・SD 12502）を確認した。そして、西側のSD 12501の両岸にそって、径10～30cmの杭8本を検出した。その結果、2本の溝跡の堆積土中から、長岡京期と考えられる多くの土器片・木片、および瓦片・銅銭・木簡等が出土した。

東側のトレンチでは、盛土・旧耕土の床土を除去したのち、



第 115 図 調査地位置図 (1/25,000)

暗褐色粘質土層を掘り込んだほぼ真南北に流れる溝 SD 12503 を確認し、その部分について、3 m×6 m の大きさでトレンチを北に拡張して調査した。また、東側トレンチ東端で長軸約 60 cm の浅いピット状の小穴を確認した。その結果、その2つの遺構埋土中からは、長岡京期と考えられる多数の土器片・木片・木簡（3点）等が出土した。SD 12503 については、東一坊大路の側溝の可能性もあると考えられた。なお、調査地の基本的な層序は、地表下 1.3 m までが盛土または旧耕土・床土、地表下 1.3 m から 1.45 m までが暗茶褐色粘質土層、以下 1.45 m から 1.7 m までが黒褐色粘質土となっている。3本の溝は、その土層（黒褐色粘質土層）を切り込んで形成されており、同層を断ち割った際、弥生土器（V様式と思われる甕口縁の破片1点）が出土した。^(注5)

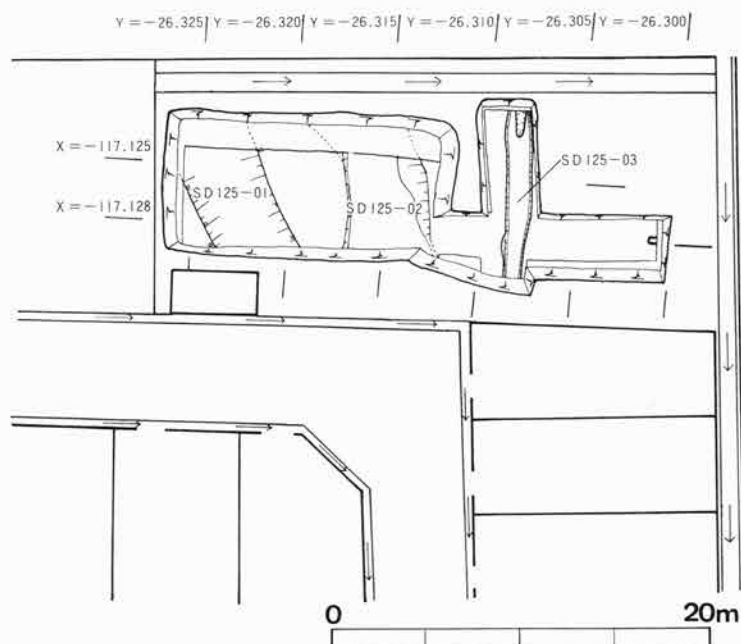
3. 調査概要

今回の調査によって、3本の溝跡等の遺構を検出し得た。以下、各遺構の概略について述べることにする。

(1) 遺構

① SD 12501

西トレンチの西部を、北西から南東に流れる溝^(注6)で、幅 4 m・深さ 20 cm 前後を測る。黒



第116図 調査地地形図

(暗)褐色粘質土層を切り込んで形成されており、溝内の堆積は上下2層に分かれる。上層は灰褐色砂礫層で、下層は褐色砂礫層である。溝の底部には、黒褐色粘質土層を切り込んだ多数の^(注7)小穴があいている。穴の大きさは、径10~20cm大のもので、深さは一定でないが10cm以内である。小穴は、乱雑に互いに切り合いながら、ほぼ溝の中央部約2.5mの幅の間に密集している。

溝の西岸で検出した杭は、合計8本であり、径20~30cm大のものが5本、径10cmのものが3本で、そのうち7本が黒褐色粘質土から淡緑灰色粘土層まで打ち込まれていた。

遺物は、堆積土からコンテナバット5箱ほどの土器片と多くの木片、木筒1点、銅銭14点、少量の瓦片が出土した。出土状況は、後述するが、上層からの方が下層に比べて多い程度で、溝底面上からは、銅銭以外ほとんど遺物は出土しなかった。

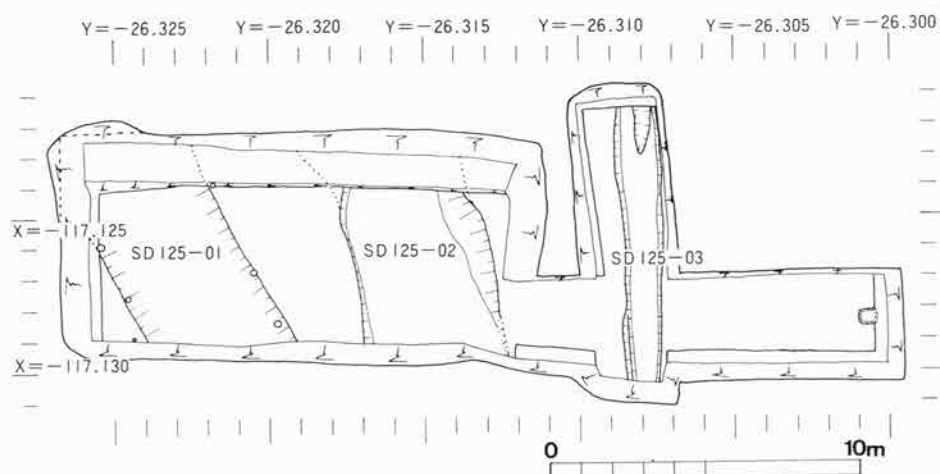
溝の時期は、出土遺物から考えて長岡京期にあたるものと考えられる。

②SD 12502

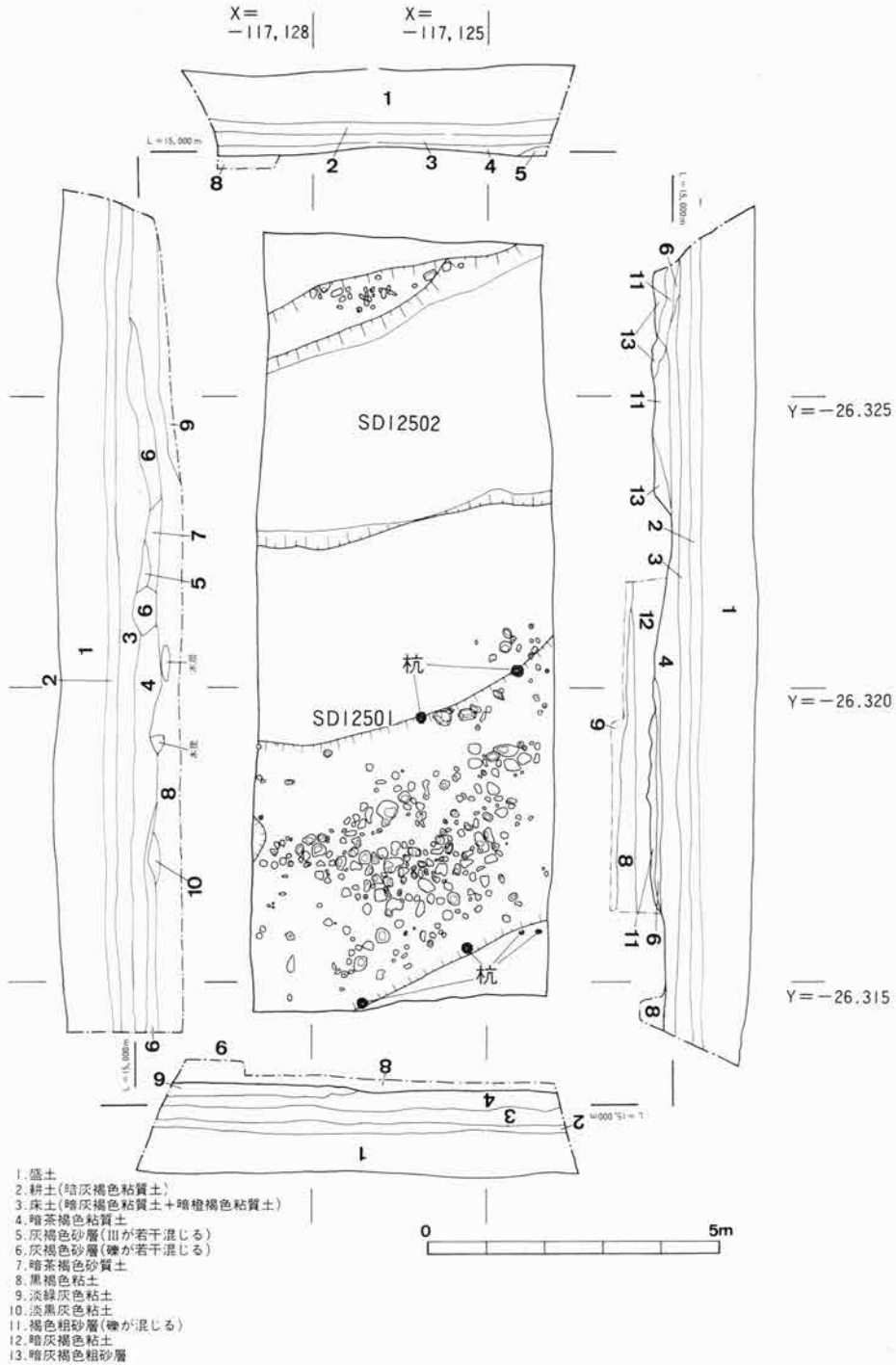
西トレンチの東部を、北西から南東に流れる溝で、幅4.2m・深さ25cm前後を測る。黒褐色粘質土および暗茶褐色粘質土を切り込んで形成されており、溝内の堆積は上下2層に分かれる。上層は褐色粗砂層で、下層は暗灰褐色粗砂層である。溝の東岸には一部小穴が認められる。小穴の大きさは、10~20cm大で深さは5cm以内である。

遺物は、主として下層から出土しており、コンテナバット2箱ほどの土器片、銅銭1点、獣骨等が出土した。

溝の時期については、出土遺物から考えて長岡京期と考えるとさしつかえないと思われる。



第117図 遺構配置図



第118図 西トレンチ遺構実測図

北壁での観察より考えて、SD 12501より後に形成されたと考えられる。

③SD 12503

東トレンチで検出したほぼ真南北に流れる溝で、幅1m・深さ20cmを測る。黒褐色粘質土を切り込んで形成されている。溝内の堆積は、暗茶褐色土(砂混じり)の単層である。

遺物は、コンテナバット6箱ほどの土器片・木片および少量の瓦片が出土しており、溝の規模に比べて出土遺物の多いことが注目される。

④P-12501

東トレンチの東端部の浅い小穴である。長軸64cm・短軸44cm・深さ8cmを測り、隅丸長方形をしている。ピット内には、褐色の砂質土が埋土としてあり、若干の遺物(長岡京期)^(注8)が含まれていた。

(2) 遺物の出土状況

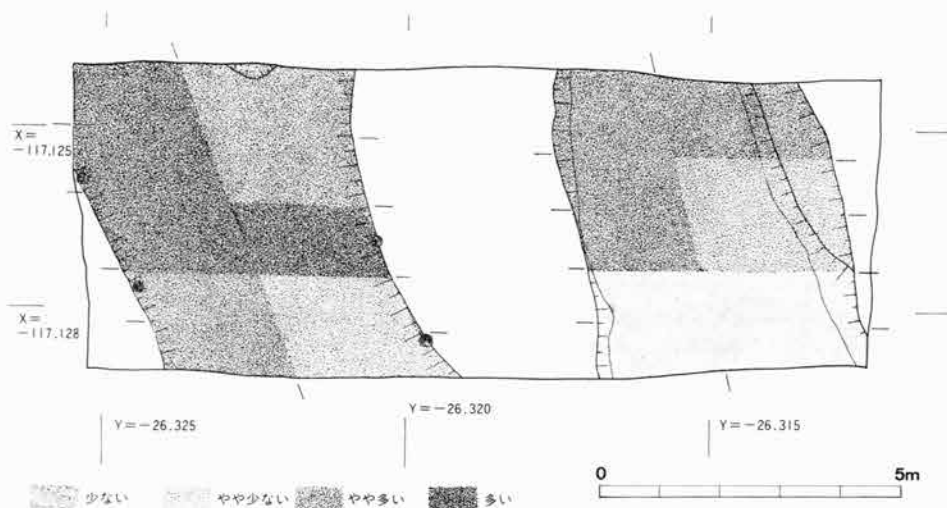
遺物の出土状況については、いずれも溝からの出土であるため特に留意されるものはない。ただ、土器・瓦の出土密度(SD 12501・SD 12502)、銅銭・墨書土器・木簡、そして杭の出土状況については、第119図・第121～123図に示したとおりである。

(3) 出土遺物

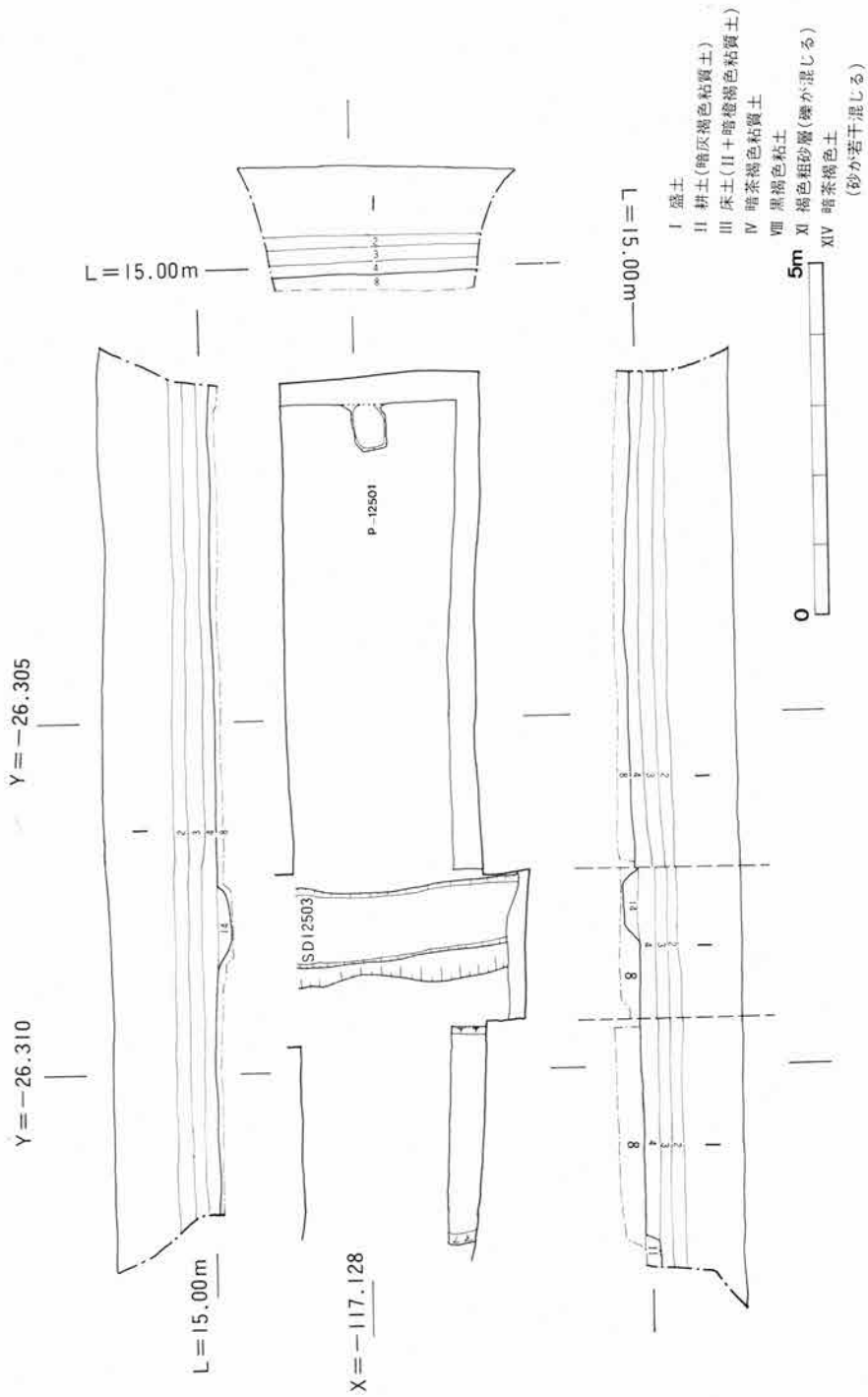
出土した遺物の大半は、溝SD 12501・SD 12502 および SD 12503 からで、長岡京期のものである。以下、出土遺物の概略を報告する。

(注9) 土師器

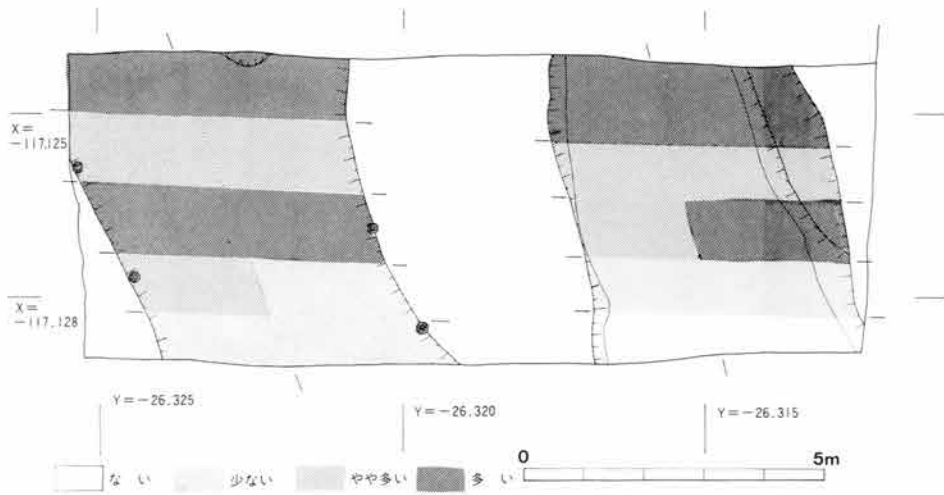
杯A・杯B・碗A・碗D・皿A・皿C・甕A・甕C・壺E・高杯A脚部などが出土している。



第119図 西トレンチ出土土器密集図



第120図 東トレンチ遺構実測図



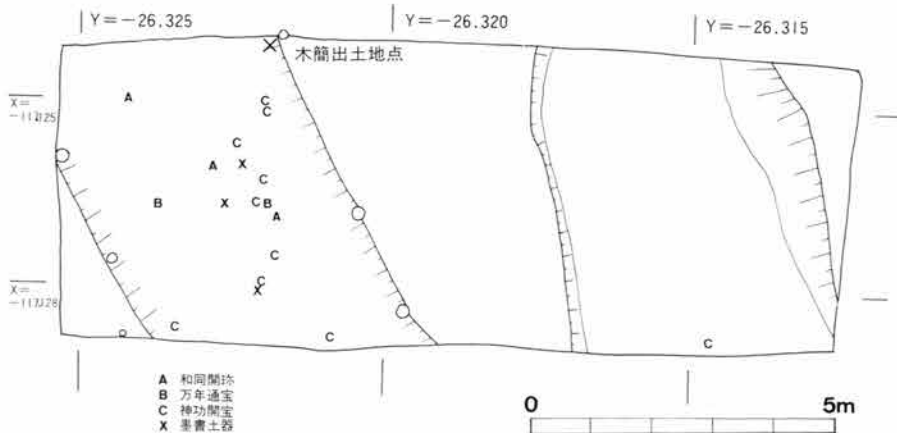
第121図 西トレンチ瓦出土密集図

杯A (40・41・43)

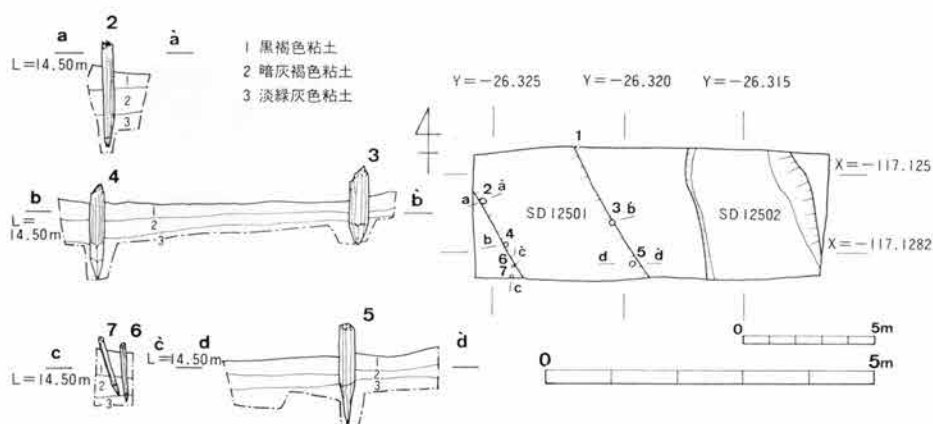
平坦な底部にやや内湾気味にたちあがる口縁部をもつ。体部の調整は、C手法であるものが多い。口縁端部により、内側に肥厚するもの(41・43)と丸くおさめるもの(40)の2種がある。

杯B (47・48・49)

杯Aに高台がつくタイプである。体部が内湾気味にたちあがるもの(47・49)とやや直線にたちあがるもの(48)とがある。口縁部の形態は、内側にやや肥厚するものと丸くおさめるものがある。体部には篋磨きを施す。



第122図 銅銭出土分布図



第123図 SD 12501 断ち割り断面図

皿A (11・12・37~39・52~55)

平底に短くのびる口縁部をもつ。口縁部の形態には、内側に肥厚するもの(11・12・54・55)と丸くおさめるものがある。口径により15~16cm前後, 17~18cm前後, 25cm前後の3種がある。底体部の調整はC手法による。

皿C (9・57)

平坦な底部から、やや外反気味にたちあがる口縁部をもつ小形の皿である。体部は、強いなでを施される。

椀A (36・42・44・46)

丸底に近い小さな平底と内湾気味の体部をもつ。口縁端部は、丸くおさめている。底体部は、篋削りによる。

椀D(45)

椀Aをやや浅くしたタイプである。口縁部と底体部の境界は不明瞭である。口縁部は、丸くおさめている。

甕A(63)

強く外反した口縁部に、やや球形に近い体部がつく。口縁端部は、やや肥厚する。口縁部と体部の境は強いなでにより、やや段をもつ。

甕C (1・2・64)

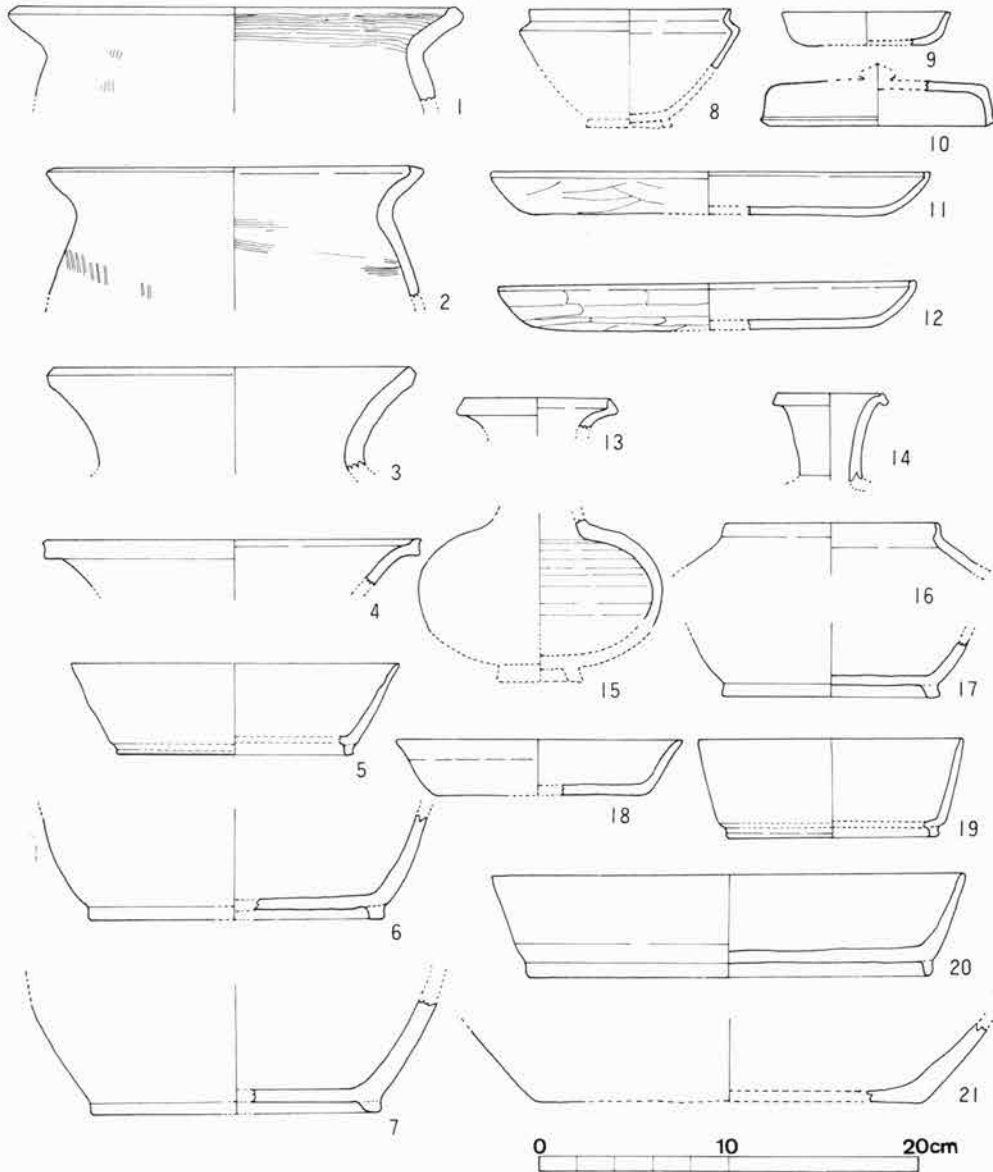
外上方にひろく口縁部に、わずかにひろがる筒状の体部をもつ。口縁部内面と体部外面は刷毛目調整を施す。口縁部と体部の境に強いなでを施す。口縁部は、やや内側にやや肥厚する。

壺E (65)

蓋受け状の口縁をもつ小形壺である。体部は、篋磨きを施す。

須恵器

杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・壺A蓋・壺L・壺E・甕・鉢・鉢A・壺底部などが出土している。

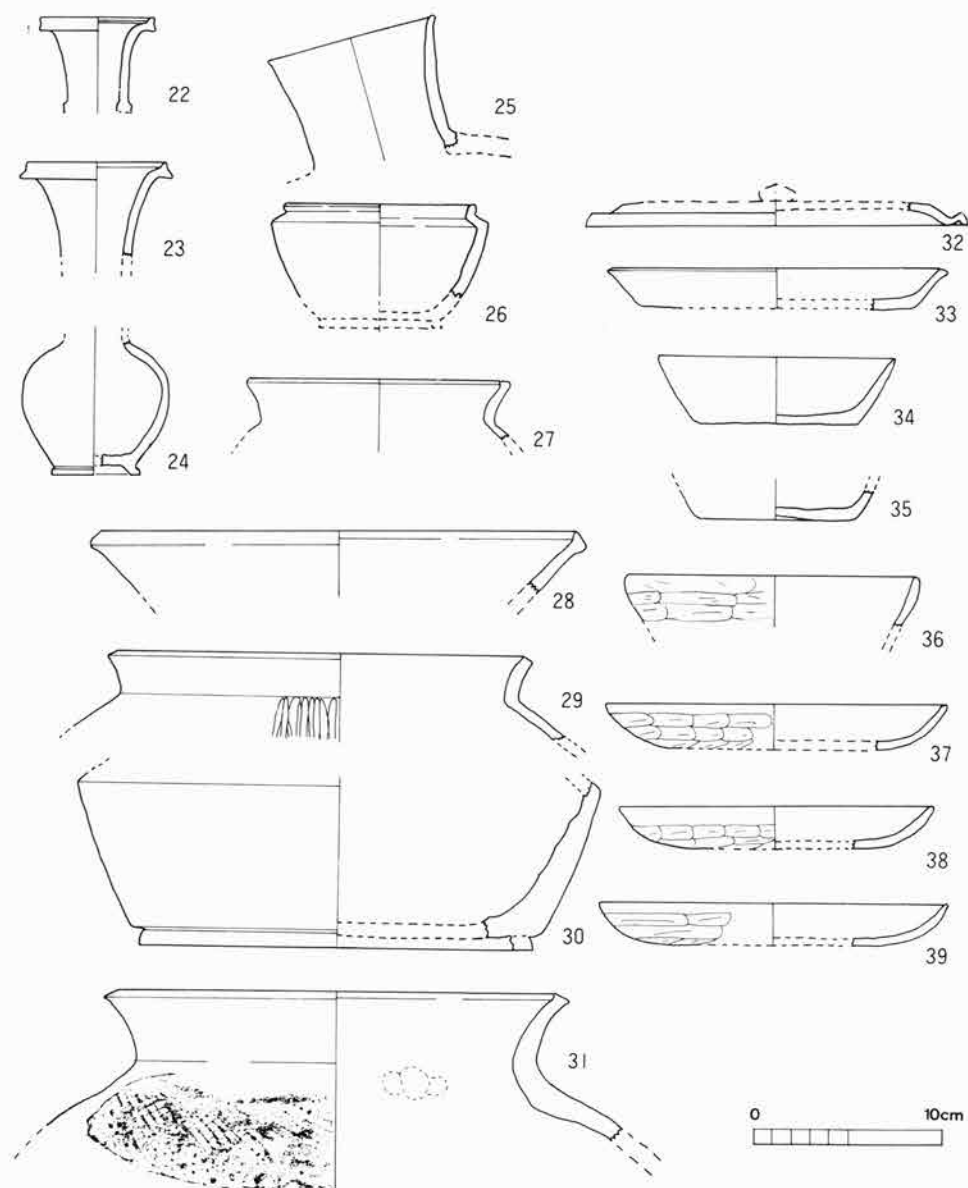


第124図 SD12501 出土土器実測図
1・2・9・11・12：土師器 3~8・10・13~21：須恵器

杯A (18・34・35)

平底から外上方にのびる体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。焼成は、やや不良で灰白色を呈する。

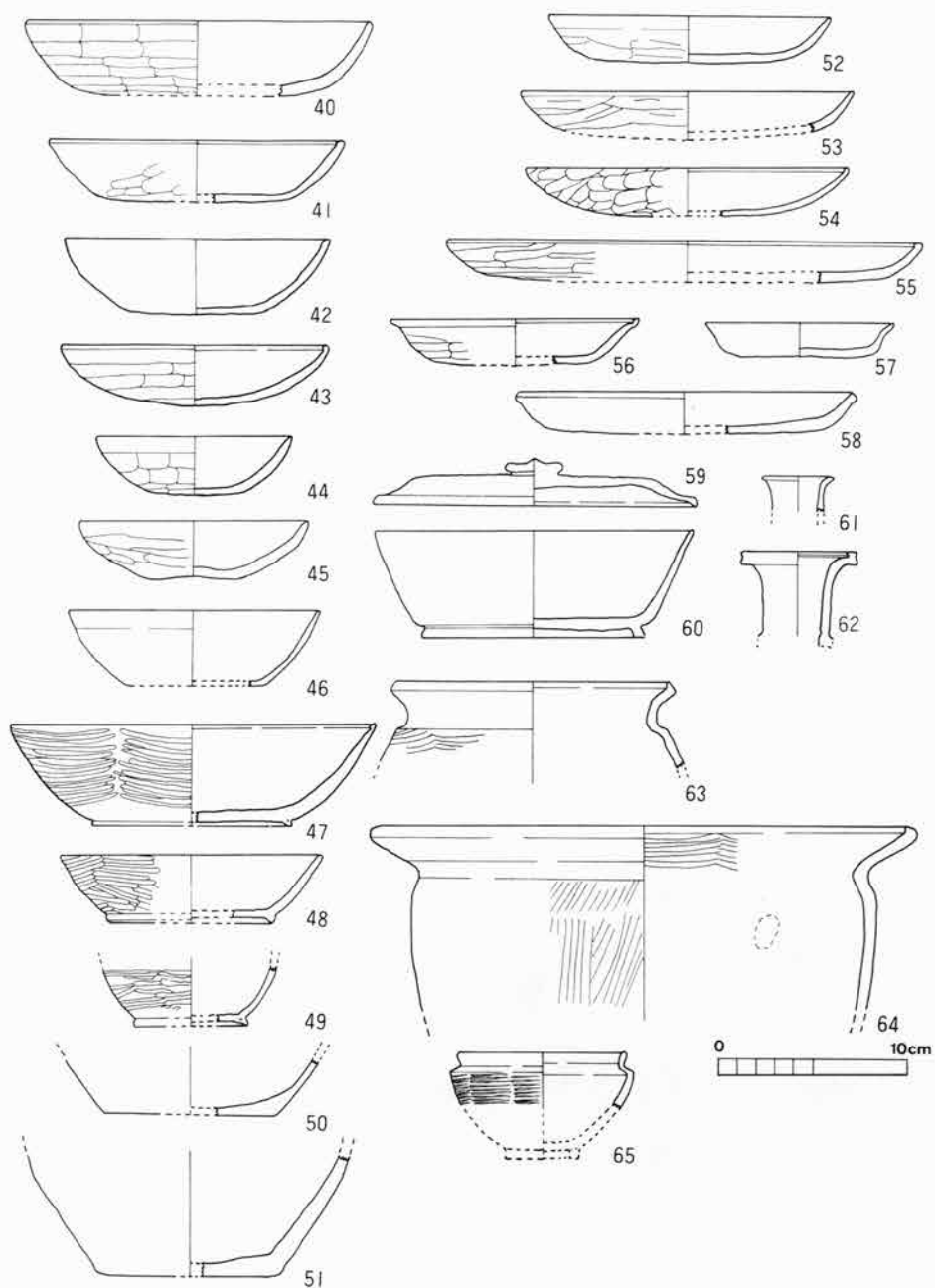
杯B (5・6・17・19・60)



第125図 SD 12502 出土土器実測図

22~35: 須恵器 36~39: 土師器

杯Aの形態に高台がつく。底部外面に、篋による輪状の破線およびジグザグの刻線が認められるものもある(第127図)。



第126図 SD12503 出土土器実測図
40~49・52~57・63~65:土師器 58~62:須恵器

杯B蓋 (32・59)

平らな天井の中央に、扁平な擬宝珠つまみがつく。天井部と口縁部の間が屈曲し、口縁部は断面が三角形で、下方に短くのびる。

皿A (33・58)

平らな底部に短く外上方にのびる口縁部がつき、その端部は内傾する面をもつ。

皿B (20)

皿Aの形態に高台をつけたもの。

壺A蓋 (10)

平らな天井部に擬宝珠つまみがつき、下方にのびた口縁部端に凹線をもつ。

壺L (13・14・22～24・61・62)

球形の体部に、外反する口頸部をもち、口縁端部は上下に突出する。

壺E (8・26)

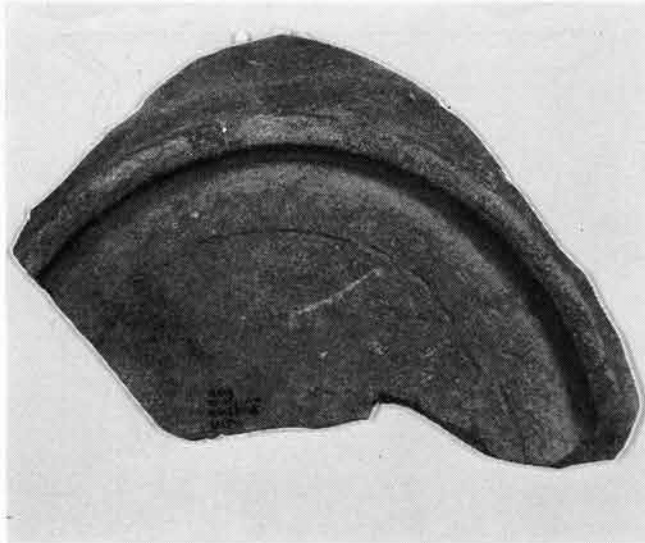
蓋受け状の口縁をもつ小形壺である。底部に高台を付すものと思われる。

盤A (21)

平底に外上方へ直線的にのびる体部をもつ。口縁部が欠損している。

墨書土器・土馬 (第128図)

墨書土器は、今回の調査で5点出土した。そのうちわけは、SD 12501 から4点、SD 12502 から1点である。墨書人面土器 (1・3) は、土師器壺Bの体部外面に人面の一部が認めら

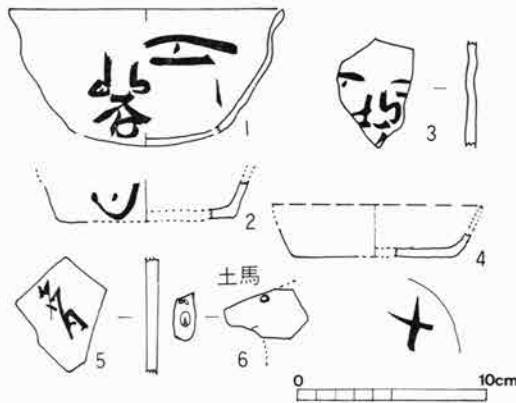


第127図 杯 B 底部

れる。1には「ハ」字状の口ひげらしきものがみられる。2は、須恵器杯Aの体部に「リ」、4は、須恵器杯Aの底部に「メ」の墨書が認められるが意味不明である。5は、須恵器の破片に「名月」と読める墨書がある。6は、土馬の頭部破片であり、目は竹管で刺して仕上げている。

(註10)
銅 銭 (第129図 図版

第99 付表3)



第128図 墨書土器・土馬実測図
SD12501:1~4, SD12502:5, SD12503:6

銅銭は15点出土した。出土地点は、第122図に示されるように、SD12501から14点、SD12502から1点である。種類別では、「和同開珎」3点、「萬年通寶」2点、「神功開寶」10点である。いずれも、溝の埋土下層あるいは底面から出土しており、SD12501の場合、出土密度の点でやや東岸寄りの部分にかたよっていた。

和同開珎（1～3）

3枚とも完形品である。1・2は、E型式に属する。銭文は全体に角張った文字であり、開は「開」につくる。鋳上りがよく鮮明である。A型式と共通するが、背面内郭の外縁の四隅が丸い。3は、A型式と考えられるが、和と同の「口」が四角いのが注目される。

萬年通寶（4・5）

2枚とも完形品である。4は著しくさびていて、銭文の一部が読めるだけであり、いずれの型式か判別し難い。5はE型式にあたり、通のつくりが他の型式と異なり、甬の「マ」が大きく「用」が小さい。

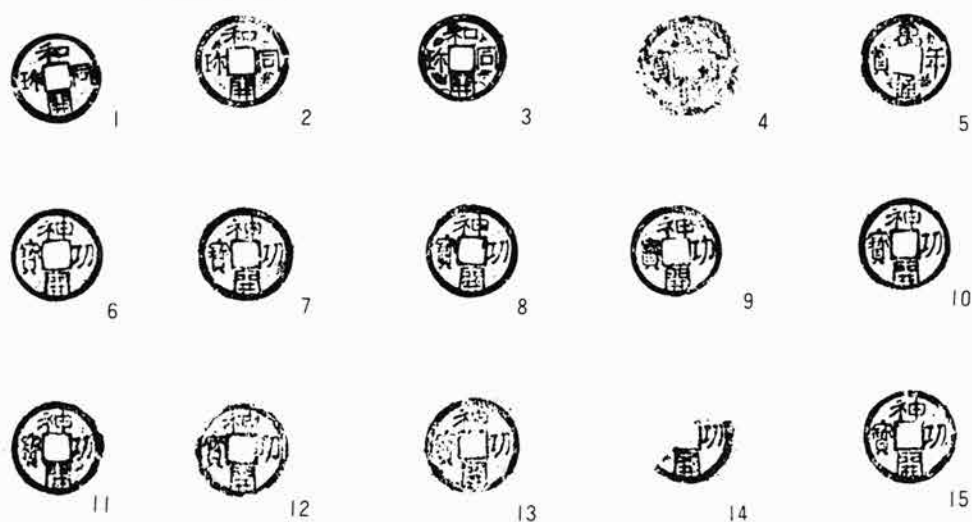
神功開寶（6～15）

9枚が完形品で、1枚が半損品である。6・7・8・10・11・13・14・15は、E型式で銭文を「開」につくっており、A・C・D型式と同じである。開は、「開」につくり、寶の「貝」は、D型式よりも小さい。功のつくりの第2画が長く延びることから「長刀」と呼ばれる。9はB型式になり、功のつくりを「力」とし、開を「開」につくることから「力功神功」と呼ばれる。12はD型式にあたり、功のつくりを「刀」とし、開を「開」につくる。寶の「貝」が小さく、「側功神功」と呼ばれる。

^(註11)木簡（第130図 図版第98）

SD12501の埋土上層（灰褐色砂礫層）から出土した。いわゆる短冊形をなす0011型式にあたり、4.3cm×24.2cmで、厚さ5mmである。下半右の一部を欠損している。墨書は比較的良好だが、中央の文字はうすく判読できなかった。裏面には、墨書はない。釈文は、以下のとおりである。

「四月十二日□田□家人四人知國背干嶋」



第129図 出土銭貨拓影(1/2)

付表3 7AN3B地区出土銭貨計測

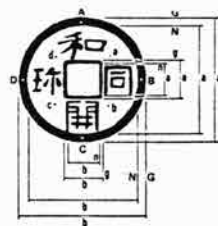
No.	貨幣名(種)	遺構	地区	層位	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
1	和同開珎	S D 12501	B-W	褐色粗砂層	1.20	25.00	21.00	8.50	6.50	1.38	0.48
2	和同開珎	"	C-E	"	2.70	25.00	22.00	8.50	7.00	1.37	0.40
3	和同開珎	"	D-E	"	3.25	23.50	20.50	7.75	6.50	1.46	0.72
4	萬年通寶	"	C-W	"	3.45	27.50	22.00	9.25	6.50	1.82	0.97
5	萬年通寶	"	D-E	"	5.95	25.00	21.00	—	7.00	2.22	1.06
6	神功開寶	"	B-E	"	4.80	25.00	21.00	9.00	7.25	2.02	1.08
7	神功開寶	"	B-E	"	4.30	25.50	22.00	9.00	7.00	1.61	0.70
8	神功開寶	"	C-E	"	4.80	25.00	20.50	9.00	7.00	1.61	0.72
9	神功開寶	"	C-E	"	3.10	25.00	21.00	9.00	6.50	1.36	0.55
10	神功開寶	"	D-E	"	3.95	25.00	20.75	8.50	6.75	1.58	0.77
11	神功開寶	"	E-E	"	3.55	25.00	20.50	8.50	6.75	1.57	0.90
12	神功開寶	"	E-E	"	3.10	24.50	21.00	9.00	6.50	1.38	0.60
13	神功開寶	"	F-E	"	2.25	25.00	20.75	8.50	6.50	1.58	1.02
14	神功開寶	"	F-W	"	1.20	—	—	—	—	—	—
15	神功開寶	S D 12502	F-W	"	2.75	25.00	21.00	9.00	6.25	1.35	0.61

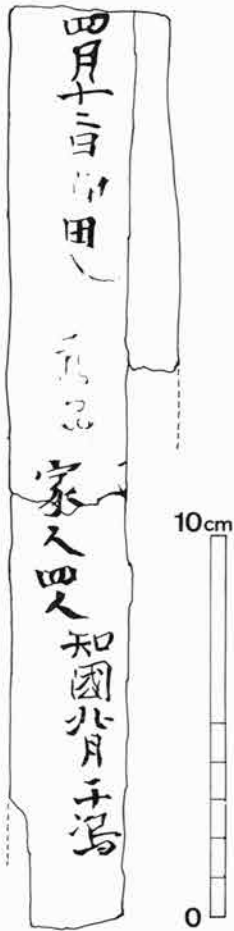
※銭貨の各部測点については下のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}, \text{ 外縁内径 } N = \frac{Na + Nb}{2}, \text{ 内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2},$$

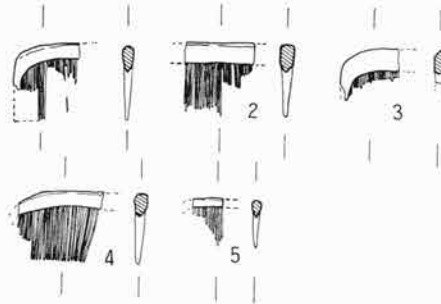
$$\text{内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2}$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A + B + C + D}{5}, \text{ 文字面厚 } t = \frac{a + b + c + d}{4}$$





第130図 木簡実測図



第131図 7AN3B地区出土の櫛

櫛 (第131図 図版第99)

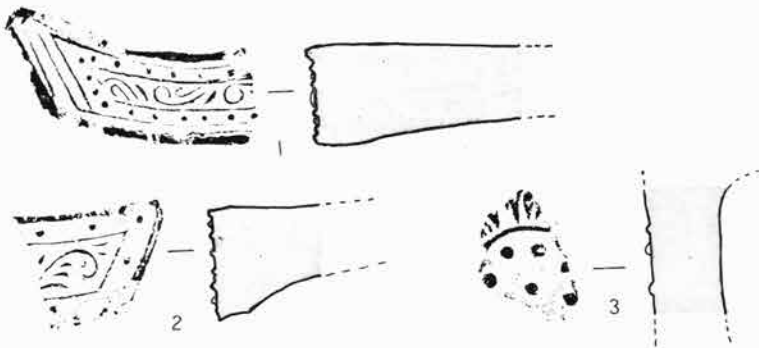
5点出土した。いずれも、基部の曲線に沿って歯を切り欠いた櫛^(注12)Bにあたり、2・3は同一個体である可能性も強い。

瓦 (第132図 図版第97)

3本の溝跡から少量出土し、軒瓦3点を図化した。1・2は、軒平瓦で、瓦当文様から1が6688型式、2が6732A型式にあたると考えられる。3は、小片のため型式は判別しえなかった。

4. ま と め

今回の調査は、狭い範囲ではあったが、一定の成果があった。そのひとつは、第87次の調査地 (7AN3A 地区) に北接した調査区であったため、SD 8701 と今回の SD 12501 が



第132図 出土瓦 (1/4)

1・3: SD 12501 2: SD 12502

同一流路であることが判明したことである。また、SD 12503 は、長岡宮のプランにおいて、東一坊大路の側溝にあたる可能性が高いなどがあげられる。^(注14)なお、長岡宮の東端部については、まだ今後の調査に負うところが多いと思われる。

(久保田 健士)

- 注1 今回の調査地の南側にあたるところで(7AN3A 地区 昭和53年11月、向日市教育委員会が実施)で、5m×20m のトレンチから西から南東に流れる溝 SD 8701 (あるいは川跡)を1本検出し、多数の長岡京期の土器・木片・木簡・銅銭等が出土した。
山中 章「長岡京跡第87次(7AN3A地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第5集 向日市教育委員会)1979
- 注2 当調査研究センター調査課 主任調査員 長谷川 達・調査員 久保田健士が担当し、同調査員 石尾政信の援助を得た。
- 注3 調査補助員 奥村 慎・不破 隆・和田譲二・西岸秀文・里田和宏・吉田 徹・中西 繁・寺本雅宣・永田成一郎
作業員 橋本健一・山内芳治・大根清一(以上、敬称略)
- 注4 先の第87次の調査(注1)で検出された SD 8701 にも、杭(面取りされたもの)が2本両岸で確認された。
- 注5 第87次の調査の際も、溝 SD 8701 の下層(暗褐色粘質土層)からV様式の弥生土器が出土している。
- 注6 SD 12501 は北壁部での標高が14.7m、南壁部では14.5m である。
- 注7 小穴の性格についてはその詳細はわからないが、人の足跡・牛馬の足跡も考えられる。
- 注8 須恵器の蓋(つまみ付)があり、内面に同心円叩き目が施されていたことが注目される。
- 注9 土器の器種・調整方法等の分類は『平城宮発掘調査報告』Ⅶによった。
- 注10 銅銭の型式や計測にあたっては、『平城宮発掘調査報告』Ⅵ(Ⅳ平城京の遺物6銭貨)を参考とした。なお、計測値は手元の計測器を使って得たものであり、概数値である。
- 注11 今回の調査では、木簡1点のほかに、SD 12503 の埋土中より木簡の断片(091型式 削屑)が出土したが、それらはいずれも小片であり墨書もうすく判読できなかった。木簡については、当調査研究センター理事長福山敏男氏、長岡京跡発掘調査研究所所長中山修一氏、向日市教育委員会の山中 章および清水みき両氏に助言を頂いた。
- 注12 山中 章「長岡京跡左京第51次(7ANESH-4 地区)～左京二条二坊六町～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集 向日市教育委員会)1981の櫛の形態分類によった。
- 注13 瓦の形式については、『平城宮発掘調査報告』Ⅸの瓦の分類表を参考にした。
- 注14 向日市教育委員会の山中 章氏、当調査研究センター調査員石尾政信の御教示による。

10. 長岡京跡右京第 105 次発掘調査概要

(7ANIMK・INC-II地区)

1. はじめに

今回の調査は、長岡京市が計画している都市計画街路石見・淀線建設工事に伴うものであり、昨年度の右京第83次調査に引き続いて実施した。今年度の調査は、今里西ノ口地区と今



第133図 調査地位置図 (1/5,000)

里舞塚地区の両地区で行った。今里西ノ口地区は、昨年度調査した西ノ口地区のHトレンチと藤ノ木地区のIトレンチに挟まれた所である。昨年度の調査では、奈良時代から平安時代にかけての建物跡や溝、中世の大溝等を検出したので、今回の調査地も同様の遺構の存在が予想された場所である。また、今里舞塚地区は、以前京都府が実施した下水道西幹線の立会調査で、埴輪片が出土した^(注2)こと、舞塚という地名から古墳の存在が考えられている場所である。さらに、この調査に先立って実施した電々公社の電話管埋設工事に伴う立会調査で、いくつかの溝状遺構や落ち込みを検出し、この地に遺構が存在することを裏付けた。また、この地の南東には、近接して乙訓地方屈指の横穴式石室を持つ今里大塚古墳が存在している。

調査は、2か所の離れた調査地のうち、北方部の今里西ノ口地区から着手した。調査の進展によって、今里舞塚地区で、舞塚古墳の周濠の一端を検出し、長岡京市教育委員会・長岡京市都市計画課と協議した結果、周濠の幅等を確認するため追加調査を行い、昭和58年1月26日に埋め戻しを含め、現地調査を終了した。その間、調査補助員・整理員・事務補助員として多くの方々の参加を得た。また、長岡京市都市計画課・長岡京跡発掘調査研究所、さらには、地元の自治会等の方々からは多大な御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

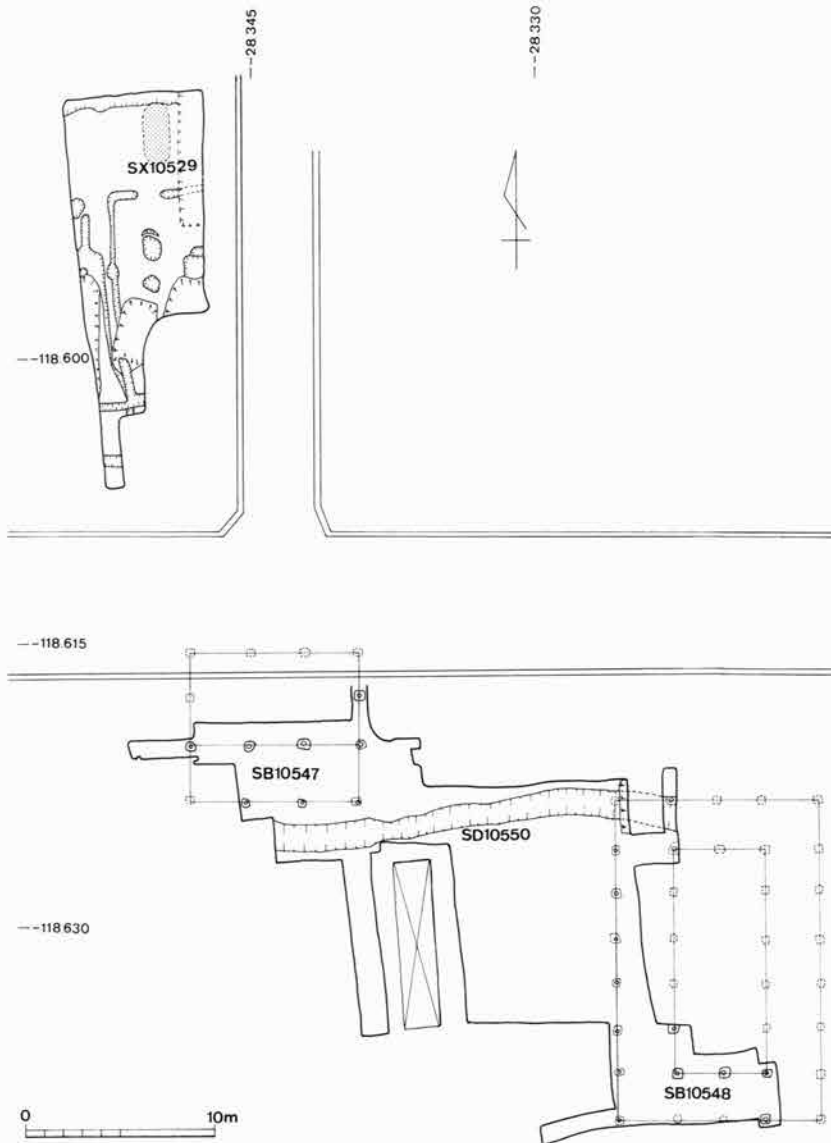
なお、今回の調査は、当調査研究センター調査課 主任調査員 長谷川 達、調査員 山口博が担当し、同調査員 山下 正・黒坪一樹の助力を得た。

2. 調査概要

調査は、北方部の今里西ノ口地区から着手し、ガス・水道の既設管や道路の基準点、既設道路・水路等の関係を考慮し、AからEの5つのトレンチを設定し、重機で盛土等を除去し、以後人力で掘削に入った。このうちCトレンチは、風呂川に接し、住宅地になる前は、この辺りに池が存在していた場所である。そのため、Cトレンチでは、盛土を除去した下は、現代の遺物のはいった池状の堆積層で、表土下約4mで地山の礫層となった。ここでは、顕著な遺構は検出されず、また、上記のような土層のため、壁面の保持が弱く、45度以上ののりをつけたが、崩落が激しく、危険であった。そこで、作業は土層図とトレンチ位置の略図を作成し、写真撮影を行った後、埋め戻すにとどめた。このCトレンチ以外のA・B・D・Eの各トレンチでは、遺構面が残存しており、それぞれ、奈良時代や長岡京期・中世等の遺構を検出した。

Aトレンチは、盛土・耕作土を除去すると、黄灰色粘質土の床土となり、この下は、灰褐色粘質土の中世の遺物包含層となる。この包含層からは、中世の遺物のほかに、奈良時代や長岡京期・古墳時代の遺物も混じって出土する。この灰褐色粘質土を除去すると黄色粘質土

の地山となり、この面で、溝・土壇・多数の柱穴を検出した。これらの遺構からは、中世の遺物が出土した。遺構面は、東半部が一段高くなっており、その段差のある所に南北方向の溝が存在している。この溝から東は、柱穴がほとんど存在しない。この溝の性格ははっきりしないが、何らかの地割溝のようなものの可能性が強い。このトレンチでは、長岡京期や奈良時代の遺構は検出できなかったが、遺物はかなり出土しているので、中世の段階で、それ以前のものは、削平を受けて消滅したと考えられる。



第134図 D・E トレンチ平面図

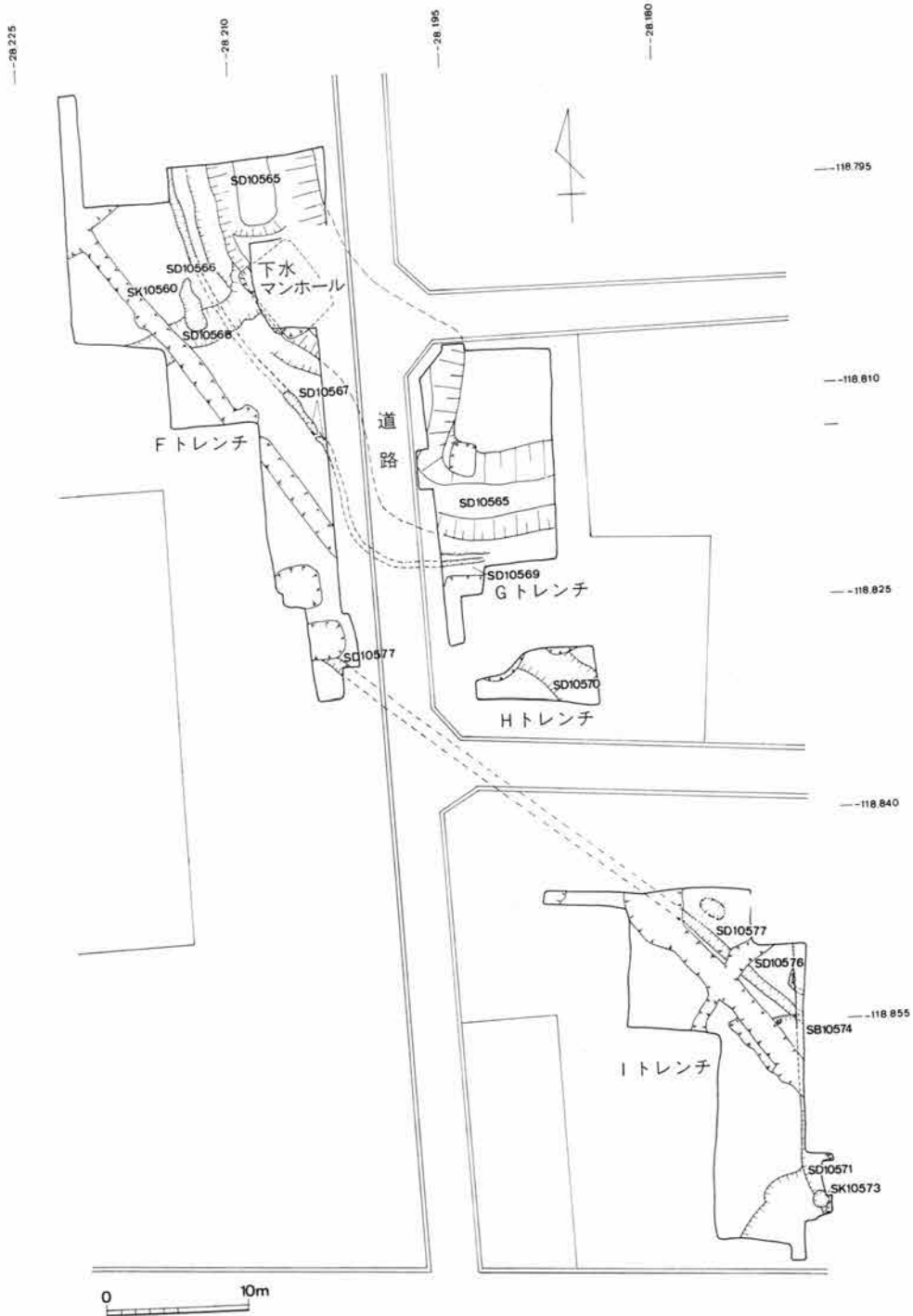
Bトレンチは、盛土・耕作土・床土を除去したところで地山となり、この面で、井戸・溝等の遺構を検出した。井戸は、一辺約2.2mの掘形を持つ石組みの井戸で、石組みの内径約0.8m・深さ約5mを測る。井戸内からは、瓦器碗・下駄・曲物底等が出土した。このトレンチでは、井戸のほか、中世の遺物が出土する溝2本と、柱穴2個を検出した以外、遺構は見つからなかった。特に、井戸の周囲は、井戸の排水用と考えられる溝以外は存在せず、空閑地となっていたようである。

Dトレンチは、表土を除去した面で、中世の遺構面となり、多数の柱穴と溝・土壇等を検出した。また、トレンチ北端部で、瓦器碗と土師皿の土器溜り SX 10538 を検出した。この土器溜りは、長径約4.5m・短径1.5mを測り、長径4.2m・短径1.0mの不定形の土壇に土器を次々と投棄し、形成されたものである。この土器溜り中の土器は、大多数が瓦器碗と土師器小皿で、ほかに瓦器小皿と土師器中皿が若干と、瓦器の片口鉢、瓦質の羽釜や鍋、須恵質のこね鉢が数点みられるにすぎない。

このトレンチでは、他のトレンチでみられた黄色粘土層は、南半部では遺構面をなしているが、北半部では、砂礫層等によって削られ、砂礫層やその上に堆積する暗灰褐色粘質土層が遺構面となっている。また、中世段階の置土層と思われる層もみられ、この辺りは、一度氾濫を受けた後、中世の段階で整地されたものであろう。

Eトレンチは、Dトレンチと道路をへだてて南側にあり、昨年度行った右京第83次調査のIトレンチに北接している。このトレンチは、2枚の水田にまたがり、資材置き的小屋等の関係でやや変則的な形となった。便宜上、西側の水田部分を西地区、東側を東地区と呼称する。なお、東側の水田は、西側に比べ約20~30cm低くなっている。

このトレンチでは、東西両地区とも、耕作土を除去した段階で黄色粘土の地山となり、この面で溝や柱穴を検出した。まず、西地区では、相対する東西方向の2列の柱穴列を、東地区では、南北方向に延びる柱穴列を、また、西地区から東地区にかけて、やや蛇行しながら東西方向に延びる溝を、それぞれ検出した。そこで、それらの柱穴列の規模等を確認するため、長岡京市教育委員会・長岡京市都市計画課と協議し、トレンチの拡張を行った。まず、西地区では、西と北へ一部拡張した結果、南側に庇を持つ東西3間・南北2間以上の掘立柱建物跡(SB 10547)であることが判明した。東地区では、南東部分を拡張し、また東へも一部延長のトレンチを入れた。その結果、この柱穴列は、南北7間・東西3間以上の、四面庇を持つと推定される掘立柱建物跡(SB 10548)とわかった。これらの建物跡は、柱穴列の方向がほぼ真東西・真南北の方向と合致することや、柱穴内から長岡京期頃の遺物が出土することから、長岡京期の建物跡と考えて誤りなからう。東西方向の溝(SD 10550)は、SB10548



第 135 図 IMK 地区 (F~I トレンチ) 調査図

の柱穴の一つに切られており、溝中からは奈良時代の遺物が出土した。このトレンチでは、これらの遺構のほか、多数の柱穴を検出した。それらの柱穴のなかには、瓦器片が出土するものもあり、中世にも、建物が存在していたことが判明した。

これらA～Eの各トレンチの調査が終了に近づいた段階で、南方部の舞塚地区（IMK 地区）の調査の準備にかかり、E～Iの各トレンチを設定した。この地区は、住宅地となっていた所であるが、京都府教育委員会が行った下水道西幹線に伴う立会調査や地名等から、古墳の存在が推定されている場所である。また南西約200mの地には、乙訓地方屈指の規模を持つ今里大塚古墳が存在する。こうしたことからこの地区では、舞塚古墳に関する遺構の検出も調査目的の一つであった。この地では、今回の調査前に、電電公社の埋設管工事に伴う立会調査を実施し、いくつかの遺構を検出している^(注5)。しかし、その時点では、古墳の遺構と断定できるものは確認していない。また、住宅解体時やその他の攪乱をかなり受けていることも、その立会調査で判明した。今回のトレンチは、電電公社の地下埋設管工事に伴う立会調査や、京都府教育委員会が実施した立会調査の結果に基づいて、その位置を決定した。

Fトレンチでは、トレンチの東端部で、古墳の周濠の西肩を一部検出し、Gトレンチでも周濠の一部を検出した。そこで、長岡京市教育委員会・長岡京市都市計画課と協議し、周濠の規模等を確認するためトレンチを拡張した。Fトレンチについては、Fトレンチ内の他の遺構の実測・写真撮影終了後、トレンチを一部埋め戻し、トレンチの東北部を拡張した。またGトレンチについては、他のF・H・I各トレンチの調査終了後、他のトレンチを埋め戻し、東側への拡張を行った。その結果、この古墳は、帆立貝式の墳形を持つことが判明し、Fトレンチでは後円部周濠を、Gトレンチでは前方部周濠をそれぞれ検出し、人物埴輪や多数の円筒埴輪が出土した。また、この舞塚古墳の周濠（SD 10565）以外にも、Fトレンチでは、弥生時代の溝（SD 10577）や、古墳時代の溝（SD 10568）、長岡京期の土坑（SK 10560）等を検出した。SD 10568 は、幅約1.5mから2.4mを測り、深さ約0.3mを有する。SD 10577 は、トレンチ南端部で検出したもので、幅約1m・深さ約0.4mを測る。

Hトレンチは、盛土・耕作土・床土を除去した所で地山の黄色粘土層となり、この面で古墳時代の溝（SD 10570）を検出した。この溝（SD 10570）は、幅約3m・深さ約0.4mを測り、円弧を描いている。溝中からは、須恵器の高杯や大型甕が出土した。SD 10570 は、その形状等や、立会調査結果から円墳の周濠と考えられる。この古墳は、今回の調査や立会調査の結果から復元すると直径約15mの円墳となる。舞塚2号墳と呼称する。^(注8)

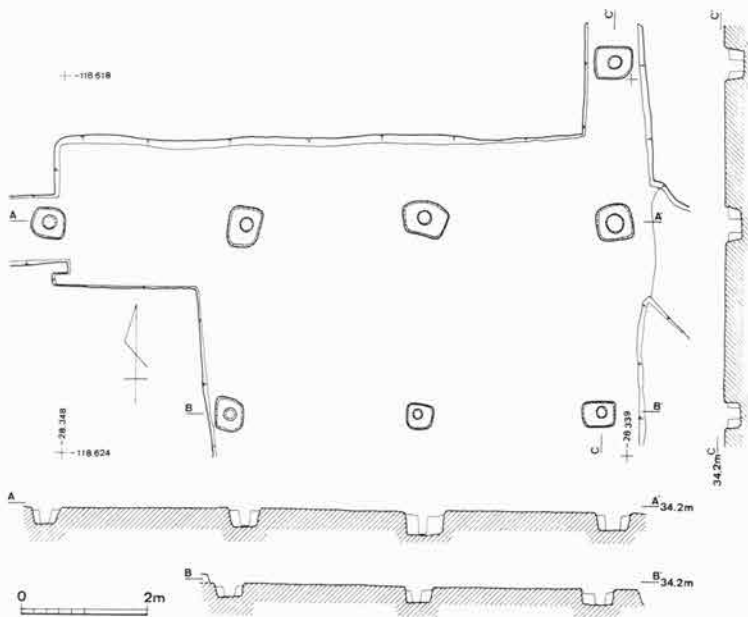
Iトレンチでは、盛土・耕作土・床土を除去すると、地山の黄色粘土層や礫層となり、この面で、竪穴式住居跡（SB 10574）、弥生時代の溝（SD 10577）、長岡京期の溝（SD 10571）等

を検出した。SD 10577 は、トレンチの北端で検出したもので、北西から南西へと延びている。幅は約1mを測り、深さは約0.3~0.4mを有している。竪穴式住居跡(SB 10574)は、SD 10571 等のためにごく一部を検出したのみである。SB 10574 は、北西コーナー付近にかまどの残欠と思われる焼土がある。SD 10576 は、幅約0.2~0.3mのL字状に屈曲する溝で、竪穴式住居の壁溝の可能性はある。出土遺物は、ほとんど無く、時期は判然としないが、SB 10574 については、かまどを北西コーナー付近に有していることから、古墳時代後期のものと推定される。SD 10571 は、南北方向の溝で、立会調査結果^(注8)と合わせ、幅約2.4m・深さ約0.1~0.4mを測る。この溝からは長岡京期の遺物が出土し、その位置等から西三坊坊間小路の側溝である可能性が強い。

以上が、今回の調査の概要であるが、そのうち、Eトレンチで検出した掘立柱建物跡と溝、そしてF・Gトレンチで検出した舞塚古墳の周濠について、以下に少し説明したい。

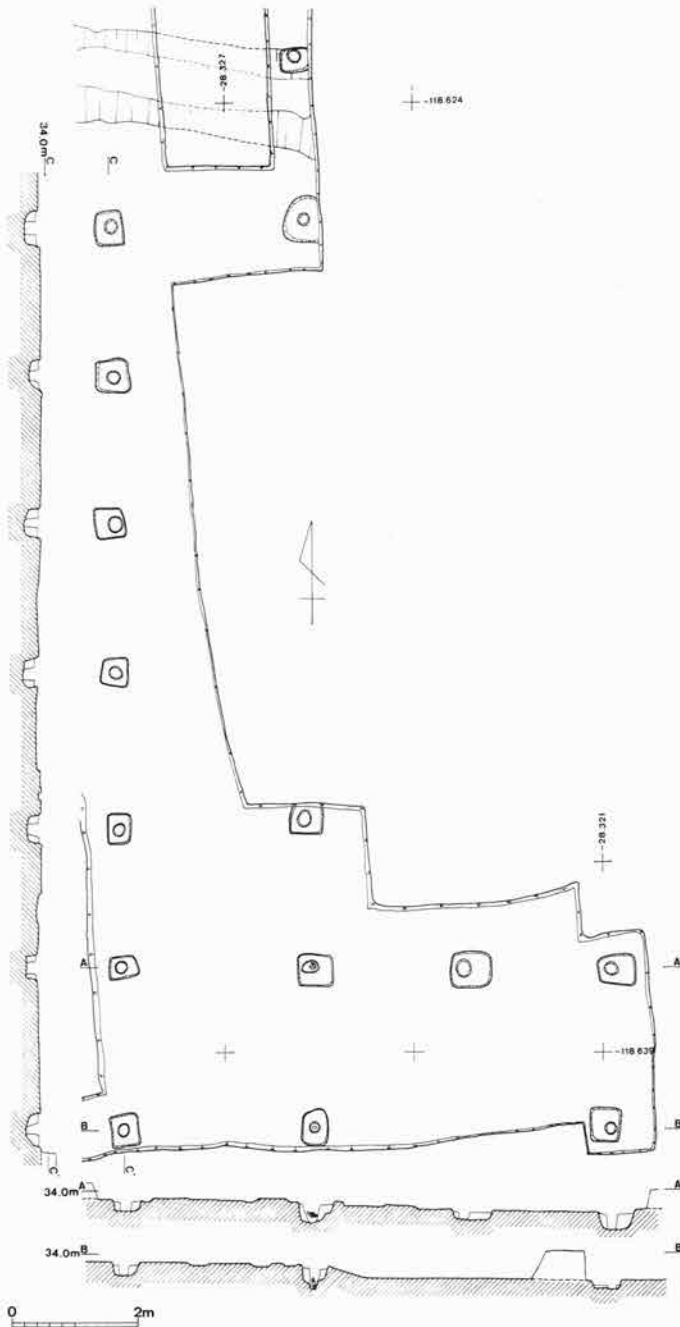
3. 検出遺構

今回の調査では、弥生時代や、古墳時代・奈良時代・長岡京期、そして中世の遺構を多数検



第136図 SB 10547 実測図

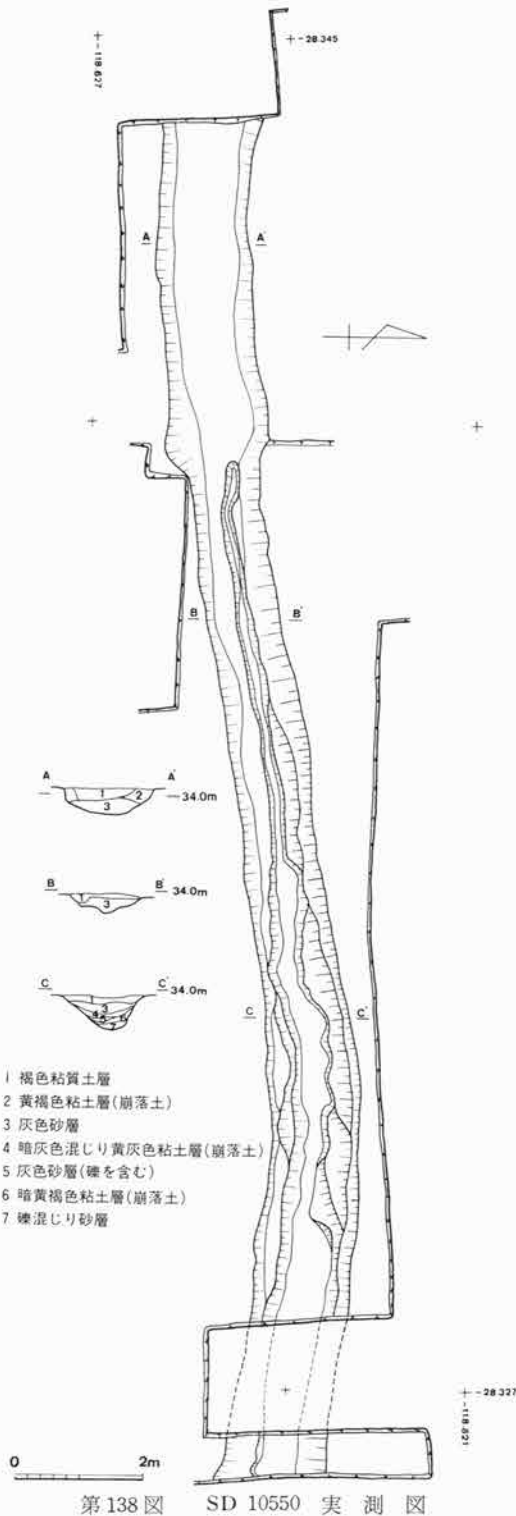
出した。しかし、まだ整理中でもあり、それらのうちから、Eトレンチで検出したSB10547・SB10548・SD10550と、F・Gトレンチで検出した舞塚古墳について少し説明する。



第137図 SB 10548 実測図

SB 10547 この建物は、Eトレンチの西地区で検出したもので東西約3間・南北2間以上の規模を持つ。三条大路推定地が、すぐ北側になるので、おそらく、東西3間・南北3間の、南側に底を持つ東西棟の建物と考えられる。規模は東西約9m・南北約8.4mと推定される。柱間間隔は、東西方向で約3m、南北方向は、底の部分が約3m、身舎部分で約2.7mとなっている。柱穴は、底の掘形が一辺約0.4m、身舎の掘形が一辺約0.6mとやや底の掘形の方が小さい。

SB 10548 この建物は、Eトレンチの東地区で検出したもので、北西角の柱穴は後世の攪乱のため失われているが、南北7間・東西3間以上の規模を持っている。その検出結果から、四面底を持つ南北棟の建物であった



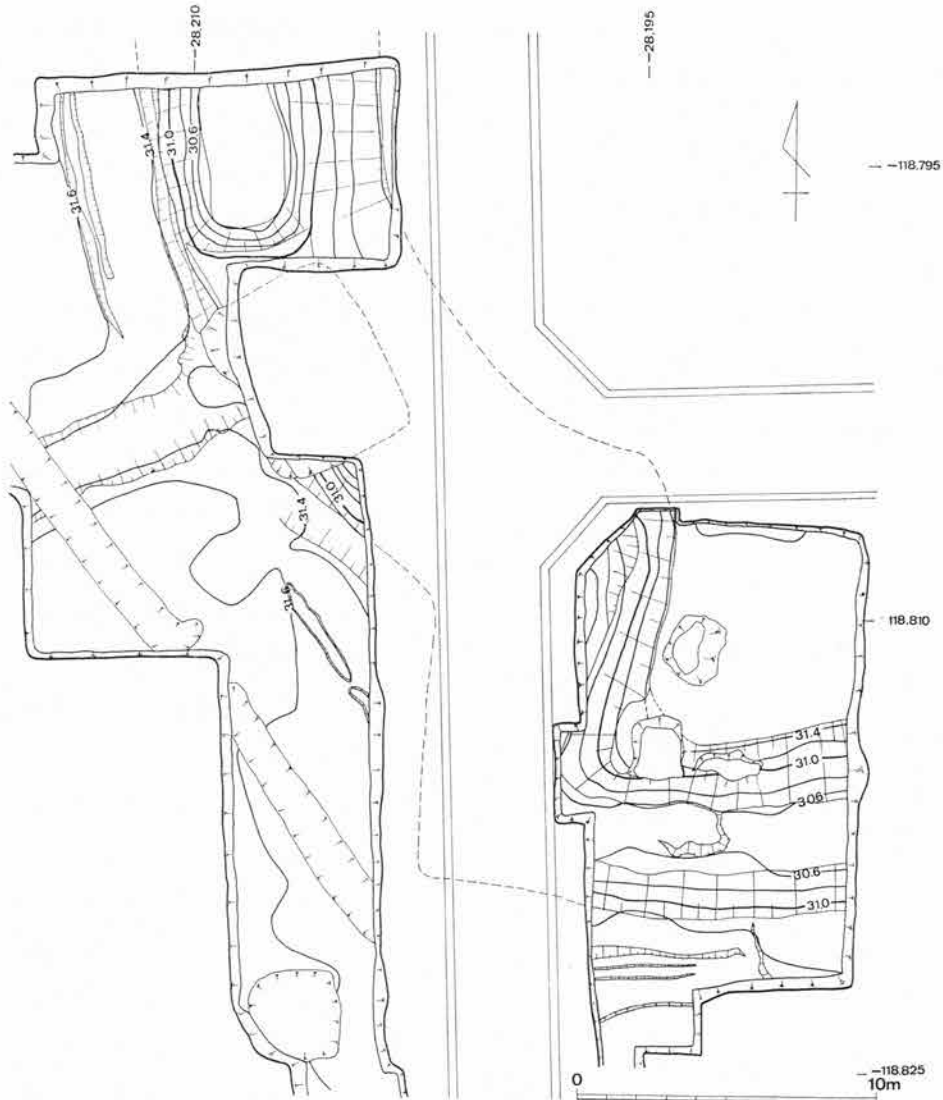
と推定される。規模は南北約16.8m, 東西約10.8mであったと推定される。柱間間隔は, 南北方向で約2.4m, 東西方向は底部分で約3m, 身舎部分で約2.4mである。柱穴は, 庇の柱穴が掘形の一边約0.5m, 身舎の柱穴が掘形の一边約0.8mを測る。この建物跡の柱穴のうち, 一つは抜き取り痕があり, その中に軒丸瓦(第141図22・23)が遺棄されていた。また柱が一部残存している柱穴もあった。この建物跡は, SD 10550を削っていること, 柱列がほぼ真南北・真東西の線と合致していること, また, その出土遺物等からみて, 長岡京期の建物跡と考えてまちがいないであろう。SB 10547についても, 柱列の方向は, SB 10548と合致し, 同様に考えて良い。

SD 10550 この溝は, Eトレンチの北端部付近をやや蛇行しながら, 西から東へと流れている。幅約1.0mから1.2m, 深さは約0.3mから0.7mを測っている。埋土は褐色粘質土と灰色砂層の2層に大別され, 肩の地山の土が崩落して砂層の間に堆積している所もある。砂層が存在することから, 水の流れがあったことがわかる。この溝中からは, 奈良時代の土師器の杯・碗・甕・皿や須恵器の杯身・杯蓋・皿・甕・こね鉢等が出土した。また, 製塩土器も出土している。ほかには, 飛鳥時代の須恵器片も少量ながら出土している。この溝は, 前述の建物

を建設するに際し、埋められたものであろう。

舞塚古墳 今回の調査では、この古墳の周濠 (SD 10565) を検出した。SD 10565 は、F・G両トレンチにわたって検出し、Fトレンチでは後円部の周濠を、Gトレンチでは、前方部の周濠をそれぞれ検出した。

後円部周濠は、幅約7m・深さ約1.1mで、溝中からは、多数の円筒埴輪片が出土した。また、後円部に土橋を持っていたことも判明した。この土橋は、濠底から約0.8mの高さで、外堤よりは一段低くなっている。土橋の幅については、残念ながら南側が、下水マンホール



第139図 SD 10565 (舞塚古墳周濠) 平面図

のために破壊されており不明である。

前方部周濠は、前方部南側で、幅約 5m・深さ約 0.9m を測る。この溝中からは、円筒埴輪片とともに、人物埴輪の頭部(第140図)が出土し、この古墳には円筒埴輪だけでなく、人物埴輪も並べられていたことが判明した。人物埴輪については、他の部分の破片らしきもの 1・2片見つかっており、現在まだ十分に整理が進んでいないので、今後、頭部以外の部分も見つかる可能性がある。

以上のように、後円部と前方部の周濠を検出し、この古墳は、帆立貝式の墳形であったことが判明した。また、周濠の埋土には、有機質を含んだ灰黒色の粘土層があるので、周濠は水をたたえていたようである。この古墳の規模については、検出した部分が、ごく一部であるため、正確には判明しないが、全長約 40m はあったと考えられる。将来、調査が進めば、規模もはっきりとするであろう。なお、この古墳には、転落石等もみられず、葺石はなかったようである。

4. 出土遺物

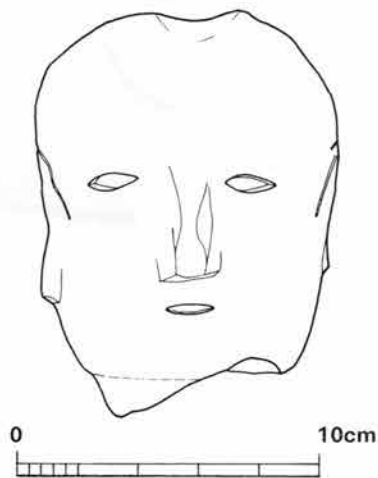
今回の調査では、人物埴輪や円筒埴輪・須恵器・土師器・瓦器・瓦・陶磁器等が出土したが、今回は、それらのうち人物埴輪と SD 10550・SX 10538・SB 10548 から出土した須恵器・土師器・瓦器・軒丸瓦を一部紹介する。他はまだ整理中であり、次回に報告する予定である。

人物埴輪の頭部は、現存長 13.2cm・径10cmを測り、細い木ノ葉形の目と口を穿ち、側頭部に線刻を入れ、後頭部には粘土紐を貼り、結髪している様を表現している。

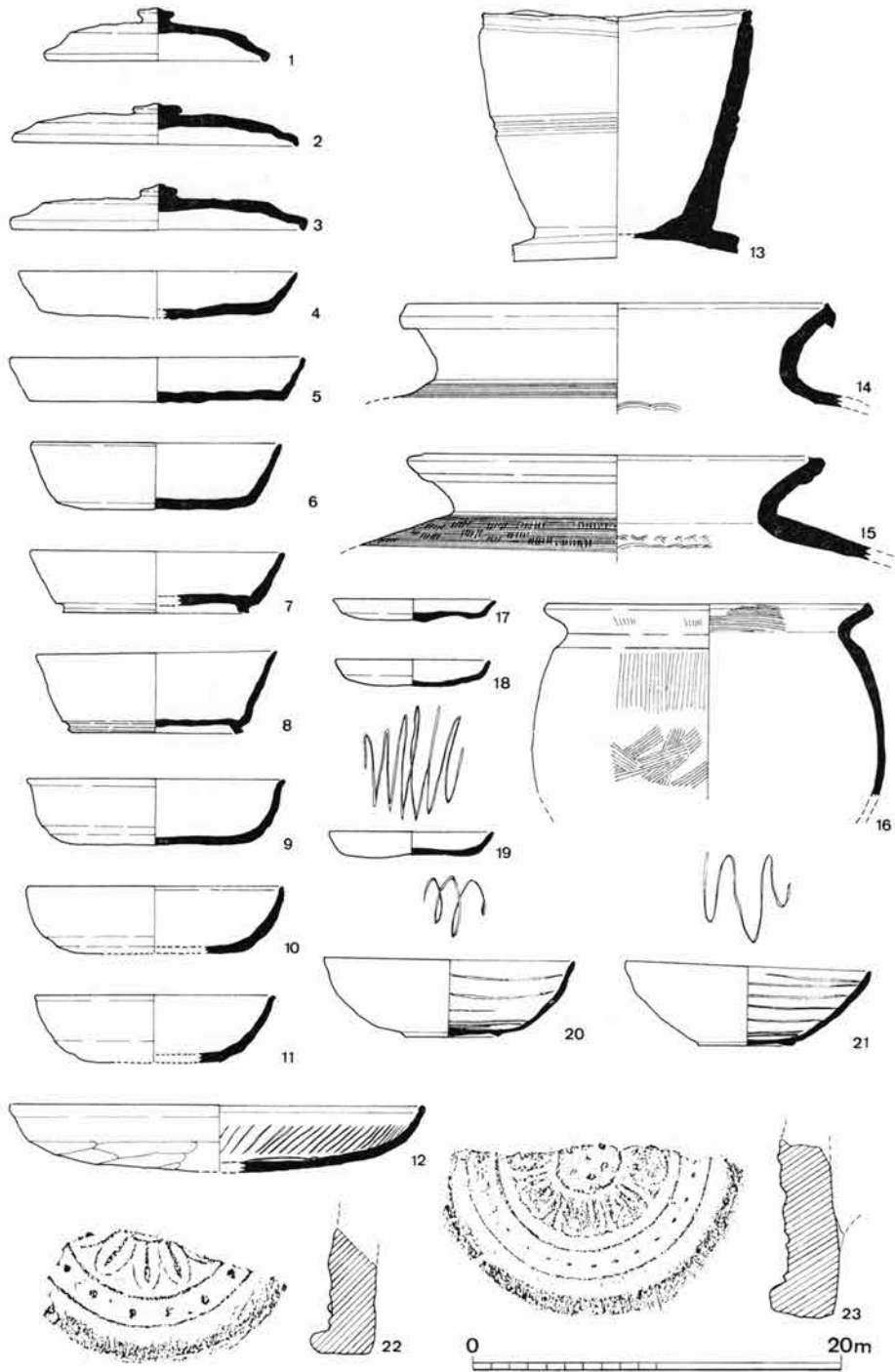
SD 10550 からは、須恵器の杯(6~8)・蓋(1~3)・皿(4・5)・甕(14・15)・盤・こね鉢(13)や、土師器の杯(9~11)・皿(12)・甕(16)が出土した。

蓋(1~3)は扁平な天井部から屈曲する口縁部をもち、宝珠つまみをもっている。1は2・3のつまみに比べるとそれほど扁平ではない。法量は、1が口径11.8cm・高さ2.8cm、2が口径5.4cm・高さ2.2cm、3が口径5.7cm・高さ2.4cmを測る。

杯(6~8)は、7・8は高台を持ち、7



第 140 図 人物埴輪頭部実測図



第141図 出土遺物実測図

須恵器：1～8・13～15，土師器：9～12・16～18，瓦器：19～21，軒丸瓦：22・23
 SD 10550 出土：1～16，SX 10538 出土：17～21，SB 10548 出土：22・23

が口径 13.6 cm ・ 高さ 3.4 cm, 8 が口径 13cm ・ 高さ 4.3 cm を測る。高台は、体・底部のやや内側に付いている。

皿(4・5)は、高台をもたず、口径 15.0~15.8 cm ・ 高さ約 2.5 cm 前後を測る。他の須恵器に比べ、灰白色で、焼きもやや軟らかい。

甕(14・15)は、くの字状に外反する口縁部をもち、肩部に掻き目を施している。14は、口径 22.8 cm で、口縁端部を上下に肥厚させている。15は、口径 21 cm で、口縁端部付近を外側に肥厚させている。

こね鉢(13)は、口径約 14.5 cm を測り、体部中央に2条の凹線と口縁部に甘い凹線をもつ。底部は欠落している。

杯(9~11)は、口径約 14 cm 前後・高さ約 3.2~3.5 cm を測り、平底からゆるく屈曲して立ち上る体部をもち、口縁端部を、やや外反させるもの(9・11)と内湾気味におわり、内側にやや肥厚させるもの(10)がある。底部外面は未調整で指おさえ痕を残し、口縁部・体部外面上半に横なでを施している。

皿(12)は、口径 22.4 cm を測り口縁端部を内側に肥厚させ、底部外面に篋削りを、口縁部内外面には横なでを施し、口縁部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文を有している。

甕(16)は、球状の体部にくの字状に外反する口縁部をもち、口縁端部を内側に肥厚させている。体部には、縦方向の刷毛目を施している。口径は、約 17.8 cm を測る。

SX 10538 から出土したものは、瓦器椀(20・21)、瓦器小皿(19)、土師小皿(17・18)等がある。瓦器椀(20・21)は、退化した断面三角形の高台を有し、内面に粗い暗文をもつ。外面は、口縁部を横なでし、暗文は施していない。見込みには、鋸歯状の暗文をもつ。20は、口径約 14 cm ・ 高さ約 5 cm, 21は、口径約 13.5 cm ・ 高さ約 5 cm を測る。

瓦器小皿(19)は、平底から屈曲して立ち上がる口縁部をもち、口縁内外面に横なでを施し、見込みには鋸歯状の暗文をもつ。口径は約 5 cm ・ 高さ約 2 cm である。

土師小皿(17・18)は、底部が未調整で、口縁部内外面に横なでを施している。17は、口径約 4.5 cm ・ 高さ約 1.8 cm, 18は口径約 5 cm ・ 高さ約 2 cm を測る。

SB 10548 からは、軒丸瓦(22・23)、土師器片等が出土した。

23は、複葉の8弁蓮華文で、周縁は丸くおさめ、外区に珠文をもつ。

22は、単弁の蓮華文で、周縁は丸くおさめ、外区に珠文をもつ。

5. 小 結

今回の調査では、長岡京期の建物跡や道路側溝、奈良時代の溝、舞塚古墳、舞塚2号墳の

周濠，弥生時代の溝，中世の井戸や土器溜り等を検出した。その結果，奈良時代の集落を長岡京期に作り替えていることが判明し，また，昨年度の右京第83次調査で検出した大溝の南側に中世の集落が存在していることも明らかになった。また，舞塚古墳の周濠を検出し，その墳形が判明し，多数の円筒埴輪や人物埴輪が出土したことは，乙訓地方の古墳時代を考える上で良い資料となるであろう。さらには，舞塚地区に弥生時代の集落があることも判明した。

現在，この調査の整理を進めており，今回報告できなかつた分は，次回，第83次調査の未報告分と合わせて報告する予定である。 (山口 博)

注1 山口 博「長岡京跡右京第83次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報 第3冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注2 高橋美久二「昭和53年度長岡京跡調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979

注3 山口 博「長岡京跡立会調査概要」(『京都府遺跡調査概報 第8冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注4 調査補助員 肥後弘幸・園山隆輔・西村久和・立川正明・浜口和宏・城田正博・轟指靖治・臼井千映子

整理員 木村美智代・山本ゆかり・小塩礼子・竹原京子・赤司 紫

事務補助員 戸波みどり・神山久子

注5 注2と同じ

注6 注3と同じ

注7 //

注8 //

注9 注1と同じ

11. 長岡京跡右京第 107 次発掘調査概要

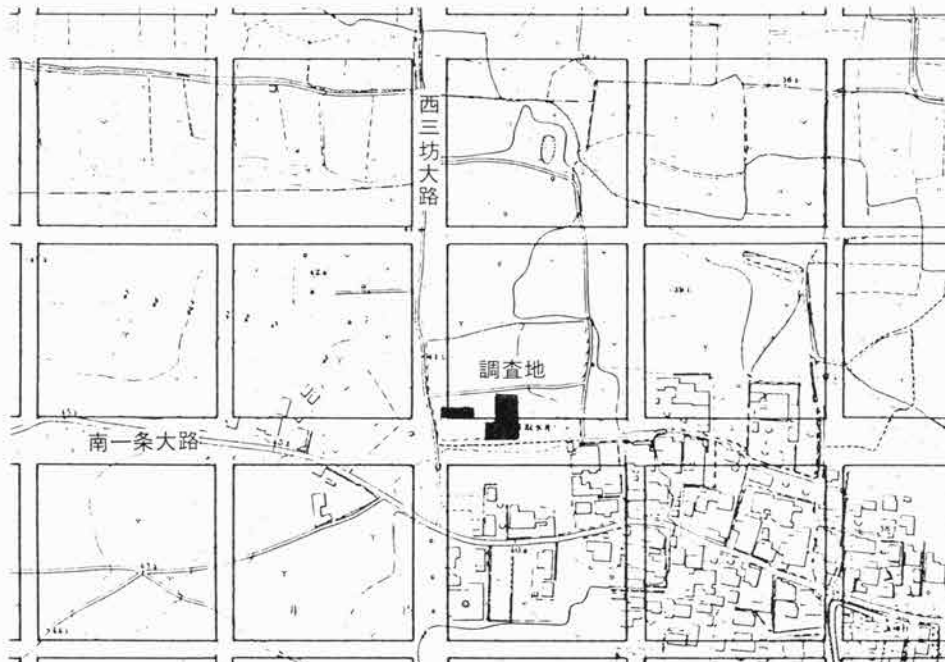
(7ANGNC 地区)

1. はじめに

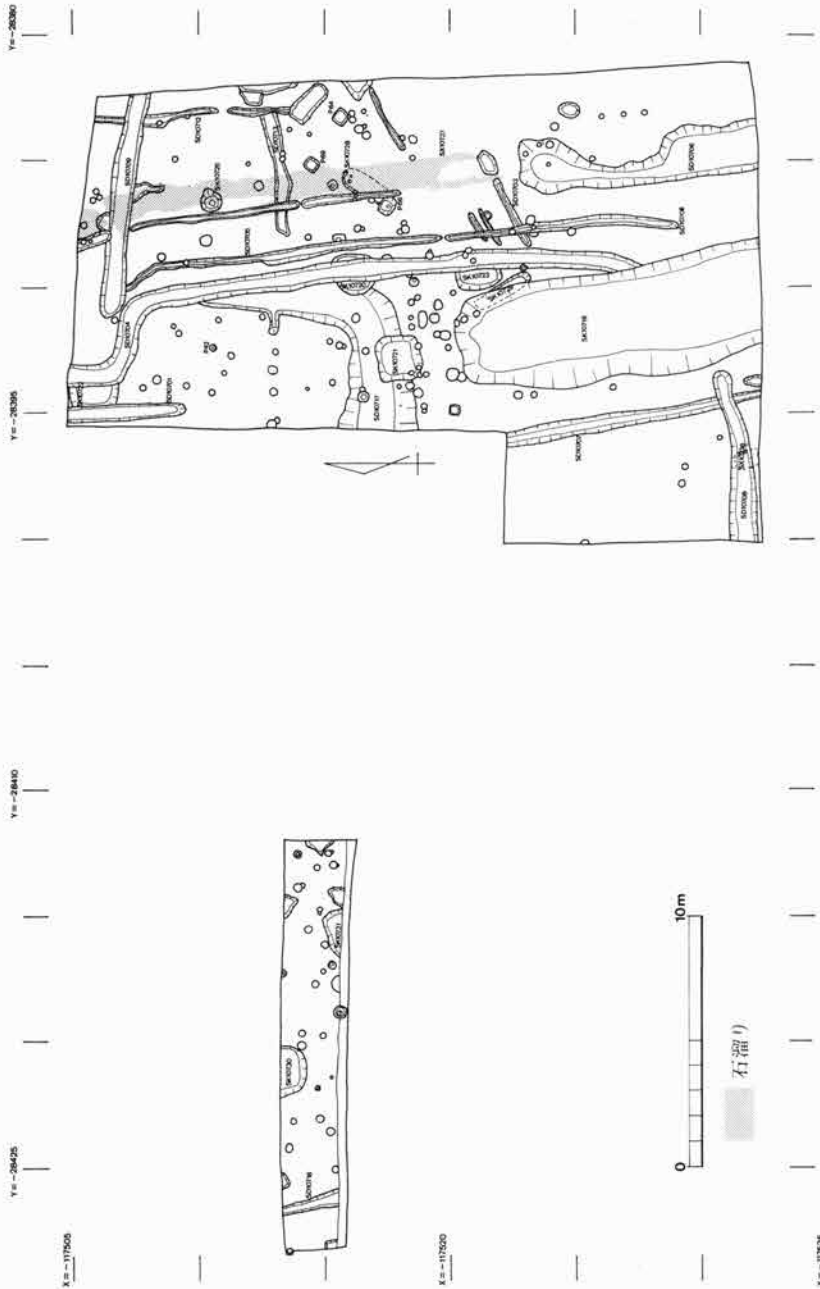
本調査は、乙訓福祉施設事務組合による授産施設「若竹苑」建設工事の予定地が長岡京跡の一画にあたるため、工事に先立って実施したものである。

調査地は、西山丘陵から派生する微高地に位置し、北方には、善峰川を望む。現地表での標高は 41m 前後で、周辺には竹林が広がる。調査地周辺には、縄文時代から中世に至る集落と考えられる井ノ内遺跡、今里遺跡等が広がり、近年の調査によって^(注1)にその様相が明らかにされつつある。また、長岡京条坊復原図（平城京型）によれば、調査地は右京南一条三坊十三町に相当し、南一条大路と西三坊大路が交差する付近に推定される。調査地周辺は、長岡京跡の中でも特に条坊の痕跡が地割等に遺存している地域であり、かねてから調査地の西の南北道は、西三坊大路の痕跡とみられ^(注2)注目されていた。

このようなことから今回の調査では、長岡京の条坊に関わる遺構の検出を主目的にしつつ



第142図 調査地位置図 (1/5,000)



第143図 調査地平面図

も、その他の時代に属する遺構・遺物の検出も期待された。

調査は、昭和57年7月20日から10月2日まで実施し、当調査研究センター主任調査員長谷川 達、調査員山下 正が担当した。調査期間中は、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会

・長岡京跡発掘調査研究所、周辺土地所有者の方々の御協力を得た。また、現地調査においては、真夏の炎天下、不順な天候の中で学生諸氏の参加協力があった。^(注3)記して感謝の意を表したい。

2. 調査経過

調査地は、長岡京市井ノ内西ノ口17-13、及び17-4に所在し、調査前までは竹藪と畑地が広がる地であった。調査は、建物建築予定地（第1トレンチ）と道路部分（第2トレンチ）とに二つのトレンチを設定し行った。はじめに第1トレンチから掘削・精査を開始し、そこが一段落した時点で第2トレンチの方に入った。

第1トレンチでは、重機によって表土・客土を除去した後、暗灰褐色土が現れ、そこから瓦器を中心に遺物が出土したため、人力によって遺構の検出を行った。その結果、中世の土器を中心に多数の遺物を採集し、黄褐色粘質土（所々、礫を含む所あり）の面で、ピット群・溝・土坑・石溜り・土坑墓等の遺構を検出した。

第2トレンチでは、調査前にすでに土ならしが行われ、全面にバラスが敷かれてあった。そのためバラス等の表土を除去し、暗灰褐色土まで下げて遺構精査を行った。その結果、暗褐色礫層でピット・土坑・溝を検出した。

以上のように調査地の基本的な層序を順次記せば、①表土（腐植土）、②客土、③暗灰褐色土、④黄褐色粘質土（あるいは礫層）となり、④層が地山となる。検出した遺構は、古墳時代後期の土坑墓・土坑、中世の集落の一面を構成すると思われる溝、柱穴、土坑等がある。また、遺構には伴わないが、包含層から多数の遺物が出土している。

3. 検出遺構

今回の調査では、古墳時代と中世の遺構を主に確認した。主要な遺構は、第1トレンチに集中しているため、以下第1トレンチで検出した遺構の概要を記す。

土坑墓 (SK 10728)

トレンチの中央部で検出した。後世の溝やピット (P-66) 等によって削平されており、わずかに墓坑の掘形の北西部分が残るのみである。北東-南西方向に主軸をもつ。坑内からは須恵器2点、銀環2点が出土している。須恵器は、ともに杯蓋であり、墓坑の北西隅でふせた状態で検出された。銀環も須恵器に近接して出土している。

土坑墓 (SK 10729)

トレンチ内で検出したが、近現代の土坑 (SK 10719) によって北半分は削平されており、

規模・性格に関して不明な点が多い。北西—南東方向に主軸をもつと考えられる。坑内からは、須恵器が3点出土した。

土壇墓 (SX 10738)

トレンチ南西部で検出したが、SD 10708によって削平されており、ただ西側に掘形をわずかに残すのみである。南北方向に主軸をもつと思われるが、他の土壇と同じく、規模・性格に関して不明な点が多い。坑内からは刀子が出土した。

土壇 (SK 10725)

トレンチ西側で検出した遺構である。南北0.8m×東西1.0mの規模をもち、円形を呈し東側に突出する部分をもつ。坑内からは須恵器杯蓋、土師器片が出土した。

溝 (SD 10706)

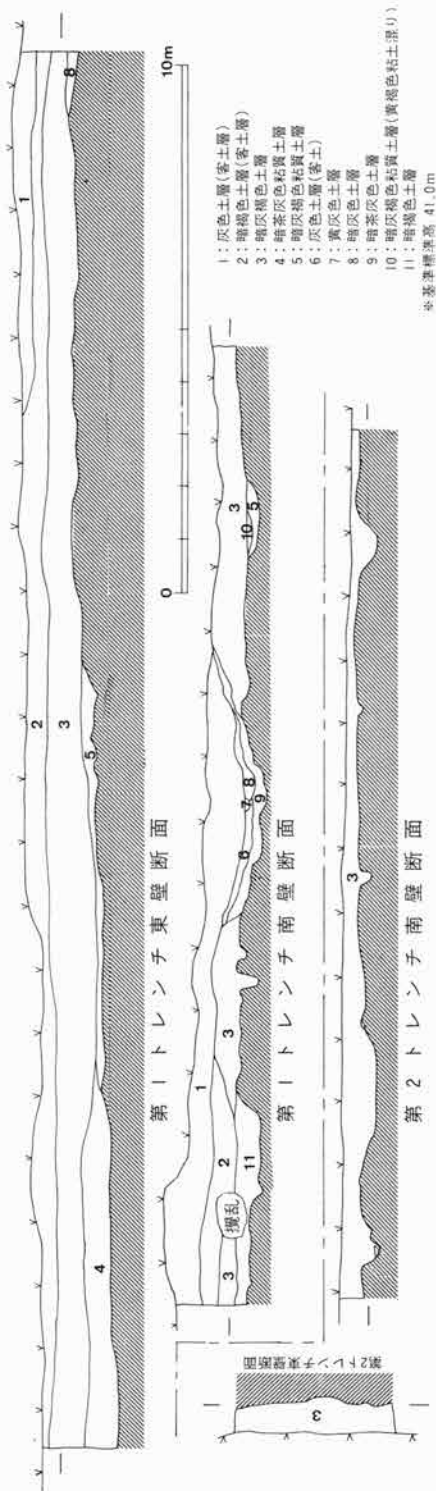
トレンチで検出した南北方向に走る溝である。検出長は10mであるが、なお南側に向ってのびる様子である。溝内からは、須恵器杯身、土師器甕などが出土した。

溝 (SD 10704)

南北方向に走る溝で、トレンチの北側で蛇行しながらさらに北へ向う様子である。南では、徐々に西へカーブを描きながら土壇(SK 10719)とぶつかる。幅0.3~0.5m・深さ0.2~0.3mほどの規模をもち、溝内からは、瓦器片、土師器片が出土した。中世に属する遺構と考えられる。

溝 (SD 10717)

幅2.0~2.7m・深さ0.3~0.5mの規模をもつ溝で、トレンチの西側でL字形に検出し



第144図 調査地土層図

た。先述した SD 10704 によって切られている。溝内からは、瓦器・土師器片が出土した。なお、北壁の断面観察や断ち割りによって、この溝はトレンチの北側で終わることが判明している。

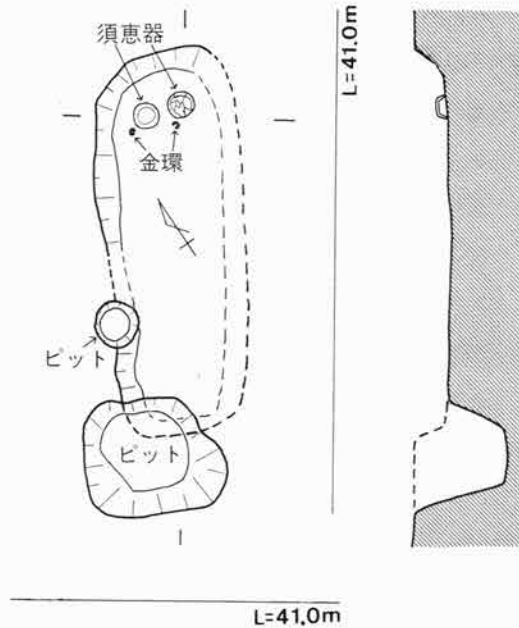
土坑 (SK 10721)

南北 1.5m×東西 1.5m、深さ 0.3m の規模をもち、方形を呈する土坑である。SD 10717 を切って形成されている。坑内からは、瓦器、土師器、青磁片などが出土した。

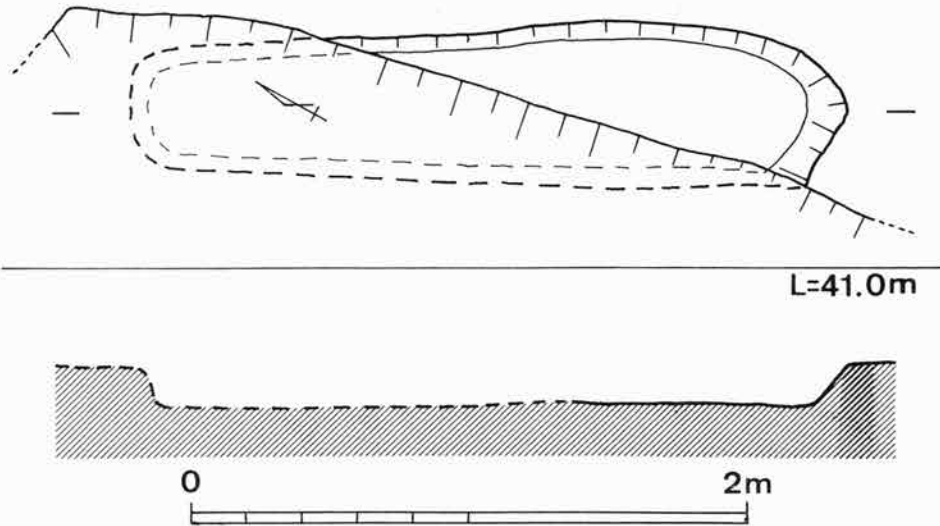
ピット群

柱穴と思われるピットを多数検出したが、建物としてまとまるものはない。ピット内からは、瓦器、土師器、須恵器、陶磁器片が出土している。柱穴の底に平らな石を配して建物のバランス

を取ったものもある。P-64・P-66・P-69 は径 0.3~0.4m で隅丸方形を呈する。他のピットとは様相を異にするが、L字形にこれらのピットを検出したものの、建物となるかどうか



第145図 土坑墓 SK 10728 実測図

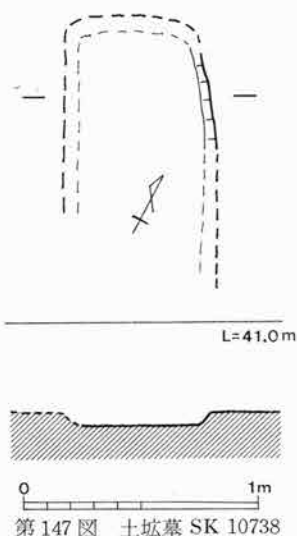


第146図 土坑墓 SK 10729 実測図

かの確証は得られなかった。ピット内からは土師器の細片が出土するのみで時期は不詳である。

石溜り (SX 10739)

トレンチ中央部から北よりで検出した。南北方向に走り、検出長は 16.5m、平均幅は 1~1.5m、厚さ 0.2m を測り、さらにトレンチの北側へ伸びる模様である。石は拳大から人頭大までのものが出土した。この遺溝は、地山を切り込んでおらず、SX 10727 を埋める暗灰褐色土で検出した。多数の石とともに、時代幅をもった遺物が混在していた。この遺構の年代・性格に関しては明らかでないが、後世の開発等によって、上部が削平された土塁の基底部だけが残ったものの可能性がある。



第 147 図 土塚墓 SK 10738 実測図

4. 出土遺物

今回の調査では、須恵器・土師器・瓦器・施釉陶器・磁器・布目瓦・土馬など多くの遺物が出土した。しかし、その多くが小片で、確実に遺構に伴う遺物である古墳時代及び中世のものを除いては、ほとんど包含層から採取したものである。以下、遺構に伴う遺物を中心に時代別に記述を進めたい。

土塚墓 SK 10729 出土遺物 (第148図 1~3)

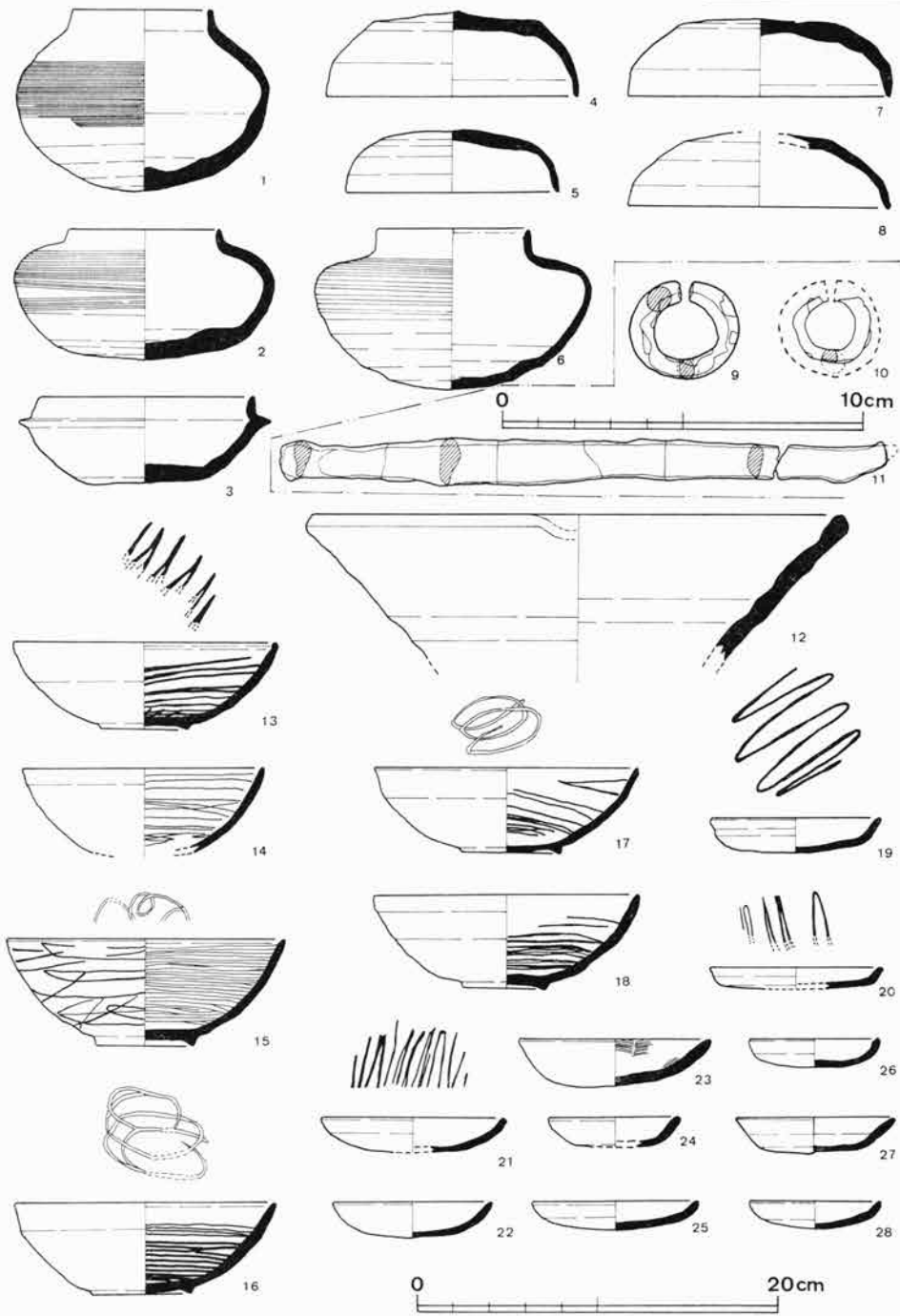
須恵器が 3 点出土した。(1)(2)は、短頸壺で、ともに体部に回転搔き目調整、底部に回転篋削りを施す。(3)は杯身で、やや外反気味にまっすぐ伸びるたちあがりをもち、底部には回転篋削りを施すが全体に歪みが強い。出土遺物の形態や手法から陶邑編年^(注4)第Ⅱ期前半に属し、6世紀後半に比定される。

土塚墓 SK 10728 出土遺物 (第148図 4・9・10)

須恵器 2 点と銀環 2 個が出土した。(4)は杯蓋で天井部には回転篋切りの未調整が見られる。(9)(10)は、銀環でともに箔が剥離して緑青がみられ、保存状態は良好でない。須恵器杯蓋は、陶邑編年第Ⅲ期前半に属し、7世紀前半に比定される。

土塚墓 SX 10738 出土遺物 (第148図11)

刀子が 1 点出土した。刃の先端部を欠くがほぼ完形で、現在長 16.6 cm、刃部は 12 cm を測る。



第148図 出土遺物実測図(1)

SK 10729 : 1~3, SK 10728 : 4・9・10, SK 10721 : 13, SK 10717 : 14・19・20,
 SD 10704 : 23・24・26, Pit 10 : 25・28, Pit 42 : 12・15・21・22, SX 10738 : 11,
 包含層 : 6~8・16~18・27 (須恵器 : 1~8・12, 土師器 : 22~28, 瓦器 : 13~21,
 銀環 : 9・10, 刀子 : 11)

土坑 SK 10721 出土遺物 (第148図5)

須恵器杯蓋(5)、土師器片が出土した。(5)は小形の杯蓋で、天井部には回転篋切りの未調整が見られる。

溝 SD 10706 出土遺物 (第149図40~42)

(40)(41)は、土師器の甕であるが、摩滅・剝離が著しく、調整は不明である。ただ(41)は、外面に刷毛目を施す。(42)は、須恵器の杯身で、底部は回転篋削り、口縁部及び内面は回転横なでで仕上げている。外側に折り曲げる口縁端部が特徴的である。須恵器杯身は、陶邑編年第三期前半に属すると思われる。

土坑 SK 10721 出土遺物 (第148図13)

坑内からは瓦器片・土師器片等が出土した。(13)は瓦器碗で、断面三角形の高台を貼り付け、口縁端部内面に沈線をめぐらすもので、内面には太めで粗い暗文を、また見込み部分には鋸歯状の暗文をそれぞれ施す。(13)は、橋本久和氏の編年^(注5)ではⅢ期の2に属すると思われる。

溝 SD 10717 出土遺物 (第148図14・19・20)

溝からは瓦器・土師器・須恵器等が出土している。(14)は、瓦器碗で、口径13.0cmと比較的小さく、内面の暗文は細かく粗く、また口縁端部内面には沈線を施さない。(19)は、瓦器皿で丸味をもった底部と外反気味の口縁部をもつ。内面には鋸歯状の暗文を施す。(20)は瓦器皿で、平底に外反気味の口縁部をもつ。内面には鋸歯状の暗文を施す。

溝 SD 10704 出土遺物 (第148図23・24・26)

溝からは、土師器・瓦器・須恵器・陶磁器などが出土している。(23)(24)(26)はすべて土師器皿である。(23)は、口径10.4cm・器高2.7cmを測り、丸味を持った底部とわずかに肥厚する口縁部を持つ。口縁部は内外面ともに横なでを施すが、内面にはなでの後、刷毛目を施している。(24)は、口径7.0cm・器高1.6cmを測り、口縁部には内外面ともに横なでを施す。(26)は、口径7.0cm・器高1.55cmを測り、口縁部は内外面ともに横なでを施す。いずれも粘土板成形である。

P-10 出土遺物 (第148図25・28)

土師器・瓦器が出土した。(25)は、土師器皿で、口径9.05cm・器高1.6cmを測る。口縁部は、内外面ともに横なでを施す。(28)も土師器皿で、口径7.2cm・器高1.45cmを測る。調整は、(25)と同じである。ともに粘土板成形である。

P-42 出土遺物 (第148図12・15・21・22)

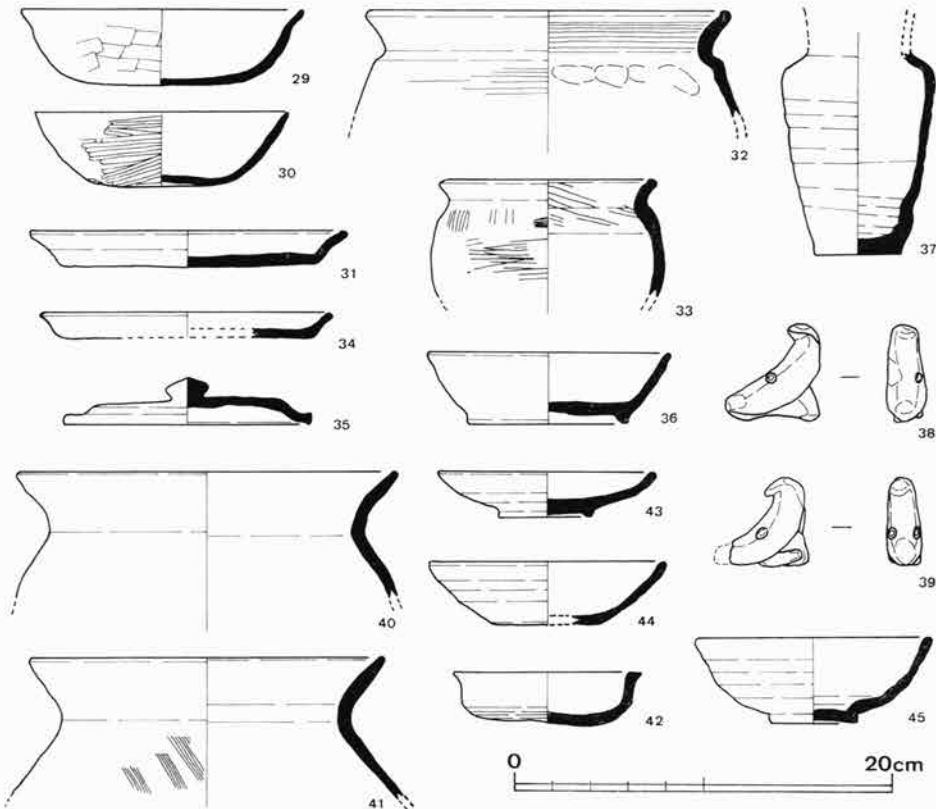
瓦器・須恵器・土師器が出土した。(12)は、須恵質の鉢である。口径は29.0cmを測り、

口縁端部は丸くおさめ、片口がつく。(15)は、瓦器碗である。口径 15.0 cm・器高 5.9 cm と比較的大きく、高台も断面三角形でしっかりしている。内面は、口縁部に沈線を施し、ていねいな暗文が全体に見られ、見込み部分には螺旋状暗文を施す。(21)は瓦器皿で、丸味をおびた底部と外反気味の口縁端部をもつ。内面には鋸歯状暗文が見られる。(22)は土師器皿で、口径 8.6 cm・器高 1.9 cm を測る。丸味をもつ底部をもち、口縁部は、内外面ともになでで調整している。(15)は、橋本編年ではⅡ期の 2 に属すると思われる。

包含層出土遺物 (第148図 6・8・16~18・27, 第149図 29~39・43~45)

地山の直上にある暗灰褐色土層を中心に多数の遺物を採取した。ここでは包含層として一括して扱い、図化し得たものの説明を時代ごとに加えてゆく。

(6)~(8)は古墳時代の遺物である。3点とも須恵器で、(6)は体部に回転掻き目調整、底部に回転篋削りを施す短頸壺である。(7)(8)は杯蓋であり、いずれも天井部と体



第149図 出土遺物実測図 (2)

SD 10706 : 40~42, 包含層 : 29~39・43~45

(土師器 : 29~33・40・41, 須恵器 : 34~37・42~45, 土馬 : 38・39)

部とを画する稜をもたず、天井部は回転篋削りで調整している。なお、(7)の天井部には「×」の篋記号をもつ。

(29)～(39)は奈良時代後半より平安時代初期に属すると思われる遺物である。(29)～(33)は土師器である。(29)は、平らな底部と外反しながら口縁端部を肥厚させる形態をもつ。内面はなで、外面は底部から口縁端部まで篋削りを施す。(30)は、丸味をおびた底部に直線的にたちあがる口縁部をもつ。外面は、剝落した所が多く観察が不充分だが、なでを施した後、篋磨きをしている。(31)は、広く平らな底部と斜め上に外反しながら開く口縁部からなる。(32)は、口縁部の内外面に刷毛目を施し、外面にはススの付着が認められる。(33)は、口径 10.4 cm と比較的小さく、内外面を刷毛目で調整している。(34)～(37)は、須恵器である。(34)は、広く平らな底部と外反気味の口縁をもつ。(35)は、平らな天井部とS字状に屈曲する縁部をもち、頂部には断面菱形の宝珠様つまみが付されている。(36)は、内湾気味に斜めに伸びる口縁部をもち、高台は、底端部にほぼ直立する形に付されている。(37)は、いわゆる壺Gである^(注6)。口頸部はないが、縦長の胴部をもち、底部にはロクロ水挽き成形時の糸切りが明瞭に残る。(38)(39)は土師質の土馬である。2点とも頭部には突き刺すことで円形の目を表現している。

(43)～(45)は平安時代の須恵器である。(43)は削り出し高台をもち、(44)(45)はともに糸切り痕が明瞭に残る。亀岡市の東南部に位置する「篠古窯跡群」で生産されたものである^(注7)。

(16)(17)(18)は、瓦器碗である。いずれも断面三角形の高台を貼付け、内面のみ暗文を施す。(27)は、土師器皿で口径 8.7 cm を測る。丸みをおびた底に外反気味の口縁部をもち、口縁部内外面をなでで仕上げている。

5. ま と め

今回の調査では、古墳時代後期の土塚墓、中世の柱穴・溝・土塚等の遺構を検出することができた。以下、古墳時代の遺構、中世の遺構、長岡京の条坊に関して、今回の調査の成果をまとめてみたい。

土塚墓は、合計3基検出したが、後世の開発・削平を受けて、形状・性格・時期に関して明確でないことが多い。ただ、ここで出土遺物から年代を求めるならば、6世紀後半から7世紀初頭に比定される^(注8)。

調査地周辺では近年の調査によって古墳時代後半の住居跡が検出され、この井ノ内地区には広範囲にわたって古墳時代の集落が広がっていることが判明している。また、この地区の

周辺は、芝古墳群・セツ塚古墳群・井ノ内車塚古墳・稲荷塚古墳・小西古墳等の後期古墳の分布が、比較的多い所でもある。このように、今回の調査で検出した土坑墓は、周辺に存在する古墳時代後期の集落と古墳との時間的な対応関係を探る上で一つの資料を提供すると言えよう。

中世の遺構は、中世集落の一面を検出したことになる。しかし、ピット群は、建物の柱穴としてはまとまりを欠き、また多くの溝・土坑も集落の一面でどのような位置や性格をもっていたのか、判然としない。ただ、第1トレンチの中央を南北方向に走るSD 10704に平行してSD 10706等の溝が走り、さらにSD 10708をSD 10704の延長として扱うならば、あたかもSD 10704の西に散らばるピット群を囲むかのように数本の溝が存在している。また、時期は不詳であるがSX 10737もSD 10704に平行する。つまり集落あるいは集落の一面を区画する施設が、この集落には存在したことがわかる。SD 10717も、SD 10704の切り合い関係から、より古いものであるが、この溝も同じような区画を意図としたものと思われる。

これらの遺構の年代を出土した瓦器碗から求めるならば、橋本氏の編年のⅡ-2からⅣ-1期までと幅広いが、多くはⅢ期にあることから、13世紀を中心とした時代と考えられる。

井ノ内地区には、「井内館」の伝承があり、近年の調査でも、調査地周辺では中世居館跡の外郭施設と推定される南北溝(SD 2731)や、土坑など、中世期の遺構の存在が確認されている。今回の調査成果は、新たに中世の資料を加え、乙訓の中世を考える上で興味深い。

当初期待された長岡京の条坊に関わる遺構は確認することができなかった。ただ、包含層から長岡京期に属する遺物も多数出土していることは、間接的にはあるが、調査地付近で長岡京期に開発があったことを傍証するものかもしれない。

(山下 正)

- 注1 高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)1979
奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会)1980
- 注2 小林 清「乙訓郡の条里と長岡京の条坊」(『長岡京の新研究』第4号)1969
吉本昌弘・東井克司「長岡京条坊と乙訓郡条里の再検討」(『長岡京』第3号 長岡京跡発掘調査団)1977
- 注3 調査補助員として参加していただいたのは、次の方々である。(敬称略)
坂本 守・立川正明・田村泰三・浜口和宏・高島利洋・水野春樹・中村美也・赤司 紫・竹下和子・小塩礼子・渡辺美智代
また、遺物・図面の整理にあたっては以下の方々の手を患わせた。(敬称略)
小塩礼子・山本弥生・中村美也・臼井千映子・竹原京子・神山久子・戸波みどり
- 注4 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966

- 注5 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980
- 注6 土器の器種の呼称は、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1976 の「平城宮土器器種表」に従う。
- 注7 当調査研究センター調査員石井清司の教示による。
- 注8 田辺昭三, 前掲書
- 注9 奥村清一郎ほか, 前掲書
「西山高校グラウンド新設に伴う発掘調査(長岡京跡右京第72次調査)」現地説明会資料 長岡京市教育委員会 1981
- 注10 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1972
『長岡京市遺跡地図』長岡京市教育委員会 1982
- 注11 橋本久和, 前掲書
- 注12 「野田泰忠軍忠状」(別本前田家文書)には, 1469(文明元)年4月, 東軍山名是豊勢が勝竜寺城を攻めたのに呼応して, 野田泰忠ら西岡中脈の国人は, 西軍の在所を攻撃し, 上里・石見, 井内館に放火し, 向日河原で合戦したと伝える。(『京都府の地名』平凡社 1981)
- 注13 奥村清一郎ほか, 前掲書

12. 長岡京跡右京第110次発掘調査概要

(7ANIST-IV地区)

1. はじめに

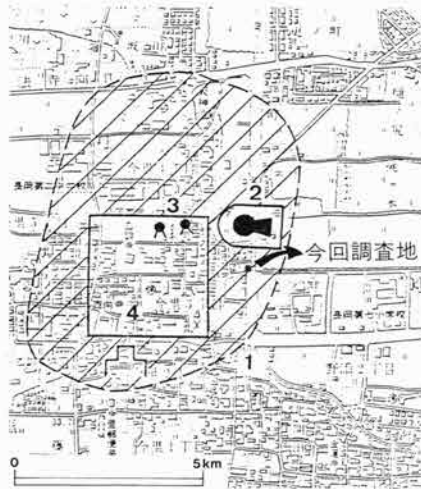
本報告は、長岡京市今里三丁目において、昭和57年8月4日から昭和57年9月20日まで実施した長岡京跡右京第110次調査に関するものである。

調査地付近は、京都府都市計画街路（外環状線）の拡幅工事の一環として、市道10号に並行して工事が進行している場所である。昭和52年度からの外環状線街路改良の工事計画に関する経緯は、別掲書に詳細に述べられている。今回も府道極原高槻線と長法寺向日線との間(注1)の市道10号の一部拡幅工事が具体化され、京都府乙訓土木工管所から当調査研究センターに発掘調査依頼があった。協議の結果、7月初旬にこの要請を承諾し、8月4日より現地調査を開始した。ほぼ1か月半後の9月20日にすべての現地調査を終了した。

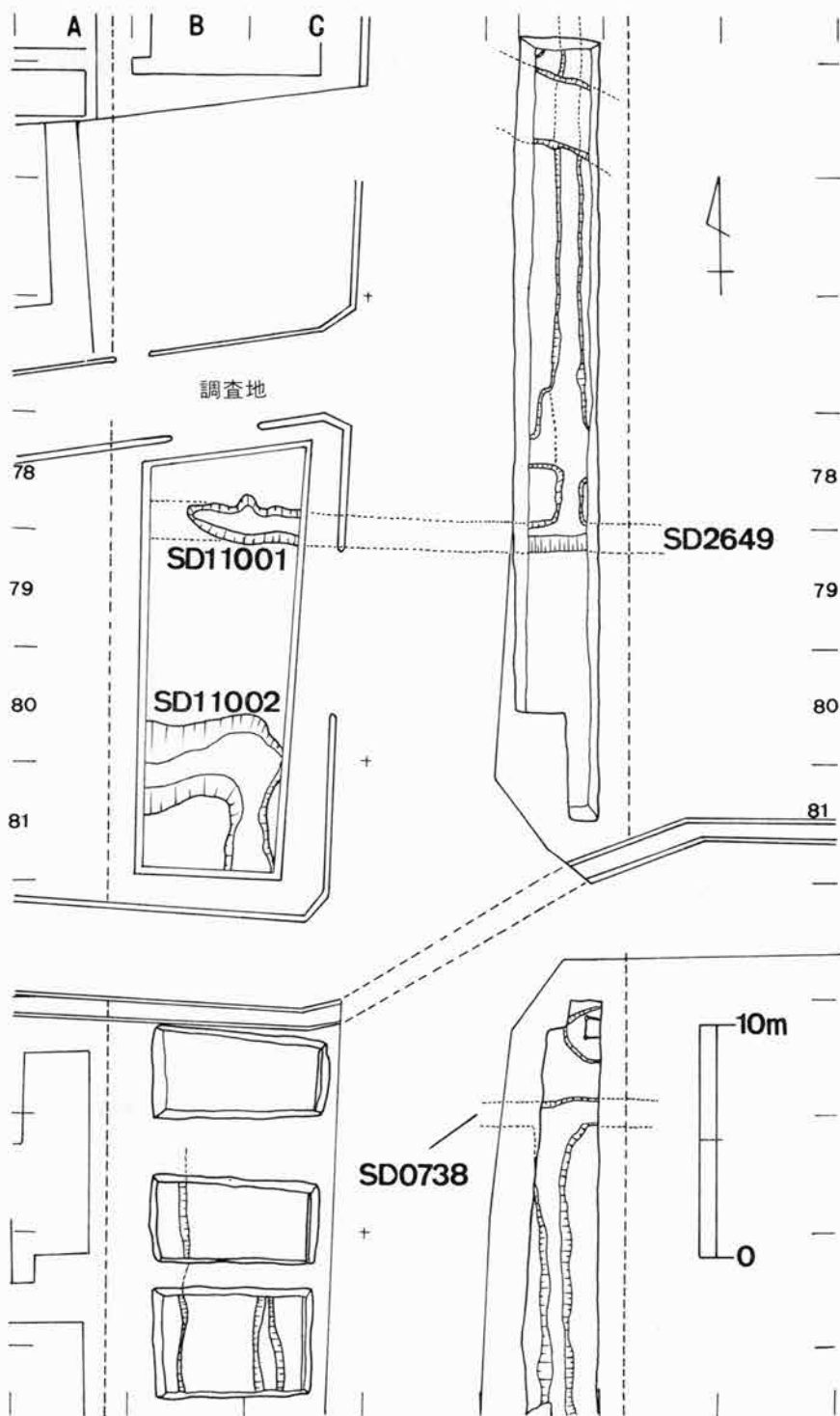
調査期間中はもとより、調査終了後の整理作業全般を通じ、大変多くの方々から有形無形の御協力(注2)を得た。心より感謝の意を表したい。

2. 位置と環境

調査地は、その東方を西北から南東にかけ、長岡京跡を縦断して流れる小畑川の氾濫原が占め、西から西山山麓丘陵地が傾斜しつつ、低位段丘から沖積平坦地に遷り変わる微高地変換点に当たっている。この今里(IST)地区は、弥生時代から歴史時代にかけての数多くの遺跡・旧跡が存在する。なかでも2丁目から5丁目にわたる今里遺跡は、弥生時代および古墳時代の竪穴式住居跡群等が存在する集落跡として著名である(注3)（第150図1）。また、今回の調査地から市道沿いに約80m北には、古墳時代中期の前方後円墳である今里車塚古墳などもある(注4)（第150図2）。奈良から平安時代ごろに存在した乙訓寺跡も調査地から南西の段丘上に位置している(注5)（第150図3・4）。



第150図 調査地位置図
(原図は『長岡京市遺跡地図』で、
番号のみ変更)



第151図 発掘区周辺位置図

弥生時代以前の縄文・先土器時代では、遺構らしきものの存在は報告されていない。先述の今里遺跡からナイフ形石器や縄文土器等の遺物が出土している程度である。

3. 調査方法と発掘区

調査地は、長岡京条坊復原図（平城京型）によれば、右京三条二坊で三条条間小路（東西）と西二坊大路（南北）が交差する地点に当る。このため、この道路遺構の検出を第1の目的として発掘調査に入った。

調査対象範囲の面積は約155 m²である。そのなかに南北約18 m・東西約7 mの発掘区を設定し、ほぼ全面の約130 m²を掘削した。この付近の地層は盛土がかなり厚く、中・近世に攪乱された水田耕作土も約30 cm程度の厚さで存在していることが、これまでの調査で判明している。そこで、当地も同様であるという見通しで重機により盛土・水田耕作土を除去した後、人力で遺構・遺物を探しながら水田床土を排除していった。

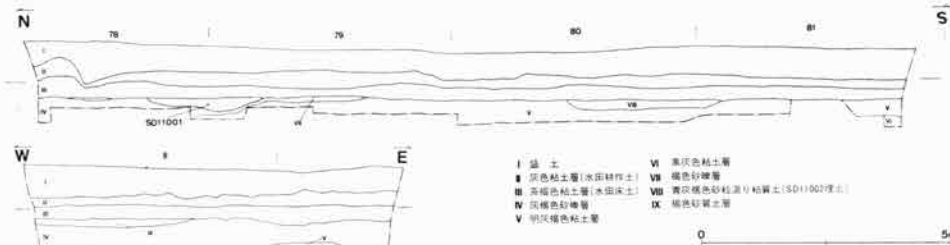
床土排除後、全体を精査し、遺構・遺物の検出に努め、併せて土層断面の観察を行った。この時点で、灰色砂礫の詰った南側の流路、粘土混りの砂層面に露見した長岡京時代の遺物の集中範囲をほぼ確認することができた。

発掘区は、今回の地点と道路を挟んだ向い側で実施された昭和54年度調査の際の地区割を踏襲した。^(注6) 道路沿いのNo.7・No.8のポイントを基にして発掘区全体を5m方眼に区分し、遺物の正確な出土位置が捉えられるようにした（第151図）。

4. 層位

発掘区内の掘削深度は、現地表下約1.2 mである。今回の主眼となる長岡京時代の遺構は、水田耕作土から約0.7 mの地点で検出した。

層位は、部分的に異質の土が挟まっている箇所も見られるが、発掘区北東隅を例にとり、基本的には次のように説明することができる（第152図）。



第152図 発掘区東壁・北壁土層断面図（標示レベルは27.0m）

I 盛土, II 灰色粘土 (水田耕作土), III 茶褐色粘土 (水田床土), IV 灰褐色砂礫となる。一方, 発掘区中央部から南ではIV層の堆積がみられず, 代って, V層とした暗灰褐色粘土が認められる。IV層は, 南にいくほど次第に薄くなっている。また, III層とIV層の間には鉄分の沈澱が見られる。

IV層を切り込んで, 長岡京時代の遺構がみつかっており, II・III層からは古墳時代および中世の流れてきた遺物が散見される状況である。さらに, V層からは弥生時代の遺物 (石包丁) が出土した。

5. 遺 構

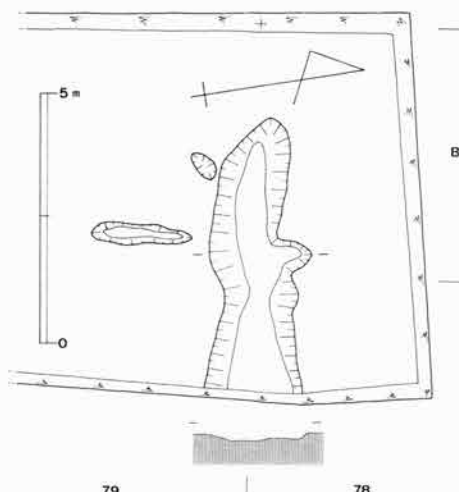
遺構は, 長岡京時代に属するものと, 時期不明のものがある。前者は, 発掘区北側の東西方向に走る溝 (SD 11001) で, 後者は, 発掘区南側で大きく湾曲する流路 (SD 11002) である。

SD11001 (第153図)は, 長岡京条坊復原図に示された東西道路 (三条条間小路) の北側側溝に当る。昭和54年度の発掘調査で幅約1.8m・深さ約10cmの東西溝 (SD 2649) が検出されていたが, 今回の溝はこれに続くものである (第151図)。幅約1.8m・深さ約0.3mで, 検出し得た全長は約5.5mである。埋土は, 灰色砂礫混りの暗茶褐色粘土である。東の方ほど深く明確に残存しており, 西にいくにつれ後世の削平を受けたのか浅くなり, 次第に消滅する。また, 西端から約2.3mの北側掘形の部分にわずかながら北に突出した部分が検出された。西二坊大路の西側側溝の名残りであるのかもしれないが, 現時点ではその性格については不明であるとしておきたい。溝全体から, 長岡京時代の土師器・須恵器・瓦等が出土している。

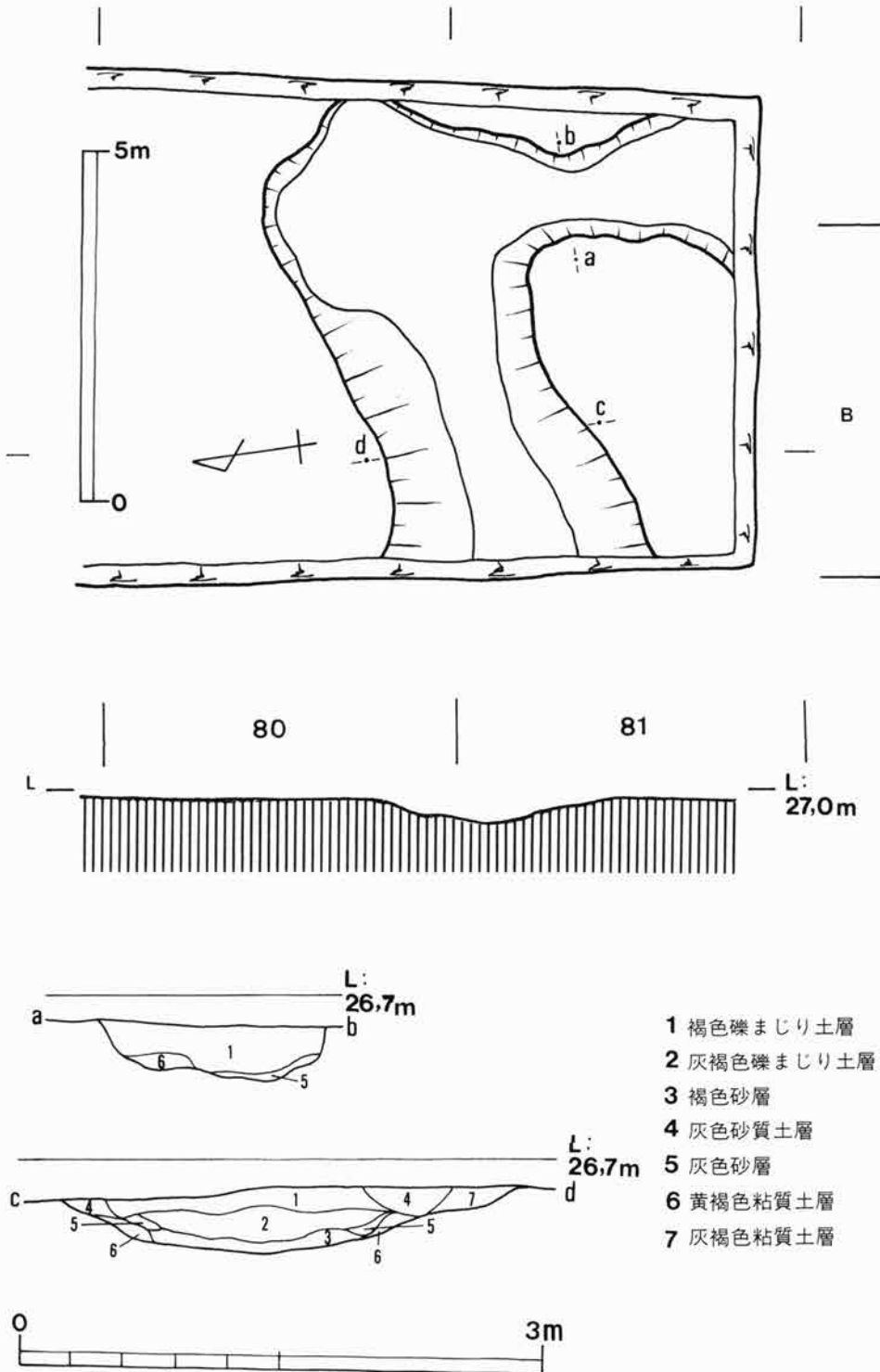
SD11002 (第154図)は, 幅約2.7m・深さ約0.3mで, 西から南に大きく蛇行しているが, 全長約10mを測る。V層を切り込み, 埋土は主に黄色・青白色のチャート粒を含む灰褐色砂礫である。遺物は出土せず, その時期は不明である。自然流路であるとしておく。

6. 遺 物

今回の出土遺物は, SD 11001 中からのもの,



第153図 溝SD 11001実測図
(断面の標高ライン値は27.0m)



- 1 褐色礫まじり土層
- 2 灰褐色礫まじり土層
- 3 褐色砂層
- 4 灰色砂質土層
- 5 灰色砂層
- 6 黄褐色粘質土層
- 7 灰褐色粘質土層

第154図 流路 SD11002 実測図

つまり長岡京時代のものが中心である。しかし、弥生時代・古墳時代さらに中世の遺物もわずかながら包含層から出土した。これら長岡京時代以外の遺物から順に説明していきたい。

(1) 弥生時代の遺物

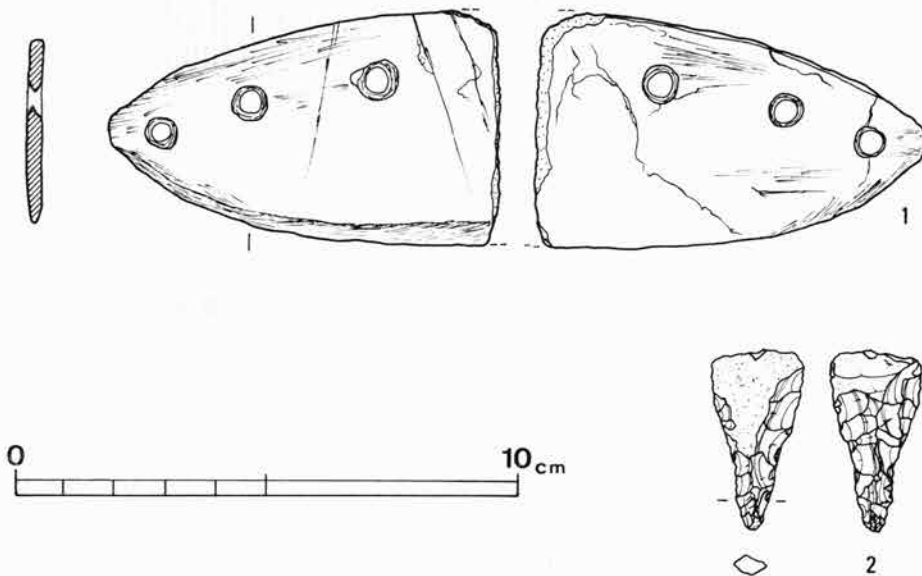
弥生時代の遺物は、石包丁・石錐（第155図1・2）のみで土器は出土していない。発掘区中央部の壁に沿って設けた断ち割り溝中から出土した。石包丁は半分に分れており、一方しか発見されなかった。厚さ0.4cm・幅4.5cm・残存部の長さ7.7cmで、粒子の細かい粘板岩製である。製作の際によく研磨されており、刃部形態は畿内に一般的な直刃タイプではなく、湾曲刃である。使用による擦痕が明瞭に観察できる。また、紐通しの穴が三つ穿たれ、穿孔の多さという点から特筆できるものである。

この石包丁とともに、サヌカイト製の石錐が1点出土している。

(2) 古墳時代の遺物

Ⅲ層中に包含されていた須恵器杯身片（第156図1・2）数点と、埴輪片？1点のみである。いずれも小片ばかりで、杯身2点以外は図化し得なかった。杯身は、2点とも内外面なでのほか、底辺近くを笥削りにより仕上げている。口縁端部の形状は、1は丸くおさめ、2は内側にやや段を有するものである。胎土は密で、長石粒をわずかに含んでいる。焼成も良好である。

中世の遺物では瓦器片・陶磁器片等が出土しているが、量的にごくわずかである。

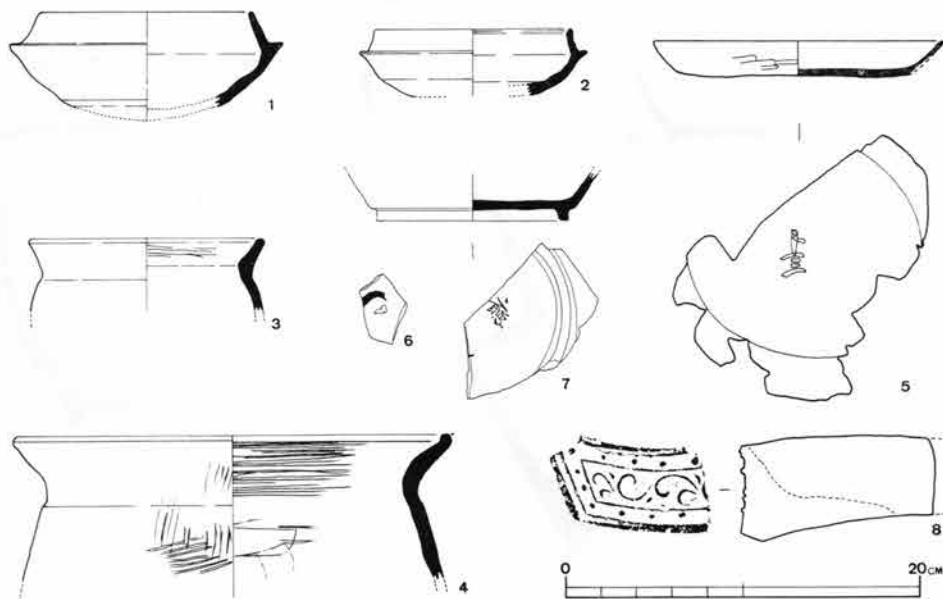


第155図 石器実測図

(3)長岡京時代の遺物

長岡京時代の遺物は、その大部分が溝 SD 11001 に集中して出土した。したがって、ここでは溝中の遺物に限り説明を加えたい。遺物を列記すると、土師器では甕・壺・杯A・皿A・椀・高杯・土馬がある。須恵器では甕・壺・杯B・杯・蓋がある。土師器類について、まず甕(第156図3)は、表面の剝離が著しく、わずかに刷毛目が口縁部の内面に認められるほかは、調整不明である。口縁はゆるやかなちあがりで端部は丸くおさめている。甕(第156図4)は、焼成はやや甘い、胎土は密で内外面の調整もよく観察できる。胴部上半の外面を刷毛で、内面を押さえの後、なでで仕上げている。口縁部内面は、刷毛目にて調整されている。口縁端部は、内にやや折り曲がりぎみに段を有している。椀A(第157図1~3)は、すべて外面が底部・口縁部とも削りで、いわゆるC手法である。口縁端部はすと立ちあがり丸くおさめる。胎土は比較的緻密で、焼成はやや軟と言える。杯Aとして図化し得たものは2点ある(第157図4・5)。4は磨滅が著しく、不明瞭ながら外面が削り、内面がなでであることがわかる。5は、黒色土器である。口縁部外面をなで、内面を磨きにて仕上げ、底部は内外面とも削りの調整痕が認められる。

皿A(第157図6~8)は、口縁部から底部の外面を削るC手法のものである。特に、墨書土器として後で述べるもの(第156図5)は、口縁部から底部の立ちあがり付近までを、極めて顕著な削りで仕上げている。胎土はすべて密で、焼成も良好である。

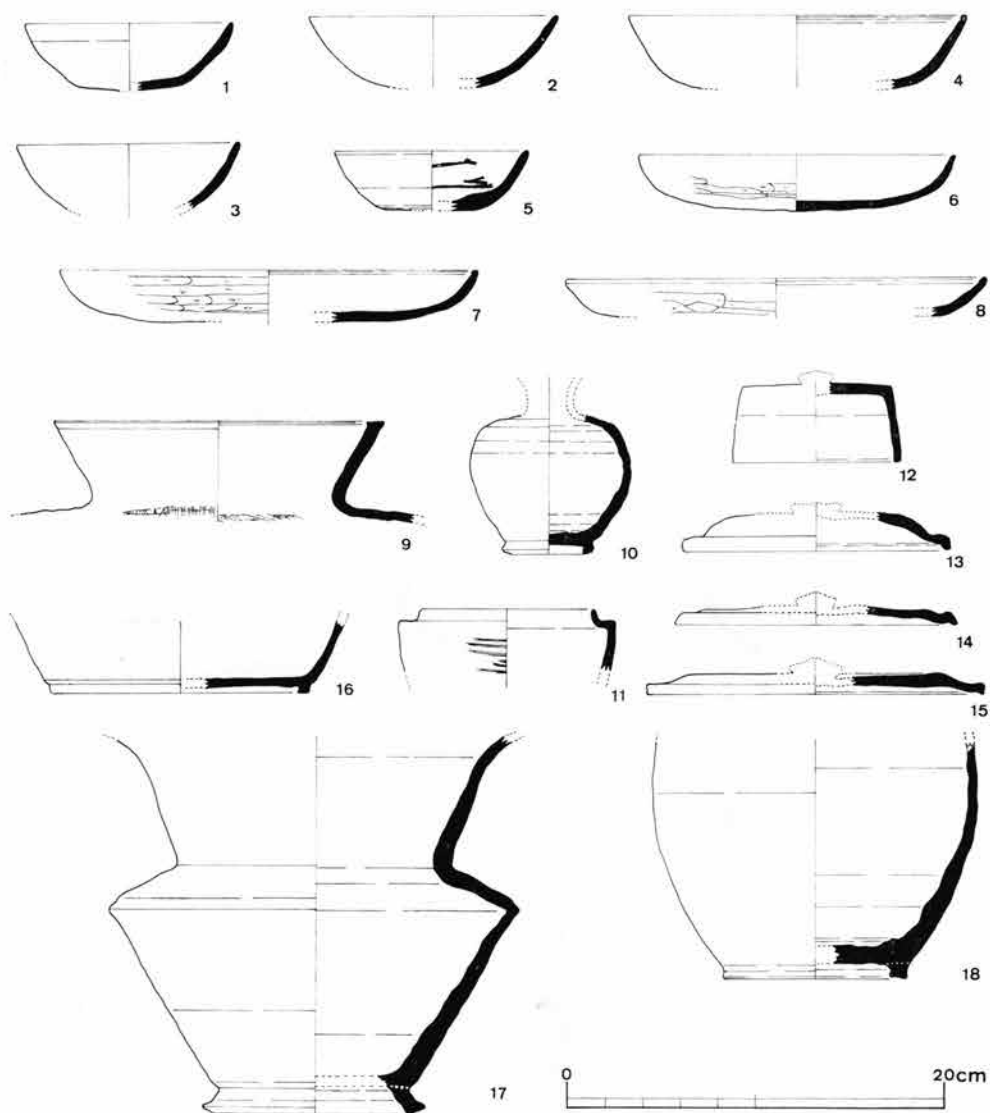


第156図 包含層中およびSD 11001内出土遺物実測図 須恵器1・2・7

壺(壺B)は、口径9cmの小型のもので、口縁部は内側に湾曲した後、ほぼ直角に立ちあがる(第157図11)。口縁部内外面および、胴部上半部の内外面ともなでにて仕上げる。ただ、胴部外面は刷毛目をなで消し、磨きを施した形跡が観察できる。

以上の土師器全体にいえることであるが、胎土中に雲母片らしき鉱物が含まれている。また、実測し得なかったが、高杯脚片、土馬(足部)等も出土している。

つぎに、須恵器であるが、甕(第157図9)は、口縁部の内外面を回転なでによって整形し



第157図 溝SD11001内出土遺物実測図
土師器1~8・11, 須恵器9・10・12~18

ており、胴部外面には細かい叩き目が、また胴部内面には同心円叩き目がそれぞれみられる。胎土は白色砂粒を含み、焼成は良好である。

壺は、3個体ある(第157図10・17・18)。10は内外面とも削りの後、なでを施す手法で、胎土・焼成は密で良好といえる。壺Eに属する形態である。17・18はいずれも内外面をなで調整している。胎土は17がやや粗く、焼成は両者とも良好である。

蓋は、4個体ある(第157図12~15)。いずれも胎土は密で、焼成は良好である。杯蓋(13・14)は、すべて横なでと上部外面には篋おこしを施している。

つぎに、瓦について述べておきたい。平瓦片が数点出土しているほか、軒平瓦が1点出土している(第156図8)。凹面の布目痕がわずかに残り、瓦当部近くは、篋削りによって明確に面取りされている。凸面は、比較的粗い篋削りである。瓦当部文様の残存状態は良好で、平城京式の唐草文軒平瓦である。胎土は、砂粒をわずかに含むものの密であり、焼成は極めて良好である。色調は、やや暗い灰色を呈している。

最後に、墨書土器についてであるが、土師器2点、須恵器1点の計3点が出土している(第156図5~7)。土師器の器形は、皿Aである。底部外面に「上三」と描かれている。たとえば、このような土器を置いた棚の上から三番目であるとか、階級の上位から三番目とか、何らかの所属順位を表示したものと言える。もう1点は、小片のため器形は不明である。わずかに墨痕を観察できる程度である。須恵器は杯Bである。これも底部外面に書かれており、「廳」(ちょう)と判読できる。役所関係の建物を示すものとする。

7. ま と め

調査全体を通じての最も大きな成果は、三条条間小路の北側側溝(SD 11001)の検出である。前述したように、溝SD 2649として昭和54年度調査で検出されていた部分に続くものである。これによって、東西の道路幅をさらに明確に把握する資料が追加されたことになる。これまでSD 2649と、これに対応した南側側溝のSD 0738により、心々間距離25.0m、内側両肩間距離23.5mという道路幅が算出されている。今回の溝に対応するSD 0738の西延長部が検出されていない点を補い、ここでも同じ道路幅であろうという結果をより説明し易くしたといえる。今回の調査では、残念ながら道路面の検出はできなかった。今後ともこの付近は、綿密な発掘調査と条坊復原の検証が必要である。(黒坪 一樹)

注1 高橋美久二・奥村清一郎・吉岡博之ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会)1979

- 注2 調査補助員 北野 尚・山田芳史・中小路徳造・古谷幸一・吉田藤三郎・吉田保定
整理員 赤司 紫・臼井千映子・木村美智代・竹下和子・山本弥生（敬称略）
なお、発掘期間中は、山中 章氏（向日市教育委員会）、木村泰彦氏・岩崎 誠氏（（財）長岡京
市埋蔵文化財センター）から有意義な御教示を得た。整理期間中、墨書土器については、清水
みき氏（向日市教育委員会）から懇切丁寧な御指導を賜わった。以上の各位に、重ねて厚く御
礼申しあげる。
- 注3 高橋美久二・木村泰彦・吉岡博之ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘
調査概報（1980-2）』京都府教育委員会）1980
- 注4 注2と同じ
- 注5 吉本堯俊「乙訓寺発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1967）』京都府教育委員会）
1967
- 注6 注3と同じ
- 注7 注3と同じ
- 注8 注3と同じ

13. 長岡京跡左京第98次発掘調査概要

(7ANFNT-Ⅲ地区)

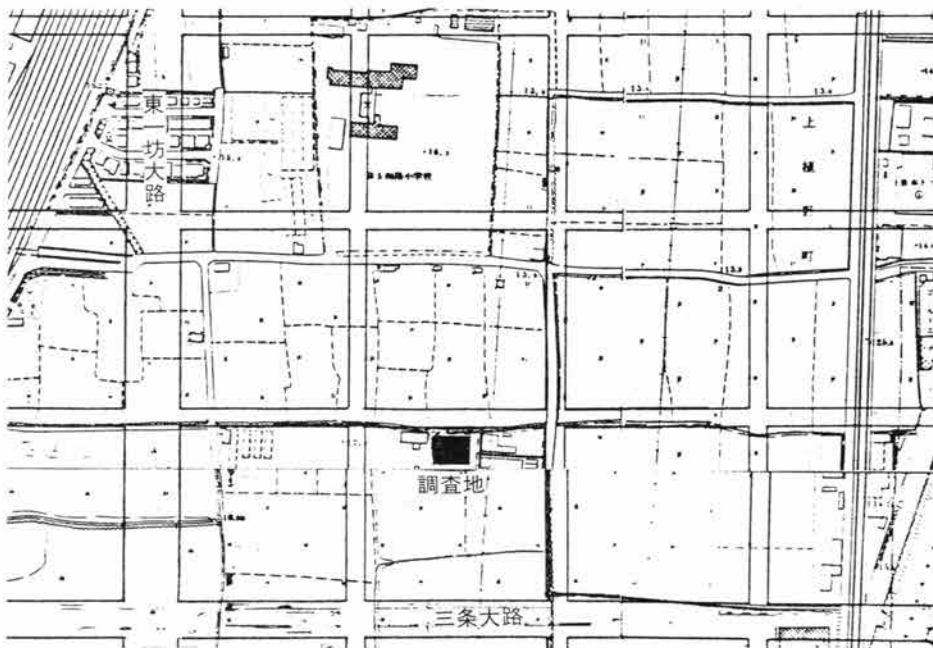
1. はじめに

本報告は、京都府教育委員会が府立向陽高等学校敷地内（向日市上植野町西大田）に格技場を建設することになり、その地が長岡京跡（都城跡）の一画にあたるため、工事に先立ち実施した調査の概要である。

調査地は、桂川左岸の標高15～16mの平地に位置し、向陽高校建設以前は水田の広がる地であった。高校建設に伴って実施された調査では、奈良時代の^(注1)しがらみ遺構、長岡京の条坊遺構、中世の集落遺構等が検出された。長岡京の条坊遺構の存在が確認されたことは、文献による条坊復原案^(注2)を実証することになり、その後の京域解明の指針となった。

本調査地の長岡京における位置は、平城京型の条坊復原図では、左京三条二坊五町の北端にあたり、調査地に北接して三条第二小路（姉小路）の南側溝が存在する。^(注3)^(注4)

以上のことから今回の調査では、左京三条二坊五町内の町割の一端を明らかにすることを主目的とした。



第158図 調査地位置図(1/5,000)

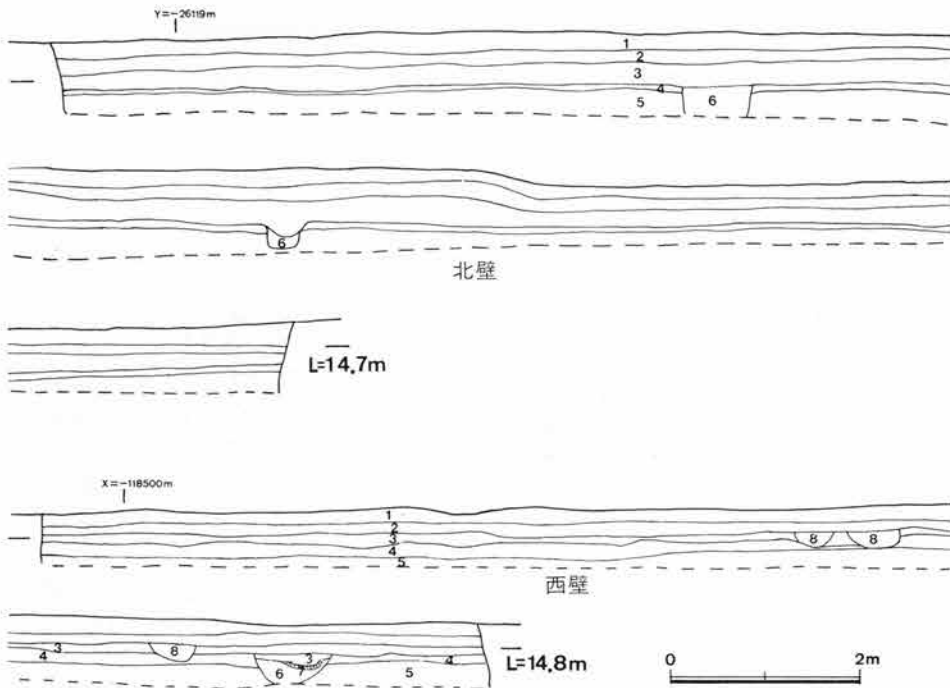
調査は、昭和57年12月23日から杭打ち及び地区割設定を行い、翌年1月11日から掘削・精査を開始し、すべての調査が終了したのは3月14日であった。調査は、当調査研究センター調査課主任調査員 長谷川 達，調査員 山下 正が担当した。

調査にあたっては、京都府教育委員会・向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所の諸機関の御協力・御指導を受けた。また現地調査には、立命館大学・同志社大学・大阪産業大学・京都府立大学・関西外国語大学の学生諸氏の参加があった。^(注5)記して感謝の意を表したい。

2. 調査経過

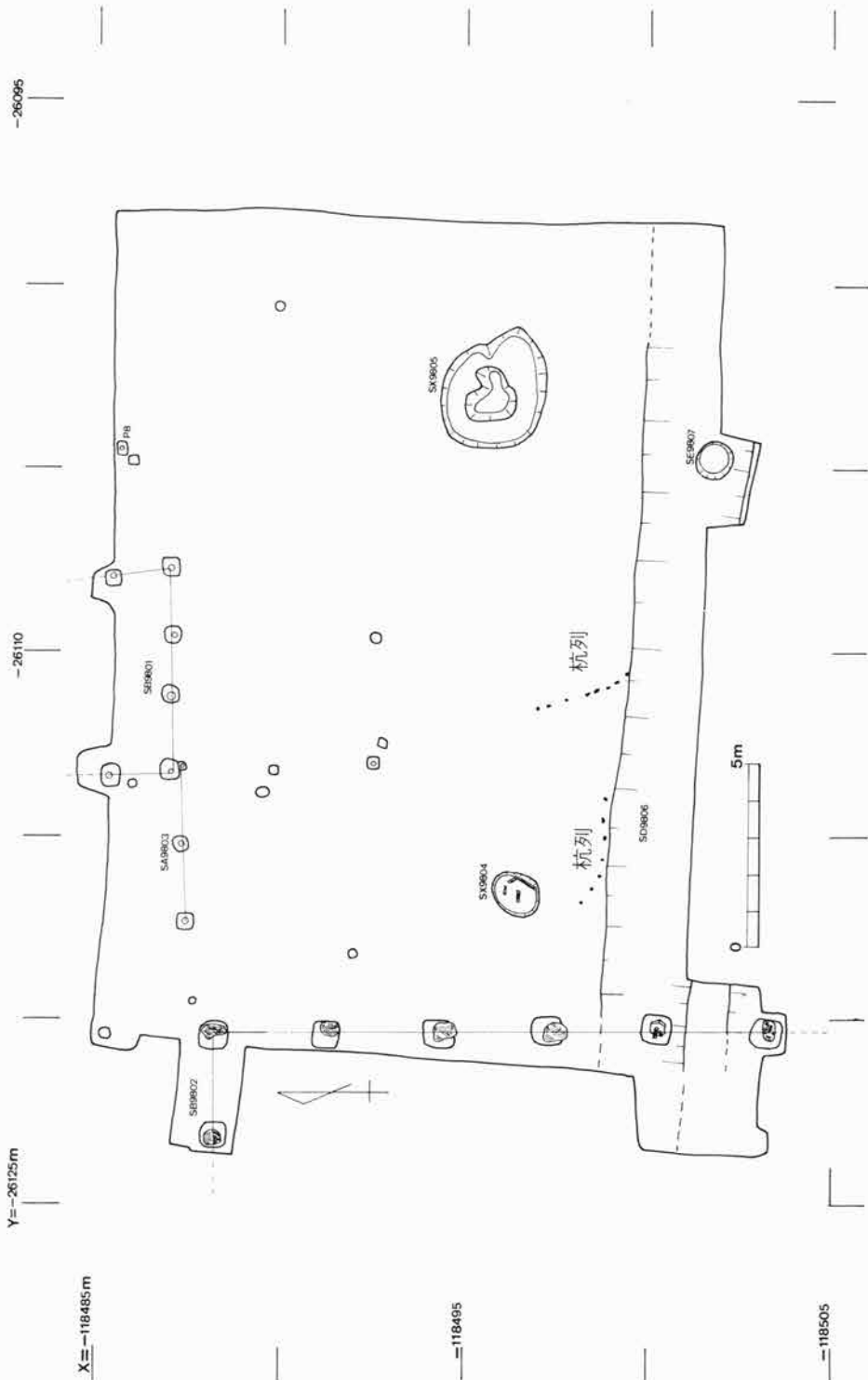
調査は、土置きの場所を考慮して、まず建物予定地の北半分にトレンチを設定し、精査を行ったところ、掘立柱建物跡 SB 9801・SB 9802 を検出した。それらの遺構の規模・性格等を追求するため、南側に拡張し最終的に、東西 25m・南北 20m のトレンチを設定した。

調査地には、敷地造成の際 1.0~1.5m の盛土が認められ、その下は旧耕土層が堆積してい



第159図 土層図 (部分的な拡張以前に実測)

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1. 旧耕土層 | 5. 灰色シルト層 |
| 2. 床土 | 6. 灰色粘質土 |
| 3. 黄灰色粘土層 | 7. 灰色粘質土 (茶褐色土混り) |
| 4. 灰色砂礫層 | 8. 茶灰色土 |



第160图 遺構平面図

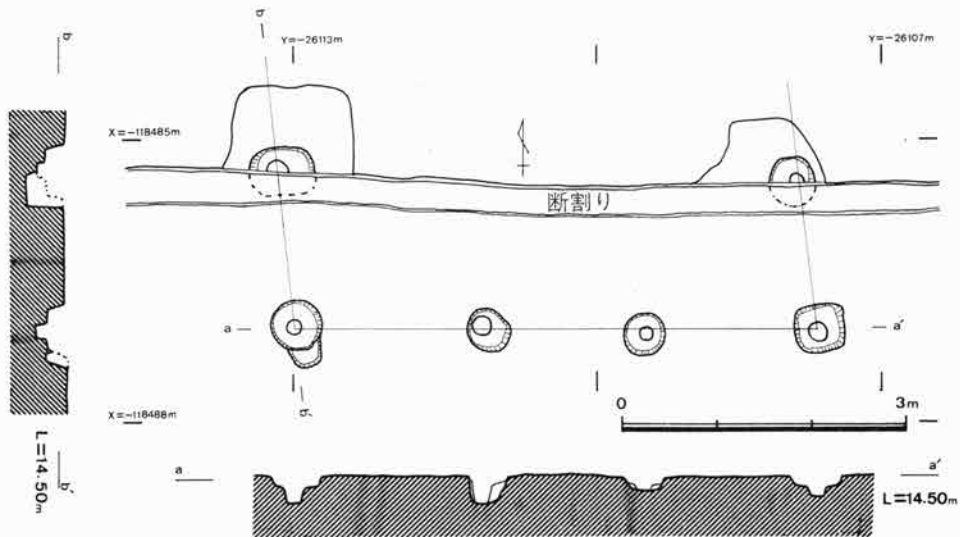
ため、盛土・旧耕土を重機によって除去した。床土直下で、少量の中世遺物と多数の長岡京期に属すると思われる遺物が出土し、その下の灰色砂礫層で、SB 9801・SB 9802・SA 9803・SX 9804・SX 9805 等の遺構を検出した。上記の遺構の実測及び写真撮影を終了した後、土層断面の観察のための断ち割りを行ったところ、灰色砂礫層の下に灰色シルト層と暗灰色礫層が堆積していることが判明した。そして、トレンチの南側で暗灰色礫層が南に向かって徐々に落ち込んでいくことが確認されたため、トレンチの南半分を全体に暗灰色礫層まで下げ、溝SD 9806 を検出した。

3. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡 2 棟 (SB 9801・SB 9802)・柵列 (SA 9803), 土壇 (SX 9804・SX 9805), 流路 (SD 9806) 等がある。その他多くのピットを検出しているが、建物としてまとまるものはない。以下主要な遺構の概要を記す。

掘立柱建物跡 SB 9801

東西 3 間・南北 1 間分を検出した。梁行 2 間・桁行 3 間の東西棟の建物が想定され、柱間は、1.8m (6 尺) の等間隔である。棟柱に想定される柱穴は、ともに南北方向から若干西に位置する。柱の掘形は、隅丸方形あるいは円形を呈し、一辺 0.5m 前後、深さ 0.15~0.30m を測る。柱痕は 0.15m 前後である。掘形の埋土は、灰色粘質土で灰色砂礫層を切り込んで建てられている。



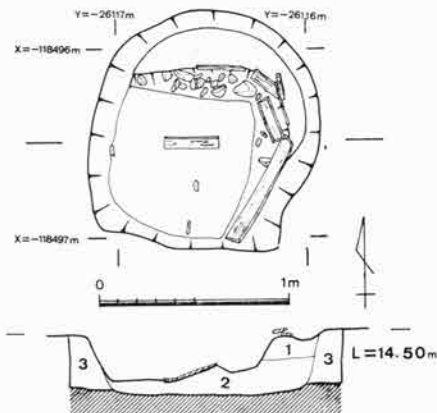
第161図 遺構実測図 (SB 9801)

掘立柱建物跡 SB 9802

東西1間分・南北5間分を検出した。柱間は、3m (10尺) の等間隔である。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、1辺0.7~0.8m、深さ0.25~0.35mを測る。掘形の埋土は、灰色粘質土であるが、検出された部分の南東隅から2番目の柱穴 (P-30) を除いた他の6つの柱穴には、樹皮の堆積が認められた。P-30の掘形には1辺0.4mの上面の平らな自然石を敷いて礎板とし、さらに石のくぼんだ部分には、長さ0.2~0.3m・幅0.1m・厚さ2cmの2枚の板材を配していた。また、北東隅の柱穴 (P-34) では、径0.35m・厚さ4cmの円形の板材を半分にした礎板が確認された。

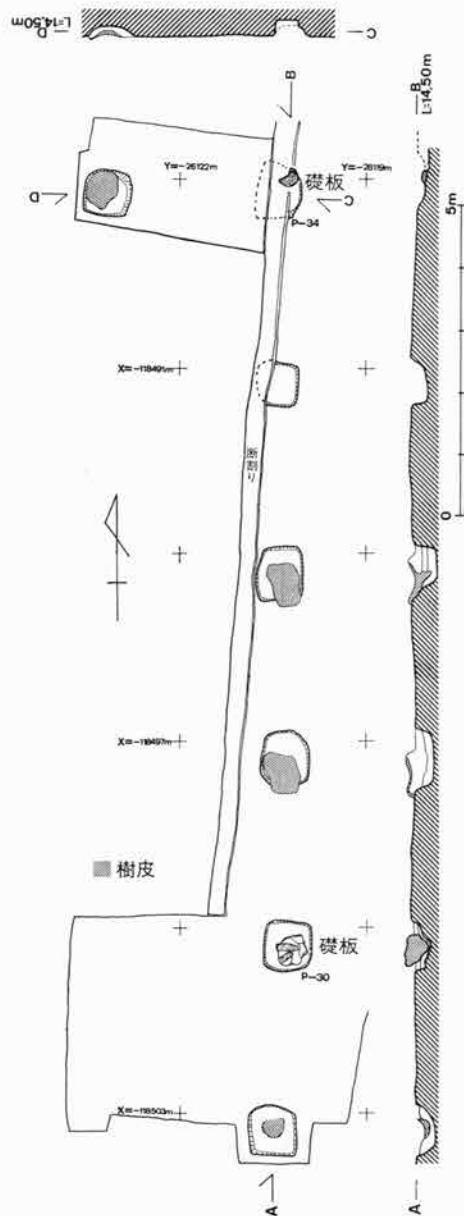
柵列 SA 9803

東西2間の柵列である。柱間は、2.1m (7尺) の等間隔である。掘形は、隅丸方形あるいは円形を呈し、直径0.3~0.4m、深さ0.2~0.3mを測り、柱痕は0.15mを測る。西隅の柱穴は、建物跡SB 9801の南西隅の柱穴に切られており、柵列SA 9803の方が先に建てられていたことがわかる。



第162図 遺構実測図 (SX 9804)

1. 灰色粘質土層 (黄色土混り)
2. 灰色粘質土層
3. 灰色シルト層



第163図 遺構実測図 (SB 9802)

土坑SX 9804

南北1.25m・東西1.2mの円形土坑で、深さは0.3mを測る。埋土は、灰色粘質土（黄色土混り）と灰色粘質土の2層にわかれる。埋土の上層で0.05~0.2m大の礫のうすい集積が見られ、その上に数枚の板が配してあった。板は長さ0.2~0.6m・幅0.1m・厚さ1cmある。井戸等の施設が考えられるが、判然としない。また、時期に関しては、出土遺物が少なく切り合い関係もないことから不明であるが、埋土がSX 9805と似ていることから、中世につくられたものと思われる。

土坑 SX 9805

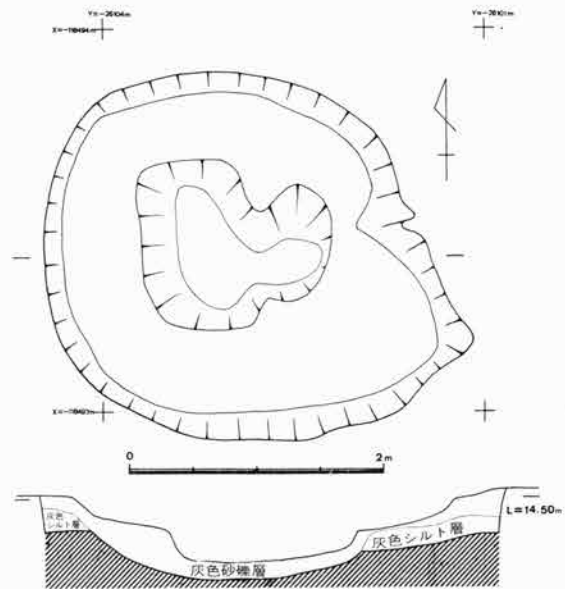
南北2.9m・東西3.0mの規模をもつ不整形な土坑で、2段に掘り込まれている。1段目の平坦な部分で、下駄1個体と土師皿2個体（完形）が出土した。出土遺物から中世に属するものと考えられる。

流路 SD 9806

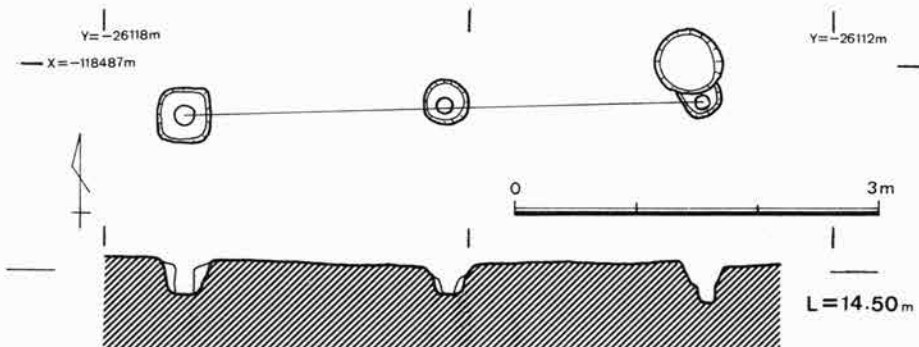
建物跡 SB 9802 の P-30 を検出した灰色シルト層の下の暗灰色礫層で確認した。北岸には、杭列が2か所見られ、ともに護岸に使用したものと思われる。杭列の方向の違いは、流路の変遷を物語るのかもしれない。この流路は、建物（SB9802）の造営に際して埋められている。

井戸 SE 9807

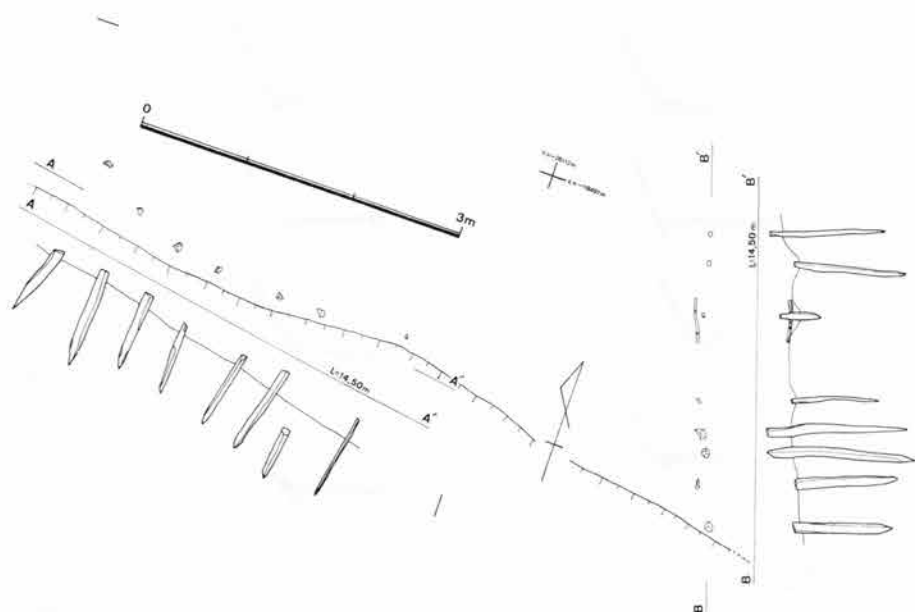
水田の灌漑用の井戸である。桶を2



第164図 遺構実測図 (SX 9805)



第165図 遺構実測図 (SA 9803)



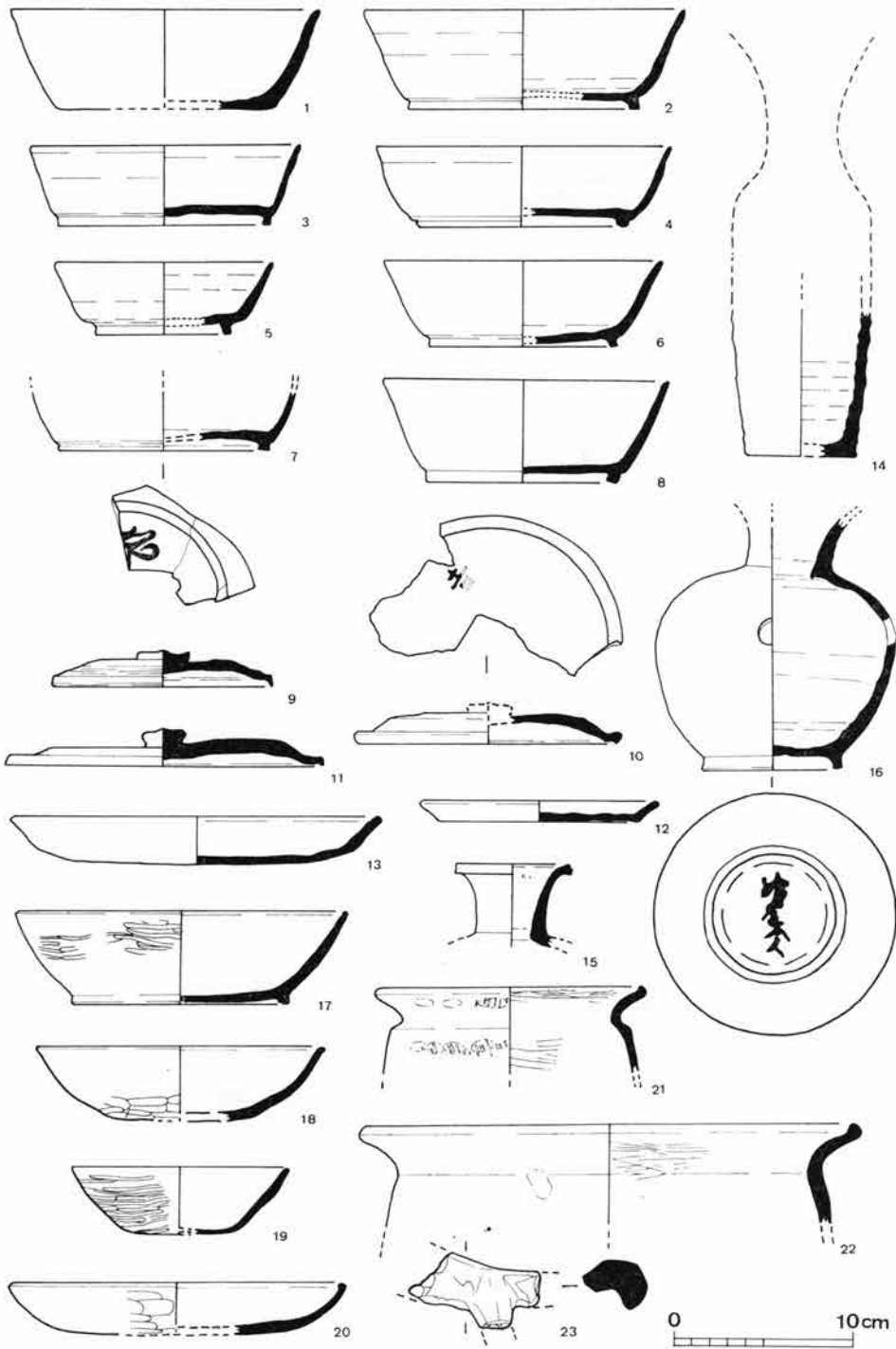
第166図 遺構実測図 (SD 9806)

つ重ね井戸枠としていた。中からは、磁器・瓦が出土し、近代まで使用されていたものと思われる。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、須恵器・土師器・瓦・黒色土器・瓦器・製塩土器等多数あるが、小さな破片が多い。また、確実に遺構に伴う遺物も少ないが、以下、各遺物の特徴を記す。

須恵器は、杯身（1～8）、蓋（9～11）、皿（12～13）、壺（14～16）などがある。杯身は、高台を付すものとそうでないものがあり、（1）は、内外面にロクロなで、底部外面には、篋切りが見られる。（2）～（8）は、ほぼ平坦な底部から、直線的に立ち上がる口縁部を有し、内外面には、ロクロなでを施し、底部には篋切り痕が見える。（7）の底部には、墨書が観察でき、また（8）の底部外面全体には、墨の付着があり、転用碗と考えられる。蓋（9～11）は、平らな頂部と屈曲する縁部をもつ。（9・11）の内面全体には墨の付着が認められる。皿（12・13）は、平坦な底部と斜め方向に立ち上がる口縁部をもつ。共に底部外面には、篋切り痕が残り、口縁部内外面は、ロクロなでで仕上げる。（12）には、内面全体、外面の一部に墨の付着が認められる。壺（14～16）には、糸切り底をもつ長頸壺（14）と、球形の体部を有すると思われるもの（15・16）がある。（16）は体部上半部を穿孔する特異な



第167図 出土遺物実測図(1)

P-6 (SB9801) : 18, P-8 : 16・17, 包含層 : 1~15・19~23



第168図 出土遺物実測図(2)

P4 (SB 9801) : 24, SX 9805 : 31・32, 包含層 : 25~30

形態である。

土師器は、杯(17)、椀(18・19)、皿(20)、甕(21・22)等がある。(17)は高台を付す杯で、口縁部外面は篋削り後、粗い篋磨きを行い、内面は横なでで仕上げる。(18)は、口縁部が横なでのため、端部が外反し、口縁部下半部から底部にかけて篋削りを施す。(19)は、口縁部が屈曲しながら立ち上がる形態をもつ。口縁部外面上半部のみ横なでを施した後、無雑作な篋磨きを行う^(注6)。(20)は、外面全体を篋削りし、内面には横なでを施す。口縁端部は、内に巻き込む形態をもつ。(21・22)は、短く「く」字形に外反する口縁に細長い体部がつく。共に内面は刷毛で調整し、外面は横なで押さえで調整している。

(23)は、土製馬である。胴部と脚部の一部が残る。他に図化しなかったが、脚部のみが1点ある。

(31・32)は、SX 9805 から出土した土師器の皿である。いずれも完形品であり、口縁部にはススの付着が見られ、燈明皿として利用されたと思われる。

墨書土器は、総数10点出土しており、器種は、須恵器4点(7・10・16・25)、土師器6点(24・26~30)である。墨痕が薄れ、また小断片が多く判読できたものは少ない。(7)・(25)は、杯身の底部に墨書がある。(10)は、頂部に「吉」と記す。(16)は、壺の底部に4文字の墨書が見え、「□□□人」と読める。(24)は、土師器底部外面に「大□」と記す。(26)は、高杯の底部内面に1文字あり、「長」と墨書する。(28)は、「□田」と読める。(27・29・30)は、どのような文字になるのか不明である。

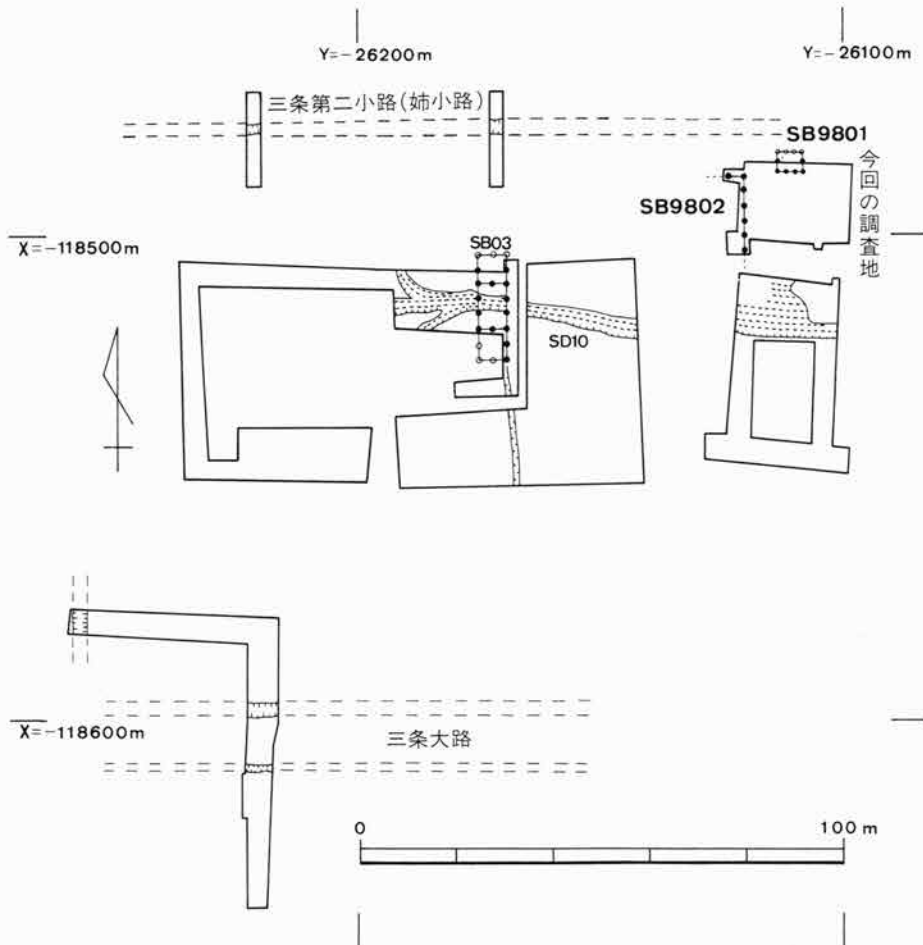
5. 小 結

今回の調査では、長岡京期以前の流路、長岡京期の掘立柱建物跡2棟、中世の土塚などを確認した。特に、長岡京期の建物群は、左京三条二坊の町並みを解明するための一資料と言える。

調査地周辺は、京内で最も京域解明の進んでいる地域である^(注8)。これらの調査成果を踏まえ

て、今回の調査地の長岡京跡における位置関係を追えば、調査地の北と南に三条第二小路（姉小路）と三条大路が走り、西には東二坊第一小路（猪隈小路）が走る位置にある。すなわち、左京三条二坊五町にあたる。

向陽高校内の調査によって得られた成果を図示したものが、第169図の「調査地関連図」である。これを現行の「平城京型」の条坊制で割り付けると、東二坊第一小路が、SB 03 直上、あるいは若干西側を通ることになる。^(注9)このことは、左京三条二坊四町及び五町の建物配置状況を考える場合、非常に興味深い。すなわち、SB 03 は今回検出した建物群とともに、三条二坊五町に配置された可能性をもつこと、あるいは四町及び五町の二町分を占める建物群である可能性をもつことが指摘できよう。いずれにしても推定の域を出ず、今後の周辺の調査によって確かめられなければならない課題と言えよう。



第169図 調査地関連図

今回の調査では、多くの遺物が出土した。その中には、墨書土器・転用硯の存在がみられる。墨書土器は、判読できるものが少なく建物群の性格を雄弁に語るとは言い難い。しかし、これらの遺物の出土と10尺等間の柱間をもつ大規模な建物跡の検出は、公的な性格を帯びた施設の存在を示唆するものと言える。

流路 SD 9806 は、以前に検出されたしがらみ遺構 SD 10 との関連が注意されなければならないが、三条二坊五町の利用状況を考える場合、これらの湿地が建物配置にどのような影響を与えたか興味深い。

いずれにしても、今回検出した遺構及び遺物の整理が充分とは言えない現在、以下の事実を指摘するにとどめたい。

- (1)左京三条二坊五町推定地の北辺で、長岡京期と思われる建物跡を2棟検出したこと。
- (2)遺物には、杯・皿等の供膳形態の土器が多く、その中には墨書土器・転用硯がみられること。
- (3)調査地の南側は、自然流路のしがらみがあり湿地であったこと。

(山下 正)

- 注1 高橋美久二ほか「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会)1975
高橋美久二ほか「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会)1976
- 注2 中山修一氏は、延暦14年正月29日の太政官符(『類聚三代格』第十五)にある「近衛府の蓮池」の跡を現在の国鉄向日町操車場の低湿地に求め、その地を「左京三条一坊十町」として、それを軸に長岡京の条坊を「平安京型」に復原された。
中山修一「長岡京条坊の復元」(『乙訓文化遺産』2号)1967
福山敏男・中山修一ほか『長岡京発掘』NHK ブックス 1968
- 注3 長岡京の大路・小路の呼称は、(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 向日市教育委員会1982)に示された「長岡京条坊図」に従う。
- 注4 向陽高校建設に伴う第1次調査によって確認されており、SD 66 と報告。高橋美久二ほか 前掲書
- 注5 立川正明・浜口和宏・田村泰造・靄指靖治・城田正博・坂下雅朗・高島利洋・吉沢素子・西岸秀文・藤沢達也・木ノ下治男・水野春樹
- 注6 長岡京時代の特徴ある土器として、長岡京で「椀C」と呼ばれている器形である。
百瀬ちどり「長岡京の供膳形態の土器について」(『長岡京』第11号 長岡京跡発掘調査研究所)1979.6
- 注7 墨書土器の解読については、向日市教育委員会 清水みき氏、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室 鬼頭清明・今泉隆雄・佐藤 信、各氏の御指導・御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

注8 左京四条二坊九町は、昭和52年以来調査が行われ、町の半町以上が官衙的建物で占地されていることが明らかになった。また、左京三条二坊十一町の町並みの一端を明らかにした左京第70次調査もある。

山中 章ほか「長岡京跡左京第71次(7ANF0T-4 地区)～左京四条二坊九町～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 向日市教育委員会) 1982

長谷川浩一ほか「長岡京跡左京第70次(7ANFKO 地区)～左京三条二坊十一町～発掘調査概要」(『同上) 1982

注9 左京第52次調査で検出された南北溝 SD 5201 は、東二坊第一小路の側溝と推定され、座標は、 $Y = -26178.5\text{m}$ を測る。

中山修一「長岡京の条坊」(『京都府埋蔵文化財情報』第2号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1981

14. 宮ノ平遺跡発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、京都府城陽市寺田小字宮ノ平・大川原において、京都府住宅供給公社による宅地開発が計画されたことに伴い、事前に行った発掘調査である。

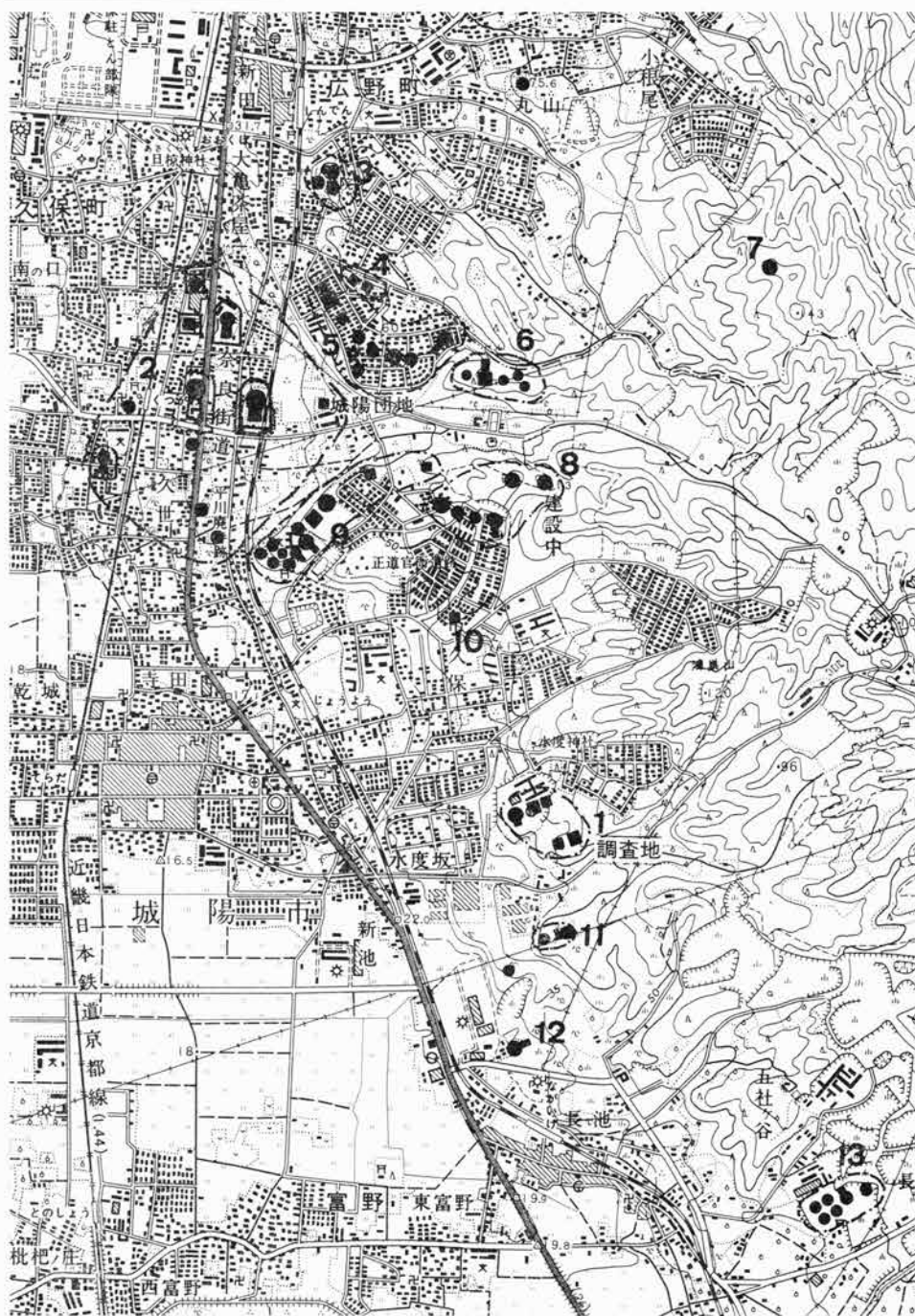
調査の契機となったのは、この付近で以前に土器片が採集されていたことに加え、昭和46年から昭和48年にかけて発掘調査された宮ノ平古墳群(注1)から続く丘陵上にあたり、古墳あるいは集落跡の存在することが想定されていたことによる。しかし、遺物分布等の状況等、判然としない面もあるため、昭和55年の6月から8月にかけて、城陽市教育委員会が主体となり試掘調査(注2)が行われ、古墳時代、平安時代等の遺構・遺物が検出された。その成果を得て、協議を重ねられた結果、開発対象地内で発掘調査の必要な部分が選定され、今回の調査となった。現地調査は、昭和57年1月から同年3月まで、昭和56年度事業として行い、翌昭和57年度に整理作業を行った。

発掘調査は、京都府住宅供給公社の委託を受けて、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施し、同センター主任調査員 長谷川 達、調査員 大槻真純（現・福知山市教育委員会社会教育課）が担当した。なお、整理作業に関しては、前記兩名のほか、調査員 小池 寛が加わり、分担して行った。

調査にあたっては、京都府教育委員会・城陽市教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々、京都府住宅供給公社の方々には、終始、御協力をいただいた。また現地調査・整理作業(注3)に従事していただいたの方々など、多くの人々の協力によって調査ができたことを、心より御礼申し上げます。

2. 位置と環境

調査地は、山城盆地南部の東縁にあたり、国鉄奈良線「城陽」駅の南東方約1kmに位置する。宇治丘陵から西側に派生する低丘陵の一つの先端部分で、旧巨椋池を囲む山城盆地南部の沖積地を一望することのできる場所に立地し、標高約56～58mを測る。丘陵は低位段丘面であり、大阪層群と呼称される洪積世層が基層となっており、砂・粘土・礫の混交した地層が広がっている。丘陵裾には、旧北陸道が南北に通っていたと考えられるとともに、木津川・宇治川・桂川が流入し、淀川へとつながる巨椋池にも近く、古代から水陸ともに交通の便



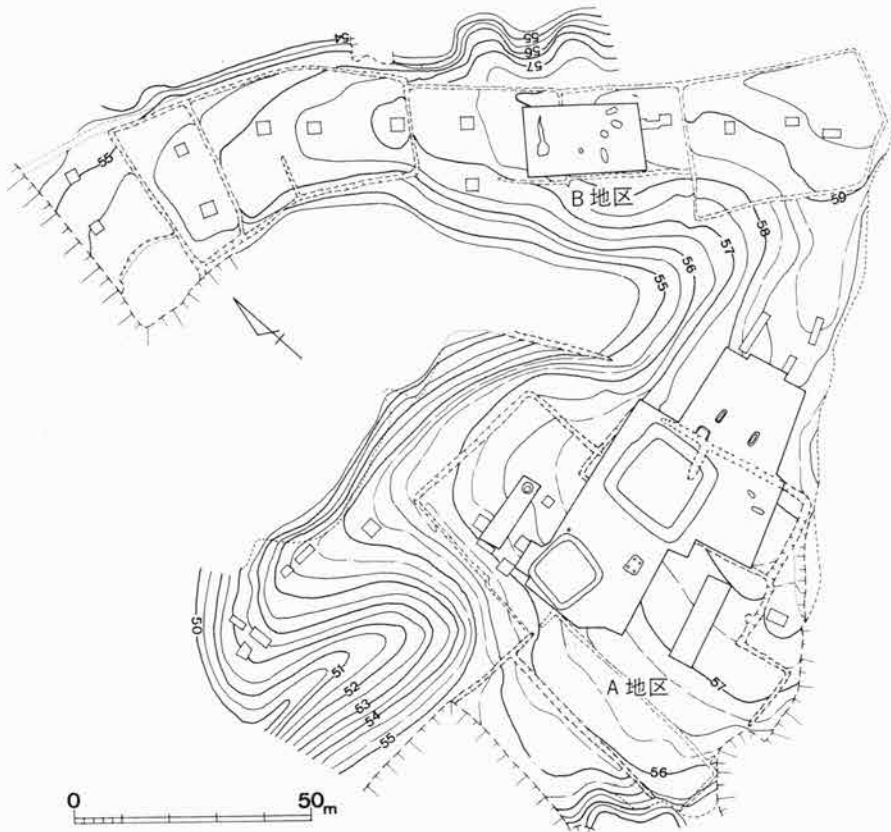
第170図 調査地周辺古墳分布図 (1/25,000)

- | | | |
|-------------|------------|------------------|
| 1. 宮ノ平古墳群 | 2. 平川古墳群 | 3. 坊主山古墳群・金比羅山古墳 |
| 4. 下大谷古墳群 | 5. 西山古墳群 | 6. 上大谷古墳群 |
| 7. 一本松古墳 | 8・10 尼塚古墳群 | 9. 芝ヶ原古墳群 |
| 11. 梅の子塚古墳群 | 12. 長池古墳 | 13. 冑山古墳群 |

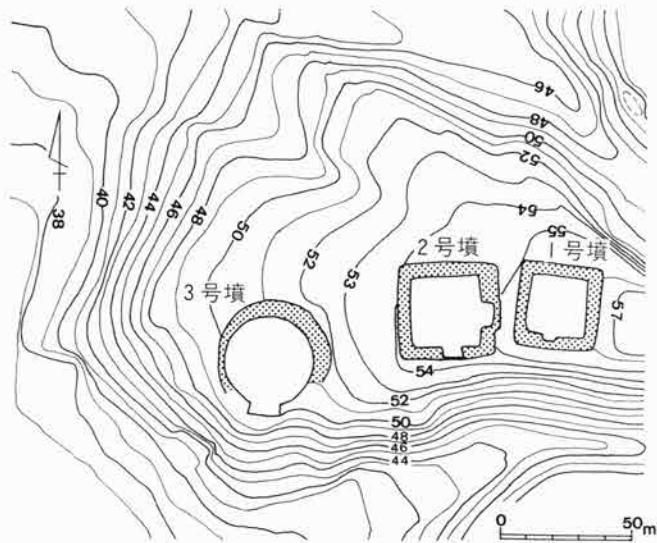
の良好な所であった。

この付近は、山城地方でも屈指の古墳密集地として知られ、宇治市南部から城陽市南部にかけて、単独、あるいは群を構成して数多くの古墳が点在し、広義には久津川古墳群と総称されている。それらが最も集中するのは、近鉄「久津川」駅付近からその東部にかけての地域である。大谷川に面した丘陵上、それによって形成された扇状地上に立地する西山・^(注4)上大谷・^(注5)下大谷・^(注6)芝ヶ原・^(注7)尼塚、そして平川の各古墳群であり、約60基が知られている。その他の古墳も第170図に示したように南北に点在するが、大谷川周辺の密集度は見られない。4世紀から6世紀の間に消長する。宇治一本松古墳は、^(注10)標高約130m、平野部との比高差約110mの高所に立地するもので、この周辺では現在まで例を見ない。割竹型木棺を安置した竪穴式石室が検出され、この地域で最古のものと考えられている。このほか、古い時期の古墳としては、西山・下大谷・尼塚の古墳群や上大谷古墳群の一部、庵寺山古墳等が築造されている。その後、全長219m(含周濠)を測る久津川車塚古墳に代表される平川古墳群が形成される。十数基が確認されており、中期古墳群としては山城地方で最大の規模を持つものである。しかし、古くから耕作地の開発・拡張等によって失われたものが多く、形を留めるものは少ない。前記の大型前方後円墳を含め、方墳・円墳・上円下方墳と考えられるものなど、多様な墳型を持つ古墳が集合している。立地も、他の古墳が丘陵上であるのに対し、この古墳群は低位の台地上、比較的広い範囲に分布する。この南東側の丘陵部には芝ヶ原古墳群が13基確認されており、5世紀代のものも含まれるが、全容については不明である。5世紀末から6世紀にかけての古墳は、坊主山古墳群、^(注13)甑山古墳群、^(注11)長池古墳や^(注15)上大谷古墳の^(注11)一部で確認されている。また、中期古墳群とされてきた平川古墳群中にも近年須恵器を伴い、6世紀まで時代の下がる古墳の存在も判明してきており、比較的多くの後期の小規模古墳が、古く削平された可能性も出てきている。この時期、甑山古墳、上大谷12・17号墳では、横穴式石室が埋葬施設として採用されるが、坊主山・長池古墳の主体部は木棺直葬であり、平川古墳群の後期古墳でも横穴式石室が採用されていた形跡はない。久津川古墳群全体を通して、現在までに知られている後期古墳は希薄であり、6世紀、全国的に増加する群集墳は発見されていない。

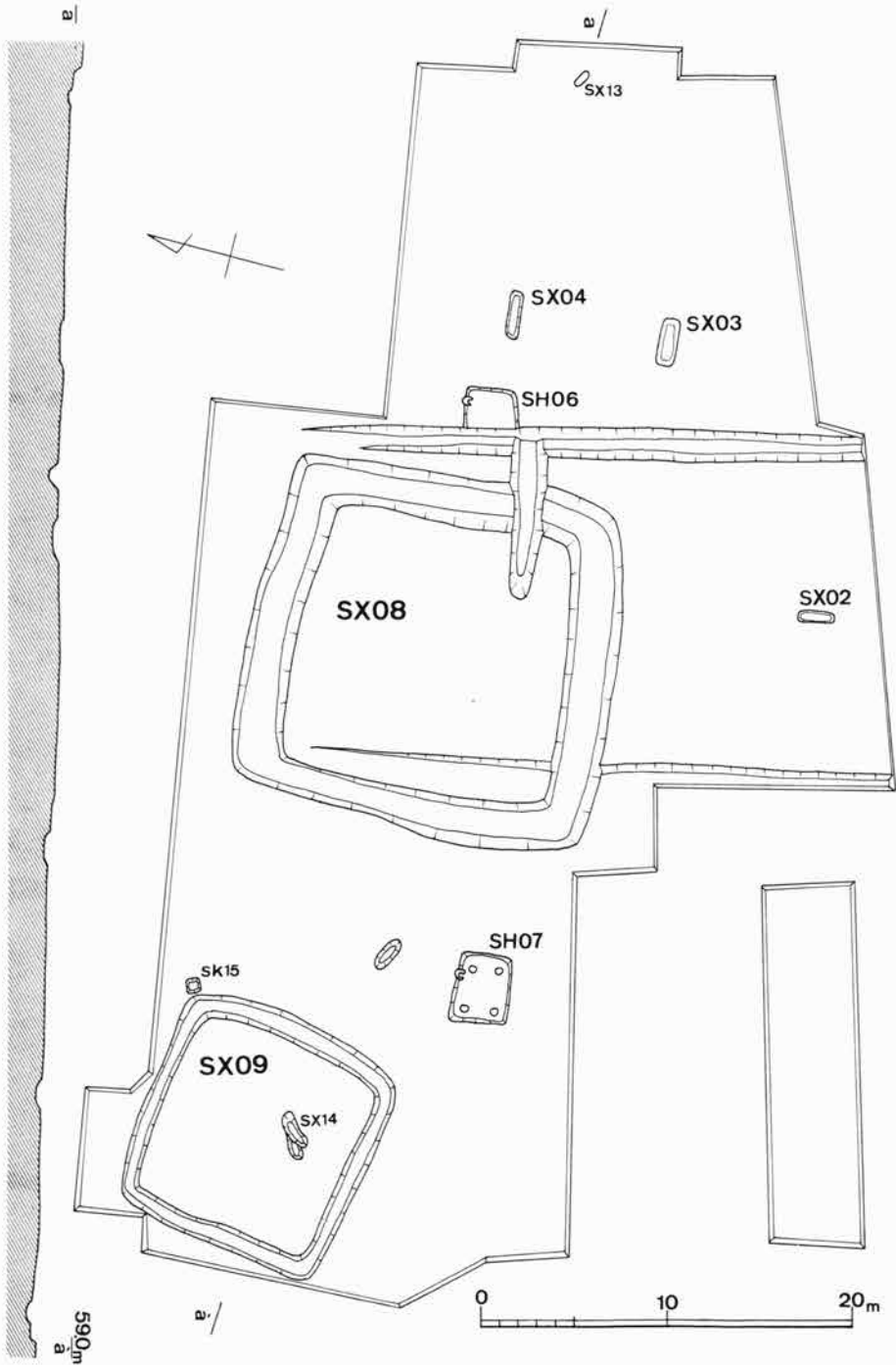
列挙した古墳の数に対し、当時の集落は検出例が少なく、不明な部分が多い。南部の森山^(注17)遺跡、宇治市の八軒屋谷遺跡等では^(注18)4～5世紀の遺構・遺物が検出されているが、古墳の密集する大谷川流域をはじめ、各古墳群に対応する集落の位置は現在まで把握されていない。それに反して、古墳の希薄な時期である6世紀後半～7世紀の集落については、正道・芝ヶ原・芝山・森山の各遺跡で多くの建物跡・住居跡が検出されている。このことは次代、この



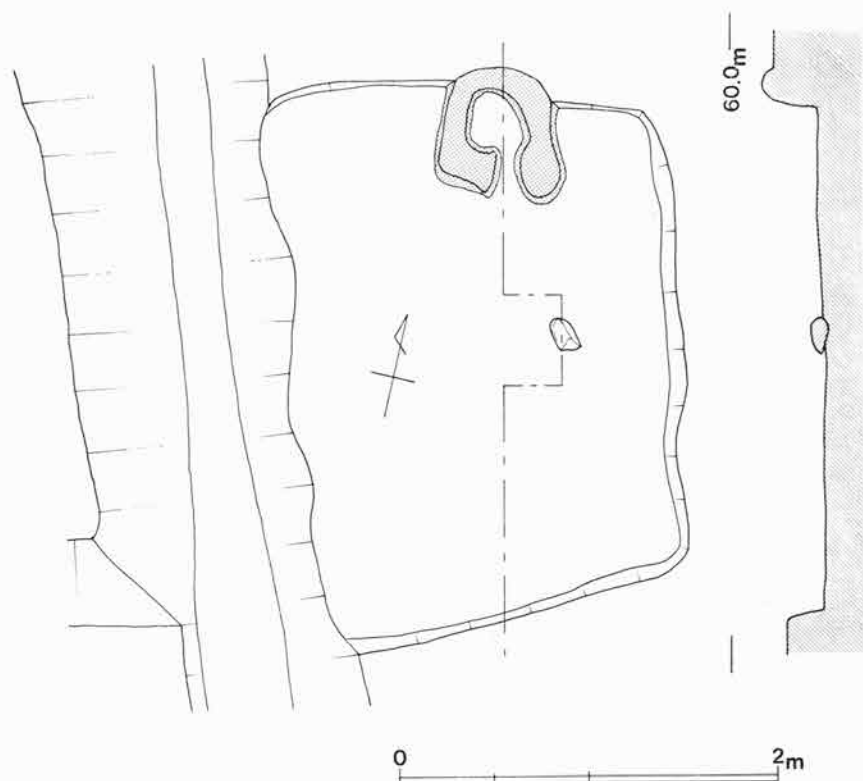
第171図 調査地周辺地形図（昭和56年度試掘トレンチを含む）



第172図 宮ノ平1～3号墳地形図



第173图 A地区平面图・断面图



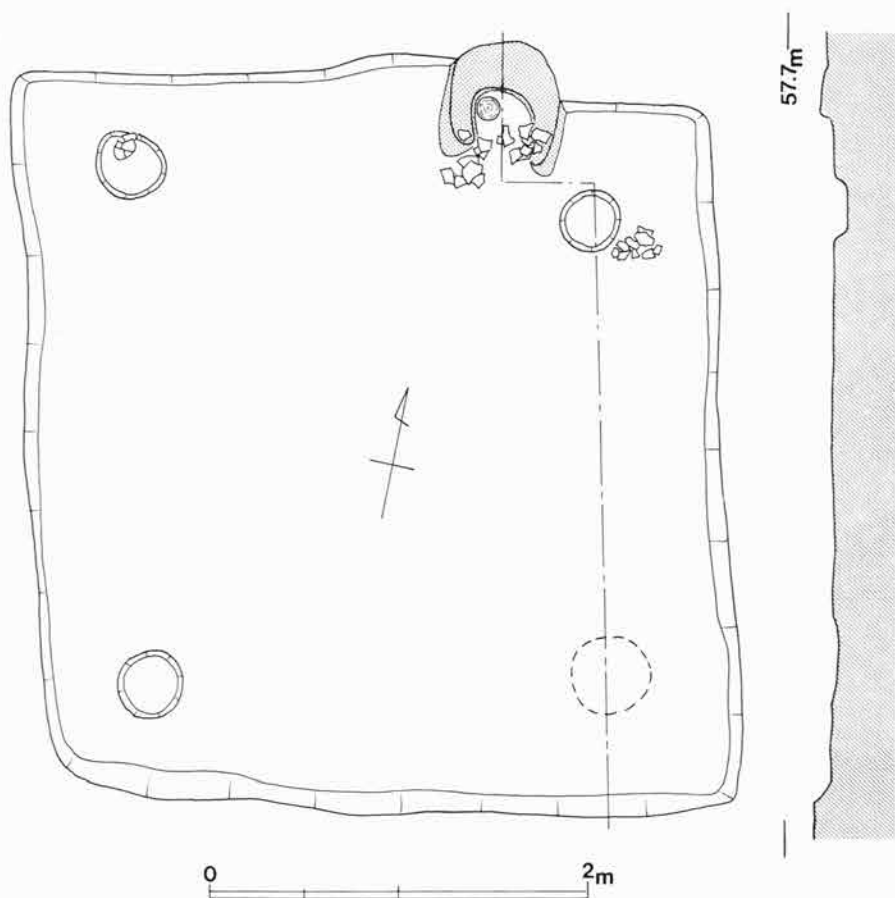
第174図 竪穴式住居跡 1 (SH06) 平面図・断面図

地域に次々とあらわれる寺院造営活動への源動力を思わせるものがある。^(註19)

ここに挙げてきた久津川古墳群と総称される宇治丘陵西縁の数多くの古墳も、戦後、人口の都市集中化の中で、京都市近郊という立地条件から、水田・畑地・丘陵部を問わず宅地造成等の開発が及び、それに伴って消滅してしまったものがあまりにも多い。

3. 調査概要

調査対象地の立地する丘陵は谷を挟んで、北と南の二条からなるが、対象地東端で一つに収束する。南側の丘陵をA地区、北側をB地区とした。A地区は東側で、幅約20mであるが、西側では南北幅約90mの範囲が平坦になっている。B地区とした北側では、稜線上に幅約20~30mの平坦面を持ち、西側の丘陵先端には、宮ノ平1~3号墳(第172図)が存在していた。両地区とも、調査前は、雑木・竹等が繁茂し、荒れるにまかせたともいえる状態であった。しかし、一部に茶の木等も残り、本来の自然地形の形状に加え、かつて行われた竹林整備・畑地化などによって、さらに平坦化が進んだものと考えられる。また地籍番号の

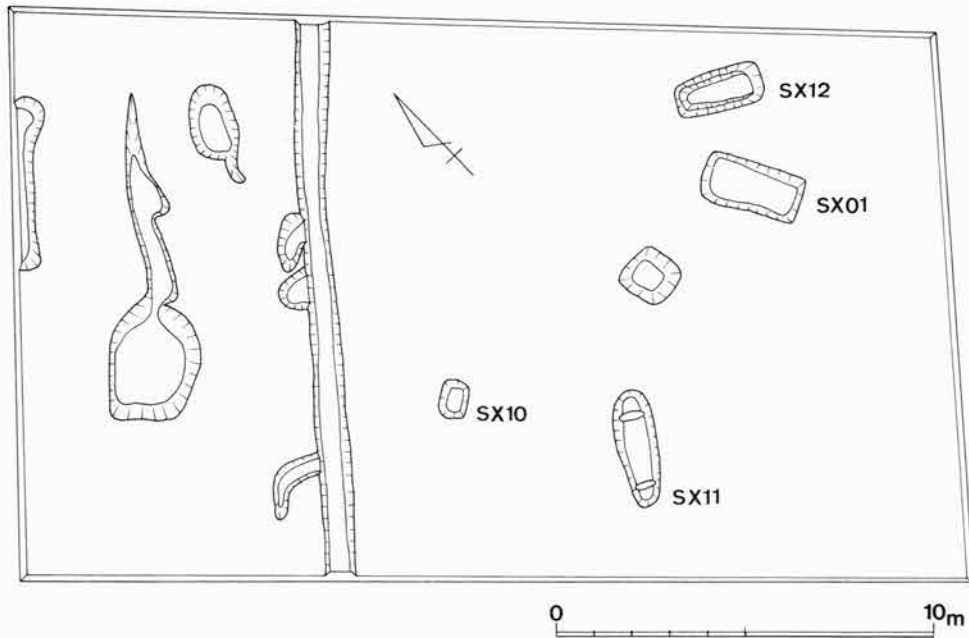


第175図 竪穴式住居跡 2 (SH07) 平面図・断面図

範囲に沿って、地境溝・根切り溝が多く掘られ、それらの中には地表面で観察できるもののほか、表土除去後に確認できるもの等があり、数次にわたる土地の改変の行われた様子を窺うことができる。

A地区では 1,900 m²、B地区では 375 m² を掘削した。ともに立木伐採後、重機によって表土層を除去し、後は人力による精査を行った。表土である腐植土層下には、暗褐色粘質土層があり、その下に小礫の混入した黄褐色粘質土層(地山)があらわれる。各遺構は、その黄褐色粘質土層まで掘り下げた段階で検出できた。遺構内を埋めている土は、地山よりやや暗い色調をもつもの、やや赤褐色系が強くなるものであり、極めて地山の色調に似たものであった。両地区とも、丘陵奥から先端にかけて少しずつ低くなる傾斜をもつが、見る目には平坦に映る程度のものである。計測すると、A地区の調査面の東端と西端で約 1.2m の高低差である。

A地区で検出した遺構には、試掘調査で検出した SX 02・SX 03・SX 04・SE 05 のほか、



第176図 B 地区 平面図

SH 06・SH 07・SX 08・SX 09・SX 13・SX 14・SK 15がある。B地区では試掘時の SX01 のほか、SX 10・SX 11・SX 12を検出した。両地区とも、調査地全体に後世の削平を受けており、各遺構の規模はやや矮小化しているものと考えられる。

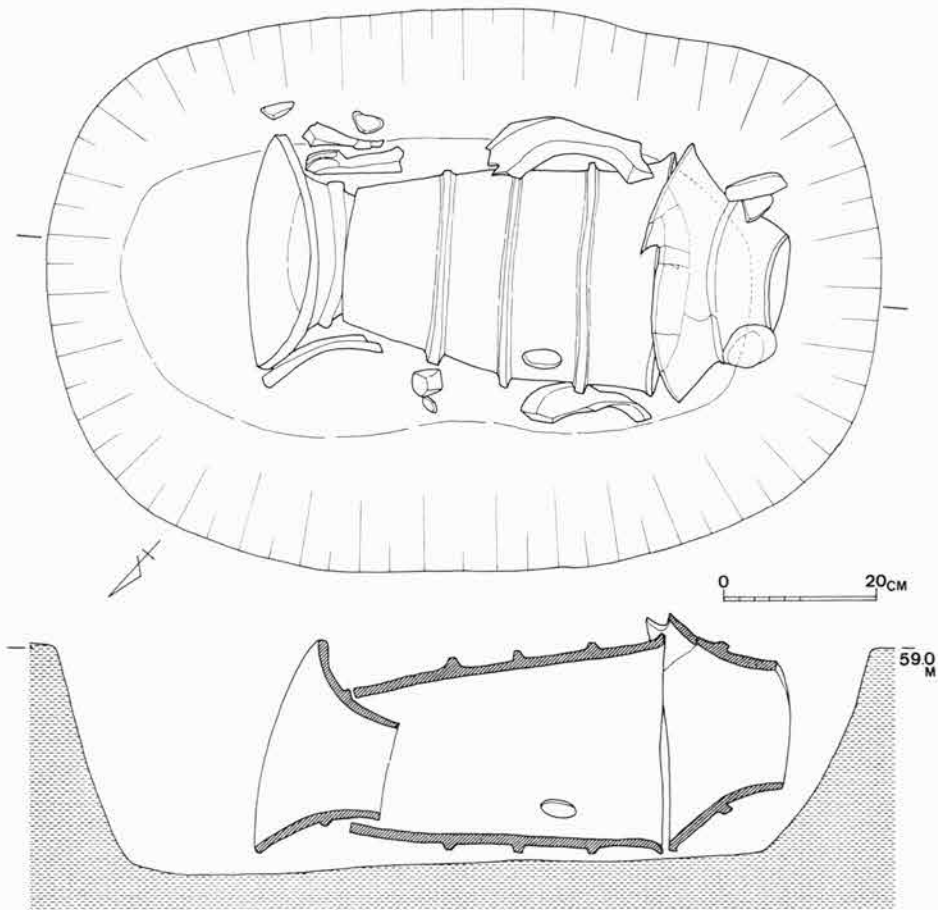
試掘時に検出した遺構は付表4のとおりである。補足事項としては、SX 03・SX 04 の周辺には、拡張し、精査しても周溝等の周辺施設が存在しなかった点、SE 05 (試掘時 SK 05) を完掘し、深さ1.6mであることが判った点等があげられる。

次に、今回の調査によって検出した遺構について述べる。

(1) 検出遺構

SH 06 南北2.6~3m、東西は残存長2.1mの竪穴式住居跡で、西側がやや広い不整形な方形を呈している。西側は新しい溝によって切断され失われている。北側の辺のやや東よりに竈が設けられ、馬蹄形に遺存していた。竈およびその周辺は焼け、暗赤褐色になるとともに、焼土が付近に散在していた。遺物には、土師器と須恵器の杯身・平瓶が比較的竈の近くに集中して出土した。N-12°-W。

SH 07 これも SH 06 同様の竪穴式住居跡で、やや南北に長い長方形である。南北3.9m・東西3.7mを測り、壁は検出面から18cmの高さが残る。竈は、これも北辺のやや東側に造り付けられている。その中から、土師器の椀(第181図11)が伏せられた状態で出土し、

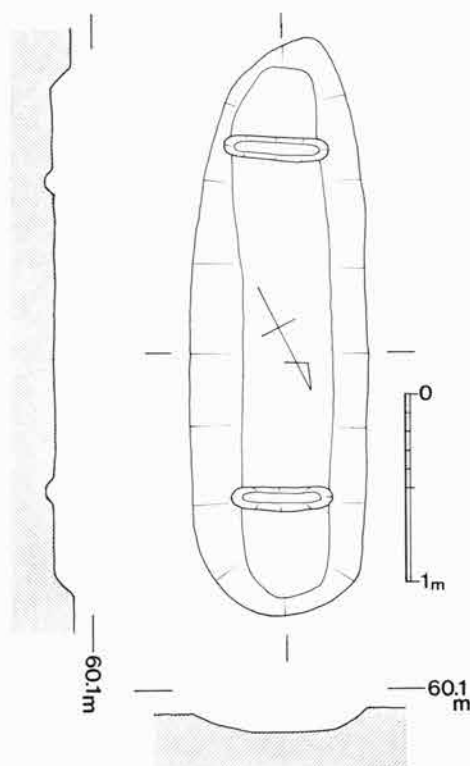


第177図 埴輪棺 (SX 10) 出土状態実測図

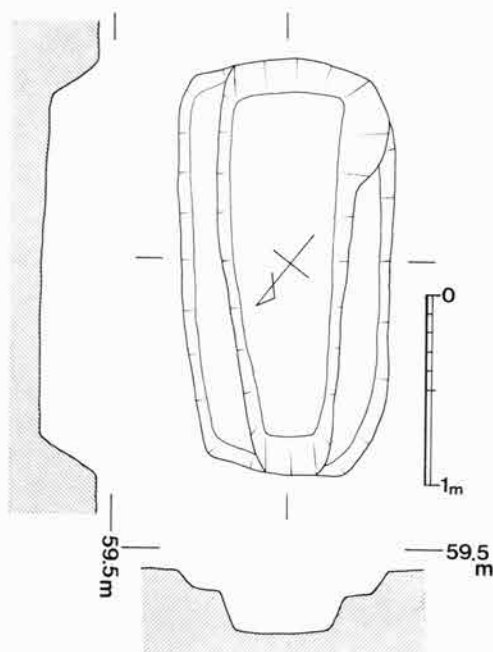
その周辺には土師器の甕 (13) が散乱していた。N-11°-Wを示す方位、竈の位置等、SH C6と共通点も多く、ほぼ同時期に営まれていたものと考えられる。

SX 08 宮ノ平4号墳とした古墳で、埴丘部分は削平を受け周溝部分だけが残っていた。周溝は方形に全周し、幅1.2~3.2m、深さ0.15~0.4mを測る。埴丘基底部分で一辺が15.5m、周溝を含むと南北20m・東西19mの方墳となる。周溝内から須恵器の高杯・椀等や円筒埴輪・朝顔型埴輪・家形埴輪が出土した。埴輪等で原位置を保つものではなく、須恵器ともども転落堆積したものである。N-6°W。

SX 09 宮ノ平5号墳としたもので、幅1~1.5mの周溝がやや隅は丸くなるが方形に全周する。埴丘基底部分で一辺10.5m、周溝部を含めた規模は南北12.5m・東西13mを測る。SX 08同様に削平を受け、主体部等は検出できなかった。周溝幅には広狭があり、深さは0.2~0.4m、地形との関係もあり東側が西側よりもやや深い。東側周溝中央付近の溝底に須



第178図 木棺墓(SX 11)平面図・断面図



第179図 土坑墓(SX 12)平面図・断面図

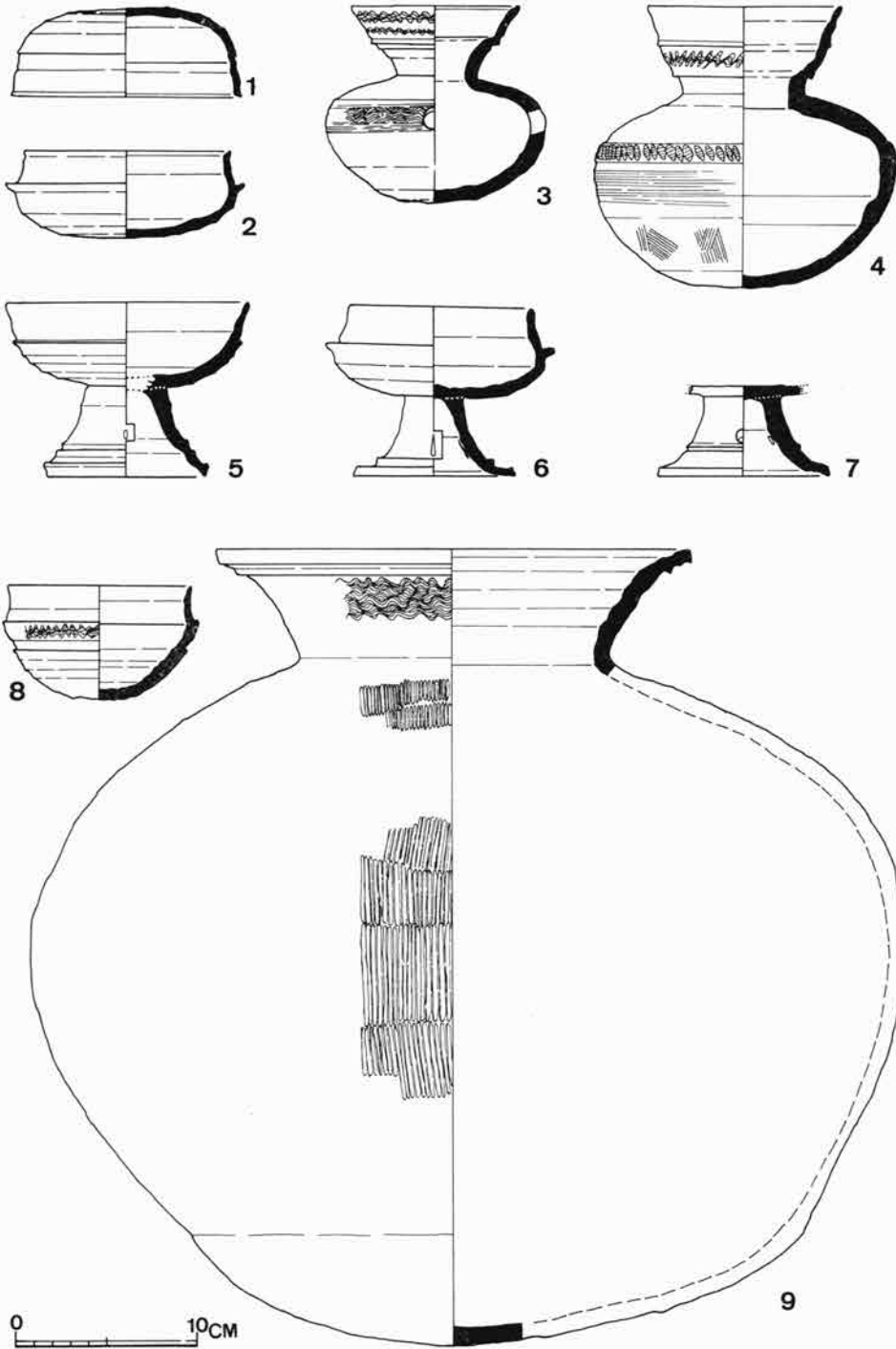
恵器が、北側から甕・壺・蓋杯(蓋・身)・甕の順に置かれていた(図版第139 第180図)。土圧等によって割れていたが、意図的な破砕は行われていない。N-5°-W。

SX 10 (図版第144-(2)・145 第177図) 軸長1.1m・短軸0.7m・深さ0.3mを測る楕円形の土坑内に円筒埴輪1, 朝顔形埴輪の朝顔部分3個体分を用いた埴輪棺を埋納したものである。円筒埴輪の口縁端部には朝顔形埴輪の口縁部を重ね、基部の部分には朝顔形埴輪の頸部をさし込むようにして蓋としている。さらにもう1個体の朝顔部分(頸部および口縁部)を割って円筒埴輪の両側に立て、棺の安定を図っている。また、棺の安定のため数個の河原石も配置されている。副葬品は出土しなかった。N-53°-E。

SX 11 (図版第146-(1) 第178図) 長楕円形の土坑で、長軸3m・短軸0.95m・深さ0.15~0.3mを測る。坑底で長軸に直交する溝が1.8mの間隔をもって検出された。この溝は木棺の木口板部分にあると想定され、遺物は出土しなかったが、木棺直葬の埋葬施設であったと考えられる。N-27°-E。

SX 12 (図版第146-(2) 第179図) 長軸2.2m・短軸約1.1m・深さ0.35mを測る土坑である。隅丸のやや不整形な長方形で、検出面から約15cm下がった所から2段に掘り込まれている。出土遺物はなく時期は不明だが、何らかの埋葬施設と考えられる。N-39°-W。

SX 13 A地区の東端で確認したもので、長さ0.85m・幅0.3m・深さ9cmと小規模



第180図 出土遺物実測図(1)
須恵器1~4・9: SX 09, 5~8: SX 08

な土坑であるが、土坑内面を巻くように灰色粘土が帯状に検出された。この粘土はSX 03・SX 04 で使用されていたものと共通性をもつことから、これも埋葬施設と考えられる。出土遺物はない。N-64°-W。

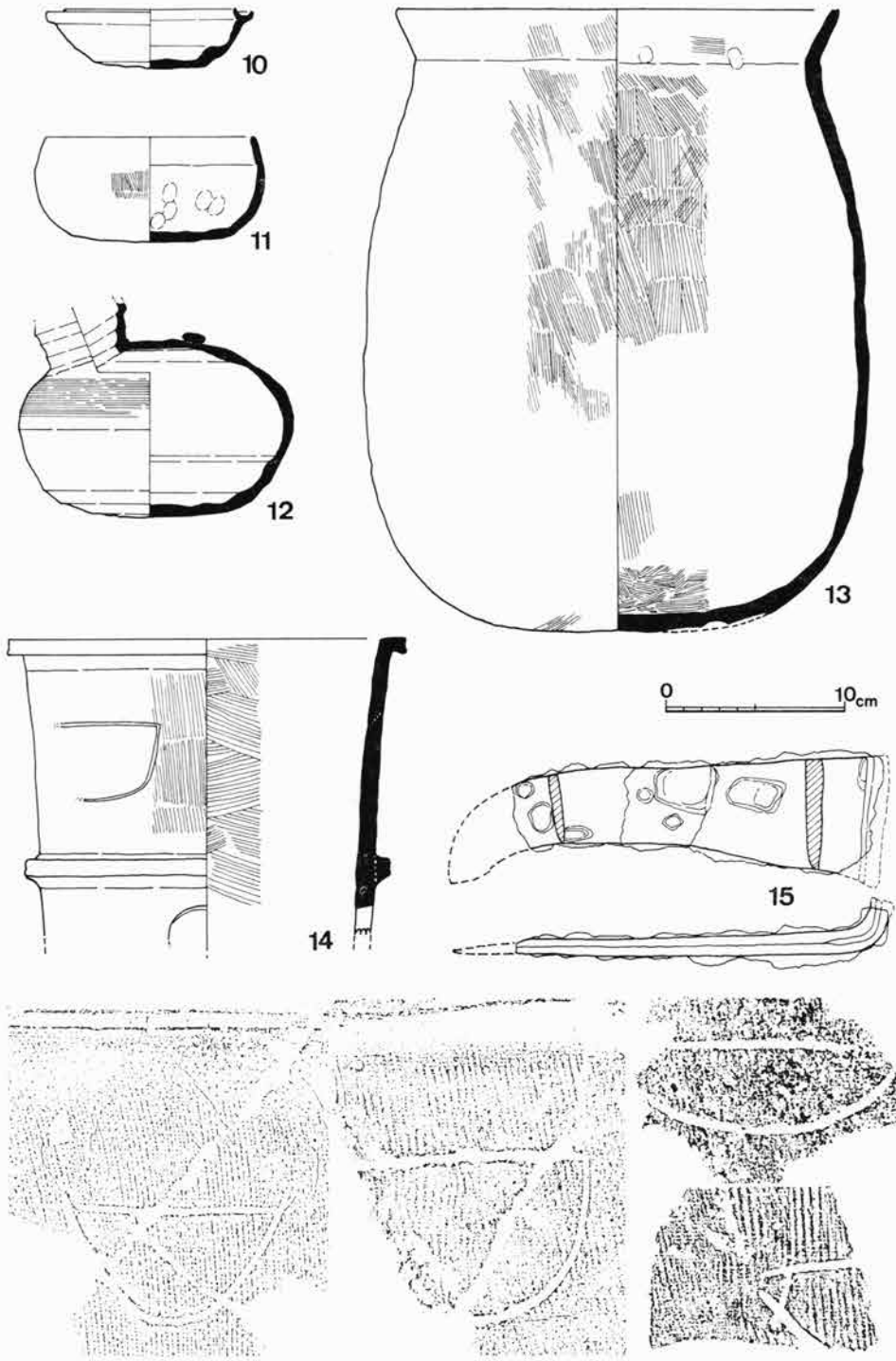
SX 14 SX 09 内部で検出された土坑である。不定形で二つの土坑が重なったようにも観察できるが、埋土等では差異は認められなかった。全体で長軸25m・短軸0.6~0.9m・深さ14~17cmである。中から石鏃が1点(第183図22)出土している。石鏃からすると弥生時代、あるいはそれ以前の時期が考えられるが確定できない。

SK 15 SX 09 の北東側、周溝横で検出した1辺0.7m・深さ16cmの土坑である。方形に近い形で、中に焼土が含まれていた。遺物は出土しなかった。

(2) 出土遺物

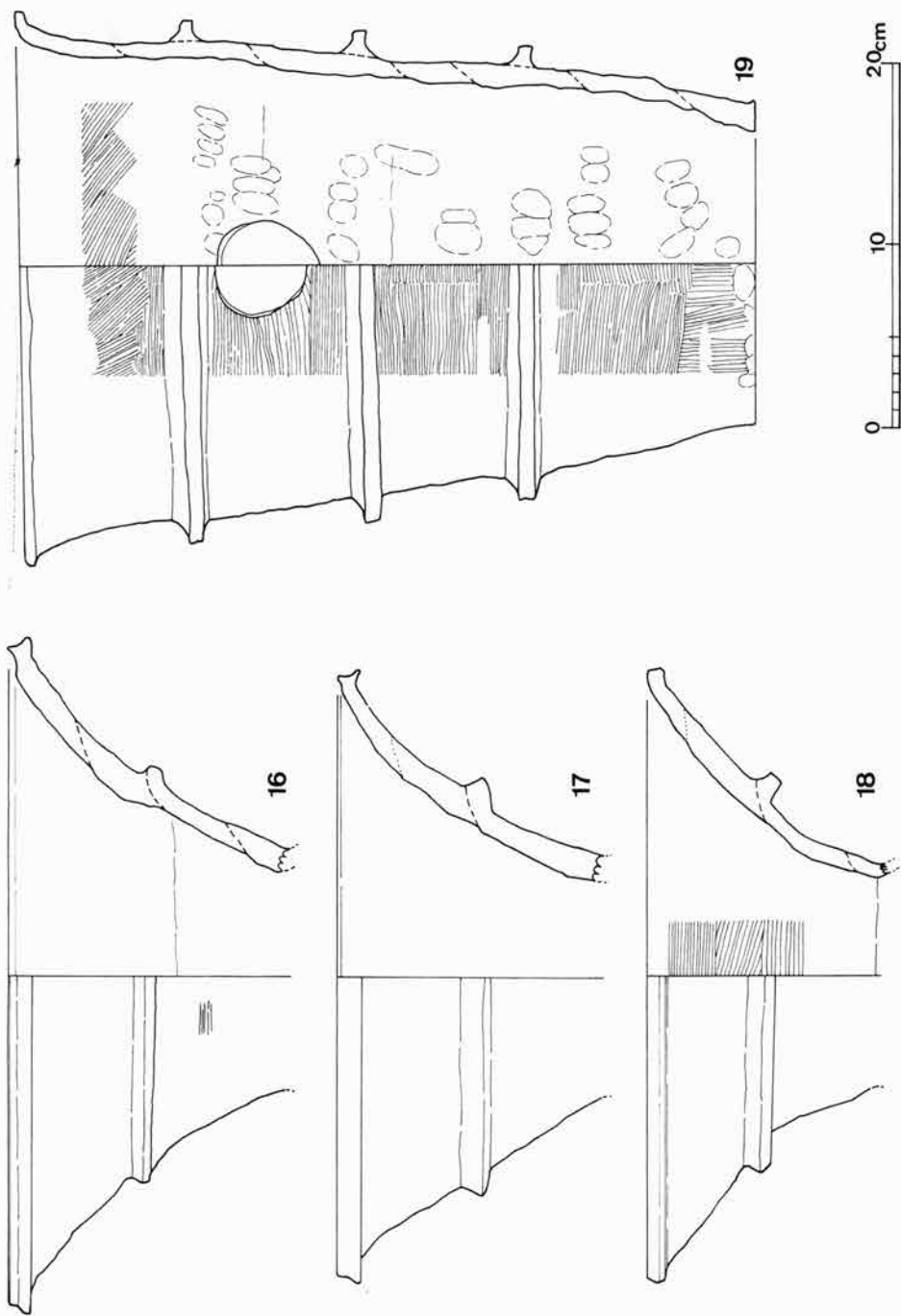
主な出土遺物は、竪穴式住居跡、宮ノ平4・5号墳周溝内から出土したもの、および埴輪棺である。宮ノ平4・5号墳出土の須恵器(番号1~9)については付表5に記載した。

10は SH 06 出土の須恵器蓋杯の身である。口径 9.4 cm・器高 3.1 cm・受部径 11.4 cm を測り、淡青灰色を呈する。たちあがりは矮小化し、受部端の高さに近い。受部は水平の外方へのびたのち、上方へ屈曲する。全体に扁平で浅い。底部は筥の痕跡を残し、なでられていない。焼成はやや不良で軟質である。11は SH 07 出土の土師器椀である。口径 11.4 cm・器高 6 cm、口端からやや下がったところに最大径があり 12.8 cm を測る。口縁部は最大径付近からやや内傾して上方へのび端部は丸い。焼成が不良であることに加え、風化による剝離も進んでいる。全体になでて仕上げられているが、一部で成形後、粘土を貼りつけ補修し刷毛で調整している。内部には指頭圧痕が残る。12は SH 06 出土の須恵器平瓶で体部の一部と口縁部上部を欠損している。器高は体部で 9.8 cm・最大径 15.2 cm・頸部径 4.6 cm である。体部上面はやや扁平で、底部はゆるやかな曲線を描く。体部は丸みをもち、明確な稜線をもたない。口縁部は体部中軸から外して接合され、23°の傾斜をもつ。体部上面に扁平な小粘土粒が1個貼付されている。体部下半が筥削り、上半搔き目、内面はロクロによりなでられている。13は土師器の甕で SH 07 出土。口径 24.7 cm・器高 34.7 cm で、体部下半に最大径(28 cm)をもつ。色調は明黄褐色で、底部外面に黒斑を有する。口縁端部は面をもち、浅い凹線が走る。体部は大部分、縦・斜め方向の刷毛目を残すが、下半一部は刷毛の後、なでている。縦位に約1/2が残っており、意図的に半裁された可能性もある。15は SX 09 周溝内出土の鉄製鎌である。先端と柄着装部の一部が欠損し、残存長 10.3 cm である。先端近くで幅 2 cm、基部付近で 3.2 cm を測る。柄着装部の屈曲はゆるやかで、刃部はていねいに整えられている。14は SX 08 周溝内出土の円筒埴輪である。直角に近い角度で外方

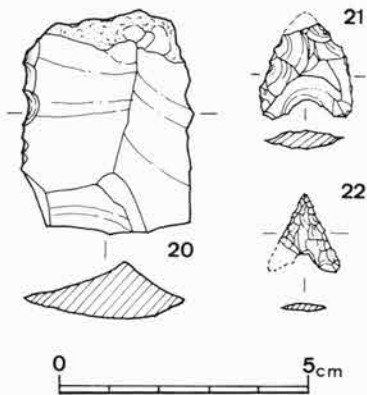


第181図 出土遺物実測図(2)

10・12: 須恵器, 11・13: 土師器, 14: 円筒埴輪, 15: 鎌, 下段: 埴輪線刻拓影(注24)



第182図 出土遺物実測図(3)



第183図 出土遺物実測図(4)

に屈曲する口縁で端部はやや凹んだ面をもつ。外面はタテ刷毛で内面は角度の浅い斜め方向の刷毛目が残る、口縁端部および、突帯付近はなでられる。最上段突帯の下段の胴部に円形の透孔が入る。また口縁部外面に半月状の線刻が施されている。第181図下段に示したように、線刻は半月状のものと、それが狭くなったレンズ状のものがある。16~19は埴輪棺(第177図)の一括資料である。16~18は蓋および支えに用いられていた朝顔形埴輪である。3点とも同様の手法によって製作されている。16は褐色を呈し、口径 37.4 cm・頸部径

14 cm・残存高 15.2 cm である。内外面ともに、ていねいにヨコなで調整されているが、一部に刷毛の痕跡がかるうじて残っている。頸部から口縁にかけて約 27° の角度で外傾して立ちあがり、突帯上部でさらに角度を広げ約 50° で外上方に開く。口縁端部は凹状になった面をもつこの場合の突帯は、粘土帯端部をひねり出して突帯とし、さらに粘土帯を重ねたものである。口縁の一部に黒斑を有している。19は埴輪棺の本体となったもので、口径 30.7 cm・底径 17.6 cm・器高 45 cm を測る。基底部は上下幅 12.6 cm で下部にタテ刷毛が施され、その後、上部にヨコ刷毛が施される。基底端部には指頭圧痕が残る。胴部第1段・第2段および口縁部の幅は 9.5 cm 前後で1段・2段はヨコ刷毛で調整されている。口縁部は下部にヨコ刷毛が残り、上部は左上りの刷毛が施される。口縁端部と突帯付近はヨコなで調整される。内面には指頭圧痕が多く残り、口縁部には左上りの刷毛が一周する。突帯は高く、断面台形である。なお、基底部に黒斑がある。

21・22は石鏝で、21は SX 08 周溝内から、22は SX 14 から出土した。ともにサヌカイト製であるが、22のていねいな調整に比べ21は粗雑ともいえる剥離である。21は先端を欠損し、残存長 1.8 cm、22は 1.6 cm である。

4. おわりに

以上、宮ノ平遺跡について述べてきたが、調査を通しての事実・問題点等を列挙して結語としたい。

ここで検出した2基の方墳を宮ノ平1~3号墳と連結する丘陵上に立地し、形状・築造時期も大きい差異がないという観点から、4・5号墳とし、宮ノ平古墳群の範疇に入れた。宮ノ平4・5号墳とも主体部は失われており、その内容を十分に把握することはできなかった

が、1号墳以下、古墳群としての変遷、あるいは性格を考える上で欠かせない資料である。それに加え、両墳の周溝から出土した古式の須恵器は、久津川古墳群で現在までに確認されている須恵器の中では最も古い一群^(注20)に入り、古墳の築造時期、あるいは、この地域への須恵器が導入される時期などを考える上での好資料である。また、山城地方でも向日市山開古墳周濠内出土須恵器^(注21)に後続する時期のものとして、例の少ないものである。

宮ノ平5号墳は、その規模から見て、近年、芝山遺跡^(注22)・正道遺跡^(注23)などで発見されている方形周溝墓との関連で考えなければならない側面を残す。方形周溝墓が久津川古墳群の地域において、現在までに確認されている例は少ないが、芝山では古式の須恵器を伴出し、正道でも布留式土器並行期とされるなど時期的には5号墳と相前後している。現在までの資料では、このような形態の墓が、前後の脈絡なく丘陵部に登場するが、前代から継承するものが他の場所にあったのか、古墳と関連して存在するものなのか等、平川古墳群の縮小期であることもふくめて考えなければならない。

検出できた2基の堅穴式住居跡は、この地域で比較的多く発見されている古墳時代後期の6世紀末から7世紀にかけての住居跡資料に、さらに一例を加えることができた。このことから、城陽市ではほぼ同時期の集落が、南から森山・芝山・宮ノ平・正道・芝ヶ原と連続し、規模の大小はあるもののある程度平坦な丘陵部分の大半に住居が営まれたことになった。これらの集落跡には、森山遺跡を除いて、それ以前の住居跡が存在せず、人々がこの時期、短期間のうちに一斉に丘陵上に集落を営み始めたともいえる状況を呈している。

埴輪棺も時期に幅はあるが、西山1号墳・金比羅山古墳・赤塚古墳などで発見されており、久津川古墳群における事例に資料を加えたものである。ここで使用されている埴輪は黒斑を有する等、宮ノ平古墳群での他の出土事例と相違する要素も含んでいる。

今回の調査成果は多岐にわたり、各資料に対する検討も未消化の部分を多く残している。今後、周辺資料の増加を待つとともに、再検討等の作業を通してこの地域の古墳時代の様相がより明確にされることを期待したい。(長谷川 達)

- 注1 高橋美久二・平良泰久ほか「宮ノ平古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』京都府教育委員会) 1974
- 注2 近藤義行・長谷川 達「宮ノ平古墳発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集 城陽市教育委員会) 1981
- 注3 (調査補助員・整理員氏名) 安達佳明・奥田秀明・片山哲至・勝部一夫・小出正憲・佐藤久美子・清水 隆・末澤幸一・団村 香・吐院邦江・久内禮子・東江津子・宮本 満
- 注4 堤 圭三郎「西山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1964)』京都府教育委員会) 1964

- 注5 岡本一士ほか「上大谷古墳群の調査」(『考古学研究室調査報告』第1冊(財)元興寺仏教民俗資料研究所)
- 注6 近藤義行・奥村清一郎ほか「下大谷古墳群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集 城陽市教育委員会) 1974
- 注7 堤 圭三郎「芝ヶ原古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967
- 注8 堤 圭三郎「尼塚古墳発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会) 1969
- 注9 平良泰行・近藤義行ほか「南山城の前方後円墳」(『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告』I 龍谷大学文学部考古学資料室) 1972
- 注10 山田良三「宇治一本松古墳発掘調査概報」(『古代学研究』42・43合冊号) 1973
- 注11 岡本一士・新納 泉ほか「上大谷古墳群の調査」(財)元興寺文化財研究所 1979
- 注12 梅原末治「久津川古墳研究」1920
近藤義行「久津川古墳群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第5集 城陽市教育委員会) 1977
- 注13 堤 圭三郎「坊主山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』京都府教育委員会) 1965
- 注14 堤 圭三郎「冨山古墳発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967
- 注15 堤 圭三郎「長池古墳発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』京都府教育委員会) 1965
- 注16 近藤義行「恵美塚古墳発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財発掘調査報告書』第6集 城陽市教育委員会) 1977
- 注17 近藤義行「森山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第6集 城陽市教育委員会) 1977
- 注18 山田良三・石部正志「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」(『古代学研究』34) 1963
- 注19 この地域に北から、広野廃寺・平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺の存在が知られている。
- 注20 近藤義行・奥村清一郎「平川廃寺発掘調査概報(赤塚古墳)」(『城陽市埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 城陽市教育委員会) 1974
- 注21 平良泰久「長岡宮跡昭和50年度発掘調査概要(山開古墳)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会) 1976
- 注22 近藤義行「芝山遺跡発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会) 1979
- 注23 近藤義行・鷹野一太郎「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財発掘調査報告書』第9集 城陽市教育委員会) 1980
- 注24 15鎌と埴輪拓影は縮尺 $\frac{1}{2}$

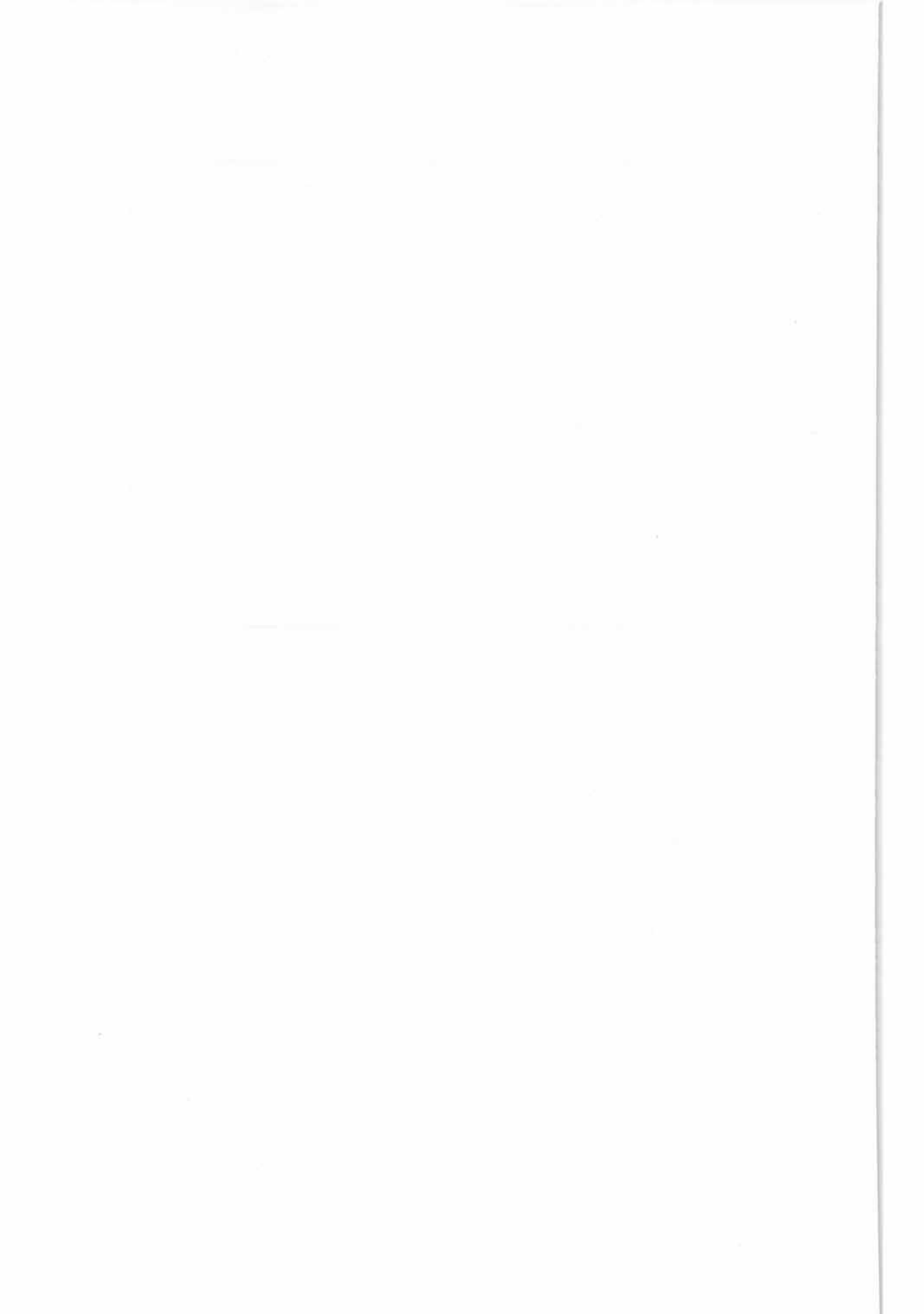
付表4 昭和55年度試掘調査検出遺構一覧表

遺構番号	種 類	規 模 (m)			方 向	時 代	出 土 遺 物	備 考
		長軸	短軸	深さ				
SX 01	土 壇 墓	2.65	1.3	0.2	N-26°-W	奈良~平安	須恵器(杯蓋・身)	
SX 02	木 棺 墓	2.1	0.75	0.2	N-10°-W	平 安	土師器(小皿)漆皮膜・釘	
SX 03	箱式木棺墓	2.9	0.85 ~1		N-80°-E	古 墳	刀子・白玉	粘土使用
SX 04	割竹型木棺墓	2.8	0.75	0.25	N-84°-E	古 墳	無遺物	粘土使用
SE 05	井 戸	1.2	0.9	1.6	—	不 明	土師器・炭粒	

付表5 宮ノ平4・5号墳周溝内出土須恵器観察表

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	蓋杯 (蓋)	口径 12.8 器高 4.8	口縁部は外方に下り、端部は内傾する凹面を成す。稜は鋭く、天井部は高く、丸い。	マキアゲ、ミズヒキ成形。天井部外面の大半は回転篋削り、他は回転などで調整。	暗青灰色。焼成良好。ろくろ回転右方向。完形品。
2	蓋杯 (身)	口径 11.2 器高 4.8 受部径 12.9 たちあがり高 1.9	たち上りは内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面を成す。受部は外上方にのび、端部は丸い。底体部はやや深く丸い。	マキアゲ・ミズヒキ成形。底体部外面2/3は回転篋削り、他は回転などで調整。	暗青灰色。ろくろ回転右方向。完形品。
3	甕	口径 9.2 器高 10.8 頸部径 4.4 体部最大径 12.2	口頸部は、上外方にのび、外面中位に1条の凹線をめぐらす。凹線上方に2条の波状文。端部は内傾する浅い凹面を成す。体部は最大径が2/3上位の扁球形で、最大径上方に1条の波状文施文し、丸底。波状文上に径1.3cmの円孔。	マキアゲ、ミズヒキ成形。口縁部波状文中央部はヨコなでにて消失。体部外面波状文の上下端は掻き目にて消失。底体部は回転篋削りの後、などで。他は回転などで調整。	肩部以上は淡褐色。肩部以下は青灰色。焼成やや不良。口縁部は部分的に焼成が悪い。完形品。
4	壺	口径 10.7 器高 15.6 頸部径 6.7 体部最大径 16.7	口頸部は外反して上外方にのび、4/5位に凸線をめぐらした後にやや内彎し、2/5位の凹線から更に上外方へのびる。凸線間に1条(5本)の波状文。端部はやや尖頭状で、体部は最大径が2/3上位となる扁球形で丸底。体部最大径上下に各1条の浅い凹線をめぐらし、間に刺突文帯を施す。	マキアゲ・ミズヒキ成形。体部外面は回転掻き目調整。体部下方および、底部外面は掻き目、その他は回転などで調整。	肩部以上は淡青灰色。肩部以下は暗灰色。胎土に0.1mmの白色砂粒を含む。完形品。
5	無蓋 高杯	口径 13.6 器高 9.5 たちあがり高 2.1 脚底径 8.9 脚高 4.9	体部の口縁部は内彎気味に上外方にのび、端部は丸い。体部外面に1条の凸線をめぐらす。脚部の基部は太く、下外方に下った後、裾部で外方にやや開き、端部は内傾する浅い凹面を成す。1/3以下にめぐらす2条の凸線上方に3方の楕円孔スカシを施す。	マキアゲ・ミズヒキ成形。底・体部外面4/5は回転篋削り調整。他は回転などで調整。脚部内外面ともになで調整。	暗青灰色。ろくろ回転左方向。残存率約80%。
6	有蓋 高杯	口径 10.8 器高 9.3 たちあがり高 2.3 受部径 12.9 脚底部高 4.5 脚台径 9.2 底体部高 2.7	体部たちあがり内傾してのびた後、ほぼ直立してさらにのび、端部は丸い。受部は外上方にややのびた後、水平となり、端部は丸くおさまる。脚部は下外方に下った後、裾部ではほぼ水平に開く。端部は上方に1条の凸線をめぐらし外傾する面を持つ。凸線上方に上下長1.5、幅0.2cmの刺突孔を3か所に施す。	マキアゲ・ミズヒキ成形。底体部外面2/3、回転篋削り調整。他は回転などで調整。脚部は回転などで調整。	暗青灰色。ろくろ回転左方向。残存率約80%。胎土は緻密で0.1mm前後の白色粒を若干含む。焼成良好。

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	高杯 (脚部)	残存高 5 基部径 4.3 脚部径 9.6	脚部は下外方に下った後、裾部で水平にやや開き、端部はほぼ垂直な平面状を成す。3/1以下に1条の凸線をめぐらし、その上方に3方、円孔すかしを施す。	マキアゲ・ミズヒキ成形。回転などで調整。	淡青灰色。残存率50%。焼成良好。胎土緻密。
8	碗	口径 10.2 器高 6.2	体部から口縁部にかけて、内彎しながら上方にのびた後、やや外反し、端部は丸い。底部は丸く深い。1/2・1/3位に各1条の凸線をめぐらし、その間に1条(6本)の波状文を施す。	マキアゲ・ミズヒキ成形。底部外面は匏削りの後、などで調整。他は回転などで調整。	暗灰色。残存率40%。焼成良好。胎土密。
9	甕	口径 26.2	口頸部は、やや外彎きみに上外方にのびた後、短く上方へ開き、下方に一条の凸線をめぐらす。端部は下方に肥厚し、ほぼ垂直な平面をなす。凸線下に2条(8~11本)の波状文を施す。体部は2/1位に最大径を持つ球形で、底部は丸い。	マキアゲ・ミズヒキ成形。体部外面は1cmあたり4条の縦方向の叩き。底部外面は叩いた後、などで調整、体部内面は叩き痕をなどで消している。	暗灰褐色。焼成は一部不良な部分がある。肩部に自然釉。完形品。



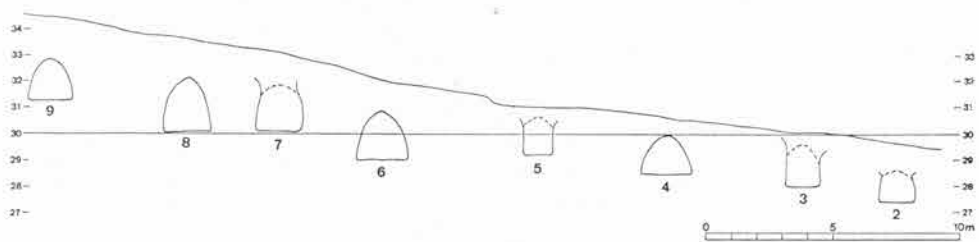
圖

版

図版第1 狐谷横穴群



(1) 狐谷横穴群全景 (航空写真)



(2) 横穴群全景(南から)および横穴垂直分布図

図版第2 狐谷横穴群



(1) 調査地遠景 (南東から)



(2) 調査地遠景 (東から)

図版第3 狐谷横穴群



(1) 狐谷1号横穴 (南から)



(2) 狐谷11号横穴 (南から)

図版第4 狐谷横穴群



(1) 調査前風景 (南から)



(2) 調査前風景 (南から)



(1) 横穴群検出状況(南から)



(2) 7号～9号横穴検出状況(南から)

図版第6 狐谷横穴群

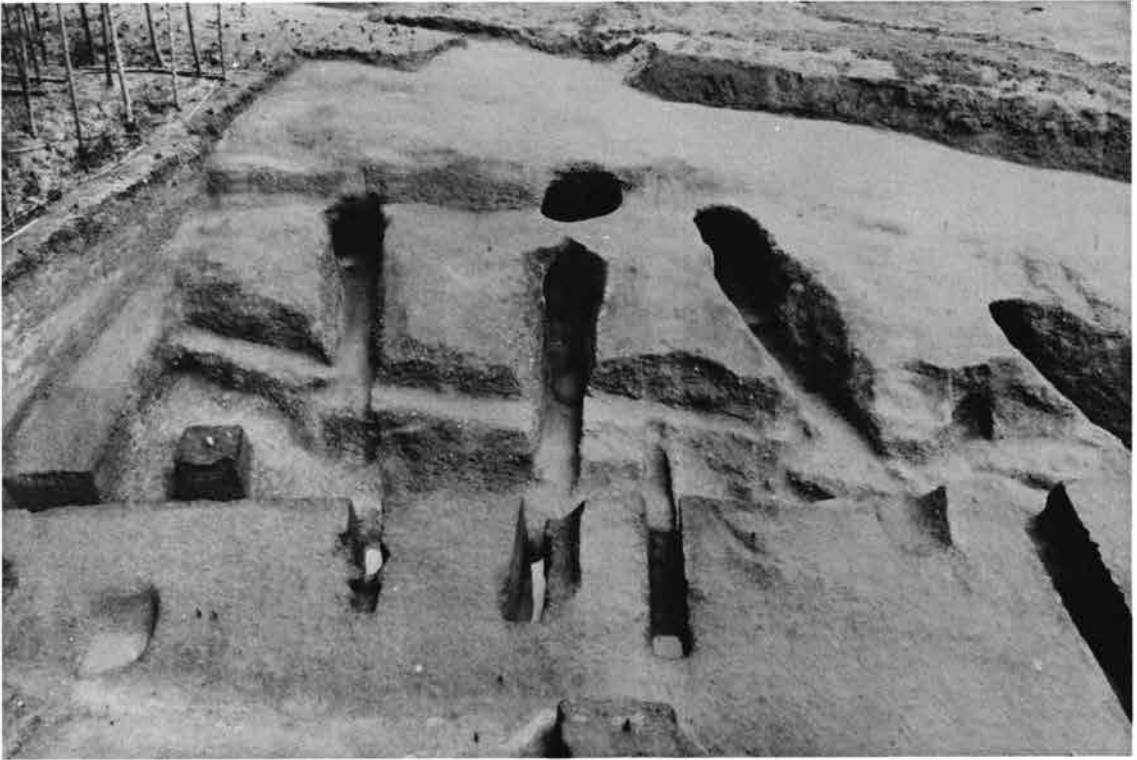


(1) 2号・3号横穴 (南東から)



(2) 4号・5号・6号横穴 (南東から)

図版第7 狐谷横穴群



(1) 7号・8号・9号横穴（南から）



(2) 横穴群調査後風景（西から）



(1) 2号横穴近景 (南東から)

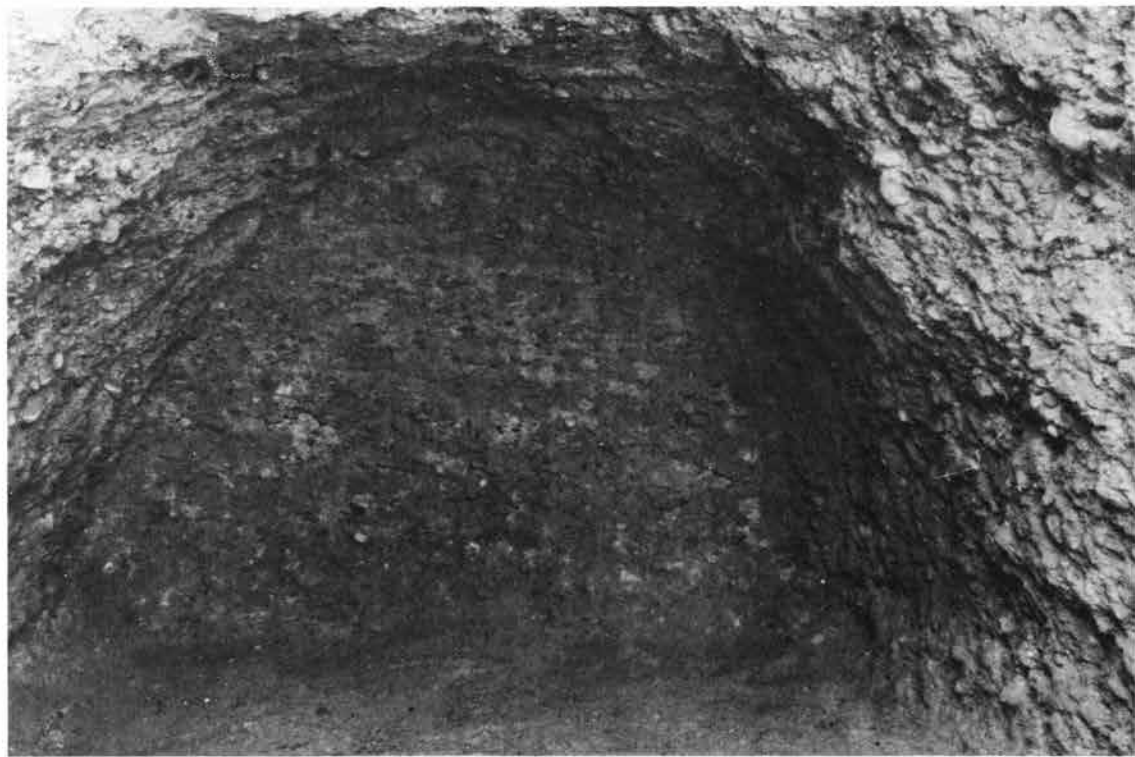


(2) 2号横穴玄室 (南東から)

図版第9 狐谷横穴群



(1) 4号横穴全景 (南東から)



(2) 4号横穴玄室内部 (南東から)



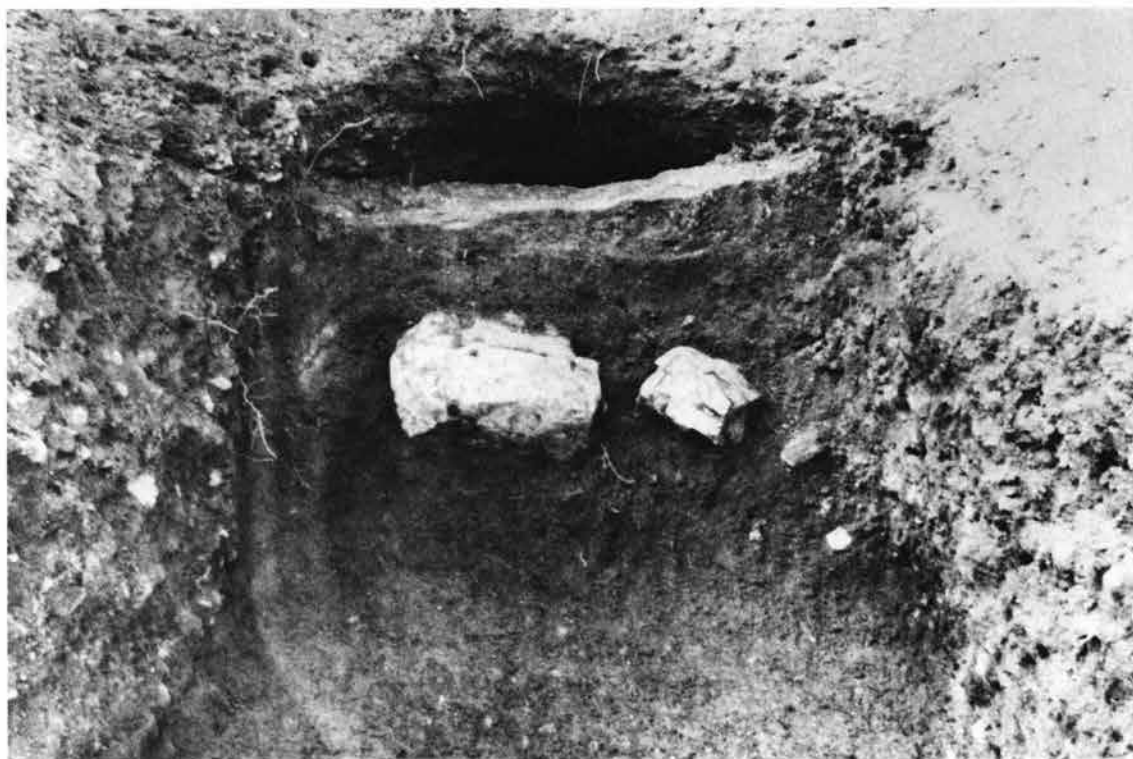
(1) 4号横穴遺物出土状況(南から)



(2) 4号横穴女室遺物出土状況(南東から)



(1) 4号横穴墓道埋土中出土須恵器甕 (南西から)

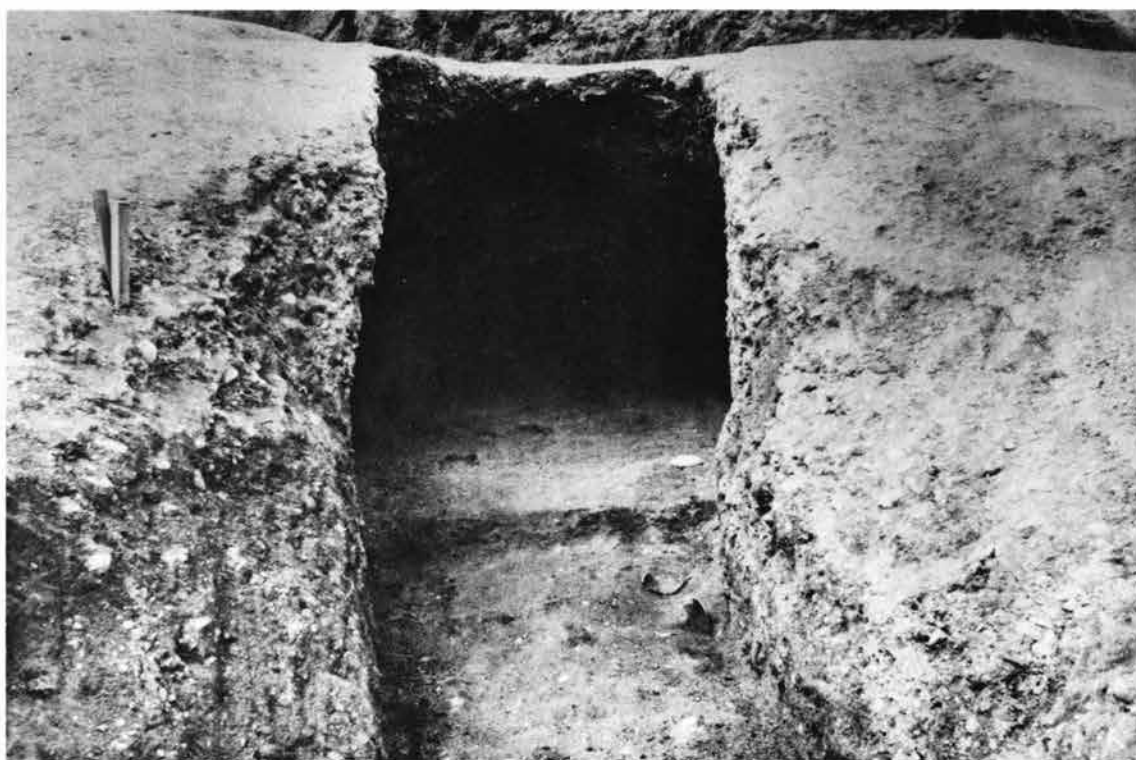


(2) 4号横穴玄門埋土堆積状況 (南西から)

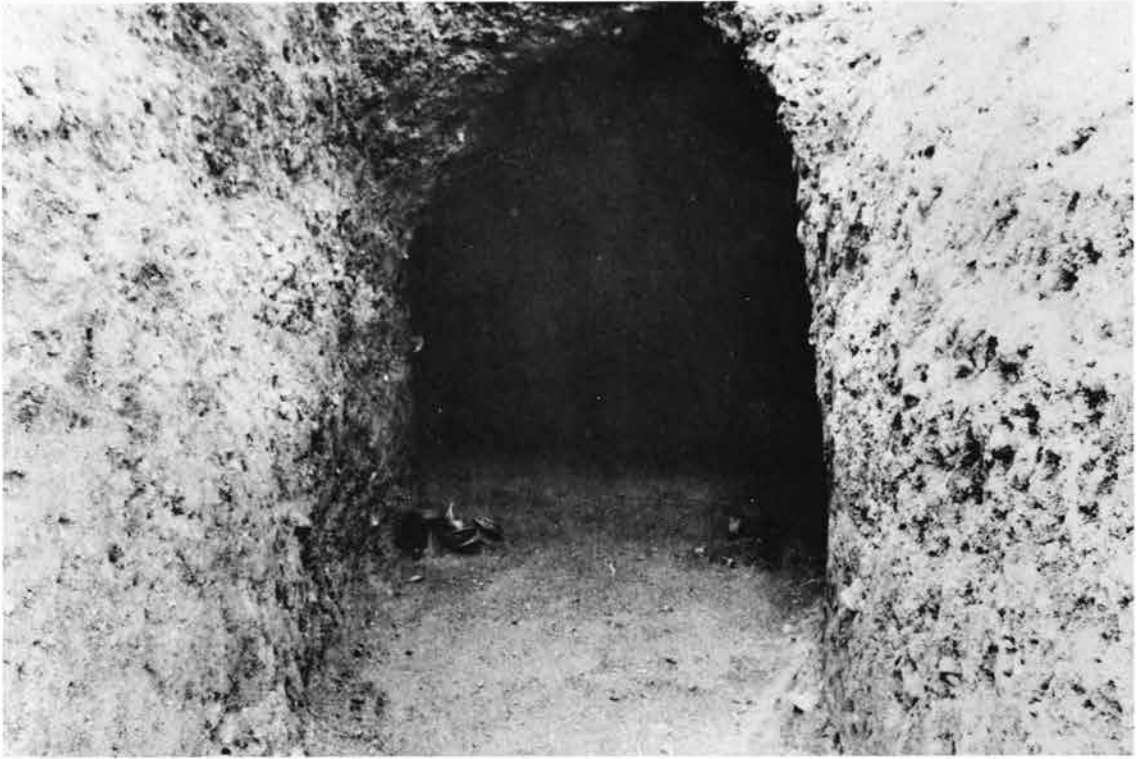
図版第12 狐谷横穴群



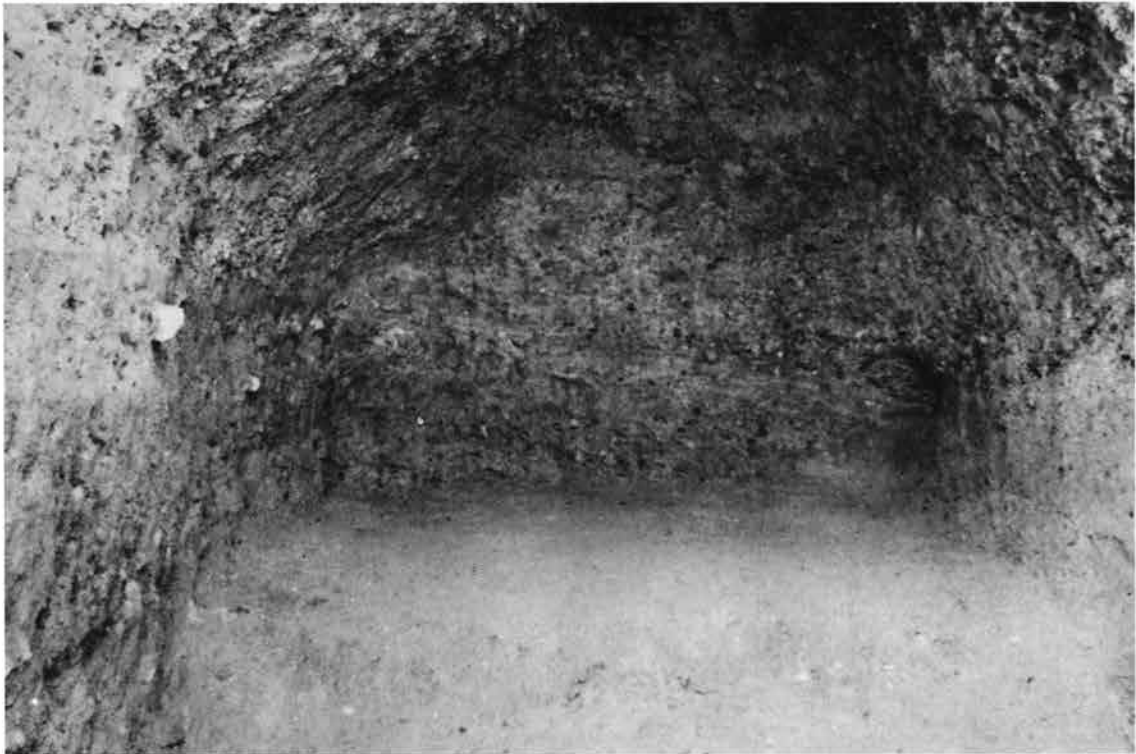
(1) 5号横穴全景 (南東から)



(2) 5号横穴玄室 (南東から)



(1) 6号横穴玄室（南東から）



(2) 6号横穴玄室内部（南東から）

図版第14 狐谷横穴群



(1) 7号横穴玄室 (南東から)



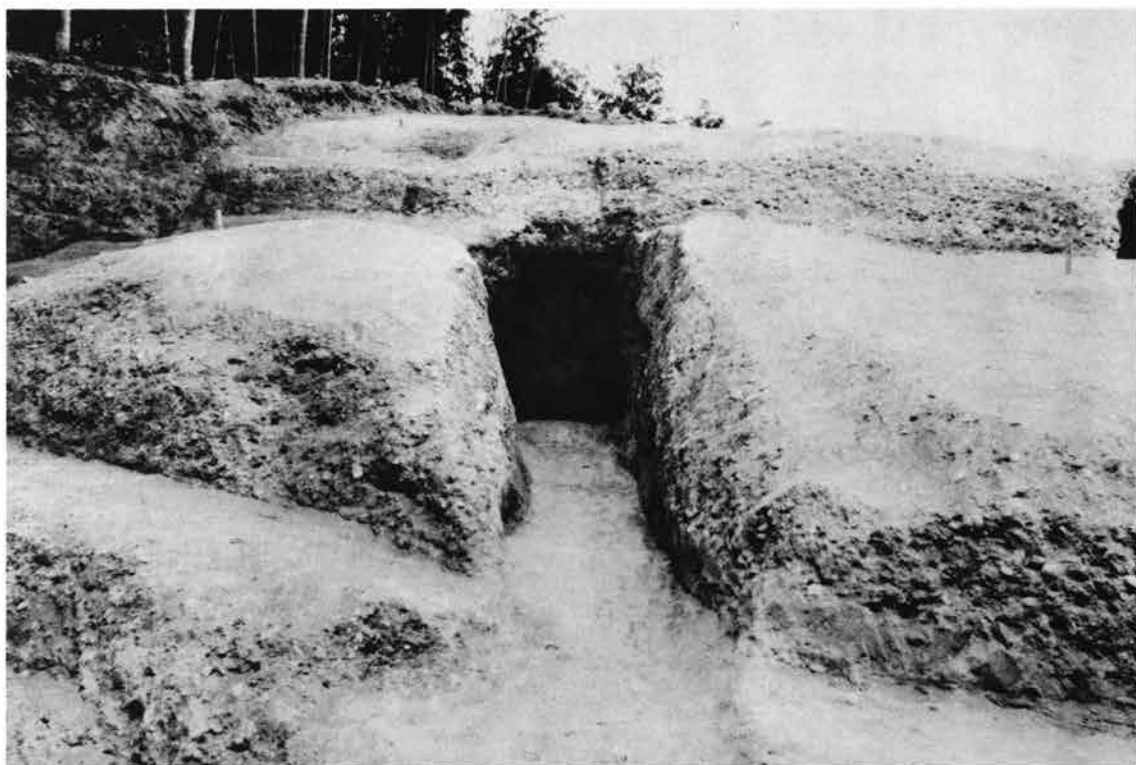
(2) 7号横穴玄室埋土堆積状況 (南東から)



(1) 8号横穴近景 (南から)



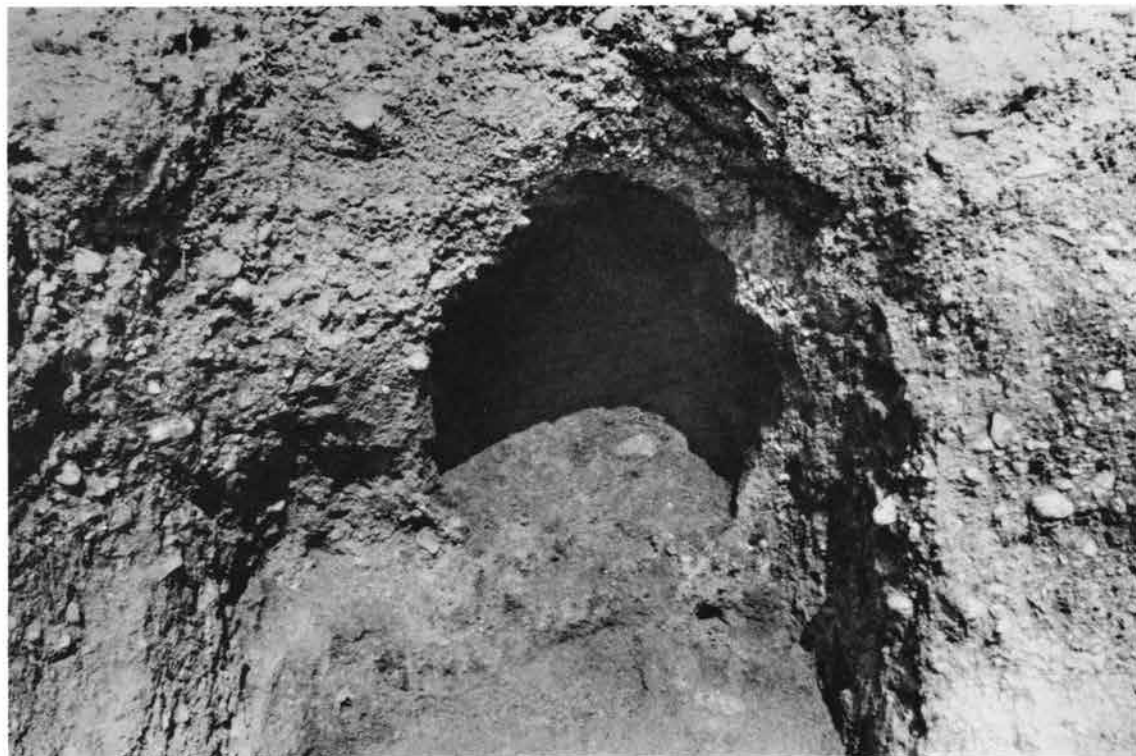
(2) 8号横穴遺物出土状況 (南から)



(1) 9号横穴近景 (南から)



(2) 9号横穴玄室内部 (南東から)



(1) 小横穴全景（南東から）



(2) 横穴群発掘作業風景（南西から）



(1) 橫穴群保存作業風景



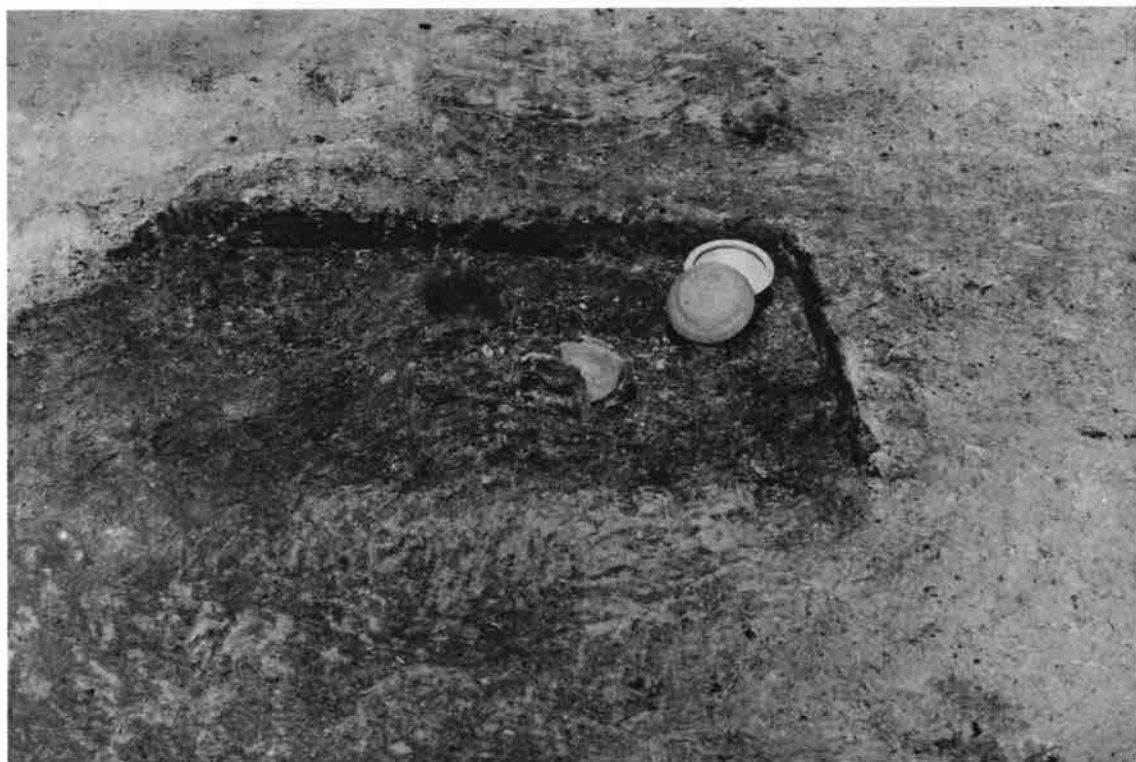
(2) 橫穴群保存作業風景



(1) 横穴群保存作業風景



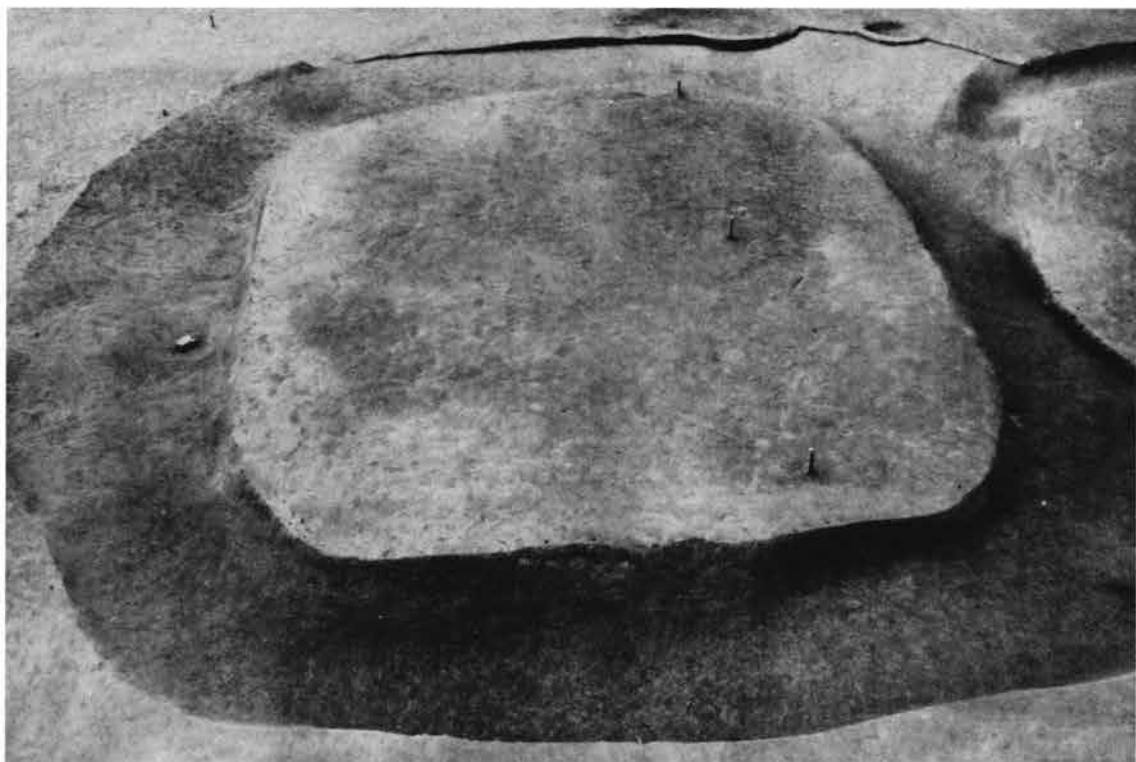
(2) 横穴群保存作業風景



(1) 炭充填土坑完掘状況(南から)



(2) 炭充填土坑遺物出土状況(東から)



(1) 方形周溝遺構全景（東から）



(2) 方形周溝遺構全景（北西から）

図版第22 狐谷横穴群



(1) A地区全景（北西から）



(2) B・C・D地区全景（北西から）

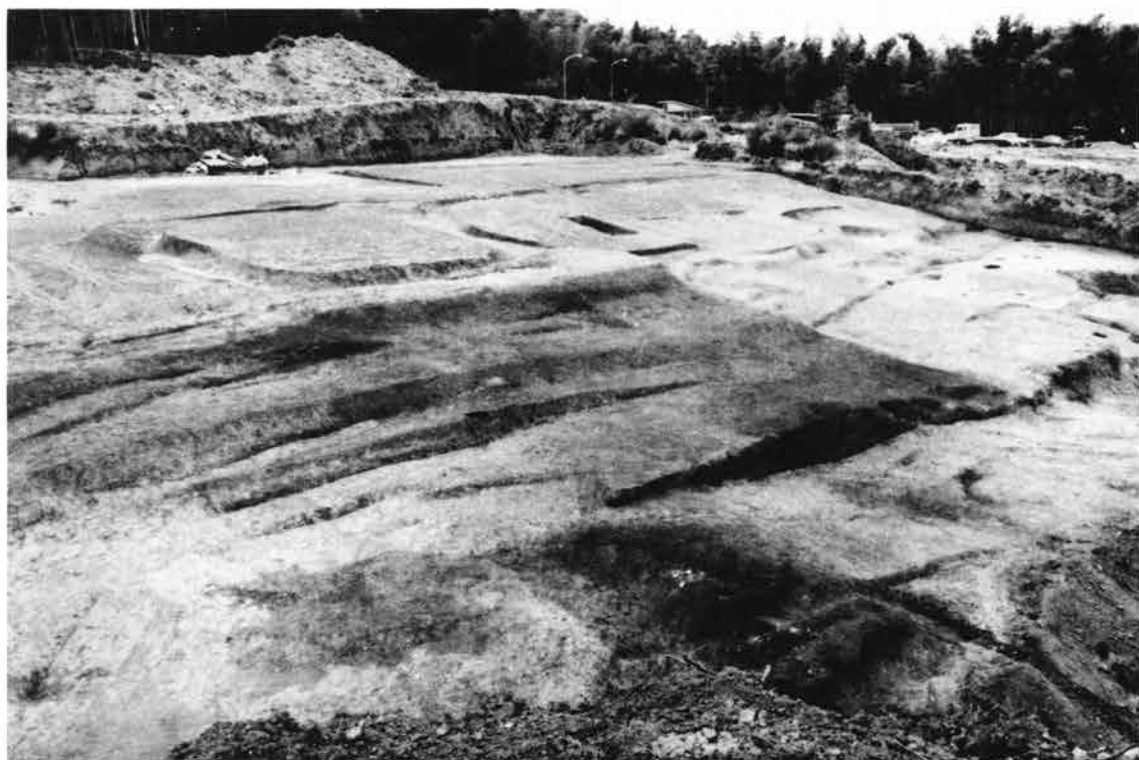


(1) SK01全景 (南東から)



(2) SK02全景 (南東から)

図版第24 狐谷横穴群



(1) B地区全景 (南東から)



(2) SD02全景 (南から)



(1) SD02円筒埴輪出土状況（東から）



(2) SD03全景（北から）



(1) SD04全景 (北から)



(2) SK03完掘状況 (北東から)



(1) SK04遺物出土状況(西から)



(2) SK05全景(北から)



(1) 建物2全景（北から）



(2) SD06全景（東から）















4-7



4-8



4-9



4-10



4-11



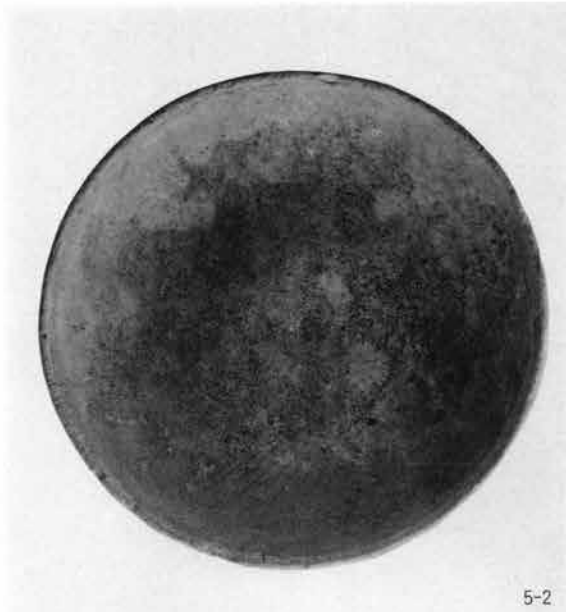
4-19

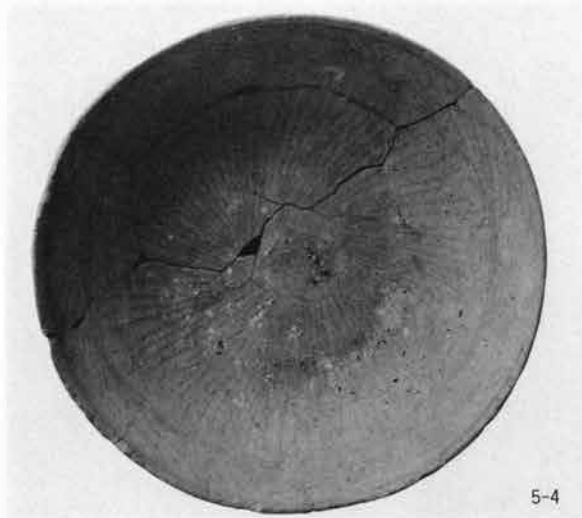


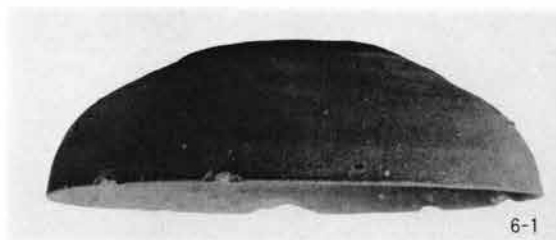
4-12



4-20







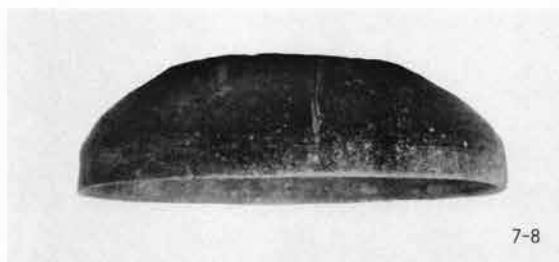




7-6



7-7



7-8



7-9



7-10



7-11



7-12



7-13



8-1



8-2



8-3



8-4



7-12



8-5



8-7



8-6



8-9



S-1



S-2



S-3



2-18



3-14



4-23



3-15



4-22



4-24



4-23



3-4



5-15



5-14



5-13



5-16



6-10



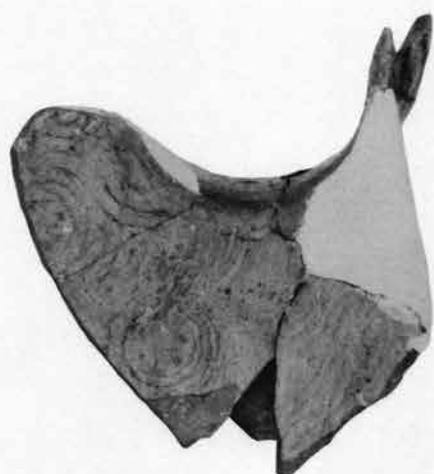
7-18



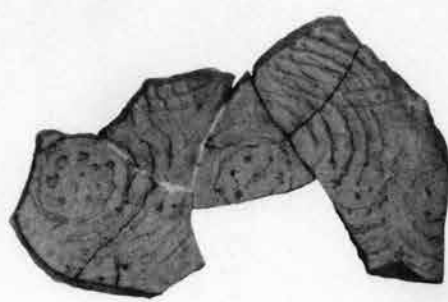
7-19



7-15



7-15



車輪文叩き目

7-15



7-16





(1) C区出土円筒埴輪

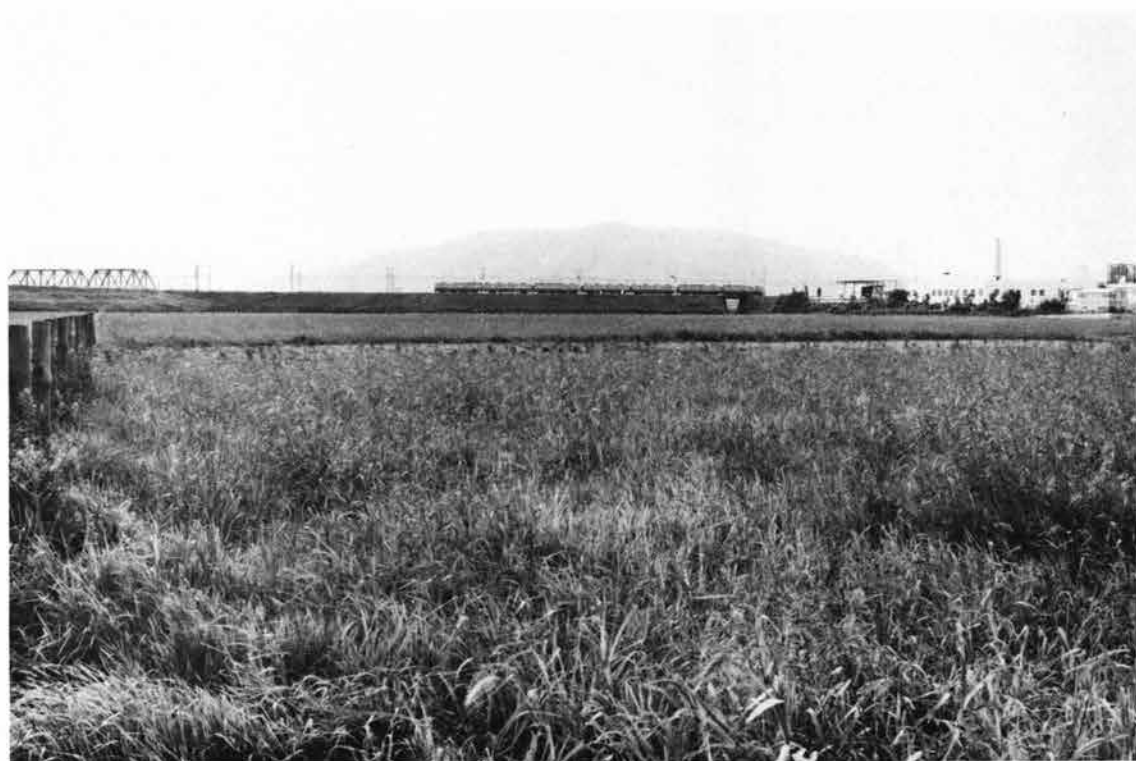


(2) C区出土円筒埴輪

図版第47 木津川河床遺跡



(1) 調査地遠景 (南西から)



(2) 調査地近景 (東から)



(2) Cトレンチ



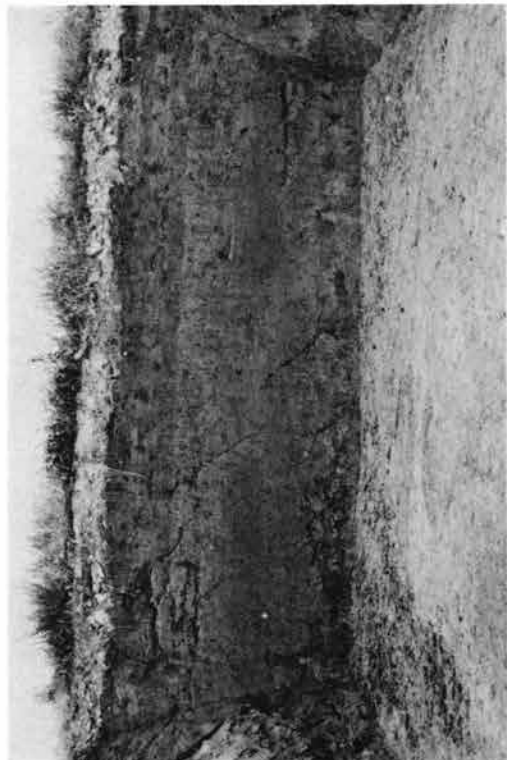
(4) Eトレンチ



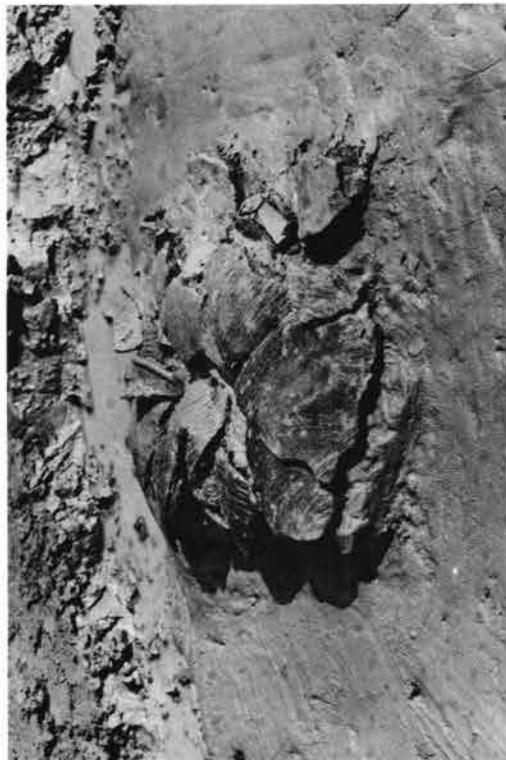
(1) Aトレンチ



(3) Dトレンチ



(2) Eトレンチ南壁断面



(4) 遺物出土状況 (Fトレンチ)



(1) Aトレンチ東壁断面



(3) Eトレンチ西壁断面



出土遺物(1)



出土遺物(2)

図版第52 深 草 遺 跡



(1) 調査地周辺 (南西から)



(2) 調査地近景 (西から)



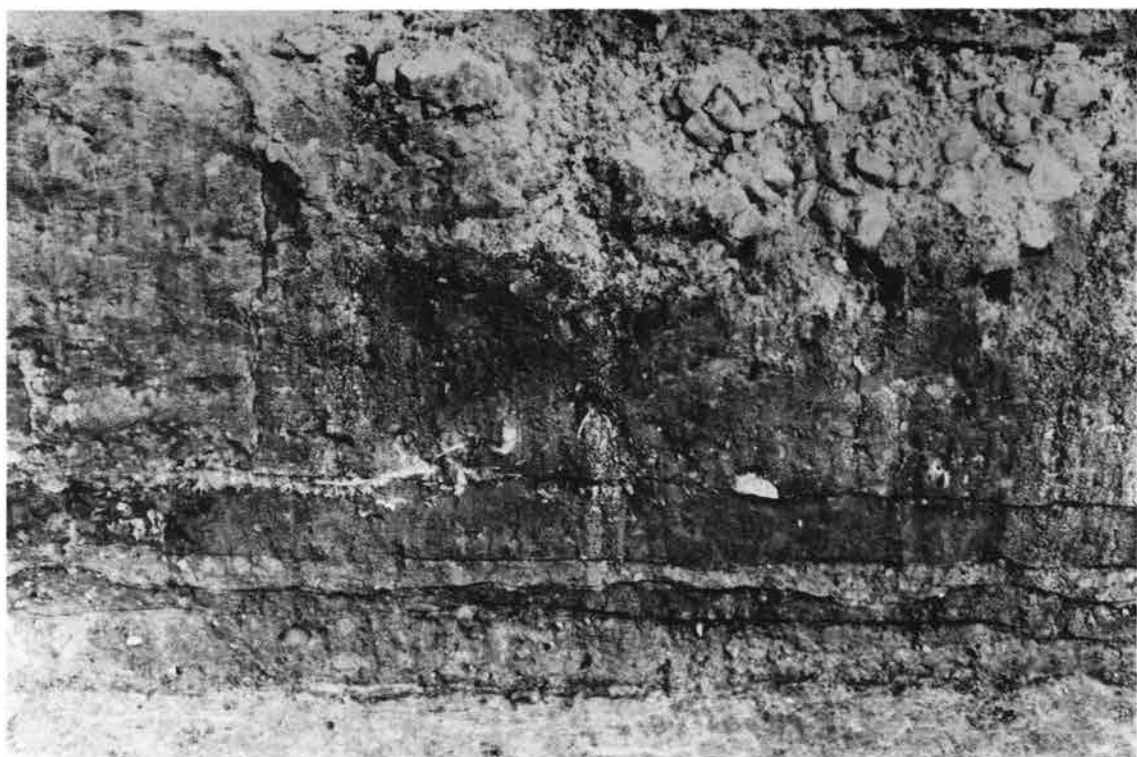
(1) トレンチ掘削後全景



(2) Aトレンチ掘削状況(南から)



(1) B1トレンチ掘削状況（北から）



(2) B1トレンチ東壁土層断面



(1) B2トレンチ掘り込み(池)掘削状況(東から)



(2) B2トレンチ南壁(掘り込み内)土層断面



(1) 第1トレンチ全景



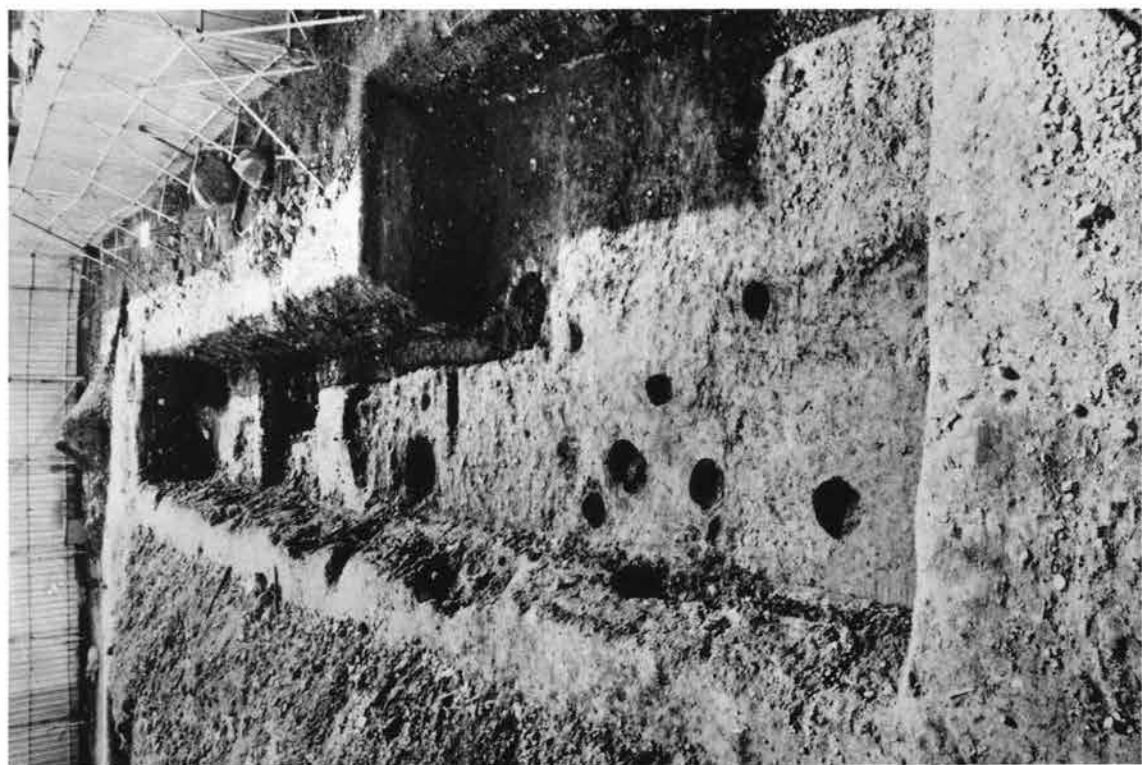
(2) 第2～第5トレンチ遠景



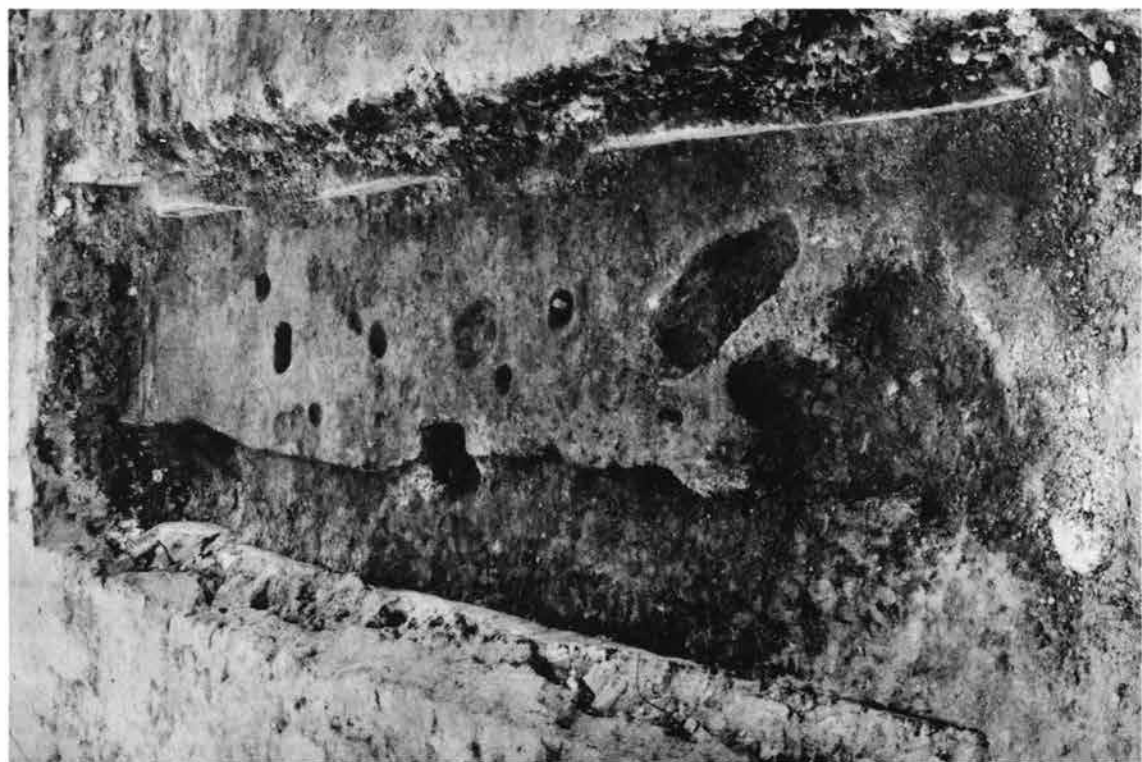
(1) 墓壇内石材投棄状況



(2) 墓壇検出状況



(2) Fトレンチ全景(北から)



(1) Gトレンチ全景(東から)



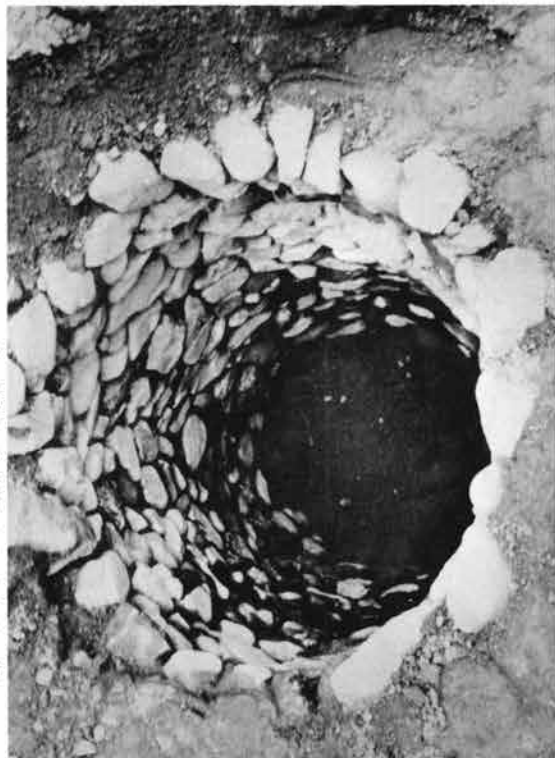
(1) Hトレンチ全景(北から)



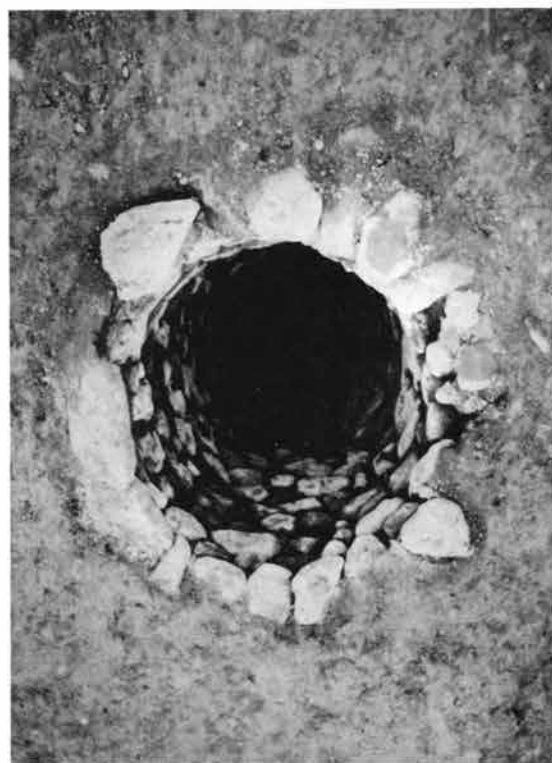
(2) Iトレンチ全景(東から)



(2) FトレンチSE3 (北から)



(4) IトレンチSE6 (北から)



(1) HトレンチSE5 (北から)



(3) IトレンチSK4 遺物出土状況

図版第61 法成寺跡



1.2.3.4 (Iトレンチ9層[1/4])
 5 (第11図、16[1/3])
 6 (第13図、2.3[1/4])

7 (第11図、14[1/4])
 8 (第11図、15[1/3])
 9 (Fトレンチ、9層[1/3])

10 (第12図、2[1/4])
 11 (第12図、3[1/3])
 12~16 (第12図、4~8[1/4])



(1) A地点全景（調査前 北西から）



(2) B地点全景（調査前 南から）



(1) A地点全景(北から)



(2) A地点 溝内瓦出土状況



(1) B地点全景 (南から)



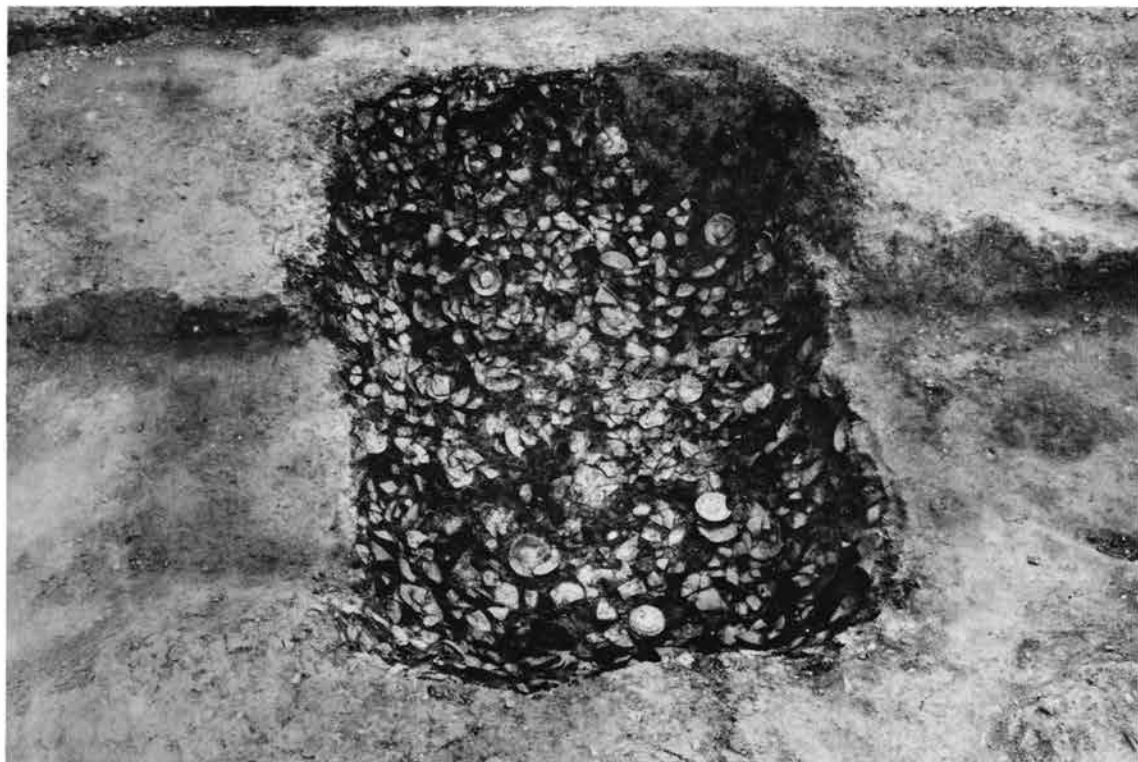
(2) B地点 土壇検出状況



(1) 井戸 (SE10) 検出状況



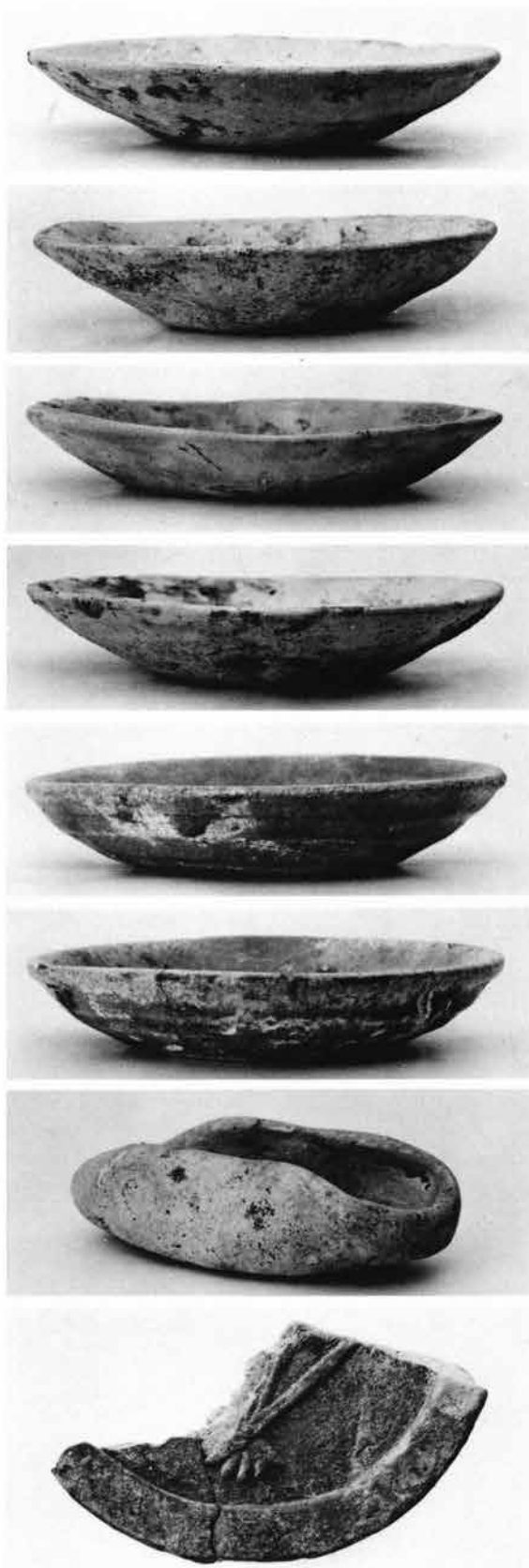
(2) 土壇 (SK13) 土層断面



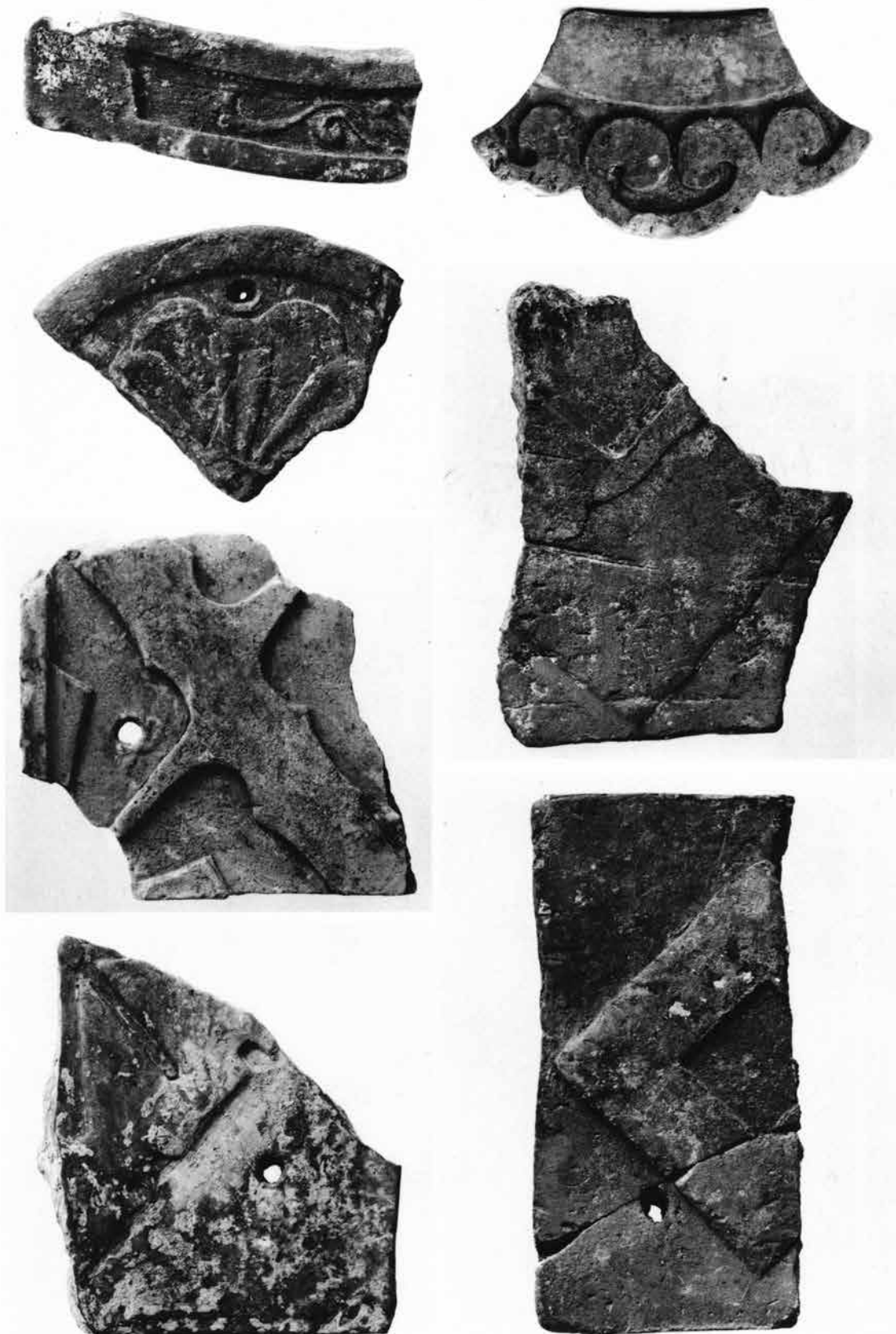
(1) 土壇 (SK08) 内遺物出土状況



(2) 同上 (部分拡大)



出土遺物(1) (土師器・陶器・瓦類)





出土遺物(3) (瓦類)



(1) No. 1 地点 調査前 (北から)



(2) No. 1 地点 トレンチ全景 (北から)

図版第71 祝園地区関係遺跡



(1) No.2地点 調査地全景(南から)



(2) No.2地点 トレンチ全景(西から)

図版第72 祝園地区関係遺跡



(1) №3地点 調査地全景（西から）



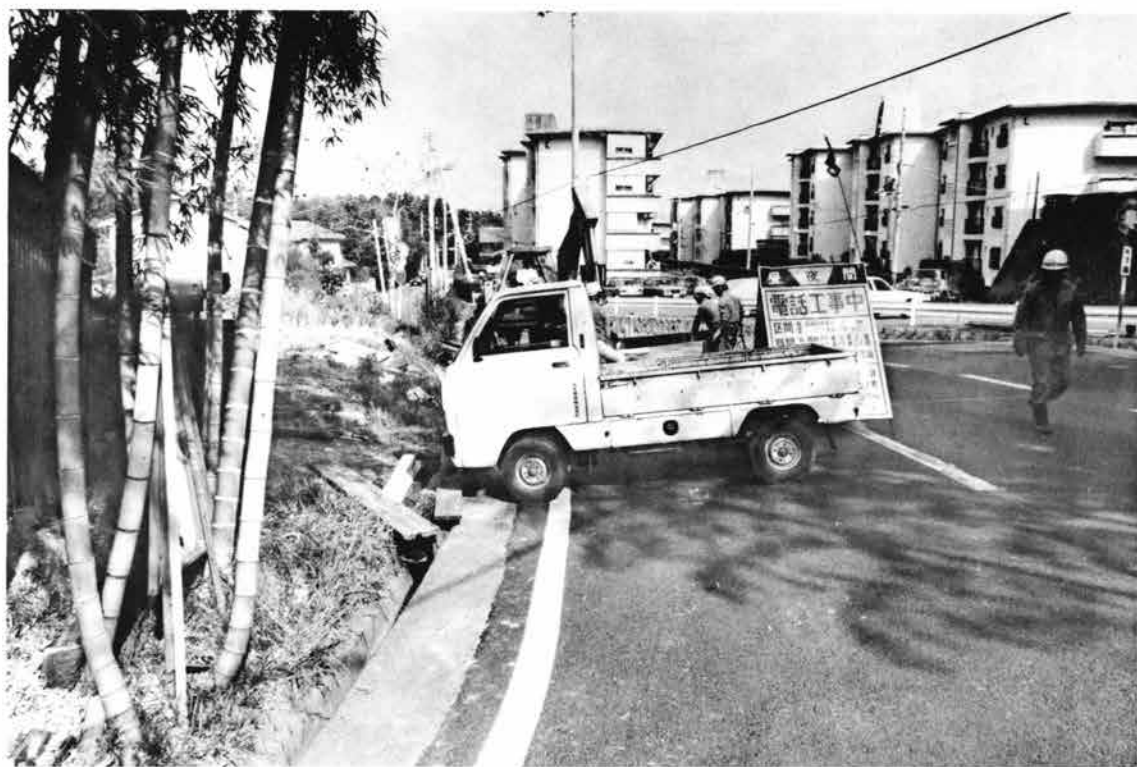
(2) №3地点 西トレンチ全景（西から）



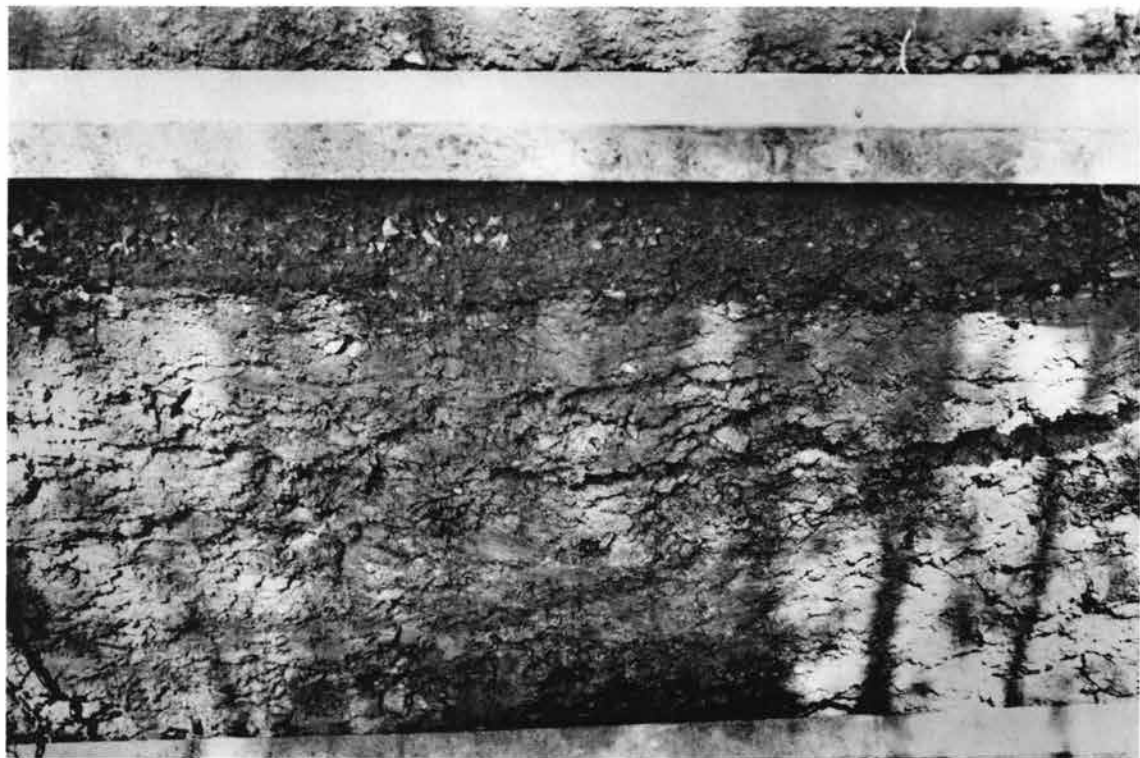
(1) No.4 地点 調査前 (西から)



(2) No.4 地点 西トレンチ全景 (西から)



(1) 新海印寺線円明寺団地付近調査地(西から)

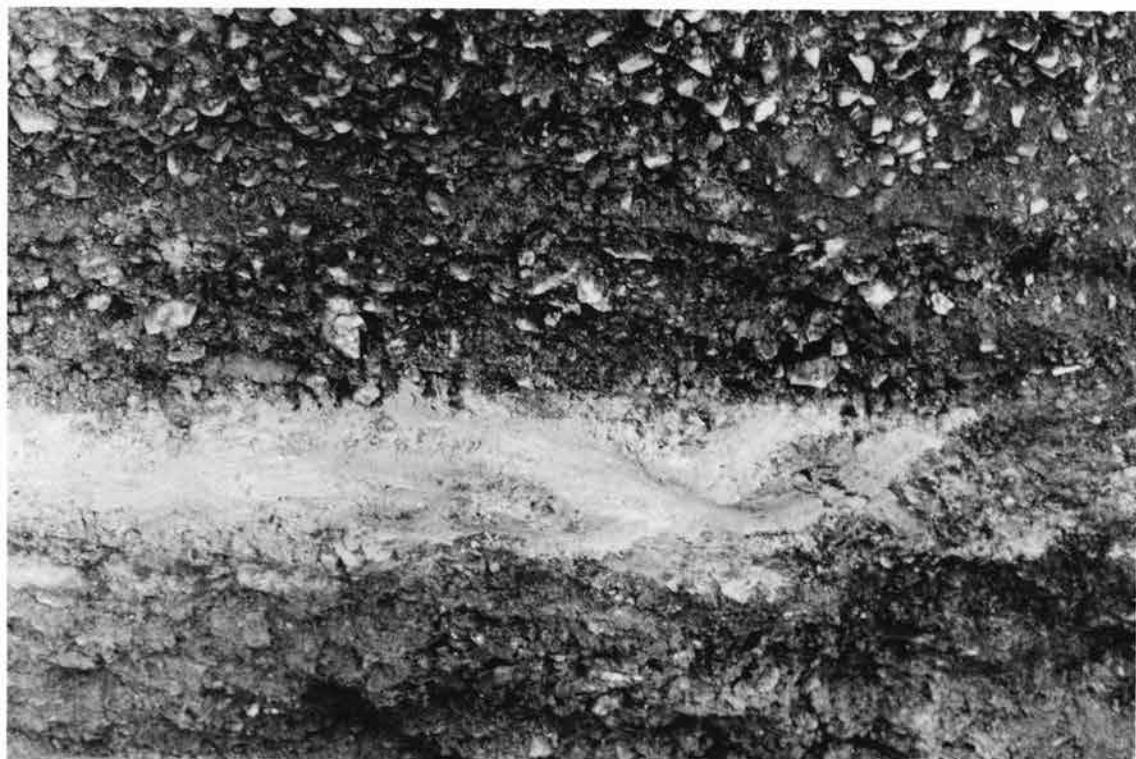


(2) 同上 土層断面(南から)

図版第75 長岡京跡(立会)

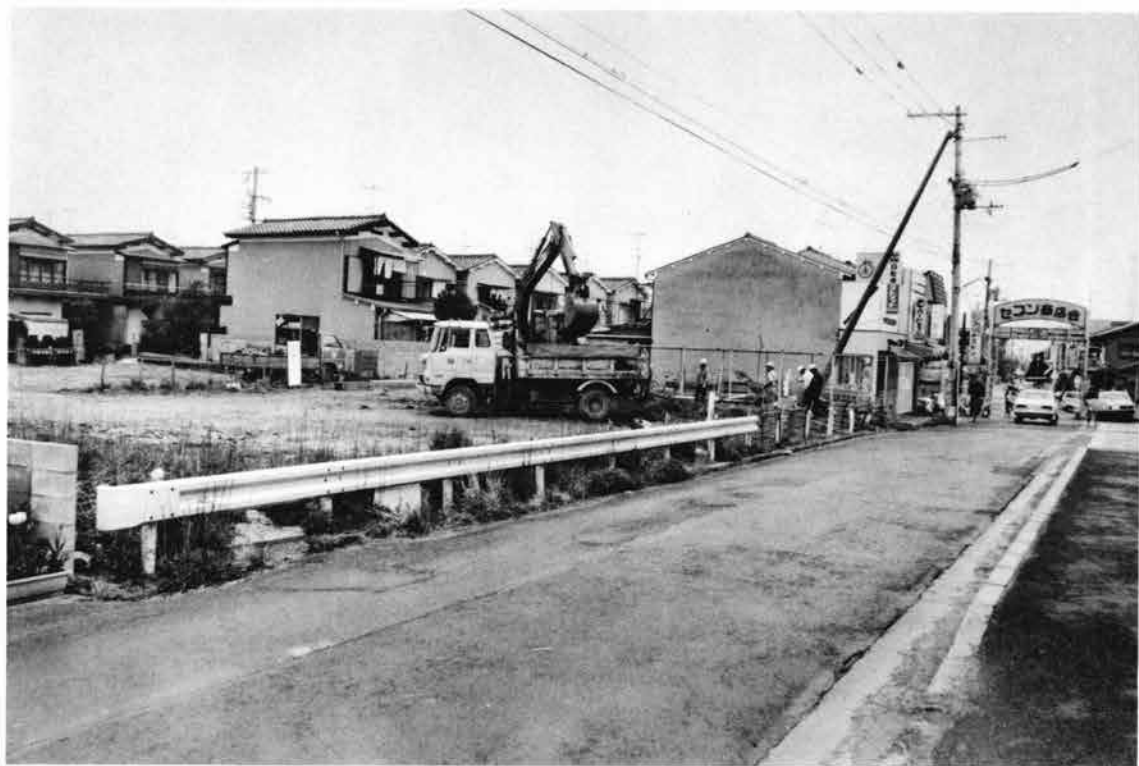


(1) 八条ヶ池線調査地(北東から)



(2) 同上 土層断面(南から)

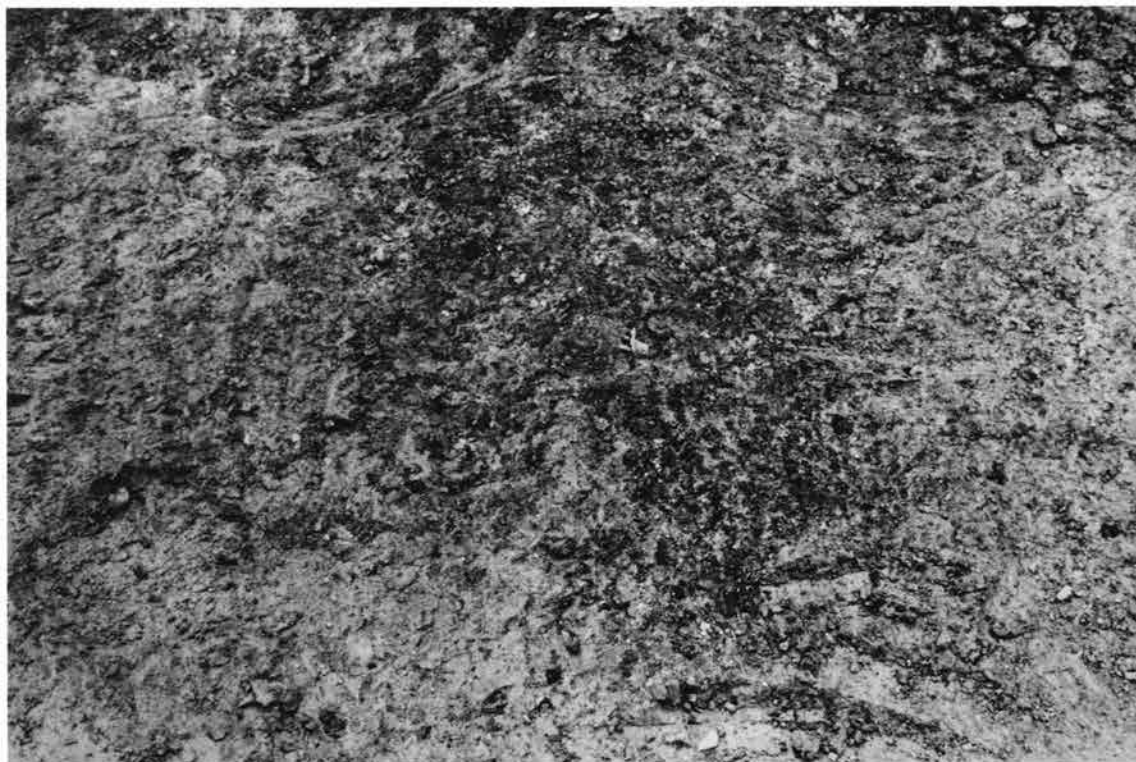
図版第76 長岡京跡(立会)



(1) 八条ヶ池線舞塚地区5地点近景(南西から)



(2) 同上 溝状遺構検出状況(南から)



(1) 八条ヶ池線舞塚地区炭混じり土壌検出状況(南東から)



(2) 八条ヶ池線舞塚地区遺物出土状況(南から)



(1) 八条ヶ池線舞塚地区4地点西壁土層断面(北東から)



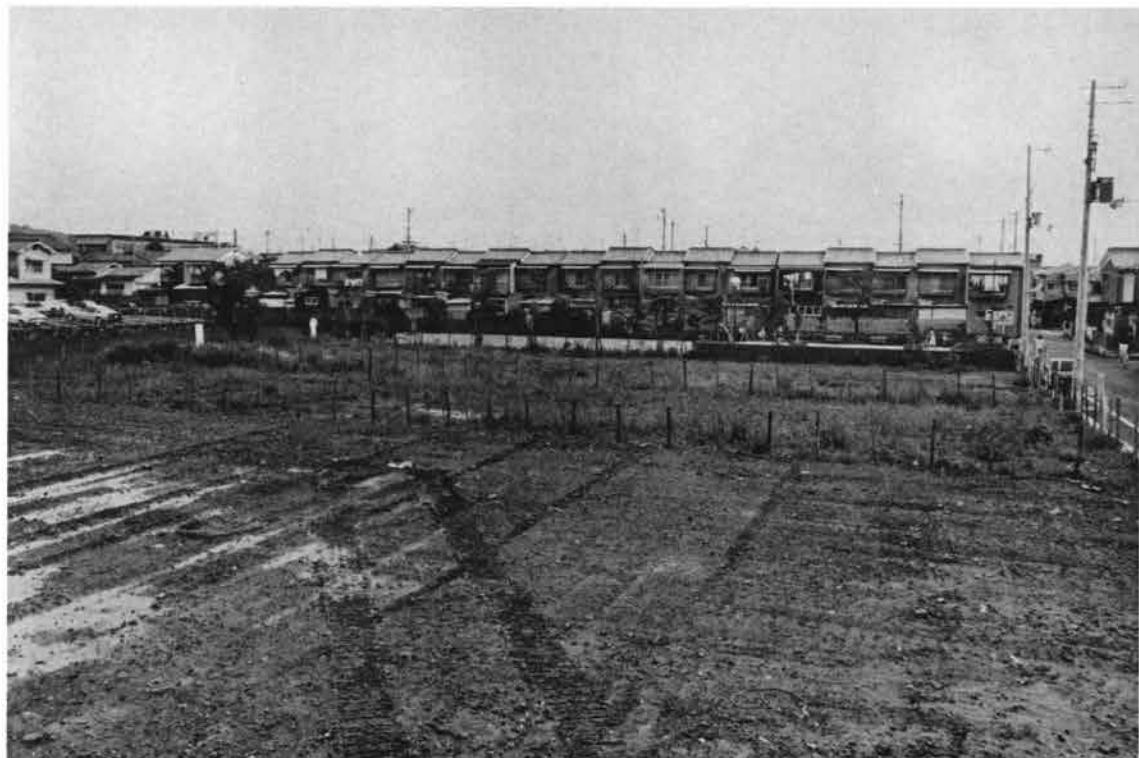
(2) 八条ヶ池線舞塚地区3地点東壁土層断面(南西から)



(1) 今里地区土層断面



(2) 出土遺物



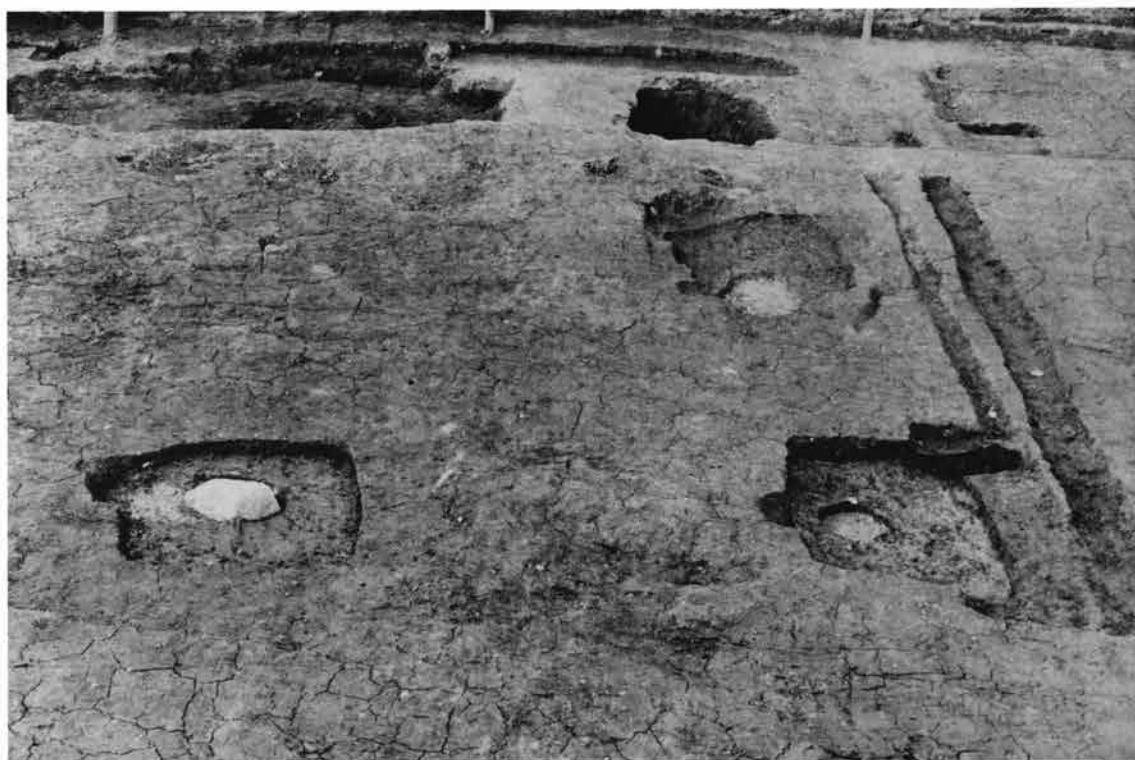
(1) 調査前風景（南から）



(2) トレンチ全景（南から）



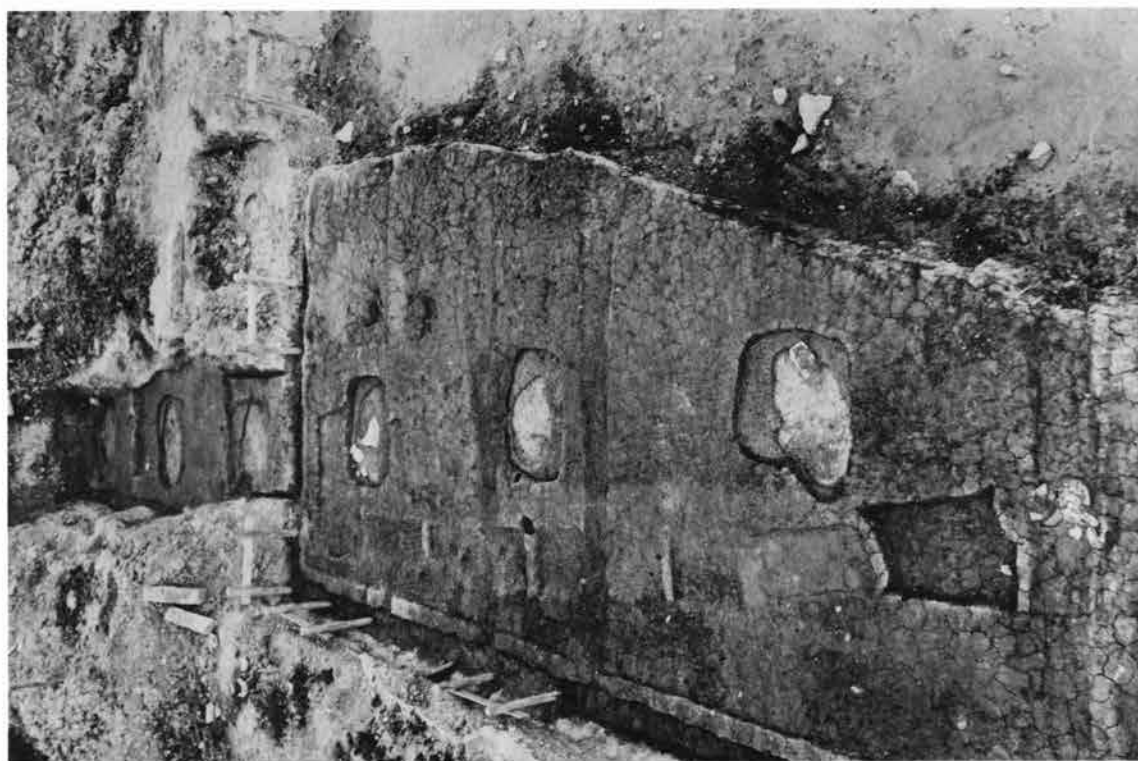
(1) 掘立柱建物跡SB01 (東から)



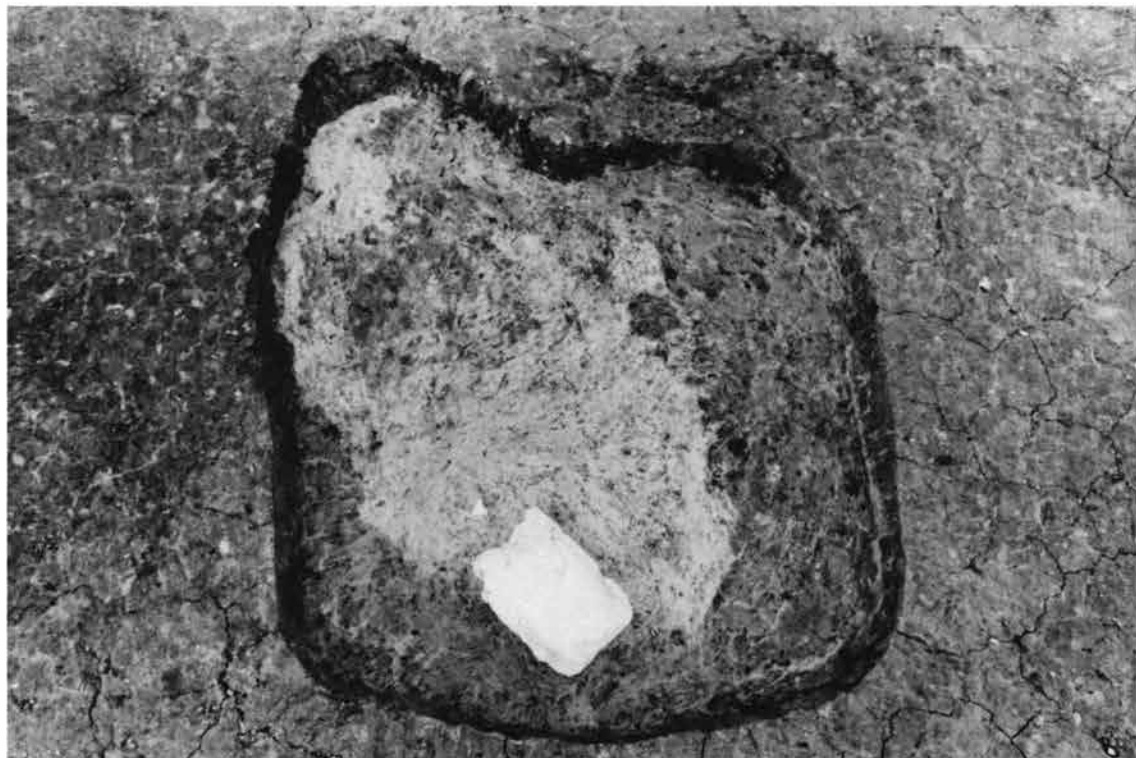
(2) 掘立柱建物跡東部分 (南から)



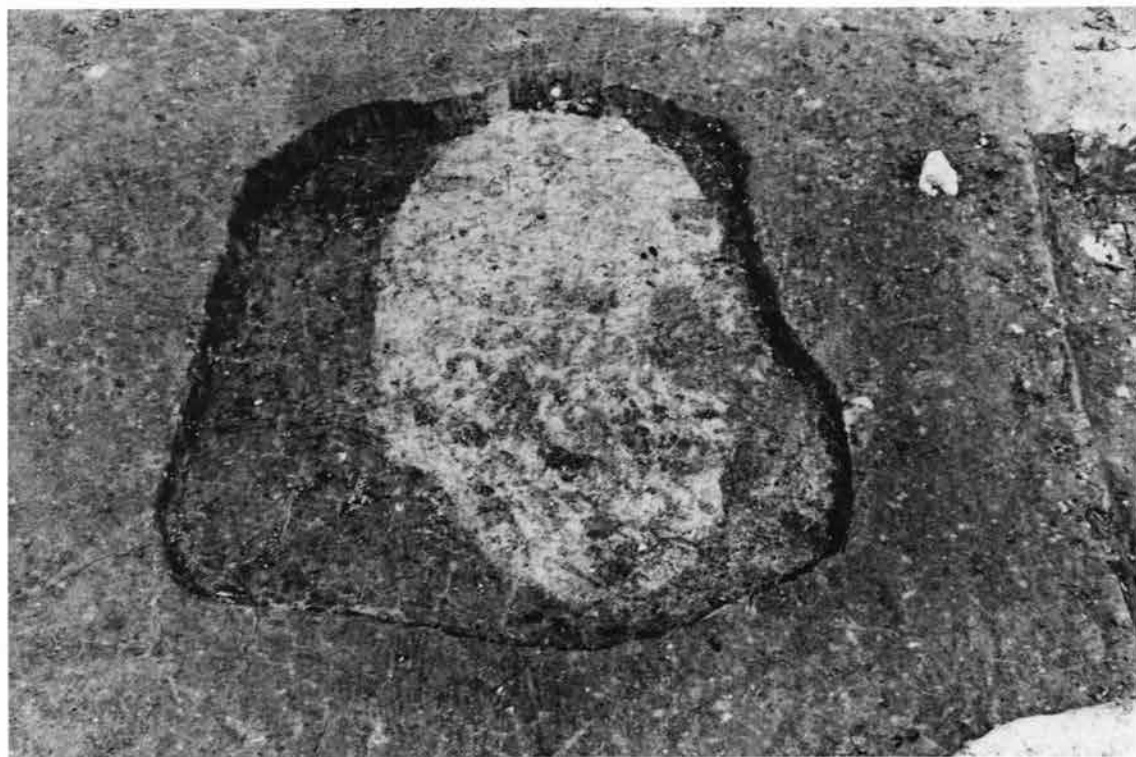
(2) SB01と雨落溝 (西から)



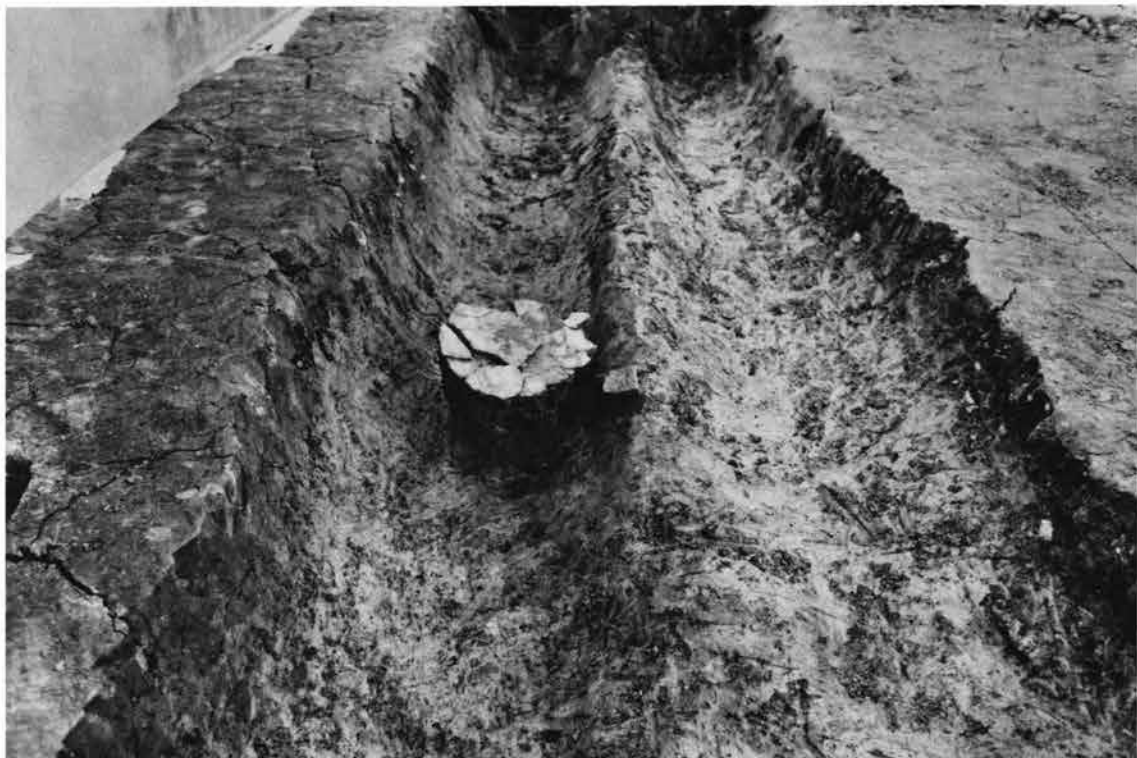
(1) SB01と雨落溝 (西から)



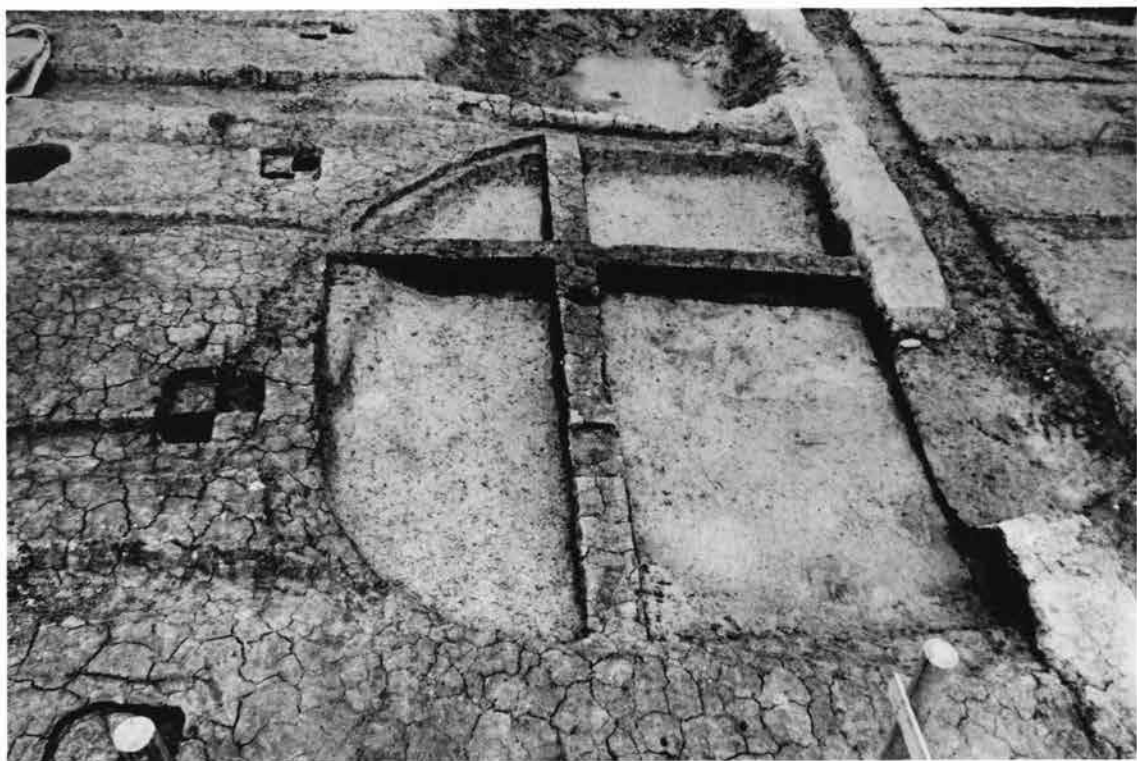
(1) 掘立柱建物跡 SB01 P-1 (南から)



(2) 掘立柱建物跡 SB01 P-5 (南から)



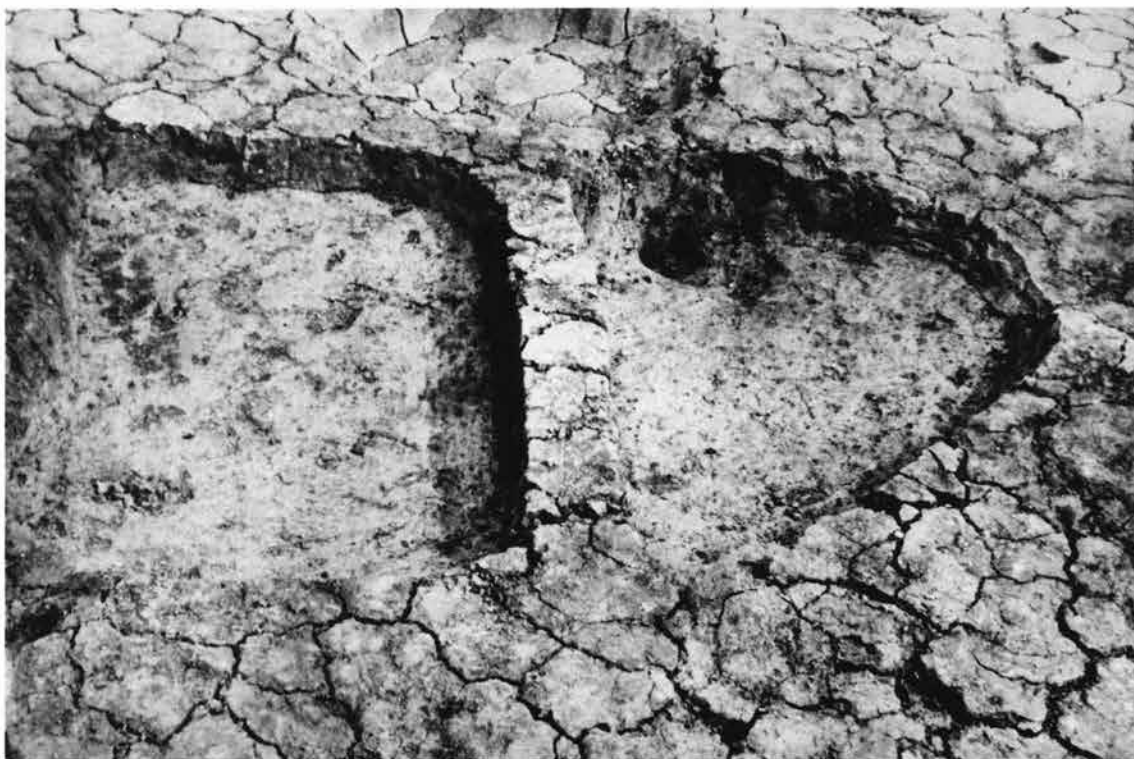
(1) 南北溝部分 (南から)



(2) 土壇SX04と掘立柱建物跡A (東から)



(1) 土壇SK05 (北から)



(2) 土壇SK06 (南から)



1



5



2



6



3



4



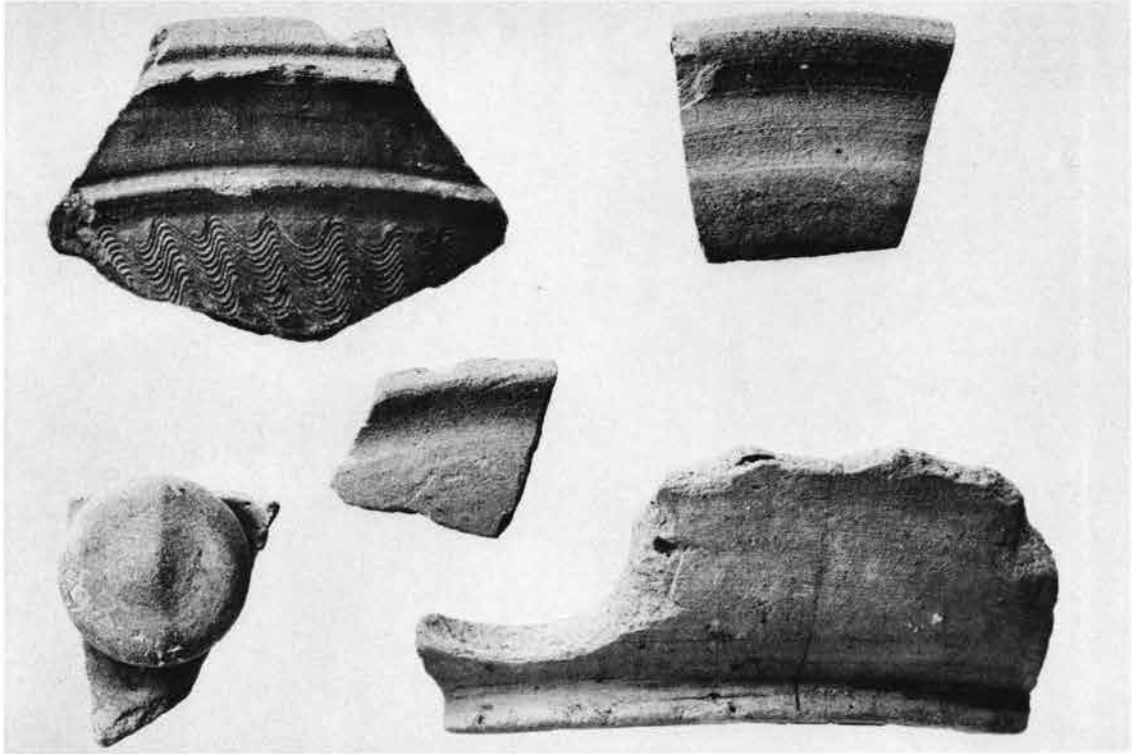
7



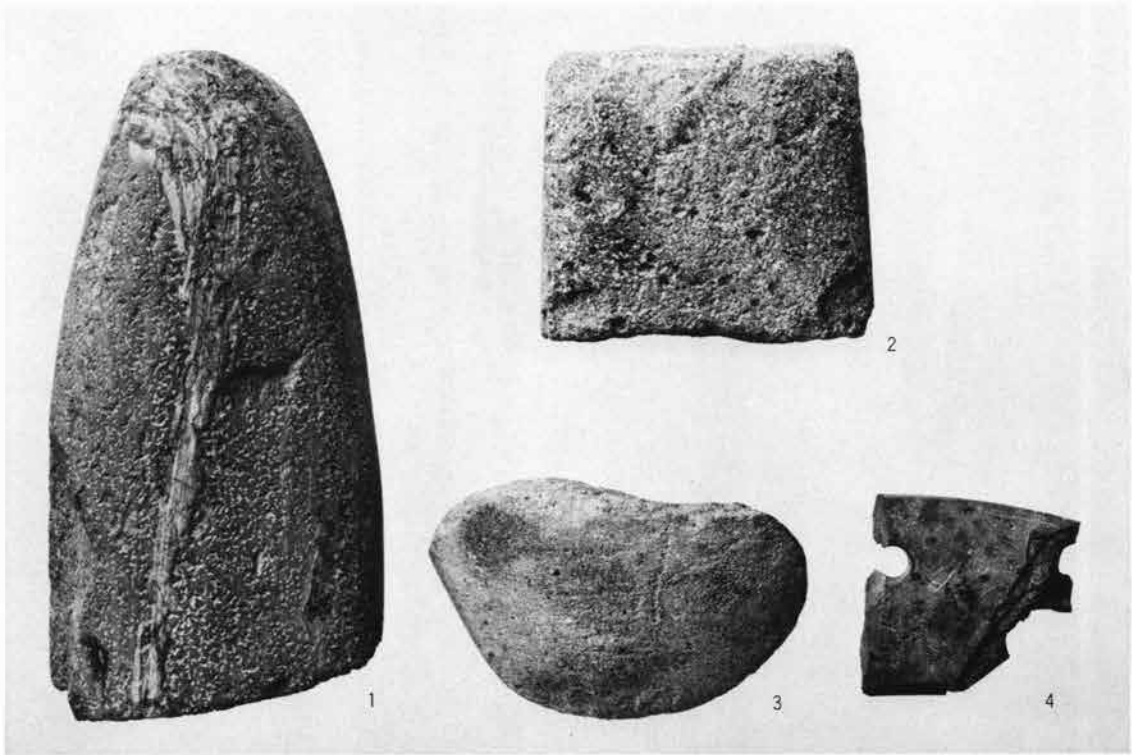
8



9



(1) 出土遺物(2)



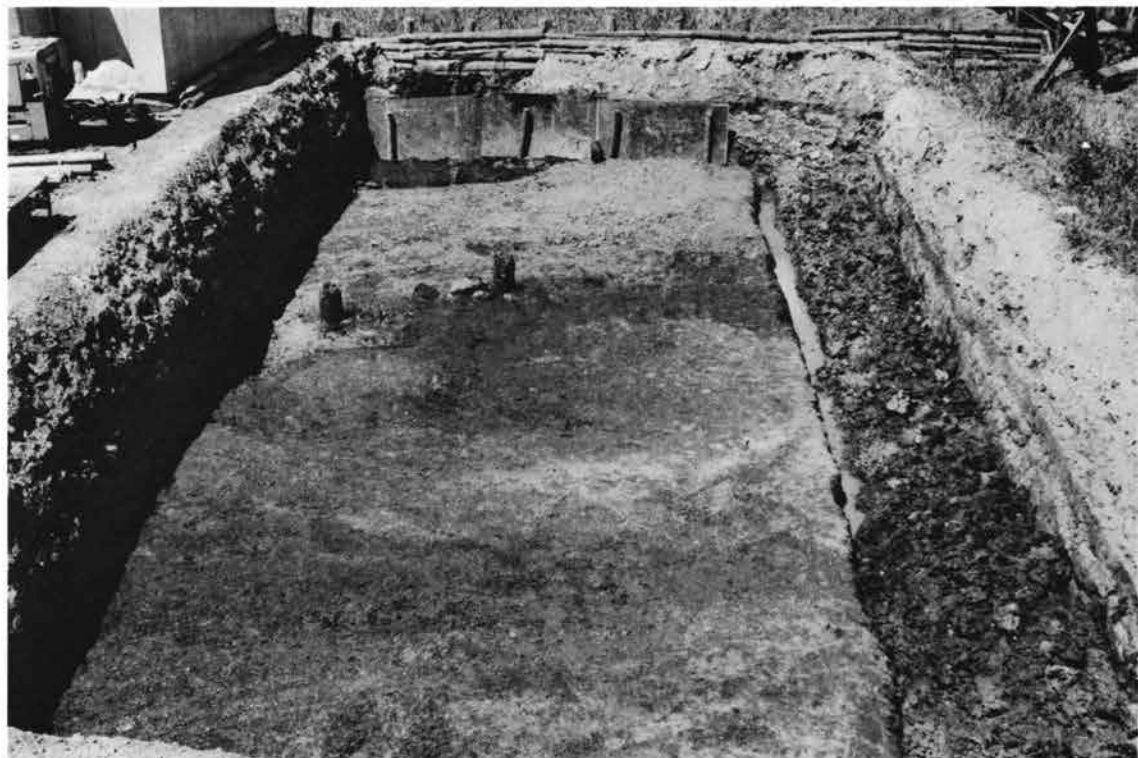
7A7F(2) 出土遺物(3)



(1) 調査地遠景（西から）



(2) 調査地全景（東から）



(1) 西トレンチ全景（東から）



(2) SD12501検出状況（南から）



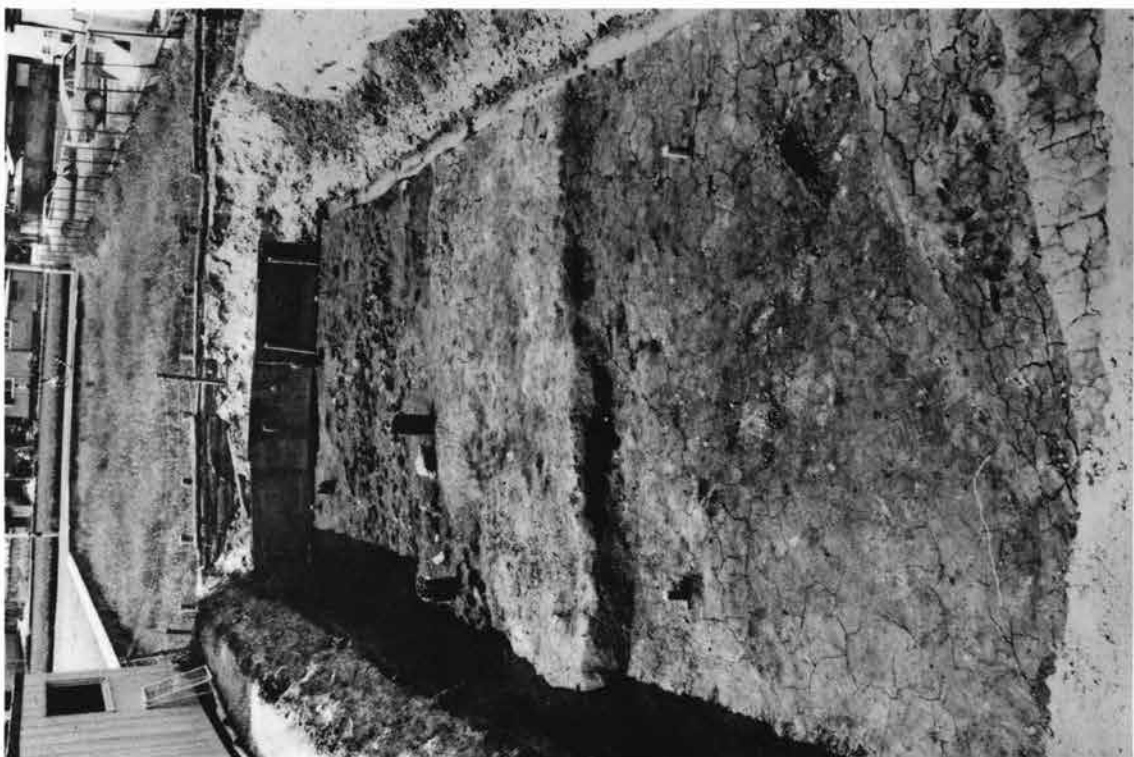
(1) SD12501調査後（北から）



(2) SD12502検出状況（南西から）



(1) SD12502出土獣骨片



(2) SD12501・SD12502完掘後（東から）



(1) 東トレンチ調査中（西から）



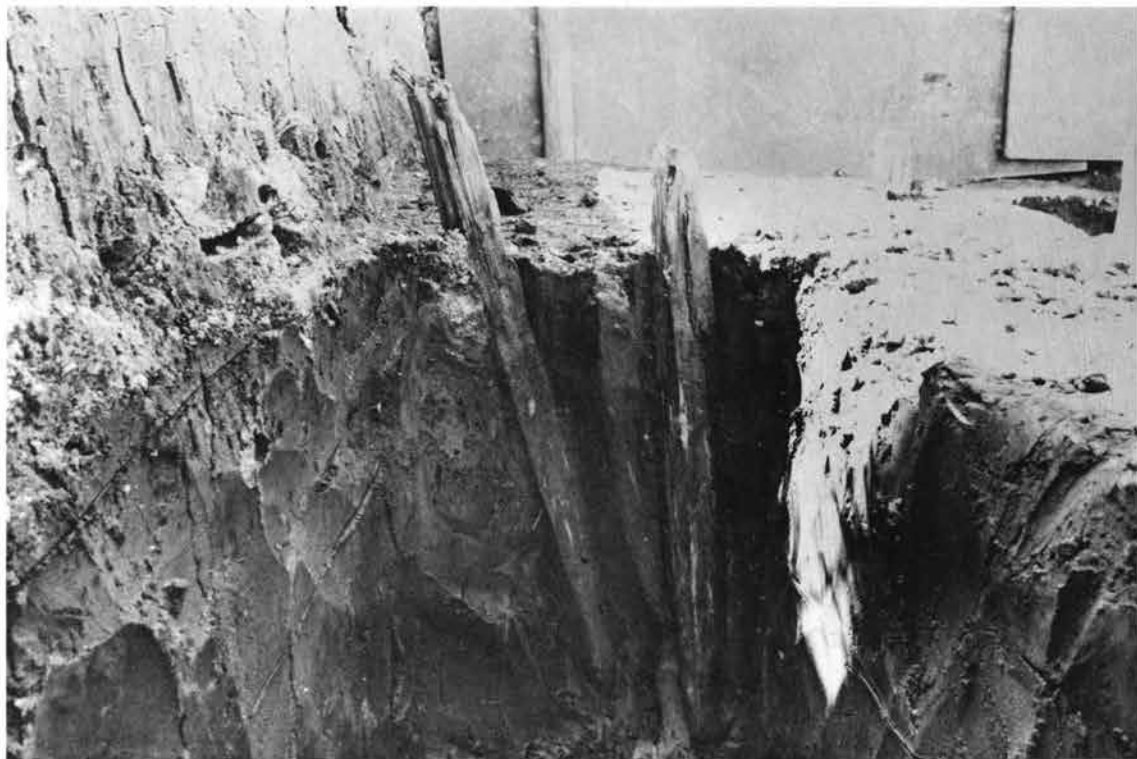
(2) 東トレンチ調査後（西から）



(1) SD12503 (南から)



(2) 東トレンチ全景 (東から)



(1) 杭6・7 (東から)



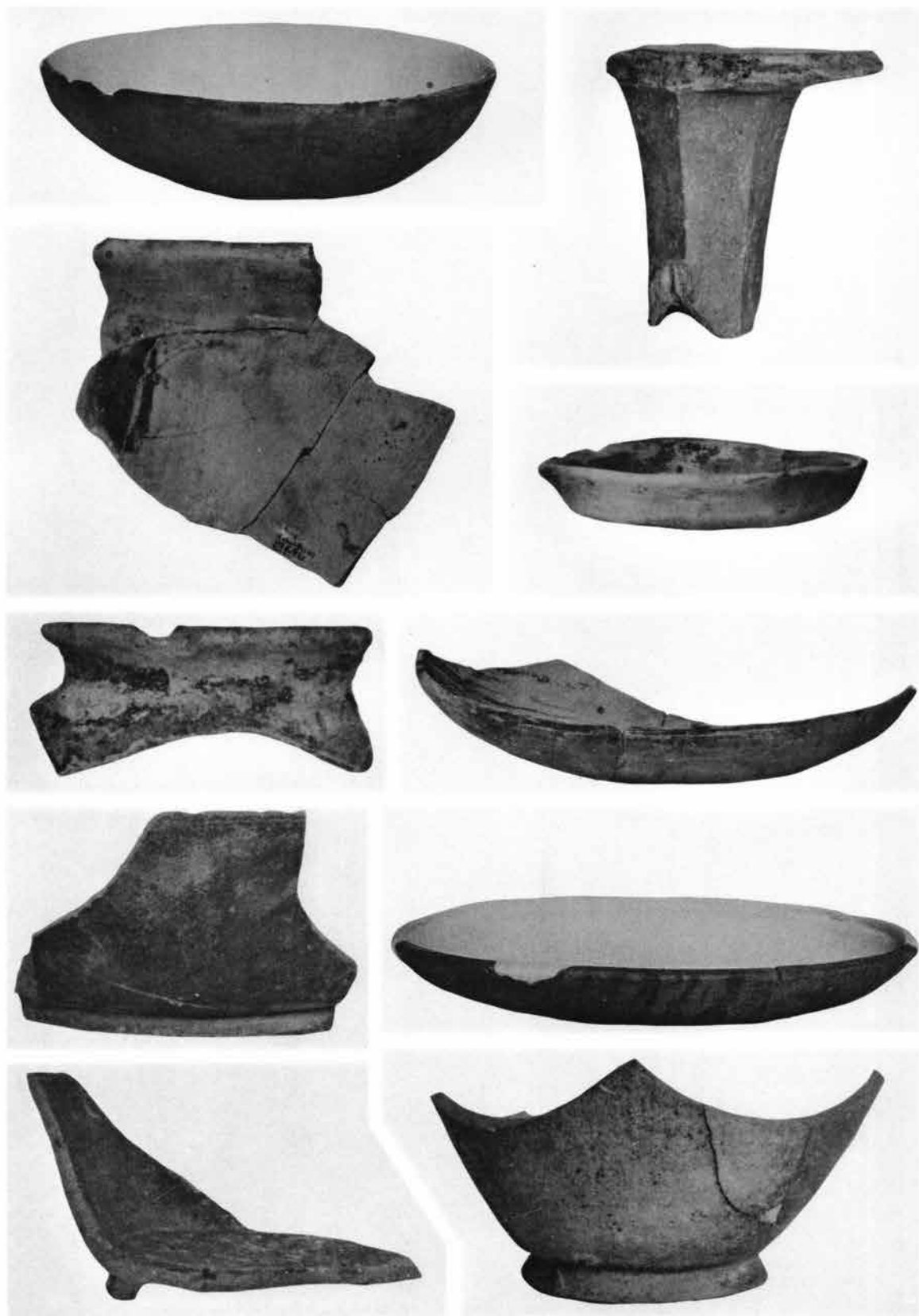
(2) 杭3 (北から)



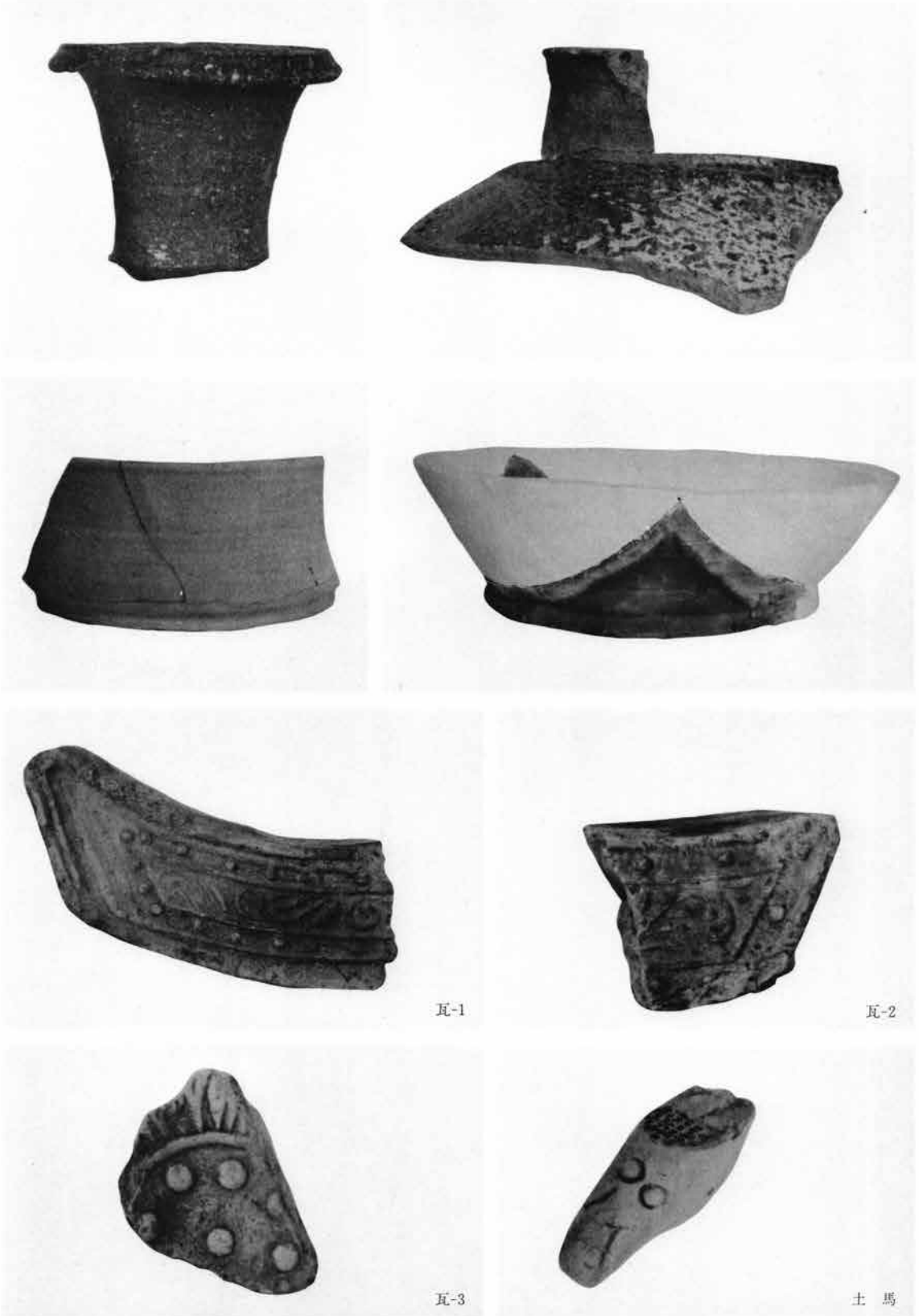
(1) 杭5 検出状況 (北から)



(2) 出土杭



出土遺物(1)

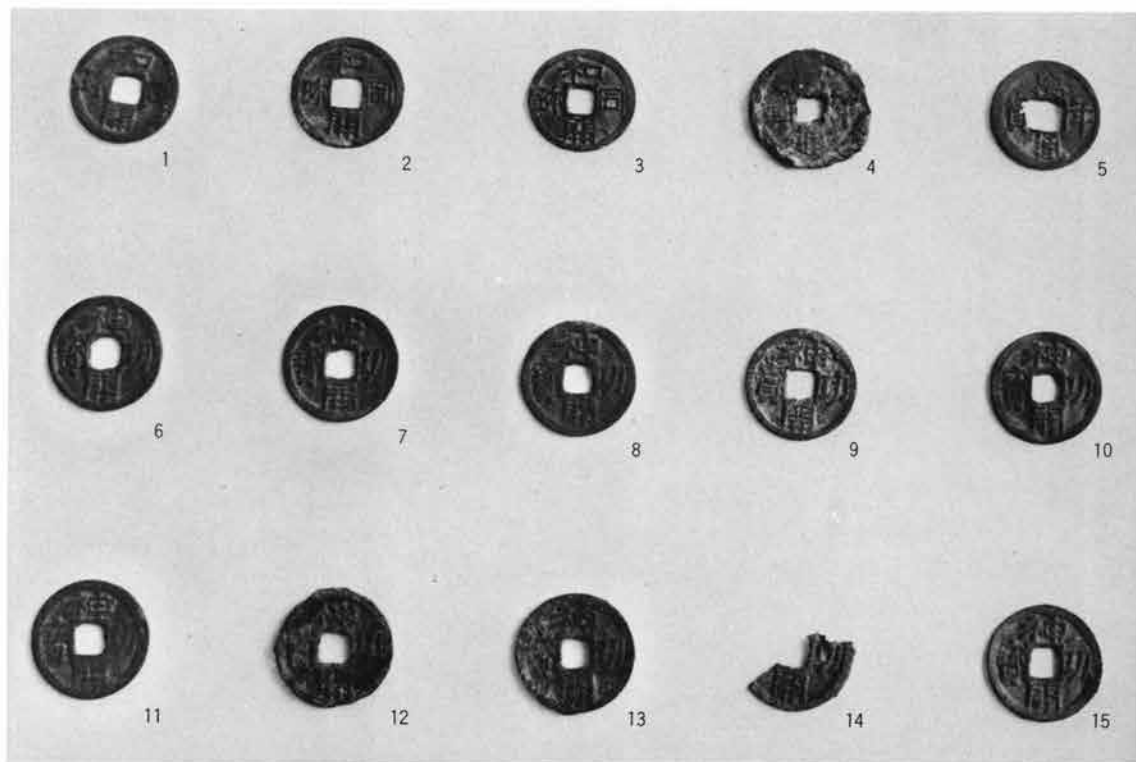




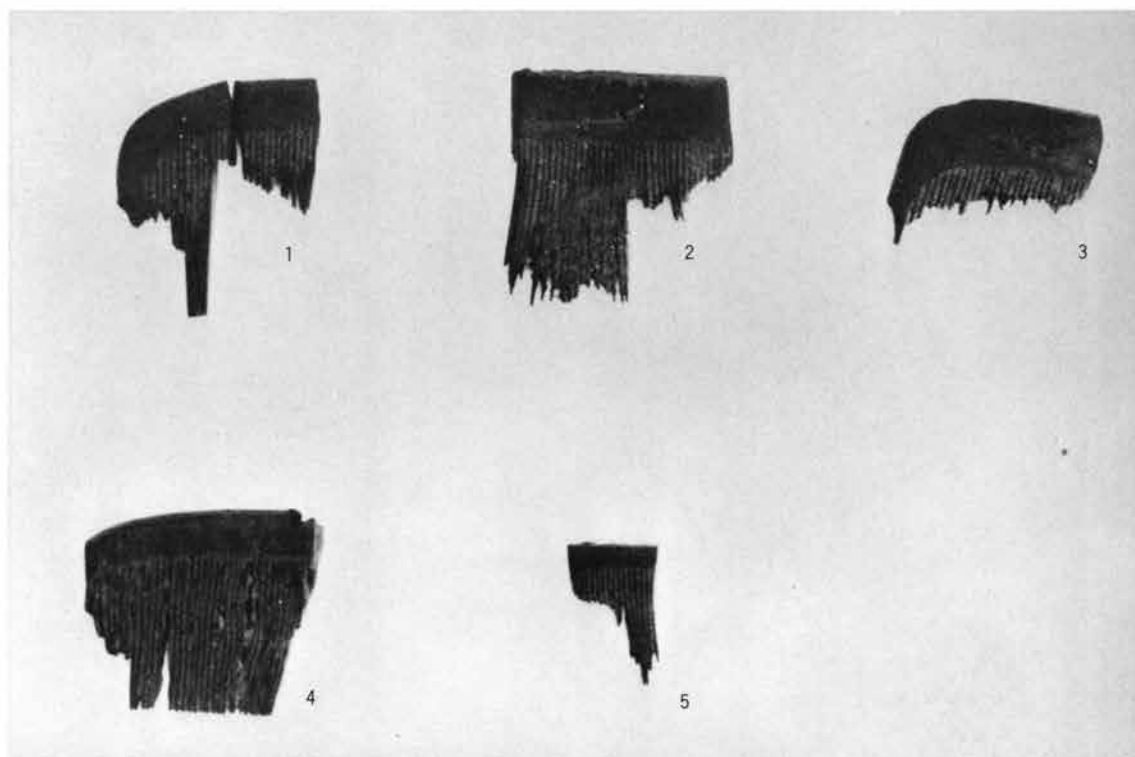
(2) 出土木簡 (拡大)



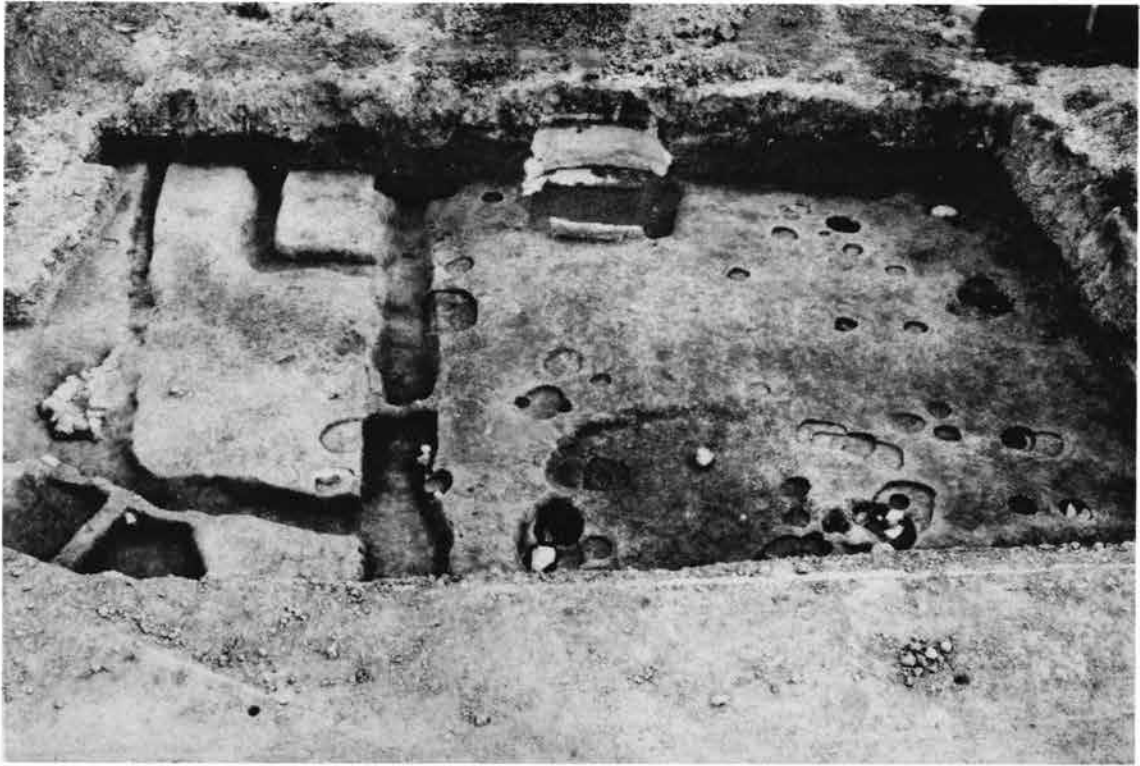
(1) 出土木簡 (上：表，下：裏)



(1) 出土銅銭



(2) 櫛



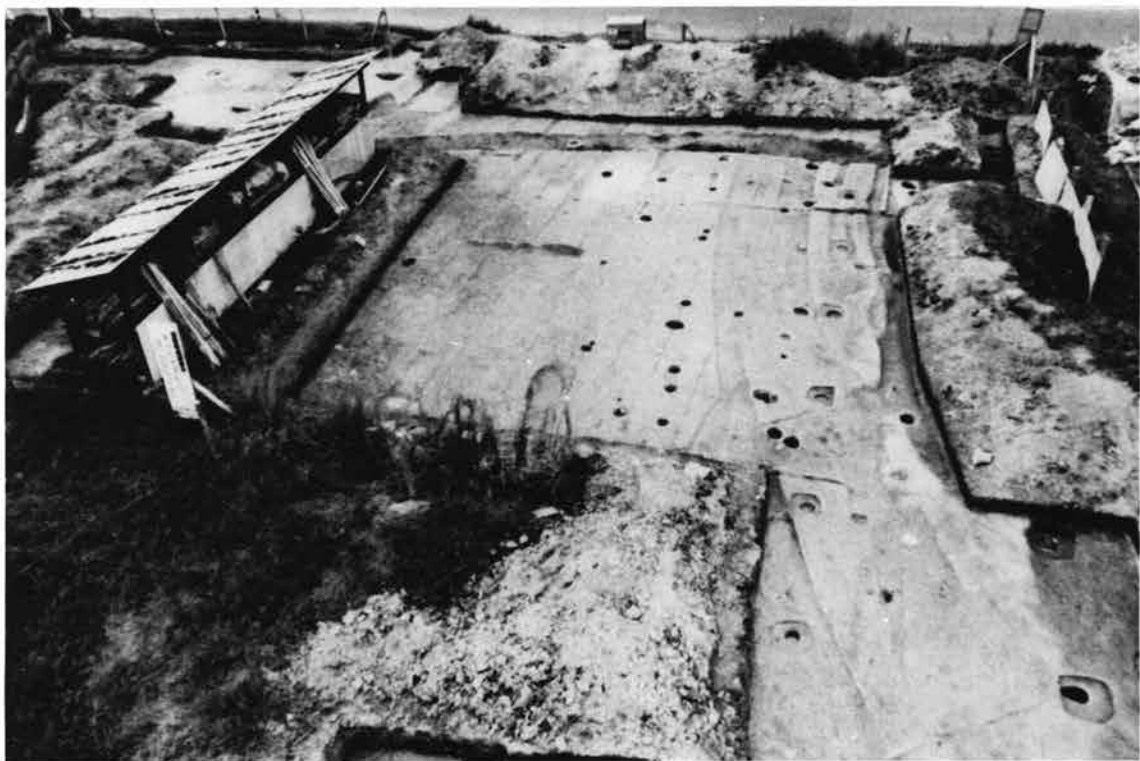
(1) Aトレンチ全景（北から）



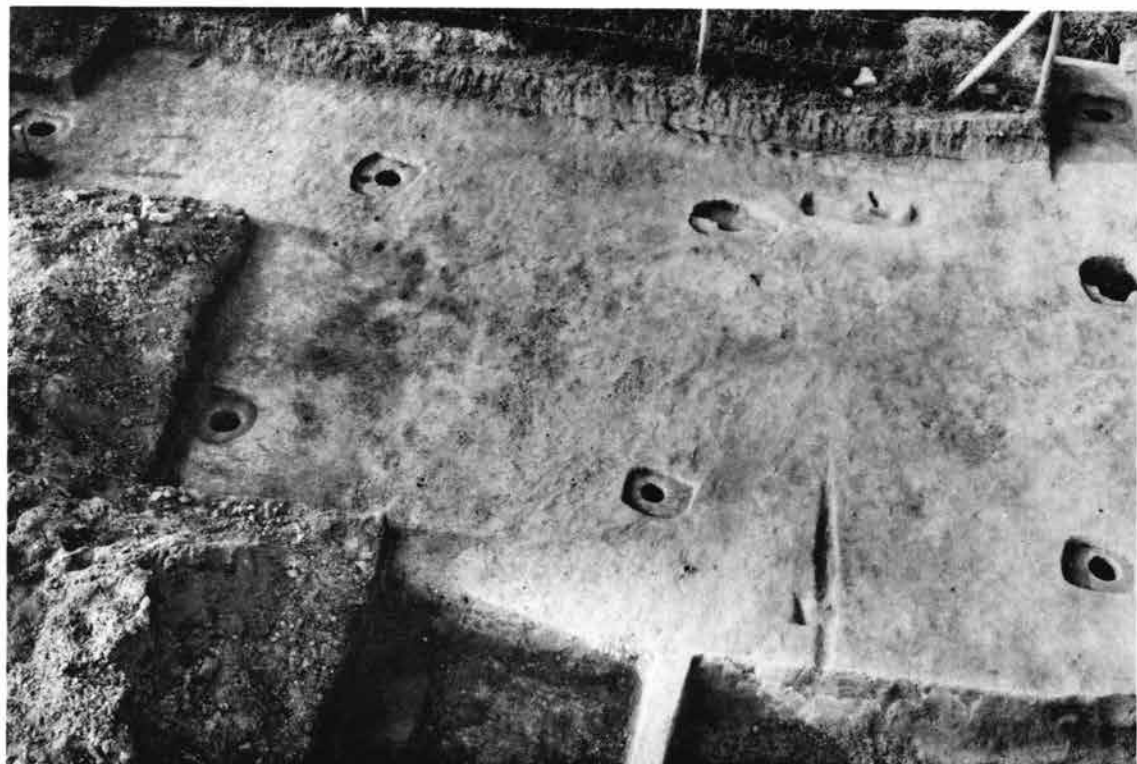
(2) Bトレンチ全景（北から）



(1) Dトレンチ全景 (北から)



(2) Eトレンチ全景 (南から)



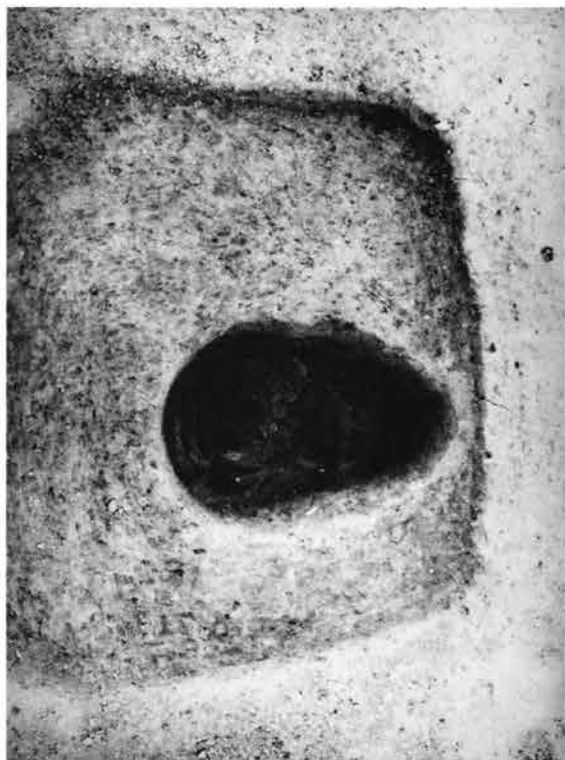
(1) EトレンチSB10547 (南から)



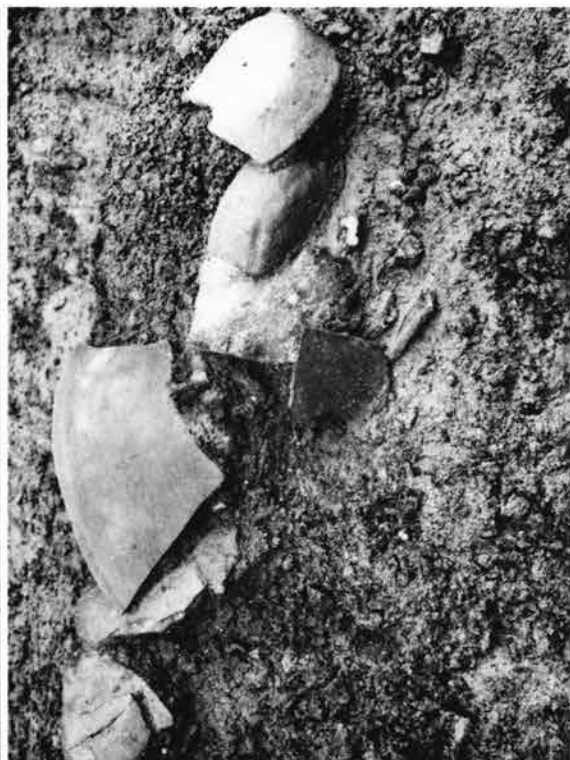
(2) EトレンチSB10548 (南から)



(1) EトレンチSD10550 (東から)



(2) SB10548柱穴軒丸瓦出土状況



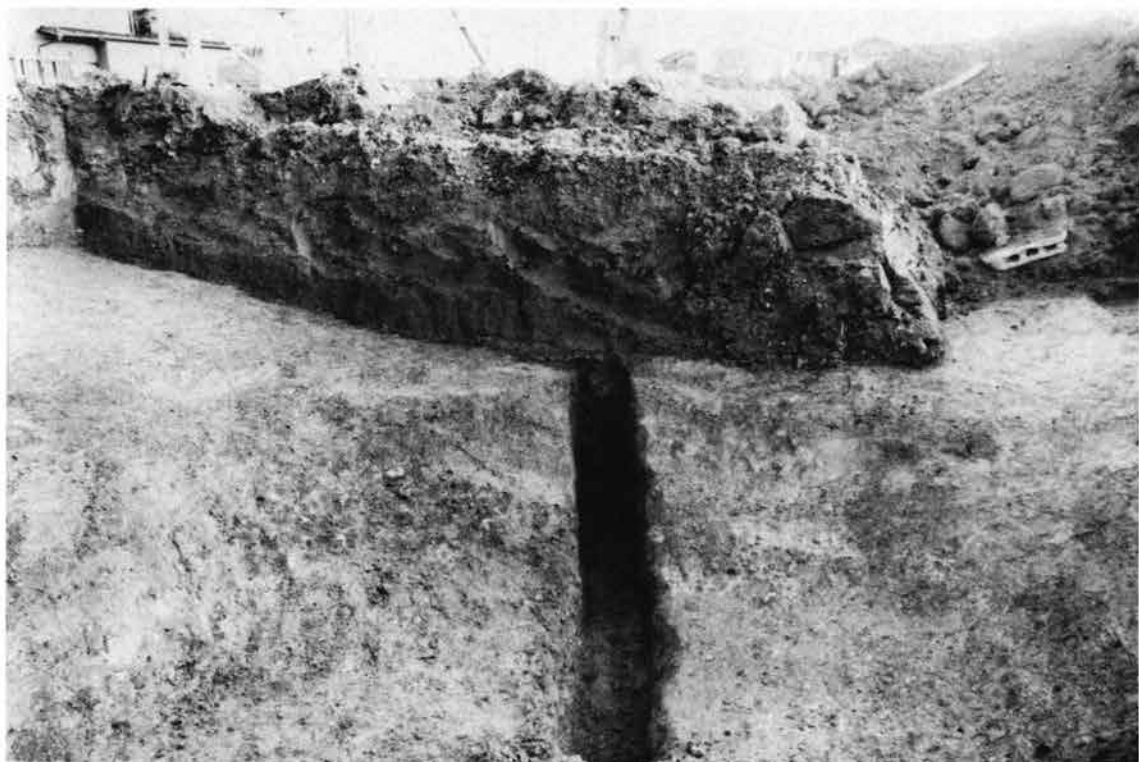
(3) SD10550遺物出土状況



(1) Fトレンチ全景 (南から)



(2) Fトレンチ拡張部SD10565(舞塚古墳周濠) (西から)



(1) Fトレンチ舞塚古墳後円部土橋（北から）



(2) FトレンチSD10565(舞塚古墳周濠)埴輪出土状況（西から）



(1) Gトレンチ全景 (南から)



(2) 拡張後Gトレンチ舞塚古墳前方部 (南から)



(1) GトレンチSD10565人物埴輪出土状況(南東から)



(2) Hトレンチ全景(西から)

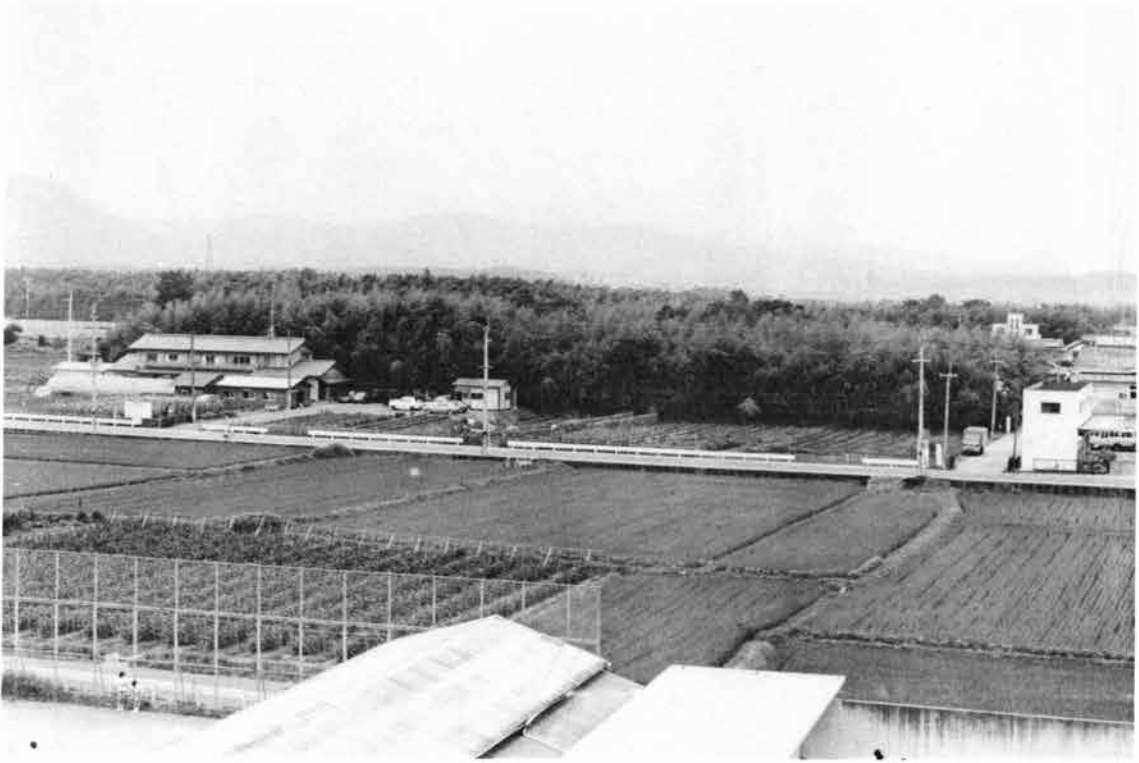


(1) Iトレンチ全景 (南から)



(2) Iトレンチ全景 (北から)





(1) 調査地遠景（長岡第2中学校屋上より臨む）



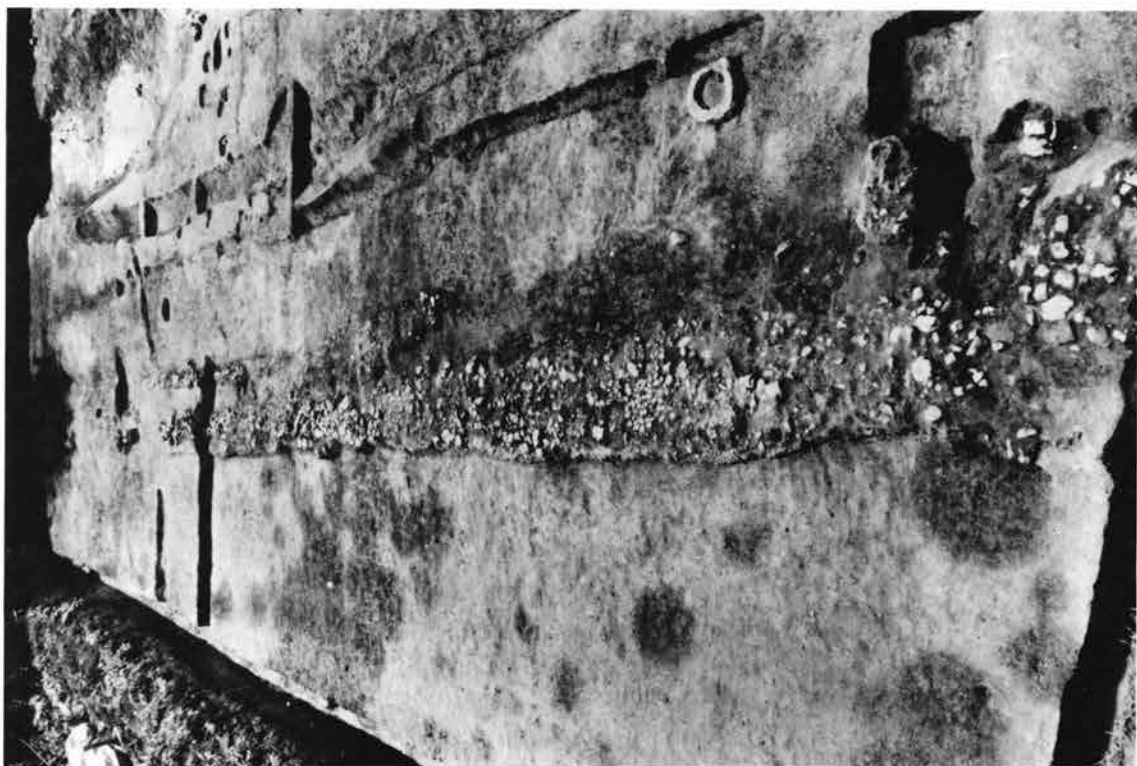
(2) 調査前風景（西から）



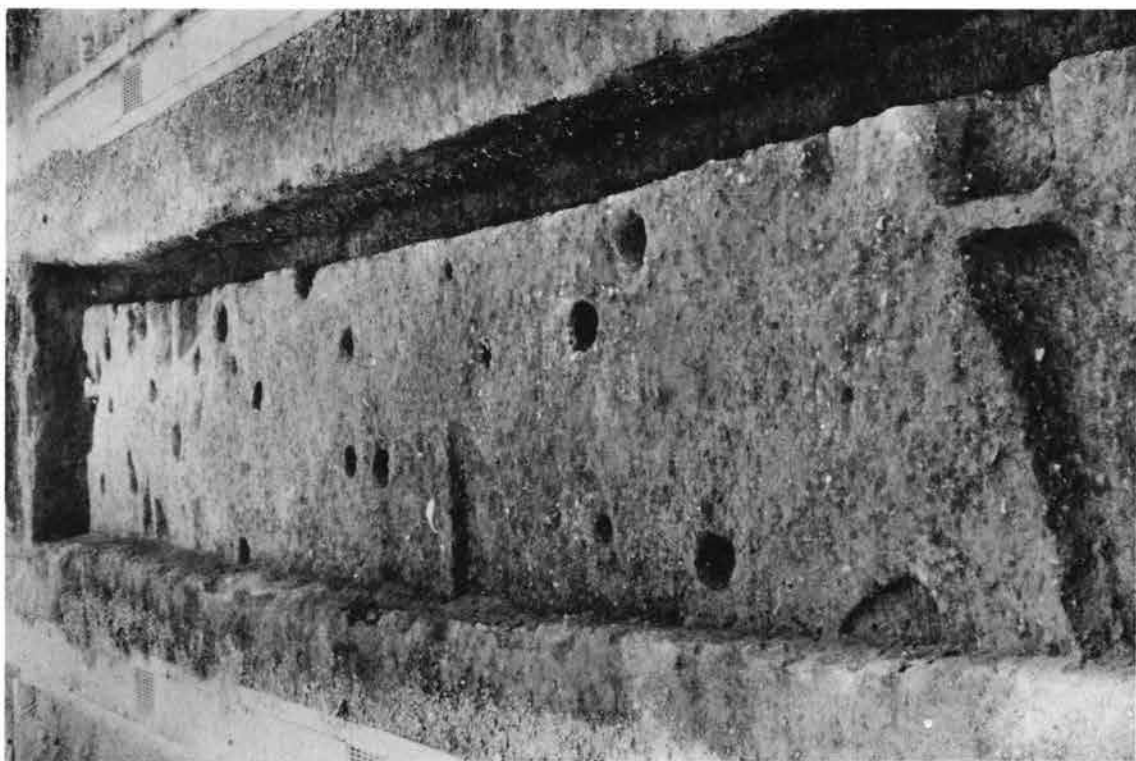
(1) 第1トレンチ全景（北から）



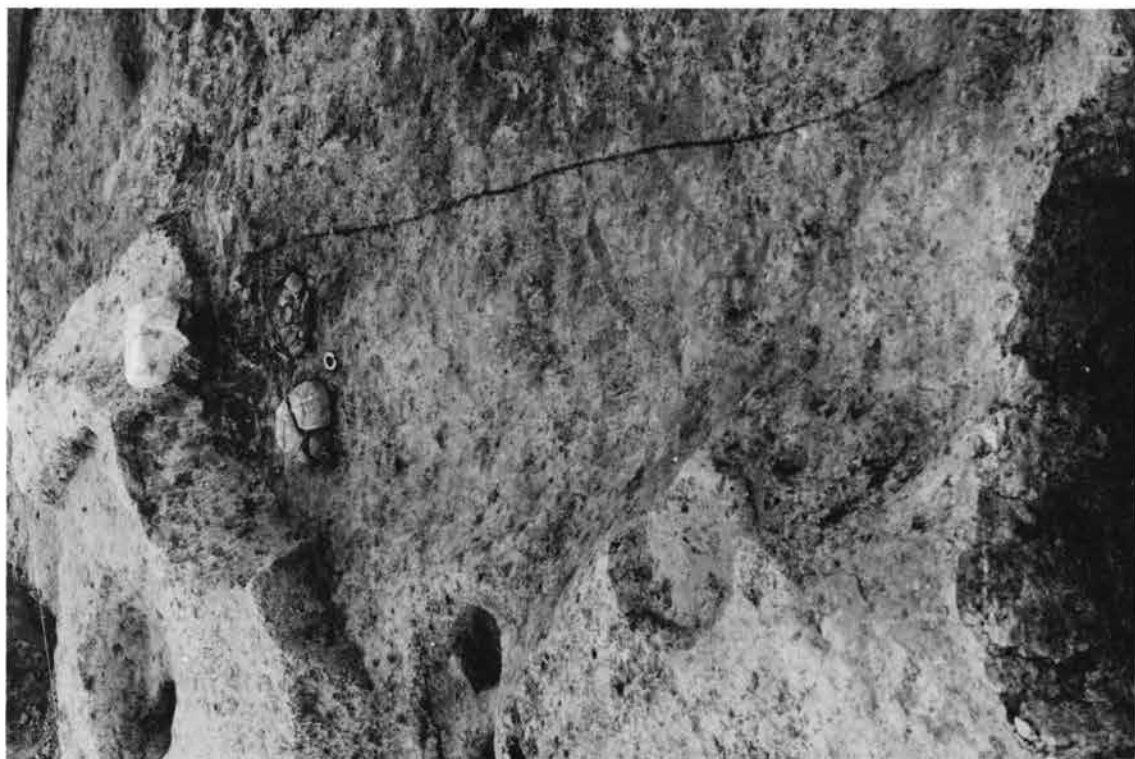
(2) SK10725（東から）



(2) 第2トレンチ全景 (西から)



(1) 石溜り SX 10737 (北から)



(2) 土壇墓SK10728 (南から)



(1) 土壇墓SK10728 (北から)





|



|



16



17



13



18



14



15

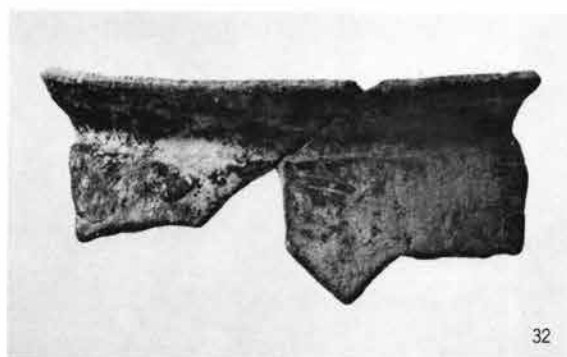


19



21







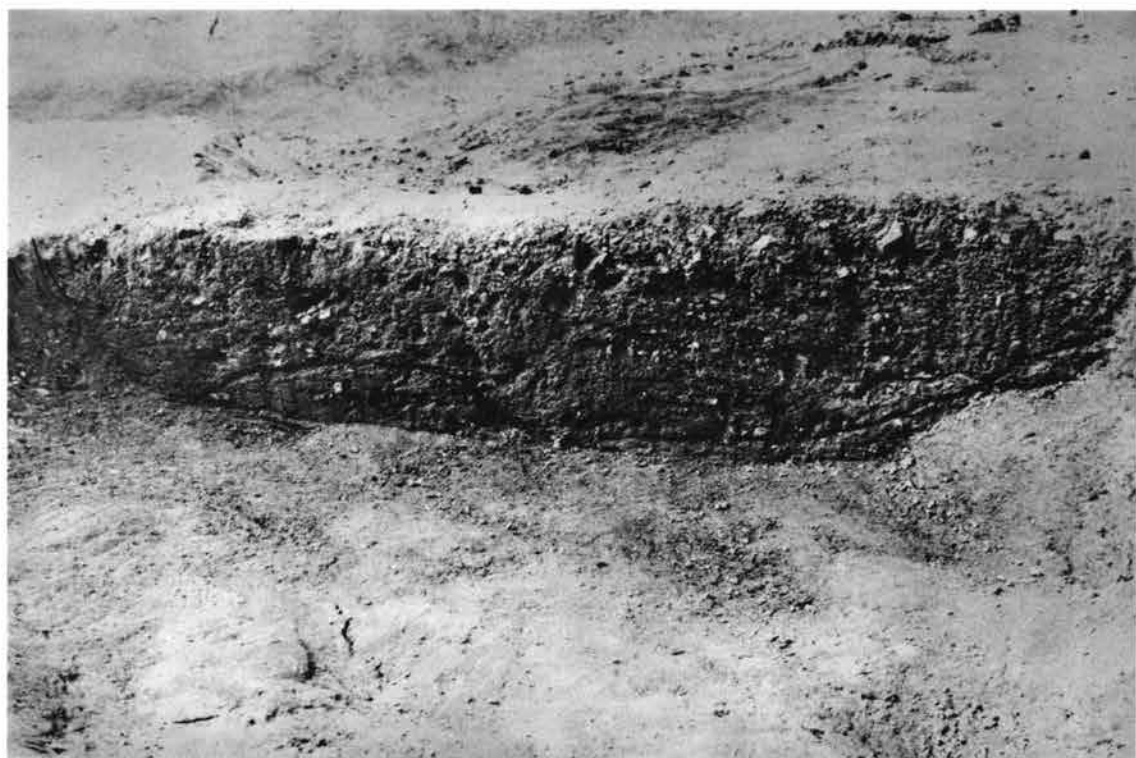
(1) 調査前全景 (南から)



(2) 溝SD11002検出状況 (南から)



(1) 溝SD11002土層断面 (東部分)



(2) 溝SD11002土層断面 (西部分)



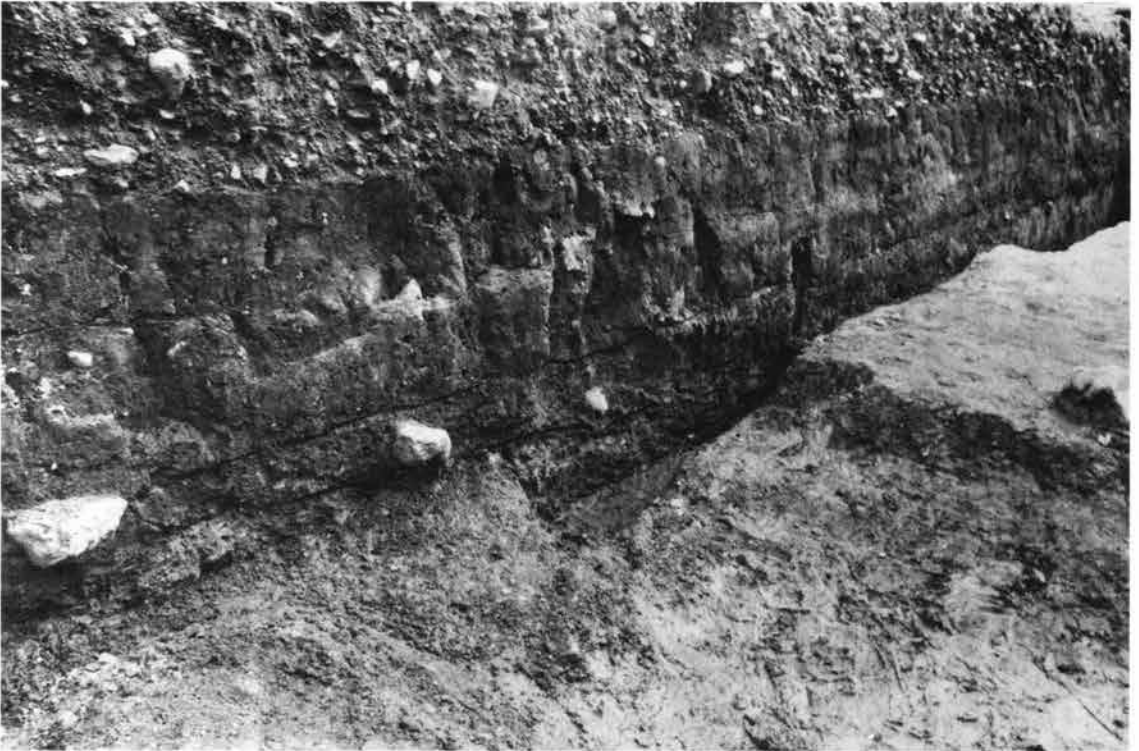
(1) 溝SD11001検出状況(東から)



(2) 溝SD11001遺物出土状況(1)



(1) 溝SD11001遺物出土状況(2)



(2) 溝SD11001(東壁)土層断面図



(1) 溝SD11001遺物出土状況(3)



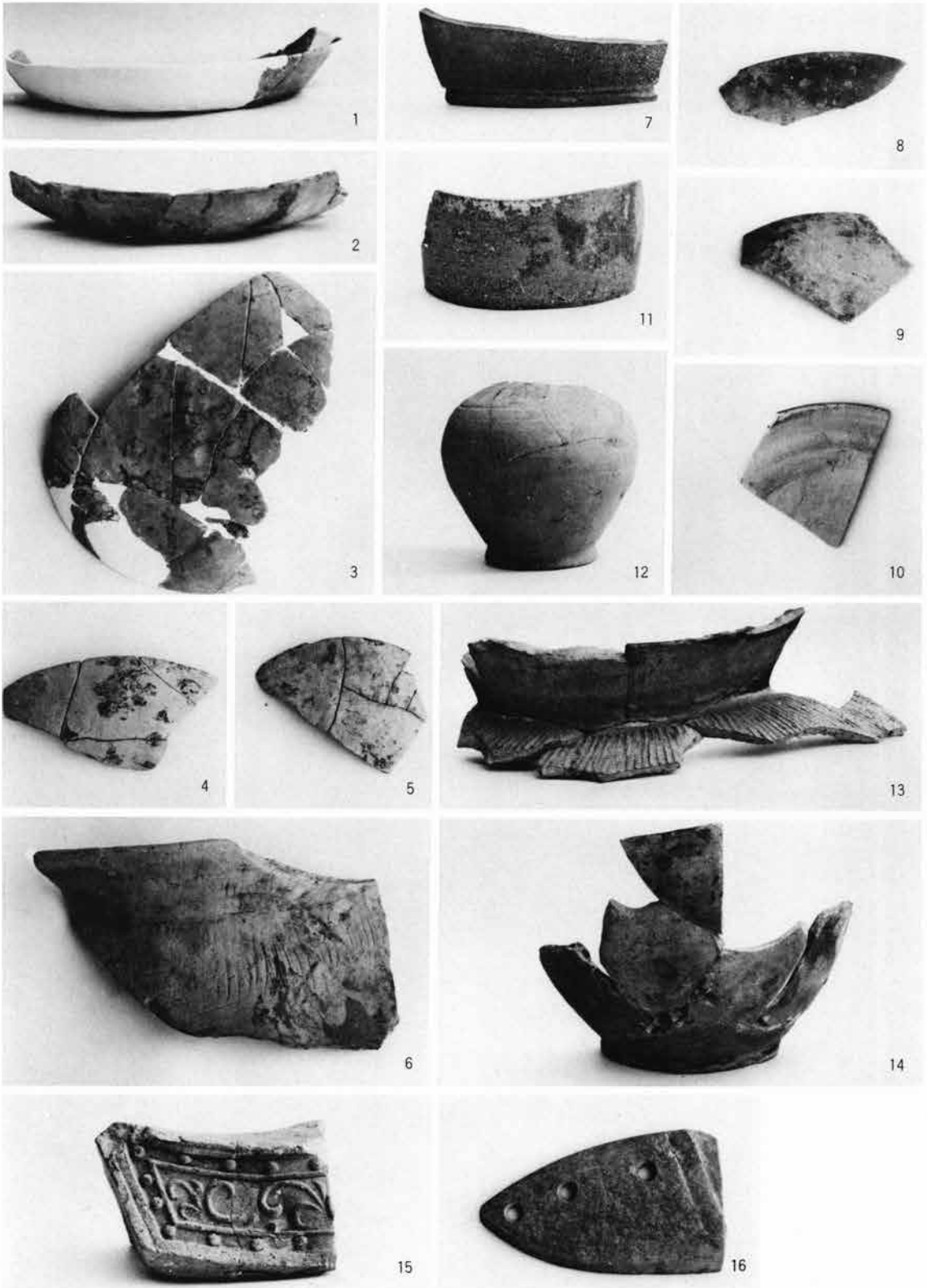
(2) 溝SD11001軒平瓦出土状況



(2) 調査後トレンチ全景



(1) 溝SD11001全景(東から)





(1) 調査前風景 (南西から)



(2) 調査地全景 (南西から)



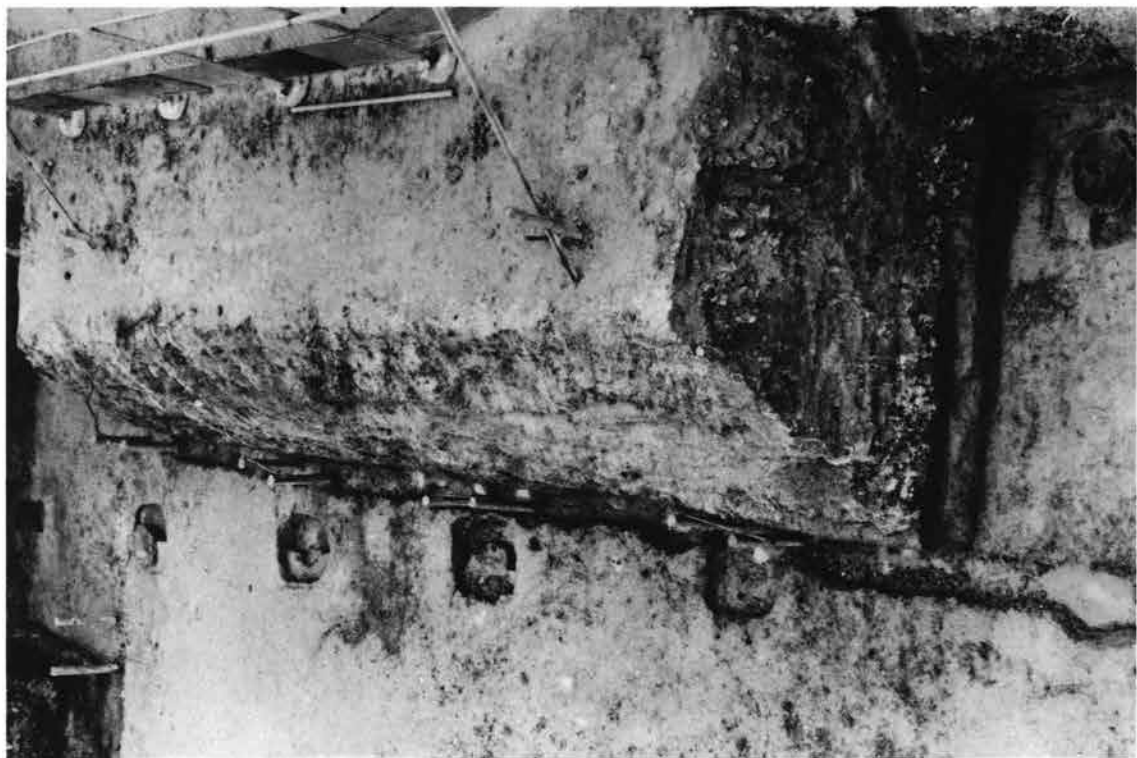
(1) 建物跡SB9801 (南から)



(2) 建物跡SB9801 (北から)



(2) SD9806 (西から)



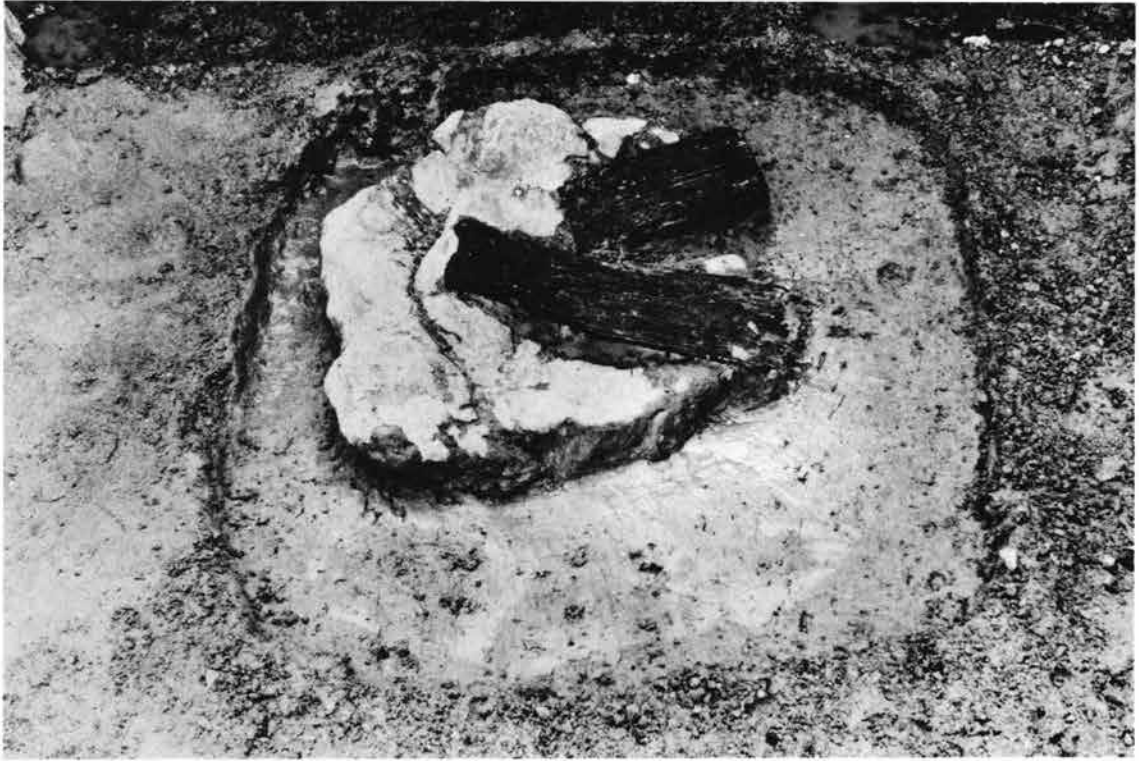
(1) 建物跡SB9802 (北から)



(1) SX9804 (西から)



(2) SX9805 (東から)



(1) SB9802 P-30検出状況



(2) SB9802 P-34礎板出土状況



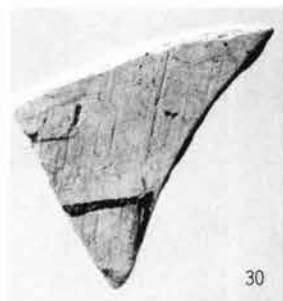
(1) 墨書土器出土状況 (P-8)



(2) 墨書土器出土状況







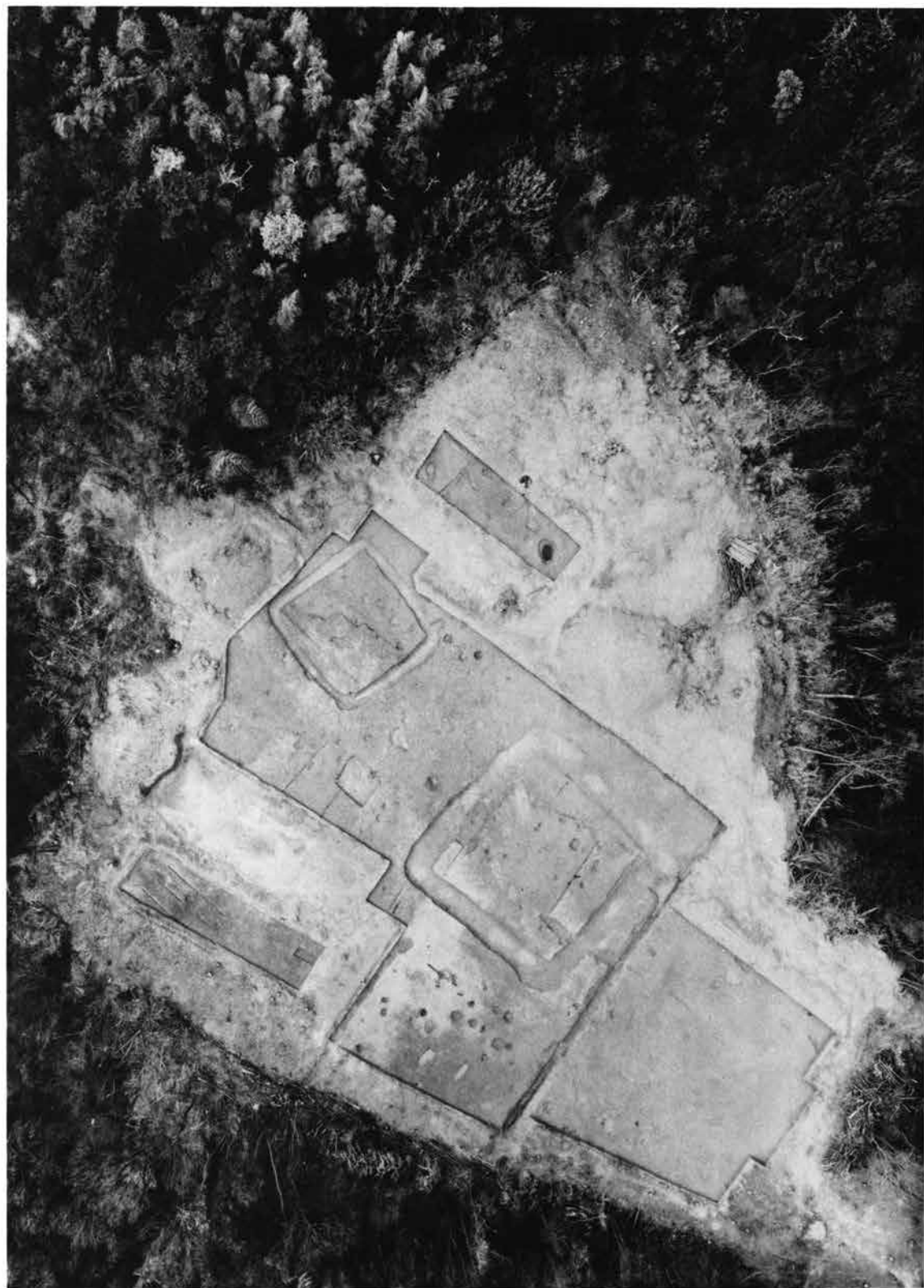




(1) A地点調査前近景



(2) B地点調査前近景



A地点全景



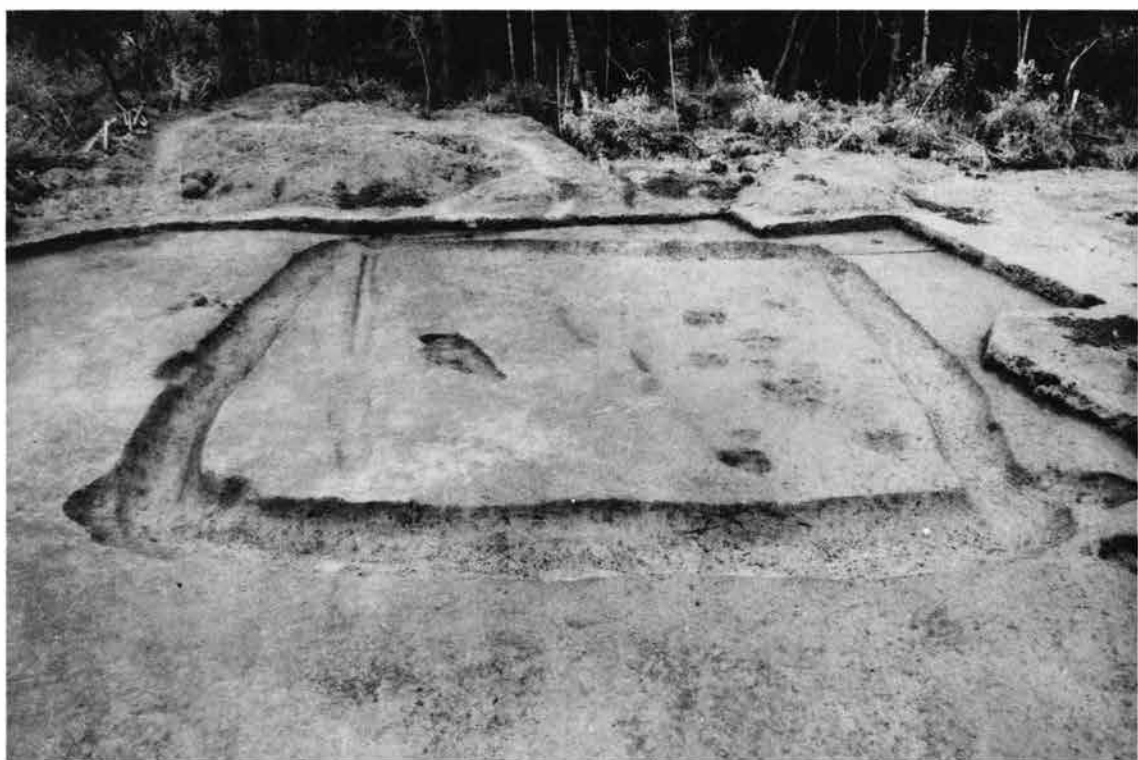
(1) 宮ノ平4号墳(SX06)検出状況(南東から)



(2) 宮ノ平4号墳検出状況(西から)



(1) 宮ノ平5号墳(SX09)全景



(2) 宮ノ平5号墳検出状況



(1) 宮ノ平5号墳周溝内遺物出土状況



(2) 宮ノ平5号墳周溝内出土遺物



(1) 竪穴式住居跡1 検出状況



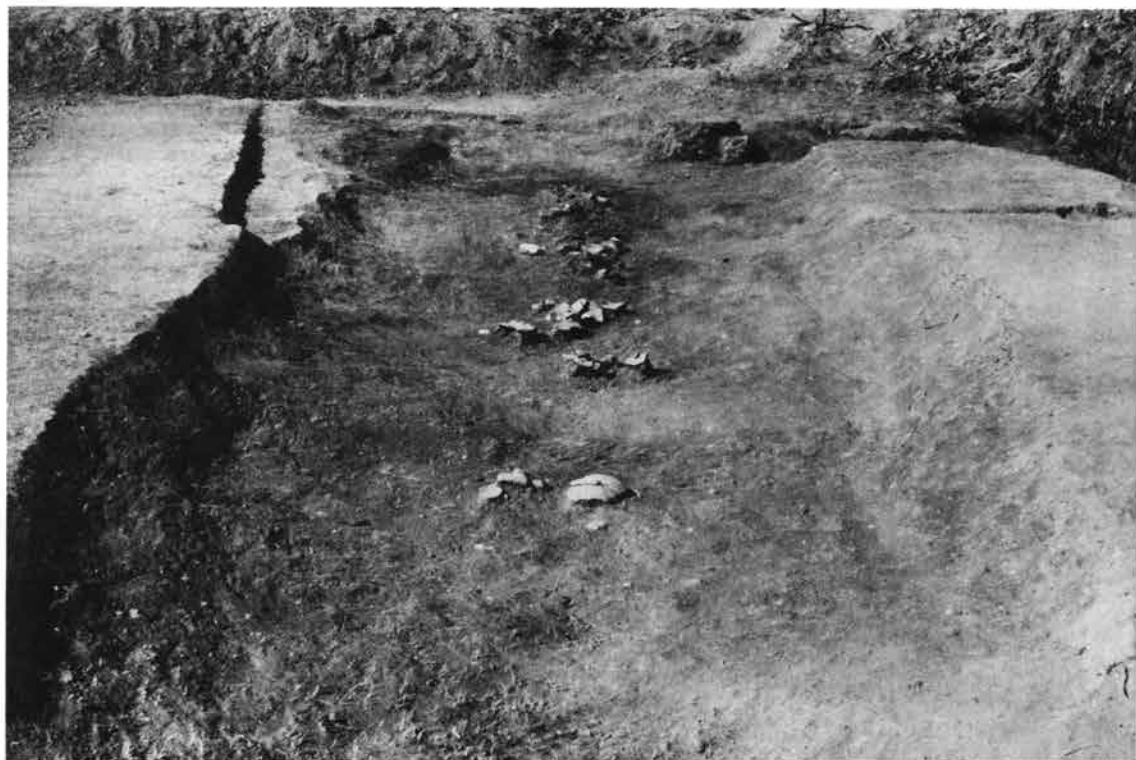
(2) 竪穴式住居跡1 竈及び遺物検出状況



(1) 竪穴式住居跡2 検出状況



(2) 竪穴式住居跡2 竈及び遺物検出状況



(1) 宮ノ平4号墳周濠（東辺）



(2) 井戸跡検出状況



B地区全景



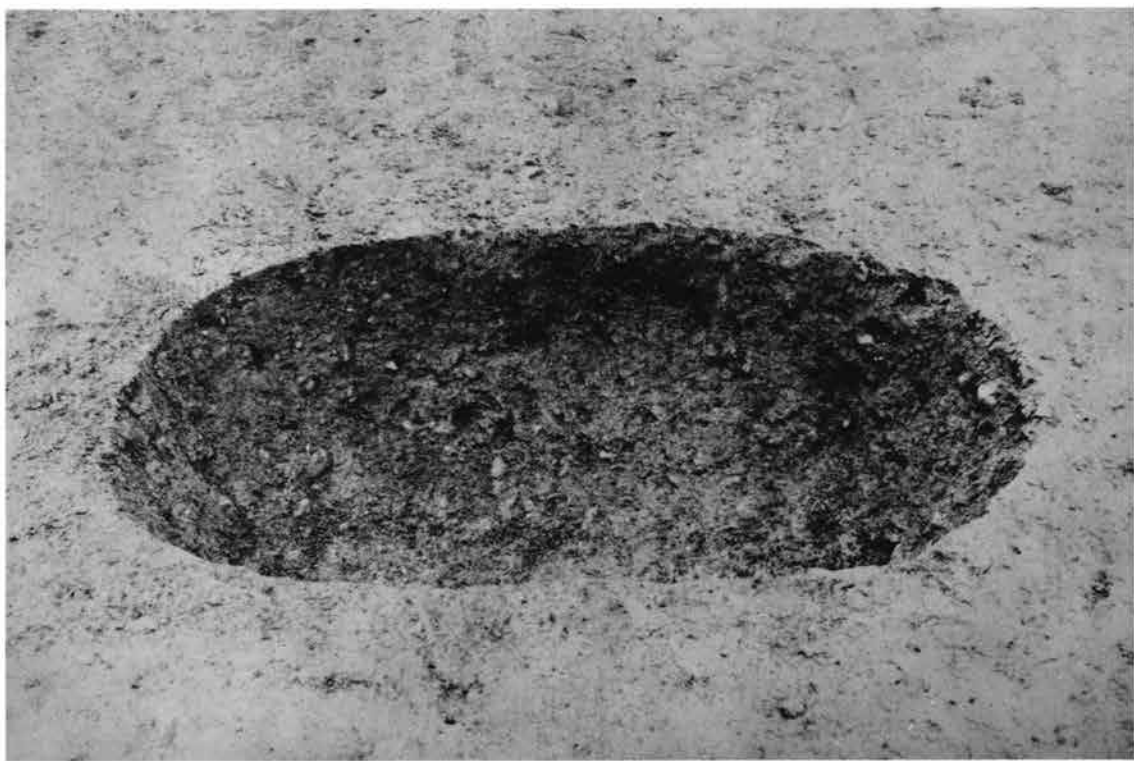
(1) B地区遺構検出状況(南東から)



(2) 墳輪棺検出状況



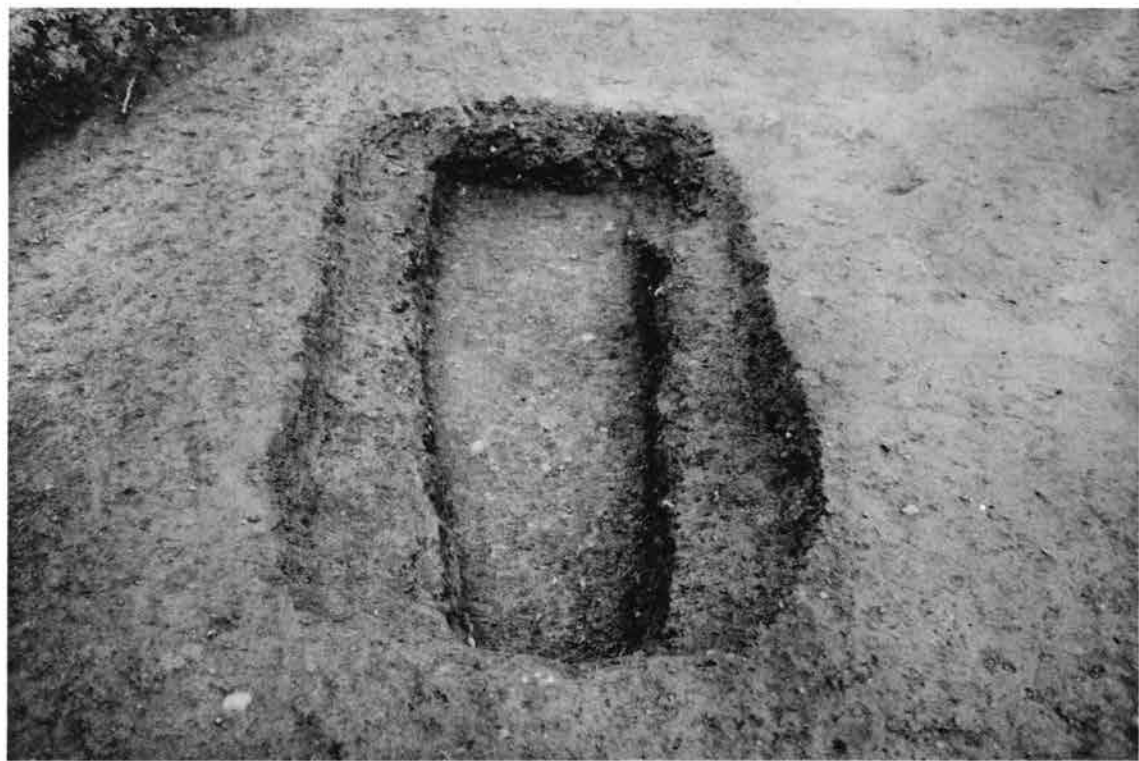
(1) 埴輪棺検出状況



(2) 埴輪棺土坑



(1) SX11検出状況



(2) SX12検出状況



出土遺物(1) (1~5: 5号墳周濠 6:SH06 7:SH07)



出土遺物(2) (埴輪棺一括)

京都府遺跡調査概報 第8冊

昭和58年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075) 256-0416

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075) 441-3155(代)